魔法少女リリカルなのはStrikerS-JIHAD

鮮血の刻印

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ－ＪＩＨＡＤ

【Ｎコード】
Ｎ８８３７Ｏ

【作者名】
鮮血の刻印

【あらすじ】
『創世の書事件』から2年後。

なのは達は、はやてが設立した新部隊、『機動六課』に所属していた。

機動六課に配属された新人達も、徐々に成長していった。

部隊が大分安定したある日、なのはは、スバルとティアナに調査を

依頼する。

７種の魔力が感知された箇所の捜索だった。

一方、レーベの復興を終え、傭兵として活動していたヴィレイサーも、遺伝子の感応で、その魔力を感じ取った。

３人が出向いた場所には、１つの書物があり……。

ＳｔｒｉｋｅｒＳとありますが、オリジナル展開になります。

魔法少女リリカルなのはＷａｒｓの続編となります。　まずはそちらをご覧ください。

※１１月２７日　タイトル変更しました

番外編　ＰＨＡＳＥ－０１　「Ｆｏｒ　Ｙｏｕ」（前書き）

鮮血
「皆様にお応えしてやってしまった！
だけど後悔はしていない！
とか言いつつ、本当は６割ぐらいしてます！」

ヴィレイサー
「とりあえず、うっさい……。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０１　「Ｆｏｒ　Ｙｏｕ」

「バレンタイン？」

スバルは聞き慣れない単語に、首を傾げる。

「せや。
好きな人やお世話になった相手に、チョコレートとかを送るんよ。」

はやての説明に、スバルは「へぇ～」と間延びした声をだす。

恐らく、チョコレートというお菓子系統に耳を奪われたのだろう。

「んで、この２人なんやけど・・・。」

引き出しから写真を取り出す。

「ヴィレイサーさんとフェイトさん、ですか？」

ボーッとしているスバルを放っておき、ティアナがそれを見る。

「この２人、もっと進展してもええと思うんよ。
フェイトちゃんはフェイトちゃんで、あんましアプローチせぇへんし。
ヴィレくんもフェイトちゃんに構おうとせん。」

「それで、もっと仲良くさせようと？」

「うん。」

「けど確か、フェイトさんの告白って保留ですよね？
なのに、いいんでしょうか？」

「それは・・・。」

はやてはそこで口籠る。

「まぁ、フェイトちゃんを触発させるんが今回の目的や。」

（話を逸らした・・・。）

（考えて無かったんですね・・・。）

番外編　ＰＨＡＳＥ－０１　「Ｆｏｒ　Ｙｏｕ」

「フェ～イ～ト～ちゃん♪」

「ふぇ！？」

背後から目を覆われ、フェイトはビックリする。

「だ～れだ？」

「な、なのは？」

「ピンポーン♪」

ようやっと視界が開け、フェイトは安堵する。

「どうしたの、いきなり？」

「フェイトちゃん、バレンタインデーは誰かにチョコを上げたりするの？」

「え、えっと・・・。」

しばらく物思いに耽るが、やがて口を開く。

「もちろん、六課の皆に渡すよ。
お世話になった人は多いけどね。」

苦笑するフェイトに、なのはは首を傾げる。

「ヴィレくんには？」

「え！？

ヴィ、ヴィレイサー？」

突如名前が出た意中の相手に、フェイトは頬を赤くする。

「作らないの？」

「き、決めて無い・・・。」

「どうして？」

「だって、答えは保留だし・・・。」

「別に、好きな人に渡すだけなんだからいいと思うよ？」

「でも、なんだか好感を上げようとしているみたいに捉えられないかな？」

見返りを求めるようで不安だと、フェイトは思っていた。

「さすがにそこまで酷くは考えないと思うけど・・・。」

「そ、そうかな？」

「フェイトちゃん、ネガティブになり過ぎだよ～。」

元気づけるように肩を叩き、なのはは先に歩き出した。

「そうしてみようかな。」

1人残されたフェイトは、ポツリと言った。

「で、私に相談しにきたんやな？」

「うん。」

ヴィレイサーにチョコを送ろうと考えたフェイトは、はやてに相談する事にした。

自分も人並みには料理は出来るが、やはり上手な人に指南してもらいたいのだ。

「もちろんええよ。」

「ありがとう、はやて。」

「早速やけど・・・。形はハート形で決定な。」

「えぇ！？／／／／／／／／／／／／／／／／」

「なんや、問題あるん？」

「え、だ、だって・・・。

い、いいのかな・・・。」

「いいも何も、好きな人に渡すだけやん。

それがハート形でもなんにも問題あらへんよ。」

「そ、そうかな？」

「そうやって。」

こうして、フェイトのチョコは、はやての策を講じられながら進んでいった。

「うん、こんな感じかな？」

あまり甘めにしては、ヴィレイサーの好みでは無さそうだった為、少し苦味が強いチョコが完成した。

「でも、受け取ってもらえるかな・・・？」

はやてやなのはに励まされたとは言え、やはりその不安は払拭できなかった。

「それに、誰かに見られたら恥ずかしい／／／／／／／／／／／／」

頭を抱えるフェイトだったが、腹をくくり、ヴィレイサーの元へと向かった。

「ヴィレ兄～。」

「ん？」

背後から明るい声をかけられ、足を止める。

声の主が妹だと分かったヴィレイサーは、そちらを振り返る。

「スバル。」

「なのはさん達に聞いたんだけど、今日ってバレンタインデーって言うんでしょ？」

「そういえば・・・。」

すっかり疎遠となっていた年中行事を思い出し、ヴィレイサーは頷く。

「それで、ギン姉とクッキー作ったんだ。」

「そうか。
ありがとう。」

小さな包みを受け取り、スバルの頭を撫でる。

「そういえば、フェイトさんからは？」

「フェイト？
いや、もらってはいないが・・・。」

「もらえるといいね。」

呑気に述べるスバルだが、ヴィレイサーは「どうだろう」と言う。

「作るかねぇ・・・。」

「ヴィレ兄は、もらいたいとは思わないの？」

「特には、な。」

「そうなんだ。」

それを物陰で聞いていたフェイトは、複雑な気分だった。

「特には、か・・・。」

ヴィレイサーのその一言に、フェイトはしょんぼりとしていた。

今までも彼の言動にしょぼくれる事は多々あったが、
今回は想いを伝えようとしていた矢先に言われてしまった。

その事が、更にフェイトの気持ちを沈ませた。

「こんな所で何をしているんですか？」

だが、突如かかった声に、そちらを見やる。

「ティアナ・・・。」

いつもと同じオレンジのツインテールをした少女が不思議そうにフェイトを見ていた。

「ヴィレイサーさんに渡してきてはどうですか？」

「でも・・・。」

中々踏み出せないフェイトに、ティアナも強引には押さない。

「あ、ティア、フェイトさん。」

そこへ、スバルがヴィレイサーと共に顔を出す。

もちろん、ティアナから念話を受けたスバルが、こちらに移動してきただけだが。

「あ、えっと・・・／／／／／／／／／／／／」

赤面し、それを見られまいと顔を伏せるフェイト。

「どうした？」

「な、なんでもない！」

心配してきたヴィレイサーから離れ、フェイトは一目散に逃げ出した。

ヴィレイサーはその背をただ見ているだけだった。

「はぁ・・・。」

ガッカリと肩を落としたフェイトは、１人で月を見ていた。

あれから何度か機会を窺おうとしたのだが、結局は渡せず仕舞いとなっていた。

「どうしよう・・・。」

呟き、右手に持ったチョコを見る。

「自分で食べちゃうかな・・・。」

そう考え、包みをはがそうとした。

「フェイト。」

だが、その前にヴィレイサーから声がかかった。

「どこに行ったのかと思ったぞ。」

呆れ気味に言いながら、ヴィレイサーはゆっくりとフェイトに近付く。

欄干に腕を乗せるフェイトとは逆に、ヴィレイサーは背を預ける。

「ね、ねぇ、ヴィレイサー。」

「なんだ?」

「これ、受け取ってもらえるかな?」

恥ずかしさをこらえながらも、フェイトはヴィレイサーにそれを渡す。

「いいのか?」

「その為に、作ったんだから。」

「そうか。」

微笑し、それを受け取る。

「ありがとう。」

「うん。」

フェイトも月と欄干に背を向け、ヴィレイサーの肩にコテンと頭を乗せる。

「あの時の答を求めないのか？」

「受け取ってくれた。
それだけでも充分嬉しいもん。」

「そうか。
だが、既に答が出ているとしたら？」

「知りたいな。」

ヴィレイサーの言葉に、フェイトは急かさず、ただ静かに言った。

「俺の答は・・・。」

月明かりに照らされる2つの並んだ人影。

そしてそれは、ヴィレイサーの答を教えるように、重なった。

月華の下、2人はキスを交わしたのだった。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０１　「Ｆｏｒ　Ｙｏｕ」（後書き）

鮮血
「無いわー……。」

フェイト
「開口一番それ！？」

鮮血
「いやぁ、突発的に書いたから物凄くド下手なのは分かってるけどさ……。
さすがにこれは……ねぇ？」

フェイト
「私に言われても……。」

ヴィレイサー
「ってか、本編で答えて無いのにいいのか？」

鮮血
「知らん！
もうどうにでもなれってんだ！」

ヴィレイサー
「コイツ、ダメだな……。」

フェイト
「うん……。」

ヴィレイサー
「けど、ＰＨＡＳＥ－０１なんて付けて良かったのか？
今後あるかどうか分からねぇのに……。」

フェイト
「しかも、本編を考えたら物凄く変な所だし……。」

鮮血
「今後あるかどうかは分からない！
今度はキャラ崩壊したフェイトでもしてみようかなぁ……。」

ヴィレイサー
「誰が止めるんだ？」

鮮血
「君以外にだれがいると思ってんの！？
ちなみに、このホワイトデーの話ですが、
イツキ先生の『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　護るための力を持つ者』の、
『ホワイトデー記念コラボ小説』にちょこっとだけ書かれています。
そちらを是非ともご覧ください。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０２　「Ｍｅｍｏｒｙ　Ｂｒｅａｋ」（前書き）

鮮血
「番外編の2話目です！」

ヴィレイサー
「今回は？」

鮮血
「記憶喪失編となっており、
更に、イツキ先生とのコラボです！」

ヴィレイサー
「って事は、コルトとブルズが？」

鮮血
「後はダークさんと、もう1人意外な人が！」

ヴィレイサー
「誰だよ……？」

鮮血
「それは本編で。
さて、番外編内では既に暗黙のルールとなりつつありますが、
この話内ではヴィレイサーとフェイトは恋人同士です。
予めご了承ください。」

ヴィレイサー
「それでは、どうぞ。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０２　「Ｍｅｍｏｒｙ　Ｂｒｅａｋ」

「ふぅ………。」

大きく息をつき、フェイトは椅子の背もたれにその身を預ける。

書類仕事が終わり、凝った身体をほぐす為に大きく伸びをする。

「うぅーん………。」

ググッといつまでも伸ばしていると、急にバランスを崩してしまった。

「キャッ！？」

ガタンと椅子が音を立てて床を転がり、フェイトは強く打った背中を摩った。

「イタタ………。」

「何やってんだよ………。」

「あ、ヴィレイサー！？」

床に転がった椅子を片手で引っ張り、フェイトの傍まで来る。

「変な所で抜けてるよな、お前。」

「そ、そんな事無いよ！／／／／／／／／／／」

ヴィレイサーの言葉に、フェイトは耳まで赤くする。

「あー、悪かったよ。」

憤慨して反論するフェイトに、適当に謝り、ヴィレイサーは彼女の目の前に手を出す。

「ほら。」

「あ……うん！」

その手を取り、フェイトはヴィレイサーの力を借りて立ち上がる。

その光景を、こっそりと物陰から見ていた人物がいた。

「なんだかんだ言って、ラブラブだな………。」

「ラブラブだね〜。」

ダークとなのはだった。

「しかし、もっと焚きつけてみたいものだな。」

「私達みたいになるから……かな？／／／／／／／／／」

「聡いな／／／／／／／／／」

照れ笑いを浮かべながら、２人はこっそりとその場を後にした。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０２　「Ｍｅｍｏｒｙ　Ｂｒｅａｋ」

「はぁ……。」

その頃、ブルズは自室でベッドに仰向けになっていた。

「どうしたの、ブルズ？
　此見よがしに溜息なんかついて……。」

同室に居たコルトは、話しかけてくれと言わんとしているブルズの大きな溜息に、
いつものように、当然話しかけるという選択肢を取った。

「いや……。
なんか最近、平和だなぁと思ってよ。」
「平和なのはいい事じゃないの？」
「そういう事じゃなくてよ。」
身体を起こし、こちらに姿勢を向けていたコルトを見る。
「なんかこう、ドタバタが見てぇんだよ。」
「ド、ドタバタって……。」
ブルズの訴えに、コルトは苦笑いするしかなかった。
「そうしたいんだったら、自分で行動を起こさないと……。」
「そう言われてもなぁ……。
ドタバタを起こしてほしい相手が相手だからな。」
「それって……？」
「当然、ヴィレイサーさんに決まってんだろ。」
「あぁ……。」
ブルズからその名を聞かされ、コルトは「ハードルが高いなぁ」と思った。

「無理でしょ。」

「だよなぁ……。」

また溜息をついて、ブルズはベッドに横になった。

「いや、策ならあるかもしれん。」

「「うわぁっ!?」」

突如ルームメイトでは無いダークの声が聞こえた為、コルトとブルズは飛び上がらんばかりに驚いた。

「に、兄さん……。
驚かすなよ……。」

「すまん。
まぁ、そんな些細な事はとりあえず置いておけ。」

「は、はぁ……。」

ダークの意見は認めないと感じさせる口調に、コルトは素直に従った。

「ヴィレイサーに対してドタバタを起こしてやりたい気持ちは分かる。
ホワイトデーの時、彼奴の所為で散々だったからな。」

「でも、最後には主導権は……。」

「確かに兄さんの言う通りだよな。」

「僕の意見は無視！？」

見事にスルーされたコルトは、ガックリと肩を落とした。

「けど、元からガードが堅いだろ、あの人……。」

「そりゃあ、ブルズの防御並みにね……。」

「さて、どうしたものか……。」

3人で腕を組んで唸る。

「とりあえず、昼食を取るか。」

「そうだな。」

「そっちが先でいいの！？」

アルフィード兄弟の自由ぶりに、コルトは早くも疲れを見せていた。

◆◇◆◇◆

「む……？」

「どうしたんだ、兄さん？」

「いや、食堂が騒がしくないか？」

「そういえばそうですね……。」

3人して、食堂の入り口に立っていると、奥からはやてが出てきた。

「はやて。」

「ん？
おぉ、ダークくん。」

「この騒ぎは何だ？」

「いや……それがやなぁ……。」

「「「？」」」

言いにくそうに頬を掻くはやてに、ダークらは首を傾げる。

「実は、シャマルの料理に当たってもうた人がおんねん……。」

「「「ええええぇぇぇぇぇぇ！？」」」

はやての告白に、3人とも驚きの声を上げる。

「な、何でシャマルさんが料理してんすか！？」

その理由は、ブルズが言っている通り、シャマルが料理をしている

という点だった。

六課内では、シャマルに料理をさせない事が暗黙のルールである。

それを起こさせない為に、常に目を光らせている人物もいる程だ。

では、何故シャマルは料理を行えたのか？

「実は、見張り役が仕事を頼まれたんや……。」

「確か今日の見張り役は、ザフィーラだったな？」

「「副隊長！？」」

コルトとブルズにとっての上司、ダークにとっては部下であるザフィーラの失態に、

彼らは肩を落とした。

「なんや、訳を聞いたらヴィヴィオの世話を頼まれたらしいんよ。」

「なら仕方が無いな。」

「同感。」

「だね……。」

理由を聞かされ、ダーク、ブルズ、コルトはあっさりと納得した。

「けど、厄介なのはシャマルの作った料理なんよ……。」

「どういう事ですか？」

「見た目が、物凄く上手なんや……。
しかも、普段ここで出されている料理のメニューやから、
安全な物かどうかが判断し辛いんや！」

「なん……だと……！？」

「見た目が上手って……。」

「お、恐ろしいですね……。」

「ところで、先程の口ぶりだと誰か運ばれたみたいっすけど？」

「あぁ……。
ヴィレくんや……。」

「ヴィレイサーが！？」

「うん。
フェイトちゃんが受け取った料理が、どうやらシャマルの物らしくて……。
んで、フェイトちゃんが自分で食べる前に、ヴィレくんに「あーん」と……。」

「そんな……。」

「まさか……。」

コルトとブルズは、はやての説明に頷けなかった。

「「2人がそんなに進展していたなんて……。」」

「そっちかい！」

はやてのツッコミに、コルトとブルズはさも当然のように首を縦に振る。

「まさかフェイトさんに「あーん」をさせてもらっているとは……。」

「兄さんは知っていたのか？」

「もちろん……知らなかったさ！」

「無駄な溜めするんは止めい！」

「すまない。
だが、まさか本当に……？」

「いや、目撃者の話やと、最初はヴィレくんも断ってたらしいんや。
大方、押してきたフェイトちゃんに根負けしたんやろ……。」

「それなら納得です。」

「そうだな。」

3人が頷く辺り、ヴィレイサーとフェイトが進展するなんて、『あり得ない』と思われているようだ。

中々に酷い話ではあるが、これは事実であったりする。

「とにかく、お見舞いに行ってみましょう。」

「そうだな。」

コルトが歩き出し、その後をブルズとダーク、更にははやてが続いた。

◆◇◆◇◆

「なのは。」

「あ、ダークくん。」

「ヴィレイサーの様子はどうだ?」

「さっき目を覚ましたよ。
だけど……。」

「どうした?」

「まぁ、見てみれば分かるよ。」

そう言って、なのはがダーク達を案内したのは、１つの病室だった。

中からは、騒いでいるのか、ヴィレイサーとフェイトの声が聞こえてきた。

「……とい…くだ……！」

「大…夫だよ、ヴィ……サ…。」

心なしか、フェイトの声がいつもより甘い気がする。

3回戸を叩いてから、なのはは声をかける。

「フェイトちゃん、入るよ？」

「あ、うん。」

引き戸をガラガラと開けると、
中にはフェイトとヴィレイサーがいつもと同じ――――ではなかった。

何故か、ヴィレイサーにフェイトが抱きついていたのだった。

なのは以外のメンバーは、「何コレ？」と口にした。

「あの……この人に離れるように言って頂けないでしょうか？」

「うん。
フェイトちゃん、ヴィレくんも困ってるから……。」

「でも……。」

「い・い・か・ら！」

「はい……。」

なのはの剣幕に、フェイトはすごすごと引き下がる。

「スバル、ティアナ。
悪いけど、フェイトちゃんを外に追い出しておいて。」

「はい。」

「分かりました。」

2人がかりでフェイトをズルズルと連れて行き、扉が閉まった所で一息つく。

「助かりました、高町さん。」

「気にしないで。」

「なのは、ヴィレイサーはまさか……。」

ヴィレイサーの奇妙な点に気が付いたダークが、彼女に訊ねる。

「うん……。
ヴィレくん、記憶喪失みたい……。」

「記憶……喪失……？」

「マジッすか……？」

「多分、シャマル先生の料理を食べて……。
気絶した状態から目を覚ましたら、もう記憶が無くなってたの。」

「そんな事があり得るのか？」

「現に目の前で起きてますけどね……。」

「それで、何でフェイトさんはヴィレイサーさんに抱きついてたんすか？」

「本人曰く、母性本能がくすぐられてって言ってる……。」

「納得です……。」

ブルズのように、コルトもダークも苦笑した。

「あの……。」

そこに、遠慮がちな声が入る。

「俺は、これからどうなるんでしょうか？」

（（（敬語とか気色悪い！））））

既に聞きなれたなのはと違い、ダーク達は鳥肌が立った。

「悪いようにはしないよ。」

笑顔を浮かべ、なのははヴィレイサーを落ち着かせた。

［なのはさん！］

そこへ、ティアナから通信が入る。

［私達だけでフェイトさんを抑えるのは、もう……！］

「すぐ行く！」

踵を返し、なのはは病室を飛び出して行った。

「それじゃあ、僕達も……。」

それに続こうと、コルトも踵を返そうとしたのだが――

「待て。」

――ダークに肩を掴まれ、立ち止まる。

「なんですか？」

「これは好機だ。」

「へ……？」

ダークの言葉は、コルトには意味が分からなかった。

「何する気だ、兄さん？」

「今、奴は普段と違う言葉使いだ。

つまり、まったくと言っていいほど記憶が欠落しているという事だ。」

「えっと……だから？」

兄の言わんとしている事が分からず、ブルズが先を催促する。

「俺達が本当の事だと言って吹き込めば、どうなる？」

「そりゃあ、信じる……。」

そこまで言って、ブルズとコルトは同時に気が付いた。

「「あ！」」

「そうだ。
俺達の思うように出来るという事だ。」

ダークはニヤリと、悪魔のように笑った。

「ヴィレイサー。」

「はい？」

「お前、記憶が無いんだったな。」

「はい。」

「なら、俺達が大事な事を教えてやる。」

「大事な事……ですか？」

「あぁ。
っと、その前に敬語はいらん。
お前にそれは似合わない。」

「分かりまし……分かった。」

「で、だ。
いいか、よく聞けよ？」

「あぁ。」

「さっきお前に抱きついていた金髪の女性、フェイトだが……。」

「うん？」

「あの人は、お前の妻だ。」

「はぁ！？」

「えぇ！？」

ダークの言い分に、ヴィレイサーが驚くと同時にコルトもビックリする。

「兄さん、なんつう事を吹き込んでんだよ……。」

「つ、妻……？」

「そうだ。」

あまりの出来事に、ヴィレイサーは頭が混乱していた。

だが――――――

「なら、何故婚約指輪が無い？」

――――そんな質問が飛んできた。

（クッ……。
痛い所を衝いてきたな……。）

まさかの反論に、ダークも解凍に詰まる。

「それは、六課内では指輪を付けない事が暗黙のルールだからっす！」

助け船を出したブルズに、ダークは内心でサムズアップする。

「そ、そうなのか？」

「あぁ。」

先程とは打って変わって、焦りの色を隠しきっているダークがハッキリと肯定した。

「な、なるほど……。」

（納得しちゃった……。）

一方、乗り気では無いコルトは、内心でハラハラドキドキしていた。

「だからこれからは、アイツの事を大事にしてやれ。」

「あ、あぁ……。」

ヴィレイサーが頷いた事を確認して、ダークとブルズはニヤリと笑った。

◆◇◆◇◆

「どうすればいいんだ……。」

深い溜息をつくヴィレイサーに、隣にいるコルトは苦笑した。

「いきなりあんな事を言われたんですもんね……。」

◆◇◆◇◆

「ヴィレイサー。
早速フェイトと仲直りして来い。」

「仲直りって……別に喧嘩した訳じゃ……。」

「だが、奴は自分の事を忘れてしまった事を悲しんでいるだろ。
それを鑑みれば、慰めに行く事は当然だろ？」

「ま、まぁ、確かに……。」

「いとも容易く丸めこまれているな……。」

「なんか、ヴィレイサーさんじゃないみたい……。」

ダークの提案にあっさりと同意するヴィレイサーの様子に、
コルトもブルズも心の奥底で畏怖していた。

もしかしたら、記憶喪失を装っているのかもしれない。

だが、そのメリットは無い。

そう考えれば、やはり記憶を失っているのだろう。

「それじゃあコルト。
フェイトの部屋に案内してやってくれ。」

「僕がですか！？」

「俺とブルズは、はやてに協力を仰いでくる。」

「そ、そんな！」

「任せたぞ。」

意見する前に、ダークはコルトの肩を軽く叩いて出ていった。

「ブ、ブルズ……。」

友人に助けを求めようと、視線をそちらに向けるが……。

「じゃな！」

「見限るの早くない！？」

ブルズもさっさとその場を去った。

従わない訳にも行かず、コルトはヴィレイサーに案内すると言った。

◆◇◆◇◆

それが、今2人が一緒にいる理由だった。

「すまないな、コルト。
わざわざ案内までしてもらって。」

「いえ、気にしないでください。
本当なら、ダークさんかブルズの方が良かったんでしょうけど……。」

「いや、それはちょっと……。」

コルトの言い分に、ヴィレイサーは苦笑した。

「と言うと？」

「なんか、あの2人は何を企んでいるのか分からんから怖い。」

「あはは……。」

記憶を失っていても、2人――――主にダークの企む姿は怖いようだった。

「あ、ここです。」

「ありがとう。」

「それじゃあ、僕はこれで。」

「あぁ。」

コルトが充分に離れてから、ヴィレイサーは眼前の扉を見直した。

深呼吸してから、ゆっくりと中に呼び掛ける。

「フェイト、少しいいか？」

「うん。

今、開けるね。」

すぐに返事があり、扉が開かれる。

「少し、話がしたいんだ。」

「いいよ。」

ヴィレイサーを中に招き、フェイトはすぐさま扉を閉めた。

◆◇◆◇◆

［お茶、飲む？］

［あぁ、ありがとう。］

フェイトの部屋に付けられた隠しカメラ。

その映像を見ているのは、誰であろう狸――八神はやてだった。

彼女の隣には、ダークとなのはが並んで画面をじっと見ていた。

ちなみに背後にはギャラリー（ほとんどがはやてに召集されただけ）が何人かいた。

「いつ隠しカメラを設置したのかな……。」

コルトの呟きに、ブルズは「分からない」と言って首を振る。

「知ったら命がないかもな……。」

「それは嫌だよ……。」

2人して溜息をつくが、残りのギャラリーは画面の方に集中していた。

◆◇◆◇◆

「それで、話って？」

「いや……その……。」

真っ直ぐに見られ、ヴィレイサーは逡巡する。

だが、すぐに口を開いた。

「お前の事、忘れてしまってすまない……。」

「え……？」

「大事な人――――俺の“妻”なのに……。」

「つ、つつつ、妻!?」

妻という単語に、フェイトは物凄い反応を示した。

「ダークからそう聞いたんだが……。
違うのか?」

「へ!?
ううん!　違わないよ!」

◆◇◆◇◆

「フェイトさん……。」

「物凄く必死だな……。」

フェイトはヴィレイサーの言葉に頬を紅潮させながらも、それを肯定していた。

その様子は、隠しカメラでばっちりと筒抜けだった。

フェイトの様子に、はやてとなのははダークにサムズアップする。

「ナイスやで、ダークくん!」

「さすがだね!」

「当然だ。」

楽しんでいる3人とは違い、コルトの心境は複雑だった。

（これ、記憶が戻ったらどうなるんだろ……。）

恐ろしい考えしか浮かんでこない為、コルトは身震いする。

「ね、ねぇ、ブルズ。」

そこで、最も信頼している友人に聞こうと、隣を見たが――――

「あれ？」

――――そこには彼の姿は無かった。

「押し倒せよ！」

「さすがに今のアイツにはそれは無理だろう。」

ブルズの声が聞こえたので、そちらに視線を向ける。

「ブ、ブルズ……。」

ダーク達と同じように、画面に喰いついている友の姿に、コルトは肩を落とした。

◆◇◆◇◆

「フェイトの事、必ず思い出す。
だから、それまで待っていて欲しいんだ。
普段の俺じゃないから、不安だと思うけど……。」

「ヴィレイサー……。」

感動しているフェイトだったが、いきなりヴィレイサーに引っ張られる。

「覚えていない事はすまないと思っている。」

「慌てなくてもいいんだよ、ヴィレイサー。」

「フェイト……。
ありがとう。」

嬉しいのか、ヴィレイサーはフェイトを抱き締める腕に力を込める。

「ヴィレイサー？」

「君を離したくない……。」

「え？」

「君を離したくは無いんだ！」

ハッキリと告げられた告白に、フェイトは見る見るうちに赤くなっていく。

「妻だからとか………そんな肩書があるからじゃない！
君を………フェイトの事を愛しているから。」

「はう………／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

普段なら言われるはずもない言葉に、フェイトは真っ赤になる。

「君は、記憶が無い俺でも愛してくれるか？」

耳元で囁かれる甘い言葉に、フェイトは力が抜けていく気がした。

「私は………。」

懸命にヴィレイサーの腕を離し、フェイトは彼に向き直る。

「私は、どんな貴方でも愛するよ。」

「嬉しいよ、フェイト。」

そして、どちらともなくキスをする。

「ん………。」

すぐに唇を離そうとするヴィレイサーだったが、フェイトが彼の顔を両手で包む。

「はぁ………。」

そのまま、舌を絡める。

「ん…フェイ……ト……。」

ヴィレイサーもそれに応えるように舌を絡める。

◆◇◆◇◆

「それはアカンやろぉぉぉぉぉぉ！！！」

はやてが絶叫し、すぐにモニターを切る。

「ま、まさかアレを承諾するとは……。」

「ヴィレくん、本当に変わっちゃったね……。」

あまりの変化ぶりに、ダークとなのはは幽かに頬を紅潮させており、そんな2人の背後では、気絶したコルトをブルズが懸命に支えていた。

「おい、しっかりしろよ、コルト！」

「キュウ～……。」

恐らく、ヴィレイサーとフェイトに中てられたのだろう。

ちなみに、あの後のヴィレイサーとフェイトは、
キャロとヴィヴィオが部屋に入ってきたので中断したそうな。

◆◇◆◇◆

「ふぅむ……。
記憶喪失ねぇ。」

「うん……。
なんとかならないかな？」

数日後。

コルトは、今までのヴィレイサーと違う事に戸惑いを覚え、
自身の母であるカローラにその事態を告げた。

「なら、私に任せな。」

「へ……？」

カローラの自信有り気な口調に、コルトは「何を」と聞こうとしたが――――

「持ち物はこんな物でいいか。」

――――その前に彼女は、どこかへ行ってしまった。

しかも、自分が作成したリボルバーナックルの模造品を、その手に嵌めて。

「ちょっ……母さん！？」

母が何を起こす気かは分からないが、コルトは慌てて追いかけた。

◆◇◆◇◆

「ヴィレイサー、あ～ん。」

「あぁ。」

フェイトが運んでくれた物を、ヴィレイサーは恥ずかしがる事無く受け取る。

「おいしいな。」

「うん。」

ニコニコと笑いあう2人だが、彼らの周囲に居た人達は様々な反応をしていた。

ある者は地団太を踏んだり、またある者は胸焼けを起こしていたり

などなど。

人気のあるフェイトと恋人である事だけで睨まれているヴィレイサーだったが、
今の状態は、正にそれに拍車をかけていた。

「フェイト。」

今度は、ヴィレイサーが彼女にスプーンを向ける。

「あ～ん♪」

嬉しそうにそれを食べるフェイトに、ヴィレイサーは顔を綻ばせる。

「最悪やわ……。」

離れた所に居たはやては、苦々しくそう呟いた。

「まさかここまでになるとはな……。」

ダークとなのはも、疲れた表情を見せていた。

「前の状態のヴィレくんの方がいいと思えるなんてね……。」

「まったくだ。」

3人――――いや、その場にいたヴィレイサーとフェイトを除く全員が、
一斉に溜息をついた瞬間だった。

◆◇◆◇◆

「それじゃあフェイト、また後で。」

「うん。」

途中でフェイトと別れ、ヴィレイサーは1度自室に戻る事にする。

だが、曲がり角の死角から誰かが飛び出してきた。

「ウオッ！？」

そして――――

ガン！

「アデッ！」

――――何かを殴打した音と、ヴィレイサーの痛がった声が聞こえた。

かと思うと、ヴィレイサーはその場に倒れてしまった。

「記憶なんてのは、強い衝撃を与えりゃあ戻るもんさ。」

言いながら、殴った張本人であるカローラは、

ヴィレイサーを引き摺ってコルトとブルズの部屋に入れた。

◆◇◆◇◆

「っ……。」

小さな呻き声を上げて、ヴィレイサーは目を覚ました。

「ヴィレイサーさん、大丈夫ですか？」

それに気が付いたコルトが、ひょっこり顔を出す。

「大丈夫じゃねぇよ……。
物凄く頭がイテェ……。」

「すみません、ウチの母が……。」

「コルトの？」

「えぇ。
母さんに、ヴィレイサーさんが記憶喪失だって話したら……。」

「だからいきなり殴打されたのか……。
ってか、記憶喪失って？」

「へ？」

「いや、料理を食って倒れたのは覚えているんだが……。
それ以降、目を覚ましたのか？」

「覚えて……無いんですか？」

「あ、あぁ……。
まだ頭がクラクラするから、今後に思い出す事があるかもしれんが……。
それで、何かあったのか？」

（元に戻ってる！？
しかも、シャマルさんの料理を食べた後の記憶は無いなんて……。）

「コルト？」

「な、なんでもないです！
ともかく、僕は皆さんに知らせてきますね！」

コルトがそそくさとその場を立ち去った後、ヴィレイサーは腕を組んで考え込む。

（うーん……。
なんか、忘れているような気がするんだよな……。）

掴み取れそうな気がする、記憶の欠片……。

だが、手を伸ばすとそれは、簡単に遠退いて行った。

それに苛立ちながらも、思い出す必要が無いとも考えた。
（コルトのあの驚きぶりを見ると、あんまりいい記憶じゃなさそうだし。）
額に手を当てて、目を瞑っていると、扉が開かれた。
「ヴィレイサー！」
「ん、フェイト？」
うっすらと涙を浮かべている顔だったが、ヴィレイサーを見て笑顔になる。
「良かった。
急に倒れたって聞いたから、何があったのかと思ったよ。」
「お前、本当に心配性だな……。」
「当たり前だよ。
だって、私はヴィレイサーの…まなんだから……／／／／／／
／／／／／／／／／／」
「何か言ったか？」
赤面しているフェイトは、ゴニョゴニョと何かを言った。
だが、それはヴィレイサーの耳に届かずじまいだった。
「ううん、なんでもない。」

パッと笑顔に戻り、ヴィレイサーの横たわるベッドに腰掛ける。

「ねぇ、ヴィレイサー？」

「ん？」

「私が食べさせた料理、シャマルのだったんだ……。」

「だからあんなに……。」

その先は言いたくないのか、ヴィレイサーは口を噤んだ。

「あの後気絶しちゃって、でも1度だけ目を覚ましたんだよ？」

「悪い。
そこの部分の記憶は一切合財失っているんだ。」

「別にいいよ。
私が覚えているから。」

優しくヴィレイサーの手を握るフェイトは、彼に微笑む。

「貴方が忘れても、私が覚えているから。
だから、大丈夫。」

「フェイト……。」

「でも……でもね？
私の事を好きだっていう気持ちは、忘れないで？」

不安そうな瞳が、こちらを見てくる。

しかし、ヴィレイサーはそれを嗤い、身体を起こす。

「お前の事が好きだなんて気持ち、とっくの昔に忘れちまったよ。」

「そ、そんな……！」

「だが……。」

フェイトの言葉を遮るように、彼女の目の前に人差し指を立てる。

「……お前を愛している気持ちならある。」

「ヴィレイサー……。」

「好きなんて生半可なのは、今の俺には無いんだよ。」

フェイトを抱き寄せ、彼女と唇を重ねた。

その言葉が、偽りのないものだと証明するように……。

◆◇◆◇◆

ちなみにこの翌日。

最終決戦以来、姿を見かけなかった堕天使が再臨したとの噂が、機動六課を包んだ。

その噂によれば、『管理局の黒い宣告者』、『不屈のエースオブエース』、『夜天の狸』。

上記の異名を持つ男女3名が、堕天使によって殲滅されたそうな……。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０２　「Ｍｅｍｏｒｙ　Ｂｒｅａｋ」（後書き）

鮮血
「アハハハハｗｗｗ」

ヴィレイサー
「俺、記憶喪失時にあんな言葉を言ってたのかよ！？／／／／／／／／／／」

鮮血
「そうだよ？
いやー、大胆だねぇ～。」

ヴィレイサー
「滅茶恥ずかしい……／／／／／／／／／／」

鮮血
「だろうね。」

ヴィレイサー
「けど、何でお前はああいう台詞を考えつくんだよ！？」

鮮血
「自分でも分からん。
さて、それは置いといて。
イツキ先生、今回はコラボして頂きありがとうございます。」

ヴィレイサー
「コルトとブルズ、カローラさんもありがとう。」

鮮血
「ダークさんが抜けてるよ！？」

ヴィレイサー
「わざとだ。」

鮮血
「そんなに弄られたのが嫌だ？」

ヴィレイサー
「当たり前だ！
クッ……本当なら殲滅だけで済ませたくは無かったのに……。
」

鮮血
「まぁ当初の予定では、
最後にダークさんも記憶喪失にさせる予定だったんだけどね。」

ヴィレイサー
「ほう……（ニヤリ」

ゴソゴソ

鮮血
「何を用意しているのかな？」

ヴィレイサー
「例のシャマルの料理だ！」

鮮血
「止めんか！（汗」

ヴィレイサー
「まぁ、さすがに強制させんのは無理だな。
って事で、イツキ先生経由で……。」

鮮血
「本当に止めろよ……。」

ヴィレイサー
「それで、次は？」

鮮血
「多分、お花見かな？」

ヴィレイサー
「……本編は？」

鮮血
「知らん！」

ヴィレイサー
「おい……。」

鮮血
「それでは～。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－１　「違える想いの背丈」（前書き）

鮮血
「さて、今回の番外編は３日間連続で参ります！」

ヴィレイサー
「そして、この３話は神崎はやて先生の作品、
『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』
の主人公、
リオス・コーネルドとのコラボとなっております。」

鮮血
「お題は、お花見となっております。
まぁ、今回はまだお花見には行きませんが。」

ヴィレイサー
「それでは、どうぞ。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－１　「違える想いの背丈」

「うはぁ……。
疲れてもうた……。」

グッタリとした表情を微塵も隠さず、はやては机に突っ伏した。

「大丈夫ですか、はやてちゃん？」

彼女の横に降り立ち、様子を窺うリィン。

「まぁ、片付けなアカン書類は全部終わったし、少し息抜きしようか。」

「ですね。」

「せやけど、どんな息抜きがええかなぁ？」

うーんと腕を組んで悩んでいるはやてにすずかからメールが届いた。

「ん？」

それを開くと、文章以外に綺麗に花開いている桜の写真が添付されていた。

「これや！」

「はい？」

はやては急に立ち上がり、その部屋を飛び出して行った。

「な、なんなんでしょう……？」

1人ポツンと残されたリィンは、パソコンの画面を覗く。

「これ、桜の花ですね。
綺麗ですぅ♪」

自然と頬が緩み、リィンは気分が高揚した。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－１　「違える想いの背丈」

「「お花見？」」

「せや！」

はやてから今度の息抜きを聞かされ、なのはとフェイトは顔を見合わせた。

「すずかちゃんからメールが来たんやけど、向こうで桜が綺麗に咲いとるらしいんや。」

「花見か～。
いいかも♪」

「うん、そうだね。」

綺麗に咲く桜の姿を思い起こし、なのはとフェイトは顔を綻ばせた。

「ほな、早速準備しよか。」

「「うん。」」

◆◇◆◇◆

「花見？」

「うん。」

欄干に背を預けていたヴィレイサーは、フェイトの顔を見なおした。

「で、何で俺にその事を？」

「え………。

そりゃあ、一緒に行こうって………。」

「行くのが………。」

「……メンドイ、でしょ？」

「む………。」

ヴィレイサーの言葉を遮り、フェイトが後を告げる。

「もう………。

そんな事言わないで、一緒に行こう？」

「花より団子になる確率が高いぞ。」

「私はいいよ、別に。」

ヴィレイサーの乗り気じゃない発言にも、フェイトは普段と変わらぬ様子で返した。

「一緒に居られるだけで嬉しいから………／／／／／／／／／／／／／」

僅かに頬を赤く染め、フェイトは照れ笑いを浮かべる。

「ッ………／／／／／／／／／／／／／／」

それにつられて、ヴィレイサーも頬を赤くした。

「ね、行こう？」

「……まぁ、考えといてやるよ。」

ぶっきらぼうに返し、ヴィレイサーは室内に戻って行った。

「あ、待ってよ。」

そんなヴィレイサーを慌てて追いかけ、フェイトも姿を消した。

◆◇◆◇◆

「ねぇ、リオスくん。」

ヴィレイサーとフェイト。

２人が六課の隊舎に入ったところ、近くではなのはがリオスを呼び止めていた。

「今度、地球でお花見する事になったんだけど、リオスくんも一緒にどうかな？」

「僕は一向に構わないよ。」

「それじゃあ、一緒に楽しもうね。」

「あ、うん／／／／／／／／／／／／／／」

笑顔を振りまくなのはに、リオスは赤面する。

「もう……。」

そして、ヴィレイサーを取り逃がしてしまったフェイトは溜息をついた。

「ん……。」

横目に、リオスとなのはが映る。

楽しそうに会話をしている2人に、フェイトは友人が遠い所に居るように錯覚する。

「羨ましいな……。」

ポツリと呟き、ヴィレイサーの部屋では無く自室に戻って行った。

自分とヴィレイサー。

なのはとリオス。

恋人がいる事は共通しているのだが、
それ以外はなのはとリオスの方が進んでいると言える。
と言うのも、２人のイチャつきは六課の名物のようなものになりつつある。
それほどまでに、２人は互いに相手の事を深く想っているのだろう。
しかし、自分はどうだろう？
確かにヴィレイサーの事は誰よりも好きな男性として想っている。
だが、なのは達ほどイチャついているかと言われると――――
「違うよね……。」
――――答えは否、だった。
深い溜息をつき、フェイトは自室のベッドに身を委ねた。

◆◇◆◇◆

翌日。
「じゃあ、お花見は来週なんだ。」

なのはから予定日を聞かされたフェイトは、忘れぬようにメモに走り書きをする。

「場所はアリサちゃん達が先に取ってくれてくるって。」

「そっか。」

昼食の時間帯である今。

食堂は多くの人で賑わっていた。

だが、何故かフェイトとなのはの周囲には人が少ない。

と言うのも、なのはに対面するようにリオスが座っているからだ。

「はい、リオスくん。
あ～ん♪」

「え!?
い、いいよ別に……。」

「嫌なの?」

恥ずかしいという点から、なのはのそれを断ったリオスだったが、なのはが気持ちをしょぼくれさせた上に、涙目で見上げてきた。

「そ、そんな事無いよ!」

むしろ嬉しいと豪語し、リオスはなのはの持つスプーンに乗せられ

る料理を、
そそくさと口に運んだ。

「ふふっ♪」

その様子に、なのはは嬉しそうに笑うが、周囲では苛立たしげにしている者、
或いは頭を抱えていたり、生温かい視線を送ってきたりと、様々な者がいる。

2人の恋人になるまでの経緯を考えれば、
このようにイチャついてもなんら構わないのだが……。

「じゃあ、今度は僕が……。
はい、なのは。　あ～ん。」

「あ～ん。」

この2人は周囲の目など一切気にしないでイチャイチャする。

これによって発生する甘甘空間（八神部隊長、命名）は、
周囲に居る局員に多大な影響を与えたり与え無かったりとか……。

それに耐えられる者はさほど多くは無い。

かく言う、隣に座っているフェイトも頭を抱えている。

耐えられるとすれば、純粋なエリオ、キャロ、ヴィヴィオや、
まったくとしてそれを気にしないヴィレイサーぐらいだろう。

「はぁ………。」

普段からイチャつくなのはとリオスを見て、フェイトは深い溜息をついた。

「どうしたの、フェイトちゃん？」

親友のいつもと違う様子に、なのはが顔を覗き込む。

「あ……うん、ちょっと………。」

歯切れの悪い答えに、リオスは席を外すと告げてその場を後にした。

「なんか、私の所為でごめん………。」

「そんな！
フェイトちゃんが謝る事なんて無いよ！」

「ありがとう………。
ねぇ、なのは。」

「うん？」

「どうやったら、なのはとリオスみたいにイチャイチャ出来るかな！？」

「ふぇ！？／／／／／／／／／／／／／／」

予想外の質問に、なのはは驚く。

「な、何で!?」

「その……私とヴィレイサー、あんまり恋人同士に見えないかなぁと思って……。」

「うーん……。
私は、そんな事無いと思うけど?」

「そ、そう?」

「うん。
なんか、2人とも安心して背中を預けられる恋人って感じだし。」

「それって、場所が戦場固定な気が……。」

「にゃはは……。」

苦笑し、なのはは頬を掻く。

「やっぱり、もっと積極的になった方がいいのかな?」

「どうだろう?
ヴィレくんもそこまで気にしていないと思うよ。」

「でも……。」

「フェイトちゃんは、ヴィレくんの事を信頼しているんでしょ?
ヴィレくんもきっと、フェイトちゃんの事を信頼しているよ。
だから、変に拘らなくても……。」

「……どうやろうな。」

なのはの言葉を突然遮り、はやてが割って入ってきた。

「はやてちゃん？」

「どうしてそう思うの！？」

「私は、もっとアプローチしてもええと思うよ。
イチャイチャしてこそ、愛が育まれんねん！」

グッと拳を握って力説するはやてに、フェイトはうんうんと頷いていた。

「はやてちゃん……。」

「なんや？」

不審に思ったなのはは、はやてにそっと耳打ちする。

「もしかして、単に楽しもうとしているだけじゃ……。」

「もちろんや！」

「はぁ……。」

いいように誘導されたフェイトを横目に、なのはは溜息をついた。

◆◇◆◇◆

「まずは、どうやってヴィレイサーを花見に連れていくかだよね。」

なのはから協力を要請されたリオスくんは、何故か真剣に考え込んでいた。

「いつになく真剣だね、リオスくん。」

「まぁ……ね………。」

チラリとはやてを睨むリオス。

その様子になのははなんとなく理由を察した。

「今度は何の服を？」

「巫女服………。」

「そ、そっか………。」

強制的にコスプレさせられそうになった為、リオスは保身に走ったという訳だ。

「うーん………。

ここは、フェイトちゃんの色香で落とすしか………。」

「えぇ！？／／／／／／／／／／／／／／」

「何を着せればいいかな？」

「って言うか、ヴィレイサーはどんな服が好みなんだろう？」

「案外メイド服とか？」

「いや……ヴィレくんの事やから結構マニアックなものかもしれん……。」

「例えば？」

「ネコミミフリルメイド？」

「確かにマニアック……。」

「早速準備や！
フェイトちゃん！」

「ほ、本当にやるの！？」

「当たり前や！」

「えええええぇぇぇぇぇぇぇぇ！？」

「あ、ちなみに……。」

呆然としているフェイトを無視し、はやてはリオスに向き直る。

「リオスくんも着るんやで？」

「何でさぁぁぁぁぁ！！！」

「なのはちゃんの為や。」

喚くリオスに、はやてがそっと耳打ちする。

「なのはの為……。」

「せや。
なのはちゃんの為。」

「なのはの……。」

「なのはちゃんの為。」

「分かった……。」

「それでこそリオスくんや！」

あっさりと陥落したリオスに、はやては無意味にサムズアップしていた。

◆◇◆◇◆

「ヴィ、ヴィレイサー……。」

「ん？」

着替えを終えたフェイトは、誰にも見つからないように彼の部屋に来た。

「ど、どうかな……？」

衣装はもちろんはやてが用意したものだ。

「……。」

ヴィレイサーは唖然としていたが、やがて口を開いた。

「お前は何がしたいんだ？」

（やっぱりいつも通り……。）

ヴィレイサーの普段と変わらぬそれに、フェイトは少なからず肩を落とした。

「何でそんな衣装に袖を通しているんだよ。」

「その……一緒にお花見に行きたかったから……。」

「考えとくって言っただろ。」

「だって、来てくれないかもしれないし……。」

シュンとするフェイトに、ヴィレイサーは嘆息した。

「信じてくれないのか？」

「そ、そういう訳じゃないよ！？
ただ、どうしても不安で……。」

「悪かったよ。」

しょぼくれる彼女の頭に、そっと手を置く。

「向こうに戻る気があんまり起きなかっただけだ。
お前と一緒に行きたい気はあるよ。」

「ほ、本当に……？」

「あぁ。」

フェイトはヴィレイサーの言葉に顔を輝かせる。

「ありがとう、ヴィレイサー。」

嬉しいからか、フェイトはヴィレイサーに抱きついた。

◆◇◆◇◆

ちなみに――――

「リ、リオスくん……可愛い。」

「そんな事言われても嬉しくないよ！」

なのははリオスのコスプレで堪能していたそうな。

鮮血
「リオスくんはメイド服以外に何を着たのかな？」

ヴィレイサー
「出だしから何を言っているんだよ、お前は！？」

鮮血
「いや、物凄く気になったから。
僕が弄れる限界でもあるし。」

ヴィレイサー
「知らねぇよ……。」

鮮血
「ってか、ヴィレイサーって本当にツンデレだよね。」

ヴィレイサー
「どこがだよ！？」

鮮血
「フェイトにつっけんどんな態度を取っているくせして、
内心では一緒に居たいと切に願ってる所とか。」

ヴィレイサー
「お前、俺をツンデレキャラとして出したのか？」

鮮血

「いや。
僕自身、ツンデレには書けないから、そういう意識は無い。」

ヴィレイサー
「そうなのか。」

鮮血
「次回は明日の同じ時間に更新しまーす。」

ヴィレイサー
「お楽しみに。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－２　「隣にいる人の為に」（前書き）

鮮血
「お花見編、？です。」

ヴィレイサー
「リオスが暴走します。」

鮮血
「コラボ先の人を陥れる事を言うなよ！？
って言うか、暴走しません。」

ヴィレイサー
「してくれれば楽しいのになぁ……。」

鮮血
「僕の文章力で出来るはずが無い……。」

ヴィレイサー
「なんだよ。」

鮮血
「ただ、今回の話の最後には……。」

ヴィレイサー
「リオスが……？」

鮮血
「君が。」

ヴィレイサー
「誰か、今すぐバトンタッチしてくれ。
特にフェイトにフラグを立ててる人。
フィルとか優星とかエルトとか……。」

鮮血
「無理だから……。
って言うか、君がいないとこれ以上進展しないから。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－２　「隣にいる人の為に」

「せっかくやから、向こうでのんびりしようか。」

計画を立てていたはやてが、唐突に言った。

「急ぎの案件は無いしね。」

「２日間ぐらいなら問題無いかな。」

はやての意見に、なのはとリオスも同調する。

「ヴィレイサーは？」

何の意見もしないヴィレイサーに、フェイトが訊ねる。

「俺は別に構わない。」

「それじゃあ、２日間にしよっか。」

フェイトも都合が良いと付け足し、フォワードの面々にも伝える。

「けど、六課をがら空きにして平気か？」

「大丈夫やろ。
今のところは不穏な動きはどこにも見受けられんし。」

「心配にはなるよね。」

「ほんなら、この予定をすずかちゃん達に伝えてくるな。」

はやては自室に戻り、リオスは新作のお菓子を考案すると言って厨房に消えた。

「少し出てくる。」

残ったなのはとフェイトに告げ、ヴィレイサーは出入口に向かった。

「なのは、少し話があるんだけど……。」

「うん、いいよ。」

フェイトと並んで、なのはは歩き出した。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－２　「隣にいる人の為に」

部屋に入り、一緒にベッドに腰掛ける。

「なのはも、さっきのメイド服を着たんだよね？」

「うん。」

「それをリオスが見た時、なんて言われた？」

「え？　普通に「可愛い」って……。」

「そっか……。」

それを聞いたフェイトは肩を落とした。

「もしかして、言われなかった……とか？」

「うん……。」

「そうなんだ。」

「ちょっと期待していただけに、悲しくて……。」

「ヴィレくんだから……って言えばそこまでだけど……。」

フェイトは彼の恋人なのだ。

やはり、少しは言われたいものだろう。

「私、なのはと違って魅力が無いから……。」

「それは絶対に違うと思うよ！？」

消沈するフェイトを慌てて慰める。

「なのは、お願いがあるの！」

「な、何？」

キッと顔を上げ、フェイトはまっすぐになのはを見詰める。

「恋人へのアプローチの仕方を！」

「わ、私が！？」

「うん！

なのはとリオスみたいになりたいの！」

「私とリオスくんって……。」

そこまでイチャイチャしてないと反論しようとするが、

フェイトが頑張ろうとしている姿勢に、なのははその言葉を呑み込んだ。

「なるべく協力するよ。」

「ありがとう、なのは。」

◆◇◆◇◆

とは言ったものの、なのはにはリオスとイチャついている自覚が無い。

「という訳で、手伝って、はやてちゃん！」

「まぁそうなると思ったわ……。」

頭を下げているなのはに呆れ、はやては溜息をつく。

「協力したいんは山々なんやけど、フェイトちゃん達まで甘ーい空間作ったら、
なのはちゃん達との相乗効果で私ら過糖で倒れてまうわ……。」

「そ、そんなに酷いかなぁ？」

「これやから自覚無しリア充は……。」

首を傾げるなのはに、はやては静かに毒づく。

「独り身の私は滅茶苦茶辛いんやで！？」

「ご、ごめん……。」

あまりの剣幕になのはは尻込みする。

「いや、私の方こそごめん。
怒りすぎやったな。」

すぐに改め、はやては咳払いする。

「まぁ、協力者は多い方がええな。」

ニヤリと笑い、はやては目を光らせた。

◆◇◆◇◆

「そういう訳で、皆には集まってもらったんや。」

「はぁ……。」

はやてが召集したのは、ヴィータ、シグナム、シャマル、スバル、ティアナだった。

ちなみに、リオスは普段通りでいてもらう為にスルー。

そしてザフィーラは、基本的にヴィヴィオのお目付け役に徹するのでパスされた。

「でも、フェイトさんとヴィレイサーさんって、どこまで行ったんですか？」

ティアナの質問に、全員が考え込む。

「本人に聞くのが手っ取り早いな。」

ヴィータが通信を介してフェイトに訊ねる。

「なんて言うとる？」

「手すら繋いだ事がねぇってよ。」

その報告に、全員が同じ事を思った。

（このミッション、ハードルが高いなぁ……。）と。

「とりあえず、それが第一段階かな？」

「せやな。」

「しかし、テスタロッサに出来るでしょうか？」

訝しむシグナムに、ヴィータが頷く。

「別に、今の状態でもいいんじゃねぇの？
誰も困ってねぇし。」

「まぁまぁ。　滅多に無いフェイトちゃんからの頼みやし。

それに、フェイトちゃんが頑張る姿、なんかこう、萌えるやん。」

「も、萌え……？」

はやての言い分に、ティアナとスバルは首を傾げる。

「なんでもないよ。」

なのはが慌てて2人の思考を止めさせる。

「けど、どういう事をやらせるんだ？」

「まぁ、なのはちゃんとリオスくんみたくさせればいいやろ。
手を繋いだり、後は相手に食べさせてあげたりとかやな。」

「メンドイなぁ……。」

そんな事をぼやくヴィータだが、参加しないと言わない所を見ると、どうやらしっかりとその任をやってくれそうだった。

「ほんなら、当日の為に頑張るで！」

「「おぉー♪」」

はやての掛け声に、なのはとスバルはノリノリで答えた。

◆◇◆◇◆

「地球に来るの、これで2回目だね。」

「そうね。」

休日の1日目。

地球にやってきた後、アリサとすずかが場所の確保をしている間、なのは達は街を散策して時間を潰すことにした。

「ねぇリオスくん。
どこか行きたい場所とかある？」

「そうだなぁ……。」

別行動も許可されている事から、なのははリオスと2人で行動する事にした。

「ヴィレイサーは、行きたい場所とかないの？」

なのはの行動を横目に、ヴィレイサーに同じ事を訊ねるフェイト。

ここで場所を言ってもらえれば、フェイトが「一緒に行こう」と言って、
手を取る事が出来る。

それに繋げる為の布石だ。

だが――――

「いや、特には無い。」

――――やはりと言うか、予想通りの解答が返ってきた。

「そ、そっか……。」

溜息をつき、フェイトは肩を落とした。

その光景を目にしていたはやて達も、同時にがっくりとした。

「さすがに手強いわね……。」

「まぁ、ヴィレ兄だし……。」

ティアナは改めて厄介な相手だと認識し、スバルはそれが当たり前だと感じた。

「そういうお前は、どこか行きたい場所は無いのか？」

「わ、私！？」

いつもならそこで会話が打ち切られるのだが、予想外の質問に、フェイトは否応なしに戸惑った。

（フェイトちゃん、チャンスやで！）

（しっかりやれよ。）

はやてとヴィータが、熱い視線を向ける。

一方、フェイトは突然の事で戸惑っていた。

そして、ようやく口を開いたのだが――――

「わ、私も特には無いかな……。」

――――あろうことか、そう答えてしまった。

その様子に、傍から見ていたはやて達は一斉にこけそうになった。

「なんでやねん!?」

声を可能な限り抑えながら、はやてはフェイトに向かってツッコミをいれる。

まぁ、当人には届いていないのだが。

「アホだろ……。」

「まったく……。」

ヴィータとシグナムも、彼女の答えには呆れるしか出来なかった。

「そうか。」

ヴィレイサーはそれ以上何も言わず、どうするかを考える。

「ヴィレイサー、フェイト。」

そこへ、リオスから声がかかった。

「手が空いているんだったら、僕となのはに付き合ってもらっていいかな？」

「どうしたの？」

「買いだしもしなくちゃいけないから、僕らで済ませちゃおうと思って。

けど、さすがに人数が人数だから、２人にも手伝ってほしいんだ。」

「でも……なのはとの邪魔にならない？」

「大丈夫だよ。」

フェイトの心配に、リオスはまったく気にしていなかった。

「俺は別段問題無い。」

「私も。」

「それじゃあ、行こうか。」

リオスはなのはの所に戻り、２人で先に歩き出す。

そして、なのははすぐにリオスの手を自然に取った。

はやてに断りをしているヴィレイサーをチラリと見て、

フェイトは自分の手に視線を落とす。

（なのはとリオスがくれたチャンスだし、活かさないと！）

内心で自分を奮い立たせる。

「行くぞ、フェイト。」

「あ、うん。」

傍に駆け寄ってきたヴィレイサーに答え、共になのは達の後をついて行く。

そして、頃合いを見計らって手を握ろうと自分の手を近付ける。

だが、中々握る事が出来ない。

と言うのも、いきなり握ったら怒られないだろうかと、不安になっているからだ。

躊躇するフェイトだったが、勇気を出して彼の指先に触れる。

「あ……ご、ごめん。」

しかし、フェイトはすぐにその手を引っ込めた。

「いや。」

ヴィレイサーも気にせずに、前を向いたままだった。

（もう……2人ともどかしいなぁ……。）

背後を振り返っていたなのはは、その光景に内心で溜息をついた。

（ちょっと刺激してみようかな………。）

リオスの顔をチラリと一瞥し、なのはは小悪魔のような笑みを浮かべる。

「ん、どうしたの？」

「なんでもないよ。」

なのはの視線に気が付いたリオスが、首を傾げる。

と言いつつ、なのははリオスと腕を絡める。

「な、なのは！？／／／／／／／／／／／／／」

「リオスくんは、こういうの……嫌？」

「ううん！
その、嬉しいよ………／／／／／／／／／／」

頬を赤らめるリオスの答えに、なのはは満面の笑みを浮かべた。

（なのは、積極的だなぁ………。）

羨ましい視線を向けながら、フェイトは自分の事を考えた。

「ねぇ？」

「ん？」

「手……繋いでもいいかな？」

「許可を取る必要があるのかよ？」

「え……？」

「お前は俺の恋人で、俺はお前の恋人だろ。」

そう言って、ヴィレイサーから手を握った。

「うん♪」

その手を、フェイトは笑顔で握り返した。

◆◇◆◇◆

買い出しを終えて、はやて達と合流したなのは達は、アリサ達が待つ場所まで向かった。

「アリサちゃん、すずかちゃん。」

2人の姿を目視した所で、なのはは声をかける。

「来た来た。」

「なのはちゃん、皆。」

アリサは腰に手を当てて確認し、すずかは手を振り返す。

大人数で歩いているなのは達は、若干ながら周囲の目を引いていた。

と、その時――――

――そんな女性の声がかかった。

「……シュウ？」

幾人かが立ち止まり、声のした方を見る。

彼女達の視線の先には、恐らくは友人達と一緒に花見に来たであろう女性がいた。

年齢はなのは達とさほど変わらないように見える。

紫紺色の髪に、漆黒の夜をそのまま宿したような綺麗な瞳。

そんな美人と形容できる彼女の視線は、

首を傾げているリオス――――ではなく、彼の隣にいたヴィレイサーに向けられていた。

「は……？」

だが、ヴィレイサーは意味が分からず間の抜けた声を上げる。

「シュウ……だよね？」

「誰だ、あんた？」

「あ、人を覚えるの苦手だったっけ。
ほら、高２の時に一緒だった……。」

そこまで言われて、ヴィレイサーは目を見開いた。

「もしかして……棗？」

「そう。
久しぶりね、シュウ。」

女性――棗はヴィレイサーに微笑みながら手を差し伸べた。

鮮血
「『お前は俺の恋人で、俺はお前の恋人だろ。』ねぇ。」

ヴィレイサー
「んだよ……。」

鮮血
「いつからそんな台詞を言えるようになったの!?」

ヴィレイサー
「俺が知る訳無いだろ!」

鮮血
「あんな事を平然と言えるのに、
フェイトに対して何でツンデレな態度なの?」

ヴィレイサー
「お前が書いているんだろ!」

鮮血
「既に掲載したＩＦのレーネとリースに対しては、
あんなにも優しく接しているのに……。」

ヴィレイサー
「そ、それは……。」

鮮血

「まぁ、君も相手が好きな人なら性格変わるか。」

ヴィレイサー
「うるせぇ！」

鮮血
「で、最後に出てきた棗（なつめ）さん。
彼女とヴィレイサーの関係とは……一体！？」

ヴィレイサー
「アイツは……。」

鮮血
「答えは次回で！」

ヴィレイサー
「ネタバレ禁止だったのか……。」

鮮血
「当たり前でしょうが！」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－３　「誓いの復唱」（前書き）

鮮血
「お花見編、ラストです。」

ヴィレイサー
「いい加減本編進めろよ……。」

鮮血
「もう１つ番外編をやったら、本編だから。」

ヴィレイサー
「ならいいが。」

鮮血
「今回は、棗とフェイトによるヴィレイサーの争奪戦が！」

ヴィレイサー
「ねぇよ。」

鮮血
「３人のドロドロな愛欲展開が……。」

ヴィレイサー
「無い。」

鮮血
「更にそれは、リオスくんとなのはを巻き込んで……。」

ヴィレイサー
「死ね！」

鮮血
「アグゥ！？」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－３　「誓いの復唱」

「久しぶりね、シュウ。」

「棗……。」

シュウと呼ばれたヴィレイサーは、呆然としていた。

まさか、高校時代の数少ない友人に会うとは思っていなかったからだ。

「まさかこんな所で会うなんてね。
ビックリした。」

「そりゃあ俺もだよ。」

笑みを浮かべる相手とは違い、ヴィレイサーはいつもと同じ口調で返した。

しかし、その様子を横目にしていたフェイトは、気持ちのいいものでは無かった。

「ん……。」

自分の好きな人が、他の異性と楽しく会話をしている。

今まで体験した事の無い物で、自分には疎遠な物だとも思っていた。

ヴィレイサーを誰よりも信じているから……。

だが、いざそれを目の前にすると、やはり胸が苦しくなった。

（なのは達なら平気なのに……。）

ヴィレイサーが、自分の良く知る者と話すのなら、まだ平気だ。

しかし、棗と呼ばれた彼女の事は一切知らない。

もしかしたら、自分と彼女とでは大きな差があるのかもしれない。

そんな不安に駆られ、彼女は独り、先に歩き出した。

フェイトの想いなど露知らず、ヴィレイサーは棗と会話をしていた。

「今は大学で、ちゃんと勉強してる。
けどそっちは？」

「まぁ、就職かな。」

「“かな”って何よ……。」

「別にお前には関係無い。」

「あっそ。
ところで、今日の夜って時間ある？」

「いきなりだな……。」

「いいじゃない。

それで、どうなの？」

「分からん。
後で連絡する。」

「ん、分かった。
じゃあ、後でね。」

アドレスを交換した後、棗は手を振って友人達の傍に戻って行った。

「ん？」

自分もはやて達が先に行ったであろう場所に、足を運ぼうとしたヴィレイサーだったが、
リオスとなのはの冷たい視線に気が付き、２人の方を向く。

「なんだよ？」

「いや、分かって無いんだなぁって思って……。」

「はぁ？」

「可哀想……。」

「何がだよ……？」

呆れているなのはとリオスに、ヴィレイサーはむっとする。

「気が付いて無いのならいいよ。」

「はぁ……。」

「なんなんだよ……。」

一足先に歩き出したなのはとリオスを睨み、ヴィレイサーも後に続いた。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－３　「誓いの復唱」

「お、女!?」

「アリサ、声が大きいよ!」

フェイトから、自分が落ち込んでいる理由を聞いたアリサは、驚きの声を上げる。

「で、でも……本当なの？」

すずかの確認に、フェイトは力弱く頷いた。

「せやけど、フェイトちゃんの話を聞いた限りやと、そこまでの仲とも思えんけど……。」

「って言うか、今はあんたが恋人なんでしょ？昔は昔、今は今、でしょ！？」

「そうなんだけど……。ふ、二股とか……。」

「それは絶対に無いよ……。ヴィレくんもそんな器用な事が出来る人じゃないし……。」

すずかの苦笑いに、はやてとアリサも同意する。

「わ、分からないよ！」

だが、不安で一杯のフェイトはそれを頑なに認めようとはしなかった。

「ヴィ、ヴィレイサーだって男だし……。他の人にも目移りしちゃうことだって……。」

肩をフルフルと震わせているフェイトだったが、はやてはそれに溜息をついた。

「まぁ、それは否定せんけど……。
今までもそないな様子は無かったやろ？」

「あったよ！」

「へ……？
それって誰が相手の時や？」

「スバルとかギンガとか、後はメガーヌさんとか……。」

「いや、それは単にシスコンだからやろ……。」

「その3人は、ヴィレイサーにとって家族なんでしょ？
だったら、普段よりいい顔をするのは当然なんじゃない？」

「うぅ……。」

はやてとアリサの意見に、フェイトは押し黙った。

「お待たせ、アリサちゃん。」

そこへ、なのはがリオスと一緒に現れた。

「遅いわよ、なのは。
まぁどうせ、リオスとイチャイチャしてたんでしょうけど。」

「にゃっ！？

し、してないよ、そんな事！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「嘘でしょ？
顔、真っ赤よ。」

なのはは、からかわれている事には気が付いているものの、
それで遅れたと思われるのは心外だった。

「た、確かにリオスくんとはイチャイチャしていって言うか、
もっと恋人同士でしたい事もあるけど……／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「やっぱりイチャついてて遅くなったんじゃない！」

「ち、違うもん！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

口論に入って行ったなのはから、リオスは一旦離れる。

そして、フォワード陣と一緒にいるヴィレイサーの所に向かった。

「ん～、お団子美味しいね。」

「花より団子だな、お前は……。」

「ちょっとスバル、食べすぎじゃないの！？」

「大丈夫だよ。
ティア達の分はちゃんと残しておいてあるから。」

「そういう意味じゃないわよ……。」

ヴィレイサーにとって妹、ティアナにとってのパートナーのその様子に、
2人は自然と溜息を零し、だがしかし笑みを浮かべていた。

「ヴィレイサー、ちょっといいかな？」

「ん？　あぁ。」

手招きしてくるリオスの後に続き、1つの樹の下に座す。

「なんだよ？」

「フェイトの事なんだけど……。」

「フェイト？
アイツがどうかしたのか？」

「はぁ……。
やっぱり気付いて無いんだ……。」

「機嫌でも悪いのか？」

「見れば分かるでしょ、それくらい。
恋人同士なんだしさ。」

「それは屁理屈だろ。」

「屁理屈も理屈の内だよ。」

屁理屈の上に更に屁理屈を乗せるリオスに、ヴィレイサーは笑った。

「で、何で不機嫌なんだ？」

「それぐらいは自分で考えてよね。」

これ以上は話しても無駄だと理解し、リオスは立ち上がった。

「色恋沙汰でお前に口出しされるのは気に喰わねぇな。」

呟き、ヴィレイサーはリオスとは別方向に歩き出した。

「ヴィータ、シグナム。」

「ん？」

「何だ？」

ヴォルケンリッターの構成で共にいるシグナムとヴィータに、ヴィレイサーはある事を頼んだ。

「まぁ、大して強くねぇから平気だろうな。」

「あぁ。」

「それじゃあ、頼んだぞ。」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべて、ヴィレイサーはその場を後にした。

◆◇◆◇◆

「パパ～。」

「ヴィヴィオ。」

ガールズトークに花を咲かせているなのは達の近くで、
のんびりと桜を鑑賞していたリオスの傍に、ヴィヴィオが駆け寄ってくる。

「シグナムさんが、パパに飲み物を持って行ってって。」

紙コップを両手で包み、ヴィヴィオはそれをリオスの前に差し出す。

「ありがとう。」

優しく頭を撫でてやると、ヴィヴィオははにかんだ。

彼女が走り去ってから、リオスは渡された飲み物に口をつけた。

だが――――

「ふにゃ～～～～～……。」

――――突如として、リオスの様子が変貌した。

それに逸早く気が付いたなのはが、急いで駆け寄る。

「リオスくん、どうしたの？」

「にゃのは………？」

「ふぇ？」

トロンとしているリオスの瞳で見詰められ、その可愛さになのはは呆気にとられる。

「にゃのは〜♪」

そして、その隙にリオスは彼女に抱きついた。

まるで母を求める子供のように。

しかも、今のリオスは全身に力があまり入っていない為、必然的になのはに凭れかかる形となる。

つまり――――

「ふぇえええええ！？
ちょ、ちょっとリオスくん！？／／／／／／／／／／／／／」

――なのはの胸に顔を埋めるという事も起こってしまう。

「ククク………。」

その光景を見ていたヴィレイサーは、

腹を抱えて笑いが込み上げてくるのを必死に抑えていた。

「アハハハハ。」

だが、それは失敗に終わり遂には笑いだしてしまった。

「滑稽だよ。」

そう。

意地悪い笑みを見せるヴィレイサーが、これを引き起こした張本人だったりする。

リオスに口出しされた程度で怒るほど、今の彼は沸点が低かった。

と言うのも、何故フェイトが不機嫌なのかが分からないからだ。

（言ってくれなきゃ分かんねぇだろ。）

苛立ちを募らせていたヴィレイサーが、

反撃の為にシグナムとヴィータからお酒を微量貰ったのだ。

それを、疑われる確率の最も低いヴィヴィオに持たせたという訳だ。

「一々口出しすんなよな。」

届かないと分かりつつも、ヴィレイサーは呟かずにはいられなかった。

背を預けていた大木から離れ、ヴィレイサーは慌てているなのはの

所に歩いて行った。

「なのは。」

「あ、ヴィレくん。」

「ふみゅう……。」

声をかけると、なのははリオスの相手をしたまま返事をした。

「お前ら羞恥心無いんだな。」

「そ、そんな訳無いよ！／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「リオス。」

「はへ？」

酔っているリオスは、どうも先程から返事がおかしい。

だが、ヴィレイサーはそれを一切気にせずに告げる。

「なのはがもっと甘えていいってよ。」

「ちょっと、ヴィレくん！？」

「ら～い好きだよ、にゃにょは～～～。」

ヴィレイサーの言葉を理解したリオスは、なのはに頬擦りする。

「面白……。」

「そ、そんな事言ってないで助け……。」

「なにょは～～～♪」

「あ……えへへ♪」

懐かれている事が満更では無いのか、なのはは顔を綻ばせる。

そして――――――

「ふにゃ！？」

――――抱きついてきたリオスの重さに耐えきれず、なのはは押し倒された。

「り、リオスくん……？」

なのはの呼びかけに、リオスは答えなかった。

だが、可愛らしい顔をしているのは変わりが無い。

「な、何をするの！？」

「ダメ～？」

拒もうとするなのはだったが、そこで甘え上戸であるリオスのスキルが発動した。

涙目＋上目遣いだ。

「はふぅ……。
うん、いいよ／／／／／／／／／／／／／／／」

見事にそれによって陥落させられたなのははは、リオスをギューっと抱き締める。

「アホらし……。」

そう呟いて、ヴィレイサーは2人を見向きもせずにフェイトの所に向かった。

◆◇◆◇◆

「はやて。」

「ん、なんや？」

「フェイトは？」

「フェイトちゃんなら、ちょっと風に当たってくるそうやで。」

「ふーん……。」

それを聞いたヴィレイサーは、周囲を見回す。

だが、それらしい人影は見当たらなかった。
恐らく、もっと離れた所に居るのだろう。
「歩いて行った先、分かるか？」
「教えてもええけど、その前にこっちの質問にも答えてくれると助かるで。」
はやてに同意するように、アリサとすずかも頷く。
「答えられるものなら、答えるが。」
「そんじゃあ聞くけど……棗さんとはどういう関係なんや？」
「棗？」
友人の名前が出てきて、ヴィレイサーは驚く。
「関係も何も、俺とアイツは……。」
◆◇◆◇◆
「はぁ……。」

その頃、フェイトは1人で近くの湖畔が見渡せる場所に居た。

「どうしよう……。」

皆の下に戻っても、ヴィレイサーと今まで通りに接する事が出来るか、
フェイトには、それが心配でしょうがなかった。

と、そこへ――――

「あ……。」

「あら？」

――――先程の女性、棗がやってきた。

◆◇◆◇◆

「高校時代の友達？」

「あぁ。
数少ない、な。」

ヴィレイサーの言葉に、はやて達は一斉に安堵の息を漏らした。

「なんや、やっぱりか……。」

「フェイト、神経質になり過ぎでしょ……。」

「まさか、フェイトは棗との関係を曲解しているのか？」

「そうみたい。」

「はぁ……。
アイツにはそういう事が起こらないと思っていたんだが……。
まさか……な……。」

「でも、何で夜に会おうとしているの？」

「そうよ！
そんな事したら、誰でも疑いたくなるわよ？」

「別に変な事する訳じゃないんだが……。
ただ単に……。」

◆◇◆◇◆

「星？」

「えぇ。
シュウと私には、天体観測が好きだという事が共通してるの。」

「だから夜に……。」

「そういう事。
ごめんなさいね、変に曲解させちゃって。」

「い、いえ！
私が勘違いしたのがいけないんです……。」

「フフッ……。」

慌てるフェイトの姿がおかしかったのか、棗が突然笑った。

「ごめんなさい。
まさかシュウが、誰かに心配されるなんて……って思ったら、
おかしくて。」

「そう……なんですか？」

「えぇ。
高校時代のシュウは、本当に他者と関わろうとはして無かったわ。
放っておいてくれって、いっつもそんなオーラを出してたもの。」

それを聞いて、フェイトは内心で同意していた。

変わらないんだなぁとも思っていた。

「でも、天体観測の事では互いに盛り上がってね。
それで、私は数少ないアイツの友達になったって訳。」

一息つき、持っていた飲み物で喉を潤す。

「天体観測なんて、友達になってからはしょっちゅうやってたから、シュウを見つけた時、つい誘っちゃってね。
３年生になった時には、アイツは突然学校を辞めちゃったから。」

３年生――――つまりは１８歳の時だ。

その時は、確かデュアリスに呼ばれてミッドチルダに向かった歳だった。

「フェイト！」

そこへ、ヴィレイサーの声がかかった。

「ぁ……。」

駆け寄ってくる想い人の姿に、フェイトは喜びを覚えたのも束の間、棗との関係を曲解していた自分を恥じた。

「探したんだぞ。」

嘆息し、棗の方に向き直る。

「夜の外出、構わないってよ。」

「そっか。
じゃあ、私が見つけた星を見せてあげる。」

「見つけたって……まさか！？」

「そうよ。
新しい星をね。
名前も付けたしね。」

「そ、そんな事出来るの？」

驚きを隠せないフェイトが、ヒョッコリ顔を出して訊ねる。

「自由に名前を付けられるのは、確か小惑星だったかな？」

「えぇ。
１９７５年には、はくちょう座　デネブの脇に新星が出現した時、
それの第一発見者となったのは、当時高校生だった少年なのよ。」

「夢だったもんな、お前の。」

棗は、ヴィレイサーの言葉に無言で頷いた。

「じゃあ、今度は夜に。」

「あぁ。」

「それと……。」

そう言って、棗はフェイトの方を見る。

「恋人なんだから、ちゃんと優しくしてあげなさいよ？」

「なっ！？

どうしてそれを……？」

「2人を見てれば分かるわよ。
それに、彼女の口振りもヒントだったわね。」

「あぅ……／／／／／／／／／／／」

フェイトは顔を赤くして、俯いてしまった。

「じゃあね。」

駆け足でその場を離れる棗に、ヴィレイサーは文句が言えなかった。

「おい、フェイト。」

「な、何！？／／／／／／／／／／」

未だに頬を紅潮させたまま、フェイトはヴィレイサーに向き直る。

「悪かったな、不快な思いさせて。」

「ううん。
私の方こそ、ごめん……。
変に勘違いしちゃって……。」

「俺には……お前以外に誰もいねぇよ／／／／／／／／／／／／」

頬を掻き、ヴィレイサーも顔を赤くする。

「あ、ありがとう……／／／／／／／／／／／／／」

「ほら、戻るぞ。」

「うん♪」

差し出された手を、フェイトはしっかりと握った。

その温もりに、ヴィレイサーは微笑んだ。

◆◇◆◇◆

ちなみに、お花見から数日後。

「うーん、なんか大事な事を忘れている気がするんだよね。」

「気の所為だよ／／／／／／／／／／／／」

ぼやくリオスの隣にいたなのはは、頬を赤く染めながら返した。

週に2回のペースで、リオスの記憶が抜け落ちる事が多くなった。

その理由は――――

「なのは、最近出費が嵩んでいるぞ。」

「リオスくんの為なら問題無いよ！」

「なのは……。」

――――お酒を飲ませているからであった。

「ところで、ヴィレイサーは何で棗さんに「シュウ」って呼ばれてたの？」

「向こうでの名前が「襲牙」だから。
そこから「襲」を取って、「シュウ」だとよ。」

「そうなんだ。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０３　ＣＨＡＰＴＥＲ－３　「誓いの復唱」（後書き）

鮮血
「なーんだ。
何にも無いのか。」

ヴィレイサー
「あって堪るかよ！」

鮮血
「実は、最初はちょっとある予定だったんだよ？」

ヴィレイサー
「げっ！？
そうなのかよ……。」

鮮血
「うん。
最初は、星の名前を明かす予定だったんだ。

「ナツメ・カサネ・〇〇」
※〇〇は決まって無いです。

という風に自分の「棗」と襲牙の「襲」を合わせた名前で、
実は棗は襲牙（ヴィレイサー）の事が好きだった設定だったのだ！」

ヴィレイサー
「それじゃあ……。」

鮮血
「まぁ、棗には悪いけど振られる話を取り入れようとしていた。」

ヴィレイサー
「そうだったのか……。」

鮮血
「しかも、星の名前を聞いて、君はそれに気が付くんだよ。
だけど何も言えず、そのまま……。
で、最後に棗に改めて答えて、振るという展開だった。」

ヴィレイサー
「やらなくて良かったよ。」

鮮血
「さて、ここで改めて神崎先生に謝辞を。
この度は、若輩の自分とのコラボを許可してくださり、
本当にありがとうございました。」

ヴィレイサー
「ありがとうございました。」

鮮血
「次回もお楽しみに。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０４　「相対　～君を知る時～」（前書き）

鮮血
「今回のコラボは、天照大神先生の作品、
『魔法少女リリカルなのは～転生せし物語～』とのコラボです。
」

ヴィレイサー
「今までの物とは違い、面白い日常ではありません。
悪しからず。」

鮮血
「それと、これに使われている一部の文章は、
『～転生せし物語～』の本編を引用しております。
無論、天照大神先生に許可は取りました。」

ヴィレイサー
「それでは、どうぞ。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０４　「相対　～君を知る時～」

「ジュエルシードの反応？」

「せや。」

はやてに呼びだされたヴィレイサーは、その理由を聞かされた。

「ほんまは、フェイトちゃんにも行って欲しいんやけど……。」

そこで言い淀むはやてに、ヴィレイサーは「構わない」と言った。

「無理に戦列に加えない方がいいだろう。」

「そやね。
ジュエルシードは、フェイトちゃんにとっては辛い過去を思い起こさせるし。」

はやてのその言葉に、ヴィレイサーはただ黙っていた。

“フェイトの過去”

ヴィレイサーはその事を詳しくは知らない。

ただ、母親との間に何かがあった事、そして、自身の出自について知った事。

それぐらいだ。

出撃する手前、ヴィレイサーはフェイトの姿を見た。

上の空なのか、ボーッとしている瞳。

蒼天をただぼんやりと眺めている姿は、どこか人を惹きつける魅力があった。

（アイツも、背負いこみ過ぎだな。）

そんなフェイトに、声をかけずにヴィレイサーは出撃した。

◆◇◆◇◆

「このあたりのはずだが……。」

はやてに言われた箇所に到着し、ヴィレイサーは周囲を探っていた。

「エターナル。」

「ダメです。
何の反応もありません。」

「どういう事だ……？」

ジュエルシードはおろか、魔力の反応すらなかった。

周囲に目を配っていると、一瞬だけ世界が真っ暗闇に覆われた。

「な、なんだ!?」

ヴィレイサーの驚きを余所に、彼の目の前の空間が歪んでいく。

そして、それが徐々に鮮明になっていくと同時に、声が聞こえてくる。

「ここでの戦闘は危険すぎる!!
両方とも武装を解除するんだ!」

「よし、誰かは知らないけれどこれで2人が止まる。」

「「邪魔!!!」」

誰かが言い争っているような声だった。

「あの空間の先に、何が……。」

ヴィレイサーが思案していると、急にその空間に引き込まれ始めた。

「しまっ……。」

ヴィレイサーは成す術無く、その空間に飲み込まれた。

◆◇◆◇◆

「そこの2人！　止まるんだ！！」

クロノの制止を聞かず、フェイトとアルフは逃走した。

「待って、クロノ。
そこに魔力反応があるわ。」

「えっ！？」

リンディの言葉に、クロノとなのは、そして優星は驚いた。

その刹那、黒い影が優星の瞳に映った。

彼が咄嗟に上空を見上げると、夕焼けに似つかわしくない黒い誰かがいた。

漆黒のロングコートを閃かせたその姿は、まるで――――

「堕天使……？」

――――だった。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０４　「相対　～君を知る時～」

「ったく……。
何でこんな事になるんだろうな。」

［Ｉ　ｄｏｎ，ｔ　ｋｎｏｗ．］

今現在、ヴィレイサーはアースラの独房にいた。

その愚痴に、愛機のエターナルが返す。

あの空間に放り出された後、ヴィレイサーはアースラの独房に入れられた。

幸いな事に、エターナルを没収される事は無かったが。

「あの場で次元漂流者だと公言したのが利いたのかねぇ……。」

アースラに連れて行かれる際、クロノに告げ、独房にいれられたという訳だ。

「だからって、独房に入れられるとは思わなかったなぁ……。」

[手錠で拘束されるよりはマシじゃないですか?]

「それもそうかもな。
しかし、この世界は一体……。
それに、なのは達は小さいし。」

ヴィレイサーがそんな事を考えていると、独房の扉が開かれた。

「よう、独房入りはもう終わりか?」

ヴィレイサーは、扉の前にいるクロノにそう言った。

「貴方に聞きたい事があります。
艦長の所まで来てください。」

「いいぜ。」

立ち上がり、ヴィレイサーはエターナルをクロノに渡す。

そしてクロノに案内され、ヴィレイサーはブリッジに入った。

「なんだこりゃ……。」

ヴィレイサーのその第一声に、中に居たなのはとユーノ、そして少年が振り返った。

「来てくれたわね、ヴィレイサーさん。」

リンディは畳みに正座して、ヴィレイサーを迎えた。

「貴方は次元漂流者だという事ですが？」

リンディからの問いに、ヴィレイサーは逡巡する。

（なのはとユーノがいるが……。
まぁ、ここは包み隠さず話した方がいいか。）

なのは達を一瞥し、ヴィレイサーは口を開いた。

◆◇◆◇◆

「つまり、平行世界から来たという事ね？」

「えぇ。」

「ほえー……。」

リンディとヴィレイサーのやり取りに、なのはは間延びした声を上げただけだった。

「ところで、リンディさん達は何の捜査を？」

「あぁ、これだ。」

ヴィレイサーの問いに、クロノが答える。

彼がモニターに映し出したのは、フェイトだった。

彼女の隣には、アルフの姿も見えた。

「この2人は、ジュエルシードを集めているみたいなんだ。」

「なるほどな。」

「そこで、貴方に協力してもらいたいの。」

「あの2人の逮捕を、ですか？」

「えぇ。」

「考えておきます。」

自分の意見で、なのは達を揺らす事の無いように、ヴィレイサーはそれだけ言った。

◆◇◆◇◆

「あの……。」

ヴィレイサーがアースラの個室に向かう途中、誰かが声をかけてきた。

「何か用か？」

「津川優星って言います。」

「ヴィレイサー・セウリオン。」

優星と名乗った少年は、ヴィレイサーに先程の事を訊ねた。

「どうして、リンディさん達に協力すると言わなかったんですか？」

「俺の意見で、なのは達の意志を揺らす事をしない為だ。」

「だけど、貴方には力がある。
フェイトを救うだけの力が……。」

優星は、真っ直ぐな瞳でヴィレイサーを見る。

「今すぐにでも、その力で彼女を助けるべきじゃあ……。」

「どうだろうな、それは。」

「え……？」

「力があるからって、相手の事だけを考えて振るうのは間違いだ。
相手だけじゃなく、自分の周囲の事も鑑みるべきだろ。」

「確かに……。」

「だが、お前みたいに救いたいという気持ちだけでも充分だ。
お前は真っ直ぐだからな。」

優星の頭に手を置き、優しく撫でてやる。

「ありがとう、ヴィレ兄。」

「ヴィレ兄、か。」

「あ、ごめん……。
怒った？」

「いや、他にもその名で呼んでくる奴がいたよ。」

「そうなんだ。」

「優星。」

「何？」

「お前は、お前自身で答えを出せ。」

「うん！」

◆◇◆◇◆

翌日。

なのはとユーノは、自分達の手でジュエルシードを集める事を、優星は、そんな彼女達を守る事をリンディに伝えた。

「分かったわ。」

リンディはそれを承諾し、彼らを迎えた。

「ヴィレ兄。」

「ん？」

「ヴィレ兄は、これからどうするの？」

「どうせ暇だからな。
協力するよ。」

「そっか。」

ヴィレイサーの回答に、優星は安堵した。

◆◇◆◇◆

そして、それから更に数日後。

「1対1で戦うとはな……。」

ヴィレイサーは、なのはとフェイトの戦いが良く見える位置にいた。

優星とユーノ、アルフらは別の箇所に居る。

あれから、1度だけフェイトとの接触があった。

海に沈んだジュエルシードを強制発動させるという荒技に、

ヴィレイサーはそんな事を行ったフェイトに、違和感を持った。

“一体何が、彼女をあんな風にしたのか”

その事が気になったからだ。

自分が知るフェイトは、いくらなんでもそんな馬鹿げた事はしない。

平行世界なのだから、その人物が丸っきり同じと言う訳でもないが。

その後、それは驚くべき事で収束した。

謎の雷が、戦場に轟いたのだ。

アルフがその隙に、フェイトを連れて逃げた為、追撃は不可能となった。

そしてその数日後。

狼形態となっていたアルフから、全ての事情を聞き、なのはの提案で、フェイトとなのはが1対1でぶつかりあう事となった。

「時間か……。」

ヴィレイサーがそう呟いた刹那、金色の閃光が見えた。

フェイトがなのはに仕掛けたのだ。

「どう転がるか……。」

ヴィレイサーはその戦闘に目をやらず、空を見上げた。

◆◇◆◇◆

「スターライト……。」

やがて、なのはの強大な砲撃が収束されていった。

「……ブレイカー！！！」

レイジングハートを振りおろし、その砲撃はフェイトを呑み込んだ。

「はぁ、はぁ……。」

なのはも疲れたのか、肩で息をしていた。

一方、フェイトは気を失っているのか、海へと落下していた。

「あっ、フェイトちゃん！」

なのはは急いで彼女の傍へと向かう。

しかし、なのはがフェイトに辿り着く前に、優星が彼女を抱きとめた。

「まったく、心配かけさせて。」

「え？」

その声に気が付いたのか、フェイトは目を開いた。

「優…星？」

「言っただろ？
僕はフェイトの手伝いをしたいって。
なのにフェイトが諦めたら意味ないだろ？」

優星は笑いながらそう言った。

「う、うん／／／／／／／／」

「どうしたフェイト？
顔が赤いけど……？」

「な、なんでもない……／／／／／／／／」

「あーーー！！！
なんでフェイトちゃん、優君にお姫様だっこされてるの！？」

追いついたなのはに指摘され、優星は慌てる。

「いや、それは今は関係ないだろ。」

と、その時――――

「っ！？」

「えっ！？」

――――突如、雷が降り注いだ。

「か、母さん！？」

「くっ……エクス！」

［ＩＮＶＩＳＩＢＬＥ．］

優星は咄嗟に転移魔法を使い、その場から離れた。

◆◇◆◇◆

「鍵は、プレシア・テスタロッサと言う事か……。」

それを遠くから見ていたヴィレイサーは、立ち上がり、アースラへと戻った。

◆◇◆◇◆

そして、彼がアースラのブリッジ内に入った時、プレシアの声が聞こえてきた。

［貴女はねアリシアを基にして私が造ったクローンなのよ！！］

「え……？」

［そして、せっかく貴女にアリシアの記憶まであげたのに貴女では駄目だった。
アリシアはもっと優しく私に笑いかけてくれた。
でも貴女は違ったわ。
所詮は私に造られた存在……。
だから私は貴女に厳しい態度を取り続けていた。］

「やめて……。」

「私はね……フェイト……貴女の事が……。」

「やめてぇぇぇ！！！！」

「大嫌いだったのよ！！！」

「っ……。」

プレシアの言葉を聞いた瞬間、フェイトは紐が切れた操り人形のように、
地面に倒れてしまった。

「フェイト！？」

「フェイトちゃん！！？」

「フェイトォォォ！！！」

すぐさま、優星となのは、アルフが彼女の傍に駆け寄る。

「結局ジュエルシードは9個だけ。
これでは約束の地“アルハザード”に行けるかは分からない。」

「アルハザード？」

優星は、初めて耳にした単語に首を傾げる。

「バカな！！　アルハザードだって！？」

しかし、それを知っているのか、クロノは焦りの声を上げた。

「けれど私は諦めない！
必ずアルハザードにたどり着いてみせる！！！！」

「これは！？
プレシア・テスタロッサのいる座標の近くに魔力反応！！！
その数、１０、５０、１００、どんどん増えています！！」

「クロノ！今すぐ現場に向かってくれるかしら？」

「はい、艦長！」

「クロノ君、私も行く！」

「僕だって！」

「分かった……。
君はどうする、優星？」

「僕は少しフェイトの側にいる。
少ししたら後を追うよ。」

「あたしだってフェイトと一緒にいるよ！」

優星とアルフは、フェイトを抱えて立ち上がらせていた。

「分かった。

２人とも行くぞ！！」

「分かった！！」

「優君、アルフさん。
フェイトちゃんをよろしくね。」

そう言って、３人は現場に転移していった。

「リンディさん、フェイトは医務室に連れて行きますね。」

「ええ。」

優星とアルフはフェイトを医務室に連れていった。

◆◇◆◇◆

「あたしは先に行くよ。」

フェイトを優星に任せ、アルフも出撃した。

「優星、フェイトの様子はどうだ？」

そこへ、入れ違いにヴィレイサーが入ってきた。

しかし、優星は首を横に振っただけだった。

「どうして、こんな事になっちゃったのかな……。」

「さぁな。」

優星の沈痛な面持ちとは対称的に、ヴィレイサーは軽く返した。

「「さぁ」って……。
どうしてそんなに淡白なのさ！」

優星は怒りを露わにし、ヴィレイサーに喰ってかかる。

「フェイトが、こんなに傷ついたのに……。」

「だが、彼女達の気持ちは俺達には分からない事だろ。
それに、プレシアのあの想いの深さも……。」

「それは……。」

ヴィレイサーに指摘され、優星は押し黙る。

「だがしかし、“知ろうとする”事はできる。」

「ヴィレ兄……。」

「お前は、それが出来る。
そうだろ、優星？」

「うん！」

優星を元気づけた後、ヴィレイサーもプレシアの所へと向かった。

◆◇◆◇◆

「ここか……。」

辿り着いたのは、所々に亀裂の入った壁に、
亜空間に繋がる崩壊した床などなど、昔風に建造された場所だった。

「行くか。」

「良かったのですか、リーダー？」

「何がだ？」

「こちらのフェイトや、優星と名乗った少年……。
彼らに言っておきたい事があるんじゃないですか？」

エターナルからのその言葉に、ヴィレイサーは足を止める。

「事が全て上手く運ぶ事は無いのだと。」

そう言われ、ヴィレイサーはクイント達を失った事を思い出す。

フェイトや優星は、まだ知らない。

この世界には、絶対にどうしようもならない事があるという事を。

自分と優星では、違い過ぎる。

自分は、母や仲間達を失い、優星はフェイトの為にと奔走している。

自分には出来ない。

だが、優星ならば、或いは……。

「俺に……何を言ってもらいたい？」

ドスッと、壁に拳を打ちつける。

「俺には、アイツらのような優しさは無い……。」

顔を伏せた時、壁を貫いて、敵が姿を現した。

その事に慌てる事も無く、ヴィレイサーは太刀を一閃させただけで、敵を伏した。

「フェイトは、何もかも背負いこみ過ぎだな……。」

キッと前を見据え、ヴィレイサーも先を急いだ。

◆◇◆◇◆

「母さん……。」

一方、立ち直ったフェイトは、優星と共にプレシアと対峙していた。

「フェイト……。」

そんなプレシアも、優星の説得により、アリシアとの約束を思い出していた。

しかし、その時――――

[皆、これ以上は抑えられないわ！
急いで脱出しないと、時の庭園は崩壊するわ！]

――リンディからの緊急の連絡が入った。

「大丈夫です。
後は僕がなんとかしますから。」

優星は、先にフェイトとプレシアを脱出させることにした。

「優星！」

そこへ、ヴィレイサーが合流する。

「ヴィレ兄！」

その時、何かが2人の間で光った。

「え！？」

「これは……ジュエルシード？」

発光を続けるジュエルシードの周囲に、ぼんやりとどこかの風景が映る。

「あれは……あの世界は、俺の……。」

［リーダー、急ぎましょう。］

「あぁ。」

呆けている場合では無いと、我に返ったヴィレイサーはジュエルシードに近付く。

「優星。
悪いがここでお別れだ。」

「そっか……。」

「優星……。
お前は最後まで諦めるな。」

「え……？」

ヴィレイサーの言葉に、優星はそちらに顔を上げる。

「最後まで、自分の信念を、想いを……貫き通せ。」

「うん！」

「いい返事だ。」

微笑し、ヴィレイサーはジュエルシードの映し出す風景に身を投じた。

意識が遠ざかる中、優星がブラックホールを発生させ、次元震を沈静化したのが見えた。

「ここは……？」

ようやっとヴィレイサーが目を覚ました時、彼は大地に臥していた。

「戻って、来れたのか？」

「そのようです。」

エターナルが確認してくれたのか、どうやら戻ってこれたようだ。

「ジュエルシード……。」

ヴィレイサーの手中には、青く輝くジュエルシードがあった。

「六課の隊舎に帰還するか。」

◆◇◆◇◆

「ヴィレくん、お疲れ様。」

はやてに報告を済ませ、ヴィレイサーはある人物の所へと向かった。

それは――――

「フェイト、ちょっといいか？」

――――フェイトの部屋だった。

「どうしたの？」

「いや、単なる気まぐれだ。」

「ふーん？」

ヴィレイサーの素っ気ない言葉にも、フェイトは怒る事無く、彼を部屋へと入れた。

「フェイト……。
お前は、母親と姉、2人と共に歩めた未来を望んだ事はあるか？」

「どうしたの、突然？」

ヴィレイサーの質問に、フェイトは困惑する。

「少し、気になっただけだ。
俺も、母を失ったからな……。」

「そっか。」

お茶を淹れ終え、内1つをヴィレイサーに渡す。

「もちろん、何度かあるよ。
だけど、今となってはそれは、幻想だから……。」

そう言って、フェイトは紅茶に目を落とす。

紅茶に映る自分の顔。

それが、歪んでアリシアに見えた。

「お前は強いな……。」

フェイトの頭に手を置き、ゆっくりと撫でてやる。

「だからこそ、そうやって自分で全てを背負いこむ。
たまには弱い所を見せて、誰かを頼ったっていいんだぜ。」

「うん……。
ありがとう、ヴィレイサー……。」
ヴィレイサーの言葉に安堵したのか、フェイトは彼に抱きつく。
ヴィレイサーも、そんなフェイトに手を回し、抱き寄せた。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０４　「相対　～君を知る時～」（後書き）

鮮血
「実はヴィレイサーは、フェイトの過去をちゃんと知らないんですよね。
なので、こういうコラボで、補完させて頂きました。」

ヴィレイサー
「アイツは本当に背負い過ぎなんだよ。
もっと弱音を吐けっての……。」

鮮血
「小さい頃からずっと、思いつめてたからね。」

ヴィレイサー
「ってか、今回のタイトルにある『相対』って、
俺と優星の事か？」

鮮血
「そうだね。
優星くんは、自分の力で守れる者を守っている。
だけど君は、喪失が多過ぎる。
だから、優星くんが光であるのなら、君は影って感じで。」

ヴィレイサー
「ふーん。」

鮮血
「さて、次回からは本編を進めてまいりたいと思います。」

ヴィレイサー
「本当だろうな？」

鮮血
「もちろん。
まぁ、次の番外編の内容は決めつつあるけどね。」

ヴィレイサー
「今度はなんだよ？」

鮮血
「君も地球の出身でしょ？
だから、皆で君の家を見たいと言い出すんだよ。
で、そこへ行ってみたら……って感じ。」

ヴィレイサー
「取ってつけたような設定だろ？」

鮮血
「うん……。」

ヴィレイサー
「やれやれ……。
次回もお楽しみに。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０５　「出張訪問　～Ｔｏ　ｈｉｓ　ｈｏｕｓｅ～」（前）

鮮血
「本編とか言っておいて、番外編になりました！」

ヴィレイサー
「まぁ、先方を待たせちまったからな。」

鮮血
「今回は、Ａｒｉｓｈｉａ先生の作品、『魔法少女リリカル……なんとか！』
並びに、『とあるフラグ最高神の日常生活』の主人公、
暁優くんとのコラボでございます！」

ヴィレイサー
「まぁ、フラグ話は無いので、それを期待している方はごめんなさい。」

鮮血
「内容は、ヴィレイサーの地球にある家に行くと言うもので、
そこで、彼の家を見るのですが……！」

ヴィレイサー
「それでは、どうぞ。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０５　「出張訪問　～Ｔｏ　ｈｉｓ　ｈｏｕｓｅ～」

「ふぅ……。」

１つ息を吐いて、紅茶を口にする。

その光景は、どこか幻想的で、人の目を引き付けていた。

優雅な仕草で紅茶を飲んでいる人物は、一見して女性のようだった。

銀の髪に、蒼天を思わせるような映えた瞳。

どこからどう見ても、その人物は女性と思うだろう。

だが、それは大きな間違いだった。

「優く～ん。」

長い茶髪を、サイドに結った女性が件の人物に抱きつく。

「なのは、止めろって！」

「いいでしょ～？
私と優くんの仲なんだし。」

「はぁ……。」

言っても聞かないと分かり、優くんと呼ばれた“少年”は溜息をついた。

「これみよがしに“少年”ってわざと強調しないでくれる！？」

「どうしたの、優くん？」

「いや、なんでもないよ………。」

「そう？」

女性――――高町なのはは首を傾げてから、再び“彼”に抱きつく。

「だから、男だと言う事をわざとらしく強調するな！」

「にゃっ！？」

ガバッと立ち上がった優に、なのはは体勢を崩す。

そのなのはを助けようと、優は彼女の方を振り返るが、なのはは優に首を回したままだった為、彼女に引っ張られ、２人して倒れてしまう。

「ご、ごめん、なのは………。」

「もう、優くんったら………。
そんなに私を欲しているからって………／／／／／／／／／／／／／／／／／」

ゴニョゴニョと何かを言っているなのはだったが、優はまったく聞いていなかった。

それよりも、彼女が怪我をしていないかの方が重要だった。

とは言え、今の体勢のままでは、誤解を招くだろう。

何故なら、優がなのはを押し倒しているように見えるからだ。

だが、優は気にせずに怪我が無いかなのはに訊ねる。

その選択が、謝りだとも気付かずに。

「なのは、怪我は無い？」

「うん、大丈夫だよ。」

「それじゃあ……。」

「な、何やってるの……？」

「「え……？」」

突如、２人とは別の声が聞こえてきた。

なのはと優は、声のした方へ視線を向ける。

そこには、金の髪に紅い瞳を持つ女性――フェイトがいた。

「フェイト！？」

「ゆ、優？

さすがに真昼間から………しかも人気の多い所でそんな事するのは………。」

「勘違いするな！
別に変な事をやろうとしている訳じゃ………。」

「優くんったら………。
私はいつでも準備ＯＫだよ？／／／／／／／／／／／／／／／／」

「なのはは一生黙ってろ！」

「酷い！」

「と、とにかく！
この事ははやてに伝えておくからね！？」

「それだけは止めてくれえええええぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

優――――暁　優の切なる声が響き渡った。

se～」

「うぅ……酷い目に遭った……。」

部隊長室から出てきた優は、開口一番がそれだった。

「自業自得だろ？」

「どこがだよ！？
俺は全然悪くねぇから！」

「どこぞの超振動を使う出来損いのお坊ちゃんみたいな事を言うなよ……。」

「分かり辛いよ、その説明！？」

「じゃあ、ルー〇・フォン・〇ァブレみたいな事を言うなよ。
この出来損い。」

「お前はアッ〇ュかよ！？」

優の目の前にいるのは、紫がかった青い髪に、紫の瞳をした男性だった。

「俺は別にア○シュでも構わないがな。
愚図のお坊ちゃん。」

「だぁー！
そういう事を言うと、マジで○ッシュに見えてくる！」

「それは良かった。」

「どこがだよ！
まったく……相変わらずムカつく奴だな、お前は。」

「弄られるお前が悪い。」

「何でだよ！」

「ほらほら、あまり怒り過ぎると血管が切れて、あっという間にあの世行きだぞ。」

「お前が怒らせているんじゃねぇかよ……。」

ムスッとした態度で腕を組み、優は憤慨する。

対して、青年の方はまったく気にしていなかった。

「まぁでも、お前には本当に沢山の相手がいるんだから、せめてソイツらが全員死ぬまでは長生きしてくれよ？」

「なんだよ、急に……？」

「でなきゃ、周囲からの批判が酷いぞ。
フラグ最高神さん。」

ポンと肩を軽めに叩き、青年は立ち去った。

「誰がフラグ最高神だ！
このツンデレ堕天使！」

お返しとばかりに、嫌味を言ってやる優だったが、彼――ヴィレイサー・セウリオンは、それに何の反応も示さなかった。

「ちくしょう……。
フェイトはあんな奴の、どこがいいんだか。」

溜息をついて、彼は食堂に向かって歩き出した。

優の口ぶりからも分かる通り、フェイトはヴィレイサーと恋仲の関係にあった。

ほとんどの女性が、優の事を好いているのに、フェイトだけは違った。

「まぁ、俺がとやかく言う事じゃないか。」

思考を停止し、歩みを速めた。

◆◇◆◇◆

「優くん、あ～ん。」

「いや、自分で食うから。」

なのはから差し出されたそれを、優は丁重に断る。

だが――――

「パパ、あーん。」

――――今度はヴィヴィオが差し出してきた。

「はぁ……。」

毎度の事ではあるが、さすがに慣れる訳でも無く、優は溜息をつくばかりだった。

今、彼らの目の前には様々なケーキが並んでいた。

食後のデザートだろう。

それを一口食べながら、優はある事を思っていた。

（なのはの家も、喫茶店なんだよな。

はやては普通の家だったけど。）

そこで、ふと有る事に気が付く。

（そういえば、ヴィレイサーも地球の出身だったな……。
アイツの家って、どんな物なんだろう？）

ぼんやりとそんな事を考えていた優は、何気なくなのはに聞いてみた。

「うーん……。
私も聞いた事は無いから分からないや。」

「そうか。
じゃあ、スバルなら知っているかな？」

ヴィレイサーを兄と慕っているスバルならば、或いは……。

そう思い、空いた時間に彼女の部屋に向かう事にした。

◆◇◆◇◆

「ヴィレ兄の家？」

「あぁ。
何か知らないか？」

「ヴィレ兄って、大きな屋敷に住んでるって、以前言ってましたよ。

」

「屋敷!?」

その事に驚きを隠せない優。

いや、誰もがそれを疑うだろう。

なにせ、あんな態度なのだ。

屋敷育ちなはずが無い。

だが、スバルの言う事が嘘だとも思えない。

「本人に直接聞いてみるか。」

だが、彼と1対1で聞いたのでは、はぐらかされる可能性が高い。

（ここは、フェイトを巻き込んでみるか。）

恋人である彼女の耳にも入れば、こちらが有利に立てるだろう。

算段を企てる優の顔は、明らかにそれを楽しんでいるものだった。

◆◇◆◇◆

「は？　俺の家？」

「あぁ。
どんな家だか知りたいんだよ。」

ヴィレイサーとフェイトが一緒にいるタイミングを見計らって、その話を切りだす。

「フェイトも気になるだろ？」

「え！？
ま、まぁ……うん。」

歯切れが悪いのは、ヴィレイサーの怒りを買っていないかが気になるからだろう。

「別に。
ただの一軒家だよ。」

だが、ヴィレイサーはいつもと変わらぬ様子で返してきた。

「嘘つけ。
スバルがお屋敷だって、言ってたぞ。」

そう言われ、ヴィレイサーは眉を顰めた。

「そ、そうなの？」

興味を持ったフェイトが、畳みかけるようにヴィレイサーに問う。

「あぁ、そうだよ。」

苛立たし気に答える所を見ると、どうやら教えたくはなかったようだ。

「行ってみたいなぁ。
なぁ、フェイト？」

「ふぇ！？
す、少しだけだけど……。」

突然話を振られ、フェイトは顔を伏せてゴニョゴニョと言った。

だが、この距離ならヴィレイサーの耳にも入っているだろう。

「……だってよ、ヴィレイサー。」

フェイトが行きたい気があると言う事を強調するように、優はヴィレイサーを肘でつつく。

だが――――

――――返ってきたのは、随分と冷淡な言葉だった。

「だからなんだよ？」

「呼ばなきゃいけない理由でもあるのかよ？」

立ち上がり、これ以上話をする気は無いと、1人で去って行った。

「む……。
ちょっと急ぎ過ぎたか……。」
作戦が失敗し、優は唸っていた。

◆◇◆◇◆

「ねぇねぇ！
ヴィレくんの家ってお屋敷だって噂、本当なの！？」
なのはが目を輝かせながら聞いてくるが、ヴィレイサーは鬱陶しそうに答える。
「所詮は噂だ。
んな事を信じるようじゃ、優に簡単に騙されるんじゃねぇの？」
「そんな事無いもん！
それに、優くんは私に隠し事なんて……。」
「アイツ、こないだドゥーエとデートしてた……。」
「……ちょっと、ＯＨＡＮＡＳＨＩしてくるね……。」
レイジングハートを構えて、なのははあっという間に消えた。
「……って、噂を聞いただけなんだがな。

まぁ、俺には関係無いな。」

いつもと同じように、優を弄っていたヴィレイサーだったが、フェイトに呼ばれて彼女の部屋まで歩いて行く。

「なんだよ？」

「その……。」

言いにくそうにしているフェイトの様子に、ヴィレイサーはなんとなく何が言いたいかを察した。

「こないだの、俺の家の事か？」

「う……うん……。
行ってみたいんだけど、やっぱりダメかな？」

上目遣いで聞いてくるフェイトに、ヴィレイサーは溜息をついた。

「何でそこまで俺の家に拘るんだよ？」

「だって、好きな人の事だし……／／／／／／／／／／／／／／／」

「向こうの家とは絶縁関係に近いからなぁ……。
あんまりおすすめはしない。」

「そ、そっか。
じゃあ、やっぱりいいよ。
ヴィレイサーに迷惑がかかるのも悪いし……。」

早々に引き下がったフェイトに、ヴィレイサーは拍子抜けした。

「お前、俺の事をもっと知りたいんじゃないのかよ？」

「迷惑をかけてまでも知ろうとは思わないよ。」

「お前はもう少し我儘になっていいと思うぞ。」

「え？」

大仰に溜息をついたヴィレイサーを見る。

「お前は、俺の恋人なんだからな。」

そう言って、ヴィレイサーはフェイトを抱き締めた。

「ぁ……。」

嬉しかったのか、フェイトは顔を綻ばせた。

「それじゃあ、早速だけど我儘言っていいかな？」

「あぁ。」

「もう少し……。
もう少しだけ、抱き締めてて欲しいなぁ。」

「いいぜ。」

互いに微笑み、2人はしばし抱き合っていた。

◆◇◆◇◆

「フェイトだけ！？」

「うん。」

翌日。

ヴィレイサーが家に呼ぶ事を了承したのは、フェイトだけだった。

「いいなぁ、フェイトちゃん。」

なのは達からは羨ましげな視線を向けられた。

「フェイトちゃんから頼み込んでくれへん？」

はやてが懇願してくるが、フェイトは苦笑するしか出来なかった。

「無理だと思うよ？
ヴィレイサー、あんまり人を呼びたくなさそうだったし。」

「ここは……フェイトちゃんのお色気作戦しかないね。」

だが、それで彼女達が引き下がる訳も無く、なのは達は方法を考えていた。

「まぁ、それでクリア出来るのなら、とっくにやっているよな……。」

優の言葉に、誰もが頷いた。

ヴィレイサーに色香が通じない事は、既に周知の事だった。

「となれば、素直に頼むしかないか。」

優は立ち上がり、ヴィレイサーの部屋に向かった。

◆◇◆◇◆

「無理に決まってんだろ、アホ。」

だが、やはりと言うかなんと言うか、一蹴された。

「なら、この写真をばら蒔くぞ。」

ニヤリと笑い、優は懐から1枚の写真を取り出す。

「げっ!?」

そこには、抱き合っている自分とフェイトがいた。

「昨日、偶々偶然見かけたからな。」

「テメェ……。」

「で、どうするんだ？」

「……はぁ、分かったよ。」

ヴィレイサーが折れた。

「ただし、全員を連れてなんてのは御免だ。
お前ともう1人だけだ。」

ギロリと一睨みし、写真を受け取る。

（まぁどうせ、大本はまだ残っているんだろうが……。）

チラリと優のパソコンを窺う。

（ウィルス処理でもしてやろうかな。）

そんな事を考えながら、ヴィレイサーは窓から外を窺った。

「本当に物好きな奴等だ。」

彼の呟きは、優に聞かれないほど小さかった。

◆◇◆◇◆

「最初に言っておくが、あんまり家の事を言いふらすなよ？」
後ろを歩いている優となのはに釘を刺しておく。
「分かってるよ。」
「うん。」
2人とも素直に頷いたが、腹の奥底は分からない。
「まったく……。」
「ごめんね、ヴィレイサー。」
苛立つヴィレイサーに、フェイトが謝る。
「私が言わなきゃ、こんな事には……。」
「今更だろ。
それに俺は、お前に黙ってろなんて言わなかったしな。」
しょんぼりするフェイトに、ヴィレイサーは彼女の頭を撫でながら言った。
「責める訳無いだろ。」
「うん、ありがとう。」

笑顔になり、フェイトは彼の手を握った。

「ここ……？」

「あぁ。」

やがて到着した所には、確かに大きな家が建っていた。

豪邸とまでは行かないが、確かに立派な家だった。

「本当にお金持ちだったんだ……。」

呆けているフェイト達を無視し、備え付けられているインターフォンを押す。

［はい？］

数瞬置いて、初老の男性の声が聞こえてきた。

「襲牙だ。　今帰った。」

［しゅ、襲牙様！？］

ヴィレイサーが本名を名乗ると、向こうは明らかに動揺した。

「迎えはいい。
変わり無いだろ？」

［は、はい。］

「それと、玄関での待機も止めてくれ。」

「畏まりました。」

会話を終えて、さっさと玄関まで歩いていく。

呆然としていたフェイト達は、慌てて彼の後を追った。

「おっきい庭だねぇー。」

「和風なのは、ヴィレイサーの好みか？」

感嘆の息を漏らすなのはの隣にいる優が聞く。

「まぁな。
こっちの方が落ち着くし　庭全体の割合で言えば、西洋風の方が多いが。」

「まだあるんだ。」

「敷地面積も大きいんだな。」

3人とも目新しい物を見るように、周囲をキョロキョロしていた。

庭園を歩き、玄関に着いた。

その扉を平然と開ける所を見ると、本当に金持ちの生まれらしい。

「おかえりなさいませ、襲牙様。」

出迎えたのは、恐らく先程話した初老だろう。
きちっとした身なりが、フェイト達を一層緊張させる。
「我儘言ってすまないな。」
「いえ、構いません。
こちらへどうぞ。」
初老の男性が先に歩きだし、ヴィレイサー達が続く。
部屋に着くまでの道中、ヴィレイサーは周囲の人を驚かせていた。
恐らく、彼が帰ってきた事に驚いているのだろう。
「どうぞ。」
扉を開けて待っている初老の隣に立ち、ヴィレイサーはフェイト達を先に行かせた。
「広い……。」
部屋に入って、開口一番誰かがそう言った。
「お飲み物をお持ちして参ります。
何かご要望は?」
「水でいいよ。
わざわざすまない。」

「いえ。」

一礼し、彼は出ていった。

「ソファとかふかふかだな。」

優がソファに座りながら言う。

「ねぇ、ヴィレイサー。
少し、屋敷内を歩き回ってもいいかな?」

「あぁ。」

フェイトからの言葉に、ヴィレイサーはあっさりと承諾した。

「けど、あんまり飾ってある物に触れるなよ。
変に誤解されても困るし、厄介事を起こされても面倒だからな。」

「うん。」

頷き、フェイトはそそくさと出て行った。

「優くん、ここから庭が見えるよ。」

なのははテラスに立ち、眼下に広がる庭を眺めていた。

「けど、何でこっちに戻ってくるのが嫌だったんだ?」

彼女の事を無視し、優はヴィレイサーに聞いた。

「絶縁したも同然だからな。
けど、俺が魔導師になる事はあっさりと許可したよ。」

「随分な親だな……。」

「放任主義なんだよ。
金持ちってだけで、変な眼で見られないようにって事らしいけど。
」

「じゃあ、小さい頃から？」

「あぁ。
６歳ぐらいには既に１人暮らしだったよ。
連絡も取らせてもらえないし、結構な扱いだったんだぜ？」

当時の苦労さなど感じさせず、ヴィレイサーは笑っている。

「ねぇ、優くんってばぁ～。」

無視されたのがご立腹なのか、なのはが優の首に手を回して後ろから抱きつく。

「何、なのは？」

「庭が綺麗だよ。」

テラスを指さしながら、なのはが優に強く言う。

「そんなのより、なのはの方が綺麗だろ。」

「ふぇ／／／／／／／／／／／／／／／」

優は平然と言って、なのはの顔を一瞥した。

一方、いきなり自分の方が綺麗だと言われたなのはは顔を赤くする。

「それは聞き捨てならないな。」

それに水を差すように、ヴィレイサーが飲み物で喉を潤してから言う。

「なのはよりは庭の方が綺麗だろ。」

「そうかぁ？」

しかし、優はヴィレイサーの言葉には賛同しなかった。

「まぁ、分かれとは言わないし、言った所で無駄だろうな。
それにしても、フェイトの奴は何をやっているんだ？」

苛立たしげに立ち上がり、扉に手をかける。

「フェイトの様子を見てくるからしばらく出るが、頼むから部屋の中を汚すようなことは避けてくれよ？」

「あぁ。」

「はーい。」

優となのはの2人が返事をした所で、ヴィレイサーは部屋を出て、フェイトを探しに向かった。

◆◇◆◇◆

「御似合いですよ、フェイト様。」

「そ、そうですか？
ありがとうございます。」

ヴィレイサーがフェイトを探しに部屋を出た頃、彼女は数人のメイドに囲まれていた。

そして、今フェイトが袖を通しているのは、メイド服だった。

黒を基調としており、腰は赤いリボンが巻かれて、背中で結ばれている。

そして、彼女の金の髪は御団子のように綺麗に後頭部に纏められていた。

と、その時扉がノックされた。

「はい？」

フェイトを囲んでいたメイドの内の1人が出ると、そこにはヴィレ

イサーがいた。

「襲牙様!?」

「え!?」

驚きの声を上げた彼女と同様に、中にいた者達が全員驚く。

「邪魔だったか?」

「い、いえ、そういう訳では……。
何か御用でしょうか?」

「あぁ。
実は……って、フェイト?」

「あぅ……。」

ヴィレイサーに見つかり、フェイトは物陰に隠れる。

「今更隠れてどうするんだよ……。
つーか、何でお前がその服を着ているんだよ?」

「それは、私達がお願いして……。」

メイド長らしき人物が、申し訳なさそうに言う。

「フェイト様があまりにお美しかったので、つい……。」

「アイツから許可は取ったのか?」

「それは、もちろん。」

「なら、俺がとやかく言う事は無い。
遅かったから、アイツを探しに来ただけだ。」

「そうでしたか。」

「しかし、てっきりフェイトが「着たい」と頼んだかと思ったが……。」

「わ、私はただ、底の廊下に飾ってあったドレスを見て……。」

◆◇◆◇◆

『綺麗だなぁ、このドレス……。』

廊下を歩いていたフェイトは、途中で純白のドレスを見つけ、その美しさに目を奪われていた。

『1度でいいから、着てみたいなぁ……。』

ジーッと見詰めたまま、彼女がそんな事をポツリと漏らした時、丁度近くを通りかかった1人のメイドが声をかけた。

『これは、奥様が結婚式の時着た物なんです。』

その後も、ドレスについての説明を受けていて、唐突にそのメイドが言った。

『このドレスは難しいですが、良かったらこの服を着てみませんか？』

そう言って彼女が持ち出したのが、メイド服だった。

◆◇◆◇◆

「……と、言う訳なの。」

「あぁ、アレか。」

ドレスの事を思い出し、ヴィレイサーはあっさりと納得した。

「フェイト様はスタイルもよろしいですし、私共も、つい様々な服を着させてしまいました。」

「まぁ、本人が嬉しそうなら俺は構わない。」

「では、フェイト様は次はどの服を着てみたいですか？」

「え！？

えっと、この白い服はなんですか？」

「それは巫女服ですね。」

「巫女？」

聞いた事が無いのか、フェイトは小首を傾げる。

「巫女って言うのは、神に仕えて神楽とか祈祷を行ったりする人の事だよ。」

「何でそんな人の服がここに？」

「俺が知る訳無いだろ……。」

「簡単に言えば、息抜きでしょうか？
いつもメイド服だと息苦しいという者もおりまして、主がこういう服も手配して下さったんです。」

「何やってんだよ、あの人は……。」

主、つまりはヴィレイサーの父の行動に、ヴィレイサーは頭を押さえる。

“あの人”と言っている事から、やはり関係は絶縁した状態にと言っても過言ではないのだろう。

「着てみてもいいかな？」

「俺に聞いてどうする……。」

「うーん、ヴィレイサーも見てみたいかなぁって思って。」

「さぁな。
お前の好きにしろ。」

「じゃあ、せっかくだし着てみます。」

そう言って、数人のメイドと共に奥に消える。

「ところで、襲牙様はフェイト様とお付き合いされているとお聞きしましたが？」

メイド長が、勘ぐるように笑みを浮かべて聞いてくる。

「誰から？」

「フェイト様ご本人です。」

「アイツがそう言ったのなら、そういう事じゃないんですか？」

小さい頃から見ていただけあって、メイド長はヴィレイサーの事をよく知っていた。

「メイド服姿のフェイト様の写真、焼き増ししておきましょうか？」

「いらないですよ。」

そうヴィレイサーが苦笑した時、フェイトが奥の部屋から出てきた。

「は？」

「あら。」

だが、巫女服だけではなく、彼女の頭には狐の耳が加えられていた。

「へ、変かな？」

「かなり。」

「あうぅ……。」

フェイトの確認に、ヴィレイサーは即座に言った。

「とても可愛らしいですよ、フェイト様。」

しかし、ヴィレイサーの隣にいたメイド長はにこやかに笑う。

「あ、ありがとうございます。」

その言葉が嬉しかったのか、フェイトは少しだけ頬を紅潮させる。

「襲牙様も、ちゃんと褒めてあげた方がよろしいですよ。」

そっと耳打ちし、メイド長はフェイトの傍まで歩いていく。

「あら。」

すると、彼女はフェイトの背後に狐のような尻尾が付けられている事に気が付いた。

「狐耳と尻尾を加えた巫女服ですか。」

「か、可愛かったから、つい手をのばしちゃって……。」

苦笑するフェイトに、周囲は似合うと好評の声を上げる。

そんな様子に、自分は場違いだと感じてそっと部屋から抜け出した。

だが、慌ててフェイトが追いかけてくる。

「待ってよ、ヴィレイサー。」

「あんまりそんな恰好で走るなよ。
裾で足を引っ掛けて転んだりするぞ。」

「ふぇ！？」

そうヴィレイサーが忠告するよりも早く、フェイトは転んでしまった。

彼女は、倒れまいとヴィレイサーの腕を引っ張るが、急に引っ張られた所為もあって、ヴィレイサー共々倒れてしまう。

「怪我は？」

「う、うん、大丈夫。」

冷静に訊ねるヴィレイサーとは逆に、フェイトは少し緊張していた。

それもそのはずで、２人の距離は今、零距離に近い。

倒れた事で、仰向けになっているフェイトの顔と、彼女の上にいるヴィレイサーの顔はかなり近かった。

徐々にフェイトの顔が赤みを帯びていく。

「無事ならいい。」

それだけ言って、退こうとした時――――

「何やってんだよ、お前ら……。」

――――優となのは、2人と出くわした。

「ゆ、優!?
それになのはも!?」

「お前ら、俺の部屋で待ってたんじゃなかったか?」

2人がここにいる事に驚き、ヴィレイサーはフェイトから退くのを忘れてしまう。

「遅いから探しに来たんだよ。」

「だと言うのに、お前ら2人は……。」

優は呆れ、隣にいるなのはは苦笑する。

「にゃはは……。
もしかして、お邪魔だった?」

「ふぇ!?
ち、違うよ!?　決してそういうんじゃないよ!?」

「いいんだよ、フェイト。
ヴィレイサーに有無を言わさず襲われたんだろ。」

否定するフェイトを無視して、優は可哀想な者を見るような眼差しになる。

「誰がそんな事するかよ、バーカ。」

大仰に溜息をついて、ヴィレイサーは立ち上がる。

「そ、そうだよ!
ヴィレイサーはそんな事しないよ!」

先に立ち上がったヴィレイサーに手を借りて、フェイトも立ち上がり、それを否定する。

「じゃあ、フェイトちゃんから襲うの?」

「そういう意味じゃないよ!?」

「コイツら……ウゼェ……。」

舌打ちし、ヴィレイサーは優を睨む。

「お前がしっかり見ておかないから、あんな風になる。
少しはちゃんとやれよ。」

「なっ！？
俺がどれだけ苦労しているのか、お前だって分かってるだろ！？」
若干涙目になりながら訴えられ、ヴィレイサーは「まぁ……。」
と少し尻込みする。
「けど、お前以外にまともにアイツらを扱える奴はいないんだ。
こっちはそれを期待しているんだから、頼むぜ。」
それだけ言って、ヴィレイサーは先に歩き出し、優も後に続いた。
しかし、フェイトとなのはは未だに襲うだのなんだのと、危ない会
話を続けていた。
「襲牙様。」
踵を返しかけた時、メイド長がフェイトの服を持ってヴィレイサー
を呼び止めた。
「フェイト様の服を……。」
そこまで言って、彼女はふと優を見て口を閉ざした。
「あの？」
その視線に、優は恐る恐る聞き返した。
「襲牙様、この方をお借りします！」

「好きにしろ。」

「ふざけるなよ、ヴィレイサー！？」

「それでは、失礼します。」

メイド長は、ヴィレイサーから許可が出た事で、優を引っ張っていく。

「ちょっ！？
優くんをどこに連れて行くんですか！？」

その光景を見て、なのはが驚き、制止しようとする。

「貴方様は？」

「高町なのは。　優くんの妻です！」

「はい！？」

なのはの断言に、優は驚愕した。

「では、優様の事で……。」

そっとなのはに耳打ちすると、なのはは目を見開いた。

「いいですね、やりましょう！」

逃げようとしていた優の後ろ襟首を掴み、なのははメイド長と共に１つの部屋に入って行った。

「ど、どうしたんだろう？」

「大方、コスプレでもさせようとしてんじゃねぇの？」

ヴィレイサーがそう答えた時、優が入った部屋から誰かの悲鳴が聞こえてきた。

「だ、大丈夫なのかな？」

「いつもの事だ。
その内諦めがついて、自分から着るようになるさ。」

「それはないと思うけど……。」

◆◇◆◇◆

「優くん、次はこれを着てみてよ！」

「嫌に決まってんだろ！？
それは女物じゃないか！」

上半身が素っ裸になっている優は、部屋を走り、逃げ回っていた。

「優様は素晴らしい身体つきですね。
こちらの服も似合うと思います。」

「いいですね！」

「いい加減にしろおおおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

「また行ってみたいなぁ、ヴィレイサーの家。」

ミッドチルダに戻ってから数日後、唐突にフェイトがそんな事を言ってきた。

「あんな広過ぎる家のどこがいいんだよ………。」

「それはそうなんだけど………。

あ、でもその内行く事にはなるのかな？」

「何の用で？」

「その………／／／／／／／／／／／」

「あぁ？」

「……け、結婚する時とか／／／／／／／／／／／／／／」

「アホか………。」

顔を赤くして俯いたフェイトに、ヴィレイサーは冷淡に言った。

「で、でも………。」

「まぁ、お前が行きたいのなら、また考えてやるよ。」

「…うん♪」

顔を綻ばせ、フェイトはヴィレイサーを後ろからそっと抱き締める。

「ありがとう。」

そして、彼の頬にキスをした。

◆◇◆◇◆

ちなみに――――

「優くん、今度はこのメイド服を着てよ！」

「嫌だって言ってんだろ！？」

――――優は、ヴィレイサーの家から提供された服で、着せ替え人形の扱いを受けていた。

番外編　ＰＨＡＳＥ－０５　「出張訪問　～Ｔｏ　ｈｉｓ　ｈｏｕｓｅ～」（後）

鮮血
「番外編、第５話でした。」

ヴィレイサー
「俺の家って……。」

鮮血
「そう！
実はヴィレイサーは、金持ちの家のボンボンだったのです！」

ヴィレイサー
「あのなぁ……本編でもある通り、絶縁しているも同然だって！
その恩恵は受けていないし、子供の頃から１人暮らしだったんだぞ。」

鮮血
「って言うか、そうじゃなきゃ君がミッドに連れ去られて、
行方不明って事で事件に発展していただろうね……（汗）」

ヴィレイサー
「だから放任主義の設定にしたのか……。」

鮮血
「そうだね。
ちなみに今回は、ジアビスのネタがちょびっとだけ。」

ヴィレイサー

「出だしの、俺と優のやり取りだけじゃないのか？」

鮮血
「フェイトが着たメイド服って、実はジアビスでティアの称号である、
『おすましメイド』の異称と同じなんだよ。」

ヴィレイサー
「だから髪型も、ティアと合わせるようにしたのか……。」

鮮血
「似合うじゃん。」

フェイト
「ど、どうかな？」（↑メイド服）

ヴィレイサー
「普通。」

フェイト
「えへへ。」

ヴィレイサー
「何で嬉しそうなんだよ……。
俺は『普通』としか言って無いだろ？」

フェイト
「だって、ヴィレイサーって普段は『ふーん』とか感想すら言わないし、
だけど今は『普通』って言ってくれたでしょ？」

ヴィレイサー
「……偶然だ。」

鮮血
「顔が赤いよ、ヴィレイサーｗｗｗ」

ヴィレイサー
「気の所為だ……。」

鮮血
「またまた照れちゃって～ｗｗｗ」

ヴィレイサー
「死ねぇ！」

鮮血
「アギュ！？」

フェイト
「え、えっと……。
とりあえず、Ａｒｉｓｈｉａ先生の作品のあらすじを。」

◆『とあるフラグ最高神の日常生活』
みんな大好きフラグ最高神こと暁優の向かった新しい世界は「とある魔術の禁書目録」の世界！？男の娘、フラグ最高神と名高い彼はとあるの世界で何をするのか！？

フェイト
「前作の『魔法少女リリカル……なんとか！』もよろしくお願いします。」

鮮血
「Ａｒｉｓｈｉａ先生、コラボを承認して下さり、ありがとうございます！」

フェイト
「ところで、私が着た狐耳としっぽ＋巫女服って、作者の趣味？」

鮮血
「違うよ！？
それは、寝落ちの亜留ジャ野先生が提供してくれたから、ついでに。」

フェイト
「そうだったんだ。」

鮮血
「疑うのなら、せめてヴィレイサーの趣味だと思って欲しかったよ……。」

フェイト
「ヴィレイサーにそんな趣味無いもん。」

鮮血
「そうなんだけどね……。」

ヴィレイサー
「次回も……。」

鮮血
「フェイトのコスプレをお楽しみに！」

フェイト
「えぇ！？」

鮮血
「コスプレと言う名の色香でヴィレイサーを落とせ！」

フェイト
「そう言う話じゃないよね、コレ！？」

鮮血
「多分ね……。」

フェイト
「多分なの！？」

ヴィレイサー
「はぁ……次回もお楽しみに」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０６　ＣＨＡＰＴＥＲ－１　「いただきストリートＳｔｒｉｋｅｒＳ　護るための力を持つ者」

鮮血
「書き方を変更して、初の番外編です。
地の文と会話文の間を２行空けるに変更しました。」

ヴィレイサー
「前後編に分けなかったら長すぎだろ、コレ……。」

鮮血
「ｗｏｒｄで８２ページだからね……。」

ヴィレイサー
「で、今回の番外編は『いただきストリート』を参考にしています。」

鮮血
「簡単に言えば双六ですね。」

ヴィレイサー
「今回の番外編は、イツキ先生の『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　護るための力を持つ者』と『魔法少女リリカルなのは～夜天を射る弓～』、２つとのコラボです。」

鮮血
「出演して下さるキャラは、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　護るための力を持つ者』からダーク・アルフィード、コルト・リバティ、ブルズ・アルフィード、そして『魔法少女リリカルなのは　～夜天を射る弓～』からアルク、メイヤ・クロウフィール

ドです。」

ヴィレイサー
「ほぼ全員を出しやがって……。」

鮮血
「どこか問題が？
そしてこの双六編のそれぞれのキャラのテーマは以下の通りです。
」

ヴィレイサー――女誑し

ダーク――変態疑惑

コルト――2人だけの世界を形成

ブルズ――盤上の中心で愛を叫ぶ

アルク――ツンとデレの割合が3：7

メイヤ――とにかく可愛い

鮮血
「……です！」

ヴィレイサー

「俺とダーク、酷くね？」

鮮血

「気の所為だ！」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０６　ＣＨＡＰＴＥＲ－１　「いただきストリートＳｔａｒｔ」

「今日も雨……。」

窓を打つ雫に、フェイトは溜息混じりに呟く。

「雨の日って、なんだかテンションが上がり辛いよねぇ……。」

フェイトの呟きに同調するように、なのはが机に突っ伏しながら言う。

「あー、何か面白い事ないかなぁ……。」

「そう簡単に見つかるとは思えないけど……。」

「うーん……。」

なのはの退屈そうな声に、フェイトは苦笑しながら返す。

「楽しい事が無いなら、作ればええんと違う？」

「「え？」」

ふと聞こえてきたはやての声に、２人は声を揃え、首を傾げた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ－ＪＩＨＡＤ

番外編　ＰＨＡＳＥ－０６　ＣＨＡＰＴＥＲ－１　「いただきストリートＳｔｒｉｋｅｒＳ（前編）」

雨が降りしきるのを一瞥して、メイヤは窓から視線を外してベッドで寝返りを打った。

「暇……ですね。」

彼女が眼前にいる青年にそう声をかけるが、残念ながら彼から返事が返ってくる事は無かった。

真剣に本を読み進めている今の彼には、何を言っても届かないだろう。

しかし、それはそれでメイヤにとっては好都合だったのかもしれない。

返事を返されて、そのまま会話の中で自分が赤面するような状況に追い込まれるよりは、ずっと増しだった。

青紫の髪が僅かに揺れて、指が本のページを捲る。

「あぁ、2人ともここにいたのか。」

その時、ノックも無しに開かれた扉から、中に声がかけられた。

「ダークさん。」

メイヤがベッドから起き上がり、やってきた人物――――ダーク・アルフィードの名を口にする。

「……ナニをやっていたんだ、お前達は？」

ニヤリと意地悪い笑みを浮かべ、ダークはメイヤに問う。

「な、何もしていません！」

誤解をされては敵わないと、メイヤは必死になって何もしていない事を強調する。

「そう言えばそう言うほど、逆に怪しく見えてくる不思議。」

笑い続けるダークに、メイヤはむすっとした表情になる。

「それより、お前とヴィレイサーに呼び出しがかかったぞ。」

「私達に……ですか？」

「あぁ。」

チラリと本を読んでいる青年――ヴィレイサーを一瞥し、彼の肩を軽く叩く。

「……あぁ、お前か。」

「読書中悪いな。」

「悪いと思うのなら、中断させないでもらいたいな。」

栞を読んだ所に挟み、ヴィレイサーは立ちあがった。

「何用だ？」

「はやてから、お前達2人を呼んでくるように言われてな。」

「なんなんでしょうね？」

「さぁな。」

目的だけ伝えて先に歩き出したダークの後に続きながら、メイヤはヴィレイサーに問う。

だが、もちろんヴィレイサーも真意は分からない為、適当に返した。

◆◇◆◇◆

「連れてきたぞ。」

「お疲れさんや。」

ダークの後に続いて数分。

通されたのは、最も広い訓練シムだった。

いつもと違うのは、足元に何かカラフルな升目が大量に描かれている事だろうか。

はやて以外に、アルク、スバル、コルト、ブルズ、ティアナ、なのは、フェイトがいた。

「何をするんだ、一体？」

「双六やよ。」

ヴィレイサーの問いに、はやてが即座に答える。

「双六って、もっと小さい奴じゃあ……。」

ヴィレイサーの隣に立ち並び、メイヤが首を傾げて訊ねる。

「自分達が駒になって遊ぶそうだ。」

その質問には、壁に寄りかかっているアルクが答えてくれた。

「雨で気分もあまり上がらへんからな。
皆で遊ぼうって事や。」

「なのはが憂鬱だーって聞かなくてな。」

「それはフェイトちゃんだよ。」

「違うってば！」

3人が話し合う中、コルト達は苦笑していた。

「けど、俺達だけ遊んでていいんすかね？」

「悪いと思うんだったら、アンタだけでも仕事してる？」

「つれないなぁー。」

ぼやくブルズに、ティアナはつっけんどんな態度を取るが、2人とも微笑しているだけだった。

「まぁ、そこら辺は大丈夫やで。
解説は、あそこにいる2人にお願いしたんや。」

はやてが指差した先には、リインフォース?とヴァイスがいた。

こちらを見て、2人は呑気に手を振っていた。

「今回の双六は、カップルでやってもらうで。
なのはちゃんはダークくんと、フェイトちゃんとメイヤはヴィレくんと。
ほんで、後はスバルとコルト、ティアナとブルズ、私とアルクや。」

「……。」

はやての説明に、全員の視線がヴィレイサーに集まる。

「なんだよ……。」

「いえ、メイヤさんとフェイト隊長、御二人が一緒なんだなぁと……。」

「とんだ女誑しになっちまいましたね。」

「殺すぞ、お前ら……。」

苦笑いするコルトと、悪乗りしそうなブルズを睨み、とりあえず黙らせる。

「一番最初にゴールしたペアには、ちゃんと景品もあるで。」

「なら、手早く始めるとするか。」

ダークが先行してスタート地点に歩き、その後を残りの面々がぞろぞろと続いていく。

［それじゃあ、始めるですよー。］

楽しそうにゲームの開始を告げるリインに、隣にいるヴァイスがノリノリで言う。

［スタートする順番はこちらのコンピューターでランダムに決めるっすよ。
そんじゃあ、ルーレットスタート！］

「無駄にテンション高いな、アイツ……。」

「まぁ、ヴァイスだからな。」

呆れているアルクに同調するように、ヴィレイサーも溜息を零す。

［1番手は、ダークさん&なのはさん。
2番目はアルクさん&八神部隊長、3番手は女誑し&フェイトさんとメイヤ。」］

「ヴァイス、テメェ！
今すぐぶっ殺すぞ、コラ！」

［冗談っすよ。
でも、隣にいる御二人は満更じゃない顔しているんすからいいじゃないですか。」］

「そういう問題じゃねぇよ。」

「まぁ頑張れ、女誑……「ざけんな！」……イッテェ！？。」

ダークがヴィレイサーの肩を軽く叩き言うが、彼はヴィレイサーに速攻で殴られてしまった。

［4番目はコルト&スバル、締めはブルズ&ティアナだ。」］

「俺らが最後か……。」

「それで、どんな感じの双六なんですか、コレ？」

「それはプレイしてからのお楽しみや。
まぁ、簡単に言うておくと、升目は3種類や。」

空間に簡単な説明が出来るイラストが表示され、はやては1つ1つ指をさす。

「赤い升目はイベントマス、白は何も無し、で、黄色はチャンスカードマスや。」

「イベント？」

「まぁ、それはやってみてからのお楽しみや。」

「ちなみに、ゴールするには数がピッタリ合わないとゴールにならないですからね。
4を出せばゴールだけど、そこで5を出したらゴール出来ませんので。」

「ゴール前の升目は、なんだか嫌な気配がする……。」

「激しく同感だな。」

「そんじゃあ、なのはちゃん達からスタートやで。」

「うん。
頑張ろうね、ダークくん！」

「あぁ！」

「しっかりバージンロードを歩いて来いよ、お前ら。」

「そうさせてもうらおう。」

ヴィレイサーの言葉に、しかしダークは取り乱す事無くサムズアップした。

「いいからとっととサイコロ振れよ、バーカ。」

「急かすな。　それ！」

この巨大な双六用に造られたサイコロを放り投げ、それが数を示すまで待つ。

［出た数は４ですぅ！］

リインの実況に頷き、なのはとダークはその数だけ歩いて行った。

◆◇◆◇◆

「始まったな。」

「そのようだな。」

ヴィータとシグナムをはじめとする、残りの面々が、モニターを凝視しながら呟く。

実はこの双六ゲーム、仕事を中断してモニターを介してみている者達が大多数を占めていた。

「面白い物が見られる」と、はやてに唆された面々もいれば、どの組が一番最初にゴールにたどり着くかを賭けている者たちもいる。

ゲームをプレイする者達は、知らず知らずのうちに職員たちを楽しませるはめになっていたのだった。

◆◇◆◇◆

「1、2、3、4……何も無いマスだね。」

「ほんなら、次は私達やな。」

はやての確認に1度だけ頷き、アルクがサイコロを投げる。

「2か。」

眼前にある升目に足を運び、そこが白い事にアルクは少なからず安堵の表情を見せる。

「では、私が振らせて頂きます。」

ヴィレイサーとフェイトに断ってから、メイヤがサイコロを軽く放る。

「5、ですね。」

提示された数だけ歩みを進め、立ち止まる。

「黄色って事は……。」

「チャンスカードだね。」

フェイトが呟くと共に、リインが問いかけてきた。

［表示されているパネルの好きな場所を押してください。］

「なんだか、チャンスと名付けられているのにドキドキしますね。」

「うん。」

不安そうな表情を浮かべるメイヤとフェイトを余所に、ヴィレイサーが適当に選び、パネルに触れる。

「えっと……【次の自分の番、もしもイベントマスに止まっても、それを回避できる】……ですね。」

「その効果って持続するのか？」

「いいえ、次の番だけです。」

「微妙だな……。」

「次は僕達だね。」

「それ！」

スバルがサイコロを放ると、４が出た。

「特に何も無いね。」

「そうだね。」

ダークとなのはがいる升目に並び、ブルズとティアナにそれぞれエールを送る。

「そりゃ！」

ブルズがサイコロを投げて、出た数に目を見開いた。

「サイコロなのに何で7が出るんですか！」

「バグと言う奴ですよー。　この双六は長いので、時折7～9の数も出るですよ。」

「先に言えよ……。」

「皆に驚いてもらいたかったですぅ。」

「なんか納得だ。」

双六をそのまま写しただけではつまらないと感じる者もいるだろう。

だからこそ、7～9の数も黙って加えたのだ。

「特に無しの升目か。　なんだか味気ないなぁ。」

「変なのが出るよりは増しでしょ。」

「それ！」

1組目に戻り、再びなのはがサイコロを投げた。

「う、1！？」

悔しそうにするなのはに、ダークは頭を撫でて慰める。

「長いバージンロードになりそうだな。」

「それはお前もだろうが！」

後ろにいるアルクからの呟きに、ダークは即座に言い返した。

「なのは、チャンスカードを選べ。」

「うん。」

隣にいるヴィレイサーといつものように憎まれ口を叩き合っている間に、なのはにカードを引かせる。

「リイン、効果は？」

「えっとですね……【他の組が引いたカードの効果を消す】……です。」

「何いっ！？」

「そもそもカードの効果が働いているのって……。」

「ヴィレイサーさん、御愁傷様です。」

驚くヴィレイサーに、スバルとティアナのそんな声が聞こえた。

「チッ……。」

「俺達としては、良いものを見させて貰えそうで嬉しいぞ。」

ニヤニヤしているダークを睨み、ヴィレイサーは舌打ちした。

続くはやてとアルクの組は、ダーク達がいる升目でチャンスカードを引き、【もう1度同じ数だけ進む】と言う事で、更に前に進んだ。

「また白いマスやな。」

はやての言葉に、ダークとなのははつまらなさそうな顔をする。

「そんなにつまらないと思いのなら、自分達がイベントマスに止まればいいだろ。」

そんな2人の心中を読み取り、アルクが言う。

「他の奴がやるから面白いんだろうが。」

「なら、俺達に期待すると言うのは甚だ検討違いだ。　寧ろ彼等に期待しろ。」

アルクが顎で指し示したのは、ヴィレイサー達だった。

「無論、あの3人も期待しているさ。」

「好き勝手に言ってんじゃねぇよ、お前ら……。」

苛立たしげにするヴィレイサーを横目に、フェイトがサイコロを振る。

「2だね。」

「期待に答えるように、見事に赤い升目になっちゃいましたね。」

苦笑する2人を責めるはずもなく、ヴィレイサーは「気にするな」と告げてから歩きだす。

「リイン、イベントについて何も書かれてないぞ。」

［先に分かっていたらつまらないですからね。］

［イベントマスに止まったら、組の誰のカードを引くか決めて、そのカードの内容をやるっすよ。］

「いかさまとか無いだろうな？」

［当然ですよ。］

「じゃあ、誰のを引く？」

ヴィレイサーがフェイトとメイヤを振り返ると、2人は複雑そうな表情になる。

「なら、俺のカードで頼む。」

［はいですぅ♪］

簡素な敬礼をして、リインは隣にいるヴァイスにカードを引くように頼む。

「内容は……【次の自分の番が回ってくるまで、ペアの人と手を繋いでいる】……です。」

「妥協案を思いつくなら、妥協してもええよ。」

「どう妥協しろって言うんだよ、これ……。」

軽いイベントで済みそうな事に安堵し、ヴィレイサーは2人の手を優しく取った。

「……なんか、両手が塞がっていると奇妙な感じだな。」

「正に両手に花っすね。」

「死にたくなかったら黙ってろよ、ブルズ。」

「満更ではないくせしてよく言う。」

（両手が塞がって無かったら、今すぐにでも殴るんだがな……。）

前にいるアルクを睨み、しかし隣で嬉しそうに笑っているフェイトとメイヤを目にして毒気を抜かれる。

「両手とも塞がっているのが奇妙に思うんやったら、腕でも絡めたらどうや？」

ニヤリとはやてが笑った事で、ヴィレイサーは自分の言った事が藪蛇だったとすぐに思い知らされた。

「ヴィレイサーがそうした方がいいのなら、私はするよ？」

「わ、私もです！」

はやての言葉を耳にした2人が、すぐさま手を離し、腕を絡める。

「もうお前らの好きにしろ。」

2人が喜ぶのなら、或いはそれでも良かった。

「次はコルトが投げていいよ。」

「ＯＫ！」

スバルからサイコロを受け取り、コルトは軽く抛る。

「お、9だ！」

「進みすぎだろ、お前ら！」

前にいる面々を追い抜き、コルト達がトップに立つ。

「うわ、赤マス……。」

しかし、喜んだのも束の間、そこのマスは赤く染められていた。

「どっちのカードを引こうか？」

「じゃあ……僕の方を引いて下さい！」

コルトの断言に、リインとヴァイスはさっさとカードを引く。

「あー……。」

だが、内容を中々読み上げないヴァイスに、全員が首を傾げる。

「コルトにはちょっと厳しいかもですね……。」

ヴァイスに内容を見せられたリインも、苦笑している。

［【次の自分の番が回ってくるまで、ペアの人をずっと抱き締めている】……………だ。］

「えええええええぇぇぇぇぇぇぇ！？／／／／／／／／／／／／／／」

「見事に当たりを引いたな、コルト！」

「そんなサムズアップしながら言われても嬉しくないですからね、ダークさん！」

「大丈夫だ。皆が皆、お前は当たりを引いたと信じて疑わないさ。」

「もっと嬉しくないですからね、それ！？」

「いいから早く抱き締めろ。俺とティアは、まだ番が回ってこないんだぞ？」

「う、うぅ……………。」

「コ、コルトは……私じゃ嫌かな？」

「えぇ！？　い、いや、そういう訳じゃなくて………／／／／／／／／／／／」

目の前で上目遣いになっているスバルを見て、コルトの頬が僅かに赤くなる。

「チッ、こんな事ならカメラでも持ってくりゃあ良かったなぁ……。」

「いやまったくだな。」

ヴィレイサーの呟きに、ダークもうんうんと頷いている。

「私は別に、コルトなら嫌じゃないよ？」

「あ、あぅ……／／／／／／／／／」

「スバルは、前から抱き締められるのと後ろからやったら、どっちがええ？」

「八神部隊長！？」

「コルト、そういうのは自分で聞かないとな。」

「それが分からなくて、スバルをすぐに抱き締められなかったんだろ？」

「ち、違……。」

「…えっと、私は後ろからがいいかなぁ。」

「えぇ!?」

「コルト、後ろからだとよ。」

「聞いていたから分かりますよ!」

「だったら、なぁ?」

ニヤリと全員が微笑ましい物を見るような視線を向けて、コルトはスバルをじっと見詰める。

スバルも、そんな彼と視線を絡め、しばし見詰め合う。

「なんや、桃色空間が見えてきたで。」

「奇遇だな。
俺にも2人だけの空間が見えるぞ。」

はやてとアルクは苦笑し、残りの面々も微笑していた。

その後しばらくして、コルトはスバルを後ろから抱き締めた。

「ようやく俺達か。」

「変なのが出ないといいけど……。」

「俺の方のカードを引きゃあ、そこまでお前が恥ずかしがるようなもんはねぇだろ。」

「まぁ、そこら辺はアンタが守ってくれるんでしょ？」

「おう、任しとけ！」

「いいから早くサイコロを投げろ、万年新婚夫婦。」

「「誰が万年新婚夫婦だ！」」

ダークの茶化しに、２人は声を揃えて怒りだす。

「ブルズ達の言う通りだ。
アイツらは万年バカップルだろ。」

「それは絶対アンタっすよ、ヴィレイサーさん！」

「バカ言え。
お前達だからこそ、ピッタリだろうが。」

「万年新婚夫婦でも万年バカップルでも、どっちでもええから早く投げようか。
いつまでもイチャつかれたら叶わんわ……。」

はやてが呆れている事に気がつき、ブルズは手早くサイコロを放り投げた。

「6……って事は、コルト達と同じマスか。」

「ブルズ、アンタ覚悟しておきなさいよ……。」

コルトとスバルの隣に並び、ブルズは自分のカードを引くようにリインに進言する。

「スバル、アンタ顔が滅茶にやけてるわよ……。」

「だって嬉しいんだもーん。」

本当に嬉しそうに笑うスバルを見て、ティアナも「こういう事なら自分でもいいかも」などと考えてしまう。

「ブルズが引いたカードは……【ペアに対して好きだと叫ぶ】……だ！」

「良かったな、ブルズ。
見事に当たりを引いたぞ。」

「うるさいっすよ！」

ニヤニヤしている後方の大人たちに向かって、ブルズは吼える。

「まぁ、ちゃっちゃと終わらせるか。」

1つ咳払いをして、ブルズは大きく息を吸い込み、そして――――

「ティアァ、好きだーーーーーー!!!」

――――力の限り愛を叫んでいた。

「止めなさいよ、バカ!／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／」

「しょうがねぇだろ、ゲームなんだから……。」

顔を真っ赤にしているティアナに怒られはしたものの、ブルズにとってはさほどの問題にはならなかったようだった。

「今の所、私達とはやてちゃん達は何もイベントが無いね。」

「逆に言えば、いつイベントマスに当たってもおかしくは無いと言う事だ。」

腕を組んで唸るダークに同意して、なのははサイコロを投げる。

「遂に来たね、イベントマス……。」

「そうだな。」

赤いマスを睨む2人に、リインが声をかける。

［どっちのカードを引くのか決めたですか？］

「まぁ、流れ的に考えれば、男である俺が引くべきだろうな。」

［では、ダークさんのを引くです。］

［【互いのバリアジャケットを入れ替えて、それに着替える】……が出ました！］

「ふざけるなあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

ヴァイスの説明に、ダークは声を限りに叫ぶ。

「ダーク……。

まさかお前が、そんな変態に成り下がるとはな……。」

「落ちたものだな、『管理局の黒い宣告者』も。」

「お前ら、そんな目で見るな！」

アルクとヴィレイサーに憐れんだ目で見られ、ダークはがなる。

「兄さんが、スカートを？
……うわっ！　気色悪い！」

「ブルズ、想ってもそう言う事は言わないの！」

「そうだぞ。
いくら“事実”だからって、言っていい事じゃないだろ。」

「ヴィレイサー、“事実”を強調するな！」

「何を言っている？
本当の事を言っているだけだろ？」

「貴様あああああぁぁぁぁぁぁ！！！」

怒りだしたダークだったが、その後すぐになのはに宥められ、落ち着きを取り戻す。

「まぁ、さすがにスカートはアレやし、上の衣服だけにしよか。」

「けど、どうやって着替える？」

「あぁ、それは大丈夫や。」

はやてが、実況席にいるリインとヴァイスに視線を向けると、２人は頷いた。

［それでは、ロッカールームを用意するですよ。］

［スイッチ、オン！］

ヴァイスの言葉が終わるや否や、ダークとなのはがいる升目にボックスが展開される。

「…って、ちょっと待て！
何で中には仕切りが無いんだ！？」

「ダークくんとなのはちゃんなら問題あらへんと思うんやけど？
もう枕を重ねてしもうたんやろ？」

「最近の若い奴は進んでるんだな……。」

「いや、ダークだからこそ、あそこまで手が早いんだろう。」

「ヴィレイサー、アルク！
勝手な推測をするな！」

「じゃあ聞くが、事実なのか？」

「……なのは、俺は後ろを向いているから気にせず着替えろ。」

「う、うん。」

「逃げた。」

「逃げたな。」

「…って事は、事実やろうな。」

「子供が生まれるのも、ブルズが叔父さんと呼ばれるのも時間の問題だな。」

「案外、着替えボックスから出てきたときには、子供を抱いて……。」

「そんな訳があるか！」

ヴィレイサーとアルクの突拍子もない予想に、ダークは更衣室の中からそれを否定する。

「2人とも着替え終わりましたか～？」

「い、いいよ。」

「俺もだ。」

リインからの確認に、更衣室から2人が出てきた。

「ふっ……ははははは！」

「笑うな、ヴィレイサー！」

「い、いや、似合わなさ過ぎだろ、お前！」

「くそ……。」

サイズが合わない事もあり、ダークにはなのはのバリアジャケットは似合っていなかった。

「でも、なのはの方は似合うね。」

「ですね。」

「ありがとう、フェイトちゃん、メイヤ。」

照れ笑いを浮かべ、なのはは嬉しそうにその場で一回転する。

「で、これはいつ戻るんだ？」

「次の自分の番には戻っていいですよ。」

「次までその格好……くくっ。」

「だから笑うなと言っている！」

笑い続けるヴィレイサーに叫び、ダークは舌打ちした。

「では、次は俺達だな。」

「私達もそろそろ赤いマスに止まりそうやな。」

はやてがそんな事を言ったのも束の間、2人の進路上にある升目は、ほとんどが赤く染められていた。

どう足掻いても、回避するのは難しそうだった。

「……で、やはり俺達も止まる訳か。」

出た目に従い、その数だけ進むと、やはりと言うべきか赤いマスに止まった。

「ダークの1件で、自分のカードを引くのが怖いな。」

「ほんなら、私が引くよ。」

面倒な事をしたくないアルクに代わり、はやてが自分のカードを引くと進言した。

「臆病者だなぁ。」

「黙ってろ、変態。」

「誰が変態だ！」

「今のお前の姿は、正に変態だろ。」

「アルクの言う通りだぞ、ダーク。
今のお前を変態と呼ばずして、何と呼ぶ？」

「一々横槍を入れるな、この女誑し！」

「あぁ！？
ぶっ殺すぞ、テメェ！」

「やれるもんならやってみやがれ！
お前など返り討ちにしてくれる！」

「んだと！」

熱り立つダークとヴィレイサーだが、ペアであるなのは、フェイトとメイヤに宥められ、その怒りを静める。

「2人とも、見事に尻に敷かれているな。」

「「なんだと！」」

アルクの余計な一言に、落ち着きを取り戻したはずの2人はまた怒りだした。

［はやてちゃんのカードは……。］

［【10分が経過するまで、ペアの人をお兄ちゃんと呼ぶ】……です。］

「簡単そうな奴で済んでよかったわ。」

ホッと胸をなでおろし、はやてはアルクに向き直る。

「ほんなら、しばらく『お兄ちゃん』って呼ばせてもらうな、お兄ちゃん。」

「グッ！」

はやての笑顔に、アルクは一瞬だけ言葉に詰まる。

「アルク！
滅茶苦茶顔がにやけてる！」

「に、にやけてなどいない！」

「いや、説得力ねぇぞ……。」

ダーク達からの言葉に反論するアルクだったが、その顔はニヤニヤしそうなのを必死で我慢しているのが丸分かりだった。

「どないしたん、お兄ちゃん？」

「な、なんでもないさ！」

「アルク！　せめてにやけるのなら存分ににやけろ！
顔が歪になってて逆に怖いから！」

「にやけてなどいなーーーーい！」

「だから説得力が無いって言ってんだろうが！
いい加減分かれよ！」

［ヴィレイサーさん、後が閊えてるですから、お早くお願いするです。］

「えぇ？
けど、俺が投げたらすぐにコルトの番になるし……。」
「そんなに僕に番を回したくないんですか！？」
「いや、だってスバルの奴、滅茶苦茶笑顔だし……。
なによりコルト。　お前も満更じゃない顔してるじゃん。」
「してませんよ！？」
「鏡を見てから言おうな、コルト。」
「……その言葉、そっくりそのままお返ししますよ、ダークさん……。」
「そんな憐れんだ目で見るなと言っている！」
「兄さん。
頼むからこれからは人目につかない所で、ひっそりと女装してくれ……。」
「ブルズ、お前も言うか！」
「良かったな、『管理局の黒い宣告者』改め、『管理局の黒い変態』。」
「黙れ、ヴィレイサー！」
「へいへい。
フェイト、メイヤ。

サイコロを投げたいから、腕を離してもらっていいか？」

「え……うん………。」

「分かりました………。」

ヴィレイサーからの頼みに、２人は心なしか残念そうにし、そして腕を離す。

「そんな事で気落ちするなよ。」

「お詫びに、今夜は２人を寝かさないってよ。」

「えぇ！？／／／／／／／／／／／／／」

「はぅ！／／／／／／／／／／／／／」

ダークの悪ふざけに、フェイトとメイヤは瞬時に真っ赤になる。

その刹那、ヒュンと風を切る音がしたかと思うと、ダークの足元にスティレットが突き刺さる。

「ダーク、テメェ………そんなに死に急いでんのなら早く言えよ。今すぐにでもここでぶっ殺してやるぞ。」

ヴィレイサーがポケットからそれを取り出し、ダークに向かって投げたのだ。

「悪かったよ。」

「まったく…………。」

両手を合わせて謝罪したダークに舌打ちし、ヴィレイサーはサイコロを持ち直した。

「否定はしないんだな…………ヘブッ！？」

ニヤリと笑い、ヴィレイサーが否定をしない事をつつくダークだったが、ヴィレイサーからサイコロが投げられ、顔面にそれが激突した。

「後でしばくぞ、お前。」

「私、しばかれちゃうんだ…………／／／／／／／／／／／」

「ヴィ、ヴィレイサーさんがそれをお望みでしたら、私は別に…………／／／／／／／／／／／」

ヴィレイサーの言葉に、変な方向に頭がシフトしてしまったフェイ

トとメイヤ。

そんな2人にデコピンをお見舞いして、現実に引き戻す。

「お前らも一々変な方向に頭をシフトさせてんじゃねぇよ……。」

額を押さえて涙目になっているフェイトとメイヤに苦言し、ダークにぶん投げたサイコロが出した数だけ進む。

「チッ、こんな時に限ってイベントマスかよ……。」

ペアである2人の今の状態で、イベントが行われる升目に止まり、ヴィレイサーは肩を落とす。

「また俺が引くか？」

「いえ、次は私のでお願い致します。」

ヴィレイサーからの確認に、今度はメイヤが引くと言った。

「メイヤのイベントは……お、チャンス・イベントっすね。」

「チャンス・イベント？」

「このイベントをやると、チャンスカードを引けるんすよ。」

「今後の為にも、頑張ります！」

「では………【ペアの人とポッキーゲーム】………してください。」

「ええええええぇぇぇぇぇぇ！？／／／／／／／／／／／／／／」

メイヤが意気込んだのも束の間、出されたお題に彼女は真っ赤になる。

「む、無理です！／／／／／／／／／」

「即行で断ったなぁ………。」

「妥協案として、【皆の前でキスをする】に変更してもええよ。」

「もっと無理です！／／／／／／／／／／」

「いや、それでいいや。」

「へ………？」

はやての打ちだした妥協案も、メイヤにすぐさま棄却されるが、何故かヴィレイサーはそれを了承した。

そして、ヴィレイサーのその言動にメイヤが首を傾げた瞬間――――

「ん！？」

――――メイヤの唇が塞がった。

「これでいいだろ？」

自身から唇を重ねたと言うのに、ヴィレイサーは平然とはやてに問う。

「あ、相変わらず躊躇ないな………。」

「どうやったらそうなれるんすか………。」

「ブルズはなんなくていいのよ！／／／／／／／／／」

ダークはヴィレイサーの素早い行動に苦笑し、ティアナはブルズがヴィレイサーのようにならぬよう釘を刺す。

「あ、あの！」

「ん？」

「引いたカードは私の物ですから、あのお題は、私がやるべきです。だ、だから……！」

顔を真っ赤にしたまま、今度はメイヤからヴィレイサーへと唇を重ねた。

「こ、これで、いいでしょうか？／／／／／／／／」

「メイヤ、グッジョブ！」

メイヤの行動に、はやてとダークはサムズアップして彼女の行動を称えた。

「むぅー……。」

「イデデデ！？」

しかし、メイヤと同じようにペアであるフェイトは、ヴィレイサーの爪先を踏みつけていた。

「嫉妬するぐらいなら、メイヤとヴィレイサーの仲を認めなければ良かったものを……。」

「まぁ、こっちは多重婚が認められてるし、フェイトちゃんもメイヤを怒りつけるなんて無理やろうからな……。
メイヤがヴィレくんを好いてるんを、誰よりも知っているからこそ、その仲を認めて、多重婚を持ちかけたんやろ。」

「しかし、どちらかに口付けをしようものなら、もう1人から嫉妬の眼差しがくる。
ヴィレイサー、哀れな……。」

アルクのそんな呟きに、会場にいた誰もがうんうんと頷いていた。

［では、チャンスカードを選んでください。］

リインの言葉に合わせるように、メイヤの眼前にパネルが表示される。

「では、これで。」

頷き、メイヤはたおやかな仕草でパネルに指を走らせる。

［効果は……【自分以外のチームの番を1回遅らせる】……です。］

「1回休み、と言う訳ですか。

ヴィレイサーさん、誰にしますか？」

「そりゃあ、やっぱり……。」

チラリとヴィレイサーが視線を向けた先にいたのは、満面の笑みを浮かべているコルトとスバルの２人だった。

「もう少し幸福感に浸っていてもらうかな。」

「いや、そこはダークの方がいいんじゃないか？」

しかし、アルクがヴィレイサーの意見に異を唱える。

「アルク！　お前は余計な事を言うな！」

「余計な事だと？　俺はそんな事を１度も言った覚えはない！」

「黙れ、このシスコン！」

「なっ！？　だ、誰がシスコンだ！」

「はやての「お兄ちゃん」発言にデレデレだろうが！」

「そんな訳があるか、この変態！」

「俺は好きでこんな格好になった訳じゃない！」

「うっせぇよ、お前ら……。」

言い争う2人に一言告げてから、ヴィレイサーはコルト達を指差す。

「コルトとスバルの番を飛ばす。」

「分かりました。」

「そんな！」

「何だ？　コルトは今すぐにでもスバルから手を離したいのか？」

「そ、そういう訳じゃないですけど……。」

「ならいいじゃねぇか。」

「でも、優勝したいですし……。」

「景品が気に入らなかったら、お前にやるよ。」

コルトにそう言い聞かせて、ヴィレイサーはブルズ達にサイコロを回す。

「ヴィレイサー、何故ダーク達を飛ばさなかった？」

「んー？　まぁ、いい加減あの服装が気色悪い……。」

「変態はそこら辺に気が回らないから仕方がない。」

好き勝手に話し続けるアルクとヴィレイサーに、ダークは怒りを募らせる。

「それ！」

そうこうしている内に、今度はティアナがサイコロを投げた。

「6ね。」

「結構進みが早いな、あの2人。」

「出た目が大きいものばかりだったからな。」

「また赤いマスか……。」

「今度はチャンスカード付きですよ。」

「さっきのメイヤのを見ると、かなりやるのが怖いわね……。」

「んじゃあ、イベントはまた俺のカードを引くか。」

「イベント内容は……【AかBのどちらかを選べ！】……だな。

」

「何かヒントとかくれないんすか？」

「そんな甘い双六では無いですよ。」

「うーん……。」

AとBのどちらを選んでも嫌な予感しかしないブルズだが、やはり考え込んでしまう。

「ティアはどっちがいい？」

「ここで私に振る？」

「お前が選んでくれたものなら、なんだって出来る気がするんだよ。」

「言うわねぇ……。　それじゃあ、Aをお願い。」

「リイン曹長、Aでお願いします。」

「はいです。
えっと、Aは……【ペアの人をお姫様抱っこする】……ですよ。」

「マジっすか！？」

［マジっすー。］

驚くブルズに、リインは口調を合わせる。

「まぁ、それくらいなら俺は平気っすね。」

そう答えて、ブルズは素早くティアナをお姫様抱っこした。

平気そうな顔をしているブルズとは違い、ティアナは顔を真っ赤にしていた。

［で、その状態で縄跳びに挑戦するですよ。］

「「この状態で!?」」

平然と言うリインに、２人はただ驚くしかなかった。

［１０回跳べたら、チャンスカードを引けるです。］

結果を述べている間に、ブルズ達の前に縄跳びが準備される。

［準備はいいか?］

「ＯＫっす。」

ヴァイスからの確認に手早く答え、ブルズは縄跳びの前に立った。

［それじゃあ、スタートですぅ！］

◆◇◆◇◆

「……８、９、１０！」

［クリアです。］

「さすがはブルズだ。　ティアナの前で醜態は晒さないな。
“兄と違って”。」

「まったくだ。　“兄とは大違いだな”。」

「ヴィレイサー、アルク！
お前達はいつまで俺を引き合いにだす気だ！」

「「お前が着替えるまで。」」

「お前ら……。」

「チャンスカードの効果は……【既に行われたイベントを、誰かにやらせる事が出来る】……だ。」

「へー、面白そう。」

「誰にすんの？」

「そりゃあもちろん……。」

妖しく目を光らせ、ブルズはその瞳で相手を見る。

「…ヴィレイサーさんだろ。」

「何で俺なんだよ！」

「さっきはメイヤが美味しい思いをしたからっすよ。フェイト隊長、酷くご立腹みたいですし。」

「クッ……。」

ヴィレイサーが反論しない所を見ると、彼自身もそう思っていたのだろう。

「イベントは当然、【ペアの人とポッキーゲーム】っすよ。」

「チッ………。」

舌打ちし、ヴィレイサーはフェイトの顎を、指で自分の方に向けさせる。

「ポッキーだとまどろっこしいんだよ。」

そう言って、ヴィレイサーはすぐにフェイトと唇を重ねた。

「これでいいか？」

「チェ、つまんないっすね。」

「俺に面白さを求める時点で間違ってんだよ。」

「ヴィ、ヴィレイサー。」

「あ？」

「メイヤは自分からキスしたし、私も、自分からしてもいい？／／／／／／／／／」

頬を朱に染め、フェイトは上目遣いになる。

「お前は俺の恋人で、俺はお前の恋人だろ？　許可なんていらねぇよ。」

「ありがとう。」

1度ヴィレイサーをギュッと抱き締め、フェイトは彼の頬にキスをした。

「エヘヘ。」

そうしてフェイトは、嬉しそうな笑みを浮かべた。

ヴィレイサー
「なんでだあああああぁぁぁぁぁ！！！」

鮮血
「何が？」

ヴィレイサー
「何でメイヤとフェイトが俺の恋人なんだよ！？」

鮮血
「何でって……。
だって、メイヤさんを出したかったんだもん。
だけどフェイトを余らせる訳にもいかないし。」

ヴィレイサー
「そんなにメイヤの事がお気に入りなのか……。」

鮮血
「君と彼女のＩＦも書いてるしね～。
可愛いじゃん。」

ヴィレイサー
「まぁ、それには同意するが。」

鮮血
「同意するんだｗｗｗ」

ヴィレイサー
「う、うるさい！」

鮮血
「ちなみに、今回の前編にはちょこっとテイルズネタが入っていたりします。」

ヴィレイサー
「分かり辛いけどな。」

鮮血
「以下の部分をシンフォニアのプレセアとクレイアイドルのやり取りを真似ました。」

「マジっすか！？」

［マジっすー。］

鮮血
「後編は、明日の２２時に載せたいと思います。」

ヴィレイサー
「お楽しみに。」

番外編　ＰＨＡＳＥ－０６　ＣＨＡＰＴＥＲ－２　「いただきストリートＳｔｒｅａｍ」

鮮血
「双六編、後編です。」

ヴィレイサー
「ようやくか……。」

鮮血
「前編のまえがきにも書きましたが、テーマは以下の通りですｗ」

ヴィレイサー――――女誑し

ダーク――――変態疑惑

コルト――――２人だけの世界を形成

ブルズ――――盤上の中心で愛を叫ぶ

アルク――――ツンとデレの割合が３：７

メイヤ――――とにかく可愛い

鮮血
「まぁ、ダークさんの変態疑惑は、出だしで解消されますｗ」

ヴィレイサー
「俺って、メイヤとフェイトの2人を相手にしているから、いつまで経っても女誑しって呼ばれんじゃん……。」

鮮血
「いいじゃん、別に。
2人とも好きな人なんだし。」

ヴィレイサー
「まぁな。」

鮮血
「けど、その所為でムーギネーター先生の所のエルデさんとマグネス先生の所のクレアちゃんからは嫉妬されてるけどねw」

ヴィレイサー
「うるせぇ！」

鮮血
「君はいつからそんな罪作りな男になったんだかw」

ヴィレイサー
「お前の所為だろうが！」

「それにしても、フェイトもメイヤも、互いにヴィレイサーを愛しているのに、よく喧嘩しないな。」

「ヴィレくんがしっかり緩衝材みたいな役割を果たしているんだよ、きっと。」

「じゃなきゃ、あっという間に終わっているか。」

「そうだね。」

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ－ＪＩＨＡＤ

番外編　ＰＨＡＳＥ－０６　ＣＨＡＰＴＥＲ－２　「いただきストリートＳｔｒｉｋｅｒＳ（後編）」

［なのはさん、ダークさん、御二人の番ですよ。］

「ようやくか……。
我が世の春が来たあああぁぁぁぁぁ！！！」

バリアジャケットが解除される事に、ダークは歓喜の声を上げる。
そしてそれに応えるように、身体が光に包まれ、バリアジャケットが解除された。

「さっさとこの汚名を雪がせてもらう！」

サイコロを放り、出た目の数だけ進む。

「今度はチャンスか……。」

立ち止まったマスを見て、表示されるチャンスカードのパネルを押す。

「お、チャンス・クエスチョンです。」

「チャンス・クエスチョン？」

「クイズに答えて、それが正解したら、1~6の好きな数だけ進めるですよ。」

「ほう、面白そうだな。」

「では問題です！　【なのはさんのスリーサイズは？】」

「ふえぇ！？　な、何でそんなクイズが出るの！？／／／／／／／／／／」

「えっと、確か上から………。」

「そしてダークくんは何で分かるの！？／／／／／／／／／／」

「やっぱり、もうなのはちゃんに手を出してもうたんやな………。」

「そうとしか思えん。」

「まぁ、ダークだからな。　別におかしい事でも無いだろ。」

はやてとアルクの会話を、ヴィレイサーは“ダークだから”と言う言葉で片付けた。

「残念ですけど、バストが違うですよ。」

「そうだったか？」

「ダークさんが言った値より、少し大きいです。」

「リイン！　恥ずかしいから止めて！／／／／／／／／／／／／／／」

「ダークくんに揉まれたからやな。」

「さすがに手が早いだけはある……。」

「そこ！　突拍子もない事を言うな！」

「違うのか？」

「当たり前だ！」

またもや言い争いに発展したダーク達を横目に、なのははリインに訊ねる。

「リイン、チャンスカードの効果は？」

「えっと……【自分を含めた、チームがいる好きなマス目にワープ出来る】……ですね。」

「他の所は全部イベントマスじゃないか！　今いる所にワープするに決まっているだろうが！」

［では、もう1度チャンスカードを引いてください。］

「じゃあ、これ。」

なのはがパネルに指先を当てて、カードを選ぶ。

［【もう1回サイコロを振る】……です。］

「そりゃ！」

リインが言い終わるや否や、ダークはすぐさまサイコロを振る。

「8か。」

「一気にゴールに近付いたね。」

ぐんぐんと前に進み、ダークとなのはの2人はゴールに近付きつつあった。

「次は私達やな。」

「あぁ。」

「アルク、滅茶苦茶残念そうな顔をしているぞ。」

「もう“お兄ちゃん”と呼ばれないからな。」

「俺はそんな顔していないし、残念に思ってなどいない！」

はやてがサイコロを投げると、7が出た。

「なのはちゃん達とこれ以上開くんは、なんとしても避けたい所やな！」

「そうだな。」

なのは達のすぐ後ろにつき、はやてとアルクは意気込んだ。

［イベントマスです。］

［内容は……【今後は、指定された衣装でプレイする】……ですね。］

「コスプレまであるのか……。」

リインとヴァイスの説明に、全員が固唾を呑む。

［衣装は……アルクさんは【白衣】、はやてちゃんは【ナース服】です。］

「まぁ、俺の方は幾分かはまともだな。」

床からせりでてきた更衣室にあった白衣に袖を通し、雰囲気を出す為に用意された聴診器を首にかける。

ちなみに、はやてはもう1つの更衣室で着替え中だ。

「何で俺の時には更衣室が2つ出てこなかったんだよ!?」

［ダークさんとなのはさんなら、問題無いと思ったからですよ。］

「差別だ……。」

悪びれず、明るく話され、ダークは項垂れた。

「ふむ、さほど動きが鈍る事もなさそうだな。」

白衣を纏ったアルクは、普段からかけている眼鏡により、更に博学であるように見える。

「光るメス！　唸る聴診器！　この世の魔物は、天才外科医アルク

が解剖する！……って感じか？」

「なら、手始めにダークから解剖しよう。」

「俺は魔物じゃない！」

ダークがそう叫び終えると、はやてが出てきた。

「ど、どうやろ？」

自分の服装が変ではないかと心配になり、アルクに上目遣いになりながら訊ねる。

「まぁ、その……似合っているぞ／／／／／／／／／／／／」

頬を掻き、アルクは可愛らしい姿になったはやてから視線を逸らす。

「ほ、ほんまに？」

「あ、あぁ／／／／／／／／／／／／」

「せやったら、何で顔背けるん？　ちゃんと私を見て言って欲しいわ。」

「それは、その……………………から」

「ほえ？」

モゴモゴと口籠るアルクに、はやては小首を傾げる。

「だから、はやてが可愛いから！／／／／／／／／／／」

「あ………／／／／／／／／／／」

アルクが言いたかった事が分かり、２人とも顔を真っ赤にする。

「さ、さよか。　ア、アルクもかっこええよ／／／／／／／／／／」

「そ、そうか／／／／／／／／／／」

「ヴィレイサー、投げないのか？」

「今はその時じゃないだろ。」

完全に２人だけの世界に入っていったはやてとアルクの邪魔をする訳にもいかず、ヴィレイサーはサイコロを投げずに、待つ事にした。

やがて互いに我に返り、ヴィレイサー達に順序が回ってきた。

「5だね。」

出た目の数だけ進み、イベントマスに立ち止まる。

「またイベントかよ……。」

「じゃあ、次は私のを引いて。」

溜息を零すヴィレイサーをメイヤに任せ、フェイトは自分のカードを引くように進言した。

「お、フェイトさん達もコスプレっすよ。」

「変な奴じゃないといいんだがな……。」

「衣装は……【執事服とメイド服】……っすね。」

「面倒なものが出たなぁ……。」

床から更衣室が3つ登場し、各々着替え始めた。

「息苦しい……。」

一番最初にヴィレイサーが着替えを終えて、開口一番呟いた。

「似合わねぇ………。」

「言われなくても分かってる。」

ダークの評価に、ヴィレイサーは苦笑し、ネクタイを緩めた。

「フェイト、メイヤ、まだかかりそうなら、コルトとスバルに番を回すぞ。」

「い、今出るよ！」

「私も、大丈夫です。」

そう返して、２人は同時に出てきた。

「………って、なんだよその格好は………。」

「だ、だって………／／／／／／／／／／」

「これが準備されていましたし………／／／／／／／／／／」

２人とも恥ずかしそうにしており、メイヤはやや短いスカートの裾を下に引っ張っていた。

「【ネコミミフリルメイド】です♪
御二人とも、凄く可愛いですよ。」

「ありがとう、リイン。」

「フェイトさんはこのスカートの裾、短いと思わないんですか？」

「まぁ、あんまり。」

「羨ましいです。」

「そ、そうかな？」

「ちなみに、フェイトさんとメイヤさんはちゃんとヴィレイサーさんを“ご主人様”って呼ぶですよ？」

「俺、執事服着ているのに？」

「「ご、ご主人様／／／／／／／／／」」

「恥ずかしいのなら言うなよ………。」

溜息をついて、ヴィレイサーはコルトにサイコロを渡した。

「一番後ろになっちゃったね……。」

「でも、私は気にしないよ。
コルトに抱き締めてもらって、とっても嬉しかったから。」

「僕も嬉しかったよ／／／／／／／／」

スバルの満面の笑顔に、コルトは気分を高揚させる。

「アイツら、恥ずかしがる事が多いのに、それが無くなると途端に甘くなるよな……。」

「仲が好ければ、別にいいんじゃないかしら？」

すっかり2人だけの世界を形成したコルトとスバルに、ブルズとティアナは苦笑いしていた。

「なんとしてでも、トップに立たないとね！」

1つ意気込み、サイコロを投げる。

「うーん、4か……。」

「微妙な数字だね。」

ここからトップに立つのは難しいかと諦めかけたが、リインがチャンス・イベントだと教えてくれた。

「イベント内容は、私のカードを引いてください！」

先程とは違い、今度はスバル側のカードを引く事にする。

［イベントは……【二人羽織で制限時間内に完食せよ】……です。］

「完食って……何をですか？」

［なんでもいいぞ。］

「スバル、これは絶好のチャンスだね！」

「うん！　リイン曹長、アイスを準備してください！」

「アイスか……。」

「スバルの好物をここで活かすみたいね。
けど、口に運ぶのはコルトよ？　そんなに密着している状態で大丈夫なのかしら？」

「まぁ、そこはコルトの精神力に期待するしかないな」

（うぅ………／／／／／／／／／／
　さっきはああ言ったけど、またスバルに抱きつくんだよね／／／／／／／／／）

ブルズとティアナが心配した通り、コルトは内心でかなりドキドキしていた。

（さっきとは状況が違うけど、またコルトに抱き締めてもらえるんだよね／／／／／／／／／
　やっぱり緊張する／／／／／／／／／）

もっとも、それはスバルも同様で、彼女もかなりドキドキしていた。

着々と準備が進み、コルトがスバルにアイスを食べさせる事になる。

（コルト、暖かい………／／／／／／／／／／）

再び感じられるコルトの温もりに、スバルの鼓動が早まる。

そしてコルトも、スバルの髪から香る、馨しいシャンプーの香りに酔いしれていた。

［では、よーい………スタートです！］

◆◇◆◇◆

「よくもまぁ、あんな状態でクリア出来たもんだ。」

「まったくだな。」

あっという間に食べ終わったアイスの山があったはずの皿を眺め、ヴィレイサーとアルクは呆然としていた。

1度も失敗する事が無かったのは、スバルの動きを熟知しているコルトだからこそ出来たのだろう。

「チャンスカードは……これ！」

［えっと……【別のチームがいる好きな場所にワープ】……だな。］

スバルが選んだチャンスカードの効果に、2人は大喜びした。

「もちろん、ダークさんとなのはさんの升目です！」

「早くも追いつかれたか……。」

隣に並んだコルトとスバルに、ダークは苦笑した。

「コイツはヤベェな……。」

「なんとか追い上げたい所ね……。」

今度は自分達がビリになり、ブルズとティアナは苦しい顔になる。

「チャンスを信じるっきゃねぇな。」

「でも、別にビリでもいいんじゃない？
罰ゲームとかない訳だし、景品もなんだか分からないじゃない。」

「まぁ、そうなんだけどな。」

ティアナの意見に賛同しながら、ブルズはサイコロを投げる。

「お、7だな。」

なんとかヴィレイサー達の所に並び、一先ず安堵する。

［イベントは……【コスプレ】……です。］

「衣装替えで済むのは嬉しいけど、さすがにあんなに恰好は恥ずかしいわね……。」

リインの告げたコスプレという言葉に、ティアナはフェイトとメイヤを見る。

［衣装は……【学校の制服】……です。］

「制服か……。」

「どこのかしら？」

せり上がってきた更衣室に入り、２人ともそそくさと着替え始めた。

「うぅー……／／／／／／／／」

「どうした、メイヤ？」

その間、メイヤが恥ずかしそうにスカートの裾を引っ張っているのに、ヴィレイサーが気付き、声をかける。

「その……スカートが短過ぎて、気になるんです／／／／／／／／／／」

「なら、コレでも着ておけ。」

頬を紅潮させているメイヤに、ヴィレイサーは自分のロングコートを着させた。

「それなら恥ずかしくないだろ。」

ヴィレイサーの背丈ほどあるロングコートは、メイヤには少し大き過ぎるのか、彼女はすっぽりとそれに包まれた。

袖からはちょっとだけ指先が顔を覗かせていた。

「少し大きいですけど、助かります。」

笑顔になり、メイヤはロングコートを嬉しそうに眺める。

「いいなぁ、メイヤ……。」

「1着しかないんだから我慢しろ。」

「むぅー……。」

羨ましがるフェイトは、またも頬を膨らませる。

「しょうがねぇなぁ……ほら。」

執事服の上着を脱ぎ、それをフェイトに渡す。

「これでいいか？」

「うん♪」

フェイトもメイヤも、それぞれ幸せそうな顔をする。

「お待たせしました。」

丁度その時、ティアナとブルズが出てきた。

ティアナはどこから仕入れたのか、セーラー服であり、ブルズは制服を着崩していた。

「ゴールまで……あと7マスだね。」

なのははゴールまでの升目を確認してからサイコロを投げた。

「5か……。」

ゴールまであと2マスと迫りながら、惜しい所で2人は止まってしまった。

「イベントは……【コスプレ】……です。」

そして、なのは達もコスプレをするはめになった。

「衣装は、ダークさんが【タキシード】、なのはさんが【ウェディングドレス】です！」

「鉄板だな……。」

「寧ろあの2人は、いつ着てもおかしくないからな。
今の内に気慣れておくのも悪くないだろう。」

「結婚式を挙げていない方が不思議だよね。」

「兄さんなら、とっくの昔にプロポーズをしていると思ったんだけどな。」

アルクとヴィレイサー、コルトやブルズは、指定された衣装がまったく不思議ではない事に苦笑いしていた。

「私とコルトは、どんな衣装になるのかな？」

「着てみたいの？」

「だって、楽しそうだし……それに、あの衣装ならどれでもコルトに似合っているし、カッコイイと思うよ？／／／／／／／／」

「そ、そうかな？／／／／／／／／スバルも、絶対可愛いよ。」

「ありがとう／／／／／／／／／／／／」

いつ自分達がコスプレしてもおかしくない状況で、２人は相手の姿を想像していた。

「お待たせ。」

「なのは、とっても綺麗だよ。」

「ありがとう、フェイトちゃん。」

真っ白なドレスに身を包んだなのはに、フェイトは率直な感想を述

べる。
「私も着たいなぁ………。」
「フェイトちゃんなら、案外すぐに着れるかもよ？」
「そ、そうかな？／／／／／／／／／／／／」
「うん。」
「なのは、中々に可愛いな。」
すると、隣の更衣室からタキシード姿のダークが出てきた。
「あ………。」
「ん、どうした？」
「ううん！
その……物凄くカッコイイなぁって思って／／／／／／／／／／」
「そうか、ありがとう。
けど、なのはもとっても綺麗だぞ。」
「ありがとう、ダークくん／／／／／／／／／／／」
「甘いなぁ………。」

「普段からあれぐらいだって言うのに、何故未だに結婚していないんだろうな？」

「なんだかそれが怖いわ……。」

なのはとダークの甘い雰囲気に中てられたはやては、さっさとサイコロを投げた。

「チャンスカードやな。」

「ではこれにするか。」

アルクがパネルに触れて、カードを選ぶ。

［効果は……【ヴィータ副隊長登場】……っすね。］

「は？」

ヴァイスが読み上げたチャンスカードの効果に、その場にいた全員が間の抜けた声を上げる。

そうしている間に、双六をしている場所に、撮影用のカメラを持ったヴィータがやって来た。

「ちょっと待て！　何でカメラなんか持ってきてるんだよ！？」

「んなの、撮影の為以外に目的があるかよ。」

「撮影って、今から？」

「いいや。　このゲーム、最初から外のモニターで中継されてたぞ。」

「何ぃっ！？」

「じゃ、じゃあ、私とヴィレイサーのキスも……。」

「あぁ、バッチリと見させてもらったぜ」

「はうぅ／／／／／／／／／／／／」

「メイヤ！？　おい、しっかりしろ！」

まさか他の人物にまで見られていたとは露ほどにも思わなかったのだろう。

メイヤはあまりの恥ずかしさから腰が抜けてしまったのか、その場に座り込んでしまった。

「もちろん、ダークがなのはのバリアジャケットを着たり、ブルズがティアナに愛を叫んだり、コルトがスバルを抱き締めたり、アル

クがはやての“お兄ちゃん”発言に現を抜かしていたのも、ちゃーんとモニターに出てたぞ。」

「私はそこまでやれって言うてないやん！」

「はやて達だけ楽しい思いをするのも狡いだろ。
だから、職員のほぼ全員で見る事になったんだよ。
さすがに、仕事がある奴は見てないけど、後で録画した物を見せるつもりだ。」

「ヴィータ、映像化は誰の発案だ？」

「ヴィヴィオだよ。
皆で楽しみたいって言うから、こうなったんだよ。」

まさかの発案者の正体に、全員が呆然とした。

「それで、ヴィータは何故登場したんだ？」

一番最初に立ち直ったアルクからの質問に、ヴィータはグラーフアイゼンを構えながら言った。

「これからアタシが待機している升目を通る奴に、ペアについての質問をする。
正解したら通れるけど、間違えたら残りの数だけ戻ってもらう。」

「3ターンの間だけですからね。」

リインが補足し、ヴィータはアルクとはやてがいるマスに立った。

「まったく、厄介な展開になってきたなぁ……。」

「メイヤ、大丈夫？」

前を見据えるヴィレイサーに代わり、フェイトがメイヤの様子を心配する。

「少しは落ち着いてきました。」

「良かった。」

「サイコロを振るぞ？」

「はい、どうぞ。」

メイヤに確認を取ってから、ヴィレイサーはサイコロを振った。

「げっ！？　8かよ……。」

出た目の数は、ゴールするにはまだ足りない上に、途中にはヴィータがいる升目がある。

最悪としか言えない数だった。

5マス進んだ所で、ヴィータが仁王立ちしている升目になった。

「間違えたら、3マス下がってもらうぜ。」

「頼むからアイゼンでぶっ叩くなよ?」

「そいつは保証できねぇな。」

ニヤリと笑い、アイゼンの尖端を向ける。

「誰がペアの問題に答える?」

「じゃあ、私が行くよ。」

誰よりも早くフェイトが挙手し、一歩前に出る。

「質問内容は、このボックスからランダムで選ぶからな。」

ヴィータがボックス内から畳まれた紙を1枚取り出し、開く。

「問題。　【ヴィレイサーはフェイトとメイヤ、どっちの事をより愛している？】」

「なんなんだよ、その質問は！」

あまりの内容に、ヴィレイサーは憤慨する。

「さぁフェイト、答えろ。」

ヴィレイサーの言葉には一切耳を貸さず、ヴィータはフェイトに答えを迫った。

「えっと……メイヤには悪いけど、ヴィレイサーは私の方をより愛してくれていると思う！」

「正解は？」

「俺が答えるのかよ！？」

「当たり前だろ。　お前以外答えを知らねぇんだから。」

「はぁ……。

残念だが俺は、フェイトとメイヤを同等に愛している。　よって不正解だ。」

「……だってよ。」

「あぅ……。」

ショックなのか、フェイトは肩を落とした。

「ほら、さっさと残りの分だけ戻れ。」

ヴィータに押され、３人は下がって行く。

「ごめんね、メイヤ……。」

「気にしないでください、フェイトさん。
“他の人より自分の方が愛してもらっている”と思うのは、変な事ではありませんから。」

「メイヤ……。」

「かく言う私も、フェイトさんより自分の方が愛されていると思っていた時がありますし」

苦笑するメイヤに、フェイトも頬を緩めた。

「我儘で悪いが、俺にはフェイトもメイヤも……どちらも必要だ。
俺は本当に、君達２人の事を愛しているからな。」

2人の方を振り返らず言われたヴィレイサーの言葉に、フェイトもメイヤも顔を綻ばせ、互いに彼の腕に抱きついた。

「一気にゴールしたいね。」

「そうだね。」

スバルの言葉に同意しつつ、コルトはサイコロを放る。

「4だね」

「…って事は、ヴィータ副隊長の1つ手前か。」

「良かった……のかな？」

「イベントの内容によるね」

ヴィータが立っている升目の1つ手前に立ち、どちらのカードを引くか考える。

「じゃあ、私の方を引いてください。」

「スバル達も、【コスプレ】が出たですよ。」

はやてに始まり、遂にはコルトとスバルもコスプレする事となった。
現れた更衣室で素早く着替え、2人とも出てきた。

「スバル達も学校の制服か。」

「ブルズとティアナの物とはまた違うな。」

「コルト、なんだか生徒会長みたいだね。」

「確かにな。」

きちっと制服を着こなしているコルトは、正に生徒の鑑として相応しいほどだった。

「そりゃ！」

次いでブルズがサイコロを投げる。

「5って事は、ヴィータ副隊長のいる升目を通るな……。」

「よう、どっちが質問に答えるか決めたか？」

「私が答えます。」

ティアナが前に出た所で、ヴィータは質問用紙を開き、内容を読み上げる。

「【ブルズは、カメラに向かってティアナへプロポーズできる。○か×か】………だ。」

「なあああぁぁぁぁぁ!?／／／／／／／／／／」

その質問内容に、ティアナは顔を赤くする。

「さぁ、答えろ」

「え、えっと………／／／／／／／／／／」

迫るヴィータに、ティアナはブルズの顔を見たり視線を逸らしたりを繰り返した。

「い、言えると思います／／／／／／／／／／」

消え入りそうな声だったが、なんとか聞き取れた。

「ブルズ、正解は？」

「当然、言えます。」

平然と言って、ブルズはカメラの前に立つ。

「ティア、残りの人生、俺と歩んで欲しい。　結婚してくれ。」

決してふざけず、ブルズは真剣な目をしていた。

「ん、進んでいいぞ。」

「どうもっす。」

真っ赤になった顔を見せぬように俯いたままのティアナの手を引いて、ヴィータがいる升目より１つ進んだ所で立ち止まった。

「トップはダーク、次いでブルズ、３番はアルクで４番目はコルト、そして最後に俺達か……。
終盤でこれは痛いが、まぁ優勝が目的じゃないし、別にいいか。」

「私は、優勝景品を欲しかったよ？」

「私もです。」

それぞれの腕に抱き着いているフェイトとメイヤは、ヴィレイサーとは違い、景品に興味があるようだ。

「それに見合う埋め合わせはちゃんとするよ。」

◆◇◆◇◆

「あんまり数が大きいと、ヴィータちゃんの所にまで戻っちゃうね。」

最もゴールに近いなのはとダークは、丁度ゴールに辿り着く数を出さなくては、ヴィータの所まで戻る可能性を危惧していた。

「それ！」

「5か……。」

ゴールまで行ったが、数が合わず、また後ろに戻された。

「チャンスカードですよ。」

「なら、これだ。」

［効果は……【バシル○ラを唱えた】……です。］

「どこの『いただきストリ○ト』だよ！？」

「バ○ルーラって何？」

［【自分以外の人を、ランダムで別の場所に飛ばす】と言う効果っす。］

［ヴィータちゃんも含めて飛ばすですよ！］

なのはとダークがバシ○ーラを唱えた結果――――

ダーク＆なのは

コルト＆スバル

アルク＆はやて

ヴィータ

ヴィレイサー＆フェイト＆メイヤ

ブルズ＆ティアナ

――――となった。

「せっかくヴィータ副隊長からの質問をクリアしたのに……。」

「もうやる気無くなりそうだ……。」

ブルズとヴィレイサーは、同時に肩を落とした。

「なのはちゃんと並んだな。」

項垂れているブルズとヴィレイサーを横目に、はやてとアルクはさっさとサイコロを投げてなのはとだーくのいる升目に並んだ。

［チャンスカードの効果は……【テレ○を唱えた】……です。］

「また移動系統かよ！」

「ヴィレイサーは、テ○ポの効果を知ってるの？」

「確か【自分以外の人を、別の人がいる場所に移動させる】だったかな？」

［そうですよ。］

またもや出た移動系統の効果により――――

ブルズ＆ティアナ

ダーク＆なのは

アルク&はやて
ヴィータ
コルト&スバル
ヴィレイサー&フェイト&メイヤ
――――となった。

「今度は最後かよ……。」
「大丈夫だよ、ヴィレイサー！　優勝は難しくても、少しは頑張ろう。」
「明るいなぁ、お前ら……。」

最後まで楽しみたいのだろう。
フェイトもメイヤも明るかった。

「イベントマスですね。」

サイコロを投げると、ヴィータの所までは行かず、イベントマスに止まった。

「ここで尻込みしてもしょうがないし、俺のカードを引いてくれ。」

［チャンス・イベントが出たですよ。
イベントは……【出された書類の、どちらかに必要事項を記入しろ】……ですね。」］

「嫌な予感しかしないのは何故だ？」

冷や汗を掻くヴィレイサーの予想を裏切らず、目の前に2種類の書類が出てきた。

“婚姻届”と“離婚届”と言う、まさかのタッグだ。

「ふざけんなよ！」

［拒否権はないのですよー。」］

喚いた所で結果は変わらず、ヴィレイサーは2つの書類を睨む。

まぁ、実用性がある方を取るのなら、無難に婚姻届を選ぶのが妥当だ。

離婚届に手をつけようものなら、背後からハラハラドキドキしながら熱い視線を浴びせてくるフェイトとメイヤにすぐさま泣かれるだろう。

やがて嘆息し、彼は婚姻届を手にした。

「今から書いていると時間かかるから、“婚姻届を持っている”で妥協してくれ。」

［分かりました。］

リインから許可がおり、とりあえず安堵の息を漏らした。

「チャンスカードはこれかな。」

［【もう1度サイコロを振る】……です。］

「6か。」

チャンスカードに従い、再度出た数だけ進んだ。

しかし、3マス進むと、ヴィータと接触した。

「誰が答える？」

「では、今度は私が答えます。」

「質問は……【ヴィレイサーはメイヤの事だけを愛している。

○か×か?】」

「ちょっと待て！　さっきと同じ質問内容じゃないか！」

「しょうがねぇだろ、コレが出ちまったんだから……。」

「誰だよ、この質問を考えたの……。」

「さぁな。
それよりメイヤ、答えろ。」

「えっと……。
ヴィレイサーさんは、私だけを愛している！……と、答えたいところですが、それは無いですね。
答えは、×です。」

「ヴィレイサー。」

「あぁ、×だよ。」

「ん、答えが合致したから進んでいいぜ。」

残った3マスを進み、チャンスカードを引く升目に止まったので、再びチャンスカードを引く。

「【メダパ○を唱えた】……です。」

「今度はメ○パニかよ！」

「どんな効果なの？」

「次の自分の番まで、サイコロは1しか出さないんだよ。」

「『いただき〇トリート』では確かにそうですけど、この双六では相手を指定できるですよ。」

「じゃあ……。」

相手を指定する前に、ヴィレイサーはある事が気になり、リインに聞く。

「なぁ、ヴィータの質問って、ヴィータがいるマスより先に進む場合の時だけ、質問されるんだよな？」

「そうですよ。」

「じゃあ、悪いがコルトとスバルを指定する。」

「ど、どうして僕達なんですか！？」

「いや、これ以上は被害者を出したくないだけだ。
無論、コルトもスバルも、ヴィータからの質問に答えたいのなら、別の奴にするが？」

「「答えたくないです」」

「だよな……。」

口を揃えて質問を回避したいと言った2人に苦笑いし、改めてコルトとスバルのチームを指定した。

「良かった……。
　1を出す以外に、ヴィータ副隊長からの質問は回避出来なかったからね。」

「そうだね。」

2人が今いるのは、ヴィータがいるマスと隣接しているマスだったのだ。

「じゃあ、一歩。」

ヴィータが呼び出されたマスに着き、チャンスカードを引いた。

「【ルー○を唱えた】……です。」

「またも移動系統かよ……。」

「【トップにいる人の所に移動する】……と言う効果です。」

「良かった」

トップに並び、コルトとスバルは安堵した。

「これで上がれればいいけど……。」

サイコロを握り、ブルズはゴールを見る。

「それ！」

ティアナがサイコロを投げる。

「7かよ……。」

ブルズの溜息に、ティアナも苦笑する。

「でも、ヴィータ副隊長の所まで戻らないんだから、それは安心じゃない？」

「それもそうだな。」

「イベントマスですね。」

2人が止まったのは、イベントが行われるマスだった。

「どっちがやる？」

「今までアンタがやってきたし、ここは私がやるわ。」

「えっと……【AかBの飲み物をどちらか飲む】……です！」

「また選択……。
ブルズ、アンタならAとBのどっちを選ぶ？」

「さっきはAだったし、今度はBかな。」

「それじゃあ、Bで。」

「了解ですぅ。」

ティアナの指定に沿うように、Bの飲み物が出されてきた。

「これ……ジュース？」

「ん？　ちょっ！？　ティア、それは飲まな……「ふにゃ～」……
……またかよ！」

「ブルズ～♪」

「お、おい！／／／／／／／／／／／／／／／」

ティアナが飲んだのは、クリスマス会でも口にしたお酒だった。

かなり高いアルコール度数を誇っているそれを飲み、酔わない者は数少ないだろう。

「ごめんね、ブルズ。

私、これからはもーっと素直になって、ブルズを愛してあげるぅ〜。」

「お、おう／／／／／／／／／／／／／」

抱きついてくるティアナをどうする事も出来ず、更には普段なら滅多に言わないであろう言葉に、ブルズは顔を真っ赤にして行く。

「さっきまであれだけ自分から愛を叫んでいたのに、ティアナからには滅法弱いな。」

「まぁ、普段と違えば違うほど、相手が魅力的に感じるからだろうな。」

「ダーク、さっさと投げちまえ。

アイツらの番はもう終わってるし。」

「そうだな。」

ヴィレイサーに促され、ダークはサイコロを投げた。

「やった！　６が出た！」

「…って事は、俺達が最初に上がりか！」

［ダークさん、なのはさん、優勝おめでとうございます！
では、景品をお受け取りください！］

リインからは賞賛が、そしてゴールに置かれた景品が贈られる。

「ふぇ？」

「こ、コレは……。」

［優勝賞品は、ベビー用品ですよ♪］

「ふぇぇぇぇ！？」

「何だ、お前らにピッタリじゃないか。」

「まったくだな。」

景品が大したものではないと分かり、ヴィレイサーを始め、アルクやコルト達はさっさと会場を出て行った。

◆◇◆◇◆

「最後の最後で白けたなぁ……。」

「でも、それまでは面白かったから良しとしようよ。」

「そうですよ。」

「まぁ、お前達が楽しめたのなら俺はいいんだけど……。って言うか、お前らは自室に戻らないのか？」

足を止めて、ついてくるフェイトとメイヤを振り返る。

「え？」

「そのままの格好でうろつくのか……って事だよ。」

「「あ……。」」

ヴィレイサーに指摘されて、２人は自分達がメイド服を着用してい

た事を思い出す。

今はロングコートと上着をそれぞれ羽織っているのでそこまで目立たないが、さすがにそのままという訳にもいかない。

「俺は自室に戻って着替えるけど………。」

「わ、私達も、そこで着替えていいかな？／／／／／／／／／／／」

「はぁ！？　本気で言ってんのかよ………。」

「は、はい／／／／／／／／／／」

予てからそう計画していたのか、フェイトもメイヤも同じ意見を出してきた。

「まぁ、好きにしろよ。」

断る理由が見つからず、先に歩き出し、自室に入る。

「ふぅ………。」

疲労した身体を休めるようにベッドに腰掛けると、フェイトとメイヤが借りていた上着とロングコートを渡してくれた。

「ありがとう。」

「助かりました。」

「あぁ。」

短く答え、２つとも適当な所に放り投げる。

「着替えるんなら、別室にしてくれよ。」

念の為にと釘を刺すが、フェイトもメイヤも、何故か別室には行こうとせず、フェイトはヴィレイサーの左側に仰向けになり、メイヤはヴィレイサーの膝の上に頭を乗せる。

「こうしてても、いいかな？」

「私達も、疲れちゃって……。」

「好きにしろ。」

微笑し、ゆっくりと目を閉じた２人の髪を、撫でるように指で梳く。

「雨の日も、たまには悪くないな。」

背後にある窓を打ち付ける雨が奏でる音を聞きながら、彼は呟いた。

ヴィレイサー
「おい、なんだよあの質問は……。」

鮮血
「いや、他に思い付かなかったから。」

ヴィレイサー
「だからって……。
他になかったのかよ!?」

鮮血
「メイヤの方への質問は、当初【ヴィレイサーとフェイトは既に≪バキューン≫をした。〇か×か?】って言うのがあったよw」

ヴィレイサー
「それは止めてくれ……。」

鮮血
「まぁ、さすがに僕もマズイと思ったし、イツキ先生からもそう言われたから止めたけど。」

ヴィレイサー
「ところで、メイヤとフェイトのあの服はお前の好みか?」

鮮血
「違うからね!?」

ヴィレイサー
「イツキ先生も、きっとお前の好みだと思ってるよ。」

鮮血
「それは困ります！」

ヴィレイサー
「認めちまえよ。」

鮮血
「違うっての！
アレは君の趣味だから！」

ヴィレイサー
「俺だって違う！」

鮮血
「ちなみに、この終わり方、実は裏話が。」

ヴィレイサー
「は？」

鮮血
「あの後、君の部屋ではノクターン行きになる事が行われていたとかいなかったとか……。」

ヴィレイサー
「なっ！？」

鮮血

「どうなの？」

ヴィレイサー
「そ、それより、今回はダークがギンガナム化してたな！」

鮮血
「話を逸らすの、下手だね。」

ヴィレイサー
「ウグッ！」

鮮血
「ちなみに、今回もテイルズネタがありました。
今回は分かり易いですのでノーヒントです。」

ヴィレイサー
（これ以上追及されるのは御免だし、逃げよう！）

鮮血
「逃げるのは自由だけど、逃げ切れると思う？」

ヴィレイサー
「思えない……。」

鮮血
「観念して言っちゃいなよｗｗｗ」

ヴィレイサー
「それより、次回はいい加減本編なんだろうな？」

鮮血
「え……？
いや、どうだろう？（汗）」

ヴィレイサー
「前話からどれだけ空いてると思ってんだよ……。」

鮮血
「す、すみません……。
でも、君を弄るのは楽しいんだもんw
それに、イチャイチャさせるのも。」

ヴィレイサー
「どういう理由だよ……。」

鮮血
「ネタがあったら、教えてください。」

ヴィレイサー
「まだやるのかよ……。」

鮮血
「次回もお楽しみに～。」

番外編　ＮＧ集　ＣＨＡＰＴＥＲ－０１（前書き）

鮮血
「昨日の暗さなんて吹っ飛ばせ！な、空気破壊のＮＧ集です。」

フェイト
「見事に空気破壊だよね……。」

鮮血
「しょうがない。
投稿しちゃったんだから。」

フェイト
「もっと考えた方が良かったと思うけど……。」

鮮血
「で、ＮＧ集ですが、
ネタをくださったムーギネーター先生と、マグネス先生。
御２人のは、各話ずつやって参ります故、しばらくお待ちください。」

フェイト
「それでは、決して面白くないＮＧ集をどうぞ。」

番外編　NG集　CHAPTER－01

番外編　NG集　CHAPTER－01

第1話　「機動六課へ」　なのはとの再会する箇所。

「ヴィレくん、久しぶり～。」

六課の隊舎に到着し、出迎えたなのはを掌底で突き飛ばす。

「にゃわ!?」

「一々来るな。　鬱陶しい。」

ドンガラガッシャーン！！！

と、突き飛ばされたなのはは、見事に用具箱に突っ込んだ。

「ヴィ、ヴィレ兄！？」

「……まぁ、問題無いだろ。」

「今の間はなんですか！？」

「気にするな。」

「そうだよ、気にしなくていいんだよ？」

「「なのはさん！？」」

声がした方を見ると、まったく傷を負っていないなのはがいた。

※なのはが天然キャラになる上に、まったく傷を負わない最強キャラになるのでボツ。

第2話　「出会いと再会」　はやてとなのはに今までの経緯を話す箇所

「いや～、2年ぶりやな。
今までどうしてたん？」

「ん？　あぁ……。」

～説明中～

「と言う訳だ。」

「なるほどな。」

ヴィレイサーの話に、はやてとなのはは納得した。

「はやて、入るよ？」

そこへ、フェイトが顔を出した。

「ヴィレイサー？」

「よう。」

「久しぶり。
今まで、どうしていたの？」

「ん？　えっと……。」

～説明中～

「……って訳だ。」

「そうなんだぁ。」

「はやて～、用件って何だ？」

「あ、ヴィータ。」

「あ？　何でヴィレイサーがいるんだ？
つーかお前、今まで連絡寄越さずに何やってたんだよ？」

「あぁ……。」

～説明中～

「なるほどな。」

「主はやて、お呼びでしょうか？」

「よう、シグナム。」

「む、ヴィレイサー？
久しいな。　今まで何をしていた？」

「実はな……。」

～説明中～

「……って訳だ。」

「そうだったのか。」

「……なぁ、ヴィレくん？」

「何だ？」

「繰り返し説明するんは、疲れへんか？」

「だったら人を寄越すなよ！」

※はやてが面白がって延々と人を呼び続けるのでボツ。

第2話　「出会いと再会」　エリオと一緒に、自室に入った箇所。

「お久しぶりですね、ヴィレイサーさん。」

「そうだな、エリオ。」

ヴィレイサーは部屋に入り、エリオに言われる。

「フェイトからお前の事を紹介されて、色々と話したのが……。」

「2年前ですね。」

ヴィレイサーの代わりにエリオが答えた。

「あの時は平和だったなぁ……。」

「そうですねぇ……。
ヴィレイサーさんが一緒にいるお陰で、フェイトさんに誘われる事も減りましたし。」

「あぁ、お前が必死に風呂を断るのは今でも覚えているよ。
物凄く必死だったからな……。」

「本当に、ヴィレイサーさんには感謝していますよ。」

「まぁ、今後も数少ない男同士、よろしくな。」

「はい。」

※過去の暴露話が延々と続くのでボツ。

「それにしても、ヴィレイサーは2年前と変わらないね。
髪が伸びたぐらいだし。」

「最終決戦でエクシーガにバッサリと切られて以降、ほっといたんだけど、
中々あの頃ほどの長さには戻らねぇな。
だが、お前は少し変わったな。」

「そ、そうかな？
あんまり変わってないと思うけど……。」

ヴィレイサーに言われ、フェイトは首を傾げる。

「自分じゃあ気付かないもんだ。
いい女になったと思うぜ、フェイト。」

そう言って、ヴィレイサーはフェイトの頬をクイッと自分の方に向ける。

「あ、ありがとう……／／／／／／／／／／／／」

だが、フェイトは恥ずかしさからか視線を逸らす。

「他の奴には勿体ないぐらい、いい女だ。」

「ん……！？」

不意に唇を重ねられ、フェイトは驚く。

「ん、はぁ……。」

「ダ……メだよ、ヴィレ……イサー……。」

「なら、拒めばいいだろ？」

「ん、意地悪……。」

「フェイト……。」

「ヴィレイサー……。」

※あり得ない&ノクターン行きになるのでボツ。

第3話　「模擬戦　動き出す者」　ティアナがヴィレイサーに付き添う箇所。

「ヴィレイサーさんって、2年前は何をしていたんですか？」

「レーベ所属の扱いとして創世の書事件に関わっていたよ。」

「もしかして、最後の決戦を行ったのって……。」

「俺だ。」

「スゴイですね。
私は、凡人で……。」

「そんな事無いと思うがな。
ただの凡人を、なのはが拾うとは思えんがな。」

「そうですね。
私、以前自分の道に迷って、なのはさんに怒られちゃったんです。
でも、だからこそ今の自分を見つけられる事ができたんです。」

「そうなのか。
けどあいつの事だ。
どうせ不器用な事でしかお前を導けなかっただろ。」

「アハハ……。
確かにそういう感じでしたけど、別に良かったと思います。
その所為ですれ違いはありましたけど、より理解できたって言うか……。」

「それは良かったな。
まぁ、俺はお前となのはの間に何があったかは知らんが、
お前が選んだ事を、しっかりと貫けばいい。」

「はい。」

「お前はお前のペースで、頑張って行けばいい。

俺も、お前と一緒に頑張って行くから。」

「ヴィレイサーさん……。」

「ティアナ……。」

「ん……。」

（あの2人、病室で何やってんのよおおおぉぉぉぉ！！！）

（落ち着け、シャマル！）

口付けをかわすティアナとヴィレイサーを、
扉の隙間から盗み見ていたシャマルとシグナムは、顔を赤くしていた。

※ティアナＥＮＤ一直線＆ヴィレイサーがフラグマシーンになるのでボツ。

番外編　NG集　CHAPTER－01（後書き）

鮮血
「まさかのフェイト&ヴィレイサーの件………。
絶対に無いわー………。」

フェイト
「／／／／／／／／／／／／／」

鮮血
「ありゃりゃ、真っ赤だね。」

フェイト
「当たり前だよ!?／／／／／／／／／／／／／
あぁ、ヴィレイサーったらダメだよ、そんな事／／／／／／／／
／／／」

鮮血
「何を想像しているのかは聞かないけど、
これじゃあ進行できんな。
ってなわけでティアナ、よろしく!」

ティアナ
「何でよりにもよって私なのよ!?」

鮮血
「え?
最後に出てきたから………。」

ティアナ
「だから私は出たくないのよ！／／／／／／／／／／／／」

鮮血
「いや、でも………アレよりはまともに会話できるでしょ？」

フェイト（↑アレ
「そ、そんなヴィレイサー、激しい………／／／／／／／／／／／／」

ティアナ
「フェイトさん、キャラ崩壊してない？」

鮮血
「してるね………(汗」

ティアナ
「絶対にあり得ないものね、あんな展開。」

鮮血
「逆なら、以前天照大神先生からもらった薬によって、ありそうな事はあったけど………。まぁ、どっちみち、ヴィレイサーなら完全回避だね！」

ティアナ
「でしょうね………。」

鮮血
「ヴィレイサー×ティアナなら、まだあり得（ｒｙ」

ティアナ
「撃つわよ………。」

鮮血
「ごめんなさい！」

ティアナ
「今後も、突発的にＮＧ集があるかもしれないので、よかったらどうぞ。」

鮮血
「ギャグセンスは求めないでください。僕にはそういうのは皆無なので。」

フェイト
「次回もお楽しみに／／／／／／／／／／」

鮮血・ティアナ
「「割と正常に戻った！？」」

フェイト
「まぁ、あれだけ時間をもらえれば………。」

番外編　NG集　CHAPTER－02（前書き）

鮮血
「レポートを書かずにやってしまいましたー！　な、NG集です。」

ヴィレイサー
「いや、かなりマズイだろ……。」

鮮血
「今後、更新が遅くなるかもしれません……。」

ヴィレイサー
「今からレポートをやれよ！」

鮮血
「それでは、NG集をどうぞ。
今回は、マグネス先生から頂いたネタがありますのでお楽しみにw」

番外編　ＮＧ集　ＣＨＡＰＴＥＲ－０２

◆第４話　「七星　風と雨」　冒頭の箇所。

ヴィレイサーが機動六課に傭兵として雇われてから数日後。
フォワード陣のテスト結果が今朝発表された。
「全員……不合格だよ♪」
「「早っ！？　って、不合格！？」」
なのはの即答に、スバルとティアナは驚く。
「そうだよ？
だからね……少し……。」
ゆっくりとなのはが、体育座しているフォワード陣へと歩み寄る。
その隣では、フェイトとヴィータが竦み上がっていた。
「……ほんの少しだけ……ＯＨＡＮＡＳＨＩしようか。」

その後、訓練場に桃色の光芒が幾度となく走ったと言う……。

※出オチになるのでボツ。

◆マグネス先生からの投稿。
第４話「七星　風と雨」ヴィレイサーが任務に行こうとする箇所。

「ポイント、頭に叩き込んであるよな、エターナル？」

［……。］

ヴィレイサーの問いにしかし、エターナルは何も返さない。

「……何故黙る？」

［申し訳ありません。］

「忘れたのか……。」

［冗談ですよ（笑）］

※エターナルのキャラがおかしくなりそうなのでＮＧ。

◆第４話　「七星　風と雨」　ニクスとヴァンの会話。

［ヴァン、今いいかな？］

「ニクス？
何かしら？」

モニターに映し出されたニクスを見ていたのは、
白を基調としたバリアジャケットを着た、若い女性だった。

［今そっちにヴィレイサーが向かってるんだ。
恐らく君を探しているんだろうね。］

「ヴィレイサーが……。」

［殺さずに、だけど君も殺されないように頼むよ。］

「わかったわ。」

通信を終え、ヴァンは周囲を見回す。

「まだ来ないのかしら。」

ヴィレイサーに会えるのが楽しみなのか、ヴァンは笑っていた。

「はぁ……早く来て私を甚振って！
貴方のその攻撃が、私に悦楽を与えるのだから！」

そして、脳内では危険極まりない想像が駆け廻っていた。

※ヴァンが変態キャラになるのでボツ。

◆第４話　「七星　風と雨」　ヴィレイサーとヴァンの戦闘。

「貫け！　光龍穿破！」

ジャベリン形態のエターナルを思い切り投げる。

完璧に捉えた。

そう思った瞬間、ヴァンの目の前の空間が歪み、１人の男が現れた。

男はすぐさま膝にある剣の柄を引き抜き、魔力刃を発生させる。

「レイニー・デリート（雨による消去）。」

ジャベリンに突如雨が降り、それからは煙が出てきた。

「酸性雨による破壊！？
エターナルーーーーーー！！！」

※エターナル・デイブレイクが破壊され、以降の戦闘がままならなくなるのでボツ。

◆第５話　「七星　雹と蜃気楼」　アインヘリアル破壊作業

「アインヘリアル、補足。」

黒と紫を基調としたバリアジャケットを着たヘイルが、
はるか遠くから一点を見詰めて言った。

それを隣で聞いた男は笑った。

「いつも通り白兵戦は俺がやる。
お前はあの砲台を頼むぞ。」

「了解だ、ミラージュ。」

ミラージュは紫色を主とし、空いた部分に白を加えたバリアジャケットを翻し、
砲台をヘイルに任せて先行する。

「よし。　砲身準備。」

背中に背負っている2種類の砲身を脇の下から通して前面に展開する。

片方は散弾砲、もう片方は収束砲のようだ。

その2つを連結し、長距離用の収束砲にする。

「ターゲットに動きなし。
連射準備。」

的確に自分のする事を口にしていく。

「3発連射準備完了。
角度問題無し。　ＩＳ、ヘイル・シューティング（雹の銃撃）。」

カートリッジを1発だけ使い、魔力チャージを即座に終わらせる。

「ファーストシューティング、発射。」

引き金を躊躇無く引く。

「セカンド・シューティング。」

大きな爆発音をあげている箇所に向けて、もう1度引き金を引く。

「サード・シューティング。」

「グアアアアアァァァァァ！？」

3射が連続して当てられた“ミラージュの悲鳴が轟いた”。

「アハハハハハ！！！」

その様子を見て、ヘイルは笑っていた。

※ヘイルがミラージュを殺してしまうのでボツ。

番外編　NG集　CHAPTER－02（後書き）

鮮血
「なんだか最近、またギャグ系統のコラボをやりたくなってきた！」

ヴィレイサー
「何を言ってんだよ、お前は……。」

鮮血
「いや～、弄るのが楽しいんだもんw」

ヴィレイサー
「誰をだよ……。」

鮮血
「イツキ先生の所の3人（コルト、ブルズ、ダーク）だよ。」

ヴィレイサー
「ネタは？」

鮮血
「無いね……。」

ヴィレイサー
「だったら言うなよ！」

特別番外編　『魔法戦記リリカルラグナレク』（前書き）

特別番外編として、なのはＳｔＳ－Ｊの続編として考えている、『魔法戦記リリカルラグナレク』のプロローグを掲載します。

本格的な連載はまだまだ先になりそうですが、よろしくお願い致します。

特別番外編　『魔法戦記リリカルラグナレク』

魔法戦記リリカルラグナレク

PROLOGUE

薄暗い研究所の地下に、何人かの研究者がいた。

硝子戸の向こうには、金の髪をした少女が震えて蹲っていた。

彼女の目の前には、真っ赤に染まった“何か”が転がっていた。

「ふむ……。

やはり“純粋型”には敵わないか。」

研究員と共にいた男が、腕を組んだままそう言った。

「次のテストだ。」

「はい。」

震えている少女など目にもくれず、次のテストを行うように命令した。

◆◇◆◇◆

少女の目の前にある扉が、静かに開かれた。

「ぁ……。」

そこから出てきたのは、様々な武器を手に持った少年少女達がいた。

[“純粋型”、もう1度殲滅しろ。]

「できません！」

スピーカーから聞こえてくる無機質な声に、少女は涙を浮かべて必死に訴える。

[やらなければお前が死ぬぞ。]

「いや、死にたくない……。」

頭を抱え、少女はガタガタと震える。

「……。」

声は聞こえなくなったが、呆れているのか、溜息をつく音が聞こえた。

「強制発動させろ。」

「ッ！」

その言葉に、少女はハッと顔を上げて、少年少女達の方を見る。

彼女の目の前では、血走った目を不気味に動かす子供たちがいた。

身体を炎で包んだり、足元を凍らせたり……。

様々な力が、研究員と共にいる男の命令で発動された。

「あ……あぁ……。」

尻込みするように、奥へ奥へと逃げるが、出口は子供達が入ってきた場所しかない。

追いこまれた少女は、ギュッと目を閉じる。

だが、それで攻撃が止まるはずも無く、次の瞬間には少女に数多くの攻撃が放たれた。

熱が近付いてくるのを肌で感じ、少女は強く思った。

『死にたくない』

その願いは聞き届けられた。

少女の身体に、黒い装甲が加えられる。

両肩、膝下、肘下、腰回り、胸部と腹部。

黒い装甲とバリアジャケットの間からは、

黒く変色した魔力が、微粒子のように絶えず漏れていた。

目は虚ろで、その顔からは感情が消え去っていた。

彼女は立ち上がり様に、迫ってきた熱線を跳躍してかわす。

両手の甲で空を薙ぐと、魔力刃が発生した。

腕をダランと下げた状態で、地面に届くほどの長さだった。

空中にいる少女に、誰もが照準を定める。

“生き残る為”に――――。

そして、“殺す為”に――――。

だが、少女には一切の攻撃が当たらない。

紙一重でかわし、或いは最低限のシールドを展開して防ぐ。

それでも、地上にいる子供達は攻撃の手を緩めなかった。

『サンダー・リフレクト。』

少女の口から、機械交じりの声が発せられる。

円形の魔法陣が少女の前に展開され、全ての砲撃を防ぐ。

そしてその砲撃は、“雷を纏って砲撃を放った者に真っ直ぐに返された。”

その展開に驚き、返された砲撃をかわせた者は数少なかった。

砲撃に貫かれ、悲鳴を上げる暇も無く絶命した。
攻撃の手が緩み、少女は余裕で地上に降り立つ。
『ソニックムーブ。』
そして、すぐさまそこから離脱するように光速で離れる。
少女が先程までいた場所には、複数の武器が振り下ろされた。
先にそれらを予想して逃げていた少女に、それがもちろん当たるはずも無く、
武器はコンクリートの冷たい床に罅を入れただけだった。
ハッとして、残った子供達が少女の去った軌跡を追った。
そう思った刹那、“子供達の手足が斬り飛ばされた。”
動けなくなった子供達を一瞥もせず、硝子戸に突進する。
ドォォォォン！
巨大な音が響き渡り、研究所全体を振動させる。
だが、硝子戸には罅１つ入らなかった。

虚ろな瞳で硝子戸を叩く姿に、男は嗤っていた。

［滑稽だな、“純粋型。”］

『“主の為”に、貴方を殺させてください。』

［さすがは“純粋型”だ。
主……いや、“生みの親”への忠誠心は高いな。］

男は冷静にそれだけ言った。

やがて少女は、力尽きたのかグラリと体勢を崩した。

地に落下し、彼女は目を閉じた。

黒い装甲は消え去り、少女は布の襤褸切れを纏っていた。

まともに服を着させてもらっていないのだろう。

彼女の手には、金色の四角いデバイスが握られていた。

［保管室に入れておけ。］

［分かりました。］

男の言葉に、研究員たちは頷いた。

◆◇◆◇◆

（また……やっちゃった……。）

カプセルの中にいる少女は、目を瞑ったままぼんやりと考えていた。

［フォルテ……ごめんね。］

［サーの所為ではありません。］

念話で傍にある四角いデバイスに謝ると、
デバイス――――フォルテストラはそれを否定した。

［私の方こそ申し訳ありません。
サーの気持ちを封じてしまう羽目になっていますし……。］

［ううん。
その方が、私は嬉しいよ。
少しでも、あの子達を殺しているっていう感覚が遠退くのなら……。］

少女は、自分を抱き締めるようにギュッと手を回した。

（誰か……助けてください……。）

少女の双眸から、一筋の涙が零れた。

特別番外編　『魔法戦記リリカルラグナレク』（後書き）

鮮血
「全然、明るい場面なんてありません。
むしろ血みどろという……。」

アルティス
「ダメじゃないですか……。」

鮮血
「まぁ、君がラジオとかの性格になるには、まだ先になりますが。
それではここで、この作品の事を少し述べましょう。」

タイトル　『魔法戦記リリカルラグナレク』

主人公　アルティス

性別　女

年齢　１２歳

瞳は紫で、金の髪の長さは腰の半分より手前。

髪型は、戦闘時以外はポニーテール。

戦闘時は、ツインテールにしている。

デバイス　フォルテストラ

時間軸　なのはＳｔＳの３年後

使用する題材　北欧神話

鮮血

「こんな感じです。」

アルティス

「明日の２２時には、なのはＳｔＳ－Ｊの本編を更新します。」

鮮血

「お楽しみに～。」

1周年記念　IF　ENDING　アインハルト編（一部分）（前書き）

鮮血
「以前活動報告でお話しました通り、サイト登録1周年を記念して、
IF　ENDINGのアインハルト編の一部分を掲載したいと思
います。」

ヴィレイサー
「それ以外に何かなかったのかよ……。」

鮮血
「あるよ？
他の人のIF　ENDINGが。」

ヴィレイサー
「IF　ENDING以外は！？」

鮮血
「本編じゃつまんないでしょ。」

ヴィレイサー
「じゃあNG集にしろよ……。」

鮮血
「その手があったか！」

ヴィレイサー
「忘れてたのかよ！」

鮮血
「うん、真面目に今思い出したw」

ヴィレイサー
「はぁ……。」

鮮血
「えっと、今回はカルナージでの合宿の際に行った、
チーム対抗模擬戦を開始する所から始まります。
赤青、両方の混同チームと、ヴィレイサー&メガーヌさんの姉弟
チームでまた戦います。」

ヴィレイサー
「ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧなのに恋愛の要素皆無かよ……。」

鮮血
「ちょこっと空手の要素が入っていますので、予めご了承ください。
それでは、どうぞ。」

1周年記念　IF　ENDING　アインハルト編（一部分）

「さぁて、始まったみたいね。」

メガーヌがモニターを見ながら、少し興奮している。

彼女の隣には、聖王教会から来ていたセインとヴィレイサーもいる。

今、3人が見ているモニターでは、練習会が行われていた。

赤と青の2チームに別れ、戦うのだ。

赤チームには、フェイト、ティアナ、スバル、アインハルト、キャロ、コロナ。

青チームは、エリオ、なのは、ノーヴェ、ヴィヴィオ、ルーテシア、リオ。

という具合に別れている。

「ん、ヴィヴィオが動くな。」

「ホントだ。」

ヴィレイサーの言った通り、ヴィヴィオがソニックシューターを発動させる。

それに対し、対峙していたアインハルトは構えを変更した。

［ソニックシューター……ファイア！］

魔力弾を拳と共に前面に打ち出し、同時にヴィヴィオも走り出す。

アインハルトに着弾した隙に、回りこむ事が狙いだろう。

しかし、有ろう事かアインハルトはそれらを全て受け止めた。

［いっ！？］

［覇王流……旋衝破！］

そして、受け止めたそれをヴィヴィオに向かって“返した”。

「今のって、反射技（リフレクト）？」

セインの質問に、ヴィレイサーは首を横に振った。

「いや、反射（リフレクト）でも吸収魔法でも無いな。

“受け止めて投げ返した”んだろ。」

「そ、そんな事出来るの？」

「相手の流れを自分に利用するとかなら、俺が使っている武術でもあるさ。」

「それに、真正古代（エンシェント）ベルカの術者なら、理論上は可能よ。」

補足するように、メガーヌもそう言った。

「けど、それはあくまで十二分に鍛錬を積めば……の話だ。」

「えぇ……。
あの年齢で、あの技術……一体どれだけ苛烈な修練を……？」

「そればっかりは、当人に聞かないと分からないね。」

腕を組んだまま、ヴィレイサーはモニターを見ていた。

「戦ってみたい？」

唐突に、メガーヌが聞いてきた。

「どうして？」

「なんだかウズウズしているみたいだったから。」

「子供じゃないんだから……。」

「あら、私からしたらいつまでも子供よ。
それに、子供の頃から隠し事が下手ね。」

「まぁ、余裕があれば戦いたいとは思うけど。」

「それなら、いい考えがあるわ。」

メガーヌが、ヴィレイサーに耳打ちする。

「さすがにそれは厳しくない？」

「いいじゃない。
少しはスリルがあった方が楽しいでしょ？」

メガーヌのその顔は、楽しそうだった。

親子揃って、楽しい事を懸命に考えると表情に表れる所は相変わらずだった。

◆◇◆◇◆

やがて練習会が終了し、各々バリアジャケットを解除する。

（合宿2日目のメインイベントである、合同陸戦試合はこれで終了……。
本当は、もっと戦いたかったけど……。）

「残念そうな顔をしてどうした？」

「あ……。」

ポンと頭に手を置かれ、アインハルトは声のした方に視線を巡らせる。

「ヴィレイサーさん。」

「顔に出ていたぞ。」

「まぁ、確かにもっと戦いたかったですけど……。」

「まだ、誰もこれだけだなんて言って無いだろ。」

「え？」

ヴィレイサーの言葉に、アインハルトは目を丸くする。

「ノーヴェ、少し話があるんだがいいか？」

「何？」

「この後、2戦残っているだろ？
それを1戦に変えて、俺と姉さん、2人のチームと、お前達全員の合同チームで勝負しないか？」

「兄貴とメガーヌさんのコンビか……。
それだけでも結構きつそうだな。」

「ちゃんと手は抜くさ。
それに、そっちの人数が減る毎に、俺にリミッターをかける。」

「んー、じゃあ皆に聞いてみるよ。」

「よろしくな。」

ノーヴェはヴィレイサーからの提案を知らせるべく、全員を招集する。

「アインハルト。」
「はい？」
それに向かおうとするアインハルトを呼び止め、ヴィレイサーは笑った。
「全力で来い。」
「……はい！」
グッと拳を握りしめ、アインハルトは答えた。

◆◇◆◇◆

「じゃあ、確認するわね。
ヴィレイサーへのリミッターは、初期は空中にいる時間制限。
これは、向こうが陸戦組が多いから。
次に、１２人から２人ずつ減っていく毎に、リミッターをかけるわ。
使用できる魔法も、かなり限られてくるから、ちゃんと頭に入れてね？」
「知らせてくれるのなら、それだけで充分助かるよ。」
左手を閉じたり開いたりしながら、ヴィレイサーはメガーヌの説明

に耳を傾ける。

「空間技は、ナイトメアゲートと冥闇月閃破は全面禁止よ。」

「分かってるよ。」

「OK～。
それじゃあ、なのはちゃん達にも連絡するわよ。」

［メガーヌさん。］

「こっちは準備完了したわ。」

［分かりました。］

「ヴィレイサー、無茶しないようにね。」

「それはこっちの台詞だよ。
姉さんこそ、アクスレピオスはルーテシアの方にあるんだから、無理はしないでよ。」

「ふふっ、ありがとうね。」

メガーヌはルーテシアにデバイスを託している為に、まともな補助は出来ない。

［それじゃあ、2チームとも準備いいかな?］

空中にモニターが出現し、セインが確認してくる。

［レディー……ゴー！］

その合図と共に、ヴィレイサーはビルの縁から空中に身を躍らせる。

空戦に切り替える訳では無いので、制限時間にはカウントされない。

（まずは向こうの陣形をぶち壊す。）

［ＤＡＷＮ・ＬＵＣＩＦＥＲ．］

ヴィーナスシステムを即座に起動させ、両手にバスターライフルを構える。

そして、片方を真正面にある建物に向け、もう片方を背後から迫る敵への牽制ように準備する。

建物に向けた方の引き金を引き、壁に盛大に穴を開ける。

「変化無しか。」

舌打ちし、ライフルとヴィーナスシステムを解除する。

その刹那の隙を狙い、フェイトとエリオが持ち前のスピードを活かし、肉薄してきた。

振り下ろされる刃に、しかしヴィレイサーは余裕の笑みを見せる。

「甘い！」

左右から来た刃を、予めナックルを嵌めていた手で受け止める。

「クッ！」

（レゾナンスで壊す！）

苦しい顔を見せた2人を一瞥し、ＩＳを使って得物を壊そうとする。

だが、それよりも早く2人は動いた。

「「サンダーレイジ！」」

フェイトとエリオの声が重なり、放電が起こる。

「グッ！」

即座に得物を離し、ヴィレイサーはバッとその場から離れる。

しかし、そんなヴィレイサーの背後から、今度はスバルとノーヴェが走って来た。

「リフレクションアーマー！」

それを見て、メガーヌはヴィレイサーに補助魔法をかける。

［一定時間は、魔力弾は効かないからね。］

［ありがとう。］

念話でそれの効力を聞き、ヴィレイサーはスバルの方に向かう。

「行くよ、ヴィレ兄！」

「来い、スバル！」

その言葉を皮切りに、２人は拳を繰り出す。

「私を忘れんなよ、兄貴！」

２人の攻防に、ノーヴェも加わる。

好機だからだろう。

幸い、これ以上の混戦は避けたいからか、エリオもフェイトも、それ以外の者もこの戦闘には加わろうとはしてこなかった。

「マッハキャリバー！」

「ジェットエッジ！」

「エターナル！」

［［［Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］］］

３人が、ほぼ同時にカートリッジを使う。

「ディバインバスター！」

「聖漣光迅！」

スバルがヴィレイサー衝撃波をぶつけ合い、その隙にノーヴェはエ

アライナーを駆使してヴィレイサーの背後に回り込む。

やがて互いの衝撃波が相殺された所で、スバルはヴィレイサーから距離を取る。

「チッ！」

その後を追おうとする前に、ノーヴェが背後から思い切り跳躍してきた。

「リボルバースパイク！」

ヴィレイサーに向かって、回し蹴りが繰り出される。

急いで腕を顔の横に構え、それを防御する。

だが、カートリッジと速さを加えられた事もあり、ヴィレイサーの防御が崩される。

「よし！」

蹴った勢いで背中を向けて回転しつつあるヴィレイサーに、ノーヴェは追撃しようと更に肉薄した。

拳が彼の後頭部を捉える！

そう思った瞬間、“ヴィレイサーの手刀がノーヴェの顔面に当たった”。

「イッテェ！？」

その痛みに顔を歪め、ノーヴェの攻撃の意思が削がれる。
その隙に、ヴィレイサーの蹴りが彼女の腹に入った。
「ガッ!?」
防御が間に合わず、ノーヴェは吹っ飛ぶ。
ヴィレイサーは、ノーヴェに蹴られた時に喰らった向こうからのエネルギーを、自分が回転するエネルギーに加算し、上がった回転力で手刀を打ち込んだのだ。
「ノーヴェ!」
その光景を見て、離れていたスバルは、急いで引き返そうとした。
だが――――――
「ウワッ!?」
――――――それよりも早く、彼女をバインドが捕まえた。
「はい、スバルちゃん捕獲。」
「メ、メガーヌさん!?」
「あら。」
驚くスバルには何も言わず、メガーヌはその場を離れる。

その瞬間、先程まで彼女がいた地点に数多の魔力弾が降り注いだ。
ティアナとなのはのコンビによる魔力弾だ。
「ヴィレイサー！」
［分かってるよ。］
互いに、近くの建物内に避難する。
［エリオ！　ノーヴェは？］
ティアナからの通信に、素早く答える。
「ライフは3桁ですけど、ノーヴェさんはまだ行けるようです。」
ノーヴェの瞳にやる気が漲っている事も伝える。
［じゃあ、一旦下がらせるわね。］
ノーヴェの足元に、キャロの使う魔法陣が展開される。
召還魔法だ。
「すぐに回復するね、ノーヴェ。」
「頼む。　早く兄貴を叩きたくてしょうがねぇから。」
彼女の発言に、キャロは笑った。

◆◇◆◇◆

「まさか追ってくるとはな……フェイト！」

建物内を走りながら、直線に飛んでくる金色の魔力弾をかわす。

「予想外だった？」

反撃に飛んできた刃をかわし、フェイトは笑いながら問う。

「こうも狭いんじゃあ、スピード（お前の持ち味）を活かせないと踏んだんだが……。」

「確かにね。　だけどそれは、私が“１人で挑む場合”だよ。」

「そういう事か。」

広い階層に辿り着いた時、ヴィレイサーに２つの影が躍りかかった。

それを軽くいなし、ヴィレイサーは“３人”から離れる。

２つの影は、ヴィヴィオとアインハルトだった。

「３人とは卑怯だな。」

「メガーヌさんも同じ状況だと思うよ。」

フェイトがそう言い終わるや否や、巨大な地響きが起こった。

「コロナか……。」

「正解。」

この地響きが、コロナの創成したゴライアスだと、すぐに分かった。

「あとは、ティアナさんとリオさんもいます。」

アインハルトが詳細を告げてくれる。

「苦しいな、どっちも……。」

ヴィレイサーの頬を、冷や汗が伝った。

◆◇◆◇◆

一方、メガーヌは苦笑していた。

ゴライアスの一撃を喰らえば、即座にダウンすると言うのに、それをサポートするようにティアナの魔力弾とリオの特異な魔法が加わっていた。

「もう、お手柔らかにしてもらいたかったのに……。」

微量なダメージを喰らいながらも、決定打はシールドで完全に防いでいた。

「中々に固い防御ですね！」

ティアナが魔力弾を数多く放ちながら、メガーヌの防御に称賛をおくる。

「ありがとう。」

嬉しそうにそれに謝辞を述べながら、メガーヌは放たれたそれらをかわす。

「弟が頑張っているんだもの。　簡単には倒れないわよ。」

言うが早いか、3人を雁字搦めにするように、鎖型のバインドが発生した。

◆◇◆◇◆

「ソニックシューター！」

「フォトンランサー！」

「クッ！」

「ハァッ！」

「おっと！」

次々に生成されては放たれる魔力弾の雨霰と、アインハルトの拳と蹴り。

それらを紙一重でかわし、或いは防御してやり過ごす。

フェイトとヴィヴィオが魔力弾を多用しているのは、誘導性が高い事と、アインハルトなら受け流せると思っているからだろう。

ヴィレイサーは徐々に窓際に追い込まれていった。

その時、フェイトの魔力弾がヴィレイサーを掠め、彼は体勢を崩す。

「ハァッ！」

その好機を逃すはずも無く、アインハルトが踏み込んできた。

体勢を崩している今の状態では、まともに反撃出来ない。

だが、見す見すその拳を喰らう訳にもいかない。

「この！」

既の所で、足で彼女の拳を受け止める。

しかし、ダメージを完全に相殺できた訳では無い。

追撃を予想して、腹に手を置くが、アインハルトは何故かヴィレイサーから離れた。

（何故……ッ！）

その理由は、すぐに分かった。

向かいのビルから、なのはが狙っているからだ。

「…バスター！」

「レゾナンス！」

なのはからの砲撃に当たる前に、床をレゾナンスで破壊する。

引力に従い、ヴィレイサーは階下に落下した。

すぐにフェイトが窓から出て追ってくる。

「ソニック！」

即座に体勢を立て直せないと思い、フェイトはソニックフォームを使う。

煙っている中に、人影が見える。

それに向かって、フェイトは突撃した。

「もらった！」

ブンと空を斬る音と共に、得物が振り下ろされる。

しかし人影に当たった時、奇妙な感触が伝わってきた。

グニャッとした、軟らかい感触だ。

「何……しまっ……！？」

それがなんなのか確認しようとした瞬間、黒い影がフェイトを捕獲した。

「グレイプニル！？」

隣のビルから突入してきたなのはが、フェイトを捕獲している黒い影を見て驚いた。

グレイプニルとは、ヴィレイサーがＩＳを使って影で作った捕獲用の物だ。

形は様々で、敵を捕獲する際には３～６つに中心から開き、相手を鷲掴みにするように捕獲する。

だが、捕獲だけで終わる物では無い。

爆発させることも可能だ。

フェイトを助け出すか逡巡した瞬間、カッと閃光が走り、影が爆散した。

◆◇◆◇◆

「この！」

力を入れて、メガーヌのバインドを脱しようともがくが、それは叶わない。

「残念ながら、終わりだ！」

そこへ、ヴィレイサーの声が響いた。

「フェイトさん達の足止めをよく掻い潜ってこられましたね。」

「ギリギリだったがな。」

冷や汗を掻いているティアナ達を一瞥し、ヴィレイサーは魔法陣を展開した。

「フォース……バレット！」

４つの砲撃が、ティアナ達を容易く呑みこんだ。

「うん、ダメージはそれなりね。」

力をセーブした事もあり、ティアナ、コロナ、リオはまだ戦闘を続

行できるようだ。
その瞬間、３人の足元に魔法陣が浮かび上がる。
「姉さん。」
「えぇ。」
キャロとルーテシアの召喚魔法だ。
だが、それらを目にしながらヴィレイサーは再度ヴィーナスシステムを起動させた。
「位置特定。
詳細を送るわ。」
「了解。」
メガーヌから、召喚魔法を使った位置を特定したデータが送られる。
「一気に殲滅する！」
［Ｕｎｉｓｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ．］
２つのバスターライフルを合体させ、強大な収束砲を撃てるように空に飛び出す。
「そこかぁ！
ムーンライトブレイカー・エクスプロージョン！」

［Ｍｏｏｎｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ　ＥＸＰＬＯＳＩＯＮ．］

漆黒の砲撃が、回復の作業を行っていたキャロ達の位置に着弾した。

そして、その地点を中心に爆発が起こり、半円形に煙が広がっていく。

「よし、１２人中７人撃墜だな。」

キャロ、ルーテシア、コロナ、リオ、ティアナ、ノーヴェを、回復中にもかかわらず、収束砲でそれを阻止した上で撃墜した。

相手は多人数の為、２人だけで１人ずつ撃墜していては時間がかかる。

そこで、纏めて戦闘続行が可能な値までライフを削り、召喚魔法を使わせる。

その召喚魔法の残滓を確認して、キャロとルーテシアがいる位置を割り出し、最終的に、複数人を一気に殲滅するという作戦を取ったのだった。

そして、なのはは無事だったようだが、グレイプニルが爆発した事でフェイトも撃墜。

相手側は、残り５人――――なのは、エリオ、スバル、ヴィヴィオ、アインハルトだ。

「ブラスター１！
スターライト……ブレイカー！」

ヴィレイサーがリミッターをかけられ、ヴィーナスシステムを強制解除させられた時、彼の背後から桃色の収束砲が急速に接近してきていた。

「まだぁ！」

［Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．］

（相殺できるか！？）

不安に駆られるが、ヴィレイサーは思い切り刃を振り上げ――――

［Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

「レイディアントランチャー！」

――――そして振り下ろした。

威力を底上げしたが、なのはの切札でもあるあれを、簡単に相殺出来ない事は熟知している。

やはり、僅かな時間だけ力が拮抗しただけに終わった。

ヴィレイサーの砲撃は容易く打ち崩された。

「クッ！」

そしてスターライトブレイカーが着弾した。

◆◇◆◇◆

「やった！」

喜びの声を上げたなのはだったが、煙が立ち込めているそこから、ジャベリンが飛んできた事に驚いた。

身を翻し、紙一重でそれをかわす。

一瞬……本当に、かわす為に一瞬だけ視線を動かした刹那、煙からヴィレイサーが肉薄してきた。

「もらったぁ！」

「させない！」

刃がなのはを捉えるかと思われた時も時、エリオが間に割って入ってきた。

「ありがとう、エリオ。」

鍔迫り合いをしている教え子に謝辞を述べて、なのはは残存している仲間に召集をかける。

「よくスターライトブレイカーを防げたね。」

「姉さんが防御してくれたからな。」

よく見ると、確かに衣服が所々ボロボロになっているメガーヌの姿があった。

身体を起こし、呑気に手を振っている。

「じゃあ、今度こそやるよ！」

なのはがレイジングハートを構え直し、周囲に魔力弾を数個生成する。

ガギィンと、金属音を響かせて、エリオから離れた。

「スバルさん！」

「なっ！？」

エリオの叫びに、ヴィレイサーは背後を振り返った。

しかし、そこにはスバルの姿はおろか、誰もいなかった。

（ブラフか！）

気付いた時には、既になのはが魔力弾を発射し終えていた。

［Ｂｒｅａｋｅｒ　Ｍｏｄｅ．］

エターナルを大剣型に切り替え、その腹で魔力弾を弾く。

なんとか凌いだと安堵したのも束の間、ビルに身を潜めていたスバルが、ウイングロードを使ってヴィレイサーに迫った。

「ＩＳ、重力付与！」

剣尖に微かに魔力を発生させ、重力が働くようにする。

スバルの拳がヴィレイサーを捉えるよりも早く、彼は地上に急降下した。

「そぉらぁっ！」

そして、地に降り立った瞬間に、大剣をなのはとエリオがいる方向に投げ飛ばす。

「わわっ！？」

「っと！？」

２人とも既の所でかわすが、その間にヴィレイサーはなのはの死角に回り込んでいた。

壁を蹴ってなのはがいる地点まで飛び上がり、彼女が振り返る前に手刀を振るって意識を刈り取った。

更に、倒れたなのはを抱えて、彼女をエリオに向かって放り投げる。

「ウワッ！？」

「エリオ！」

ヴィレイサーを追おうとしていたスバルが、数瞬動きを止めた。

その隙に、ヴィレイサーは着地し、今度はスバルに迫った。

それに気が付き、繰り出された飛び蹴りを、スバルはなんとかガードする。

だが、ガードを解いた瞬間に頭を両手で掴まれ、ヴィレイサーの方に引き寄せられた。

（しまっ……。）

それが膝蹴りだと気が付いた時、スバルの頭に強い衝撃が走った。

倒れそうになるスバルを支え、そっと地に伏させる。

「クロスファイア・ドライブ。」

そして、エリオとなのはがいる所に向けて魔力弾を放ち、エリオ諸共ライフを0にまで追い込んだ。

「さて、残りは2人か。」

息を整え、周りを見回す。

すると、アインハルトとヴィヴィオがゆっくりと姿を現した。

「お疲れのようでしたら、1人ずつにて戦いますが、どう致します

か？」

アインハルトのその問いに、ヴィレイサーは首を振った。

「いや、２人同時で構わない。」

「どれくらいのリミッターがかかっているの？」

「空戦無し、武器持ち禁止――――――つまりは無手だな。」

ナックルを外し、上着のロングコートを脱ぎ去る。

構え、目の前にいるヴィヴィオと対峙する。

互いの顔に汗が伝う。

それがポタリと顎から離れた時も時、２人は同時に地を蹴った。

「「ハァァァ！」」

自身を鼓舞するように叫びながら、拳を交える。

息が上がり、どちらともなく離れた時、今度はアインハルトが躍りかかった。

「忙しないな！」

突出した拳を外受けで受け流し、そのまま身体を回して裏拳をお見舞いするが、アインハルトは身体を屈める事でそれをやり過ごす。

裏拳が空を切ったのを手の甲で感じ取り、足を中段に位置取らせる。

「クッ！」

その蹴りを、アインハルトは右腕に左腕を支えてガードする。

「ソニックシューター！」

ヴィヴィオが、彼女を援護するように魔力弾を放つ。

膝を折り、思い切り跳躍してそれらをかわす。

「覇王……。」

だが、放たれた魔力弾をアインハルトが受け止めた。

「……旋衝破！」

（しまった！）

ヴィヴィオの魔力弾は、アインハルトによってヴィレイサーに投げ返された。

「クッ！」

シールドを張って、なんとかダメージを無くす。

身を捻り、予定の位置からは離れた場所に降りる。

「さすがに互いの癖を分かっているだけあって、中々に手強いな…

……。」

「そっちこそ、そろそろ体力も少ないのに、よく頑張るね。」

「そう簡単に音は上げないぞ。」

「その分、精一杯やらせて頂きます。」

再度構え直し、3人は目を鋭くする。

最も早く動き出したのは、ヴィヴィオだった。

「リボルバースパイク！」

彼女の鋭い蹴りを、ヴィレイサーは身体を屈めてかわし、立ち上がる力を利用して、掌底を顎に当てる。

「烈破掌！」

掌底に魔力を薄く圧縮し、ヴィヴィオに当てると同時に破裂させた。

「アグッ！？」

ヴィヴィオは脳を揺さぶられ、吹き飛んだ。

「ク、クラクラするよー……。」

「ヴィヴィオさん、後は私がお引き受けします。」

「お、お願いしますー。」

アインハルトに勝敗を委ね、ヴィヴィオは意識を手放した。

仰向けに倒れたヴィヴィオをチラリと見やった後、アインハルトは拳をギュッと握る。

「いきます。」

「あぁ、来い。」

アインハルトに応えると、彼女は走り込んできた。

強く踏み込んだ力を利用し、速い突きを押しだす。

ヴィレイサーはそれを、左腕で下段に払い、払いに使った腕の鶴頭で顎を打とうとする。

しかし、アインハルトはそれを空いていた手で払う。

それを互いに認めた瞬間、2人の膝蹴りが互いの腹にめり込んだ。

「グッ！」

先に呻き声を上げて離れたのは、ヴィレイサーだった。

だが、アインハルトは彼から離れないように、ヴィレイサーに着かず離れず立ち回った。

ステップを踏みながら、素早く前後左右に立ち回られ、ヴィレイサーは舌打ちする。

焦りが生じ、隙が出来たヴィレイサーに対し、アインハルトは足を引っ掛けた。

「ウオッ！？」

バランスを崩し、仰向けに倒れる。

「覇王……断空拳！」

絶好のチャンスを得たアインハルトは、ヴィレイサーの頭部目掛けて拳を真っ直ぐに振り下ろした。

それが当たった感触と、鈍い音が聞こえた。

勝った――――

それを見ていた誰もが、アインハルトの勝利だと直感した。

しかし、気絶していなかったヴィレイサーは、頭部に当てた所で止めていたアインハルトの腕を掴んだ。

「なっ！？」

気絶させられなかった事に驚き、腕を掴まれた事に思考が追いつかなかった。

アインハルトの腕を掴み、仰向けに倒れそうになるのを止める。

そして、掴んだ腕を自分の方に引き寄せると同時に地を蹴る。

ぐるんと一回転して、アインハルトの顔にヴィレイサーの蹴りが迫った。

我に返り、アインハルトは咄嗟に顔を横に動かす。

ヴィレイサーの蹴りは、彼女の顔を掠めただけに終わった。

回転の勢いを殺す前に腕を離し、そのままアインハルトの背後に着地した。

「よく気絶しませんでしたね。」

「ギリギリだったがな。」

「防御をせずに、攻撃に転じるとは驚きです。」

「肉を切らせて骨を切る……。」

「はい？」

「自分が相当の痛手を受けても、敵にはそれ以上の打撃を与えて打ち勝つと言う意味だ。
残念ながら、俺だけ相当の痛手を受けちまったな……。」

痛みが残っているのか、頭を押さえながら笑っていた。

「止めを刺さないのか？」

好機だと言うのに、アインハルトは動かなかった。

「もう少し、戦っていたいですから。
その……迷惑でしたら、終わらせますが……。」

「言っただろ、甘えていいって。」

「ぁ……。」

そう言われて、アインハルトはその時の事を思い出す。

「俺はまだ平気だ。　だから来いよ。」

「分かりました。
それでは、その御厚意に甘えさせて頂きます！」

キッと目を開き、アインハルトはヴィレイサーが息を整えるまで構えていた。

深く息を吐いて、ヴィレイサーはアインハルトと視線を絡めた。

そして、右足を後ろに下げて猫足立ちの構えを取る。

それを見て、アインハルトは固唾を呑む。

（無闇に踏み込めない……。）

ヴィレイサーの構えは、あまり目にした事が無い。

いや、今の構えだけでは無く、防御の仕方もそうだ。

恐らく、彼の出身にある武術の類いだろう。

（蹴りが出るか、それとも突き？）

構えからどんな攻撃が来るか分からず、アインハルトは際限なく思考を繰り返す。

永遠とも感じられた時の間、２人は微動だにしなかった。

２人とも、相手の間合いに入れないからだ。

だが、その時に終わりが訪れる。

アインハルトがヴィレイサーの間合いに踏み込んだのだ。

（右足を後ろに下げているという事は、そちらに体重を乗せているという事！

ならば、体重を乗せている上に軸足として使われているそれは、絶対に動かせない！）

そう結論づけ、アインハルトはヴィレイサーの右側に回り込もうした。

しかし――――――

「甘い！」

――――ヴィレイサーが“右足で蹴ってきた”。

既の所でシールドを張ってガードしたが、アインハルトの目は驚き

に見開かれていた。

「繰り出すのが早かったか。」

蹴った足を戻し、シューティングアーツの構えに直る。

「何故、軸足で蹴る事が出来たのですか！？」

距離を取りながら問われた質問に、ヴィレイサーは首を振った。

「充分に身体を休めてから話してやるよ！」

離れるアインハルトと決着をつけるべく、ヴィレイサーは彼女を追った。

眼前に迫られ、アインハルトは咄嗟に拳を突き出す。

だが、ヴィレイサーはそれを屈んでかわし、次いで彼女のがら空きの腹に、両手の掌底を叩き込んだ。

「双撞掌底破！」

それが、決着をつけた瞬間だった。

「アインハルトの気絶を確認。
今回の模擬戦は、メガーヌさんチームの勝利ー！」

セインの結果発表に、赤青の混同チームの面々は悔しいと次々に口にしていた。

「ヴィレイサー。」

気絶から回復したのか、フェイトがヴィヴィオを抱えて歩いてきた。

「疲れていると思うんだけど、アインハルトを運ぶの、やってもらっていいかな？」

「俺が？」

「うん。」

「まぁ、他の奴は気絶しているから難しいか。」

「そういう事。」

ヴィレイサーに断ってから、フェイトはヴィヴィオを抱えて戻って行った。

「やれやれ……。」

1つ溜息をつき、既に子供の姿に戻っているアインハルトを抱える。

「かなり危うかったな。」

あどけない顔をしている少女を一瞥し、ヴィレイサーは苦笑した。

1周年記念　IF　ENDING　アインハルト編（一部分）（後書き）

鮮血
「こんな感じですね。」

ヴィレイサー
「うわー、マジで危なかったな……。」

鮮血
「君は基本的には無手じゃなくて、武器組だからね。
無手なんてどれくらいぶり？」

ヴィレイサー
「練習する時は必ずやっているから、それほどでもないと思うが……。
でも、実践で使うのはやっぱり久しぶりかもな。」

鮮血
「さて、それではちょこっと解説しましょうか。」

◆聖漣光迅（せいれんこうじん）
レイディアントランチャーとは違い、貫通力が増した衝撃波。
エターナルの全ての形態で使用できる技。
ジャベリンなどの尖端に収束させ、相手に突き刺して、内部から暴発させられる。

効果がでるカートリッジは、『Ｄｉｆｆｕｓｉｏｎ（拡散）』、『Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ（破壊）』。

◆手刀横顔面打ち
ノーヴェの頭部側面に当てた手刀打ち。

標的の側頭部に手刀を叩きつける技ですが、基本的に身体を回転させながらは打ちません。

腕だけを素早く振るいます。

◆グレイプニル
フェイトを捕獲した、ＩＳのシャドー・ファントムで形成したクローのようなもの。

敵を捕獲する際には３～６つに中心から開き、相手を鷲掴みにするように捕獲する。

捕獲したまま締めつけたり、或いは爆発させることも可能。

名称は、北欧神話に出てくるフェンリルの足枷、『グレイプニル』から引用。

機動戦士ガンダムＳＥＥＤに登場する、ＧＡＴ－Ｘ２０７ブリッツの左腕にある、
黄色いクローも同様の名称を持っている。

◆ムーンライトブレイカー・エクスプロージョン
ヴィレイサーがヴィーナスシステムを使用中に使える、

バスターライフルで放つ、最も高威力の収束砲、『ムーンライトブレイカー』の派生技。

着弾地点から、半円状に爆発を起こす。

◆レイディアントランチャー

砲撃型の魔法で、威力はスバルのディバインバスターと同じ。

これ以上の収束砲は、ヴィーナス・システム時のみに使えるバスターライフルを通して出しか放てない。

直線的な動きしか出来ないが、特殊なカートリッジを使う事で様々な戦局に対応できる。

効果がでるカートリッジは、『Ｄｉｆｆｕｓｉｏｎ（拡散）』、『Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ（破壊）』。

◆クロスファイア・ドライブ

クロスファイアシュートよりも、弾数、弾速、貫通力が高まった魔法。

◆烈破掌（れっぱしょう）

掌底に薄く圧縮した魔力を敷き、相手に当てると同時に破裂させて吹き飛ばす技。

テイルズオブジアビスに登場する、ルーク・フォン・ファブレ、並びにアッシュが使用する技と同様。

◆双撞掌底破（そうどうしょうていは）

両手の掌底を、同時に思い切り相手にぶつける技。

烈破掌と同様に、掌底に薄い魔力を圧縮している。

鮮血
「技名が明らかになっているのはこれだけですね。」

ヴィレイサー
「で、アインハルトを蹴ったアレは？」

鮮血
「あれは『ガマク』という奴でごんす。」

◆ガマク
“ガマク”とは、脇腹の普段は使わない箇所の筋肉の通称。

コレを使う事によって、上半身と下半身は平行に何事もなく正位置に残しつつ、
身体の重心のみを自在に操る事が可能になる。

会得すれば、前に進むと見せかけて後ろへ進んだり、
右足で蹴ると見せかけて、左足で蹴ったりすることも可能。

鮮血
「と言う訳でごんす。」

ヴィレイサー
「なるほどな。
まぁ、左足で蹴らなかったのは理由があるんだが……。」

鮮血
「半戦闘機人だからね。
機械の足で蹴るよりは、そのままの右足で蹴りたかったんでしょ？」

ヴィレイサー
「ご名答。」

鮮血
「それでは、次回は多分本編に戻ると思います。
お楽しみに～。」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０１　「オトナの献酬」（前書き）

以前、活動報告にあげた神崎はやて先生との小話です。

今回のお話は、『リリカルＡｎｇｅｌｓ』のマリサ・ネティアスさんとのショートテイルです。

では、どうぞ。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０１「オトナの献酬」

「少し、付き合ってくれない？」

ワインの入ったボトルを揺らし、マリサはヴィレイサーに妖艶に微笑む。

「強い酒じゃないなら。」

「大丈夫よ、弱いから。」

ボトルをヴィレイサーに渡して、彼にアルコール濃度を確認させている間に、彼女は勝手に彼の部屋に入る。

「電気、点けてないのね。」

「その方が、月と星の明かりが強く感じられるからな。」

室内が真っ暗だったので灯りを点けようとしたが、ヴィレイサーの言葉に窓を見てみると、なるほど確かに、淡い光が見受けられる。

「で、何でまた?」

「んー?」

ヴィレイサーの問いに、しかしマリサは、トクトクとグラスに注がれるお酒を見ているだけだった。

ワインが注がれたグラスをヴィレイサーから受け取り、窓から差す月光に照らしながらそれを軽く回す。

「失恋って……どんな感じ?」

「何だって?」

マリサから投げかけられた問いに、ヴィレイサーは素っ頓狂な声で聞き返す。

「お前……失恋でもしたのか?」

「私じゃなくて、貴方よ。」

ソファーに腰掛けるマリサは、そのソファーの背凭れに座すヴィレイサーを見返す。

「貴方、ソフィアに振られたでしょ？」

「……。」

マリサの問いかけには答えず、ヴィレイサーはワインを口にする。

「黙しているだけなら、【肯定した】と受け取るけど？」

「否定しても信じないだろうが。」

「あ～ら、私はそんなに冷たい人間じゃあないわよ。」

クスッと微笑し、マリサは天窓から直上にある月に目を向ける。

「1つだけ否定させてもらうのなら、正確には俺はまだ振られてはいない。」

「どうして？」

「ソフィアは、俺が好いていた事を知らないからだ。
アイツに断られて、初めて【振られた】と言う事が成立する。」

「細かいわね。」

マリサはそう指摘するが、その顔に嫌気はなかった。

「どう、お酒の味は？」

「まだ、慣れないな。」

「でも、その内美味しくなるわ。」

グラスを弄ぶ様に回し、マリサは小さく呟く。

「マリサは、もう美味しいと感じているのか？」

「貴方と違って苦労が多いから、もしかしたらそうかもね。」

「だから最近、微妙に小皺が増えテッ！？」

いきなり痛みが手の甲に走り、ヴィレイサーはビックリする。

「そう見える？」

「単なる冗談だったんだが……。」

笑顔なのに、それがどこか黒く見えてしまうのはヴィレイサーの気の所為……ではないだろう。

「冗談でも、言っていい冗談とそうではない冗談があるわ。」

「はいはい、悪かったよ。」

「本気で悪いと思ってないでしょ。」

呆れた様に大仰に溜息を零すマリサに、ヴィレイサーは笑うだけだった。

「……もしかしたら、これ以上に苦いかもな。」

「何が？」

唐突に口を開き、ヴィレイサーは呟いた。

「さっき、マリサが聞いてきた『失恋の感じ』って奴だよ。」

マリサに窓を開ける事を断ってから、ヴィレイサーは夜風を部屋に取り込む為に窓を開く。

冷たい風が、２人の肌を音もなく撫でる。

「なんかこう……分かった様な分からない様な……。
だけど、時折無性に苦しくなって……苦いって言うか、何て言うか……そんな感じ？」

「ふーん……。」

説明と呼べるレベルにすら値しないが、とかく、それが終わるまではマリサは１度も口を開かなかったが、聞き終わって開口一番の言葉は興味なさげな反応を感じさせるものだった。

「『ふーん』って……冷淡だなぁ。」

「あら、慰めて欲しいの？」

ソファーからすくっと立ち上がり、マリサは壁に背を預けるヴィレイサーの頬にそっと手を当てる。

「止めとく。」

自分に触れているマリサの手をやんわりと退かし、ヴィレイサーは苦笑する。

「どうして？」

「慰められるとは思えん。」

「失礼しちゃうわね。」

そうは言うものの、マリサは笑みを浮かべたままだった。

恐らく本気でそう思ってはいないのだろう。

「弄るのが目的で俺と飲んだのか？」

「まさか。　単に貴方が気落ちしていたからよ。」

「そりゃあ、物好きな事で……。」

アルコールで火照った身体に、丁度よい夜風が当たり続け、少し肌寒く感じられる。

「窓、閉めるか。」

ポツリと呟き、ヴィレイサーはマリサの答えを待たずに窓を閉めた。

「俺に気を遣うより、同じ分隊のメンバーと仲良くした方がよくないか？」

マリサが座すソファーではなくベッドに腰をおろし、仰向けに寝転がる。

「人が親切にしてあげているのに、その言い種はないんじゃない？」

「もちろん、ありがたいが……。」

ヴィレイサーはそれ以上何も言わず、大きく息を吐く。

「もう1杯、どう？」

「無理。」

ワインボトルから新たに注ぎながら問うマリサに、しかしヴィレイサーは溜息と共に漏らす。

「弱いのね。」

「マリサが強いだけだろ。」

ベッドから身体を起こすヴィレイサーに気が付き、彼女は妖艶に微笑む。

「お前、飲み過ぎじゃないか？」

「夜はまだまだこれからよ。」

コクッと喉を鳴らし、グラスに注いだワインを飲み干す。

「無理に俺に付き合うなよ。」

「別に、無理に付き合ってなんかいないわ。」

ベッドに寝転がるヴィレイサーの隣に並び、マリサは静かに彼の体躯に手を置く。

「貴方が……酷く寂しそうだったから、放っておけなかった――――ただ、それだけよ。」

優しい姉を連想させる声色と共に、ヴィレイサーの身体を抱く様に

腕が巻かれる。

「俺に、優しくするなよ……。」

「どうして？」

「今優しくされたら……お前を好きになりそうだからだよ。」

「……私は大いに歓迎するわよ。」

「バカ。　今、お前を好きになったら、俺は傷を癒してもらう為だけにお前を好いた事になるだろ。
俺はちゃんと、お前を好きになりたい……。」

「優しいのね。」

「ただ怖いだけさ。」

自嘲しているのだろう。

ヴィレイサーの声色から、すぐにそれが分かった。

「また、こんな苦い思いをしたらどうしよう……ってな。」

「……ヴィレイサー、私は「もう」……え？」

「もう2度と感じられないと思っていたよ。　この温もりを……。

」

マリサの言葉を遮り、自分の身体に回されたマリサの手に、そっと己の手を重ね、呟く。

彼女の言葉を遮ったのは、恐怖か？　それとも……？

「どんな温もり？」

「姉さんの様な、母さんの様な……。　優しく見守ってくれている温もりだよ。」

「私、貴方よりも年下のはずだけど？」

「知ってる。」

どちらともなく小さな笑みを零し、やがてヴィレイサーはマリサの手を少し退かし、彼女と向き合う様に体勢を変える。

「甘えん坊ね。」

「悪い。」

「今日は特別よ？」

怒るでも拒絶でもなく、マリサはヴィレイサーを抱く腕に力を込め

て更に抱き寄せる。

「本当に、俺の姉さんみたいだな。」

「母親じゃないのね。」

「そんな歳でも、ない……だろ。」

温もり以外にも、マリサの髪から仄かに香しいシャンプーの薫りが漂う。

「ご褒美よ。」

姉と選定された事が嬉しかったのか、マリサは優しく彼の頭を撫でる。

「姉……さん。」

うつらうつらしていたヴィレイサーは、安堵の表情で眠ってしまった。

「ヴィレイサー。　私ね、貴方の事――――。」

聞こえてきたそれが、自分の願いから生まれた幻聴だと思いながら――――。

◆◇◆◇◆

「それで、何故マリサと寝ている？」

翌朝。

エルトの朝練に付き合う予定だったヴィレイサーはその時間を寝過ごしてしまい、今はその彼に起こされたところだった。

「酒を酌み交わしていたら、いつの間にか互いに寝ちまって……。」

酒が入った所為で記憶があまり定かでない――――と言う嘘を吐き、ヴィレイサーは適当に経緯をでっち上げる。

「まぁ、何かあった訳ではなさそうだから構わないのだろうが。」

溜息を零し、エルトはワインボトルを見る。

「お前じゃあるまいし、俺は女を自室に拐かしたりはしない。」

「待て。　その言い方では、まるで僕が女性を誑し込んだみたいじゃないか。」

「スバルから聞いたぞ。　こないだの任務の際にソフィアと一緒に一夜を過ごしたと。」

「あれは彼女の方から来ただけだ。
と言うか、僕もソフィアも、何もいかがわしい事はしていない。」

エルトが『頭が痛い』とでも言う様に、自身の頭を押さえながら真実を口にする。

するとヴィレイサーは彼の肩に手を置き、『分かってるよ』と言い

――――――

「そういう事にしておくよ。」

――――と続けた。

「全然分かっていないぞ！」

「大丈夫だ。　俺はエルトがそんな事をする奴だなんてこれっぽっちも思ってねぇから。」

「ならば目を逸らさず、僕の方を向いて言え。」

あからさまに顔を逸らすヴィレイサーの顔を両手で掴み、無理矢理自分の方に向かせる。

「しかし、よもや言いふらそうと考えてなどいないだろうな？」

「うっかり口を滑らせる可能性は否定出来んが、それはないかな。」

「ならいい。」

「珍しいな。　お前なら脅してくるかと思ったが？」

ヴィレイサーの、驚きの色を含む声色に、エルトはピクリと反応する。

「なるほど。　君は僕がそういうキャラだと思っている訳か。」

バレルを起動させ、エルトは銃口をヴィレイサーの眉間に押し当てた。

「武器を使わなくとも、マリサの事があるだろ。」

ヴィレイサーは苦笑し、未だに寝ているマリサを撫でる。

「君とマリサが寝床を共にした事を多少脚色して言いふらす……そう言って脅せば良かったと？」

「そうだな。」

「バカを言うな。　マリサまで敵に回すのは御免だ。」

「俺だけが敵に回るのならいいのかよ……。」

「時と場合によるな。
それじゃあ、僕は一足先に食堂にいく。」

立ち上がり、エルトはワインボトルを冷蔵庫な閉まってから部屋を出た。

「……起きてるだろ。」

「よく分かったわね。」

それから少しだけ間を置いて呟くと、マリサはゆっくりと身体を起こす。

「それじゃあ、私も部屋に戻るわ。　着替えないといけないし。」

「マリサ。」

さっさと踵を返そうとするマリサを、ヴィレイサーは慌てて呼び止める。

「何？」

「まぁ、その……。」

振り返ったマリサに、すぐに口を開けずヴィレイサーは口ごもる。

が、すぐに口を開いた。

「時々でいいからさ　また……一緒に飲まないか？」

ヴィレイサーからの誘いに、それが予想外だったかのようにマリサは目を丸くする。

「いいわよ。」

しかし、返していた踵を戻し、マリサはベッドにいるヴィレイサーに近付き――――

「『時々』じゃなくて、いつでも……ね。」

――――彼の頬にキスをした。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０１「オトナの献酬」（後書き）

鮮血
「マリサさん、マジマリサさん！」

ヴィレイサー
「大人だなぁ……。」

鮮血
「大人の色香が半端ないですねｗ
アダルティーな感じが、伝わって頂けたでしょうか？」

ヴィレイサー
「『リリカルＡｎｇｅｌｓ』の時系列に合わせると、俺の方が１つ年上なんだが、甘え過ぎかな……。」

鮮血
「だって、あちら様はお姉さまキャラだし。
たまには甘えてもいいんじゃないの？」

ヴィレイサー
「そういう……もんか？」

鮮血
「では、次話もお楽しみに！」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０２　「ずっと一緒……」（前書き）

今回のＳｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓも、神崎はやて先生とのコラボとなっており、再びマリサさんに出演して頂きます。

それでは、どうぞ。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０２　「ずっと一緒……」

「ふむ……」

「うーん……」

「う？」

エルトとヴィレイサーは、目の前に居る女性を見て腕を組んで悩み、２人に見詰められている女性の方は、何故自分が見詰められているのか分からなそうな顔をしている。その瞳はくりくりと円らで、女性の『美しい』という印象を与える見た目とは違って、『可愛い』という印象を魅せる。

「どうするか」

「どうしたものか」

「うみゅ？」

未だに腕を組んで悩み続ける2人に対して、しかし金の長い髪を揺らしている女性は、見た目以上に子供らしい口調で、興味津々に彼らを見上げている。

「とりあえず……」

そして、エルトは女性の肩にそっと手を置き――――

「彼が君の面倒をしっかり見てくれる」

――――にこやかな笑みを浮かべてヴィレイサーを指差す。

「おい、勝手に決めんなよ……」

「おにー…ちゃん？」

反論を口にしようとしたヴィレイサーだったが、エルトの言葉を真に受けた彼女はヴィレイサーの服の袖を掴んで上目遣いに彼を見詰める。

「いや、流石に仕事もあるし……」

「う～……」

ヴィレイサーの『仕事』と言う言葉を聞き、女性は剥れる。そして、人差し指を唇にあてて涙目になり、可愛らしく懇願する。

「引き受けよう」

「やったぁ～♪」

彼女のその可愛らしさに負けて、ヴィレイサーは女性の面倒を見る事を承諾した。今の彼女に見詰められ、我慢できた者は――――――いないとまではいかないが、恐らく数少ないだろう。

「良かったな、“マリサ”」

「うん♪」

エルトは女性――――――マリサの頭を優しく撫でる。それが嬉しかったのか、マリサは笑顔でそれを受けた。

しかし、ここで浮上するのは『何故マリサがこんなにも幼い言動をしているのか？』と言う事だろう。見た目は２２歳である美しい

女性だと言うのに、中身――――精神と言った方が正しいか――――は幼い。普段の彼女を知る者なら、その普段とのギャップに驚かざるを得ないだろう。

ことは数時間前に遡る。

管理外世界にて、魔物の討伐に挑んでいたヴィレイサーとマリサは、数だけで圧倒してくる相手に対しても苦戦を強いられる事もなく的確に任務をこなしていた。故に、気を緩めてしまったと言っても過言ではない。

スライムを思わせる軟体の魔物は、物陰からマリサに向かって飛び出し、体当たりを喰らわせたのだ。幸い、軽い痛みがあった程度でマリサに外傷は見受けられず、そこまで気にしなかったのだが、討伐が済んだ所で異変が生じた。

『どうした？』

『身体が……だるくて……』

見れば、樹木を支えに、やっとの思いで立っている様に思えるほど辛そうな感じだ。

『大丈夫か？』

『眠気が強いぐらいだから……でも、眠気を覚まさないと、報告を任せ切りになってしまうわね』

『それぐらい、気にしなくても……ん！？』

『ん……ちゅ』

眠気覚ましのつもりか、マリサはヴィレイサーと唇を重ねる。

『うーん……やっぱりまだ、眠いわね……』

『さいですか……』

いきなりキスをされてヴィレイサーは戸惑うものの、今に始まった事ではないのですぐに忘れる。いつまで経っても、マリサに翻弄される事は変わらない様だ。

『ごめんなさい。　報告とか、よろしくね？』

『あぁ』

ヴィレイサーが頷くや否や、マリサは彼に凭れる様にして身体を預け、眠ってしまった。

その後、検査と報告の為に六課へと戻り、マリサをシャマルに検査させている間に仕事の報告を行っていたのだが……。

『ヴィレイサー。　マリサが目を覚ましたぞ』

『本当か？』

『あぁ。　だが……』

マリサが覚醒した事を伝えてきてくれたエルトだったが、何故かその表情には喜びが無かった。

『どうした？』

『まぁ、来れば分かる』

踵を返し、一足先にその場を後にしたエルトに続き、ヴィレイサーも病室に向かったのだが、病室に入る一歩手前で室内から騒がしい声が聞こえてくる。

『嫌だー！』

『コーラー！　逃げないの！』

マリサの声が聞こえてきたのは良いのだが、何故か彼女の言動とは思えない。後者はシャマルの声で、特にそれに問題はないのだが……。

すると、病室へと繋がる扉が開かれ、人影がいきなり飛び出してきた。

『どわっ！？』

『きゃっ！？』

その影は見事にヴィレイサーと激突し、彼を押し倒してその影も彼の上に倒れた。

『マリ…サ？』

『う？』

飛び出してきたのがマリサだと知り、しかしその違和感にヴィレイサーは首を傾げる。いや、見た目に変化は無いのだが、どうしてもどこか違和感がついて回っている気がしてならなかった。

『だぁーれ？』

『は？』

マリサにそう問われ、ヴィレイサーの方が間の抜けた返事をして

しまった。

『つまり、精神だけが幼くなった……と？』

『そうなるな』

病室で、子供をあやす様な玩具に夢中になっているマリサを横目に、ヴィレイサーはエルトに確認を取らずにはいられなかった。

『で、彼女を元に戻すには？』

『特殊な薬草を煎じて飲ませればいいらしいが……その薬草が自生する場所は、少々面倒な所にあるそうだ。エリオとキャロ、レーネだけで行かせていいかどうか、決めあぐねている』

『なるべくなら、早く戻してやりたいが……』

再びマリサに目を向けると、彼女も丁度ヴィレイサーの方を向いた所だったのか、視線が合わさる。すると彼女は、はにかんで彼に手を振る。

『彼女の貴重な姿だとは思うが？』

『戻さないでいる訳にもいかないだろう』

『それもそうだな』

エルトはふっと笑い、彼もマリサに目を向ける。

『で、そのビデオカメラはなんだ？』

『ん？　なに、ただ単に彼女の映像を残しておこうと思っただけだ。』

『元に戻ったら殺されるぞ……』

『そこは君がなんとかしてくれると信じよう』

ヴィレイサーに責任を転嫁する気が満々なのか、エルトは遠慮なくビデオカメラを回し始めたのだった。

それがつい、先程までの出来事だった。

「おにーちゃん！　何して遊ぶの！？」

見た目は、出る所は出て、締まる所は締まっている無駄のない、そして艶めかしいボディを持つ大人のマリサ。だが、中身は純真無垢な少女そのもの。

どうにも、ギャップがあり過ぎてついていけなさそうな気がする。

「そうだなぁ……」

その可愛らしさに中てられたのか、ヴィレイサーはマリサの頭を優しく撫でて和む。それは、撫でられているマリサも同じなのか、頬を緩め切っている。

「マリサは、何がしたい？」

「ん～っと……」

可愛らしく小首を傾げて悩むマリサは、本当に子供なんだなぁと思う。見た目からは想像出来ないし、なにより普段から頼んでもしてくれないだろう。まぁ、別に頼む気はないが。

「あ、お医者さんごっこしたい！」

「よし、絵本を読んであげよう」

提案してきたマリサに対し、しかしヴィレイサーはその案に身の危険を感じた為に、聞かなかった事にして絵本を読み聞かせる事にする。

（本当に、精神は退行しているのか……？）

冷や汗を掻きつつ、ヴィレイサーはマリサの手を引いて仕事の邪魔にならない場所へ移動する。チラリと横目にマリサを見ると、彼女は上機嫌な顔をしていた。

『お医者さんごっこ』と提案されて、ヴィレイサーは彼女の精神状態を疑う。いつものように、からかっているのかもしれない――――そう思わずにはいられなかった。演技をしているのだとしたら、間違いなく今年の主演女優賞が取れるだろう。

（確かめる術はあるが……出来ればしたくはないな）

一応確かめる方法はあるのだが、もしもそれをしようものなら、演技は崩れ去るだろうが、怒られるだけでは済まないだろう。

（よくてスパークバレットが数十発喰らわされるだろうな）

慌てるマリサの光景を見られるのは貴重だが、命が幾つあっても足りない。

「ねぇ、おにーちゃん」

「何だ？」

「どうして『お医者さんごっこ』はダメなの？」

「納得してくれた訳じゃないのか……」

手を引かれていたマリサは急に足を止めて、ヴィレイサーを見上げる。その瞳には、納得していない怒りではなく、好奇心が滲んでいた。純粋な興味なのだろう。

「どうして『お医者さんごっこ』がしたいんだ？」

「ふぇ？　んー……やりたいから！」

やはり純粋な子供故か、まともな理由はないようだ。キラキラと目を輝かせ、興奮混じりに両手を振って遊びたい事を強調する。

「マリサ、残念ながら『お医者さんごっこ』をする為の道具がないんだ」

「えぇー……」

適当な嘘を吐き、諦めさせる。マリサは肩を落とし、すっかり気落ちしていた。

どっちが医者役をするかは分からないが、もしも万が一、ヴィレイサーが医者の役をしようものなら、マリサの衣服を脱がせる破目になる。出来る事なら、それは避けたかった。

「さて、どの本を読むか……」

部屋に着き、マリサを適当な場所に座らせ、何の本を読み聞かせるか考える。絵本でも良いのだろうが、どうにも彼女に似つかわしくない気がして、それでいいのかを悩む。と、その時――

ガシャーン！

「な、何だ！？」

――何かが割れる音が響き、ヴィレイサーは慌ててマリサのいる場所まで引き返す。

「ふぇ、っく……。　う、ひっく……」

「マリサ！」

数個のコップが砕け、その破片は零れたオレンジジュースの絨毯に散っていた。その中心で、洋服をジュースの色に染めて、マリサは泣きじゃくっていた。

「大丈夫か？」

「おにー…ちゃん……」

欠片を踏まぬようにマリサに近付き、彼女に怪我がないか確かめる。

「ごめん…なさい」

「俺が遅かっただけだから、泣くな」

泣きじゃくる彼女をお姫様抱っこして、その場から離れてタオルで優しく拭く。

「替えの洋服がないから、はやてに相談するか」

コップの破片を片付けつつ泣きじゃくって傍を離れようとしないマリサの頭を優しく撫でる。ギャップはあるが、子供だと言う事は認識しているので、怒ったりはしない。なにより、面倒を見ると言った以上は投げ出す事はしない。

「もう平気だから、泣くな」

「うぅ……ヒック……」

泣きじゃくっていたマリサも、どうやら落ち着きを取り戻してくれた様で、嗚咽が混ざってはいるものの、ヴィレイサーの目をまっすぐに見ていた。

「マリサは、どこも怪我してないかな？」

「……うん。　でも、コップが……」

「マリサに怪我が無ければ、それでいいよ」

不安そうな瞳で片付けられたコップの欠片を見るマリサを、ヴィレイサーはそっと抱き締める。

「それじゃあ、着替えを一緒に確認しようか」

「うん！」

ヴィレイサーが怒っていないと知ると、パッと笑顔になり、力強く頷く。ギュッとヴィレイサーの手を握ってくる事を考えると、どうやら避けられたりはしないようだ。

（妹の世話が、こんな事に役立つとはな）

小さい頃、スバルとギンガを相手にしていたお陰か、我慢強くなったと思う。先の事など既に忘れてしまった様に、笑顔を振り撒くマリサを横目に、ヴィレイサーは小さな笑みを浮かべた。

◆◇◆◇◆

「で、着替えさせてやりたいんだが……」

「何で私に相談するん？」

はやてに『マリサを着替えさせたい』旨を伝えると、彼女は不思議そうに首を傾げる。

「何でって……。　男の俺が着替えを手伝う訳にもいかんだろ」

「マリサの裸なら、見慣れてるんちゃう？」

ニヤニヤと笑うはやてに、ヴィレイサーは大仰に溜息を吐く。

「それとこれとは別だ」

「否定はせぇへんのな」

「しても聞く耳を持たないくせして、よく言う」

呆れを示す様に深い溜息を吐くヴィレイサーに、しかしはやては気にせずにマリサに近付く。

「あぅ……」

だが、精神が退行してから初めてはやてと会う為、マリサは慌ててヴィレイサーの後ろに隠れてしまった。

「マリサ、このお姉さんは怖い人じゃないから」

「ええよ。　無理強いするんはよくないし」

はやての前に引き出そうとするヴィレイサーを制し、はやては洋服棚を開く。そこには、普通の服に含め、コスプレに使うようなものまである。

「何だ、この服は……」

「わぁー♪」

呆れるヴィレイサーとは違って、マリサは好奇心が旺盛だからなのか、興味津々に見ている。

「リオスくんに着せよと思ってたやつやよ」

「今はヴァルハラ……だったか？　喫茶店の従業員だろ？　何でここにあるんだよ」

「送り返されるから、しゃーないやん」

自分は悪くないのだとでも言う様に、はやてひちょっぴり頬を膨らませて呟く。

「私、これがいい！」

そんな2人の会話に耳を貸さず、マリサは洋服棚から興味を持ったものを引っ張りだし、取っ替え引っ替えする。やがて気に入った1着を見つけて、ヴィレイサーに見せる。

「マリサ、ええもんを選んだなぁ」

「何故にメイド服？」

「だって、このフリフリが可愛いもん！」

マリサが選んだメイド服は確かに彼女の言う通り、フリフリの飾りが目立つ可愛らしいものだった。

「いつものマリサやったら、絶対に見れん光景やな」

「言ってやるな……」

「うぅ？」

2人の言っている事が分からず、マリサは首を傾げる。

「決めたのなら、着替えていいぞ」

「はぁーい♪」

ヴィレイサーに着替えを促され、マリサはいそいそと衣服を脱ぎ去る。ヴィレイサーがいる、目の前で。

「待て待て待て！」

慌てて止めに入り、ヴィレイサーは別室にて着替える事を促す。最初は渋っていたものの、『お菓子を作る』と言うと、彼女は喜んで別室へ消えた。

「気疲れとかしてるんと違う？」

「まぁ、確かに手間取る事はあるが、嫌に思ったりはしないさ」

「おにーちゃあん！」

「うわっ！？」

はやてと話していて気がつかなかったが、マリサがいきなり飛び付いてきた。それも、衣服は下着だけしか纏っておらず、白く艶かしい肌に、黒い下着が映えていた。

「せめて服ぐらい着ろ！」

愛用のロングコートをマリサに着せて、ヴィレイサーはようやく落ち着けると安堵の息を漏らす。

「それで、どうしたんだ？」

「これが取れないよぉー……」

「引っ張るのは止めなさい」

黒いブラを引っ張って取ろうとするマリサを制し、ヴィレイサーは溜息を零す。

「それは必要なものだから、身につけておけ」

「えー……キツイんだもん」

ぷくっと頬を膨らませるマリサに、ヴィレイサーの後ろにいたはやてが「なんや、この可愛い生き物！？」と驚愕していたが、それがヴィレイサーの耳に入る事はなかった。何故なら――――

「キツイ……だと？」

――――その点が信じられなかったからだ。

（おかしいな……アイツ、ちゃんと自分のサイズに見合ったものを身につけていると思ったんだが……）

サイズが偶然にも合わないものを誤って購入し、それを身に付けたのか。或いは精神が退行した以外にも身体が発育すると言う副作用があるのか。何れにせよ、キツイと言い張る彼女をそのままにしておく訳にもいかず、丁度手が空いているなのはに、マリサの下着を幾つか持って来てもらう事にした。

「すまないが、頼む」

「うん、もちろん」

男である自分が作業する事はできないので、下着を持ってきてくれたなのはに、取り替えもやってもらう。部屋の奥から、時折マリサの悩ましい声が聞こえてきているのは――――間違いなく幻聴だと願いたい。

「取り替えぐらい、ヴィレくんがやれば良かったやん」

「出来る訳ないだろ、阿呆」

「それにしても、マリサは随分と可愛くなったなぁ」

楽しそうに笑っているはやてとは違い、ヴィレイサーは溜息を吐く。

「いつまでもあの状態のままにしておく訳にもいかんだろ」

「なんや、惜しい気もするわ。　お、そや。　確かここに……」

ふと、はやては何かを閃いたかの様に呟き、机の中を漁る。

「はい、お待たせ～」

「えへへ♪」

すると、着替えを終えたマリサが、なのはに連れられて出てきた。メイド服に身を包んでも笑顔を絶やさないのは、やはり精神がそれほど退行している事を指している。普段の彼女なら、絶対に着ないだろう。

「マリサ」

「はい？」

はやてに呼ばれ、彼女の方に向き直った瞬間、パシャッと言う音と、フラッシュが走った。マリサはそれにビックリして、慌ててヴィレイサーの背中に隠れる。

「ん～、もう！　何でこんなに可愛いんや！」

「落ち着け……」

ヴィレイサーの背に身を潜めるマリサを追いかけ、はやては何度も写真を撮り、その度にマリサはそれから逃れようとしてヴィレイサーを壁にして彼の周囲をぐるぐると逃げ回る。それを追いかけるはやてを制して、カメラを取り上げる。

「ヴィレくんも、この写真が欲しいと違うん？」

「そんな訳……」

「じゃあ、現像したら誰かに売り捌こうと思う」

「……全部買い取らせてもらおう」

ニヤリと意地の悪い笑みを浮かべ、写真を売り捌こうとするはやてに、ヴィレイサーは致し方なく全てを買い取る事にした。

「なんや～、そんなにもマリサの写真が欲しいんか」

「誰の所為だ、誰の！」

自分が写真を欲しているとわざとらしく言われ、ヴィレイサーは憤慨するが、はやてはそれを気にも留めずマリサの頭を優しく撫で

る。

「マリサ、戻るぞ」

「はぁ～い♪」

これ以上ここにいる必要はないと判断し、ヴィレイサーはマリサを引き連れて部屋を出ていこうとする。しかし、そんなマリサをはやてが呼び止める。

「マリサ。　ヴィレくんを元気にさせるおまじない、知りたくないか？」

「おにーちゃんを？
うん、知りたい！」

目をキラキラと輝かせて、興奮気味に頷くマリサに、はやてはニヤリと笑った。

◆◇◆◇◆

「……めでたしめでたし」

「ふみゅぅ……」

部屋に戻り、自分の膝に座るマリサに絵本を読み聞かせ終わると、彼女は眠たそうな間延びした声を漏らし、ヴィレイサーの胸に寄りかかる。

「眠くなったなら、少しだけ寝ようか」

優しく頭を撫でて、ヴィレイサーはマリサを横にして膝の上に頭を乗せて寝かせる。

「おにーちゃん……疲れてるの？」

「ん？　どうしてそう思うんだ？」

くりくりとした円らな瞳でヴィレイサーを見上げ、マリサは心配そうな声色で訊ねる。

「はやておねーちゃんが言ってた。

『疲れてるから、元気づけるおまじないをしてあげな』って」

「変な事を吹きこまれていないだろうな……？」

「変な事って？」

はやてに何を吹きこまれたかは分からないが、奇妙な事をやられては面倒だと思ったヴィレイサーは冷や汗を掻くが、マリサはそれが意味するところが分からず、首を傾げて彼に問う。

「まぁ、なんでもないよ」

問われても答えられる事ではないので、とりあえず適当な事を言ってぼかす。

「それで、おまじないってどんな？」

「んっとね……」

身体を起こし、マリサはヴィレイサーの顔をじっと見つめて――

――

「ちゅ」

――――ヴィレイサーの頬にキスをした。

「何故……？」

「このおまじないが、おにーちゃんを元気にしてくれるって言ってたの」

満面の笑みを浮かべて明るく言うマリサに、変な事を吹きこんだはやてへの怒りもすっかり忘れてしまう。

「あの……それで、ね……」

「ん？」

「私にも……そのおまじない、して欲しいの」

懇願するように上目遣いで見詰め、それに加えてちょっぴり涙目になりながら願うマリサに、ヴィレイサーは頷いてしまいそうになるのを必死に耐える。もしもここで頷いて、マリサに口付けをするところを誰かに見られたらどうなるか分かったものではない。恋人同士なのだから別に構わないのだろうが、今の彼女は子供。いつもの彼女にするのならまだしも、今の彼女にしていいかどうか……。

「ダメ？」

人差し指を銜え、マリサはヴィレイサーに訊ねる。その仕草が、堪らないほど可愛くて――――――

「分かった」

――――――ヴィレイサーはつい、頷いてしまった。そして、躊躇い無く彼女の頬にキスをする。やはり、どんな状態になっても彼女には永遠に敵いそうもないらしい。

「エへへ～♪」

満足そうに笑うマリサに、ヴィレイサーもつられて笑ってしまう。そして飽きずに彼女の頭を優しく撫でてやると、次第に彼女の瞳はうつらうつらしてくる。

「おにーちゃん……」

「うん？」

「ずっと、おにーちゃんと一緒に居られる？」

「……あぁ、もちろん。
どんな事があっても、俺達は一緒さ。」

「ホント？」

「本当だよ」

「おにーちゃん……だぁ～い好き♪」

ヴィレイサーに抱きつき、マリサは安心しきった顔で彼の体躯に手を回して目を閉じる。早くも小さな寝息を立てて、彼女は眠ってしまった。

そんな彼女と、ヴィレイサーも抱きあう様にして向かい合い、笑みを浮かべて目を閉じた。

◆◇◆◇◆

「恥ずかしくて死にそうだわ……」

「大げさだろ」

翌日。

煎じた薬草を飲ませて、なんとか元に戻ったマリサは、昨日の出来事を思い出してベッドの毛布に包まって呟く。

戻ったとはいえ、恥ずかしさに赤面して毛布に包まって出てこようとしないマリサは可愛らしい……なんて言えば、またスパークバレットが飛んでくるかもしれないが。

「別に俺はからかったりしないって。
はやてが撮影した写真も、全部お前に渡しただろ？」

「それでも、エルトに撮られた映像はまだなのよね……」

「アイツ、ガードが固いからなぁ……」

2人でほぼ同時に溜息をつき、マリサはゆっくりと毛布から出てくる。次いで、ヴィレイサーは姿を現したマリサの隣に座し、そっと彼女を抱き寄せる。

「けど、それで俺達の何かが変わる訳じゃない……そう言ってくれたのは、マリサだぞ」

「当然の事を言っただけよ」

惑う事なくマリサは自分達の関係が変化しないと言ってくれた。

彼女がこちらを照れさせてくるのは相変わらずの様だ。

「エルトと話してくるわ」

「おう。　っと、そうだ」

「何？」

「今夜、一緒に飲もう。
そうしたい気分だろ？」

「えぇ、そうね。　そうするわ」

柔和な笑みを浮かべた所を見ると、どうやら少しは気分がすぐれた様だ。

「……あぁ、１つだけ言っておく必要があるわ」

「何だ？」

「私が“あの時”言った事……どれも、本気だから」

精神が退行していた時と同じ場所に――――ヴィレイサーの頬にキスをして、マリサは手を振って出ていった。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０２　「ずっと一緒……」（後書き）

鮮血
「マリサさんがｗ」

ヴィレイサー
「軽く死ねるな。」

鮮血
「そこまで言うか。
でもまぁ、確かにそうかもね。
幼児化じゃなくて、精神だけが幼くなったんだから、大人な彼女の姿であんな……「おにーちゃん、だぁ～い好き♪」……とか言われたら、死ぬわ！ｗ」

ヴィレイサー
「普段のアイツはクールビューティーだからな。
すさまじいギャップだろ……。」

鮮血
「いやぁ、ネタを提供して下さった神崎はやて先生には本当に感謝しております。
ありがとうございました！」

ヴィレイサー
「ありがとうございました。」

鮮血
「うん、この調子で他の人とも【ＳＴ（Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ）

シリーズ】をやりたい！」

ヴィレイサー
「ネタは無いけどな。」

鮮血
「そこがねぇ……。
とりあえず、幼児化ネタは少なくともあと3回は使う。」

ヴィレイサー
「3回って……流石にやり過ぎじゃないか？」

鮮血
「幼児化する過程が違うから問題無い。」

◆変身魔法の実験中にエラーが生じて戻れない

◇誤って幼児化する薬に触れる

◆故意に薬を飲まされる

ヴィレイサー
「なんか、一番最後が嫌な予感しかしないんだが……。」

鮮血
「【小さいヴィレイサーを見てみたい】と思ったとある方が、故意に薬を飲ませるだけだよ？」

ヴィレイサー
「何故そんな事を思った！？」

鮮血
「小さい君を見てもう1度撫でくり回したいと思ったんでしょ。」

ヴィレイサー
「今ので誰だか、大方見当がついたぞ……。」

鮮血
「まぁ、気にするな。
さて、よろしければ皆様との小話も書いてみたいので、何かネタとかあったらお願いします。
恋愛系に転がる可能性が高いですが、そこは『こうしてほしい』などの御希望があれば留意しますので。
寧ろ、皆様に書いてもらった方が嬉しいので書いてくだｓ（殴」

ヴィレイサー
「阿呆。」

鮮血
「ぐふぅ……つ、次の『ＳＴシリーズ』は、恐らく今度こそヴィレフェイになると思います。　お楽しみに。」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０３　「Ｌｏｖｅ　Ｆｏｒ　Ｙｏｕ」（前書き）

鮮血
「遂にヴィレフェイだぜ！」

フェイト
「ようやく……ようやくだよーっ！（泣）」

ヴィレイサー
「んなに泣くなよ……。」

フェイト
「だって、ヴィレイサーっていつもコラボ先の人と……。」

鮮血
「まだまだ小話は終わらんよ！」

フェイト
「わーん！（涙）」

ヴィレイサー
「泣かせてどうする……。」

鮮血
「お前さんが慰めればいいだけっしょ。」

ヴィレイサー
「ほら、フェイト。　そう泣くなよ。」（ギュッ

フェイト
「ぐすん……。」

鮮血
「ほ～ら、そんな事するから誰かさんが怒ってまっせｗｗｗ」

ヴィレイサー
「俺にどうしろと言うんだ……。」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０３　「Ｌｏｖｅ　Ｆｏｒ　Ｙｏｕ」

「変身魔法の実験？」

「うん」

自分が耳にした事が信じられなかったのか、ヴィレイサーは思わず、目の前にいるなのはに聞き返す。

「フェイトちゃんとヴィレくんに白羽の矢が立ったから」

「何で俺とアイツなんだよ……」

「色々なテストケースが欲しいんだって」

ぼやくヴィレイサーに、なのははそう返しながら先に歩き出し、

別室へ向かう。そんな彼女に続きながら、ヴィレイサーは自分に拒否権がない事に肩を落とした。

「失礼しまーす」

「あ、なのは」

実験を行う部屋に入るや否や、見た目が１０歳前後の少女が駆け寄ってきた。

「……フェイト、か？」

「うん、そうだよ」

金の髪と顔立ちが彼女に似通っている事から、ヴィレイサーは彼女がフェイトだと予測し、呟く。その呟きを聞き逃さず、フェイトはヴィレイサーを見上げて頷く。

「わぁ、ヴィレイサーが凄く大きい」

「ちっさ……」

いつもと違う相手の姿に、フェイトもヴィレイサーも感嘆の息を漏らす。

「実験は成功したみたいだな」

小さなフェイトの頭を軽く叩きながら、ヴィレイサーは「驚いた」とでも言うようにシャマルへと視線を向ける。

「ヴィレイサーもテストケースに選ばれたんだよね？」

「あぁ、まぁ。　だけど、お前が成功したのなら、俺までやらなくてもいいんじゃないか？」

「やっぱり、そう思う？」

自分だけが小さいのは恥ずかしいのか、或いは釈然としないのか。どちらにせよ、フェイトは他の人も自分みたく小さくなって欲しいようだ。

「ヴィレイサー、逃げたりするのはダメよ」

シャマルは、ヴィレイサーの心を見透かす様な口振りで釘を刺し、彼からエターナルを預かって準備を進める。その間、ヴィレイサーは壁に寄りかかって待つ事にした。

「ヴィレイサーは、小さくなりたくないの？」

すると、小さくなったフェイトがちょこちょこと歩み寄り、彼の顔を見上げながら訊ねる。

「特にメリットがないからな」

フェイトに「首を痛めるから上を向かなくていい」と言ってから、ヴィレイサーはメリットの有無で決めたのだと吐露する。

「でも、子供の視線になるのは新鮮だよ」

「まぁ、１つだけ……幼児化したくない理由に重要なのがあるんだけどな」

「なぁに、それって？」

可愛らしく小首を傾げるフェイトにその理由を告げようと口を開いた時、なのはが呼んできたので口を閉ざして彼女の元へ向かった。

◆◇◆◇◆

「で？　“戻れない”ってどういう事だ？」

幼児化したはずなのに、鋭い眼光に射抜かれているシャマルは正しく正座していた。

「エラーが発生したみたいで……」

「それは聞いた。　俺が知りたいのは、そのエラーが発生した原因だ」

「分かりません」

ヴィレイサーの問いに、シャマルは包み隠さず素直に言い、頭を下げる。

「まぁ、幸いな事に俺達は目立った仕事もないし、しばらく我慢するしかないか」

大仰に溜息を吐き、荒く頭を掻くヴィレイサーは、見た目こそ子供だが、その顔にあどけなさはあまりなく、１０歳よりも少しは大

人びて見える。髪も既に腰辺りまで伸ばしてあり、いつも見ている姿と遜色ない気がする。

だが、あくまでそれはそこまでの話だ。

「ヴィレイサーって……」

「ん？」

「子供の頃は中性的な顔立ちだったんだね」

フェイトのその一言に、ヴィレイサーの眉がピクリと動いたが、彼女はそれに気が付かずに続ける。

「髪も長いし……なんだか、女の子みたいだよ」

ブチッと、何かが切れる音がした。かと思うと、ヴィレイサーはフェイトの頬を指で摘まみ――――引っ張った。

「い、いひゃいよ、ヴィレイファー！？」

「この口が言うのか、ん？」

一応手加減はしている様だが、引っ張り、或いはむにむにと指で

凹ませたりと、フェイトの頬を弄くる。

「ヴィ、ヴィレくん、ストップ！」

慌てて、なのはが止めに入った事で、ようやくヴィレイサーはフェイトの頬を放す。

「もう、大人気ないよ」

「うるさい」

なのはの注意に対してヴィレイサーはいつもと変わらぬ態度を取るが、今の【見た目が子供】と言う状態ではまるで、【妹（フェイト）に素直になれない兄（ヴィレイサー）】の様に見える。

「なんだか、意地悪なお兄さんと、それでも甘える妹みたいね」

「そうですね」

シャマルの意見に同意を示す様に、なのはは頷き、苦笑いする。

◆◇◆◇◆

「それにしても、書類仕事も終わって暇だなぁ……」

「そうだね」

一応、自分が出来る範囲の仕事は粗方片付けてしまったので、ヴィレイサーとフェイトは暇になってしまった。

ごろんと寝転がり、ヴィレイサーは何気なく天井を見上げる。

「わぁ！」

そんな彼の視線に、いきなりフェイトが大きな声をあげて現れる。

「ぁ……えっと……」

しかし、驚いたりする事もなく、ヴィレイサーはなんの反応も示さず、フェイトはどうしたものかと考える。その瞬間――――

「わっ！」

「きゃっ！？」

――――ヴィレイサーが唐突に大きな声を出したので、フェイトの方が驚かされてしまった。

「ははっ、驚き過ぎだろ」

「も、もう！」

逆に自分が驚かされてしまい、フェイトは多少ではあるが恥ずかしさで頬を朱に染める。

「んー……童心に返ったつもりで、ヴィヴィオがいつもやっているゲームでもやってみるか？」

「いいよ」

ヴィヴィオは今、出掛けている為いないが、勝手に拝借しても問題ないだろう。

「『〇糸のカービィ』？」

「面白いよ」

適当に見つけたゲームソフトを見て、そのタイトルを呟くヴィレイサーに、フェイトは『なのはと一緒にやっている』と付け加える。

「じゃあ、やってみるか」

◆◇◆◇◆

「2人とも、何してるのかなぁ？」

休憩に入ったので、なのはは小さくなってしまった2人の様子を確認すべく、部屋に入る。すると、奥からヴィレイサーとフェイトの声が聞こえてきた。

「ちょっ！？　ヴィレイサー、私を乱暴に扱わないでよ！」

「お前こそ、俺の上に乗るな！」

（2人とも、何やってるのーっ！？）

耳に届いた2人の会話に、なのはは卑猥な事をしているのだと思い、顔を真っ赤にする。

「ただいまー♪」

そこへ、ヴィヴィオが元気よく部屋に入り、立ち竦んでいるなのはに目もくれずに奥へと進む。

「あ、おかえり、ヴィヴィオ」

「ふぇ？　えっと……フェイトママ？」

「うん、そうだよ」

「パパも……どうして2人とも、そんなに小さいの？」

「変身魔法が失敗したんだ」

魔法が失敗した際のリスクを教える為なのか、ヴィレイサーはそう言って、コントローラーをヴィヴィオに渡す。

「なぁんだ、ゲームやってたんだ」

ヴィヴィオの帰宅に、2人が慌てたりしなかったのを訝しんだなのはは、自分の考えをさっさと頭の中から消し去る。

「あ、なのは」

「お前は何をしていると思ったんだ？」

「追いかけっことか、隠れんぼとか？」

「精神は退行していないんだが」

ゲームに熱中し始めたフェイトとヴィヴィオを横目に、ヴィレイサーは手持ち無沙汰になったので惰眠を貪る事にした。疲労が貯まっていたのか、はたまた単に眠かったのか。どちらだか分からないが、ヴィレイサーはあっという間に眠ってしまった。

「むに……」

「俺の頬を引っ張っているのは誰だ？」

「ヴィヴィオ！」

引っ張られる感覚に目を覚ますと、笑顔を振り撒くヴィヴィオの顔がすぐ傍にあった。

身体を起こし、欠伸を噛み殺しながら腕時計で今現在の時間を確かめる。

「ヴィーレーにーいっ！」

「うわっ！？」

すると、背後からいきなり抱きつかれ、ヴィレイサーはそのまま抱えられた。足が地に届かず、浮いた感覚がしたのは一瞬で、すぐに何かが押し付けられる感覚で一杯になる。

「もう、可愛いなぁ～！」

「『可愛い』言うな！」

満面の笑みを浮かべてヴィレイサーを抱き締めているのは、スバルだった。彼女は中々ヴィレイサーの事を離そうとはせず、ギュッと抱いたままヴィレイサーを撫でたり頬をつついたりする。

「スバル、喜び過ぎ」

ヴィレイサーを弄くり回すスバルの隣にいるティアナは、苦笑しながらもカメラを構える。

「おい、何だそのカメラは!?」

「ギン姉に写真を送るんだよ」

スバルは至極当たり前とでも言う様にカメラの用途を話し、ティアナが構えるカメラに向かって笑顔を向けた。

◆◇◆◇◆

「お、お疲れ様」

「まったく……」

ようやっとスバルから解放されたヴィレイサーに、フェイトは苦笑混じりに彼に声をかける。

「でも……」

「ん？」

「ちょっと、羨ましかったかも」

「は？　誰が？」

「スバル」

「どうして？」

歩みを止めて、ヴィレイサーはフェイトの方を振り返り、首を傾げる。

「だって……あんなにヴィレイサーをギュッと出来て……」

「そういう事かよ……」

フェイトが母性本能を駆られ、ヴィレイサーの世話をしたいのだと言う事を訴えてきたので、彼は呆れる。

「こうして一緒に小さくなるのもいいけど……でも、ヴィレイサーをギュッとしたいなぁ……なんて思っちゃって」

「やられる俺の身にもなれよ……」

「で、でもでも！　今のヴィレイサー、可愛いし……」

「ほーお……？」

「い、いひゃいいひゃい！？」

『可愛い』と言う禁句を触れられ、ヴィレイサーはフェイトの頬を手荒に引っ張り、或いは彼女の頭を荒々しく撫でて、髪の並びを乱す。

「わわわっ！？」

「何で俺が『可愛い』とか言われなきゃなんねぇんだよ……」

フェイトの頭から手を離し、ヴィレイサーは苛立たしげに舌打ちする。解放されたフェイトは、「あはは」と苦笑いしながらも乱れた髪を手櫛で可能な限り元に戻していく。

「……お前の方が、その言葉が似合うだろ」

「ふぇ？　何か言った？」

「……なんでもねぇよ」

小首を傾げるフェイトに対してはぐらかし、ヴィレイサーは止めていた歩みを再び進める。そんな彼に、フェイトはふっと笑みを零し、彼の腕に抱きついてそっと耳元で囁く。

「ありがと♪」

ヴィレイサーが呟いた事をしっかり聞いていたのか、フェイトは満面の笑みを浮かべて彼と唇を重ねた。

後日――――。

「ヴィレイサー！」

「嫌だ」

2人が元の体格に戻った次の日。若干興奮気味で迫るフェイトに対して、ヴィレイサーは冷淡に返す。

「小さくなろうよ！」

「だから！　断固拒否するって言っているだろ！」

「私がしっかり面倒みるから！」

母性本能に掻き立てられたからなのか、フェイトはしばらく、ヴィレイサーを小さくする事を願い出ていた。

それが叶えられたかどうかは――――分からない。

Ｓｈｏｒｔ Ｔａｌｅｓ－０３「Ｌｏｖｅ Ｆｏｒ Ｙｏｕ」（後書き）

鮮血
「とりあえず一言いいたい。」

ヴィレイサー
「ん？」

鮮血
「早く結婚しろよ。」

ヴィレイサー
「そういうのはちゃんと、ステップを……。」

鮮血
「あ、一応結婚の際には考えるのね……。」

ヴィレイサー
「当然だ。」

鮮血
「とか言いつつ、どこぞの某さんから渡される婚姻届をいつも突っ返しているよね。」

ヴィレイサー
「うるさい。」

フェイト
「ねぇ、ヴィレイサー……。」

ヴィレイサー
「嫌だ。」

フェイト
「何で！？　小さくなってよぉ……（涙目）」

ヴィレイサー
「そんな事で泣くなよ！」

フェイト
「だってぇー……。」

鮮血
「さて、次の小話かもしくはノクターンを書こう！」

フェイト
「またコラボ！？」

鮮血
「フェイトの次の出番はいつかなぁ～ｗｗｗ」

フェイト
「今すぐ小さくなって！」

ヴィレイサー
「出番が欲しいのか……。」

フェイト
「ヴィレイサーと一緒に居たいだけだよ！」

鮮血
「ストレートー……。」

フェイト
「あ、あう／／／／／／／／」

鮮血
「とりあえず、小さくなったヴィレイサーの写真が欲しい方にはプレゼントーw」

ヴィレイサー
「いつの間に撮ったんだ……。」

鮮血
「あ、フェイトとのキスの瞬間もありますよw」

フェイト
「ちょっ！？／／／／／／／／」

鮮血
「それが渡ったらどうなるか分からないけどねーwww」

ヴィレイサー
「はぁ……。」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０４「黒白の恋」（前書き）

鮮血
「今回のお話は、ギンガをメインに置いた恋愛話です。」

ギンガ
「はい。」

フェイト・ヴィレイサー
（（き、気まずい……。））

鮮血
「フェイトとヴィレイサーの反応からも分かる通り、ちょっと苦いお話です。
ギンガが恋する乙女であり、また素敵な女性です。　では、どうぞ。」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０４「黒白の恋」

「はぁ……」

艶やかな髪が、溜息を吐いてベッドに倒れ込もうとしていた少女に続いて、ふわっと舞って、彼女と一緒に倒れる。どこか幻想的な一面だったそれは、一瞬よりも……もしかしたら、刹那の時間よりも短かったシーンだったかもしれない。

「……振られちゃった」

少女――――ギンガは、その事を自分に言い聞かせるようにして言いながら、しかし心底惚れていた彼への想いを断ち切る事が出来ない苦しさも味わっていた。

「これが、あの人の言っていた苦しさ……」

身体を起こし、胸に手を当ててその苦しさと、それを教えてくれた人の事を思い出す。

その人は、自分が羨むぐらい美しくて、強くて……本当に、自分が好いていた人が想い人として選ぶのは当然だと言えた。正直な所、悔しさよりも自分が想いを伝えられなかった事の方が腹立たしかった。

『相思相愛で良かったですね』

『ありがと、ギンガ』

今日は偶々偶然、その女性と飲みに行く機会があった為、ギンガは彼女と、自分が好いていた人が結ばれた事を祝福した。

強いお酒は飲めないギンガだったが、相手に合わせて少しだけ酌み交わす。それがいけなかったのかどうかは分からないが、ギンガはつい、『自分もその人の事を好いていた』と打ち明けてしまった。

誰にも負けないくらい、その人の事が好きだった――――。

遠くに行ってしまうようで怖い――――。

もう、1度話し始めたら止められなくなってしまっていた。ギンガはそのまま総てを吐露し、しかし目の前に居る女性に陳謝した。

『ごめんなさい……私……』

『いいんだよ、ギンガ』

女性は、ギンガに対して怒ったりせずにそっと優しく抱きしめてくれた。

『ギンガは、本当に大好きだったんだね』

『は…い……はい！』

涙を零し、嗚咽交じりに頷くギンガを、女性は急かさずにただただ静かに抱き締めていた。

『ねぇ、ギンガ。
私、これからギンガに残酷な事を言うけど……いいかな？』

『……言って…ください』

『あのね……ギンガのその気持ちを――――好きだっていう気持ちを、ずっと持ち続けて欲しいの』

『え……？』

訳が分からなかった。

それは、ギンガが少しでも可能性があるのなら、と望んでいた事でもあったからだ。

『あの人は、とっても脆い時があるから……だから、ギンガに別の好きな人が出来るまで、彼の事をずっと想っていて欲しいんだ』

『で、でも……。』

【好きでいていい】――――そう言われて、しかしギンガは素直に喜べなかった。

『そりゃあ、妬けちゃうかもしれないけど……。

でも、ギンガだって辛いんだよ？　それでも、ずっと彼の事を好きだって想っていられる？』

『……はい！』

その時は、まさか【恋慕を抱き続ける】という事がこんなにも苦しい事だとは思わなかった。伝えたい――――心がそう、叫んでいるにも拘らず、それを赦されない。そんな苦しみだった。

「苦しい……」

つい、誰かに自分の苦しみを分かってもらいたくて、ギンガは呟いた。だが、自室の中には当然の様に彼女しかいない。だから、誰にもその呟きは届かず、故に、益々苦しくなった。

「でも……好きでいられるんだよね」

好きでいられる――――彼の事を、好いていていい。その明確な答えが、ギンガを安堵させてくれた。

苦しみと背中合わせの恋。

それは甘くて……だけど、とっても切なくて……。

ギンガはベッドから立ち上がり、部屋を出ていこうとして――――しかし、ふと、机の上に置いてある1つの写真立てに目がいった。そこに写っているのは自分と……そして、好きな人だった。

「さよなら、私の……好きな人……」

想いを断ち切る訳ではない。ただ、振られた事に踏ん切りをつけただけだ。

まだ自分は、彼への想いを完全には絶てない様だ。

そんな自分に苦笑いしながら、その写真立てを伏せて電気を消し、部屋を出ていった。

「兄さん……今日、一緒に飲んでもいい？」

ギンガの目の前に居るのは、好きな人――――――――ではなく、たった1人の兄だった。

Ｓｈｏｒｔ Ｔａｌｅｓ－０４「黒白の恋」（後書き）

鮮血
「と言う、話でした。」

ギンガ
「なんだか、奇妙な感じです。」

鮮血
「今回は、対になる要素が結構多かったね。」

【好きでいられる幸福】と【想いを伝えられない苦しみ】
【甘い恋慕】と【苦く切ない恋慕】
【好きな人】と【たった1人の兄】

鮮血
「……って所だね。」

フェイト
「き、気まずい……。」

ヴィレイサー
「俺の方が気まずいだろ……。」

ギンガ
「でも、フェイトさんは優しいです。
私の気持ちを、潰さなくていいんですから。」

鮮血
「ギンガは本当に、ヴィレイサーが大好きなんだね～。」

ギンガ
「あう……／／／／／／／／」

鮮血
「この調子で、君とヴィレイサーのノクターンとか書きたいなぁ～
……。」

ギンガ
「に、兄さんとの……。」

ヴィレイサー
「その際には、俺はお前の兄じゃないけどな。」

ギンガ
「そうだね。　ヴィレイサーさん……だね。」

鮮血
「呼び捨ての方が合うかなぁ……。」

フェイト
「なんか、ギンガの方が待遇されている気が……。」

鮮血
「む、ラグナレクではヒロインを、フェイトからギンガに変更しようかなｗ」

フェイト
「えぇ！？」

鮮血
「破局して、新ヒロインと恋愛する展開なんて、早々ないでしょｗ」

フェイト
「そ、そんな理由で……ｏｒｚ」

ギンガ
「だ、大丈夫ですよ、フェイトさん！
あんな屑作者さんに、そんな事出来るはずが無いんですから！」

鮮血
「ヒドス……ｏｒｚ」

ヴィレイサー
「事実だけどな。」

ギンガ
「次回もお楽しみに～。」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０５　「私の王子様」（前書き）

鮮血
「ＳＴシリーズの５つ目です」

ヴィレイサー
「んー……」

鮮血
「どったの？」

ヴィレイサー
「いや……これを読んで思うんだが、俺ってロリコンじゃん！？」

鮮血
「いや、元は同人誌のネタだからね。
そうなってもしょうがない」

ヴィレイサー
「……ｏｒｚ」

鮮血
「愛に歳の差なんて関係ないでしょ」

ヴィレイサー
「まぁ、そうだけどな」

鮮血
「今回の小話は、イツキ先生の作品、『魔法少女リリカルなのは

～夜天を射る弓～』より、リカちゃんとの恋のお話です。
幼いながらも抱いている、まだまだ甘さたっぷりな恋になっているといいなぁなんて思ってますw」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０５　「私の王子様」

「ん……むぅー……」

必死に本棚へと手を伸ばし、目的のものを取ろうとしているのは、まだまだ幼い少女――――リカだった。

彼女は故あって、はやてやアルク達が保護している少女だ。

「届かない……」

残念そうに呟き、しかしどうしても読みたいものがあるらしく、諦める気配はなかった。彼女は周囲をキョロキョロと見回し、椅子に乗ろうとするが、それを見つける事は出来なかった。

「誰も……来ないよね？」

出入り口となっている扉をじっと見つめてから、リカは足元に転がっていた本を何冊か重ね合わせ、靴を脱いでから覚束ない足取りでそこへ乗る。

誰かに見つかれば、『行儀が悪い』と叱られるかもしれない――――そう思い、リカは人が入ってくるかどうかが気になったのだ。

「もう……ちょっと……」

「リカ？　何をやっているんだ？」

「え……きゃっ！？」

後もう少しで、本に手が届く――――そう思った瞬間、聞き慣れた声がかかって弾かれた様に声がした方へと顔を向けると、それが仇となってリカはバランスを崩してしまう。

「…っと、大丈夫か？」

「う、うん」

だが、倒れ切る前に声をかけてきた人物に――――ヴィレイサーに受け止めてもらい、事なきを得た。

ヴィレイサーはリカをそっと下ろしてやってから、彼女と同じ目線になる様に膝をつく。

「本の上に立つなんて、行儀が悪いぞ」

「ご、ごめんなさい……」

予想通りの事で注意を受けてしまい、リカはしょんぼりとする。そんな彼女に、ヴィレイサーは笑って頭を撫でてやる。

「でも、怪我がなくて良かったよ」

「えへへ」

ヴィレイサーの手は暖かくて安心できる。それが嬉しくて、リカは顔を綻ばせた。

「それで、どの本が読みたいんだ?」

「あの……青い背表紙の……」

リカが指差しながら説明してくれた本を取り、ヴィレイサーはしげしげとその本のタイトルを見詰める。

「ふーん。『お姫様全集』、ね」

「にゃっ!?　よ、読まないでぇー！」

ヴィレイサーにタイトルを読まれた事で、リカは素っ頓狂な声を上げて慌ててヴィレイサーから本を取ろうとするが、残念ながら身長差があり過ぎる所為でそれは叶わなかった。

「悪い悪い」

だが、ヴィレイサーはリカに謝ってから、それを渡す。

「笑わないの？」

「いや、どうして笑うんだよ？」

「……だって、リカがお姫様なんておかしいとか……」

「そんな事、思わないよ」

不安そうにするリカに、ヴィレイサーは笑みを浮かべてそれを否定する。

「リカみたいに、何かに憧れたり、何かを羨んだりするのはいいことだ。
でないと、俺みたいに擦れた大人になるぞー？」

リカをからかう様に言って、ヴィレイサーは彼女を優しく撫でた。
するとリカは、嬉しそうに目を細めてそれを受けていた。

「ほら、ご飯が出来たから行こうか」

「……うん♪」

ヴィレイサーが差し出してくれた手を握り返しながら、リカは笑みを浮かべる。

（お兄ちゃんの手……温かい）

リカは、自分の手を握ってくれているヴィレイサーの手を見詰め、そう思った。だが、それ以上に――――

（撫でてもらった所、あついなぁ）

――――ヴィレイサーに撫でられた箇所が、熱を帯びていた。

◆◇◆◇◆

夕食を食べ終えてから、リカは既にベッドの上でずっと本を読んでいた。ヴィレイサーに取ってもらった『お姫様全集』なるものだ。

あまり夜更かししているとメイヤやはやてに叱られると思い、ある程度読んだ後、2人が寝ついていてから再びその本を開いた。

「いいなぁ……」

そこに収録されている話は、どれも同じ終わり方だった。最後には、王子様が出てきて終わりにしてくれる――――言うなれば、典型的な終わり方だ。

リカは、思わず王子様が現れて幸せになっていくお姫様を見てそう漏らしてしまう。本の中の出来事だと言ってしまえばそれまでなのだが、幼心に、素直にそう思ってしまった。

「あれ？」

ふと、窓の外に見知った顔を見つける。

「お兄ちゃん？」

ヴィレイサーだ。

リカは、本を閉じて1人で外へと出ていった。

◆◇◆◇◆

「ふぅ……」

「お兄ちゃん」

「うわっ！？」

溜息混じりに適当な場所に腰掛けた瞬間、背後からいきなり声をかけられてヴィレイサーは飛び上がりそうになる。

「リカ」

だが、声をかけてきた相手がリカだと分かると、ヴィレイサーは安堵の溜息を漏らす。

「夜更かししちゃ、ダメだぞ？」

「してないもん。　目が覚めちゃったの」

『本を読んでいた』など、口が裂けても言える訳がなく、リカは適当な理由をでっちあげて、さもそれが当然の様に頬を膨らませてその理由を前面に引き出した。

「何だ、そうだったのか」

それが功を奏したのか、ヴィレイサーはリカの言葉を信じてくれた。嘘が通じた事に安堵しながらも、ちょっぴり罪悪感を持ったリカは、彼の隣に座す。

「眠れないの？」

「んー……まぁ、ちょっとな」

リカの問いかけに、しかしヴィレイサーははぐらかすだけで、理由を教えてはくれなかった。

「リカが風邪をひいたら大変だから、戻ろうか」

冷たい夜風が吹いてきたので、ヴィレイサーはリカを抱っこして室内へと戻った。

「ココア、飲むか？」

「うん」

ヴィレイサーがココアを用意してくれている間、リカは大人しく椅子に座って待つ事にした。

「そういえば……」

ふと、ヴィレイサーは何かを思い出したような声を出し、出来たココアをリカの前に置きながら訊ねた。

「本は読んだのかな？」

「うん。　でも、全部最後が同じだった」

「どんな終わり方だったんだ？」

ココアを一口飲んでから、リカは語ってくれた。

「お姫様は……境遇は違えど、みんな、王子様が迎えに来てくれて、めでたしめでたし……って言う感じだったよ」

「へー。　やっぱり、羨ましかったか？」

「うん。　王子様に迎えに来てもらえて、幸せそうでいいなぁ……って」

リカは、事件に巻き込まれてしまった所為で家族を失っている。故に、人並み以上に誰かの温もりを求め、幸せを欲するのだろう。

「それじゃあ、リカも早く王子様を見つけないとな」

皮肉が通じるとは思えないが、ヴィレイサーはリカをからかうみたくそう言った。

「だいじょぶ」

「え？」

「もう、リカの王子様は見つけたもん」

「…へ、へー……」

リカの言葉はまるで爆弾の様で、ヴィレイサーの言葉を詰まらせるには充分だった。

（な、何だ、このモヤモヤとした感じは……？
娘を嫁に出す……みたいな？）

悶々とした気持ちを抱え、ヴィレイサーは少々苛立つ。

「ふみぃ……」

「ん、リカ？」

返事をしないでいると、リカが間延びした声を出す。そんな彼女に視線を向けると、彼女は眠たそうな表情をしており、ヴィレイサーがそれに気がついた時には、リカは机に突っ伏してしまった。

「リカ、こんな所で寝るな」

「んみゅぅ……」

軽く揺すってみるが、リカは起きそうにもなかった。

「しょうがない、か」

リカを抱き抱え、ヴィレイサーは自室に足を運ぶ。

「世話の掛かるお姫様だな」

小さな寝息を立てているリカの寝顔を見詰め、ヴィレイサーは苦笑しながらも彼女を自室のベッドにそっと寝かせる。メイヤかはやての部屋でもいいのだが、流石にこの時間に起こすのは気が引ける。

「おやすみ、お姫様」

リカを起こしてしまわぬ様、静かに彼女を撫でてから、ヴィレイサーはリカの隣で眠る。リカは、夜に1人で寝るのが怖い為、そうしているのだ。

「ん、みゅ？」

ヴィレイサーが眠りについた時、リカは目を覚ました。

「お兄ちゃん？」

隣で眠っているヴィレイサーを呼んでみるが、彼はぐっすりと眠っているようで、起きる気配はなかった。

「おやすみなさい、お兄ちゃん」

リカは音もなくヴィレイサーに顔を近付け、そして――――――――。

◆◇◆◇◆

「リカがいない？」

「そうなんよ……朝起きたら、ベッドがもぬけの殻で……」

明朝。はやてからの報告を受けて、アルクはリカが居ない事を知る。

「ヴィレイサーも起こした方がいいな」

探す人数は多い方がいいと思い、アルクははやてを連れてヴィレイサーを起こす事にする。

「ヴィレイサー、起きろ！」

アルクの声に、しかしヴィレイサーは中々起きようとはしない。どうやらまだ眠い様だ。

「ヴィレイサー！」

無理矢理起こすしかないと判断したアルクは、ベッドのシーツを引っぺがす。と――――

「「あ……」」

――――ヴィレイサーの隣に、リカが居る事を目の当たりにした。

「な、何やってんねん、このロリコン！」

「ダァッ！？」

はやての叫びと共に、ヴィレイサーの額にチョップが振り下ろされる。その痛みに、ヴィレイサーはようやく目を覚ました。

「朝っぱらからご挨拶だな……」

「リカちゃんを連れ去って、何をしようとしたんや！？」

「何って……別に何もしてねぇよ。
勝手に勘違いすんな」

「んー……みゅ？　おは、よー……」

傍で口論が繰り広げられた事でリカも目を覚まし、のそのそと起き上がる。

「り、リカちゃん。　ヴィレイサーに何もされてへんか？」

はやての問いかけに、リカはしばし考え込み――――

――――そう答えたのだった。

「ナイショ♪」

「こら、リカ！」

「えへへ♪」

リカの思わぬ回答に、ヴィレイサーははやて達に説明してもらうよう頼むが、彼女は頑なにそれを拒んだ。

（気付いてくれるまで、ナイショだもん）

ヴィレイサーに微笑みながら、リカは心の中でそう呟いた。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０５　「私の王子様」（後書き）

鮮血
「ロリコン、ロリコンｗｗｗ」

ヴィレイサー
「違うって言ってんだろうがぁ！」

鮮血
「と言う訳で、ロリコンとリカちゃんのお話でした。」

ヴィレイサー
「まだ言うか！」

鮮血
「怒るなってｗ」

ヴィレイサー
「まったく……。
そういえば、今回はメイヤの姿が一切なかったな？」

鮮血
「まぁ、うん。　出すのも気がひけたので。
はやてに見つかったから、あそこはチョップで済まされたけど、
メイヤさんだったら間違いなく脳天打ち抜かれてるだろうからね」

ヴィレイサー
「否定できん……。」

鮮血
「しかし、流石はフラグ最高神や特級フラグ建築士委員会終身名誉会長に師事しただけはあるよね！」

ヴィレイサー
「師事してねぇし！」

鮮血
「小話のネタも随時募集中なので、何か閃いた方はお願いしまーす。」

ヴィレイサー
「やれやれ……。」

鮮血
「ん、リカちゃんの相手はもう疲れた？」

ヴィレイサー
「んな事言ってねぇ！
可愛いお姫様の相手をしてやれるのなら、光栄なことだろ。」

鮮血
「やっぱりロリコンじゃん。」

ヴィレイサー
「違う！」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０６　「ポッキーゲーム（コロナ編）」（前書き）

鮮血
「今日はあずにゃんの誕生日であり、ポッキー＆プリッツの日ですねｗ」

ヴィレイサー
「で、何でこうなった？」

鮮血
「いや、Ａｒｉｓｈｉａ先生の活動報告を覗いたら、『これを見た人にはポッキーの日ネタをやっていただきましょうか』とか書かれていたから。」

ヴィレイサー
「せめて活動報告であげろよ……。」

鮮血
「まぁ、いいじゃんｗ」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０６　「ポッキーゲーム（コロナ編）」

「ポッキーゲーム？」

「うん、なのはママが言っていたんだけど……リオとコロナは知ってる？」

放課後。図書館でいつもの様に本をいくつか選んでいたさなか、ヴィヴィオが今朝、なのはから聞いた『ポッキーゲーム』とやらを知っているかどうかを、友人の２人に訊ねる。

「私は知らない。　コロナは？」

「私も」

リオが即座に知らないと答え、コロナに聞いてみるが、彼女もリ

オと同様に初耳の様だ。

「あのね、こういうお菓子があるんだけど……」

ヴィヴィオは、ノートに絵を描きながら説明を開始していく。実物を見せる方が早いのだろうが、生憎とここは図書館だ。お菓子を取り出すなんて以ての外だった。

「で、この両端を2人の人がそれぞれ咥えて、ちょっとずつ食べていくの」

「え？　でもそうしたら、最後はキスしちゃうんじゃ……」

「そうなんだよね。
でも、その手前で折れば十分楽しめそうだと思うよ？」

リオのツッコミに、ヴィヴィオは苦笑しながらも同意するが、キスしなければいいという解答を返す。

「ヴィヴィオ、やってみたいの？」

「そういう訳じゃないけど、なんか気になったから……」

コロナの指摘に、ヴィヴィオは親と慕う人が口にしていた事で、

随分と気になっていた事を漏らす。

「じゃあさ、今日はヴィヴィオのお家でそのポッキーゲーム……だっけ？　それをやってみようよ！」

「「え？」」

リオの提案に、ヴィヴィオとコロナは声を揃えて驚き、顔を見合わせる。そして、すぐに顔を綻ばせ――――

「「いいよ」」

――――それを承諾したのだった。

◆◇◆◇◆

「……むぅ」

「やっぱり難しいね」

早速、図書館での本を借りる事を早々に切り上げ、ヴィヴィオの家ではポッキーゲームを行っていた。ヴィヴィオとリオが繰り返す中、ポッキーは途中――――それも長さがある状態――――で折れてしまう。

「何やっているんだ？」

「あ、パパ」

そこへ、ヴィレイサーが飲み物を持って、ヴィヴィオの部屋へと入ってきた。

「ねぇ、パパはポッキーゲームって出来る？」

「ポッキーゲーム？　無理だな」

飲み物をそれぞれ彼女達の手近な箇所に置いていると、ヴィヴィオが問うてきた。しかし、ヴィレイサーはそれを聞いて苦笑い混じりに即答した。

「ヴィヴィオ、もう1回やってみよう！」

「いいよ」

リオは負けん気が強いのか、もう1度ヴィヴィオとポッキーゲームをやる事にした。それを横目に、ヴィレイサーはその光景を見ながら、空いたお皿やコップをお盆に乗せる。

「コロナも挑戦してみたか？」

「はい。　でも、リオとヴィヴィオの方がより短くなっていましたから、2人に任せます」

「そっか」

お盆に全て乗せた後、ヴィレイサーはそれを持って部屋を出ていこうとするが、ついでに空いたお菓子の袋も持とうとする。

「あ、お手伝いします」

コロナが、ヴィレイサーの取ろうとしていた分の袋を持って、共に出ていく。

「ごめんな、手伝わせちゃって」

「いえ、これくらいはしないと」

ヴィレイサーが申し訳なさそうに言うと、コロナは首を横に振って笑みを見せる。ヴィレイサーの隣に立ち、お盆に乗っているお皿やコップを流しに置く。

「……あの」

「ん？」

「ヴィレイサーさん、本当にポッキーゲームって苦手なんですか？」

「苦手って言うか、やった事がないからな。途中で折るのは目に見えているよ」

「そ、それじゃあ……試しに、やってみませんか？」

コロナはほんのりと頬を赤くして、懐からポッキーを見せつつ言う。その姿に、ヴィレイサーは不覚にもドキッとしてしまう。

ヴィレイサーが戸惑い、呆然とその場に立ち尽くしていると、コロナが袋からポッキーを取り出し、それの端を咥えてヴィレイサーに反対側の尖端を静かに向けた。その行動が何を意味するところが分からないほど、ヴィレイサーは鈍感では無かった。

彼女の前に跪き、コロナと同じぐらいの位置になるまで身を屈めて、彼女が咥えているポッキーの端とは反対側を咥える。

それが合図となり、コロナはヴィレイサーに次第に顔を近付けていく。それはヴィレイサーも同様で、彼もコロナへと近づいた。

だが――――

「あ……」

――――ポッキーは途中で折れてしまった。

「……もう1回、してみるか？」

「……はい」

ヴィレイサーの戸惑いがちな質問に、コロナも頬を赤くしたまま頷く。

「ん……」

互いに再びポッキーを咥え、顔を近付けていく。ヴィレイサーの吐息がすぐ目の前のところで感じられて、コロナは自分の鼓動が彼に聞こえてしまうのではないかと、気恥ずかしくなる。

「……また、折れちゃいましたね」

そこで慌てたのがいけなかったのか、ポッキーは先程よりも短くなったとはいえ、唇を重ねるまでには至らなかった。

残念そうに、折れてしまったポッキーの欠片を見詰めながら、コロナは苦笑し、そしてヴィレイサーに自ら近づいていき――――

「ん……」

――――唇を重ねた。

「もどかしいのは、あまり好きではないので……直接（これ）で、いいですか？」

満面の笑みを浮かべ、コロナはヴィレイサーの手をおずおずと取った。

「断ると思うか？
俺は、まどろっこしい事が嫌いだ」

コロナが握ってくれた手を握り返し、ヴィレイサーは彼女を抱き寄せて、キスをし返した。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０６　「ポッキーゲーム（コロナ編）」（後書き）

鮮血
「またもヴィレイサーがロリコンに！ｗ」

ヴィレイサー
「ふざけんな！」

鮮血
「ふざけてない！　至極真面目だよ！」

ヴィレイサー
「余計に悪いだろうが！
何でコロナなんだよ！」

鮮血
「だって、コラボをしようと思っても、時間がなかったし。」

ヴィレイサー
「他の原作キャラは？」

鮮血
「こういうのは、子供に押されるから君らしいんだよｗｗｗ
ディードでも良かったかもね」

ヴィレイサー
「はぁ……。」

鮮血

「って言うか、前もこんな事した気がする。」

ヴィレイサー
「は？」

鮮血
「確か、どっかでポッキーゲームのネタが出ていて、君が「まどろっこしいからこれで勘弁」とか言いながら、直接キスしてなかった？」

ヴィレイサー
「……なんか、記憶が曖昧だから何とも言えんが、あった気がする……。」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０７　「ポッキーゲーム（ジークリンデ編）」（前書

鮮血
「と言う訳で、要望が幾つかあがりましたので、ジークリンデ編でございます」

ヴィレイサー
「なんか、当初予定していたのとは違ったんだって？」

鮮血
「もっと短くなるかと思っていたんだけどね。
それなりの長さになったｗ」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０７　「ポッキーゲーム（ジークリンデ編）」

「ゴール！」

「……ぜ、はぁ……」

一足先に目標地点に到達した少女に、男が続き、彼は先の少女よりも息を乱していた。

「なんや、ヴィレイサーはやっぱり柔なんやね」

「走る距離、長過ぎだろ……」

上がった息を整えながら、自分が走ってきた道を顧みるのは、青紫色の髪を一条に束ねたヴィレイサーだった。蒸れない様に、という事で、先にゴールした少女がポニーテールにしたのだ。

「ジークリンデは、まだ平気なのか？」

「うん。　だって、ウチはこれが初めてやないもん」

ヴィレイサーにジークリンデと呼ばれた少女は、ツインテールの髪を揺らして笑っていた。どうやらまだまだ余裕がある様だ。

「ちくしょう……武術なら負けないんだけどなぁ……」

「ヴィレイサーの体術はずるいやん。
ウチ、あんなんは見た事無いんよ？」

「見た事が無くて当たり前だ」

ヴィレイサーの言う通り、ジークリンデが彼の武術を知らないのは当然だ。地球には多くの武術が存在している。空手、柔術、中国拳法、ムエタイ、カラリパヤット……などなど、本当にあまたの武術があるが、それらを全てジークリンデが知っているはずもないのだ。

故に、それらの武術を多少なりとも齧っているヴィレイサーに翻弄されるのも、致し方ないと言えた。

「ほら、休息しよ？」

「あぁ」

ベンチに座る事を促されて、ヴィレイサーはそこにドッと座した。しかし、ジークリンデはどこかへと駆けていってしまった。呼び止めようとも思ったが、声を出すのも面倒な程、疲れ切っていたので止めた。

「疲れた……」

何気なく呟き、ヴィレイサーはそのまま視線を蒼穹へと向ける。青く澄んだ空は、雲がちらほらと見受けられるものの、晴天と呼ぶに相応しかった。風が、汗ばんだ身体を包みこんで、癒してくれる。

「ぴと」

「うわ!?」

と、いきなり頬に冷たい感触が走った。それに驚いてベンチから立ち上がると、後ろでクスクスと笑っているジークリンデがいた。その手には、飲み物の缶が握られている。

「ジークリンデ!」

「あ、あはは！　ご、ごめんって！」

声を張り上げるヴィレイサーだったが、その顔に怒りはなく、笑んでいた。悪戯をしたジークリンデに仕返しをしようと、こちょこちょと擽る。

「あは、あはは！　く、擽ったいから、止めてぇな！」

「まったく」

充分に擽ったと判断したヴィレイサーは、笑い過ぎて呼吸を乱したジークリンデから飲み物を受け取る。

「もぉ、そこまで怒らんでもええやん」

「別に怒ってねぇし」

「嘘ぉ？　こ～んなに頬を膨らませてるやん」

ぷにぷにと、その感触を確かめる様にジークリンデはヴィレイサーの頬をつつく。されるがままと言うのは甚だ頂けないが、相手がジークリンデとなると、どうにもそれでもいい気がした。

「ぷにぷに～」

「いい加減にしろ」

「んにゃ!?」

いつまでも触られては敵わない為、ヴィレイサーはお返しとばかりにジークリンデの頬を引っ張る。

「やっぱりお前の頬の方が柔らかいし」

「や、引っ張らんといて」

「痛くしないっての」

軽く摘む程度で済ませ、ヴィレイサーはジークリンデが自分の頬を離したので、彼女を解放する。

「あ、ヴィレイサー。　お菓子あるんやけど、食べる?」

「うーん……俺はいいかなぁ」

「え~?　疲れた身体に、当分は必須やよ?」

言いながら、ジークリンデはポッキーを1本だけ取り出してそれをヴィレイサーの口元に向けた。

「食べよ？」

「……ん」

ジークリンデの笑みに負けて、ヴィレイサーは目の前に差し出されていたポッキーを咥えた。すると、ジークリンデは手を離し、自分の分を食べ始めた。

「お菓子ばっか食べていると太るぞ」

「もぉ！　女の子にそういう事を言ったらアカンよ？」

頬を微かに赤らめて、ジークリンデはヴィレイサーを拳で軽くポカポカと叩いた。それに反撃するそぶりはせず、ヴィレイサーは咥えたポッキーを食べ終えた。

「忠告しているだけだ。　俺がバランスのいい食事にしてやってるのを無下にするなよ」

「そんな酷い事、ウチが出来ると思うん？」

「いや、無理だろうな」

「そやろ？」

笑みを浮かべて、ジークリンデは再びポッキーを食べようとして……しかしその手を止める。そして、何を思ったのかポッキーを咥え、その反対側をヴィレイサーに向ける。

「ん」

「は？」

彼女のしたい事は何となく分かるが、何故いきなりそんな事をしてきたのかは分からなかった。

「デリカシー無いなぁ。　ポッキーゲームって、知らんの？」

「知らない」

「嘘や。　だってヴィレイサー、地球の出身やろ？」

ポッキーゲームを知っているかどうかを聞かれ、ヴィレイサーは咄嗟に知らないと言ったが、彼女はそれが嘘だとすぐに見破った。

「嘘だと分かっているのなら聞くなよ」

「まぁ、ええやん」

ヴィレイサーに対し、ジークリンデはあっけからんとし、咥えていたポッキーを食べてから、新しい物を取り出しながら説明する。

「あんな？　ポッキーゲーム言うんは、２人が向かい合って、１本のポッキーの端を互いに食べ進んでいくゲームなんよ？」

「だから？」

「それをしようって言うてるんやないかぁ……」

意図が読めていないと述べるヴィレイサーに、ジークリンデは若干不機嫌そうに口を尖らせる。しかし、ヴィレイサーはちゃんと理解しているし、ジークリンデもまた、彼が理解している事は分かっていた。

「途中で折れるのが目に見えているんだが」

「そうならない様に頑張るんが、このゲームの醍醐味やん」

早速、１本のポッキーを取り出し、ジークリンデはその端を咥えた。そして、反対側をヴィレイサーに向ける。

「はいはい」

付き合ってやらねば、後々、面倒になると判断したヴィレイサーはポッキーを咥える事にした。

そして、ジークリンデの方が先に動きだし、ヴィレイサーに近づいてくる。

「ん……あ」

もうちょっと……と思った矢先、ポッキーは中途で折れてしまった。

「も、もう1回！」

「不慣れな俺が相手なんだぞ？　少しは無理だと思わないのかよ」

「ええから！」

途中で折れてしまったのが悔しいのか、ジークリンデは再びポッキーゲームに挑む。だが、結果は先程と同じで、途中で折れてしまうだけに終わった。

「……ヴィレイサー、途中でわざと折っているんと違う？」

「んな事するなら、もっと手前で折るよ」
「ウチを焦らしてるのかと思うたわ」
「失敬な」

ジークリンデの言い様に、ヴィレイサーは呆れる。

「って言うか、別に折れたって構わないと思うが？」
「えー？　だって、折れなかったら……」

不満そうにするジークリンデだったが、その後に続けようとした言葉を急遽呑みこむ。そんな彼女を見て、ヴィレイサーはにやりと笑った。

「もしかして、キスをしたかったとか？」
「そ、そんな訳ないやん！」

ヴィレイサーの指摘に、しかしジークリンデは否定する、まぁ、頬を紅潮させているのでその否定は微塵も意味をなさなかったが。

「違うのか？」

「ち、違うもん」

「ふーん。　じゃあ、もうポッキーゲームもしなくていいよな？」

「な、なんでそうなるん！？」

「折れずにいったら、最終的にキスする事になるだろ？
俺としたくないのなら、やらない方がいいじゃないか」

「そ、それは……そうやけど」

ジークリンデは、ヴィレイサーに翻弄されてもじもじとする。それが可愛くて、ヴィレイサーはもっと彼女を弄る事にした。

「何だ？　やっぱり本当はしたいのか？」

「せんでええ！」

「あっそ」

顔を真っ赤にして吼えるジークリンデに、ヴィレイサーは動じることなく納得したという表情を見せる。あっさりと納得されたので、ジークリンデはまたも言葉に詰まった。

「……地悪」

「ん？」

「ヴィレイサー、意地悪や」

剥れるジークリンデも可愛くて、ヴィレイサーは顔を綻ばせようとしたが、それが彼女に分かると、これ以上機嫌を損ねそうなので止める。

「で、結局ジークリンデはどうしたいんだ？」

「したかったです」

恥ずかしいのか、消え入りそうなほど小さな声で、ジークリンデはそう言った。

「だったら、ポッキーゲームなんてまどろっこしいものを使わないで、直接言えばいいのに」

「そないな事言われても……恥ずかしいんやもん」

「あぁ、そ」

ジークリンデの言葉に、ヴィレイサーはとやかく言わずに彼女と不意に唇を重ねた。

「じゃあ、俺からするしかないかもな」

「あ、ぅ……」

不意をつかれて、しかもキスをされたジークリンデは顔を見る見るうちに真っ赤にしていく。

「ほら、休憩も終わりにするぞ」

これ以上休息を取っていては、流石にだらけてしまう為、ヴィレイサーはジークリンデを促した。だが、彼女は中々立ち上がろうとはしない。

「おい、ジークリンデ？」

気恥ずかしくなって立てないのかと思ったが、そんな柔な彼女ではない。ヴィレイサーは、ジークリンデの顔を覗き込もうとして――

「ん！？」

――――急に、彼女と唇が重なった。

「わ、私からしたかったんやもん！」

いい訳の様に言って、ジークリンデは先に駆けだした。

鮮血
「乙女なジークリンデ、楽しんで頂けたでしょうか？ｗ」

ヴィレイサー
「まったく……。」

鮮血
「ヴィクトーリアともやりたいんですが、どなたかネタ、ください！」

ヴィレイサー
「おい……。」

鮮血
「何気に、ヴィレイサーをポニーテールにしたのってこれが初めて？ジークリンデ、なんと恐ろしい子だ！」

ヴィレイサー
「って言うか、まだまだ子供だよな、アイツも。」

鮮血
「そうだね。
そこら辺が書けていれば、満足かな。　最後の所も、そういうつもりだったしｗ」

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　乖離　～望んだ終焉へ～（前書き）

鮮血
「今回のＩＦ　ＳＴＯＲＹは、アルフォンス先生の作品、
『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～』
とのコラボとなります。」

ヴィレイサー
「注意点として、以下の点があります。」

1．このコラボの書き手は、鮮血の刻印なので、
アルフォンス先生の書くそれとは、異なります。
アルフォンス先生の文章がいいという方は、お戻りください。

2．普段の『～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～』とは違う雰囲気となっております。
苦手な方はお戻りください。

3．主人公はヴィレイサーとなっておりますので、
フィルくんの描写が少ないと感じられます。　ご注意ください。

4．系統としてはＢＡＤ　ＥＮＤです。

鮮血

「以上の事を予めご了承ください。
それと、この文章長いです……。
どこかで前後編と分ければ良かった……ｏｒｚ」

ヴィレイサー
「それでは、どうぞ。」

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　乖離　～望んだ終焉へ～

「はあああぁぁぁぁっ！」

「おおおぉぉぉぉぉ！」

互いの刃が噛み合い、火花を散らす。

鍔迫り合いからどちらともなく飛び退き、片や魔力スフィアを数個形成する。

それを目にしたもう１人は、顔の端に笑みを浮かべただけだった。

「ブラストシュート！」

少年の咆哮と共に放たれた白銀の魔力弾。

しかし、敵はじっと見詰めているだけで、その場から動こうともしなかった。

「ＩＳ、マルチロックオン。」

恐怖など感じていないその口調が、己の力を淡々と述べる。

迫りくる弾丸を前に、敵は平然としている。

その事が、少年の感情を逆なでする。

「フォースバレット！」

四角形の四隅を彷彿させるように配置された円形の魔法陣から、
少年の白銀のそれとは対称的な、漆黒の砲撃が顔を覗かせる。

「……ッ！」

黒い砲は、少年が放った魔力弾を易々と呑みこみ、彼自身にも迫る。

既の所で横に反って体を躱し、そのまま背中から1回転して銃口を
敵に向ける。

「ヴァリアブルシュート！」

「遅い！」

それをあっさりとかわされ、少年は悔しさを滲ませる。

「どうしてだよ……。
どうして！」

「お前が知る必要は……。」

吼える少年に、敵は刃を躊躇い無く振り下ろす。

「……無い！」

それは紙一重でかわされ、お返しとばかりに飛んできた拳が顔面を
掠めた。

「クッ……。

こんな事になるなんて……。」

苦々しく呟き、敵から距離を取って着地する。

敵も、追撃せずにその場から床に降り立った。

「やっぱり、俺には分かりませんよ……。
どうして貴方が、こんな事を！」

「……。」

少年の問いに、相手はただ黙しているだけだった。

「答えてくださいよ、ヴィレイサーさん！」

眼前に居る敵――ヴィレイサーに、少年――フィルは叫んだ。

2人が今いるのは、訓練場でもなければ六課の近くでも無い。

荘厳な造りに、僅かな暗がり。

重苦しい雰囲気に支配されたそこは、聖王のゆりかご――その内部だった。

こんな所で2人が訓練するはずもない。

つまり、2人は“敵対”しているという事だった。

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　乖離　～望んだ終焉へ～

ゆりかご戦より数ヶ月前の事――――

「フェイトさん……俺、皆に話そうと思います。」

ある時、フィルは大切な人でもあるフェイトにそう告げた。

皆に話す事――――それは、フィルが未来から来たという事だった。

「そっか……。」

フェイトも、フィルの決心に頷き、彼の背を押した。

◆◇◆◇◆

はやてに皆を招集するように進言し、
全員が揃った所でフィルは深呼吸して気持ちを落ち着かせる。

「俺は……未来から来たんです……。」

フィルのその告白に、誰もが耳を疑った。

「ふざけんのも大概にしろ！」

憤慨するヴィータに、フィルは苦笑した。

普通は、そう怒っても可笑しくは無い。

それでも、フィルは続けた。

「本当の事なんです。
そして、俺がいた未来では……。」

そこで言葉を切り、全員を見回してから口火を切る。

「……機動六課は……スカリエッティに負けたんです……。」

その言葉に、全員が息を呑んだ。

「どういう……事……？」

声を絞り出し、なのはが訊ねる。

「実際に見てもらいます。」

フィルはプリムに頼み、映像を出力させる。

それに映し出されたのは、正に地獄としか言えなかった。

聖王のゆりかごの浮上――――

各々、戦士達の凄惨な最期の姿――――

そして、軌道衛星上に到達し、力を増大させるゆりかご――――

遺されたフォワード陣の奮戦と最期の勇姿――――

フィルの腕の中で息を引き取ったティアナ――――

最後まで見せ終わったのか、プリムが映像を切る。

「この後俺は、クアットロに心臓を貫かれて……。
ですが、あるきっかけでこの時代に来たんです。」

誰も何も言えなかった。

これから先、あのような地獄が待っていると思うと、戦慄しか感じられない。

その後もフィルは話し続けた。

自分の力が、女神によるものだという事を――――

未来を知っているが故に、時折見せていた寂しげな表情の理由を――

――――

◆◇◆◇◆

その後、なのはとティアナは和解した。

その様子を気にしていたスバル達も、和解した事に安堵し、自室に

戻った。

だが、フィルだけは違った。

彼は夜風にあたっていた。

本当にこれで――――全てを話して良かったのか？

その事が気がかりだったから……。

「プリム……これで良かったのかな……？」

［何故、そう思うのですか？］

「なんだか、不安なんだよ……。
俺がいる事で――――全てを話した事で、
余計な事が起きている気がしてならないんだ……。」

欄干に両腕を乗せて、フィルは黒く染まった海を見ていた。

「現に、こうして歴史にはズレが生じてきている……。」

夜風が彼を包む。

その冷たさが、彼の思いに一層暗い影を落とした。

「俺は……戻ってくるべきじゃなかったのかもしれない……。」

［マスター！］

「そんな事無いよ、フィル……。」

プリムとは別に聞こえた声に、彼はハッとしてそちらに視線を巡らせる。

「フェイトさん……。」

吹き抜ける風に、金の髪をなびかせて微笑むフェイト。

彼女はゆっくりとフィルの傍までやってきた。

「フィル……。
どうしてそんな風に言うの？」

「……怖いんです……。」

「え……？」

「俺が知っている結果より、最悪なものになるんじゃないかと思って……。」

「それは、良い方向に動き出しているからだよ。」

目を伏せているフィルの頬を、フェイトの両手が包む。

「フェイト……さん……。」

「それに万が一そうだとしても、今度は私達も頑張ればいい。」

笑顔で言い聞かせてくるフェイトに、フィルは引き寄せられた。

「一緒に頑張ろう、フィル。」

「はい！」

互いに笑顔になり、２人は手を繋いで隊舎に戻って行った。

◆◇◆◇◆

「未来から……か……。」

フィルとフェイトの２人が去った所の物陰から、彼は姿を現した。

「どうするのですか、リーダー？」

「さぁ？
どうしたもんかな……。」

誰に聞く訳でも無く、彼――――ヴィレイサーは星月夜を見て呟いた。

「とりあえず、しばらくは様子見だな。
今後は、フィルがどう動くかで局面は大きく変容する。」

寄りかかっていた壁から背を離し、彼も隊舎に足を運ぶ。

（フィル……。
お前は本当に、強い奴だよ。）

1度足を止めて、フィルのいる部屋を見る。

灯りに照らされている部屋には、誰がいるかは分からない。

（いつも……。）

大きく息をつき、再び歩き出した

◆◇◆◇◆

後日――――――

フォワード陣の第2段階のテストが終了し、各々に休みが振る舞われていた。

だが、そこでちょっとしたいざこざが起こってしまった。

「フィル、どういう事……？」

静かな怒りを瞳に宿しながら、フェイトはフィルに詰め寄る。

「独りで考え込まないで……って、そう言ったよね？」

フィルが隠し事をしていた事に憤ったフェイトの怒りに、皆が皆、恐怖で竦み上がっていた。

「じゃあ、フェイトちゃんが付き添って、強制的にお休みにしようか。」

するとなのはがそんな事を言ってきた。

「八神部隊長には話を通しておくから、2人で遊んできなよ。」

「なのは……。」

親友の計らいに、フェイトは嬉しく思った。

「今後の事でフィルが支障を来しては、それこそ失策だ。
俺もなのはの意見には賛成だな。」

樹木に背を預けているヴィレイサーも同意し、フェイトは顔を綻ばせた。

「それに、せっかく恋人同士になれたんだから。」

「ど、どうしてそれを!?」

なのはからの念話に、フェイトは飛び上がりそうになる。

「2人して何コソコソ話してんだよ?」

ヴィータが介入してきた為、
そこでその事は終わりを迎えるかと思っていたが――――

「実はね……。」

「なのは、ストップ！」

――――面白がって話そうとするなのはに、フェイトは慌てる。

「どうせフィルの事だろ？」

だが、それは意味をなさなかった。

ヴィータもフィルとフェイトの関係を見抜いていたのか、笑っていた。

「それで、フィル。」

「はい？」

「強制休暇を命じます。」

「ちょっ……待って下さいよ！

まだやり残した事はありますし、そんな悠長な時間は……。」

言い訳するフィルだったが、彼の前にヴィレイサーが立った。

そして――――

ゴンッ！

「イッテェ！？」

――――――そのまま頭突きをした。

「お前、いつも無理し過ぎなんだよ。
ちゃんと休まないでお前が倒れでもしたら、それこそ迷惑だ。」

頭突きをされた箇所を摩りながら、フィルはヴィレイサーの言葉を聞いていた。

［それと、フェイトが恋人らしい事が出来ていないって咽び泣いていたぞ。］

［マジですか！？］

ヴィレイサーから伝えられた嘘の情報に、フィルは目を丸くする。

［まぁ、さすがに今は違うが……。］

そこまで伝えて、彼はフェイトを一瞥する。

［真面目な話、いつかはそうなるだろ。］

［否定できないです……。］

フェイトの性格を鑑みたフィルは、自然と頷いてしまった。

「分かったんならちゃんと休めよ？」

「はい。」

一番に踵を返し、ヴィレイサーはさっさと隊舎に消えてしまった。

◆◇◆◇◆

「ふぅ……。」

ベッドに仰向けに身体を預け、ヴィレイサーは天井をじっと見詰める。

睡眠する為に意識を手放そうとした時、エターナルが通信を告げる音を奏でた。

［ヴィレイサー、今大丈夫？］

「あぁ、問題ない。」

通信を寄越してきたのは、かつて創世の書事件を共に収束に導き、今は傭兵部隊カタストロフィーのメンバーである仲間の１人、リュウビ・Ｔ・キリシマその人だった。

［以前見せてもらった設計図だけど、それの解析が終わったの。出来れば、直接話したいから会いに来てくれる？］

「了解。」

短く返し、立ち上がる。

それをモニター越しに確認して、リュウビは通信を切った。

「“アイツ”が持っていた設計図……。
どうせ碌でもないものだろうな。」

［でしょうね。］

◆◇◆◇◆

「待たせてすまない。」

「平気よ。」

リュウビに指定された所で落ちあい、ヴィレイサーは「早速で悪いが」と切り出す。

「設計図に書かれていた物の正体は？」

「一言で言えば、使用者の魔力を格段に増幅させるシステムね。
まぁ、代償が無ければ素敵な物よ。」

「その代償ってのは？」

「設計図からだから正確には分からないけど、
この増幅量からして代償は、生命力だと思う。」

「つまり……。」

ヴィレイサーが何を言おうとしているのかを理解し、リュウビは頷く。

「魔力を生産するリンカーコアに直接働きかけて、
生命力を無理矢理魔力へ変換するシステムよ。」

「やれやれ……。
“アイツ”はいつの間にそんな物を……。」

呆れるヴィレイサーの手元にある設計図には、それを組み込む方法や、
カートリッジの形状などが事細かく書かれていた。

スパイラルシステム――――

それが、この設計図にあるシステムの名前だった。

（デバイスマイスターと言っても間違いじゃないフィルの事だ。
どうせ、もうこのシステムを完成させていてもおかしくはないな。
それが、未来から来て重い十字架を背負っているのなら尚更……。）

しばらく腕を組んで考えていたヴィレイサーだったが、
ある事を思いついてリュウビに訊ねる。

「リュウビ。
このシステム、俺のデバイスにも組み込めるのか？」

「ふぇ……？
うん、可能だけど？」

設計図の内の1枚を見せながら、リュウビは説明する。

「必要な機材も調達できるし、何より他のデバイスに組み込む事が出来るように、
結構汎用性の高いものに仕上がっているからね。」

「なら、すまないがエターナルに組み込んでくれ。」

「本気なの！？」

ヴィレイサーの申し出は薄々分かってはいたが、本当に耳にすると
は思っていなかった。

「本気じゃなきゃ、そもそもお前に頼んだりはしない。」

「でも……。」

「“俺の事”、ちゃんと話しただろ……。」

「……。」

リュウビは顔を伏せて黙ってしまった。

「無論、無理強いする気はない。
だが、こうしている今にも“俺の身体”は……。」

胸をギュッと押さえ、ヴィレイサーも俯いた。

「分かったわ。
でも、スパイラル専用のカートリッジは作れないけど、それはどうするの？」

「ちゃんと考えてあるさ。」

「はぁ……。」

何を言っても無駄だと改めて思い、リュウビは溜息をついた。

「ん。」

掌を出し、エターナルを渡すように催促する。

「条件は、無闇に使おうとしない事。」

「絶対に守るよ。」

エターナルを渡してから、ヴィレイサーは立ち上がる。

「どの場面で使うかは決めているからな。」

リュウビに向けて言ったその言葉は、風に運ばれて届いたか分からなかった。

◆◇◆◇◆

数日後――――――

フィルはルーテシアとアギトを保護した際、クアットロと邂逅し、そこで使用したフリーダムの反動で病院に入院していた。

「お前、どうやったら無茶しなくなるんだよ……。」

呆れるヴィレイサーに、フィルは唇を尖らせる。

「しょうがないじゃないですか。
あの時はああする以外に方法が無かったんですから……。
それに、どこぞの傭兵が出払っていた所為で余計に、ね。」

「言ってくれるなぁ。」

ヴィレイサーの目が不気味な色を湛えた事に焦ったフィルだったが、彼は傷口を無闇に触ったりしてこなかった。

「まぁ正直な話、俺がいなくても充分に動いてくれなきゃ困るんだよ。」

トントンと軽く自分の胸を叩くヴィレイサーに、フィルは首を傾げた。

「もしかして、遺伝子の拒絶反応ですか？
でもそれなら、渡した薬で回復したんじゃ……。」

「バカ言え。
お前が渡してくれた薬はあくまで進行を抑制するものだ。
治る訳無いだろ。」

「それでも、従来の物よりは効き目があるはずですよ。」

「そうなんだがな。
話は変わるが、お前が姉さんを助け出してくれたらしいな。」

「え？
あぁ、メガーヌさんですね。」

フィルの確認に、ヴィレイサーは無言で頷いた。

「ヴィレイサーさんにとっても、大切な人ですからね。」

「助けてくれた事には礼を言うが、気に喰わないな。」

「1人で行動した事が……ですよね？」

「ご名答だ。
今度そんな事したら、俺がお前を後ろから討つぞ。」

指を銃のように向け、「バン」と言った。

「ははは……。
ヴィレイサーさんならやりかねない気がします。」

「それで、そのスカリエッティの基地があった所なんだが……。
すまないが、座標を教えてもらっても構わないか？」

「いいですけど……。
何でまたそんな物を？」

「簡単な話、調査に向かいたいだけだ。
もちろんフィルの報告を信じていない訳じゃない。
ただ……。」

「自分の目で見ないと信じられない……ですか？」

「よく分かったな。」

「未来に居た時も、よくそんな事を言ってましたから……。」

「そうなのか。
今と大して変わらないんだな、俺。」

「皆そうですよ。」

プリムを懐から取り出し、座標を教える。

「そういえば……エターナルはどうしたんですか？」

「マリエル技官に渡した。
昔から調整してくれているあの人の方が、信頼性があるからな。
今から受け取って、一緒に行くつもりだ。」

「蛻の殻だったからと言って、油断しないでくださいね？」

「承知している。」

片手をヒラヒラと振って、ヴィレイサーはその場を後にした。

◆◇◆◇◆

「はい、エターナル。」

「サンキュー、リュウビ。」

彼女の掌にあるエターナルを取ろうとしたヴィレイサーだったが、咄嗟に身を屈める。

彼の頭上を、ブンと空を切る音が聞こえた。

「突然なんだよ……。」

平手を振るってきたリュウビに、ヴィレイサーは驚く。

「死なないようにおまじないをしようとしただけよ。」

「それならそうだと言ってからやれよ……。」

今度こそエターナルを受け取り、彼は背筋を伸ばす。

「やれよ。」

頬を引っ叩かれても異論は無い。

だが、いつまで待ってもリュウビから平手打ちは飛んでこなかった。

「帰ってきたらやってあげる。」

「はぁ？」

「だから、ちゃんと帰ってきてよね……。
でないと私も……ううん、私だけじゃない。
エクシーガも、デュアリスも、ヴァンガードも……。
皆貴方を許さないからね。」

「リュウビ……。」

「帰ってこなかったら、私達が殺すわよ。」

「“出来りゃあ苦労しねぇよ”……。」

涙ぐむリュウビの肩を軽く叩き、ヴィレイサーは背を向けた。

それはまるで、もう2度と会う事は無いように感じさせた。

「……バカ……。」

届いたとは思えないリュウビの言葉だが、ヴィレイサーは自嘲の笑みを浮かべていた。

◆◇◆◇◆

「ここか……。」

フィルに教えてもらった地点に到着し、ヴィレイサーは周囲を見回す。

「……その割には、意外と手薄だな。」

「やはり基地が廃棄されたからでしょう。」

「ぼやいててもしょうがない。
さっさと行くか。」

入り口を見つけ、基地内に足を踏み入れる。

その瞬間――――

「手荒い歓迎だなぁ……。」

――――彼の目の前に、多くのガジェットが現れた。

「良かったですね。」

「どこがだよ。」

襲いかかってくるガジェットをあっさりと爆散させながら奥へ進む。

［今更ここにくる間抜けがいるとは思いませんでしたわ～。］

その時、空間にモニターが出現する。

そこには、災厄の象徴とも呼べる人物――――クアットロの姿があった。

「よう。
あんたに話があるんだ。」

モニターに映る女に、ヴィレイサーは不敵に笑う。

「とりあえず、話だけでも聞いてくれねぇかな？」

［どんな話ですぅ？］

妖艶に笑ってはいるものの、その目は明らかにヴィレイサーの事を見下していた。

「俺は……“機動六課を離反する”。」

［はい……？］

ヴィレイサーの突然の言い様に、クアットロは目を丸くする。

［どういう意味です？］

「言った通りの意味だ。
それ以外に意味など持たない。」

［信じられませんわね。］

「そりゃあそうだろうな。
なら、お得意のＢＣＣを使ったらどうだ？」

［……。］

ヴィレイサーの提案に、クアットロは黙った。

「どうした？」

［いえ……。
ただＢＣＣを使ってはフィル・グリードに対してつまらないですわ。
やはりここは、貴方の意思が本当だという事を信じましょう。］

「ありがたい。」

［では、貴方が知っている情報を全て吐いてもらいましょうか？］

「残念だがそれはお断りだ。
吐いた後すぐに始末する気じゃないのか？」

［チッ……。］

見透かされ、クアットロはあからさまに舌打ちする。

「今度行われる公開意見陳述会。
あれで信じるに値するかどうかを見極めてくれればいい。」

［分かりましたわ。
ですがそれは、貴方がここから無事に出られたら……と言う事で。」
ニヤリと厭らしい笑みを浮かべ、クアットロは通信を切った。
それと同時に、ガジェットが一斉に襲来してきた。
「下らねぇな……。」
［Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，Ｇａｔ　Ｓｅｔ．」
「全ての悪しき者に、絶対なる氷結の力を……。」
ゴオッと強い風が吹きすさぶ。
かと思うと、一瞬で氷が現れた。
「アブソリュート！」
天井と床から、氷が牙のようにガジェットを喰らった。
爆散していくそれらの隣を駆けて、外に脱する。
蒼天にその身を躍らせ、基地を見下ろす。
［リーダー。」
「あぁ。

これで“俺の役目”も昇華される……。」

黒いロングコートを翻し、機動六課の方に身体を向ける。

「俺は……俺が裏切る事でしか、俺の生きる道を知らない……。」

愛機の柄を握り、寂しげに眼を伏せる。

「フィル・グリード……お前のやっている事は……。」

だが、顔を上げ不敵に笑う。

――――所詮は自己満足だ

彼の言葉を聞く者は、誰1人としていなかった。

◆◇◆◇◆

時は流れ、公開意見陳述会の当日。

［御機嫌よう、裏切り者さん。］

「クアットロか……。」

地下に身を潜めていたヴィレイサーに、クアットロから通信が届く。

［協力してもらいますわよ？］

「当然だ。
俺は最初からそのつもりでいたんだからな。」

狂気の笑みを見て、クアットロも厭らしい笑みを浮かべた。

［では、早速動いて頂きましょうか。］

「何をすればいい？」

［フィル・グリードを痛めつけて頂きたいですわぁ～。
た・だ・し！　決して殺さないでくださいねぇ？］

「それはまた何故だ？」

［アイツには、と～っても素敵な絶望を差し上げたいんですのよ。］

「なるほどな。
いいだろう。」

［貴方には満足できないかもしれませんがね。］

「構わん……。
殺さなきゃ、蹂躙していいんだろ？」

［えぇ。］

「それだけで充分過ぎる程だ。

楽しませてもらうよ。」

通信を切り、彼は歩き出した。

離反の証を見せる為に――――

そして、自身の内に秘めし“命の為”に――――

◆◇◆◇◆

「ギンガさんを連れて、安全な場所に避難しよう！」

フィルの提案に、スバルとティアナ、
保護したノーヴェ、ウェンディ、チンクは頷いた。

ギンガは、チンクとの戦いでの無理が祟ったのか、疲れの色が見て取れた。

フィルが彼女達の傍を離れ、サンダーの置いてある所まで向かった。

と、その時――――

「アブソリュート……。」

――――フィルとスバル達の間を、氷の壁が塞いだ。

「な、なんだ！？」

「フィル！」

フィルは急いでもと来た道を戻った。

「ティアナ、皆は無事か！？」

「えぇ、なんとか……。
あんたは！？」

「俺の方も大丈夫だよ。
けど、この氷の壁は突破できそうにないな……。」

「別行動になるけど、安全な場所まで個々で行くしかないわね。」

互いの意見が合致していた事に、フィルは安堵した。

「けど、絶対に無茶すんじゃないわよ？」

「分かってるよ。」

安心させるように強い言葉で言うと、ティアナはそれ以上何も言ってこなかった。

スバル達に告げて、離れていくのが足音で分かる。

「それにしても……。」

そうして、フィルは改めて氷の壁を見る。

「一体誰がこんな事……？」

「薄々は分かっているんじゃないのか？」

考え込むフィルに、聞き慣れた声がかかった。

「ッ！」

弾かれたようにそちらを見ると、暗闇がこちらに向かってきていた。

否、黒一色で統一された衣服に身を包んだ男だった。

「一体どういうつもりですか……ヴィレイサーさん！」

一際大きな声を上げ、フィルは現れた相手を睨む。

「決まっている。

俺は、機動六課を離反するんだよ。」

「はぁ！？」

ヴィレイサーの突拍子もない事に、フィルは耳を疑った。

「な……何を言っているんですか！？」

「2度も同じ事を言わせるな。」

「そんな……そんな事、信じられませんよ！」

「ならば……。」

フィルの言葉に、ヴィレイサーは太刀を引き抜く。

微かに点る非常用の電灯の光を受け、その刀身は鈍く輝いていた。

まるで、血を欲しているような不気味さがあった。

「……その身に離反の証を刻んでやろう！」

太刀を背に振りかぶり、一気にフィルの懐に飛び込む。

「クッ……！」

それに驚きながらも、プリムをセイバーモードに切り替え、その刃を既の所で受け止める。

だが、ヴィレイサーの攻撃がそこで終わるはずもなく、更に剣戟が繰り出された。

そして、次第に追い詰められていくフィルの頬に、刃が微かに走った。

その痛みに、フィルは一瞬だけ顔を歪ませる。

ツーっと、頬に出来た傷から血が流れる。

それと共に、嫌な汗が全身を伝う。

「……本気…なんですね……？」

「何を今更。」

フィルの信じたくないという目に、ヴィレイサーは嗤った。

ゴクリと固唾を呑む。

1度目を伏せ、しかし――――

「はあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

――――すぐさま顔を上げ、魔力弾を生成する。

中途半端な練りでは無く、生半な攻撃など彼に届くはずもない。

それを知っているから、強い攻撃にせざるを得ない。

「そうだ…それでいい……。

“お前はそれでいいんだ”……。」

一瞬だけ目を伏せるが、その後は発射された数個の魔力弾を見詰める。

「ＩＳ、マルチロックオン。」

ＩＳの1つであるマルチロックオンを使役し、魔力弾の軌道を空気の流れで読む。

「フォースバレット！」

太刀を一閃させ、肩と足元に2つずつ魔法陣を具現させる。
そしてそれから放たれた砲撃は、簡単にフィルの魔力弾を消し去った。

「届かないと分かりつつも挑むか！」

「貴方を止める！
今の俺にはそれしか出来ないから！」

「フン、愚かな……。
負けると分かっている戦いに身を投じるか！」

「俺は言いましたよ！
貴方を止めると！　それが俺の勝利条件だ！」

「ならば来い！
フィル・グリード！」

「言われなくてもぉぉぉぉ！！！」

叫び、フィルは先程よりも数を少なくし、白銀の魔力弾を駆けさせる。

「ブラストシュート！」

「僅かな数で制圧できるか！？」

太刀の柄に鞘を付属させ、カートリッジを射出する。

［Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，　Ａｍｂｉｄｅｘｔｒｏｕｓ　Ｈａｌｂｅｒｄ　Ｍｏｄｅ．］

形態を双頭刃に切り替え、自分の攻撃範囲を広くする。

（勝機はある……。）

愛機のプリムを力強く握りしめると、
それに応えるようにプリムのコアが幽かに発光した。

「行っけぇ！」

フィルの鬼神のごとき叫びに、魔力弾が応える。

白銀の軌跡を描き、遅れて、仄かな光が尾を引いた。

「その心意気は買ってやろう。」

と、同時に、ヴィレイサーもフィルに向かって走り出した。

天井の低いこの階層では、いかんせん空戦を仕掛けるには向いていない。

その為、ヴィレイサーは自身の足の力のみでこの戦いをしなければならない。

そう考えると、日ごろから空戦の無いフィルにとっては、
スタミナを考えれば、或いは勝利に持ち込むことも可能だろう。

（けどそれは、普通の魔導師なら……って話だ。

ヴィレイサーさんは地上戦にも慣れているだろうな……。）

頭を振って、望みを捨て去る。

そうする事で、必死に勝利に喰らいつこうと頭が働くからだ。

意識を魔力弾の誘導に集中させ、その先にある勝利を信じた。

一方、ヴィレイサーは平然と迫りくる魔力弾をかわしていた。

とは言っても、彼も決定打を打ち込めずにいた。

いくら掻い潜ろうとも、フィルの魔力弾が追ってきた。

「さすがに手強いな……。」

一筋縄ではいかない事は、ヴィレイサーも重々承知している。

（だが、そうでなくては“つまらない”な……。）

眼前に来た魔力弾を、叩き斬ろうと双頭刃を振るう。

しかし、それは予め読まれていたのか、振るわれた刃は虚空を薙ぎ払っただけだった。

（戦闘スタイルやその時の癖に変化は無い……。

じゃあ、ＢＣＣを使われた訳でも無いって言うのか……。）

彼の今現在の戦い方に、フィルは苛立たしげに舌打ちした。

ＢＣＣとは、人の脳に直接念波を送り、その人を自在に操るというものだ。

だが、念波如きで人の戦い方をそのままにするというのは無理だ。

送っている当人側の癖が出たりして、そう簡単にはそっくりには出来ない。

ヴィレイサーがＢＣＣを使われていないとなると、離反の理由は限られる。

（１つ目は、誰かを人質に取られているという事……。
今の時点で考えられるのは、ゼストさんぐらいだけど……。）

ゼストは、アギトの説得によりなんとか出来ると踏んでいるフィルは、
その可能性を棄却した。

或いは、現時点で人質扱いにあるのかもしれない。

毒などが、遠隔操作で体内に注入されるという方法も考えられるが、フィルの念入りな身体検査で、その可能性も無いと言える。

（２つ目……これが一番頷ける可能性だ……。
だけど、どうしても信じられない……。）

それもそのはず。

それは、ヴィレイサーの言葉が真実――――つまりは離反しているという事だ。

信じたくない真実に、フィルは苦々しく思った。
再び思考を停止して、魔力弾の操作に集中する。
（よし…大分追い込めてきた。
後は……。）
ヴィレイサーが、魔力弾に意識を持って行かれ、フィルに背を向けた刹那、
フィルはこっそり、プリムをセイバーモードにする。
（今だ！）
ヴィレイサーの足が縺れたのを確認するや否や、フィルは全力で動く。
「ウィンドブレス！」
鎌鼬を発生させ、それを先程まで維持していた魔力弾と共に突っ込ませる。
「クッ……！」
一斉に迫ってきたそれらに加え、ヴィレイサーは体勢を崩していた。
ブラストシュートの内、１発でも当たれば昏倒出来る。
もしもそれらが当たらずとも、鎌鼬で本の短い時間でも動きを封じられる。

そしてフィルは、後者の時の為にワープを使ってヴィレイサーの背後に回った。

背後に転移した時フィルが見たのは、双頭刃を回転させて、最も攻撃数の多い箇所を防いでいたヴィレイサーの姿だった。

そうする事で、意識を混濁させられるのを避けたのだろう。

だが――――

（ヴィレイサーさんは向こうに意識を集中させている……。俺に攻撃が届く前に、バインドで……。）

――――フィルはそこまで考えていた。

「もらった！」

――――捕らえた。

そう確信していたフィルだったが、ヴィレイサーは攻撃を防ぎきると、

その身を床に転がさせた。

わざと体勢を崩し、フィルの視野内から離れるべくそうしたのだ。

「しまっ……。」

予想外の行動に、転移して背後に移ったのも束の間、逆にフィルは背後を取られた。

慌ててそちらを振り向いたフィルの目の前に、暗闇が迫った。

掴まれた――――

そう思った瞬間、背中に強い衝撃が走った。

「ガッ……。」

ヴィレイサーは、フィルの頭を鷲掴みにして、そこから地面に叩きつけた。

息が詰まり、意識が飛びそうになる。

「安心しろ。
お前を殺すなと命を受けているからな。」

「なん…だと……？」

目を開くと、頭を掴んでいる指の間からヴィレイサーの顔が見えた。

（両腕は動く。
なら、ここから腹に1発かますしかないな！）

そう決めると、フィルはすぐさま身体を動かした。

「チッ……。」

振るわれた両拳を片手で受け止められる訳もなく、ヴィレイサーは腹に1撃貰った。

「グッ……。
やってくれる……。」

少しは効いたのか、ヴィレイサーは腹を擦っていた。

これからどうするか――――

フィルが次の行動を考えた時、2人の間にモニターが現れた。

［はぁ～い。
お元気にしてますか？］

「クアットロ！？」

通信を寄越してきたクアットロに、フィルは驚き、敵意を剥き出しにする。

「何用だ？」

［妹達が思いの外持たなかったんですぅ。
これ以上は貴方と言う手駒まで失う可能性があるので、退いてもらいますわ。］

「了解した。」

双頭刃を解除して、エターナルを待機状態にする。

［どうですか、フィル・グリード？
かつての仲間と戦った気分は～？］

「テメェ！」

「言っておきますが、離反は私が唆しんたんじゃありませんよ？
あっちが言ってきた事なんですから。」

「そ…そんな……。」

「嘘じゃない。
俺は俺自らの意志で離反に手を染めた。」

ヴィレイサーの告白に、フィルは愕然とした。

今までもその予想はあった。

だが、いざクアットロとヴィレイサー、2人の言葉を改めて聞かされると、
やはり信じられないという気持ちになった。

「どうしてなんですか、ヴィレイサーさん！」

再三に渡り、理由を問うフィル。

だが、それにヴィレイサーが答えるはずもなく、彼はやはり黙したままだった。

そしてもう1度、フィルが叫ぼうとした時――――

「さようなら。」

――――クアットロの言葉とともに、フィルの背をガジェットの刃が貫いた。

「ガハッ……。」

花開いた血の花弁に、ヴィレイサーは眉一つ動かさなかった。

「殺さないんじゃなかったのか？」

［そう思いましたけどぉ、やっぱり殺す事にしました。］

「自分で殺したかったという事か。
食えない女だ。」

［お褒めの言葉として受け取っておきますわ。］

「致命傷ではあるが、ここで殺すのもつまらん。
亜空間に葬ってもいいか？」

［その方がより確実ですわね。
どうぞ～。］

クアットロはそう許可を出して、通信を切った。

「エターナル。」

［Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

エターナルの刀身が宵闇に染まり、それを振りかぶるヴィレイサー。

「…闇月…破。」

途切れ途切れに聞こえた技名を最後に、フィルは意識を手放した。

◆◇◆◇◆

「ッ……。」

「フィル！」

小さな呻き声を上げて、フィルは重い瞼をゆっくりと開く。

その時に聞こえた、愛する人の声に耳を疑った。

（まさか……フェイトさんまで殺されたってのか……？）

眩しい光に、反射的に目を閉じそうになる。

だが、ふと影が自分の目を覆ってくれた。

そのお陰で、ようやく完全に目を開く事が出来た。

ぼんやりとした瞳に映ったのは、フェイトの顔だった。

「フェイト……さん……？」

「そうだよ、フィル！」

目に一杯の涙を浮かべ、フェイトはフィルに笑いかける。

「ここは……？」

「アースラの医務室だよ。」

「え……どうして……？
だって俺は……。」

ヴィレイサーと戦っていた――――

そう言おうとして口を閉ざした。

混乱を招くのは避けるべきだ。

「フィルは、最後の力を振り絞ってワープでここに転移してきたのよ。」

そう教えてくれたのは、フェイトの隣にいたメガーヌだった。

「急いでメディカルポッドに入れて、一命を取り留めたの。」

「そう……だったんですか。」

メガーヌの説明に、だがしかし、フィルはどこか腑に落ちないでいた。

自分がワープを使った記憶がない。

無意識にやったなど、到底信じられなかった。

「ねぇ、フィル。
ヴィレイサーと……戦ったって、本当なの？」

「どうしてそれを！？」

フェイトの口から出た言葉に、フィルは驚くしかなかった。

「氷壁で戦力を分断されたって、ティアナから聞いて……。
その後、その魔法がヴィレイサーのものだって、ギンガが……。
」

「ギンガさんが……。」

さすがに妹分だけはある。

ヴィレイサーの魔法である事を、遠退きそうになる意識で理解したとは……。

「ギンガもスバルも……ううん、皆信じられないって……。」

「でしょうね……。
戦った俺でさえ、まだ信じられませんよ……。」

沈痛な面持ちを見せる2人を横目に、メガーヌもまた苦しげな表情していた。

「俺、そろそろ六課の方に戻ります。」

「でも、まだ傷も癒えきって無いし……。」

「大丈夫ですよ。」

「フィル……。」

「フェイトさん。
貴方がフィルの傍にいてあげればいいんじゃないかしら。」

「え……？」

メガーヌの提案に、フェイトはしばらく考え込む。

「はい、そうします。」

やがて、フィルと共にそれを承諾した。

「それじゃあ、俺はこれで失礼しますね。」

「えぇ、気を付けて……。」

フィルとフェイトが出ていった後、メガーヌは顔を伏せた。

「これでいいのよね……？」

呟いた言葉は、誰に聞かれることも無く霧散していく。

「“ヴィレイサー”……。」

フィルはワープを使ってここに来た――――

それは、“真っ赤な嘘”だった。

「もっと、いろんな事を話したかったなぁ……。」

無理に作った笑顔で、天井を見上げる。

涙に沈む彼女を、慰める事が出来る者はいなかった。

◆◇◆◇◆

スカリエッティのラボでは、ヴィヴィオにレリックの移植が行われようとしていた。

泣き叫ぶヴィヴィオの声に、クアットロは恍惚な表情を浮かべていた。

「いつ聞いても、子供の泣き叫ぶ声は堪りませんねぇ～。」

ヴィヴィオの頬に手を当てて、涙を指で拭う。

「さぁ、もっともっと、可愛く泣いて下さいね、陛下。」

その言葉と同時に、ヴィヴィオにレリックが移植された。

（これで何もかもが終わりですわね。）

完璧な計画に、クアットロは笑いを堪え切れずにいた。

◆◇◆◇◆

「ウッ……。」

一方、スカリエッティのラボ内のとある一室にはヴィレイサーがいた。

「ゴホッ、ゴホッ……。」

酷く咳き込み、落ち着いたかと思うと再び咳き込んだ。

先程からこの繰り返しで、その手は既に全体が赤黒く染め上がっていた。

［Ａｒｅ　ｙｏｕ　ＯＫ？］

「フゥ……。
少しは……な。」

壁に寄りかかり、ズルズルと床に座り込む。

（奴を倒す……その時まで、なんとか持ってくれよ……。）

血塗られた己が運命……。

その果てには、一体どんなものが待っているのだろうか？

（考えていてもしょうがないか。

俺は俺の出来る事をする……俺の命を糧として……。）

最果てにあるものが、希望だと信じて前へ進む。

それ以外の道を、彼は見出せなかった。

「まだ逝けない……。

もう少しだけ待っていて欲しいんだ……“母さん”……。」

◆◇◆◇◆

時は流れて、ゆりかごの直前。

フィルは、1人で自室に籠っていた。

だが先程、フェイトが彼を訪ね、今は並んで一緒に肩を寄せ合っていた。

「俺達……勝てるんでしょうか……？」

「フィル……。」

「なんだか、物凄く不安なんです……。
それに加えて、ヴィレイサーさんまで離反しちゃうし……。」

「ねぇ、フィル。
未来ではヴィレイサーはどんな人だったの？」

「え……？」

「未来での行動を考えてみたら、離反した理由もきっと……。」

そう言われて、フィルはポツリポツリと話し始めた。

今と変わらず、傭兵である事――

模擬戦が好きで、ほぼ毎日シグナムと戦っていた事――

そして――

「遺伝子の拒絶反応もあって、寿命はあと僅かでした……。」

――今と同じように、遺伝子の拒絶反応で苦しめられていた事を。

ヴィレイサーは本来、この世界の出身では無くなのは達と同じ地球の出身だった。

だが、幼少期に研究材料として捕らえられ、ミッドチルダに来た。

強者の遺伝子を基盤となる人間に組み込む事で、最強の人間兵器を作り出す研究、
プロジェクトＣＨＡＯＳの被験者として……。

複数人の遺伝子を組み込み、成功体として数日だけ称賛された。

しかし、複数人の遺伝子に自身の遺伝子と身体が付いて行けず、拒絶反応を起こすようになった。

それにより、彼は寿命が極端に短命となったのだ。

薬で進行を抑制したはいいものの、結局治療法が見つかる事は無かった。

それでも、ヴィレイサーは全く悲しみを見せたりはしなかった。

むしろ短命な事が“当たり前”と思っているように。

「もしかしたらヴィレイサーは、
スカリエッティに治療法を見つけたって言われたから……。」

「それは無いと思います。
あの人は、寿命の事をさして気にしていない感じでしたから……。」

「そっか。
じゃあ、やっぱり……。」

「えぇ……。」

本当に離反した。
その真実は、どうしても受け入れ難いものだった。
「でも俺は、止めたいと思います。
俺にはまだ、切り札がありますから。」
「ブラスター……モード……。」
フェイトの呟きに、フィルは無言で頷いた。
「止めて……って言っても、使っちゃうよね……。」
「恐らく……。」
「じゃあ、私もフィルと一緒に行動する！」
「フェイトさん……。」
「そうすれば、きっと……。」
「そうですね。
きっと……。」
そこでフェイトは、フィルを抱き寄せ、キスをする。
それは次第に深いものとなっていく。
「フィル……。
キスで私の不安を消し去って……。」

「いいよ。」

フェイトの不安を全て、拭い去りたい。

その願いを込めて、彼はキスをした。

それから数時間後――――

彼らは、信頼できる仲間とともに戦場へと身を投じた。

◆◇◆◇◆

ゆりかご内部――――

フェイトにクアットロのいる座標を教えてもらったフィルは、ワープを使ってその部屋の“近く”まで転移した。

何故直接行かずに、近くを選んだのか。

それは――――

「来たか……。」

――――瞑っていた両目をゆっくりと開き、その瞳はしっかりとフィルを見た。

「ヴィレイサー……さん……。」

ヴィレイサーと相見える為だった。

「俺と会わずにクアットロの所へ直接行けば良かったものを。」

「貴方を止めたいんです。
クアットロを倒す以上に……。」

「物好きな奴だな。」

「なんと言われても、俺の決めた事は変わりません。」

「だろうな。」

太刀を引き抜き、空を切る。

「来いよ、フィル・グリード。
お前の傲慢、俺が全て葬ってやるよ。」

「それは無理ですね。」

ヴィレイサーの宣言を、フィルはきっぱりと否定する。

「何？」

「何故なら俺が、貴方を止めるから……。」

「フッ……。

“止める”……か。
いつまでも俺を引き戻せると思っているとはな。　めでたい奴だ。」

「行きますよ、ヴィレイサーさん。」

「精々頑張ってくれ。」

その言葉が、戦いの火蓋を切った。

そして時は冒頭に戻る。

フィルとヴィレイサーは、互いに決定打を打ち込む事は出来ずにいた。

（このままじゃあ、クアットロに辿り着く前に力尽きる……。
なら、手荒ではあるけどブラスターモードで一気に！）

「プリム！」

［はい！］

「ようやっと、本気を出すか……。
エターナル！」

［了解。］

「ブラスターモード！」

「ヴィーナスシステム！」

フィルがブラスターモードを解放した事に合わせて、
ヴィレイサーも内に眠るヴィーナスシステムを解放した。

互いの解放された魔力が、渦を巻いてぶつかり合う。

バサッと、翼が羽ばたく音が渦巻く魔力の風に乗る。

ヴィレイサーの方を見ると、左右に6枚ずつ、総計12枚の羽が目に入った。

透明感のある黒い羽は、ヴィレイサーに冠されている堕天使を表していた。

（アレが、ヴィーナスシステム……。）

フィルは以前、1度だけ目にした事がある。

ヴィレイサーが、クアットロに単身で挑んだ時だったか。

専用の武器であるバスターライフルをもってしても、倒せなかった

が。

その映像は、クアットロがわざとフィル達に送っていた。

なのはの時同様、戦意を喪失させる為に……。

（ライフルは銃身が長く、その重さもまたかなりの物だ。
　なら、そう簡単には狙いを定められないはずだ。）

慌てぬように、深呼吸をする。

「落ち着いている所を見ると、未来でも目にしたようだな、この力を。」

「えぇ。」

「ならば出し惜しみする必要は無いな。」

［Ｔｗｉｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｆｌｅ．］

右手に持っているライフルと同じ物を、虚空から取り出し左手に持つ。

「ダブルインパクト！」

時間差で、ライフルから砲撃を放つ。

「クッ！」

それをかわし、フィルは照準を付けられぬよう出鱈目に動く。

「フン……。」

だが、ヴィレイサーは跳躍して部屋の中心に降り立つ。

と、同時に両方のライフルからカートリッジが飛び出す。

［Ｅｘｔｅｒｍｉｎａｔｅ．］

左右にライフルを構え、砲撃を出しながら1回転する。

「なっ！？」

フィルは走っていては追いつかれると判断し、砲撃をかわせる高さまで飛び上がる。

荘厳だった造りは、あっさりと消し炭と化した。

上空からゆっくりと落下してくるフィルを見定め、ヴィレイサーはライフルを片方だけ向ける。

銃口に、黒い魔力の微粒子がチラホラと見える。

「撃たせるものか！」

フィルは急いでストラグルバインドを発生させる。

「グッ……。」

フィルのストラグルバインドは、彼独自の物となっている。

通常の物は、バインドに、対象の魔力の機能を打ち消す効果を込めた物なのだが、
フィルのそれはＩＳにも効果が出るようにしている。

ヴィレイサーはバインドで拘束された場合、
ＩＳの重力付与でそれを強制的に解除する事が多い。

しかし、それすら打ち消されては、今の彼になす術は無かった。

「これで終わりです。」

気絶させるべく、フィルは収束砲の準備にかかった。

「さて、どうしたもんかな……。」

集められて行く白銀の魔力を見ながら、ヴィレイサーは打開策を考えていた。

「力技しかあるまい……。」

そう決めるが早いか、ヴィレイサーはバインドを抜けだそうともがく。

「そう簡単には壊れませんよ！」

「みたいだな……。」

口では認めていても、ヴィレイサーには諦める気配がなかった。

足掻き、しかし何も出来ずに跪いた。

「ブラストブレイザー！」

それを認めた瞬間、フィルは引き金を引く。

白銀の砲は、見事に着弾した。

「よし。」

だが――――――

「残念だったなぁ、フィル。」

――――意識を刈り取ったと思っていた相手の声が耳に届いた。

「そんな……！」

ブラストブレイザーが着弾した場所から少し離れた所に、ヴィレイサーはいた。

バインドは未だにされたままだったが、もといた位置から走ったのだろう。

「どうやって……。」

「俺専用の、このナックルさ。」

手首だけ振って、その存在を見せる。

「リボルバーハデス。
今は亡き母――――クイントさんがくれた物さ。」

スバルとギンガが持つリボルバーナックルとは、色が違うだけだった。

回っていたスピナーがようやく止まり、静寂を取り戻す。

「リボルバーナックルと酷似してはいるが、
こちらは俺のＩＳであるレゾナンスの威力を高める事を主にしている。」

「ＩＳだとしたら、バインドには効かないはずです！」

「つまり、バインドではない物に影響を与えたという事だ。
例えば、バインドが発生している床の一部とか……な。」

「まさか……。」

「そうだ。
跪いた時に、バインドの出ている地点をレゾナンスで破壊したのさ。
お陰で固定された位置からは脱する事が出来た。」

そんな事をするとは思っていなかったフィルには、次の方法が思い浮かばなかった。

「そしてこれも……。」

終いには、ヴィレイサーは腕力だけでバインドを千切った。

「練りが悪いな。
お前はまだ、俺と戦う事に抵抗を覚えているのか？」
宙に静止しているフィルに問いかけると、彼は何も答えなかった。
だがそれが、肯定を意味している事は明らかだった。
「フフッ……。」
静かに笑い、ヴィレイサーは向けていた銃口を下ろした。
フィルも地上に降り立ち、対峙する。
「なぁ、フィル。」
「はい？」
「お前は過去に戻ってきたことを、どう思っている？」
「どうって……。」
いきなりの質問に、フィルは戸惑った。
「俺は、傲慢じゃないかと……そう思っている。」
「傲慢……ですか？」
「あぁ。
過ぎ去ってしまった事を変える。

言いかえれば、好きなように変えられるという事だ。
傲慢な奴がしそうなことだろ？」

「でも、そんな強大な力を女神は与えなかった。」

「それは、お前が言わなかったからじゃないか？
よく思い出せ。　心の奥底では、絶対的な力を望んでいたんじゃないか？」

「それは……。」

フィルは答えに詰まってしまった。

確かに女神から力を貰って、その力が絶対的な物であって欲しいと願ったかもしれない。

「答えられない……か……。
まぁ、大切な物を奪われたんだ。
力を欲した所で、なんら不思議はない。」

「俺は……。
俺の力は……。」

ふと、フェイトの事を思い出す。

彼女はいつも、自分の傍に居てくれた。

彼女のお陰で、過去に戻ってきた事を素直に受け入れる事が出来た。

そう、彼女がいたから――――

「俺は、俺が過去に戻ってきた事を後悔していない！
この力も、誰かを守る為に使うんだ！
決して邪な想いに屈したりはしない！」

瞳にその想いを宿し、ヴィレイサーを睨む。

「良く言ったぁ！
ならば、お前の力でお前の大切な物を守ってみせろ！
俺を倒すのではなく、止めると言ったようになぁ！」

ライフルを亜空間に収納し、太刀を閃かせる。

「おおおおおおぉおおおおおお！！！」

「はあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

フィルもプリムをセイバーモードに切り替え、互いに刃をぶつけ合う。

兵刃を交える2人は、際限なくそれを続けた。

◆◇◆◇◆

その頃、ヴィータはゆりかごの駆動炉を叩いていた。

「ちきしょう……。
なんだって、ぶっ壊れねぇんだよ……。」

息が上がった彼女は、ここまでの戦闘でかなり消耗していた。

「けど……それで諦めていい訳じゃねぇ！
コイツをぶっ壊さなきゃ、皆が困るんだ……！
だから！　アイゼン！」

［Ｊａｗｏｈｌ．］

ヴィータと同様にボロボロな上に傷だらけのアイゼンを振りかざし、残りのカートリッジをまとめて使う。

「うおおおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！」

振り下ろし、それが駆動炉にあたると同時に雄叫びをあげる。

「ぶち抜けぇぇぇぇぇぇ！！！」

その想いをアイゼンに全て注ぎ込む。

だが、それとは裏腹にアイゼンのドリルには罅が入っていく。

そして、アイゼンのドリルは駆動炉を壊しきれずに砕け散ってしまった。

その欠片と一緒に、ヴィータも力を使い果たして落下していった。

「はやて……皆……。

ごめん……。」

全てを使いきったヴィータは、目を瞑った。

その時――――――

「謝る事なんて、何にもあらへん……。」

――――白い光と共に、そんな声が聞こえた。

「はや…て……？」

その声と、自分を支えてくれている温もりに目を開くと、
そこにははやての顔があった。

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーフアイゼンが、
こんなにボロボロになるまでして、壊せへん物なんて、この世にある訳無いよ。」

はやての凛とした声と共に、駆動炉に徐々に罅が入っていく。

そしてそれは、見事に粉々に砕け散った。

「よう頑張ったな、ヴィータ。」

微笑みを浮かべる彼女に抱かれ、ヴィータは安堵の息を漏らした。

◆◇◆◇◆

「ッ！？
今のは……。」

「ヴィータ副隊長がやってくれたか！？」

一際大きな振動に、干戈を交えていた2人はその動きを止める。

「クアットロ！」

［やられましたわ……。
まさか駆動炉を壊されるなんて……。］

「これ以上の通信は、お前の位置を特定される。
以降の通信は無しだ。」

［わかりましたわ。］

苦々しくフィルを睨んだ後、クアットロは通信を切った。

「これで、クアットロの聖王の鎧も鉄壁じゃない。」

「そのようだな。
フィル、お前の仲間は大した奴だよ。」

久しぶりに、ヴィレイサーが笑った気がした。

その顔に目を奪われていたフィルだったが、その隙に懐に入り込ま

れた。

「しまった!?」

太刀を突き刺そうと、刃が真っ直ぐに突っ込まれた。

フィルは、それを紙一重の所でかわしきった。

嫌な汗が頬を伝い、フィルはそれを腕で粗く拭う。

「さっきお前は、守る為の力……そう言ったよな?」

「えぇ。」

「なら、“これ”は“何を守る為の力”だ?」

そう言ってヴィレイサーが見せたのは、銀色のカートリッジだった。

「それは……!?」

「お前の懐に飛び込んだ時に掠め取ったんだよ。」

スパイラルを使用する為の、専用のカートリッジ。

「これは、過ぎた力だ。
命を糧とした力など、誰もが認めないだろうな。」

「例えそうだとしても、俺には使わなきゃいけない時が来ると思うんです。」

「本当に変わらないな、お前は……。」

「え……？」

「何故お前は、そこまで命を軽んずる？」

「貴方には関係ありませんよ……。」

フィルの声には、拒絶の色が色濃く出ていた。

「過去には自分の居場所が無い……。」

「ッ……。」

ヴィレイサーの言葉に、フィルは肩を強張らせた。

「図星のようだな。
いくら未来と同じ仲間と言っても、どこか疎外感を否めない。
そうだろ？」

フィルには何も答える事が出来ずにいた。

何故、そこまで言ってくるのか？

何故、自分は言い返せないのか？

何も分からなかった。

「俺の居場所はここには無い。
だから命を捨てても問題無い。

そんな下らない事を考えているから、コレに手を出しちまったんだろうな。」

「そう……なのかもしれません……。」

「なら、これからは生きろ。
頼れる奴が、お前の隣には必ずいるはずだ。」

「ヴィレイサーさん……。」

「お前には仲間がいる。
疲れたら、目の前にある事から逃げ出したかったら、頼ればいい。」

「でも、俺には……。」

「居場所なんて、自分の気が付かない間に出来ているものだ。
それに、お前自身が帰ってくる場所になりつつあるんだ。」

「俺…自身が……。」

「皆、お前の事をずっと待っている。
だから帰ってやれ。　お前の帰るべき場所に。」

「貴方は……。
貴方は一体、誰なんですか？」

「俺は、お前を生かす為に“戻ってきた”。」

「戻って……きた？

まさか……。」

「永久（とわ）にさよならだ、フィル・グリード。」

そう聞こえた。

言葉の意味を認識した時、フィルは何かに引き寄せられた。

「これは！？」

フィルの背後には、星月夜を模した亜空間が広がっていた。

ヴィレイサーの空間に作用する技の１つ、冥闇月閃破だった。

「フィル……。
クアットロは俺が殺す。
でないと、お前が命と引き換えにしてまでやりそうだからな。」

目に入ったヴィレイサーの顔は、笑っていた。

暫くぶりに見たそれは、何故か儚い所は無く、何かを成し遂げたような笑顔だった。

「外で待っている人に伝えてくれ……。
「すまなかった」と……。」

それを最後に、空間は閉ざされた。

「終わらせるか……。
今度こそ、全てを！」

漆黒のコートを翻し、彼は羽ばたいた。

「クアットロ……。
俺が、お前を殺す……。」

フィルから盗ったカートリッジをギュッと掴み、彼は道を急いだ。

◆◇◆◇◆

どこまでも続く暗闇に身を委ねていたフィルは、呆然としていた。

ヴィレイサーが、自分と同じように未来から来た事。

スパイラルを使おうとしている事。

それらが、彼の頭を混乱させていた。

（離反したふりをしてまで、俺を死なせたくないって……。
俺はそれ以上に、誰も死なせたくないんだ！）

出たらワープで戻ろう。

そう決めた刹那、眩い光がフィルを包んだ。

鮮烈な光に、腕を翳して目を庇う。

それが晴れると、フィルはどこかのビルの屋上に居た。
そこからは、ゆりかごが見える。
だが、そこにいたのはフィルだけではなかった。
「フェイトさん!?　それに皆も……。」
フェイト、なのは、ヴィヴィオ、はやて、リィン、ヴィータ。
ゆりかごの内部に突入した全員が、そこにいた。
「気が付いた?」
突如かかった声に、弾かれたように声がした方を見る。
そこにいたのは――――
「メガーヌさん……。」
――――メガーヌ・アルピーノだった。
「他の子は、まだ気が付いて無いみたいね。」
「どうして、メガーヌさんがここに?」
「ヴィレイサーに頼まれたの。
私だけが、頼りになるって言われて……。」

「ヴィレイサーさんに……？
そうだ、急いで戻らないと！」

ワープを使って、ヴィレイサーの所へ行こうとしたフィルだったが、何故かヴィレイサーの魔力が感知できない。

「ごめんなさい……。
誰もゆりかごに行かせる訳にはいかないから……。」

「メガーヌさん……。」

メガーヌの両手には、アスクレピオスが嵌められていた。

彼女がジャミングを発生させ、魔力を感じさせないようにしているのだ。

「そんな……どうして！
ヴィレイサーさんは、貴方にとって弟のような人でしょ！？」

「えぇ……。
だけど今は、それ以上に彼の事を想っているわ。」

「え……？」

そこで、フィルはヴィレイサーからの言伝を思い出した。

――――「すまなかった」と伝えてくれ。

「もしかして……。」

「えぇ。
私とヴィレイサーは……。」

◆◇◆◇◆

隔壁をライフルで突き破り、中に突入する。

「無事か、クアットロ？」

「えぇ、なんとか。」

「それは良かった。
で、これからどうするんだ？」

「ゆりかごが無敵になるまでは、こちらから手を出さない方がいいですわね。」

「つまりは、防戦と言う事か。
いい事を聞いたよ。」

「どういう意味ですの？」

ヴィレイサーの方を振り返った時、銃口から火が噴いた。

「惜しい……。
向いていなければ、死す事が出来たものを……。」

「な……何を……？」

ヴィレイサーの冷徹な声に、クアットロは珍しく戦慄する。

「理解できないか？
ならば、そのまま死ね！」

今度は左手にあるライフルの引き金を引く。

「クッ……。」

当たれば即死の砲火を、クアットロは恐れながらもかわしていく。

「理由を知らずに死ねるのも、ある意味では幸福だぞ！」

「裏切るのですか！」

まだ僅かに機能している聖王の鎧を駆使して、火線を防ぐ。

「裏切るとは心外だな。
俺は最初から、貴様の同胞になった気は無い！」

［Ｕｎｉｓｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ．］

２挺のライフルを合体させ、照準を定めて砲火を浴びせる。

巨大な黒い砲が、クアットロを呑みこもうとする。

だが、それは簡単には捕らえきれずにいた。

「チッ……。」

「フフフッ……。
下手くそな射撃ですわね～。」

今度は、クアットロから仕掛けてきた。

腕に魔力刃を付与させ、それを振るう。

「させん！」

ヴィレイサーは跳躍し、すぐさまライフルを撃つ。

「グゥ！？」

物凄い威圧感が、クアットロを跪かせる。

「もう1度……！？」

再び砲火を浴びせようとしたヴィレイサーだったが、突如視界が真っ暗になる。

（両目とも拒絶反応が……。）

拒絶反応による失明だと分かった刹那、腹部に衝撃が走った。

「ガハッ！？」

「ふん……。

死に損いのくせにでしゃばるからですわ。」

クアットロに吹っ飛ばされ、それでも壁に激突する前に体勢を立て直す。

顔を上げると、視界がぼんやりとだが見えてきた。

「幽かながらだが見える。
さっさと使うか……。」

ポケットから、フィルから奪い取ったスパイラル専用のカートリッジを取り出す。

「付き合ってもらってすまないな、エターナル。」

［Ｄｏｎ’ｔ　ｗｏｒｒｙ.］

頼もしい愛機の返事に、ヴィレイサーは自然と笑みをこぼした。

そして、カートリッジをエターナルにセットする。

「スパイラルシステム！」

［Ｉｇｎｉｔｉｏｎ.］

ガションとカートリッジが使われる音が、酷く大きく聞こえた。

「当てられますか？
死に損いの貴方に？」

「当てられる。」

ヴィレイサーが断言した瞬間、バインドがクアットロの動きを封ずる。

湧き上がる膨大な魔力に、ヴィレイサーは不思議と気分が高揚していた。

この反動が、どんな物かを知っているにもかかわらず。

「逃げたきゃ逃げろよ……。
逃げられるとは思えないけどな。」

［Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

残りのカートリッジも、全て使いきる。

「消えろ……。
何もかも、残す事無く！」

黒い羽で天井まで羽ばたき、ライフルをクアットロに向ける。

「クッ……。」

バインドを引き千切ろうと、必死で体を動かす姿は、
ヴィレイサーにとって滑稽だった。

「無様だな。」

その呟きは、吐血と共に零れ落ちる。

「身体も限界か……。
だが、まだ死ねない！」

ライフルを改めて構え直し、魔力を全て注ぎ込む。

スパイラルを使った事もあり、その魔力量は膨大だった。

「月華に沈め！　ムーンライト……ブレイカー！」

放たれた砲撃が、クアットロを跡形も無く消し去ることを信じて……。

ヴィレイサーは引き金を引いた。

◆◇◆◇◆

「ヴィレイサーさんは、どうやって過去に戻ってきたんですか？」

ゆりかごを見ているだけしか出来ない自分にいらだちを覚えながらも、
フィルは駆けつけたい衝動を懸命に抑えながらメガーヌに問う。

「彼の話だと、死んだと思っていた時に目の前に女神が現れたって言ったの。
その女神が言うには、本来のＪＳ事件はこんなものじゃなかった

と。」

それを聞いたフィルは、自分と同じ体験をしているのだと知った。

「女神は、ヴィレイサーに過去に戻って未来を変えて欲しいと言ったそうなの。

だけど……。」

――俺よりも他に、適任がいる

――それに、起こってしまった事は変えられない

――俺の大切な人も、もう命を落とした……

――俺の居場所は、もうどこにも無いんだ

「そう言って、最初は断ったの。」

「居場所が無い……。

俺と同じ事、考えてたんだ……。」

「でも、フィル……。

貴方がここに戻ると聞いて、ヴィレイサーも戻る事にしたの。」

「え……俺が……？」

「ヴィレイサーは死ぬ前、スパイラルの設計図を見ていたのよ。
それがどんな物かは分からなかったけど、嫌な予感がしたからって……。」

「だからスパイラルを知っていたんですか。」

「えぇ。
彼は、その事を全て話してくれたわ。
私と、カタストロフィーのメンバーである全員に。
貴方を死なせたくは無い。だから協力してほしいって。
もう気付いていると思うけど、公開意見陳述会の時、
貴方がアースラまで来れたのは、ヴィレイサーが冥闇月閃破で転送されたからよ。」

「でも、それだったら離反なんてしなくても……直接言えば……！」

「それで貴方はスパイラルを使わないと言える？」

「え……？」

メガーヌの眼は、フィルを鋭く見ていた。

心の中まで見透かされそうな瞳に、フィルは堪らず視線を逸らしてしまった。

「やっぱり、使ったでしょうね。」

嘆息し、フィルの頭にそっと手を置く。

「貴方に死んでほしく無いのよ、ヴィレイサーは……。
ううん、ヴィレイサーだけじゃない。
皆が皆、貴方の無事を切に願っているのよ。」

「だからって、ヴィレイサーさんがスパイラルを使う必要は……。」

「『どうせ死ぬなら、誰かを救う為か、誰かの身代わりになりたい。』」

反論したフィルの言葉を遮り、メガーヌは強く言った。

「なんですか、それ……。」

「ヴィレイサーが言っていたの。」

「『どうせ死ぬなら』って……どういう事ですか!?」

「ヴィレイサーは、遺伝子の拒絶反応によって短命になっている事は、
未来から来ているのだから、当然知っているわよね?」

「えぇ。
だから、未来で使っていた薬の製造方法を教えましたよ。
今の薬よりも効果のある物を……。」

「残念だけど、拒絶反応の進行は抑制できてないの。
しかも、過去に戻ってきても進行した分は戻らなかったって……
…。」

「そ、そんな……。」

「年齢とかは若返らせる事が出来るけど、
身体の内側はどうしようも出来ないから、そのまま……。」

つまりヴィレイサーは、拒絶反応で身体がボロボロになり、
進行した症状はそのままに、過去に戻ったのだ。

「フィル、貴方が渡した薬は、ヴィレイサーが未来でも使っていたの。
でも、長い事服用し続けた所為で、抗体が出来た。」

「じゃ、じゃあ……。」

「今のヴィレイサーには、どんな薬も効果を発揮しない。
そして、進行した症状が改善されてもいない。」

淡々と語るメガーヌの瞳に、徐々に涙が浮かんでいく。

「彼の命は……。」

メガーヌの言うヴィレイサーの今の状況。

それに加え、スパイラルなど使えば、当然――――

「もう尽きかけているわ。」

――――“死”以外の道など無い。

◆◇◆◇◆

轟音と煙が徐々に消えていく。

空中で静止したまま、ヴィレイサーは肩で息をする。

「ハァ、ハァ……。」

眩暈に時折ふらつきながらも、姿勢を維持する。

ようやっと煙が晴れた時、そこにはクアットロの姿は無かった。

「死んだ……のか？」

［Ｙｅｓ．］

クアットロの魔力も、聖王の鎧の反応も無く、ヴィレイサーはようやく安堵できた。

だが、彼にはまだ仕事が残っている。

「後は……あのコアを破壊しなきゃな……。」

スパイラルの効力が切れる前に、

ヴィレイサーはゆりかごのシールドのコアを破壊しようと、銃口をそれに向ける。

「ッ……。」

だが、銃身がぶれて中々照準が定められない。

（身体の方も限界か……。）

いつ崩壊が起きてもおかしくはない。

そんな身体に鞭を打ち、懸命に引き金を引こうとする。

「ウッ……。」

だが、それよりも早く彼の身体が牙を剥いた。

「ゴホッ……。」

ライフルで両手が塞がっている今、零れる血を押さえる事は出来ない。

口から溢れ出た血は、ライフルを真っ赤に染め上げる。

「すまん、エターナル……。」

［私に謝るより先に、やらなければならない事がありますよ。］

「そうだったな……。」

エターナルに励まされ、もう1度照準を定める。

不思議と、震えが止まっていた。

それだけでは無い。

周囲の音が明確に聞こえてきた。

ゆりかごが上げている悲鳴とでも言えばいいのだろうか？

駆動炉の音や、空を駆けている飛行音など。

ありとあらゆる音が耳に届く。

視界も充分過ぎる程良好で、澄みきっていた。

（灯滅せんとして光を増す……か……。）

人は死ぬ直前、僅かだが容態が良くなる事があるという。

それは、灯の消えようとする時に、光がしばらく明るくなる蝋燭のように。

今の自分は正にそれにあたるのだろう。

口の端に笑みを浮かべたまま、ヴィレイサーは引き金を引いた。

漆黒の砲は、コアに喰らい付きそのまま噛み砕く。

粉々に砕け散った破片が、ヴィレイサーの頬を掠める。

だが、それに何を思う事も無く彼は地に落下した。

ドサッと身体を打ちつけても、彼は呆然としていただけだった。
仰向けになっている身体を起こさず、そのままボーッとしている。
身体は最早、何も感じない。
痛みの無い身体は、酷く怖いもののように感じた。
「終わった……のか……？」
［そのようですね。］
ヴィレイサーの問いかけにエターナルが答えると、耳を劈くようなアラートが鳴り響く。
恐らく、コアが破壊され、シールドを維持できなかった事に対してだろう。
案の定、その事を知らせるアナウンスが流れた。
だが、ヴィレイサーの耳にはそれから先の音が聞こえなかった。
否、何も聞けないと言った方が正しいだろう。
思ったより早く、スパイラルの反動が来た身体は、
狭苦しい棺に納められ、何もできないのと同じだった。
（幸いなのは、内臓とかが破裂しない事かな……。）
口を動かす力も奪われて行き、ヴィレイサーは内心で笑っていた。

（けど、エターナルまで巻き込む気は無い……。）

懸命に右腕を動かし、やっとの事で空間を裂く。

音を立てずに開かれた星月夜の空間に、エターナルを軽く抛る。

「さらばだ……。」

微笑むヴィレイサーに、エターナルは何も言わない。

「戦友（とも）よ……。」

最期に、この言葉を伝えられて良かった……。

その気持ちが、彼の胸の内を占領する。

「これでもう、思い残すことはメガーヌと、
デュアリス、リュウビ、エクシーガ、ヴァンガードの事だけだな……。」

深く息を吐き、脳裏にメガーヌの事を思い起こす。

姉として気にしている訳では無く、自分のたった1人の大切な人として……。

（メガーヌがいなければ、皆を脱出させる事は無理だっただろうな……。）

彼女のお陰で、自分はここまで出来た。

彼女が召喚したインゼクト。

アレを使って、ゆりかごに突入したメンバーの動向を常に探っていた。

そして、タイミングを見計らって、ヴィレイサーが予め放っていたシャドーを使い、

なのは達を亜空間へ飛ばした。

その後は、フィルと同様にメガーヌのいる場所に転送したという訳だ。

（時間……かな……。）

重くなってきた瞼を閉じながら、ヴィレイサーは思った。

（俺がこんな風に逝ったら、母さんは怒るだろうなぁ……。）

だが、他にする事もない。

コレ以外に道は無かった。

様々な理由が、言い訳として頭の中を駆け巡る。

しかしそれも、すぐにどうでもよくなった。

「さようなら……。

俺の…一番……大切な――――……。」

その言葉を最期に、彼は逝った。

その後ゆりかごは、全てを焼き去る一筋の光芒に貫かれ、その姿を焼失させた。

欠片はおろか、何1つ残す事無く……。

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　乖離　～望んだ終焉へ～（後書き）

鮮血
「祝！　死亡ＥＮＤ～。」

ヴィレイサー
「お前、そんなに俺に恨みがあるのかよ……。」

鮮血
「いや、まったく無い！
だけど自分の所の主人公をこういう風にするの、楽しいんだよ。」

ヴィレイサー
「まぁ、所詮は創作キャラだからいいけど。
ってか、これが終わった後のフィルとメガーヌの心情は？」

鮮血
「思い付かなかった。」

ヴィレイサー
「うわー……。」

鮮血
「そんな目で見るな！
僕に文才が無い事ぐらい、分かっているだろうが！」

ヴィレイサー
「そりゃあな。
ってかコレ、絶対に前後編で分けた方が良かったって！

ｗｏｒｄ（２００７）で７０ページ超えたし！」

鮮血
「そうなんだけどさぁ……。」

ヴィレイサー
「大体、本編だってこないだの１７話が目一杯だし。
アレは２０ページだっけ？　つー事は、約３．５倍か……。」

鮮血
「でも、区切るとなると中途半端になるんだよね。
ページ数的にも最適なのは、公開意見陳述会で、
フィルくんがメガーヌの所に転送される箇所、
つまりは、『フィルは意識を手放した。』が前半の最後かなぁと
思うけど……。」

ヴィレイサー
「いや、中途半端だろ……。
しかし、よくもまぁこんな話を思い付けたな……。」

鮮血
「『～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｍｙ　ｈｅａｒｔ～』を読んでたら、ふ
と浮かんで……。
っと、ここで改めてアルフォンス先生へ謝辞を。
今回は、若輩の身分である僕とのコラボ、
許可をして頂き、誠にありがとうございます！
さて、ここでアルフォンス先生の作品の紹介を。」

『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～Ｒｅｍｅｍｂｅｒ
ｍｙ　ｈｅａｒｔ～』
ゆりかご決戦に負けた管理局は、
何とか生き残ったティアナとフィルを中心に最後の決戦に挑んだ。
クアットロを倒し、すべてが終わったかに見えたが……。
これは、オリキャラのフィル・グリードが女神の力を借りて逆行し、
再びスカリエッティに戦いを挑んでいく物語。
彼は、歴史を正しき道に戻し、
六課のみんなを、助けることができるのだろうか……
鮮血
「と言うものです。
１話１話が読み応えのある作品であり、
更には様々なＩＦ　ＥＮＤＩＮＧが書かれております。
どの話も素晴らしい仕上がりとなっております故、
皆様も、是非ともご覧ください。」
ヴィレイサー
「アルフォンス先生、本当にありがとうございました。」

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　堕罪　～幽明界を異にする～（前書き）

鮮血
「またもや本編をすっぽかして、ＩＦを書いてしまいました。」

ヴィレイサー
「お前、そんなんで本当に大丈夫か？」

鮮血
「大丈夫だ、問題無い……多分（汗）」

ヴィレイサー
「やれやれ……。」

鮮血
「今回のＩＦ　ＳＴＯＲＹは、神崎はやて先生の作品、
『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』
とのコラボです。
以下の注意点がありますので、目を通して下さい。」

1、このコラボの書き手は、鮮血の刻印なので、
神崎はやて先生の書くそれとは、異なります。
神崎はやて先生の文章がいいという方は、お戻りください。

2、普段の『～氷翼の天使～』とは違う雰囲気となっております。
苦手な方はお戻りください。

3、主人公はヴィレイサーとなっておりますので、
リオスくんの描写が少ないと感じられます。　ご注意ください。

4、一部の文章は、『氷翼の天使』本編から引用しました

5、系統としてはＢＡＤ　ＥＮＤです。

ヴィレイサー
「それでは、どうぞ」

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　堕罪　～幽明界を異にする～

目にも留まらぬ速さで、その虚空を駆け抜ける２つの光芒。

片方は、誰もがその美しさから荘厳な光だと思うであろう空色の光。

駆け抜けた軌跡には、彼の者の光が尾を引いていた。

そしてもう片方は、神秘的でありながら、どこか孤独を魅せる漆黒の光。

空色のそれよりも遅れてはいるが、追いつこうと必死になっているのが分かる。

ガキィン！

刃が噛み合う音が、嫌に大きく聞こえる。

それと共に、２つの光芒から咆哮が轟く。

想い――――――

願い――――――

己が選んだ道の為に、それを訴えるべく叫ばれる言葉。

「君は……。」

プラチナブロンドの髪を揺らして、空色の彼が苦々しく呟く。

「君は何故、僕の道を妨げる！？」

叫びと共に振るわれた神々しい剣。

それを向けられたもう1つの光は、あっさりとかわす。

空色の光に言われた言葉に、彼は嗤うだけだった。

「空けが！
それが俺の望んだ未来だからに決まっているだろ！」

「僕がやらなきゃ、世界は！」

「だから己が命を散らさせてくれ……と？
死に急ぐ奴の戯言など、誰が耳を貸すと思う！？」

距離を取った漆黒に、空色が追撃を仕掛ける。

だが、剣を背後に振りかぶった刹那、漆黒の光が逃げていた方向から急旋回する。

それに空色が気が付いた時には、彼の腹に蹴りがめり込んだ。

「ガハッ！？」

「そらぁ！」

そこで攻撃が止むはずもなく、更に拳が顔面を捉える。

「ッ……。」

吹っ飛んだ少年が、体勢を立て直して殴られた箇所を摩る。

「そんな暇があるとは、余裕だな……リオス！」

名を――――リオスと呼ばれ、ハッとして顔を上げる。

その瞬間、対峙していた漆黒――――ヴィレイサーから砲撃が放たれた。

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　堕罪　～幽明界を異にする～

聖王のゆりかご。

そしてそのコントロールルーム。

そこにあしらわれた豪華な玉座に、その男はいた。

ルシアス＝コーネルド。

後にＬ・Ｐ事件と呼ばれるそれの首謀者だ。

「……来たか。」

閉じていた瞼を開き、振動している扉を動じる風も無く見詰める。

焦点が定まった刹那、大きな爆発と共に扉が吹き飛ぶ。

その土煙から、４つの人影がゆっくりと歩いてくる。

厳かな表情を見せるリオスとリリィ。

そして、その２人に続くように足を踏み入れるなのは。

最後には、ヴィレイサーが入ってきた。

「……ルシアス…コーネルド……！」

ギリと歯軋りするリオスに、ルシアスは僅かにその表情を変える。

浮かべているのは、嗤笑。

「ただ憎しみのままに来るかと思っていたが、存外冷静だな。」

大剣型のストレージデバイス――――ルインを目覚めさせ、その勇姿を魅せる。

すぐさまリオスが駆けだし、ルシアスとの間合いを詰める。

双剣を何の躊躇いも無く振り下ろす。

「ぬん！」

しかし、それは突き出された拳に受け止められる。

リオスの剣の重さは、並大抵のものでは無い。

ルシアスみたく、眉1つ動かさずに止めるなど、正に神技としか言えない。

だが、リオスもそれに負けじと魔力弾を数個発生させる。

それが放たれると同時に、後ろに控えていたヴィレイサーも駆けだ

す。

魔力弾を、持てる限りの速さでルシアスに殺到させる。

それでも、ルシアスは未だに得物を取り回そうとはせず、拳圧で吹き飛ばす。

その拳圧に巻き込まれぬよう、横から遠回りしていたヴィレイサーが踊りかかる。

それと同時に、がら空きとなった胴体へと、リオスが踏み込む。

「甘い！」

しかし、それすらルシアスには届かなかった。

もう片方の手に持っていた大剣でリオスの双剣を受け止め、ヴィレイサーの一閃を脹脛にある甲で押さえる。

剣と剣。

甲と剣。

その2種が奏でる金属の不協和音。

決め切れない焦燥。

リオスとヴィレイサーの瞳に、焦りと怒りの色が見て取れる。

「フッ……この私を相手に、己が未熟な力で押すしかないとはな！」

語気を強めた。

そう思った直後、ヴィレイサーはいきなり伸ばされた脚の力に押し戻される。

「グハッ！」

壁に大きく吹っ飛び、背中を打ちつける。

リオスは、戦友のそれに意識が持って行かれた。

その時間は、本当に数瞬。

そう、数瞬のはずだった。

だが、それを見逃してくれるほど、ルシアスは甘くは無かった。

不敵に笑い、空いている方の手を、リオスの腹に当てる。

（しまった！？）

急いで離れようと、全身に指示を出そうとした時も時――――

「バスター。」

――――無機質で冷酷な言葉が紡がれた。

まともに防御の行動すら取れなかったリオスは、容易く吹き飛ばされる。

「リオスくん！」

床を転がるリオスの傍まで駆け寄り、なのはは彼の安否を気遣う。

「ゴホッ……。」

大きく咳き込むだけで済み、リオスは内心で安堵した。

「リリィ＝グライハイトよ。
君はこの世界をどう考えている？」

「どう……とは？」

リオスを一瞥し、ルシアスは立ち尽くしているリリィに問うた。

「君のいた世界は、管理局の管轄にあった。
だと言うのに、君の世界へ来た局員共は遊び放題、やりたい放題。
更には現地住民の陳情も聞かず、ただ遊び呆けていただけ。
それ故に、飢餓と貧困が幾多の町を、村を襲った。」

ルシアスの演説めいた口調に、ヴィレイサーは舌打ちした。

恐らくは、リリィの心情を揺さぶる事が望みだろう。

だが、ヴィレイサーはその剣を――――力を振るえなかった。

彼女の――――リリィの為と思えば、動けたかもしれない。

それでも、彼は動く気が無かった。

今自分が飛び込んで、何になると言うのだ。

自分と彼女は、何の接点も無いのだ。

ならば、彼奴の――――ルシアスの演説に耳を傾けても良かった。

（リリィが出す答えに、俺は干渉しない。）

息を整えて、ヴィレイサーは立ち上がる。

しかし、攻撃する意思が無いと踏んでいるのか、ルシアスは一瞥せずに続けた。

「君が病魔に苦しんだのも、兄が猟師をして生活をしなければならなくなったのも、
全ては、この時空を管理するなどと、神を気取った愚者が齎したものだ。
憎くはないかね、時空を支配する愚者が！
そして……それに支配され腐敗していくだけの世界が！」

ルシアスの力強いそれに、リリィは目を閉じた。

逡巡しているのか。

それとも、己が選択を指示そうと己を律しているのか。

それは誰にも分からなかった。

ただ1人、リリィ＝グライハイト当人を除いては……。

「確かに……。」

そして、彼女はゆっくりと紡ぎ出した。

自身が望んだ答えを。

「……確かに、私と兄は苦労をしてきました。
けど、それ以上に“楽しかった”！
大好きな兄と一緒に居られる事が……。」

そこで言葉を切り、彼女はふとリオスを見る。

「……そして、リオスさんと一緒に過ごせた事が。」

そう言って、彼女は笑った。

「リリィ……。」

彼女の天真な笑顔に、リオスは表情を曇らせた。

こんなにも優しい少女の兄を――ジルを、自分はみすみす殺すしかなかった。

その事実が、重くのしかかってくる。

消沈するリオスの眼前で、リリィは言葉を続けた。

「だから、貴方の好きにはさせない！
未来に待つ物が、暴力的で、残酷な世界だったとしても！

私は……。」

自分に言い聞かせるように、リリィは胸に手を当てながら吼える。

「……私は、この世界が好きだから！」

ヴィシアスで虚空を薙ぎ、リリィはルシアスへとその身を躍らせる。

「フン……。
陳腐な演説だな。」

ルシアスはリリィの言葉を嘲笑い、拳圧で刃を弾く。

「クッ……。」

必死に踏み止まろうとするリリィの努力も空しく、ヴィシアスは彼女の手から離れた。

それは回転しながら弧を描き、近くの床に突き刺さる。

「貴様もそう思うだろ、ヴィレイサー＝セウリオン？」

「そこで俺に振るのかよ……。」

ヴィレイサーを横目に、ルシアスは先の演説が如何に陳腐だったかを求める。

床に突き刺さったヴィシアスが、僅かに倒れて、その刀身にヴィレイサーを映す。

「貴様とて、腐敗しきった今の管理局に呆れているはずだ。
だからカタストロフィーとして――――傭兵として生きているのだろう？」

「あぁ、その通りだよ。
俺は暗部が嫌いだ。　俺の手でぶっ潰したいぐらいにな！」

母として慕ってきたクイントを殺されたヴィレイサー。

その真相は、管理局の上層部によって今まで明るみに出る事はなかった。

だが、その真相を知らされ、憤りを覚えた事もまた事実。

「ヴィレイサー……。」

身体を起こし、リオスは悲しみを宿した瞳に、彼の姿を映す。

「けどな！
お前の演説の方が、よっぽど陳腐に思えたよ！」

「何……？」

「俺以上に悲しみを持つリリィが前を向いている……。
だと言うのに、俺が向かなくてどうするって言うんだよ！」

太刀を力強く握りしめ、ルシアスに突撃する。

「愚かな……。」

だが、やはりその剣は拳圧に抑えられてしまう。
再び壁に吹き飛び、ヴィレイサーはルシアスを苦々しく睨むしか出来なかった。
無様なヴィレイサーを見やるルシアスだったが、
いつの間にかヴィシアスを引き抜いていたリリィがもう1度迫ってきた。
「何度やっても同じ事！」
大剣を一閃させて、リリィの手からヴィシアスを離させる。
「フン。
いくら身体が化け物であろうと、中身は素人。
円熟された動きにこそ、強さの真髄有りと知れ！」
言い放ち、ルシアスはリリィの身体を幾重にもバインドで拘束する。
そして、手に“ある物”を具現させる。
「それは……！？」
その姿を認めた瞬間、なのはが瞠目した。
「さすがはかの“闇の書事件”に関わっただけあって、君は知っているか。」
ルシアスの手にあるのは、古びた西洋風の書物だった。

「そう……これこそが“闇の書”だ。
尤も、オリジナルのように管制人格も融合騎も無ければ、力の半分も有していない。
つまりは、ただの失敗作の模造品だ。
だがしかし、それでも……。」

言うが早いか、それを開いてリリィに向ける。

「……これぐらいの事は出来る。」

すると、途端に光が溢れ、魔法陣がリリィの姿を消し去っていく。

「ウアァ！？
アアアアアアァァァァァ！！！」

「リリィ！」

リリィの悲鳴に、ヴィレイサーが彼女の名を叫びながら駆け寄る。

ヴィレイサーの背後では、ＩＳで作り出した人間を模った影が弓を引いていた。

「Ａｓｔｒａｌ　Ｒａｉｎ．」

射出された数多の黒い矢と、ヴィレイサーのジャベリンが一点集中する。

しかし、ルシアスのシールドはそれを容易く無力化していく。

それは、なのはの砲撃も同じだった。

無駄に終わってしまった攻撃。

だが、それでもヴィレイサーは消えていくリリィに、その手を伸ばした。

「リリィ！」

「……レ…サーさん……。」

消えていくリリィの姿と同じように、紡がれた言葉は途切れ途切れだった。

無論、ヴィレイサーの手が彼女に届くはずもなく、それは虚空を掴むに終わった。

その直後――――

「オオ……ウウオオオォォォォォォォォォ！！！」

――――ルシアスが、小心者は否応なしに竦み上がらせるほどの咆哮を上げる。

「フッフフフ……。
オオオォォォォ！　漲る！
全身に力が漲るぞおおおおおおおおおおおおおお！！！」

「野郎……。」

ルシアスの咆哮と強大な力の奔流に、

ヴィレイサーはただ睨むしか出来ない自分を憎んだ。

「リリィを……悪魔（サタンズ）の鍵（キー）を吸収した……！？」

突然の事態に、リオスは驚愕するしかなかった。

今、３人の眼前に居るルシアスは、
赤を基調としていたバリアジャケットを黒く変色させ、
その背には堕天使の如き、黒い翼が生えていた。

「彼奴と同じように黒い翼を持っているなんて……。
考えただけでも……心底気にくわねぇな……。」

ヴィレイサーの呟きは、誰にも聞かれる事はなかった。

それに答えるよりも早く、リオスはなのはをその場から突き飛ばした。

「リ、リオスくん！？」

驚くなのはに、彼は何も言わない。

否、正確には何も言えないのだ。

「ガッ……！？」

目にも留まらぬほどの速さで、“何か”がリオスを攻撃したのだ。

壁をも貫通し、突撃してきたルシアスに突き飛ばされたリオスは、
それでもフリーズフィールドを発生させて致命傷を免れた。

だが、そこでルシアスの攻撃が止むはずも無く、
リオスはゆりかごの壁を破壊して天高く突き上げられた。

「リオス！？」

「コーネルド！」

その様を、外に居たシグナムとフェイトが驚愕の瞳で見詰める。

「リオスくん！」

なのはとヴィレイサーもその2人を追うべく、ゆりかごから外に出る。

「アアアアアアアア！」

精一杯の力を込め、自身を鼓舞するようにリオスは咆哮する。

そのお陰か、なんとかルシアスの大剣から脱する。

だが――――

「グゥ……！？」

――――すれ違い様に放たれた一撃が、彼の胸を浅く裂いた。

僅かな血が、風によって揺れながら、地表に落下していく。

「リオスくん！」

シグナムとフェイト、なのはやヴィレイサー、更にははやてが彼の傍まで急いだ。

「ほう。
機動六課の隊長格が勢揃いとは……圧巻の極み。」

ルシアスの口上は、それらを凌ぐ厳かな雰囲気が感じられた。

誰もが、無闇に攻撃しない所を見ると、威圧と言う点では成功したのだろう。

「コーネルド、奴が？」

「はい。
アイツが……ルシアスです。」

「アンタが……。」

リオスの言葉に、はやては自分らを見下しているルシアスに視線を向ける。

「……って、それは！？」

だが、その目が“闇の書”に酷似したそれを捉えた瞬間、瞠目する。

それははやてだけでなく、シグナム、そしてフェイトも同じだった。

「貴様！　それをどこで！？」

「む？
そうか……貴様がヴォルケンリッター。
闇の書の守護騎士プログラムが一、か……。」

「答えろ！」

「吼えるな。
どうせ答える義務は無いのだからな。」

不敵に笑い、書物を脇に抱える。

「だが、どうしても知りたければ……。」

そこまで言った瞬間、ルシアスの姿が消失した。

「……話す気にさせてみるがよい！」

そして、その声が聞こえた時には、シグナムの背後に回り、剣を振りかぶっていた。

「ッ！？　レヴァンティン！」

［Ｓｔａｒｔ　Ｕｐ.］

咄嗟に魔力スラスターを吹かして、弾かれるように飛び退く。

それに僅かに遅れて、ルシアスの死を招く刃が、先程までシグナムがいたそこを薙ぐ。

「いつの間に背後に！？」

その様子に、誰もが戦慄した。

急いでその場から離れる一同だったが――――

「驚いている暇があるのか？」

――――既に視界からルシアスの姿は消失していた。

「どこに！？」

全員が周囲を探る中、頭上が徐々に明るみを帯びて行った。

「上だ！」

ヴィレイサーの叫びに、皆そちらに視線を巡らせる。

彼らがルシアスの姿を確認したとほぼ同時に、ルシアスの砲が火を噴いた。

「消し飛べ！」

［Ｓｔａｒｌｉｇｈｔ　Ｂｒｅａｋｅｒ．］

「なのは、下がって！」

「コーネルド！」

自身の回避行動よりも早く、フェイトはなのはを。

そして、シグナムはリオスを射線上から突き飛ばした。
そんな無防備の2人に迫る星芒を、はやてがエクストラドライブの防壁で抑える。
しかし――――
「「「あああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！？」」」
「フェイトちゃん！？」
「シグナムさん！　はやて！」
――――それはまったく意味を成さなかった。
薄い紙切れ同然のように破られた防壁。
仲間の手で砲撃を免れたリオスとなのは。
2人から戦意を刈り取るには充分過ぎる光景だった。
「さて。」
そして、強大な魔力ダメージを受け、意識を保っているとは思えない3人へ、
ルシアスはゆっくりと近づいて行く。
「させるか！」
彼の意図に気が付いたリオスが、瞬時にバインドを張る。

その上で、リオスは更にグロリアスをランチャーモードに変更する。
自分と同じように、時間を稼ごうとするヴィレイサーを横目に、
彼は抜き打ちで砲撃を放つ。
ルシアスの注意を逸らし、なんとかフェイト達を助け出す為だ。
瞬間的に判断したそれは、適格と言えるだろう。
だがそれは、“ルシアスに通用すれば”の話だ。
「小賢しい。」
ポツリと呟き、ルシアスに迫った砲撃は、彼を覆う球体のシールド
に弾かれる。
「させん！」
砲撃では意味は無いと判断し、ヴィレイサーはルシアスの進路上に
立ち塞がる。
「その心意気や、よし。
だが、貴様では心許ないな！」
球体のシールドを展開したまま、ヴィレイサーに突っ込む。
「抜かせ！」
そう吼えるが、ルシアスの盾を突き破れるとは思えない。

迫りくる狂気に、ヴィレイサーは尻込みする訳にも行かず、ジャベリンを突き立てる。

互いの力が拮抗したのは、本の僅かな時間だけだった。

「グウゥ！？」

ルシアスに押され、ヴィレイサーは徐々に押され始めていく。

加勢しようと、リオスが彼の元に急ぐ。

それを一瞥し、ルシアスは厄介が増えるのを嫌い、ヴィレイサーに向けて手を翳す。

一瞬、掌が光ったかと思うと、そこから砲撃が放たれた。

「グアアアアァァァァ！？」

「ヴィレイサー！」

抵抗できるはずも無く、ヴィレイサーはフェイト達よりも少し離れた所に吹っ飛ばされる。

大きな音を立てて、ヴィレイサーは地に叩きつけられた。

「この……グッ！？」

伏したままでいるはずも無く、ヴィレイサーが急いで身体を起こした時だった。

「ガハッ……ゴホッ！」

大きく咳き込み、それと共に鮮血が手に付着する。

「こんな時に……。」

遺伝子の操作により、ヴィレイサーは短命だった。

他者の遺伝子を組み込んだ身体は、拒絶反応が起きる程までにボロボロになっており、

それによる苦しみが、時も時、襲ってきた。

吐血と、四肢が焼き千切られるような痛みを起こす炎症。

それらが同時に発生し、ヴィレイサーは悶え苦しむ。

「アアアアァァァ……！」

なんとか情報を得ようと、苦しみのあまり閉じていた目を開く。

だが、その瞳は――――

「ぼやけている……？」

――――綺麗に情報を読み取らせてくれなかった。

霞む視界に、ヴィレイサーは苛立った。

「貴様らも、我が中で眠れ。」

ルシアスの冷淡な声色に、ヴィレイサーは顔を上げた。
だが、霞んでいるだけの瞳では何が起こっているかは分からなかった。
唯一分かるのは、人影が見えるぐらいだった。
ルシアスは誰に言ったのだろうか？
それを考えている時、全身が熱くなった。
「アアアアアアアアアア！」
強制的に気絶させられそうなほど強烈な熱さに、
ヴィレイサーは成す術なく意識を手放した。
「フハハハハ……素晴らしい！
悪魔の鍵（サタンズキー）、そして４人もの高ランク魔導師の贄が、
これほどまでに力漲るものだとは……！」
「ルシアス、貴様！」
大好きな仲間を、眼前であっさりと失った怒りに身を任せ、
双剣へと変貌させたグロリアスを、リオスは真っ直ぐに振るう。
「無駄な事を。」
リオスの愚行に、ルシアスはただ嗤うだけだった。

そして、今までと全く変わらずに光速の剣を振るい、迎え撃つ。

能力など一切使っていないと言うのに、既に光の速さまでに達した一撃を、

ルシアスは平然と見せつけてきた。

［Ｓｔｒｉｋｅ　Ｆｏｒｃｅ．］

その強大さにリオスはしかし、退こうとはしなかった。

魔力を吹かし、絶対光速で対抗する。

更に――――

［Ｇｒａｓｐｅｒ　Ｆｏｒｃｅ．］

――――光速の世界へと突入した分身を幾つも作り出す。

「まだ！」

そこで攻撃の手を緩めず、更に力を解放する。

［Ｇｕａｒｄｉａｎ　Ｆｏｒｃｅ，Ａｓｓａｕｌｔ　Ｂｉｔ．］

ガーディアンフォースにより、ミリ単位まで制御を可能にしたビットが荒れ狂う。

３つのフォースを同時開放する荒技。

これで、確実に追い詰める！

そう心に決めたリオス。

だが――――

「無駄だ！」

――――ルシアスの強い一声と共に、彼の全身から光が迸る。

「なっ……！？」

その光は決して、心が温まるような生易しいものでは無い。

リオスの分身を、ビットを――――彼の力を全て屠る、禍々しい光だった。

「リオスくん！」

そしてそれは、リオス自身をも呑みこんだ。

分身は霧散していき、ビットは爆散。

更に、閃光に呑まれたリオスは騎士甲冑を焼かれ、地に墜ちて行った。

なのはが急いで彼に駆け寄ろうとするが、

それよりも早くに、ルシアスがリオスを捕まえた。

「天使の鍵（エンジェルスキー）よ……その命、悪魔たる私に貸してもらうぞ。」

言うと、リオスとルシアスの身体が発光していく。

「ガァ！？　アァ……アアアアアアァァァァァ！？」

「リオスくん！　あ……うぁっ！？」

リオスの絶叫に、なのはは傍まで行きたい衝動に駆られる。

しかし、暴風のように荒れ狂う魔力の奔流が、それを不可能にさせる。

やがてその光は強くなっていき、途端に、勢いよく天空に昇って行った。

その光の行先は――――

◆◇◆◇◆

「艦長！　下方より謎の巨大なエネルギー反応！」

「何だと！？」

――――軌道上だった。

オペレーターの報告に、艦長であるクロノは驚いた。

彼が今いるのは、次元航行艦、クラウディアの中だった。

報告に上がったエネルギーが、ある点へと達し、そして弾けた。

その弾けた閃光が止み、クロノが目視した先にあったのは――――

「鍵……なのか？」

――――巨大な鍵状の構造物だった。

その鍵が幽かに発光したかと思うと、それに呼応するように紫色の雲が立ち上った。

「なっ……！？
アレは……！？」

そうしてその中からゆっくりと姿を現したそれに、クロノは目を見開く。

彼らの目の前にあるのは、巨大な扉。

そして、それを開く為の鍵だった。

◆◇◆◇◆

――――ッ……。

小さなうめき声を上げ、彼は段々と覚醒していく。

――――ここは……？

やがて完全に覚醒し、周囲を見回す。

そこは、何も無い真っ白な空間だった。

上も下も、方向なんてものは当然ない。

しかも距離感がイマイチ掴めない。

彼――――ヴィレイサーは、ただ茫然としていた。

――――俺は……死んだのか？

声を発している気がするのに、自分の声が耳を通して聞こえてこない。

直接頭に響いているものに近かった。

――――死んでいませんよ。

その時、背後から声がかかった。

弾かれたようにそちらを見ると、そこにはリリィがいた。

――――ここは、ルシアスの持っていた闇の書の中です。

――最初に蒐集された君が言うのなら、間違いないんだろうな。

その場から動く意思を示さず、ヴィレイサーは座り込む。

――リリィ。

――なんですか？

――リオスの……いや、エンジェルスシステムの代償を、君は……？

――知っています。

ヴィレイサーの言葉を遮り、答えるリリィ。

彼女は、ヴィレイサーの隣に座る。

――エミリアだった時の記憶が、残っていますから……。

――そうか……。

ならば、彼女は知っているのだろう。

エンジェルスシステムの代償が、“リオスの感情”だという事を。

――どう思う？　アイツが感情を失っていく事を……。

――どう……と言われても。『嫌だ』としか思えません。

当然とでも言うように、リリィはしっかりと答えた。

――――『思う』だけ……か？

――――え……？

――――『思う』だけで、それ以外は何もしないのか？

――――それは……。

答えに詰まり、リリィは顔を伏せる。

――――まぁ、アイツに「使うな」なんて言っても、無意味だろうな。

――――私も、そう思います。

――――なら、次にお前はどんな行動をする？

――――私は……。

ヴィレイサーの問いに、リリィは己が望む答えを見出せなかった。

――――お前は……いや、お前“達”は、本当に優しいな。

笑みを浮かべ、彼は何気なく上を向く。

もっとも、向いた方向が上なのかどうかは分からないが……。

――――優し過ぎるぐらいだ。

――それは……悪い事でしょうか？

繰り返し述べてくるヴィレイサーに、リリィは不思議そうに訊ねる。

――まったく悪くないさ。

――では、ヴィレイサーさんはどう思うんですか？　リオスさんの力を……。

逆に問われ、ヴィレイサーはしばし考える。

だが、やがて口を開いた。

――俺は、ぶん殴りたいな。

――はい……？

一瞬、何を言っているのか分からなかったリリィは思わず聞き返した。

――リオスが、好き勝手に使っている訳じゃない事は分かっている。

視線を前に戻し、彼は目を瞑った。

――けど、許せないな。　あんな危険な力を使うのが。

――だから、『ぶん殴りたい』ですか。

――あぁ。　だけど、それでアイツが使わなくなるとは思えない。

――だったら、また殴るんですか？

――いや……。

そこで目を開き、彼は面白そうに笑う。

――俺は殴るだけで終わらせてやれるほど、優しくは無いんだ。

――じゃあ……？

――まだエンジェルスシステムを使うと言うのなら……。

そこで言葉を切り、何気なく虚空へと手を伸ばす。

何も掴み取れないと知りながらも、彼は何故か伸ばしてみたくなった。

――俺は、“戦って”それを止めさせる。

◆◇◆◇◆

ルシアスは神門（ヘブンズゲート）を開く鍵の作成に成功した後、

ゆりかごへと戻って行った。

その際、リオスは投げ出されたが、既の所でなのはが受け止めた。

ルシアスを追うべきなのだろうが、リオスの治療を先決したいなのはは、

急ぎ、仲間の下へと向かった。

アースラへと戻ったなのはは、すぐにシャマルに治療を頼み込んだ。

彼女の周囲には、一足先に戻ってきていたフォワード陣がいた。

全員がシャマルの治療を、固唾を呑んで見守っていた。

だが――――

「どうして……どうして目を覚まさないの!?」

――――シャマルの言葉に、誰もが耳を疑った。

「異常はどこにも無いのに!
目を覚まさないなんて……。」

「マスターを助けたいですか?」

と、その時、グロリアスが聞いてきた。

「助ける方法があるの!?」

なのはは、藁にも縋る思いでグロリアスの置かれている机に駆け寄

った。

［はい。
そしてそれは、貴女方にしか出来ません。］

「私達にしか……出来ない……？」

「それはどういう方法なの？」

［貴女方の魔力を、マスターへ分け与えるのです。］

「魔力を？」

「そんな事でいいの？」

なのは達は、思わず聞き返してしまった。

［はい。］

だが、グロリアスから返ってきた言葉には、どこか自信に満ちていた。

それだけで、６人が頷き返すのには充分だった。

「グロリアス、お願い。」

なのはの言葉に、１回だけコアが点滅した。

そしてなのは達が戸惑い中、光が部屋中を覆った。

［行ってらっしゃいませ。］

そんな言葉が聞こえた。

そう思った時には、光が晴れ、部屋には誰1人としていなくなっていた。

◆◇◆◇◆

――――「“戦って”止める」って……。

――――いや、アイツは絶対に使うよ。

――――どうしてそう言えるんですか？

ヴィレイサーの決意に、リリィは戸惑いを覚えた。

――――そんな事しなくても……。

リリィの質問に、ヴィレイサーは首を傾げた。

――――さぁ？　どうしてだろうな？

自分でも分からなかった。

だが、それでも何故かそれを確信できる気がしてならなかった。

――理由なんているのかよ？

――え……？

――理由なんて無い。　俺は、アイツが使うと感じた。　それだけだ。

――羨ましいです……。　そんなにもリオスさんの事を信じられて。

――どうだろうな？　戦友で無ければ、信頼なんてしないと思う。

そう言って、彼はリリィの方を見る。

――それに、君だってリオスを信頼しているだろ。

――でも、リオスさんは……。

――確かにな。　けど、だからって君がその想いを捨てていい訳じゃない。

――いいんでしょうか？

――誰かを好きになるのに、誰かの許可を取る必要なんて無い。

――私は、あの人を想い続けていいんでしょうか？

――君の大事な気持ちだ。　むしろ、アイツの為に想い続けてやれ。

――ヴィレイサーさん……。

――そこまで想われているリオスが、羨ましいよ。

口調はいつもと同じで、まったくそれを感じさせない。

――本当に、羨ましいな。　嫉妬しちまうほどに……。

――え……？

注意していないと、聞き洩らしてしまうのではないかと思えるほどの呟き。

だが、互いの声以外には静寂しかないこの空間で、ヴィレイサーの言葉はしっかりとリリィの耳に届いた。

――それって……。

――余計な事だったな。

真意を聞こうとしてきたリリィを無視し、ヴィレイサーは目を閉じた。

――あの……。

――聞かない方がいい。　それが、君にとって最善だ。

――――――……。

冷淡に返され、リリィは押し黙るしかなかった。

◆◇◆◇◆

「消えろ。」

その頃、ルシアスは神門（ヘブンズゲート）の周囲に居た艦隊を殲滅していた。

通常、軌道上に人が生身で出てこられるはずもない。

だが、ルシアスは悪魔（サタンズ）の鍵（キー）を取りこんだが故に、

それを可能にしたのだ。

そして、彼の蹂躙は今まさに終わりを告げようとしていた。

彼の掌に、収束砲の――――終焉の光が集まっていく。

狙うは、クロノのいるクラウディアだった。

逃げるなんて事は、決してできない。

それを悟った刹那、ルシアスの砲火が迫ってきた。

「ハハハハハハハハ！」

揺るがぬ絶対の展開。

それを目前にして、彼は高笑いした。

だが――――

「ハハハハ……ハ……。」

――――その嘲笑が、突如として止まる。

それもそのはずだった。

「バカな……！」

何故なら、彼の目の前には“あり得ない”光景が――――存在が舞い降りていたから。

「何故……何故貴様が、ここにいる！？」

ルシアスは、そこにいるはずのない存在に――――“彼”に心の底から喚く。

それは、今まで戦ってきたルシアスの勇猛な姿からは想像出来ない程に、滑稽だった。

それに対して、“彼”はただ平然と、そして不敵に笑うだけ。

顔を上げ、端正な顔立ちを――――純真な瞳を、

その綺麗なプラチナブロンドの髪から覗かせる。

その体躯は純白の騎士甲冑に包まれ、背には誰の追随も許されぬほどに美しい翼が。

そして“彼”の手には、共に歩んできた愛機が、しっかりと握られていた。

「グロリアス。」

［Ｙｅｓ．］

“彼”――――リオス＝コーネルドは、静かだがハッキリとした声で告げる。

「エンジェルスフォーム、ファイナルリミット……リリース！」

◆◇◆◇◆

リオスが最後の力の名を告げていた頃。

ヴィレイサーは胸を押さえていた。

――――クッ……。

――――大丈夫ですか！？

――直に収まる。　心配するだけ無駄だ。

――そんな……。

ここにきて、何故かヴィレイサーはずっと、冷淡な態度だった。

リリィはそれを、不思議に思っていた。

兄のタナトスの死後、リオスとリリィはヴィレイサーと合流した。

ルシアスのいる箇所までの道にいる敵を、予め排除していたのが、ヴィレイサーだった。

そこからルシアスのいる所まで、僅かな情報を得る為だけに、必要最低限な会話しか行わなかったが、それでも、ここまで冷淡では無かった。

何が彼の性格をここまで冷やしたのか……。

それは、リリィには分からない。

だが、知らないままでは彼の苦しみを理解できないのだ。

それ故に、リリィはヴィレイサーに先程から話しかけてはいるのだが、

やはり、冷たい態度が返ってくるか、のらりくらりとかわされるだけだった。

――フゥ……。

深く息を吐き、ヴィレイサーは押さえていた胸から手を離した。

――――大丈夫……ですか？

先程と同じ事を聞いていると知りながらも、リリィは訊ねずにはいられなかった。

――――問題無い。

また素っ気無く返され、リリィは今後をどうしたものかと考える。

――――病気か何かなんですか？

それでも、彼女は会話を止めようとはしなかった。

ヴィレイサーがそれを鬱陶しく思っていたかは分からないが、彼を支えられるのは自分だけだと思っていた彼女は、聞き続けた。

――――俺は短命なんだよ。

――――ッ！

至極当然のように、あっさりと言われた命の短さ。

それに、リリィは何も言えなかった。

支えてあげたいと思っていたにも関わらず、かける言葉が何も見つからなかった。

――――すみません……。

だから、彼女はただ謝るしか出来なかった。

――何故謝る？

――支えになりたいと思っていたのに、なれないからです……。

――フフ……ハハハハハ！

切実に言うリリィに対して、ヴィレイサーは心の底から笑ってしまった。

――どうして笑うんですか！？

――いや……俺はそんなにも、弱く見えるのか？

――強い者など、誰1人としていませんよ。

未だに笑みを浮かべているヴィレイサーに、リリィは淡々と述べていく。

――私達人は皆、弱いんです。

――それが君の考えか。

――ヴィレイサーさんは違うんですか？

――いや、同じだ。　だが……。

――なんですか？

――俺は、独りが怖くない。

――羨ましいですね、それは……。

――単なるやせ我慢だ。　そうでなきゃ、とっくに死の恐怖に喰い殺されている。

自嘲し、彼は自分の手を見た。

――震えているだろ？

――“死”と言う恐怖の獣が、牙を剥いて眼前にいるのだから、当然ですよ。

その手を、そっとリリィが自身の両手で包みこむ。

――慄然としない者など、決していませんよ。

――だが俺は、独りの恐怖と死の恐怖を飼い馴らしたいんだ。

そこまで言って、再び沈黙が2人を支配した

――――そうでもしなきゃ、俺はアイツみたく前を向けないから……。

――――前を……。

――――詰まる所、未来って奴さ。

リリィは、ヴィレイサーの言葉を頭の中で反芻する。

――――リオスは、いつだって前を向いていた。

まるで思い出話をするように、ヴィレイサーは懐かしむような口調になる。

――――誰よりも辛いはずなのに、前を向く事を止めなかった。

――――それが、羨ましいんですね？

リリィに自身の気持ちを見透かされ、ヴィレイサーは驚いた。

――――あぁ……。

だが、すぐにいつもの表情に戻る。

――――だから死なせたくない。

彼の口から出る言霊は、決意を体現するかのようにしっかりとしていた。

――――周囲の皆にとっての希望だから。

その時、遠くから空色の光が迫って来た。

――――来たか……。

その光は、ヴィレイサーだけを包み込む。

――――どうやら、私は無理みたいですね。

――――ルシアスとの融合が進んだからか。

ヴィレイサーの確認に、リリィは黙って頷いた。

――――だが、リオスが君を放っておく訳が無い。

――――信じていいんですよね？

――――愚問だな。

ヴィレイサーは、リリィの不安を嗤った。

――――君の、アイツを好く想いは本物なんだろ？

――――はい。

顔を伏せて答えたのは、恐らく赤面している所を見られたく無いからだろう。

――――なら、信じてやれ。

――――そうですね。

明るい声で答えたリリィの顔は、笑顔だった。

――――アイツにとっても、君は大切な存在だからな。

そう言った瞬間、ヴィレイサーの視界を閃光が遮った。

次に彼が目にしたのは、球体に魔力を注いでいる仲間達だった。

「リオス、お前は本当に幸福者だな。」

その光景に、ヴィレイサーは笑った。

その笑みはどこまでも儚く、どこまでも孤独だった。

◆◇◆◇◆

ヴィレイサーがグロリアスの内から戻された時、ルシアスは地上に降り立っていた。

その理由は――――――

「うわあああぁぁぁぁぁ！？」

――――局員を、自身のエネルギーへと変換する為だ。

「この程度では、我が糧にすらならんか……。」

弱者を見下し、それでも、力を欲する彼は再び他の局員に手を翳した。

その時――――

「させるかあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」

――――その叫びと光と共に現れた軍勢が、ルシアスの前に立ちはだかる。

「……しつこい奴等だ。」

鬱陶しそうに一瞥するルシアスの前には、リオス達がいた。

誰1人として欠けてはいない。

リオスの周囲には、彼を支える仲間が全員いた。

「僕達は、貴方の犯罪を認めるわけにはいかない。」

「貴様らに赦されようと赦されまいと、関係など無い！」

叫び、ルシアスはリオスへと一気に躍りかかる。

吸収した局員の力か、先程よりも圧倒的に向上した速度で、リオスの眼前へ迫り、大剣を振り下ろす。

リオスはなんとかそれに反応し、双剣を交差させるようにして受け止めた。

2人の鍔迫り合いに、フェイトとシグナム、そしてエリオが3方向から斬りかかる。

「「やあああぁっ！」」

「はあっ！」

「くっ！」

攻撃が当たる事を面倒に思ったのか、リオスを蹴り飛ばし、ルシアスは飛び退く。

急に標的を見失ったフェイト、シグナム、エリオはその場で急停止する。

しかし、リオスはそれを見逃すことはない。

彼を追撃すべく、すぐさまルシアスと同様の超高速の世界へ入る。

［Ｓｔｒｉｋｅ　ｆｏｒｃｅ，　ａｎｄ　ｓｏｎｉｃ　ｍｏｖｅ．］

ルシアスの速度も相当なものだったが、自らの高速行動に加え、フェイトとエリオの高速移動魔法をも使役するリオスは、それをも凌駕していた。

ルシアスに追いついたリオスは、彼の双剣に切り付けられる。

「グゥ！？　この私が……！？」

地に転がったルシアスは、切りつけられた事によって冷静さを失っていた。

「キャロ！」

「はい！」

その隙を見逃さず、リオスはキャロへ指示を飛ばした。

「［Ａｌｃｈｅｍｉｃ　ｃｈａｉｎ．］」

桃色と空色の２色の鎖が地から出現し、二重にルシアスを縛り上げた。

「こんなもの！」

それを力づくで砕こうとするルシアスだったが、
キャロの召喚技術にリオスの魔力が加わったその鎖は、簡単に砕けなかった。

動きを封じている間に、ヴィータがリオスの隣に立った。

「ヴィータ、動けるの？」

「舐めんな！
あたしの魔力も、持っていけ！」

紅の魔力が、リオスの中へ流れ込んでいく。

「ありがとう。」

微笑み、彼はヴィータの力強さをその身に刻んだ。

「グロリアス！」

［Ｇｉｇａｎｔ　ｓｃｈｌａｋ．］

巨大な槌、ハンマーモードと化したグロリアスを、渾身の力で振り下ろす。

キャロと二重の鎖で捕縛されたルシアスは、防御する事すら叶わなかった。

「グオオオオォォォォォォ！？」

ヴィータの魔力を受け取ったリオスが振るったハンマーは、否応なしにルシアスを地面へ叩きつける。

だが、それで終わりになるはずも無く、更に仲間が動き出す。

「行くわよ、スバル！」

「ＯＫ、ティア！」

［Ｐｈａｎｔｏｍ　ｂｌａｚｅｒ．］

［Ｄｉｖｉｎｅ　ｂｕｓｔｅｒ．］

更に橙色と空色の砲撃が叩きこまれ、ルシアスは辛酸を嘗める。

「この……これしきのことで……！」

「そんな……まだ……！？」

だが、有ろう事かルシアスはまだ立ち上がった。

「はあああぁぁぁ！」

「やあああああぁぁぁぁぁぁぁ！」

そこへ、シグナムのシュツルムファルケン、
そしてフェイトのプラズマザンバーブレイカーが加わるが、
その2つを以ってしても、決め切る事が出来ずにいた。

ルシアスは、極めて身体に近い所でシールドを張り、攻撃を防御しているのだ。

彼の動きを封じているシャマルのバインドとキャロのアルケミック・チェーンが、
もがいている事で、ミシミシと音を立てていた。

「クッ……。」

苦しい顔をするリオスに、どこからか翼の羽ばたきが聞こえてきた。

その音に、彼はハッとして大空を見やる。

「お前の独擅場だ。
彼奴の敗北で幕を閉じようじゃねぇか。」

不敵な笑みを浮かべ、2対の巨大な銃を、左右で連結させる。

「なぁ、リオス？」

「そうだね、ヴィレイサー！」

力強いリオスの返事に、ヴィレイサーは思い切り引き金を引いた。

「なっ！？」

直上からの一点攻撃が、ルシアスに迫った。

漆黒に彩られた砲は、勝利の光を内包しているかに見えた。

「ったく……射撃は得意じゃねぇんだ。
さっさとお前も引き金を引け！」

「分かった！」

ヴィレイサーの砲撃に抑え付けられているルシアスに、あと1撃加えようとする。

「行くよ、グロリアス？」

［Ｙｅｓ．］

ヴィレイサーのいる位置よりも天高く飛翔し、
リオスは杖型に変形したグロリアスを、ルシアスへ突きつける。

［Ｒｏｄ　ｍｏｄｅ．］

最後の1撃を放つべく、魔力を集束させようとするが……。

「うぐっ……！？」

急速に力が抜けていくのを感じ、リオスは頭を押さえた。

（くそ……。　なんだって、こんな時に！）

魔力を集束させようと、必死になるが、力が入らない。

感情が――――果ては記憶が失われていく。

悲しみが――――

苦しみが――――

怒りが――――

そして――――喜びが――――

喪失感からか、集束しかけていた魔力が、

水泡に帰す事を表しているかのように、虚空へと霧散していく。

「駄目だ……。」

諦めと、皆を巻き込んでしまった後悔が、彼の脳裏をよぎった。

だが、その時――――

「大丈夫だよ。」

「え……？」

――――暖かい声と共に、杖を握る右手に、温もりを感じた。

「なの……は……？」

隣を見ると、そこには自身の手の上にその手を重ねて、微笑んでいるなのはの姿が

「リオス君……一緒に、決めよ？」

「……うん！」

その言葉だけで――――ありきたりだけど、とても暖かい言葉だけで、充分だった。

なのはに微笑み返した時、忘れていたはずの感情が蘇った気がした。

そして、改めて思った。

僕はまだ、笑顔でいられるんだ――――と。

霧散していた魔力が、それを待っていたかのように、

2人の前にどんどんと集束していく。

それはやがて、巨大な魔力球を形作った。

「お、おのれ……！」

それをルシアスは、憎しみの篭った目で見つめる。

だが、その目の先に移る彼らの光は何ものよりも眩しく、

彼にはどこまでも――――どこまでも手の届かないものだった。

「待たせてごめん、ヴィレイサー、皆！」

リオスの声に、各所にいた仲間達が笑みを浮かべる。

「終幕だな。」

ヴィレイサーが、ゆっくりと攻撃の手を緩める。

それを確認し、リオスはなのはを改めて見た。

その視線に気が付き、なのははまた、笑みを見せる。

互いに頷き、終末の光をより一層輝かせる。

「いくよ！　これが私の……ううん！　私達の、全力全開！」

「グロリアス！」

［Ｃｏｍｐｌｅｔｅ．］

そして――――

「「アストレア・スター……。」」

振り上げられた杖は、一層神々しく輝き――――

「「ブレイカアアアアアァァァーーーーーーー！！！！」」

――――解き放たれた。

リオスの空色とも、なのはの桜色とも違う、純白の輝きを放つ巨大な砲撃。

その極光が、身動きの取れないルシアスの身体を飲み込んでいく。

「この……管理局如きがあああぁぁぁぁぁぁぁーーーーーーーーーー！！！！」

憎しみを込めた叫びを残し、ルシアスの姿は、
砲撃の色と同じ純白に塗りつぶされていった――――

勝利を信じた終末の光は、やがてゆっくりと収まっていった。

それに断罪された男――――ルシアス＝コーネルドは、力なく倒れていた。

その周囲には、彼に吸収された管理局員。

そして、悪魔の鍵（サタンズキー）が――――リリィ＝グライハイトが、

安らかな表情で倒れていた。

「や……った……？」

しばらくして、誰ともつかない声が、静かにそこに降り立った。

そして、その呟きが起爆剤になったのか、
やり遂げたのだという結果を、彼ら彼女らは急速に理解する。

「やったあああああぁぁぁぁーーー！」

「やった！　やったよティア！！」

「ちょ、解ったから落ち着きなさい！　飛びついてくるなっ！！」

「フェイトさん！」

「やりました！」

「うん！　偉いよ、２人共！」

「……やったな。」

「……ああ。」

絶望に染め上げられていたそれは、いつしか勝利へと変化を遂げ、
その喜びに歓声を上げる六課のメンバー達。

これでやっと終わった。

その晴々しい舞台を、エンジェルスシステムを切り、
残り少ない感情で弱々しく微笑みながら、リオスは見詰めた。
隣にいる彼女も、満面の笑みを見せている。
この笑顔を――――大切な人達を守ることが出来た。
その感慨深い気持ちに耽っていたのも束の間――――

［おい、皆！］

――――突然、クロノが通信を寄越してきた。

「あ、クロノ。」

「やったよ、私達やったんだよ！　ルシアスさんを倒し……。」

［大変だ！］

なのはの喜ぶ言葉を、切羽詰まった大声で遮り、クロノは叫ぶ。

「おい、まさか……。」

嫌な予感が、ヴィレイサーの口から零れ出た問いかけと共に、一斉に広がって行く
あってほしくない、最悪の状況を、誰も彼もが想像してしまう。
だが、彼らの想いを嘲笑うかのように、真実は突き付けられた。

［門が……神門（ヘブンズゲート）の開門が、止まらない！
このままでは……完全に開放されてしまう！！］

「神門（ヘブンズゲート）が……。」

「閉じない……！？」

全員が、耳を疑った。

信じられない――――否、信じたくないから。

［あぁ。
今も僕の目の前で、門は少しずつだが開き始めている。
全て開け放たれるのも……時間の問題だろう……。』

「そんな……なんとかならないの！？」

フェイトが叫ぶが、その方法は誰にも分からなかった。

皆の縋るような視線が、モニター画面にいるクロノを射抜く。

救いの術は――――希望はあるのか？

それだけを、ただ静かに込めていた。

やがてクロノは、重たく口を開いた。

［あるには……ある……。］

「！　どんな……！？」

言いかけ、なのはは言葉に詰まった。

クロノの視線の先にいる人物に――――彼の言わんとしている事に、

その場にいる全員が、気付いてしまった。

「まさ……か……。」

「僕……だよね。　クロノさん？」

へたり込むなのはの傍で、声を震わせながら、リオスは頭を垂れた。

言われなくとも、皆解っていた事だ。

これしか――――リオスに頼むしか、

もう、門の開放を止める術は残されていない事くらい、解っていた。

だがそれでも、認めたくなかった。

認める訳にはいかなかった。

今エンジェルスシステムを使えば、彼は……。

「じゃあ、ちゃちゃっと終わらせてこようかな。

なのは、君達は先にアースラへ戻って……。」

「何言ってんのよ、アンタは！」

おちゃらけた様子で言うリオスの言葉を、１つの怒声がかき消した。

声がした方に目を向けると、彼女はその双眸に涙を浮かべていた。

「ティアナ……。　でも、他に方法が……。」

「だからって、私達にアンタのこと諦めろって言うわけ!?　冗談じゃないわよ!!」

ティアナの言葉が理解できないという様子で、リオスが首を傾げる。

いや、ティアナだけじゃない。

周りにいる皆が、自分を悲しい瞳で見ていた。

彼らの気持ちを代弁するように、なのはが弱々しく言う。

「無いんでしょ？　心が……無くなっていくんでしょう？」

それ言葉に、リオスは驚き、瞠目する。

「どう……して……？」

「お願い！」

何故それを知っているのか、呆然と問おうとするリオスの胸に、縋り付くようになのはは顔を埋めて懇願する。

「お願い！　行かないで!!
こんなに……どうしてこんなに、リオスくんだけが苦しまないといけないの!?

ねぇ、教えてよ……！　リオス君！！」

胸の中で泣くなのはの肩をそっと抱き寄せようとして、リオスはそれを止めた。

彼女の涙が、リオスの胸を――――心を濡らしていく。

締めつけられる苦しさを感じられる事に、リオスは内心、独りで笑った。

未だに泣き続ける彼女の頭を見て、リオスは改めて決意する。

これ以上、彼女へ愛を押し付けてはいけない。

これ以上は、ただ悪戯に彼女を壊してしまうから。

これから自分がしようとしていることは、

彼女が向けてくれている“愛”を全て、“絶望”へ変えてしまう行為だから。

なら、ここで自分がすべきことは――――

「……いい加減にしてよ」

――――拒絶以外にはありえない。

ハッとして、リオスはなのはを見る。

涙でくしゃくしゃになった顔で、こちらを見詰めるなのは。

想い人である彼女の顔に罪悪感が湧くが、
いつまでもそれにかかずらっている訳にもいかない。
ただここで立ち尽くして入れば、無意味に時間を消費していくだけだ。
躊躇すれば、もっと巨大な後悔と絶望が、降りかかることになるのだから。
だから――――
「いい加減にしてよ！」
――――リオスには、拒絶する以外に道がなかった。
「僕は……僕は鍵だ！」
誰が止めようとしても――――
「君達がどれだけ人間と認めてくれようとも！」
大好きな人が……なのはが、どれだけ苦しげな表情を浮かべようとも――――
「僕が……僕しか、あれを止められない事に変わりはないんだよ！」
どれだけ恨みのこもった視線を向けられようとも――――
もう、誰にも縋ってはならない――――

彼女へ愛を注いではならない――――

絶望へ変わる愛など、ない方がいい――――

そう信じて、リオスは叫んだ。

だが――――

「だから、頼むよ……。　頼むから、僕を行かせてくれよぉ……。」

――――悲しみに耐える事が出来ず、リオスの頬を涙が流れる。

既にほとんどの感情は消え去ったはずなのに、

悲しみと、それを受け止める痛みは消えてくれない。

それがまだ、彼に残された感情によるものなのか、

それとも、大きすぎる悲しみのせいなのか。

リオス自身にすら、その答は出なかった。

彼の言葉を最後に、辺りを沈黙が支配する。

ただ、誰のものともしれない嗚咽だけが、空に上っては消えていった。

「……すまないが時間がない。

リオス、君を門の前へ長距離転送する。

それで、全てを終わらせてくれ……。」

「クロノ！？」

あまりにも無慈悲で、冷酷な言葉。

フェイトは義兄の言葉が信じられず、モニターの方を向き、そして、ハッとした。

そこにあったのは、厳しい提督としてのクロノ＝ハラウオンではなく、

人間として、無力を噛締める男の姿があったから。

［解ってくれ！　このまま手を拱いていたら、皆死んでしまう！
僕も……お前も、皆！］

涙ながらの叫びに、フェイトの怒りも一瞬で消え去ってしまう。

むしろ、彼とて辛いのだという事を理解しようともしなかった、自分を恥じた。

「ごめん……。」

［……いいんだ。　僕も言い方が無責任すぎた。］

そこで言葉を切り、クロノはリオスを見直す。

［リオス。］

「はい……？」

［管理局提督としてではない。
僕、クロノ＝ハラウオンとして頼みたい。　皆を……救ってくれ。」

クロノの言葉が終わるが早いか、リオスの目の前に魔法陣が現れる。

「……任せて下さい。」

［すまない……本当に、すまない……！」

幾度も陳謝するクロノへ弱々しく微笑みを返しながら、
リオスは魔法陣へ、一歩、また一歩と踏み出していく。

「いや……いやっ、行かないで！」

「来るなっ！！！」

駆け寄ろうとするなのはへ、リオスは叫び、魔力弾を射出する。
空色の魔力弾はなのはの足元の地面を薙ぎ、彼女の動きを遮る。

「……もう、充分だよ……。」

「リ…オス……くん……。」

泣きじゃくるなのはは、その場にへなへなと座り込む。
その目の前で、リオスの乗る魔法陣が、静かに発光を始めた。

「……さよなら」

少し困ったような、涙に濡れた笑顔を残して、
天使と呼ばれし青年は、魔法陣の中へ消えて行った。

誰も、何も言えなかった。

世界が救われる。

そんな喜びを噛み締められる者など、誰もいないのだ。

それほどまでに、リオスという少年は皆から愛されていた。

ヴィレイサーは、見上げていた蒼天から目を逸らす。

そして、ルシアスの隣にいる少女――リリィの傍へと行く。

「ん……。」

その時、彼女はゆっくりと目を開いた。

完全に目を覚まし、周囲を見回す。

自分の隣に、ルシアスが倒れていると言うのに、
何故か周辺にいる者達の表情は暗かった。

その中に、見知った顔が無い事に気が付き、リリィは状況を呑み込んだ。

「よう。」

短く声をかけられ、リリィはそちらに目を向ける。

「ヴィレイサーさん……。」

「気分はどうだ？」

「あまり優れないです……。
特に、胸のざわつきが酷くて……。」

「リオスがいないからか……。」

「リオスさんは……リオスさんは、どこに！？」

「神門（ヘブンズゲート）を閉じに行ったよ。
たった1人でな。」

それに加え、彼の感情が無くなりかけている事も話した。

「そんな……。
もし閉じる事が出来ても、リオスさんは廃人同然になってしまいます！
それに、下手をしたら、門が閉じる前に感情が尽きてしまう事も……。」

「それを承知で、アイツは行ったんだよ。」

「ですが！」

リリィは、リオスの決意を頑なに認めようとはしなかった。

「なら、お前が止めに行け。」

「それは……。」

ヴィレイサーの冷淡な言葉に、彼女は押し黙った。

「私だって、リオスさんを止めたいです……。
でも、それだけの魔力はあっても、それを昇華させる力量は無いんです……。」

リリィは項垂れた。

彼を止めようとしても、恐らくはそれを拒み続けるだろう。

それは、果てしない程に愚かな時間の消費だと言えた。

「お願いです！
誰か……誰か、リオスさんを助けてください！」

リリィの悲痛な叫びに、誰もがそうしたいと思った。

だが、一歩間違えれば世界は危機に晒されるのだ。

簡単にリオスの所に行くとは言えなかった。

「私達もそうしたいよ！
だけど、どうやって行くの！？」

「私の……悪魔（サタンズ）の鍵（キー）の力を使うんです。」

その言葉に、誰もが息を呑んだ。

「私は消えても構いません！
だから……！」

「ふざけた事を……。」

その時、リリィの言葉をヴィレイサーが遮った。

「お前が消えたら、それこそリオスは悲しむだろ！」

「でも、それ以外に方法は無いんですよ！？」

ヴィレイサー以上の声で返すリリィの瞳には、涙が滲んでいた。

「私には、リオスさんを止められるだけの決意がありません……。
だから、誰か……！」

リリィは、もう1度全員を見回す。

だが、やはり誰もそれを受け入れようとはしなかった。

「……分かった。」

やがて誰かが口を開いた。

「俺が行く。」

全員の目が、彼に――――――ヴィレイサーに集まる。

「だが、リリィの魔力をどうやって俺に移す？」

「以前、リオスさんがゼストさんにしたのと同じ方法です。
私の身体の構成因子を流し込むんです。
ただ、これをやると、先程も言ったように……。」

そこで、リリィは言葉を切る。

言ってしまうと、その恐怖に負けてしまうかもしれないと畏怖しているからだ。

「でも、ヴィレイサーに拒絶反応が出たら……。」

遺伝子に問題が起きるのではないかと危惧したフェイトだったが、ヴィレイサーが首を振ってそれを否定する。

「いや、流し込む箇所を変えればいい。」

「どういう事？」

「リリィ。
ヴィシアスを介して、“俺の分子を繋ぎとめる”ように、お前の構成因子を流し込む事は可能か？」

「えぇ、恐らく……。」

「そうか。
なら、そうしてくれ。
そうすれば、軌道上でも耐えられる体になるはずだしな。」

「じゃあ……！」

「あぁ、引き受ける。
ただし、１つだけ条件がある。」

そう言うと、ヴィレイサーははやてを見た。

「リリィ＝グライハイトは、俺に殺された事にしてくれ。」

「なっ！？」

「ヴィレくん！？」

いきなりの提案に、はやて達は面食らった。

「ヴィレイサーさん……。」

「君が自ら命を絶ったと知れば、アイツはずっと、罪の意識に苛まれる。
これは、少しでもアイツの気を救う為だ。」

「分かった……。」

はやては、沈痛な面持ちでそれを承諾した。

「リリィ。」

「はい。」

「俺に……君を殺させてくれ。」

頷き、リリィは差し出されたヴィレイサーの手を取る。
そして、目を瞑って意識を集中させる。
ゆっくりと2人の身体が輝いていく。
その光が、救いをもたらすものだとは、誰も思いたくなかった。
「終わりました。」
言うが早いか、リリィの身体が崩壊を始めていた。
「ありがとう。
それと……すまない。」
ヴィレイサーの謝罪に、リリィはただ笑う。
「それは、何に対しての謝罪ですか？
私を殺した事？　それとも、私を好いた事ですか？」
「全てだ。」
消えていくリリィを真っ直ぐに見詰める。
「今までの事、全てだよ……。」
「いいんですよ。
代わりに、リオスさんを絶対に助け出してくださいね？」

「あぁ、約束だ。」

「はい。　約束です。」

それを最期に、彼女は虚空へと消えた。

僅かな粒子が、リオスがいる所への道標のように天高く昇っていく。

「さて……。」

1つ大きく息を吐き、彼は立ち上がった。

「あのバカと話してくる。」

仲間を一瞥せずに、彼はいつものように冷淡に言った。

「……終焉は近いな。」

彼の呟きは、誰に聞かれる事も無く風に運ばれた。

◆◇◆◇◆

「これが、神門（ヘブンズゲート）……。」

リオスは、眼前に聳え立つ扉を睨む。

「後は、これを閉じるだけだ……。」

グロリアスを握る手に、自然と力が籠る。

だが、グロリアスを握る手とは反対の手は、震えていた。

（こんな時に、逃げ出したくなるなんて……。
なんだか情けないなぁ。）

自分を嗤いながらも、リオスは逃げる事を選ばなかった。

「グロリアス。」

愛機の名を口にして、その刀身に手を滑らせる。

「やろうか。」

リオスに応えるように、コアが淡く光る。

そして、両手でグロリアスを握った、その時――――――

「悪いが、そうはさせん。」

――――堕天使が立ち塞がった。

「ヴィレイサー！？」

何故彼がここにいるのか？

どうやってここまで来たのか？

一気に数多くの疑問が浮上した。

だが、ヴィレイサーから発せられる気に、リオスは全てを悟ったように目を見開く。

「まさか……！？」

「そうだ。
俺はリリィの……悪魔の鍵（サタンズキー）の力でここにいる。」

「そ、そんな……！？
何で君が、リリィの力を……。」

「俺が殺したからだ。」

「……ッ！？」

ヴィレイサーはリオスの言葉を遮り、淡々と述べる。

「アイツが、お前を止めてくれと……。
だから俺が、アイツの願いを叶えるべく、アイツを殺したんだよ。」

「そんな……。」

自分の選択が、彼女を殺すはめになるとは……。

リオスは頭を振り、グロリアスの剣尖を突き付ける。

「ヴィレイサー＝セウリオン！」

リオスの叫びに、ヴィレイサーは眉一つ動かさない。

「僕は、君を断罪する！」

その宣告に呼応するように、リオスの翼はより一層光輝いた。

それに対し、ヴィレイサーはただ笑みを浮かべるだけだった。

「面白い。
一介の天使かぶれが、堕天した俺を断罪するか。
ならばその決意、見せてもらおうか！」

［ＤＡＷＮ・ＬＵＣＩＦＥＲ.］

言うが早いか、ヴィレイサーの背に、堕天した証が――――翼が生える。

「リオス……。　俺がお前を止める。」

キッと睨み、ヴィレイサーは身を踊らせた。

「君は……君はリリィを殺した！」

放たれた砲撃をかわし、リオスは叫ぶ。

彼の悲痛な叫びに、ヴィレイサーは僅かな間、悲し気に目を伏せた。

だが、やがて顔を上げる。

「そうだ……俺はアイツを殺した。
お前を助けて欲しいと言ったから！」

振るわれたグロリアスを体を躱してやり過ごす。

「だから……だから今度は守らせてくれよ！
お前を！　リリィの願いを！」

互いに離れ、対峙する。

訴えてくるヴィレイサーは、涙を流していた。

だが、それでもリオスは己が決意を変える気にはならなかった。

「君には、明日が……未来がある。
だと言うのに、君は自らそれを手放すって言うのか！？」

「それをお前が言えるのか！？
お前こそ、己が命を糧としているだろうに！」

「それは……。」

「確かにお前の行動は、幾万の人を救うだろうな。
だが、お前を……お前の帰りを待つ仲間は！　皆、傷つくんだぞ！？
それを知りながらお前は、尚その命を散らすと言うのか！？」

「それは、君だって同じだ！」

「いや、違うな！」

「え……？」

「俺は、未来を諦めた。
それと引き換えに、今を……この瞬間を生きる！」

太刀を亜空間にしまい、バスターライフルを出現させる。

その隙に、リオスはグラスパーフォームを発動させる。

４人の実体があるリオスの分身が、ヴィレイサーに立ち向かった。

「氷牙一閃！」

本物のリオスが、牽制を込めた氷の剣で斬りかかる。

だが、それがヴィレイサーを捉えるよりも早く、彼は上空へと羽ばたいた。

そして、舞いながら照準を定めたのか、すぐさま引き金を引く。

しかしそれはリオスには当たらず、虚空を薙いだだけに終わった。
その瞬間、先に控えていた分身のリオスが、前後左右から迫って来た。
「甘い！」
それに怯む事無く、ヴィレイサーは腕を交差させて、左右のリオスに銃口を向ける。
そして躊躇い無く引き金を引き、銃口から火が噴く。
黒い光芒は、左右のリオスに吸い込まれ、その分身の身体を掻き消す。
それを確認する事も無く、今度は身体を９０度回転させながら、交差させていた腕を開く。
今度は、先程まで前後に居たリオスの分身を左右に捉えた。
「消えろ……。」
いつも以上に冷酷な言葉。
それと同時に引かれた引き金。
そして、放たれた砲撃は分身のリオスを容易く消し去った。
「ッ……！」

驚きに目を見開き、リオスは慄然する。

呆けているリオスに、ヴィレイサーはその隙を見逃さずに迫る。

黒光りする銃口が向けられ、リオスはハッとした。

「喰らえ！」

「クッ……。」

［Ｇｕａｒｄｉａｎ　Ｆｏｒｍ．］

咄嗟に絶対防御を誇るガーディアンフォームを発動させる。

「フリーズフィールド！」

全方位絶対防護シールド、『フリーズフィールド』を働かせ、ヴィレイサーから放たれた砲撃を立ち所に凍らせ、砕く。

砕け散った氷の破片が、舞い散る花弁のように軌道上に降り注ぐ。

なんとか防ぐ事に成功したリオスは、安堵の息を漏らした。

「愚かだな！」

だが、背後から聞こえてきた声に、リオスは全身の反応速度を極限に使う。

急いで振り返った背後には、投擲されたジャベリンが、

自分の頭部目掛けて迫ってくるのが目に映った。

「アサルトビット！」

全身に配されたアサルトビットで、飛んできたジャベリンを防ぐ。

「俺が攻撃の手を緩めると思ったか！？」

しかし、ビットで防いだ事によって、一時的に視界を封じられたリオスは、
ヴィレイサーが大剣を突き立てて肉薄している事に気が付かなかった。

「しまった！？」

ビットを視界から退けた時、初めてそれに気が付いたリオスは、
身体を急回転させて、迫る刃をかわそうと、必死になる。

「もしもそう思ったのなら、お前はつくづくおめでたい奴だ！」

真横を大剣の突端が横切り、なんとかよけ切れたと思う。

だが、共に肉薄していたヴィレイサーの蹴りが、リオスの腹に入った。

「ガハッ！？」

腹を押さえ、ビットで迫られないように牽制する。

「やはりエンジェルスシステムは使えないか。」

エンジェルスシステムを駆使すれば、デバイスの制御を奪い、優位に立てる。

だが、それを使う事はないだろうと、ヴィレイサーは予め踏んでいた。

この戦闘で使えば、神門（ヘブンズゲート）を閉じる為のエネルギーまで、あっさりと棒に振る可能性がある。

だとすれば、その他のフォームで応戦するはずだ。

その考えは、当たっていた。

リオスは、未だにエンジェルスシステムを使ってこなかった。

「どうして……どうして君は！」

ストライクフォームを使い、ヴィレイサーの背後に光速で移動する。

しかし、リオスの姿が消えた刹那、ヴィレイサーは太刀で虚空を薙いでいた。

「次元斬！」

ヴィレイサーを昏倒させようと、リオスが剣を振り下ろすよりも早く、

彼は先に薙いで開いていた空間へと逃げ込む。

「どこに！？」

周囲を探るリオスは、ストライクフォームを解除する。
見切りの目を持つグラスパーフォームを使えるようにする為だ。
周囲を探るも、魔力流に変化は見られなかった。
（いや……。）
本の僅かだが、変化が見受けられる。
（周囲に大きな変化が無いのに、僅かに魔力流が変化しているって事は……。
上下のどちらかに、ヴィレイサーはいる！）
バッと上を向くと、背後に閃光を走らせながら、１つの影が迫って来ていた。
恐らく、コートに忍ばせてある閃光弾を放ち、目を眩ませる為だろう。
「甘いよ！」
しかしリオスにそれは効かず、グロリアスを構え、逆にその影に斬りかかる。
それと同時に、自分の下には砲撃を放つ。
「チィッ！」

真上に向かったリオスと刃は、見事にヴィレイサーの攻撃を止めた。
恐らく、下から向かってきていたのは彼が予め配していたシャドーだろう。
今頃は砲撃に貫かれて、霧散しているはずだ。

「このまま！」

リオスはゼロ距離からの砲撃で、ヴィレイサーを昏倒させようとするが――――

「甘いのはお前だ！」

「え……！？」

――――ヴィレイサーが不敵な笑みを浮かべた瞬間、何かがリオスを捕まえた。

「なっ！？」

自分を捕まえている者……それは、砲撃で破ったと思っていたシャドーだった。

「それは俺が作ったシャドー……身代わりだ！
例え砲撃で貫かれようと、悪魔の鍵（サタンズキー）の魔力で構成したそれは、
そう簡単には霧散しない。」

「そんな！」

逃げようとして、だがしかし、シャドーはグニャリと液体のように柔軟になり、
リオスの自由を容易く奪った。

「コイツは俺が使わせてもらう。」

「グロリアス！」

リオスの手からグロリアスを奪い、ヴィレイサーはリオスを真っ直ぐに見詰める。

「ちゃんと生きて帰れよ？」

「それは僕の台詞だよ！
どうして君が、こんな事を……。」

「俺はずっと、孤独だ。」

「そんな事無い！
君は……君には、たくさんの仲間がいるじゃないか！」

「それは幻想だ、リオス。」

「幻想……？」

「俺は……お前達を仲間だと思った事など、１度たりともないんだよ。」

冷酷としか言えない言葉。

だが、ヴィレイサーは笑っていた。
その言葉が真実とは思えないほどに、笑顔だった。

「それこそ嘘だ！」

大きな声で吠え、リオスは自身を捕らえる影から脱しようと、必死にもがく。

「いいや、嘘じゃない。
俺はずっと、孤独なんだよ。
でなきゃ……でなきゃ俺は、扉を閉じに行けない。」

「君は……どこまでも孤独を貫くのか……。」

「悪いか？」

「何が君を、そこまで孤独にさせる！？」

「さきにも言った通りだ。
俺には時間が無い。」

「だからって、残された時間を全て棒に振るなんて……。
君には、未来が……明日がある！
やりたい事だって、先の事だってあるだろうに！」

「やりたい事……か。」

太刀を鞘に戻し、ヴィレイサーは嗤った。

「そんなもの、“未来がある温室育ちの考える贅沢な悩み”だ。」

「ヴィレイサー……。」

「リリィを死なせた事……。
それだけが、俺の最期の後悔だ。」

身を翻し、ヴィレイサーは神門（ヘブンズゲート）へと向かった。

「死を選ぶ事に……後悔は無い。」

その言葉に、リオスは呆然とした。

「そんな人……いるはずないよ！」

遠ざかる背に、リオスは叫んだ。

だが、ヴィレイサーは何も返さなかった。

その背は、なのは達から離れた自分に、酷く似ていた。

「僕も、死のうとしていた……。
皆、こんな気持ちだったのかな……？」

胸を締め付ける苦しさに、リオスは苦々しく呟いた。

◆◇◆◇◆

「主と共に閉められなくてすまないな、グロリアス。
だが、リリィから受け継いだ悪魔（サタンズ）の鍵（キー）の力なら、
お前を破損させる事も無い。
約束する。　お前と、お前の主を守ると。」

優しく、右手に握られたグロリアスにそう言うと、
グロリアスはコアを発光させた。

受け入れてくれたと、思っていいのかもしれない。

微笑し、聳え立つ神門（ヘブンズゲート）を睨む。

「俺の身体が崩壊する前に、お前を閉じる。」

グロリアスの切っ先を向け、ヴィレイサーは言う。

目を閉じ、奥底に眠るリリィから受け継いだ力を全て解放する。

「閉じろ、神門（ヘブンズゲート）！　永遠になぁ！」

巨大な光の剣が、神門（ヘブンズゲート）へと振り下ろす。

「はあああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

神門（ヘブンズゲート）が閉じるのなら、この身が果てようと構わない。

閉じると信じて、ヴィレイサーは咆哮し続ける。

そして――――ゆっくりと神門（ヘブンズゲート）が閉まっていく。

それで気を緩める訳も無く、ヴィレイサーは叫び続ける。

「閉じろおおおおおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉ！！！」

やがて、大きな音を立てて、扉は閉じた。

剣を模っていた光は消え去り、そこに残っていたのは――――

「……。」

――――綺麗な装飾が施された剣と、それとは対称的に、血塗られた青年だった。

「ヴィレイサー！」

ヴィレイサーが力尽きた事により、リオスを束縛していた影が消えた。

急いで彼の元へと駆け寄り、瞠目する。

黒一色で統一されたバリアジャケットには、毒々しい真っ赤な花弁が花開いていた。

恐らく、扉を閉じている最中に吐血したのだろう。

彼の身体は、限界ギリギリまできているとしか思えなかった。

「しっかりしてくれ！」

ヴィレイサーの手を握ると、僅かだが反応があった。

「リオス……？」

「ヴィレイサー！
良かった、無事だったんだね！」

「お前、“そこにいるのか？”」

「え……？」

「“何も見えない”んだ……。」

「そ、そんな……。」

無事に助かったと思いたかった。

だが、それは叶わず、ヴィレイサーは血塗れになっており、更には光を奪われていた。

「グロリアスは、血に染め上げて無いはずだから安心しろ。」

「ありがとうなんて……言えないよ！」

「そこは嘘でも……言って欲しかったな。」

自嘲し、握られている手に力を込める。

「俺の手を握っているのは、お前なのか？」

「あぁ、僕だよ。」

「なら、最期の福音だ。」

言うが早いか、ヴィレイサーの身体が光に包まれる。

「な、何を!?」

「俺の細胞を繋いでいるリリィの力を、全てお前に流す。
安心しろ。　鍵同士が合わさるなんて事じゃないから……。」

「君の身体を繋ぎとめている力を、僕に流したら……！
君が消えるだけじゃないか！」

「それでいいんだ。
お前の欠落した感情を戻すには、コレ以外に方法が無いんだからな。」

「だからって君が消えていい訳じゃないだろ!?
僕は、君に生きていて欲しいんだよ！」

「俺だってそうさ……。
俺は、お前に生きていて欲しい。
生きて、幸せになって欲しいんだ。」

リオスはヴィレイサーから手を離そうとするが、ヴィレイサーがそれを許さない。

どこにそんな力が残されているのだろうか?

そんな事を考える暇さえなかった。

「君が生きていなきゃ、僕は幸せじゃないよ！」

「甘ったれてんじゃねぇよ。
そう遠くない未来……俺は死ぬ。　それが少し早くなっただけだ。」

「そんな……。
そんな風に考えられないよ！」

「今すぐそう思えなんて酷な事、俺がさせるかよ。
ゆっくりでいい……ゆっくりと、認めてくれ。」

「君を犠牲にした事を……見殺しにした事を認めろって言うのか！？」

「俺は犠牲になるんじゃない。　ただ、命を散らすだけだ。
リオス、俺を死なせてくれ。　犠牲では無く、俺自身の為に。」

「出来ないよ、そんな事……。」

「本当に、優し過ぎる奴だ……お前は……。」

やがて光が収まり、それと同時にヴィレイサーの身体が崩壊を始めた。

分子レベルのその崩壊は、粒子となって虚空を舞った。

「リオス……。
お前が無事で良かった。」

「代償が……大き過ぎる！」

「何度も言わせるな。
俺は犠牲じゃない。」

「ヴィレイサー……。」

「解れとは言わない。
だが、俺の後を追うなんて事、絶対にするな。
したら俺が追い返してやる。」

「冗談に聞こえないね……。」

リオスは、ヴィレイサーの物言いに笑った。

「冗談なんかじゃないからな。」

残された手で、リオスをその場から押し離す。

「生きろよ、リオス。
俺の……いや、皆の為に生きてくれ……。」

「約束するよ、ヴィレイサー。」

力強い声に、ヴィレイサーは安堵した。

「ありがとう、戦友(とも)よ……。」

堕天した戦友が、その刹那、逝った。

残されたのは、彼と共に戦場を駆けた愛機と、
消え去る粒子を目で追っている天使だけがいた。

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　堕罪　～幽明界を異にする～（後書き）

鮮血
「わー、無駄に長くなってしまったｏｒｚ」

ヴィレイサー
「屑が……。
もっと要点をまとめられるようになれよな……。」

鮮血
「精進……出来るかな？（汗）」

ヴィレイサー
「しろよ……。
しっかし、結局俺は死ぬんだな。」

鮮血
「まぁ、フィルくんの時と同様に身代わり編は、
それをコンセプトにしていると言っても過言ではないからね。」

ヴィレイサー
「まったく……。」

鮮血
「リリィの力を使って軌道上に上がりましたが、拒絶反応は出ません。
彼女の身体を構成する、悪魔の鍵の因子は、
ヴィレイサーの“表面にだけ”効果を発揮しているので。」

ヴィレイサー
「つまり、俺の身体が軌道上で崩壊しないように、
分子レベルになって、表面だけ繋ぎとめている……って事か。」

鮮血
「そうだね。
これなら多分、作用はしないと思うんだけど……。
まぁ、こればっかりは分からないね。」

ヴィレイサー
「今回のタイトルに使われている言葉の説明を。」

「堕罪」――――罪におちること。　罪人になる事
「幽明界を異にする」
――――死別して、幽界と顕界とに分かれる。

鮮血
「堕罪は、リリィを殺してしまった事を指しています。
で、幽明界を異にするは言わずもがな。」

ヴィレイサー
「それでは、ここで改めて神崎はやて先生に謝辞を。」

鮮血
「今回は、若輩者の自分とコラボをして頂き、誠にありがとうござ

いました！
　さて、『氷翼の天使』と『リリカルＡｎｇｅｌｓ』のあらずじを。
」

『魔法少女リリカルなのは　ＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』
闇の書事件から１０年。

管理局のエースであるなのは、フェイト、
はやての３人は、部隊？機動六課？を創設する。

一方、六課への入隊を前に研修として任務に訪れていた
スバル＝ナカジマとティアナ＝ランスターの二人は、
記憶喪失の青年を保護するが……。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳのストーリーをベースに、
オリジナルキャラクターを交えた２次創作ストーリー。

『魔法戦記リリカルＡｎｇｅｌｓ　～Ｔｈｅ　Ｒｕｌｅ　ｏｆ　Ｇｏｄｓ～』
『氷翼の天使』の物語から早くも３年が経った。

戦いの爪痕を癒す、緩やかな時間が流れる中、
闇はその根を確実に広げていた。

消えていく人々。　現れる、？神？を名乗る者達。

誰もが不可解な事態に戦慄する中、１人の男が現れる。

「俺が……神を殺す」

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～の続編。

ＶｉｖｉｄやＦｏｒｃｅとは全く違う、新たななのはの物語。

鮮血

「……と、なっております。
皆様、是非ともご覧くださいませ。」

ヴィレイサー

「それでは、次回もお楽しみに。」

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　鴛鴦　～形影、相伴う～（前書き）

鮮血
「今回のお話は、この『なのはＳｔＳ－Ｊ』を連載開始してから１年が経過する事を記念して、投稿させて頂きます。
内容としては、イツキ先生の作品、『魔法少女リリカルなのは～夜天を射る弓～』のメイヤ・クロウフィールドさんとのコラボで、彼女とヴィレイサーが結婚するにあたり、メイヤさんのご両親に挨拶をしに行く話となっております。」

ヴィレイサー
「なんか、恥ずかしい気もするが。」

鮮血
「ヴィレイサー、マジでメイヤさんに対して本気ですｗ
そんな彼と、彼を支える為にメイヤさんがどれだけ愛情を注いでるのかを感じて頂けたらなぁ……と思います。
イチャイチャもちょっぴり含んでいますので、楽しんで頂けたら幸いです。
それでは、どうぞ。」

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　鴛鴦　～形影、相伴う～

朝露とまだ昇らない朝日によってひんやりとした外気が佇む中、一切の音を奏でる事を禁じられた様なとある一室に、その男はいた。

見た目は５０歳からその後半と言ったところだが、彼の周囲からは厳かな空気が感じられ、徒者ではない事が分かった。

傍らには一振りの刀――――――日本刀だろうか？――――――が置かれており、彼がカッと目を見開き、それを手にして抜刀するまでの流れはとても早く、目の前にある巻き藁に向かって一閃する。

ヒュン――――――と風を切る音が、部屋中に響き渡った気がした。かと思うと、巻き藁はゆっくりと傾き、やがて倒れる。

その切り口は見事に揃っており、並大抵の剣客ではない事を証明していた。

「ふぅ……」

「お父さん、朝食の準備が整いましたよ」

男が大きく息を吐くと、そのタイミングを待っていたのか、若い女性がたおやかな所作で部屋に入ってきた。

「うむ」

彼は女性に対してそれだけ言って頷き、日本刀を鞘に戻す。

「今日は随分と気合が入っていますね」

「当然だ。　なにせ、一人娘であるメイヤが帰ってくるのだぞ。あ奴の父として、醜態を晒す事など赦されん」

「あらあら」

男の口から出た名――――メイヤ。それは、彼――――ルフト・クロウフィールドと、彼の隣を歩く妻――――ハーコット・クロウフィールドの最愛の娘の名前だった。

「それに今日は、メイヤ曰く【会わせたい人】がいる様だしな。もしもそれが男であるのなら、私が早急に手を下さねばなるまい」

「まだそうと決まった訳ではありませんから、朝食を美味しく頂きましょう」

「そうだな」

ルフトの発言に、ハーコットは大して取り乱す素振りも見せずに朝食を勧めるだけに留まった。メイヤの母親だけあって、お淑やかで優しい性格ではあるが、やはり彼女と同様に少々天然な一面もあるようだ。

対して、メイヤの父であるルフトは管理局にて、数年前まで一等陸佐を務めており、その頃から性格はしっかりとしており、今でも元部下だった人が指南を受けにくるほど慕われているが、一人娘のメイヤの事になると少々暴走してしまう事もある。

ルフトとハーコットの2人は今日、久方ぶりに帰宅するメイヤと会うのだった。

◆◇◆◇◆

「スーツとかじゃなくて平気か？」

「はい」

身だしなみを整えながら、ヴィレイサーは自分の服装がこれで問題無いかどうかを隣にいるメイヤに訊ねる。

「そんなに堅くならなくて平気ですよ」

「けど、挨拶に行く訳だからな……。メイヤと一緒に居たいと思う気持ちは確かだが、それをちゃんと言えるかどうか……」

メイヤと付き合い始め、そして彼女を生涯の伴侶と決めたヴィレイサーに、メイヤもまた、彼に残りの生涯を捧ぐと誓い、彼と結ばれる事を願った。今日は、その事をメイヤの両親に報告しに行く日だった。

メイヤの両親には予め会いに行く日時を伝えてあるので、後はここを発つ前に、到着する時間を改めて伝えるだけだった。

「それに、どれだけ反対されても絶対に認めさせます。私にはもう、ヴィレイサーさんしかいませんから」

「それは、俺もだよ。　俺にもメイヤしかいない」

そっと口付けを交わして、2人は手を繋いだ。

「行きましょう」

「あぁ」

◆◇◆◇◆

「メイヤって、実はお嬢様だったのか？」

「い、いえ。　決してそういう事では……」

メイヤの実家に到着し、ヴィレイサーは目の前にあるその家の広さにしばし呆然とする。

屋敷――――と言うのは語弊があるが、日本造りのそれは、周囲の家屋に比べると明らかに広かった。

「父は、数年前まで管理局に在籍していたんですが、その剣術に魅せられた方も多く、指南を乞う方も多数いますので、剣道場があるんです。
それに、お母様は弓道を教えていますから。　自然と広い庭が出来てしまうんです」

「ん？　もしかして、メイヤの弓術って……」

「はい。　お母様から教わりました。
魔力を使わない場合になりますが、その際の弓の実力は私よりも凄いんですよ」

「それは、見てみたいな」

「ただ……」

「『ただ』？」

「お母様を怒らせると、目にも止まらぬ速さで早撃ちを行いますので、それは……」

「お、怒らせない様に肝に銘じておくよ……」

メイヤも目にした事があるのか、彼女の口ぶりから察するに、どうやらそれは凄まじい光景の様だ。

「あら、メイヤ？」

「あ……お母様」

「え？　メイヤのお母さん？」

門から玄関まで続く庭を歩いていると、その途中で1人の女性と出くわす。メイヤは彼女を『母』と言ったが、それにしては若々しい。

「てっきり、メイヤのお姉さんかと思った」

「それはまた……ありがとうございます」

「あ、いえ」

「メイヤの母、ハーコット・クロウフィールドと申します」

「ヴィレイサー・セウリオンです」

ハーコットは丁寧に頭を下げ、自身の名を告げる。次いで、ヴィレイサーも名乗った。

「ヴィレイサーさん……」

「はい」

「メイヤとは、どういった関係ですか？」

「え？」

「お、お母様。　メールで伝えた方です！」

「あぁ、メイヤが伴侶と選んだ方でしたね」

「お母様は、少々抜けている事がありまして……」

「なるほど」

笑みを絶やさずに浮かべているハーコットに気付かれぬ様に耳打ちし、メイヤはヴィレイサーに母の性格を伝えた。

「では、どうぞ」

ハーコットはヴィレイサー達を促してから先頭を歩き始め、後続のヴィレイサーは彼女の後姿をじっと見る。

「ヴィレイサーさん？」

「ん、何だ？」

「お母様の事、見過ぎだと思うのですが……」

「え？」

「あら、貴方からの視線でしたか」

メイヤもハーコットも、ヴィレイサーの視線に気がついていたのか、彼に向き直る。

「いや、メイヤの母親だけあって、美人だなぁと……」

「むぅ……」

「ありがとうございます」

ヴィレイサーの言葉に、メイヤはぷくっと頬を膨らませて不満げにし、ハーコットは相変わらずの笑みを浮かべているだけだった。

「ですが、私にはルフトさんがいますから」

「あぁ、いえ。　別に他意はありません」

「本当…ですか？」

夫の名を出すハーコットに、ヴィレイサーは両手を振って他意が無い事を言うが、メイヤは不安そうな瞳で彼を見詰める。どうやら、母が若々しい事で急に怖くなったのかもしれない。

「本当だよ。　どうすれば信じてもらえるかは分からないが……。
それでも、メイヤだけを愛しているのは確かだよ」

「はう……」

メイヤの手を自分の両手で優しく包みこみ、ヴィレイサーは彼女と視線を絡めて言う。それが誤魔化しではないと理解して、メイヤは見る見るうちに頬を紅潮させていった。

「あらあら……メイヤったら顔を真っ赤にしちゃって、そんなに嬉しかったの？」

「う、嬉しくない訳、ありません」

「ふふっ。　本気なのね、２人とも」

ハーコットの問いかけに、メイヤは隠し立てせずに素直に気持ちを吐露する。それを聞いて、ハーコットは更に笑みを浮かべた。

◆◇◆◇◆

「ルフトさん、メイヤが帰ってきましたよ」

大きな畳が敷かれた部屋の前にある襖を開けずに、ハーコットは室内にいるルフトにメイヤの帰宅を告げる。一人娘の帰宅に、ルフトは心が躍るが、それを面には出さずに厳かな雰囲気を保ったままの声色で中に入る事を許可する。

「失礼します」

たおやかな所作で、メイヤは襖を開いて中に入る。ルフトは最奥で正座しており、その表情は堅かった。

「ただいま戻りました」

「よく戻ったな、メイヤ」

メイヤも、ルフトに倣って正しく正座して彼に頭を下げる。そんな彼女に、ルフトは父親らしい笑みを浮かべて出迎える。

「それで、今日は会わせたい人がいるそうだが？」

「あ、はい」

メイヤのメールに書いてあった『会わせたい人』が気になってしょうがないのか、ルフトはメイヤに促す。

「ヴィレイサーさん、入ってどうぞ」

「失礼します」

地球の出身だからなのか、ヴィレイサーは特に戸惑う事無く、正座したまま襖を少しずつ開き、部屋に足を踏み入れる前にそこで頭を下げる。そしてルフトは、その光景に目を疑った。

「男……だと……！？」

ヴィレイサーが綺麗な所作で襖を開けた事にではなく、メイヤが連れてきた人物が男だと言う事に驚いていた。

「えっと……お母様から聞いていませんか？」

「『会わせたい人がいる』としか聞かされてはいない」

「あら、ごめんなさい。　うっかりしていたわ」

にこやかな笑みを浮かべたまま、ハーコットは簡易的な謝罪をするだけに留まった。

「あの……お父様。　彼が……ヴィレイサーさんが、私が伴侶として選んだ男性です」

「伴侶……」

呆然としていたルフトは、メイヤの言葉を反芻するしか出来ず、ヴィレイサーはとりあえずメイヤの隣に並び、再び頭を下げた。

「あの……「君は！」……は、はい」

口を開こうとしたヴィレイサーの言葉を遮り、ルフトは多少睨みをきかせた鋭い目つきで射抜く。

「君は、メイヤのどこを好きなったのだね？」

「どこ……」

ルフトの問いかけに、ヴィレイサーはメイヤの顔をじっと見詰める。

「卑怯な答え方ではありますが、全部です。メイヤの人柄も、性格も、容姿も……何もかもが好き……いえ、愛しています」

「ふむ……」

ヴィレイサーの答えに、ルフトは何を思ったのか分からないが、彼は特に言及せずに今度はメイヤの方を向いた。

「メイヤ。　お前は、彼のどこを好きになったのだ？」

「え！？」

まさか自分に話が振られるとは思っていなかったのか、メイヤは思わず素っ頓狂な声を出してしまう。しかも、つい先程ヴィレイサーが口にした言葉が強く残っており、顔はかなり真っ赤だ。故に、自分の答えが遅れてしまうのも致し方ない事だった。

「え……あ、えっと……」

慌てふためくメイヤは、【ヴィレイサーと両親に聞かせなければならない】という重責の所為で熟れたトマトの様に赤面して口籠ってしまう。

「ふむ……ヴィレイサーと言ったか？」

「はい」

「私と手合わせしろ」

「はい？」

「お、お父様！？」

唐突なルフトの申し出に、ヴィレイサーは呆け、メイヤは驚きの声を上げる。

「娘は君のどこを好きになったのかを言えない様だからな。ならば、メイヤの事を任せられるかどうか……私自らが相手となって見極めさせてもらおう！」

「そ、そんな……お父様！」

「どうする？　私との手合わせを蹴るか？」

「蹴った場合、メイヤとの結婚は……」

「当然、認める訳にはいかない」

ルフトはハッキリと断言し、ヴィレイサーはメイヤの顔を窺う。彼女はまだ戸惑いの表情を浮かべていたが、キッと目を整え、ヴィレイサーに頷き返した。

「戦ってください。　戦って、勝利して……一緒に生きていきましょう」

「あぁ、もちろんだ」

メイヤに笑い返し、ヴィレイサーはルフトに続いて外へと出ていく。その後ろには、メイヤとハーコットが続いた。

「メイヤ」

「はい？」

向かい合うヴィレイサーとルフトの2人から離れた位置に立つメイヤとは違って、庭へと繋がる廊下の縁に座したハーコットはハラハラドキドキの表情を見せているメイヤに静かに、しかし凛とした声で呼びかける。

「どうしてさっき、すぐには答えられなかったの？」

「その……ヴィレイサーさんに言われた事が、ずっと頭の中で繰り返されていて……」

「ふふっ♪　やっぱり、両親がいる前でそう言われて恥ずかしかったの？」

「は、はい……」

頬に朱が差した状態で、メイヤは恥ずかしさと自分が答えられなかった失態で顔を俯かせてしまう。しかし、ハーコットは微笑みを浮かべて彼女の手を優しく取る。

「別に責めている訳ではないのよ。
貴方があの人を……ヴィレイサーさんを本気で伴侶にしたいと言う気持ちが偽りでないのなら、それでいいのよ」

「お母様……」

「ほら、始まるわよ」

ハーコットに言われて視線をヴィレイサーの方に戻すと、２人とも剣を構えている所だった。

「ヴィレイサーさん……頑張ってください！」

メイヤの応援に、ヴィレイサーは何も言わない。だが、それは決して無視している訳では無い事を、メイヤは分かっていた。

ハーコットに握られていない方の手を、胸の前でギュッと握り、メイヤはヴィレイサーの勝利を願った。

「言っておくが、私はこれでも優れた剣客だ。過去に５００人抜きをした事がある」

「５００人……ですか？」

ルフトの口から出た事実に、ヴィレイサーは冷や汗を掻いた。ヴィレイサーとて、傭兵の中ではそれなりに実績がある。しかし、流石にそんな大人数を連続で相手にした事は無い。

（勝てるのか……？）

目の前に差し出された事実に、ヴィレイサーは呑みこまれそうになる。

（いや……俺には、勝つしか道はない！）

メイヤの顔を横目でチラリと窺うと、彼女が胸の前で堅く手を握っているのを見て、彼は頭を切り替えた。

「怖気づいたかな？」

「えぇ」

「ほう、正直だ」

「ですが、俺には、勝つしか道はありません。
メイヤと一緒に居る……それだけが、俺の……ただ1つの望みですから」

「ふっ……よく言った！
ならばこの私、ルフト・クロウフィールドを倒してみせよ！」

アームドデバイスであるコテツを構え、ヴィレイサーはエターナルを太刀の形態にして下段に構える。

「そうだ。　簡単にルールを決めておこうか」

「お願いします」

「『負けた』と口にしたらそこまでだ。
つまり、諦めない限り手合わせは続ける。　構わないかね？」

「はい。　ありがとうございます」

まったくヴィレイサーの事を認めていない訳ではない様で、ヴィレイサーはルフトの配慮に感謝する。

もしも認めていないのならば、あっさりと負かして終わらせるルールを取り入れても不思議ではないからだ。だが、ルフトは『諦めない限り続けて良い』と言ってくれた。

「では、いざ……！」

ヴィレイサーから仕掛ける様に走りだし、彼は中段の位置で腰だめに構えた太刀を突き出す。しかし、ルフトはそれを少し身を捻るだけでかわし、ヴィレイサーはコテツの間合いにいつまでも留まる訳にはいかず、急いでその場から飛びのいた。

「ふむ、それなりに早いな」

ルフトは、飛び退いたヴィレイサーの速度を褒めると同時に、しかし自分はそれ以上のスピードで彼へと迫り、帯刀していたコテツを抜刀し、切りかかる。ヴィレイサーの顔面を捕らえようと右側から迫りくる刃に対し、ヴィレイサーは飛び退いてそのまま着地せずに芝生の上に倒れ込む。

「むっ！」

ヴィレイサーが踏みとどまって体勢を整えなかった事で、ルフトの刃は空を切る。そして、コテツが完全に通り過ぎるよりも早く、

自分に攻撃が当たらないと判断した瞬間にヴィレイサーは倒れた体勢のまま、ルフトの軸足ではない左足を両足で挟みこみ、右側に身体を転がし、その勢いでルフトを倒す。

「やる！」

しかし、ルフトは足を挟まれ、身体を倒されると判断するや否や、既に受身の体勢に入っており、身体が倒れきる前に手を支えにしてダメージを限りなく減らす。

「うおっ！？」

ルフトが倒れないと知ると、ヴィレイサーは急いで彼の左足を挟んでいる両足と解こうとするが、それよりも早くルフトがヴィレイサーに向かってコテツを刺突の形で剣尖を差し向ける。

（あんな体勢でやってくるとは……！）

「ほう、上手く脱したか」

エターナルの峰で剣尖を受け止め、その隙に脱したヴィレイサーは、ルフトの実力に舌を巻いた。そしてルフトもまた、ヴィレイサーが回避した事に少なからず驚いていた。

「流石はメイヤが選んだ男だ。　その実力、気にいったぞ！」

「実力で選んだ訳ではないのですが……」

ルフトの発言にメイヤはそう呟くが、早くも剣戟が再開されてその声は届かなかった。

「しかし！　だからと言ってメイヤを渡す訳にはいかん！」

「俺だって、メイヤとの願いを水泡に帰すような結末にはしたくありません」

「熱いわね～」

「はい」

ルフトとヴィレイサーのやり取りをしっかりと聞いていたメイヤは、ハーコットの言葉に頷く。

「…このお茶が」

「そっちですか！？」

いつの間に淹れたのか、ハーコットの両手には湯のみがあり、そ

こからは湯気が出ていた。

「では、1つ君の実力を確かめるとしよう」

コテツを鞘に戻し、前屈立ちの構えを取るルフトに、ヴィレイサーはゴクッと固唾を呑む。想像以上のルフトの気迫（プレッシャー）に呑みこまれまいと、必死に自分を奮い立たせる。

そして、ルフトが一歩を踏み出した――――そう思った瞬間、ヴィレイサーは本能的にその場から飛び退いた。

「遅い！」

だが、ルフトの言う通り、その選択をするには遅すぎた。

「燕…返し！」

（一閃しか見えない……！）

ルフトの口から出た言葉に焦り、目を凝らすヴィレイサーだったが、彼の眼にはコテツが一閃されるようにしか見えない。

ガンッと何かが弾かれる音がしたと気がついた時には既に、ヴィレイサーの手からエターナルが消失しており、空を舞っていた。

（やらせるか！）

だが、ヴィレイサーは次に迫る一閃に対して、鞘をルフトに向かって投げつける事で回避した。

「ほう、あの状況からよもや鞘を投げ込んでこようとは……素早いな」

鞘が投げ込まれた事で、ルフトの流麗な動作は停止した。鞘は、コテツに切り上げられ、空を舞ってルフトの前に落下し、彼はそれを手に取る。

その表情には余裕が満ちており、ルフトの強さを更に強調している。ヴィレイサーは自然と、その気迫に呑みこまれそうになる。

（いや……ここで潰れたら、それこそ俺は、2度とメイヤと一緒にいられなくなる）

自分をまっすぐに見ている少女を横目に捉えてから、ヴィレイサーは後方に突き刺さっているエターナルをチラリと見る。

「剣を取りに行っても構わんよ」

「御厚意、痛み入ります。
ですが、ルフトさんは『全力で行く』と仰いましたから。　ここで背を向けて斬られるのは御免です」

苦笑しつつ、ヴィレイサーは何かを確かめるかの様に両手を閉じたり開いたり、それを繰り返す。

（なんとか体術で一撃ぐらいは入れたいな）

「ヴィレイサーさん……」

メイヤはヴィレイサーの勝利を――――否、父に認めてもらう事だけを願い、胸の前で両手をきつく結ぶ。

そして、メイヤの隣にいるハーコットもまた、時折お茶を飲んでは、２人の戦いに視線を戻した。

「ならば、再び参る！」

ヴィレイサーが投げてきた鞘を彼の眉間に向かって投げ返す。と、同時にルフトもヴィレイサーに向かって一気に踏み込んできた。

「くっ！」

ヴィレイサーは鞘が投げられた瞬間から右側に身を屈め、高速度で飛来してきたそれをかわす。

「そちら側に身を傾けて良かったのかな？」

だが、ヴィレイサーが右側に身を屈めた機会をルフトが逃すはずもなく、彼は充分に剣の間合いに入った敵を、一閃の下に伏すつもりで思い切りコテツを抜刀した。

「分かっています！」

ヴィレイサーはそう反論して、予め懐から取り出していたスティレットで一瞬だけ、コテツを受け止め、その動きを停滞させる。

「その程度！」

ルフトは吠え、抜刀した時のスピードが完全に失せてしまう前に、足を一歩踏み出し、弱まった力を強める。

「ぐっ……」

小さなスティレットでは、ルフトが振るうコテツを受け止められず、ヴィレイサーは弾き飛ばされる。そんな彼が行き着く先は――

――――

「なるほど　中々だな」

――――手から零れたエターナルと鞘が転がっている所だった。

「だがしかし！　私が隙を逃すほど甘いと思うかね？」

コテツを鞘には戻さず、再びヴィレイサーに向かって踏み込むのは、鞘に戻している時間が惜しいからだろう。

ヴィレイサーがエターナルと鞘を手にして、そこから体勢を整えて武器を構えるまでは僅かながら時間がある。ルフトはその刹那の好機を逃そうとはしなかった。

「もらった！」

「速っ！？」

エターナル、もしくは鞘に手が届きそうな寸前で、ルフトはヴィレイサーの傍にまで近付いていた。

そして――――コテツが振り下ろされた。

「ぁ……！」

ルフトのコテツが完全にヴィレイサーを捉えた時、メイヤは小さな声を上げて目を逸らしてしまいそうになる。

だが、ヴィレイサーが負けたと決まった訳ではないし、自分が目を逸らしていると知ったら、ヴィレイサーは酷く傷つくだろう。

「ぐ、うぅ……」

ふと耳を澄ませると、聞こえてきたのは父の呻き声だった。

「ヴィレイサーさん！」

よく見ると、確かにコテツはヴィレイサーの頭を殴った様だが、同時に、彼の拳がルフトの顎を捉えていた。その光景に、メイヤは思わず安堵する。

「くっ……まさか、拳を繰り出してこようとは」

「予想外で……なによりです」

ヴィレイサーは、ルフトが追撃してくるだろうと予想していた。
そこで、エターナルか鞘のどちらかを取るよりも、彼に一撃でも与える事を優先したのだ。

「先に体勢を整え、ルフトさんの一刀を浴びながらも反撃するなんて……よっぽど、メイヤと一緒になりたいみたいね～」

楽しそうな母の声に、メイヤは頬を紅潮させる。

「だが、これが戦場だった場合には、君は命を落としたかもしれないぞ」

「えぇ。　だけど、何もしないで攻撃を食らうのは、どうにも我慢ならなくて……。
それに、戦場だったらしません。　もしも戦場だったとしても、生きてメイヤの元へ帰ります。　帰って、素直に怒られます」

こんな状況で笑んでしまったのは如何なものかと思うが、ルフトはそれを咎めず、彼も笑った。

だが、すぐに頬を引き締め、コテツの剣尖をヴィレイサーに向ける。それが剣戟の合図だと踏み、ヴィレイサーもエターナルを手に取り、ルフトと対峙する。

それは、本当に数瞬の事だった。

ルフトとヴィレイサーはほぼ同時に走りだし、刃をぶつけ合う。
2人は吠え、剣戟を繰り返す。

「老体に近付いているとは言え、容易くは負けんぞ」

ルフトの言う通り、剣戟は次第に彼の方が優勢に立ち始めていた。

「朝からの修練を絶やさなかった甲斐があったよ。
君の様な男と、こうして刃を交える事が出来るのだから」

「はぁっ！」

「……が、君はまだまだだ！」

「うぁっ！？」

上段から振り下ろした一閃を、ルフトは紙一重でかわし、懐に入り込んでコテツで胴を叩く。ヴィレイサーが呻き声を上げるが、痛みに苦しんでいる場合ではなかった。

「はあぁ！」

気付いた時には、コテツの鞘が眉間に肉薄しており、ヴィレイサーはそれが、『回避出来ない』とすぐに悟り、抵抗せずに防御する事に意識を集中させた。

「つぁっ！」

だが、勢いがあると思っていた鞘は、意外なほどスピードがなく、ヴィレイサーに軽く一撃を与えた程度だった。

（しまった……！）

その攻撃が“囮”だと確信したのは、ルフトから繰り出される連撃を受けた時だった。

「ごほっ……」

両腕両足、胴に続いて頭部への連撃を受け、最後の切り上げでヴィレイサーは軽く宙を舞い、受け身をとって芝生の上を転がる。

幸いな事に、どうやら意識を手放さずには済んだ様で、咳き込みながらも心底安堵する。

「まさか、鞘を囮に使うとは……」

「人は、顔面に迫る攻撃には敏感だからな」

ルフトの言う通り、人間は顔面に対する攻撃にはかなり敏感だ。だが、その習性を逆手に取り、ルフトは攻撃を仕掛けてきたのだ。

空手の山突きの様に、顔とお腹に同時に攻撃が来た場合、大体の人は顔面を防御するだろう。視界に入っている攻撃なのだから、尚更だ。ルフトはそれを活かして、鞘をヴィレイサーの顔面に差し向ける事で彼にその攻撃を意識させ、その隙に連撃を叩き込んできたのだ。

「しかし、よく気絶しなかったものだね」

「自分でもそう思います」

身体のあちこちが痛みを訴えてくるが、それを無視して立ち上がる。

「ふむ。　よほど本気なのだね」

「俺には彼女しか……メイヤしか、伴侶はいませんから」

毅然と振る舞うヴィレイサーだが、やはりダメージはかなりの様

で、微かではあるが、その体躯は震えていた。だが、ルフトはそれを決して噯わなかった。

「益々、君の事を気に入ったよ。
だが、だからと言ってメイヤと君の婚約を認めた訳ではない」

「認めて頂くまで、やります」

キッと目を見開き、ヴィレイサーはルフトに向かって一気に走りだす。それに対し、ルフトはその場から動かず、しかし剣の間合いに入った瞬間にコテツを抜刀する。

「…っと！」

「むっ！」

しかしヴィレイサーはそれを、ルフトに飛びかかる様にして跳躍してかわす。思い切り振るった刃は空を裂き、しかも思い切り振るった事で、腕に急制動をかけて飛びかかってきたヴィレイサーに対処する為の、コテツを引き戻して攻撃に転じる時間を奪ってしまう。

ヴィレイサーはルフトの両肩を掴み、押し倒そうとする力を籠めて、更には膝蹴りで顔面を狙おうとする。

「らぁっ！」

「うわっ！？」

だが、ルフトは押し倒された事を利用して、自ら思い切り体をのけぞらせ、逆にヴィレイサーを投げる。そして、自分はそのまま背中から一回転して立ち上がり、ヴィレイサーに追撃を仕掛ける。

「チッ！」

ヴィレイサーはそれをあらかじめ予想していたのか、投げられながらも体勢を整え、ルフトよりも先に走りだし、庭にある巨木に足を引っ掛けて駆けのぼり、足が限界だと感じた地点でそのまま身を重力に従って落下させていく。

「高い所からの一撃を狙うか！」

ルフトが巨木のすぐ傍まで駆け寄った時、ヴィレイサーは既に身を翻し、大地に居るルフトと対峙しながらエターナルを構える。それが、重力に引っ張られる事を利用した攻撃だと気がつき、彼もコテツを構える。

だが、ヴィレイサーは剣がぶつかり合うよりも早く、ロングコートをスティレットと一緒に落下させる。

「ぐっ！？」

いきなり眼前に広がったロングコートによって視界を奪われ、それを取り去った時には、ヴィレイサーが肉薄していた。

「まだっ！」

「はぁっ！」

ルフトはコテツを振るい、ヴィレイサーの接近を許さないが、彼は左腕の義手を活かして一閃を封じる。

「なっ！？」

「おおぉっ！」

義手を隠していた事は卑怯かもしれないが、それでもヴィレイサーは攻撃の手を緩めない。コテツを掴み、それを引っ張る事でルフト自体を引き寄せると同時に、足刀蹴りを腹に叩きこむ。

「ぐっ…は……」

まるで、突き刺さった鉄柱に自ら突っ込んだような攻撃に、ルフ

トは呻く。その隙に、ヴィレイサーは畳みかけた。頭を掴んで膝蹴り。そこから、踏鞴を踏んで蹌踉めくルフトに対し回し蹴りを入れ、更に掌底で顎を下から突き上げた。

「うっ……く、う……」

「は、あ……はぁ……」

更なる追撃をしようとしたヴィレイサーだったが、ルフトから受けた連撃で予想以上のダメージが蓄積され、動きを止めてしまった。

「まさか……義手とはね」

「卑怯な真似をして、すみません」

口を切ってしまったのか、ルフトはそこから零れた血を粗く拭う。

「卑怯とは思わないさ。
手の内を見せないのは、こと戦いにおいては当然のことだ」

ルフトは笑みを浮かべ、ヴィレイサーを責めたりはしなかった。

「それに……メイヤの前では無様な姿は晒せないだろ。“お互い

に”な」

「御尤も」

ルフトは背を向け、ヴィレイサーから少し離れた位置で足を止め、振り返る。

「しかし、そろそろ終いとさせてもらうよ」

「ッ！」

笑んでいるルフトの威圧が一気に吹きあがり、ヴィレイサーを襲う。

「……」

静寂が、風に舞う木の葉に合わせて音を奪っているようだった。

だが、ひしひしと感じざるを得ない、ルフトの覇気。それが一瞬だけ、ふっと弱まった。その所為で、ヴィレイサーも思わず気を緩めてしまう。

「しまっ……！？」

その好機を待ち構えていたルフトは、あっという間に剣の間合いにヴィレイサーを入れこみ、コテツを振るう。慌てて、ヴィレイサーは義手である左腕を伸ばそうとするが、ルフトはコテツを鞘に収めたまま義手を突き、左腕の到達を許さなかった。

重い義手が、コテツに突かれた事で思い切り後ろに運ばれ、ヴィレイサーもそれに引っ張られる。

追撃してくると睨んだヴィレイサーは、足をルフトに引っ掛けようとするが、逆に、それを利用するルフトが、ヴィレイサーが足を伸ばした瞬間、軸足を蹴り飛ばす。

更に体勢を悪くさせられたヴィレイサーは、必死に踏鞴を踏んでなんとか立った姿勢を維持しようとするが、それが誤りだった。

「五連……燕！」

先に放った『燕返し』とは違い、5回の連撃がヴィレイサーを完全に捉えた。

「がっ！？」

5回の太刀筋を全て喰らわされたヴィレイサーは、短い声を上げて両膝を大地に着いてしまう。このまま倒れれば、どれだけ楽になれるのだろうか……そんな事を考えてしまった彼だったが――

――

「ヴィレイサーさん！」

――――メイヤの叫びが……自分の名を呼んでくれた声が、彼の意識を辛うじて繋ぎとめた。

「驚いたよ。　本気ではないとは言え、まさか、倒れないとはね」

ヴィレイサーは両膝を着いたまま、しかしそこから身体を倒したりせずに不動を貫く。そんな彼の姿に、ルフトは驚嘆した。

「メイヤの……総、てに……なりたい……です、から……」

「メイヤの総て？」

限界なのだろう。途切れ途切れに発した声は、今すぐにでも失われてしまいそうだった。だが、ヴィレイサーはそれに構わず続ける。

「メイヤにとって、俺が……拠に、なれば…いい……。
拠、じゃなくても……少し、でも……彼女が安らげるの、なら……」

「何故、そうもメイヤの居場所に……総てになりたいと願う？」

「理由なんて……ありません。
ただ、メイヤを……愛して…いますから」

「ヴィレイサーさん……」

ヴィレイサーの言葉はメイヤの耳にも届いていたようで、彼女はギュッと結んでいた手をゆっくりと解いていく。

「君が如何に本気なのかは、よく分かった。
だが、これも戦いだ」

最後の一刀にてヴィレイサーの意識を刈り取ろうと、ルフトはコテツを振りかざす。それがまさに、ヴィレイサーに当たる瞬間――

――

「私が……幸せになれる場所だと……そう、思ったんです」

――メイヤの凛とした声が、風に乗って2人の耳に入った。

「メイヤ？」

ルフトは、コテツを振るおうとした手を止めて彼女の言葉に耳を傾ける。

「お父様……。
ヴィレイサーさんの良い所を全て説明するのには時間がかかってしまいますが、これだけはハッキリと言えます」

閉じていた目をゆっくりと開き、メイヤは静かに、しかし彼女の言葉は何故だかしっかりと耳に届いた。

「ヴィレイサーさんの隣が……私が、幸せになれる場所なのだと」

メイヤは真っ直ぐにルフトと……そして、ヴィレイサーへ視線を向けた。

「……ふっ。　その言葉が、聞きたかった」

ルフトは微かな笑みを見せ、コテツを鞘に戻した。

「認めよう」

「え？」

唐突に告げられたルフトの言葉に、メイヤは思わず間の抜けた声を出す。

「認めると言ったのだ。
メイヤ、彼と共に生きなさい」

「は、はい！」

メイヤはパッと笑顔になり、ヴィレイサーの方を向いた。

「メイ……ヤ」

その瞬間、ヴィレイサーは意識が遠のくのを感じた。

「――――――！」

メイヤの声が、かなり遠くで聞こえた気がした。

◆◇◆◇◆

「……っん」

何かの温もりを感じて、ヴィレイサーは重たい瞼を開く。その瞳が最初に捉えたのは、身体からせり出す様に出てきている、豊満な胸だった。

「あ、ヴィレイサーさん、起きたんですね」

「メイヤ……？」

「はい」

ヴィレイサーの呻き声が聞こえたのか、メイヤはひょっこり顔を出し、笑顔を見せた。

「そ、そうだ！　ルフトさんとの戦いは……ツゥ」

「きゅ、急に起き上がっては……」

いきなり身体を起こしたヴィレイサーは、走った痛みに頭を押さ

える。その手には、包帯の感触があった。

メイヤは、身体を起こした彼を支えながら隣に移動させる。

「お父様との戦いは、終わりました。
私達の事を、認めて頂きましたよ。」

「そう……か」

柔和な笑みを浮かべて説明してくれた彼女に、ヴィレイサーは笑い返しながら安堵の息を漏らした。

ルフトとの戦いが限界だったのか、ヴィレイサーの記憶は曖昧になっていた。

「これで……私達、ずっと一緒に居られるんですよね」

ヴィレイサーに負担をかけてしまうが、メイヤは彼と共に壁に身を預け、そして彼の腕に身を寄せる。シャンプーの仄かな香りが漂い、ヴィレイサーの気分を落ち着かせてくれる。

「あぁ……ずっとだ。　ずっと、一緒だ」

隣に寄り添ってくれたメイヤを抱き締め、彼女と視線を絡める。

「メイヤ」

「ヴィレイサーさん」

何かを確かめる様に相手の名を呼びあい、そして、どちらもともなく顔を近付ける。２人の唇が重なると思った、その時も時――――

「メイヤ、いいかね？」

――――ルフトの声が部屋に響き、ヴィレイサーとメイヤは文字通り飛び上がりそうに驚く。

「は、はい」

慌てて身体を離し、メイヤは返事をする。それからすぐに襖が開かれ、ルフトとハーコットが入ってきた。

「おぉ、ヴィレイサーも目を覚ましたか」

「はい」

居住まいを正し、ヴィレイサーが正座をすると、ルフトとハーコットもその場に正座する。

「では、改めて伝えよう。　メイヤを……娘を頼むぞ」

「はい」

ルフトは頭を下げて、メイヤとヴィレイサーの婚約を認めた。彼の胸中は、誰にも計り知れないだろう。妻であるハーコットにも、娘であるメイヤにも。

ヴィレイサーははっきりと返事を返し、そして自らも頭を下げる

「必ず、メイヤを幸せにします」

「あら、それだけではダメですよ」

ヴィレイサーの決意表明に、ハーコットは微笑しながら首を振る。

「メイヤだけではなく、貴方も……2人で一緒に、幸せになってくださいね」

「お母様」

ハーコットの言葉にメイヤは顔を綻ばせ、ヴィレイサーの方を見る。と、彼も丁度、メイヤの方を向いた。

顔を見合わせ、頷いてから2人は同時に口を開いた。

「「はい」」

◆◇◆◇◆

「もう少し、ゆっくりしていってもいいんじゃないか？」

「ですが、リカちゃんも待っていますし……なにより、無理を言った身ですから」

ヴィレイサーが充分に休息を取れたと判断したところで、メイヤは隊舎に戻ると言い出した。

「それはそうだが……」

メイヤの進言に、ヴィレイサーは難色を示し、もう少しゆっくりしていくべきだと言うが、彼女は頷こうとはしなかった。

「まぁ、メイヤがそれでいいのなら、俺も従うよ」

このままでは平行線を辿るだけなので、ヴィレイサーが折れた。

「ふふっ、メイヤには敵わない様ですね」

2人の様子を見ていたハーコットはそう呟き、彼女の隣に居るルフトも同様の表情をしていた。

「それでは、お母様、お父様。　行って参ります」

「あぁ」

メイヤに簡潔な返事をしただけで、ルフトは踵を返して家の中に戻ってしまった。

「やっぱり、怒っているんでしょうか……」

「違うわ、メイヤ。　ルフトさんはただ、寂しいだけよ」

ルフトの態度に、メイヤは不安そうに呟くが、ハーコットは彼の心情を悟り、笑っていた。

「だから、たまには声を聞かせてあげてね」

「はい、お母様」

安堵し、メイヤは即座に頷いた。

「あ、ヴィレイサーさん、ちょっと」

「はい？」

ハーコットに呼ばれるとは思っていなかったのか、ヴィレイサーは戸惑いながらも彼女の傍に向かう。

「何でしょうか？」

「よろしければ、無事に隊舎に帰宅できた事をこちらへ伝えてもらうよう、メイヤに促して欲しいんです」

ハーコットは、メイヤに聞こえないくらいの声でヴィレイサーにそう頼んだ。

「直接的に言って頂いても構いません。　あの子は、ヴィレイサーさんの事を寵愛している様ですから」

「分かりました」

ヴィレイサーがそれを承諾すると、ハーコットは笑みを浮かべ、懐から1枚の写真を取り出す。

「これはお礼です」

それを素早くヴィレイサーの懐にしまい、ハーコットは彼から離れた。

「あまり長話をしていると、メイヤが妬いてしまいますからね」

今度はわざとらしくメイヤに聞こえる声量で言う。

「お、お母様！」

メイヤは顔を真っ赤にしてヴィレイサーの腕を掴む。

「なんの話をしていたのですか？」

「メイヤの事をよろしくって言われたんだよ」

上目遣いに問うてきた彼女の頭を優しく撫でてから、ヴィレイサーは改めてハーコットに頭を下げた。

◆◇◆◇◆

「ただいま」

「お姉ちゃん！」

メイヤと共にはやてに報告を済ませた後、ハーコットに言われた通りルフトに連絡をした。やはりハーコットの言う通り寂しかったのか、彼はメイヤからの連絡に嬉々していた。

その後、割り当てられた隊舎に戻ると、リカがメイヤに抱きついてきた。

「リカちゃん、いい子にしていましたか？」

「うん！」

元気よく頷く彼女に、メイヤもヴィレイサーも頬を緩めた。

「お兄ちゃん、どうして怪我してるの？」

「あぁ、ちょっと仕事でな」

見上げてくるリカの首が疲れてしまわぬよう、膝を折って身を屈める。

「じゃあ……痛いの痛いの、とんでいけ～」

ヴィレイサーが痛がらない場所を撫でながら、リカはおまじないの様に唱えた。

「ありがとう、リカ」

一瞬だけ呆けたヴィレイサーだったが、すぐに笑みを浮かべ、リカを優しく撫でた。

◆◇◆◇◆

「ヴィレイサーさん」

「うん？」

「…いえ、なんでもありません」

ヴィレイサーに後ろから抱き締められているメイヤは、彼の名前を呼んで、しかしそれだけに留まった。

「これからは、ずっと一緒……なんだよな？」

「えぇ……ずっと、一緒です」

「なんだか、実感が湧かないな」

「私もです」

ヴィレイサーが苦笑い混じりに言うと、メイヤもそれに同意した。

「いつも一緒だって、何度も言ったからかな？」

「そうかもしれませんね」

付き合い始めてあまり日も経っていないはずなのに、何故か『ずっと一緒に居る』と言う事が２人の中では当たり前になっていた。だから、こうしてメイヤの両親に認めてもらえたにも拘わらず、２人は大喜びしたりはしなかった。

「これからは、俺の隣には君が居てくれるんだな」

「はい。　同時に、私の隣は貴方にしか捧げませんから。　私を、離さないでくださいね？」

「もちろんだ。　君も、俺を離さないでくれ」

「はい」

メイヤの事が更に愛おしくなり、ヴィレイサーは彼女を抱き締めている腕をほどく。すると、メイヤはそれが意図する意味が分かっ

たのか、ヴィレイサーの方を向いた。

瞳が――――視線と視線が絡み合い、互いに吐息すら感じられるほど顔を近付けていく。

そして、２人の唇が重なる――――

――――前に、リカが声をかけてきた。

「「な、なんでもないよ！」」

慌てて互いの顔を離し、２人は揃ってリカに愛想笑いを見せる。

「いいなぁ、お姉ちゃん。　リカもお兄ちゃんにギュッてしてもらいたい」

羨ましそうな視線を向けてくるリカに、ヴィレイサーは手招きする。

「ほら、これでいいか？」

「うん♪」

ヴィレイサーの身体にすっぽりと収まる様にリカは抱き締められた。

「むぅ……」

その睦まじい光景を見せられたメイヤは、不本意ではあるがヤキモチを妬いてしまう。せっかく結婚が認められたのだから、ヴィレイサーを独占したい気持ちが抑えきれなかった。

「わ、私もギュッとして欲しいです」

「お姉ちゃんも温かいね」

ヴィレイサーに抱き締めてもらおうと、メイヤはリカを間に挟んだ状態で彼に抱きつく。

流石に、リカが息苦しくならない様に考慮はしている様だ。

「リカ、苦しくはないか？」

「うん、だいじょぶ」

ヴィレイサーの胸に顔を埋めていたリカは視線を彼へと向けてから答えた。しかし、その眼はどこか眠たそうだった。

「少しお昼寝しようか」

「うん」

「はい」

ヴィレイサーがそう提案すると、リカとメイヤは頷き返してからあっという間に寝付いてしまった。次いで、ヴィレイサーも目を閉じて眠る。

そこにいるのは、幸せにお昼寝をしているヴィレイサー達――――否、“家族”だった。

◆◇◆◇◆

「…っと、寝過ぎたかな」

ヴィレイサーが次に目を覚ますと、そろそろ日が傾き始める時間だった。

ふと、自分に抱きついている2人の少女に目をやると、どうやらまだまだぐっすりと眠っている様だ。2人を起こさぬ様にゆったりとした動作で身体を動かし、手近にあった毛布をかけてやる。

安堵しきっているメイヤとリカの寝顔を見て、ヴィレイサーは自然と頬を緩めた。

忍び足でその部屋を出ていき、とりあえず風呂掃除を先にやっておく事にした。

「イツツ……」

時折、手足や顔面に痛みが走り、掃除の手をあっさりと止めさせられる。

「ルフトさんはまだまだ元気なんだろうなぁ」

余裕のあったルフトはきっと、未だに元気が有り余っているだろうと考えていると、ハーコットから『お礼』と言って渡された物がある事を思い出す。

「写真みたいだったが……」

中身を確認する機会がなかったので、今の今まで忘れていた。

「後で謝辞を伝えないとな」

どんな物にせよ、頂き物に変わりはない。謝辞を述べるのは当然だろう。

風呂掃除も終わったので、ハーコットから貰った写真を見に行った。夕食を作るにはまだ時間が早いし、する事もないのだ。

「これだな」

服から取り出して、その写真をまじまじと見詰めてしまった。

「これ……メイヤ？」

そこに写っているのは、とても小さな女の子だった。今のリカと歳が近い風に見える。一瞬、誰だが分からなかったが、メイヤの面影があるのは間違いなかった。

「可愛いな」

写真のメイヤは、撮影者の方をしっかりと向いて笑顔だった。それが可愛くないはずがなく、ヴィレイサーはついつい、それを眺めてしまう。

「ヴィレイサーさん♪」

「うわっ！？」

その時、いきなり声がかけられ、更に後ろから唐突に抱き締められたヴィレイサーは驚いてしまう。どうやら、随分と写真に集中していた様だ。

「ふふふ、ビックリしましたか？」

「あぁ、かなり」

声をかけてきたのがメイヤだと分かると、深い溜息を吐いた。

「何を見ているん、です……か……」

ヴィレイサーが見ていた物に興味がいったメイヤだったが、彼の手にある写真に写っているのが、幼い頃の自分だと気が付くと、慌ててそれを奪おうとする。

「ど、どうしてヴィレイサーさんがその写真を!?」

「ほら、ハーコットさんと話していた時があっただろ？　その時、彼女から頂いたんだ」

メイヤの手が写真に伸びたのを見て、ヴィレイサーは自分の腕をピンとまっすぐに伸ばして彼女から遠ざける。

「お、お母様ったら……」

明確に断言は出来ないが、恐らく今、メイヤは頬を赤くしている事だろう。声色からそう判断できる。

「と、ともかく、返してください！」

「何で？　こんなに可愛いのに」

「は、恥ずかしいですから」

「そんな恥ずかしがる写真じゃないと思うけど」

メイヤが右に手を伸ばせば、ヴィレイサーは写真を左に。左に手を伸ばせば、今度は右に。完全にメイヤで遊んでいるが、彼女が必死になる所がまた可愛らしかった。

「えいっ！」

ヒョイ――――。

「むぅ……やっ！」

ヒョイ――――。

「ふんっ！」

ヒョイ――――。

時折聞こえる彼女の掛け声に、ヴィレイサーは笑った。やっぱり可愛い――――ついつい、そう思ってしまう。

「むぅ～……不公平です」

写真が取れないと判断すると、メイヤは口を尖らせてヴィレイサーにある事を提案する。

「ヴィレイサーさんの子供の頃の写真を見せてくれたら、諦めます」

「えぇー……」

メイヤの提案に、ヴィレイサーは逡巡する。

この写真を彼女に渡した場合、2度と拝める機会はないと考えた方が良いだろう。だが、だからと言って自分の子供の頃の写真を見せるのも気が引ける。

（まぁでも、俺だけメイヤの小さい頃の写真を見たっていうのは不公平か）

決して、メイヤのこの写真が欲しいと言う訳ではないと自分に言い聞かせ、ヴィレイサーは「分かった」と、自分の写真を見せる事を承諾した。

「ほら、これだよ」

「これが、ヴィレイサーさん……」

渡された写真を、メイヤは食い入る様に見詰め、一言呟く。

「可愛いです」

「言うな……！」

子供の頃のヴィレイサーは、中性的な顔立ちと長い髪が特徴的で、初見の者は大体が「可愛い」と評するのだ。それはメイヤも例外ではなく、彼女の下した評価に、ヴィレイサーは肩を落とした。

「でも……今はこんなにも素敵な男性です」

ヴィレイサーが気落ちした事に気が付き、メイヤはそっと、彼の頬に手を当てる。

「世界で一番、カッコイイ殿方ですよ」

メイヤはそう言って、ヴィレイサーと唇を重ねた。

「そう言われたら、その写真、取り返せないじゃないか」

「そんなつもりはないんですが……でも、頂けるのなら、是非」

玲瓏な夕陽に照らされたメイヤの笑顔はとても美しく、可愛らしいものだった。

「分かった。　それの処遇はメイヤに任せるよ」

肩を竦め、ヴィレイサーは写真の今後を彼女に任せた。

◆◇◆◇◆

「イツツ……」

「もう少し、じっとしていてください」

夕食を終えた後、リカを寝かせてからヴィレイサーはメイヤに傷を治療してもらっていた。ルフトとの戦闘で受けた傷は未だに痛みを残していた。

「すみません、お父様が」

「メイヤが謝る事はないよ。　君を寵愛していたんだって、よく分かったし」

平謝りに謝ってきたメイヤに、ヴィレイサーは笑みを見せながら続ける。

「一人娘だったんだし、ルフトさんが気にかけるのも、無理はないと思うよ」

「そうですね。　それに、これからはヴィレイサーさんもいますしね」

「あぁ、そうだな」

治療を済ませた後、メイヤは彼の肩に頭を乗せる。

「離しませんからね、ヴィレイサーさん」

「俺も、メイヤを離さないよ、絶対に」

程なくして、2人はどちらともなく唇を重ねた。これから始まっていく伴侶としての道は、どうしようもなく不安で、怖い。

だが、ヴィレイサーと一緒なら……。

メイヤと一緒なら……。

絶対に、歩き続けられる――――そう断言出来た。

「メイヤ……君が、欲しい」

ヴィレイサーは、メイヤを抱き締めながら言う。

「…私も、ヴィレイサーさんが欲しいです」

彼の愛慾に、メイヤは惑わずに応えた。好きな人を独占したい気持ちは、互いに大きく膨れ上がっていた。

「一緒に、生きよう」

「はい。　ずっと、一緒です」

「ん……」

ふと、懐かしい夢を見ていた気がした。懐かしいと言っても、そんなに昔の事ではないのだが、とても大切な記憶だった。

「どうしたんですか？」

自分が目を覚ました事に気がついたのか、艶やかな漆黒の髪を揺らし、妻がそっと彼の顔を窺う様に近づいてきた。

「いや、少し……長い夢を見ていただけだよ」

たおやかな仕草で手を伸ばしてきた彼女の手を取り返し、彼は立ちあがった。２人の視線の先には、楽しそうに笑顔を絶やさない少女が遊んでいた。

彼女もまた、彼が目を覚ました事に気がつき、笑顔で手を振ってきた。その彼女に手を振り返し、彼は自身の妻の方に視線を向けた。

「なんですか？」

「いや……ずっと、一緒なんだなぁと改めて思ってさ。君を俺の伴侶として認めてもらえて……その時の夢を、さっきまで見ていたから」

「そうだったんですか」

自分達の婚約が認められた時の事を思い出したと話すと、彼女は柔和な笑みを浮かべた。

「これからも、俺達2人で幸せになっていこう」

「はい……ありがとうございます」

自然と彼女の手を握る、自分の手に力が籠る。しかし、彼女はそれに惑わず握り返した。

「ですが1つだけ……幸せになるのは、リカちゃんや……この子も一緒です」

その言葉と共に、彼女は夫の手を、自分のお腹に静かに置いた。
互いの指に嵌められた指輪が、美麗な光を魅せた。

ＩＦ　ＳＴＯＲＹ　鴛鴦　～形影、相伴う～（後書き）

鮮血
「甘ぁ……。」

ヴィレイサー
「うわ！？　どんだけ砂糖を吐いているんだよ！」

鮮血
「君、どんだけメイヤさんにゾッコンなのさ？」

ヴィレイサー
「悪いかよ？」

鮮血
「いや、全然ｗ」

ヴィレイサー
「じゃあ聞くなよな。」

鮮血
「いや～、今までノクターンとかで色々とやってきたけど、これほどヴィレイサーがマジだった事があっただろうか？　いや、無いな。」

ヴィレイサー
「断言するか……。」

鮮血

「自分で書いていて、『これがヴィレイサーだとぉ！？』って驚いていたしｗｗｗ
　早くダークさんやアルクくんと一緒に、いつもみたいに弄りあってなよ」

ヴィレイサー
「メイヤとの手前、彼女を放っておけるほど俺は冷たくないつもりだ」

鮮血
「うわー……。」

ヴィレイサー
「なんだよ？」

鮮血
「もう、これでメイヤさんに攻撃がいかないか心配だよ……。」

ヴィレイサー
「バカ言え。　万が一そうなったとして、俺がメイヤを護らないと思うか？」

鮮血
「ダメだコイツ、早くなんとかしないと……。」

ヴィレイサー
「にしても、最後のやり取りはまた……。
　メイヤのあの一言は本当に最高だな。」

鮮血

「あぁ……「ですが1つだけ……幸せになるのは、リカちゃんや……この子も一緒です」……って奴？
あれは、イツキ先生が考えて下さった台詞だからね。　とても感謝しております。」

ヴィレイサー
「メイヤ……俺の最愛の人として、妻として……いつまでも、俺を支えて欲しい。
俺も、君を支え続ける。　君を愛する者として……そして、夫として。」

鮮血
「君、多分今夜あたり誰かに後ろから刺されると思うよ？（汗）
とある女性の方々は、上の台詞で、自分の名前をあてはめてリピート再生して下さいなw」

ヴィレイサー
「では。」

◆タイトルの補足

「鴛鴦（えんおう）の契り」
鴛鴦とは、おしどりで、いつも雌雄が寄り添っていて離れない事から。

「形影、相伴う」
相伴うは、いつも一緒にいる意。　形とその影が離れる事はなく常に一緒にいるの意から

以上の点から、今回のタイトルを『鴛鴦　～形影、相伴う～』としました。

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１　「素直なキモチ」（前書き）

鮮血
「さて、今回のお話は、以前にも告知しました通り、神埼はやて先生の大人気作品、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ～氷翼の天使～』とのコラボです！」

フェイト
「結局、ヴィレイサー×誰なの？」

鮮血
「そ・れ・は！」

フェイト
「それは……？」

鮮血
「まだ秘密です。」

フェイト
「何で！？」

鮮血
「これを読めばわかるんだから、いいじゃないの。
今回のコラボですが、基本的には神埼はやて先生の方に合わせてあります。
なので、先に先生の作品を読んで下さると、これ幸いです。」

フェイト

「この話では、ヴィレイサーはどんな立ち位置なの？」

鮮血
「リオスくんの仲間として登場します。
ヴィレイサーが自分の出自に悩んでいた時に、手を差し伸べてくれた恩人が、リオスくんなんだよ。」

フェイト
「リオスらしいね。」

鮮血
「だね。
それでは、ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ　ＣＨＡＰＴＥＲ－０１　「素直なキモチ」　どうぞ。」

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１　「素直なキモチ」

《リーダー、リオスさんからメールです》

デスクワークを終え、する事が無いので寝ようとしていたヴィレイサーに、愛機のエターナルが告げる。

「メール？　内容は？」

《指定した場所に来てほしいという、シンプルなものです》

「詳細が無いって事は、面倒事か？　行きたくねぇなぁ……」

だが、戦友からのメールを無下にはしない。ヴィレイサーにとって、リオスは戦友であり、師であり、そして、自分を導いてくれた恩人だ。彼からの頼みほど、断れないものは無いと言っても過言では無い。

「さっさと行くか」

立ち上がり、玄関を出てバイクに跨がる。昼の強い日差しに、一筋の漆黒が走り出した。

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１　「素直なキモチ」

「よう、リオス」

「ヴィレイサー、来てくれてありがとう」

「お前は俺の恩人だ。　当たり前だろ」

「恩人って……僕は別に、何もしてないよ」

「だが、お前の言葉が無ければ俺は、今頃何をしていたかわからない」

ヴィレイサーは以前、自分の出自に己を見失った時期があった。

他人の遺伝子を喰らい、人間兵器として生きていた自分が憎み続けていた。そんな彼を救ったのはリオスだったのだ。リオスの言葉が、行動が、ヴィレイサーを1人の人間として生きる決意をさせてくれた。

それ以来、ヴィレイサーはリオスからの願いを素直に聞いている。

「それで、今回は何だ？
まさかとは思うが、またなのはとの喧嘩の仲裁とか言わないよな？」

「その節はどうも、お世話になりました」

平謝りに謝るリオスをスルーし、ヴィレイサーはソファーに腰掛ける。

「でも、ヴィレイサーのお陰で助かったよ。
それに、よりなのはとの距離が縮まったって言うか……」

「早く本題に入ってくれ」

饒舌に語りだしたリオスに強く進言し、先を促す。

「ごめん。　えっと、今日呼んだのは、更正の手伝いをしてほしいんだ」

「えー……面倒だな」

リオスの台詞が終わるや否や、バッサリと言う。

「第一、俺が更正に携わったらソイツ、もっと曲がるんじゃないか？」

「大丈夫だよ。　元々結構曲がってるから」

「それはまた、厄介だな……」

出されたコーヒーを口にするが、顔を顰める。

「甘い……」

「そうだった？」

リオスも一口飲むが、まったく気にしなかった。

「まぁ、引き受けても構わないぜ。
どうせ書類仕事以外は、ギンガの手伝いしかないし」

「良かった。　これで少しは楽になるよ」

引き受けると口にした直後、リオスは安堵の息をもらす。

「彼女、すごくSだから……」

虐められたのを思い出したのか、リオスは悲しげな表情を浮かべる。

「泣かされたのか……」

ヴィレイサーの呟きに、リオスは頷いただけだった。

◆◇◆◇◆

「レーネ、久しぶり」

施設に到着したリオスは、まっすぐにレーネの元に向かった。

「久しぶりね、男の娘」

黒い笑みを浮かべ、レーネと呼ばれた少女は迎えた。

「いい加減、その呼び方止めてよ……」

「私がどう呼ぼうと構わないでしょ。　って言うか、そっちは誰？」

「ほら、少し前に話したヴィレイサーだよ」

「あぁ、協調性が無くてリオスも苦労してるって言ってたあの人ね」

レーネの発言にリオスは焦るが、ヴィレイサーは欠伸を1つした

だけで、興味無さげにしていた。

「初めまして、ヴィレイサーだ」

「レーネよ」

「短い付き合いになる事を切に願ってるよ」

「そりゃこっちの台詞よ」

「ヴィレイサー、これから手伝ってもらうんだから、それは無理だよ」

リオスに言われ、ヴィレイサーは隠す意思がないのか、舌打ちする。

「こんな事、俺に手伝わせるなよ……」

「嫌なら引き受けなきゃよかったじゃない」

レーネがガラスを通した向こうから言ってきた。

「リオスが脅してきたんだ」

「してないからね！？」

だが、リオスのツッコミを余所に、２人の会話は続いた。

「リオスって、奥さんとイチャつき過ぎよね」

「同感だな。
以前リオスに呼ばれた時も、仕事の話に入るまでずっとイチャつかれて大変だった」

「あんなにイチャついてるのに、いざとなると奥手になっちゃうし」

「平然とイチャついているのにな」

「２人とも酷いよ……。
と言うか、僕はなのはとそんな関係じゃないからね！？」

「別に俺達は『なのは』だとは一言も言って無いぞ」

「もうそんなになのはの事を意識してるんだぁ♪」

ヴィレイサーはそう指摘し、レーネに至ってはニヤニヤしていた。

「なっ！？　ち、違うよ！」

「違うのか？」

「後ろでなのはが泣いてるわよ」
「えっ！？　なのはが！？」
レーネに言われ、リオスは背後を振り返るが、もちろんそこには誰もいなかった。
「アハハ♪　リオスってばホントになのはの事が好きなのね」
「うぅ……そ、それより、他に話す事無いの！？」
精神的に辛くなったのか、彼は話を逸らそうとする。
「俺とレーネに共通する会話って、これぐらいしか無いからな」
「いいじゃない。　リオスを弄るの、楽しいし」
「仲良くなるのはいいけど、僕のストレスも考えてね……？」
懇願するリオスに、ヴィレイサーは了承するが、レーネは不服そうに頬を膨らませた。
「まぁ、レーネがまだリオスを弄り足りないみたいだから、もう少し話させてもらうよ」

「聞きたく無いなら帰ればいいじゃん。
それに、早く帰ってなのはとベッドインを……」
「何度も言うように、まだだからね！？」
「『まだ』って事は、その内……」
「違うから！　別に、そういう事じゃないからね！？」
「とりあえず、そういう事にしといてあげるよ」
レーネとの言い合いに、リオスは憔悴してしまった。

◆◇◆◇◆

「それじゃあレーネ、僕らはもう行くね」
「今度はなのはと婚約してから来てね～」
「もう、止めてってば！」

「行くぞ、リオス」

レーネとリオスに会話に参加せず、ヴィレイサーは踵を返した。

「ヴィレイサー」

だが、レーネに呼び止められ、そちらを振り返る。

「暇な時に来てくれない？
最近、話し相手がいなくてつまんないから。」

寂しそうな表情のレーネを見、ヴィレイサーは頷いた。

「暇になったらな」

「待ってるからね」

ヴィレイサーがなるべく来るのを伝えると、レーネは笑った。初めて見る心からの笑顔に、ヴィレイサーは一瞬だけドキッとした。

（まさか、な……）

「じゃあ、また」

リオスが先に外に出て、ヴィレイサーもその後に従う。扉が完全に閉まりきるまで、ヴィレイサーは彼女から目を離せなかった。

◆◇◆◇◆

「なぁ、リオス」

「何？」

「一目惚れって、信じるか？」

「ひ、一目惚れ！？」

「何故そんなにも驚く？」

「だって……ヴィレイサーって『そんなのあり得ない』って感じだし」

「さっきまでそうだったよ」

「『さっきまで』って事は、まさか……レーネに一目惚れしたの!?」

「わ、悪いかよ……」

図星なのか、ヴィレイサーはリオスから視線を逸らす。

「別に悪くは無いけど……。そっかぁ、ヴィレイサーが恋、か」

「なんだよ?」

「いや、別に」

不穏な空気を感じ取り、リオスはそそくさとその場を退散した。

◆◇◆◇◆

「は？　俺がレーネの付き添い？」

後日、ヴィレイサーはリオスから、レーネの更生プログラムで外に出る付き添いをして欲しいと頼まれた。

「寝言は寝て言え」

「いや、本気だから」

「雨降りそうだから嫌だ」

「降水確率、０％だよ」

様々ないい訳を並べるも、それは悉く崩されていく。

「わかったよ」

嘆息し、レーネの元へと向かった。

◆◇◆◇◆

「遅い！」

「うるせぇ。
俺が聞いたのは今さっきだったんだよ。　文句はリオスに言え」

「見苦しい言い訳は止めてよね。
レディーを待たせるなんて、男の風上にも置けないわね」

「好きに言え。
とっとと終わらせたいから、先に行くぞ」

「ちょっと！
更生プログラム通りにやってくれなきゃ、私が早く出られないでしょ！？」

「だったらお前が早く案内しろよ。
俺はプログラムの内容を知らないんだからな」

「え？　リオスから渡されてないの？」

「リオスから？
あぁ、そういえば……」

机の上にメモリーチップが置かれていたのを思い出す。

「直接的には渡されていない」

「忘れたんじゃない……。
まぁいいわ。　さっさと案内しなさい」

「どこ行きゃあいいんだろうな？　適当に回るか。」

歩きだし、その後ろをレーネがついて行く。

「私に背を向けてたら、後ろからザックリと来るかもよ？」

「来るなら来い。
もっとも、今更そんな事する気は無いだろうがな」

◆◇◆◇◆

しばらく適当な箇所を回り、レーネが歩き疲れたと言いだした。

「お前、意外と柔なんだな」

「あんたが歩くの早いからよ！」

「褒め言葉として受け取っておく」

「なんでよ！？
それより、何か飲み物買ってきてよ……」

「自分で行って来い。
そうでなければ、更生の意味も無いからな」

「じゃあお金」

「持ち合わせ、あんまりねぇんだよなぁ……」

とは言うものの、レーネに硬貨を渡す。それを受け取り、彼女は近くで飲み物を買ってきた。

「言っとくけど、あんたの分は無いからね」

「別にいらん」

傍にあったベンチに、2人は腰掛ける。

「不機嫌だな」

「そう見える？」

「あぁ」

「さっきのお店で子供扱いされたのが気に食わなかったのよ」

「喧嘩を起こさずに済んだんだ。
お前は立派な大人だよ」

「中身だけじゃ、見えないでしょ」

「お前は背伸びし過ぎなんだよ。
今でも充分、いい女だ」

「あんたに言われても嬉しくない」

「知ってる」

「それはあり得ないでしょ……。
第一、なんであんたが私にいい女とか言う訳？」

「決まってんだろ。
お前の事が好きだからだよ」

「は……？」

いきなりの発言に、レーネは素っ頓狂な声をあげる。

「レーネ、俺はお前の事が好きだ。
誰よりも、好きなんだよ」

真剣な目つきに、レーネはその言葉が嘘では無いと確信する。

だが、自分にはまったくわからなかった。

何故彼が自分にそんな事を言ったのか？

どうして自分なのか？

そして、自分は果たして彼をどう思っているのだろうか？

どう答えればいいかわからず、レーネは黙したままだった。

ヴィレイサーも何も言わず、彼女の髪を手で梳く。

「無理に今答えなくていいさ。
いつか……そう、いつか答えが出たら、その時にでも聞かせてくれ」

「うん……」

外出による更生プログラムは、そうして幕を閉じた。

◆◇◆◇◆

レーネは、施設に戻ってからもボーッとしていた。それはもちろん、ヴィレイサーからの告白の言葉が、頭から離れなかったからだ。

（なんでよ……。　なんで私の事なんかを好きになったのよ？　もう、訳わかんない！）

毛布を頭から被り、身体を丸くする。

（大体、私は別にアイツの事なんか……）

そう考えたものの、一緒に外を歩いて、悪い気はしなかったのを思い出す。

（そりゃあ、少しはいいかなぁとは思ったけど……。　でもやっぱり、私とアイツは違うんだよね。　断ろう。　その方が、アイツの為でもあるし……）

決心がついたのと同時に、彼女は眠ってしまった。

◆◇◆◇◆

だが、次の日の面会にはリオスしか来なかった。

「ねぇ、リオス。　今日はアイツは？」

「ヴィレイサーの事？
彼は今日から長期任務でいないんだ」

「長期任務……」

それを聞いたレーネは、心の片隅でホッとしていた。だが、何故自分が安堵したのかわからなかった。

「それでレーネ、今日の予定なんだけど……」

「ごめん。　私、今日は体調悪いからパス」

リオスの言葉を遮り、翳った顔を見せずにそそくさと離れた。

◆◇◆◇◆

（私ってば、何でホッとしてる訳!?
アイツの告白を断れなくて、ガックリするのならわかるけど……
……）

ベッドに飛び乗り、天井を見る。今日は嫌に天井が低く感じ、周囲の壁も狭いように錯覚した。かなりの閉塞感があるように、彼女には思えた。

（長期任務、かぁ……。
って事は、私への想いも冷めてるよね、きっと。　なんかヤダなぁ、それ……）

そう考えた時、ハッとした。

（私今、『ヤダ』って思った？
どうして……？　だって私は、アイツを振ろうと思ってたのよ？　なのに、それを伝えられないと知って、心の奥底でホッとして……。
しかも、離れてる間に、忘れ去られるのがヤダって事は、私は……）

ようやく理解した。

何故自分は、こうも戸惑っていたのか？

何を望み、何を嫌ったのか？

自分は……。

（私は……。
アイツの事が――――ヴィレイサーの事が、好きなんだ……）

突っかかっていた何かが、今一瞬にして、抜け去った気がした。

（でも、アイツは今任務中よね。　そんな中、伝えられるはず無いし……。
それに、私が外に出る頃にはきっと、他の奴と……）

諦めの気持ちが強くなり、彼女を取り巻く。

（離れてからやっと気付くなんて……。
もっと傍にいて欲しかったわ、ヴィレイサー……）

一筋の涙が、彼女の頬と心を濡らした。

数年後――――。

レーネはようやく外の世界に出る事ができた。

「リオスの奴、『迎えを寄越す』とは言ってたけど……」

周囲をキョロキョロと見回すと、声が聞こえた。

「よう、レーネ。　答えは出たのかよ？」

懐かしい声――――忘れられなかった、大好きな人の大切な声だった。すぐさま声のした方を振り返ると、壁に寄りかかった男がいた。

「久しぶりね」

「あぁ」

彼はゆっくりとレーネに歩み寄る。

「随分と変わったな、レーネ」

「少しは大人びたでしょ。
それにしても、あんたは全然変わんないわね」

「ほっとけ」

互いに笑い、緊張をほぐす。

「なぁ、レーネ。　もう1度聞くが、答えは出たか？」

「出たけど、あんたはもう結婚してんじゃないの？
私が外に出るまで、ずっと待ってたんなら別だけど」

「昨日まで長期任務だったからなぁ。
女なんていねぇよ」

両手を挙げ、自分に呆れたようなポージングをする青年。

「そう。　なら、私の答えを言うわね」

「あぁ」

一時の沈黙の中、風が吹き、2人の間に花弁が舞う。

「私は、あなたの事が好きよ。　ヴィレイサー」

満面の笑みで言った彼女に、彼も――――ヴィレイサーも笑みを向ける。

「初めて名を呼んでくれたな、レーネ」

「ごめんね」

「いいさ。　俺達の始まりに相応しいからな」

優しく彼女を抱きよせ、静かに言う。

「これからは、一緒にいてくれるか？」

「愚問ね。　当たり前でしょ」

「ありがとう、レーネ」

レーネを離し、互いに見つめ合う。そして、どちらともなく2人はキスをした。

これからの未来、どんな事があろうとも絶対に離さぬという誓いを込めて――――。

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１　「素直なキモチ」（後書き）

鮮血
「さて、この小説での設定ですが、以下の通りです。」

・ヴィレイサーにとってリオスは、戦友であり恩人。

・時間軸は、『氷翼の天使』のＪＳ事件終了後。

・ヴィレイサーの体には、遺伝子の拒絶反応は起きていない。

鮮血
「と、なります。
　さて、次回の外伝でも、ヴィレイサーは別の人と恋をするけどね。
」

フェイト
「こ、今度は誰！？」

鮮血
「秘密です。
　ですが、神埼はやて先生の『氷翼の天使』の番外編　第４話、「しゃまるぱにっく」を先に読んで頂ければ、より楽しめます！」

フェイト

「って事は、ヴィレイサーの相手は、まさか……。」

鮮血

「次回もお楽しみに。」

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１　ＳＥＱＵＥＬ「君と、ずっと……」（前書き）

鮮血
「『なのはＳｔＳ－Ｊ』が５万ＰＶ、１万ユニークを達成しましたので、それを祝してＩＦを更新します。」

ヴィレイサー
「今回のお話は、過去に前作で更新した『ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１』のＳＥＱＵＥＬ（後日談編）となります。」

鮮血
「神崎はやて先生の作品、『魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ　～氷翼の天使～』より、レーネとのコラボＩＦです。
合言葉は、『お前ら早く結婚しろ』ですｗｗｗ」

ヴィレイサー
「いや、何でそうなるんだよ……。」

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１　ＳＥＱＵＥＬ　「君と、ずっと……」

ピピピ……。　ピピピ……。

「ん……」

機械的なけたたましい音に、青年は覚醒しかける。

ピピピ……。　ピピピ……。

鬱陶しい音に、半ば苛立ちながら布団から手を出し、音のする方に向けて何かを探す。

ピピピ……。　ピピピ……。

「るせぇ……」

ようやっと、音の発信源である物――――時計に手が触れる。

ピピ……。

バシンと時計を叩く音が響き、目覚まし音が止まる。

「ん……」

それに満足したのか、彼は腕を布団の中に戻す。

だが――――

「ぁ……？」

――――むにゅっと奇妙な感触が手に伝わり、彼は寝惚け眼のままそちらを見る。

「ん～……」

そこには、顔にあどけなさの残る女性が、向かい合うようにして寝ていた。いつもと違い、下ろされた綺麗な黒髪。そして、大胆としか言えないネグリジェに袖を通していた。

「な……」

更に、青年の手が触れたのは、その女性の豊満な胸だった。

「何でお前がここにいるんだよーーーーー！」

いつも叫ばれている言葉が彼の口から飛び出し、自室に轟いた。

◆◇◆◇◆

「まったく、お前は……」

「何よ？　一緒に居て嬉しくないって言う訳？」

呆れる青年――――ヴィレイサー・セウリオンの溜息に、眼前にいる女性――――レーネは唇を尖らせる。

彼女は淹れられた紅茶のカップを両手で包み、冷ますようにフーッと息を吹きかける。

「嬉しい事は嬉しいんだが……。
だからって、何で毎日俺が寝てる部屋に入ってくるんだよ？」

「そんなの決まってるじゃない」

妖艶な表情を見せて、レーネはゆっくりとヴィレイサーの頬に手を当てる。

「貴方の事が……」

そして――――

「好・き・だ・か・ら」

――――ヴィレイサーと唇を重ねる。

「お前には敵わないな」

微笑み、ヴィレイサーはレーネを抱き締める。

「当然でしょ。
私は、貴方が私を想う気持ち以上に、貴方の事を想っているんだから」

互いに微笑み、またキスをした後、身体を離した。

「でもおかしいなぁ……」

「何が？」

「昨日は、寝る前に鍵をかけたはずなんだが……。
レーネが入って来れたって事は、閉め忘れたのか？」

「そ、そうじゃない？」

鍵の事を引き合いに出した瞬間、レーネの声色が慌てているものになった。

「お前、入ってきたんだからそれくらい分かるだろ？」

「寝惚けてたのよ……」

「嘘をつけ……毎晩寝惚けて俺の部屋に来る奴がいるかよ……」

呆れるヴィレイサーに、レーネは頬を膨らませる。

「なによぉ、愛している人の部屋に行っちゃいけない訳？」

「いや、そこまでは言わないよ。
ただ、いつもこれだとさすがに驚くからな……。それに、服装も服装だし」

「そそるでしょ？」

レーネがネグリジェを着ている姿を思い出し、顔を赤くするヴィレイサーを見て、彼女はニヤニヤ笑っていた。

「どうだろうな」

「素直じゃないんだから」

立ち上がり、カップを流しに置いたヴィレイサーの後に続き、一歩遅れてリビングに歩いて行く。

「でも……」

そして、ヴィレイサーがレーネの方を振り向いた所で、彼女は飛び付いた。そんなレーネをしっかりと抱き止めて、ヴィレイサーは笑みを見せる。

「そういう所も含めて、私は貴方を愛しているわ」

「俺もだ。　誰よりも、君を愛している」

またどちらともなくキスを交わす2人を、カーテンから差す陽光が飾った。

ヴィレイサーとレーネは、最初は対立する関係にあったのだが、ヴィレイサーの仲間の懸命な説得により、彼女は自身の罪を認め、海上隔離施設でしばらく過ごしていた。

だがレーネは基本的にサディストな性格な為、彼女に手を焼く者は多く、中には泣かされた者までいるとかいないとか。そして困ったヴィレイサーの知り合いが、彼女の世話をヴィレイサーに頼み込んだのだ。

2人は海上隔離施設で出会い、その時ヴィレイサーはレーネに一目惚れし、彼の気持ちを知ったレーネは、戸惑った。

自分と彼とでは、釣り合うはずがない――――そう考えていた

レーネは、彼の想いを断ろうとしていた。しかし彼女がそれを決意したその日の内に、ヴィレイサーは長期任務に駆り出されてしまった。互いに、数年間離れる結果となったのだ。

想いを断る事が出来ない――――それを知って、レーネはなぜか心の底から安堵した。その時、彼女は気がついた。自分は如何に、彼を好いていたのかを……。

そして、レーネが監察や制限を完全に解除された日、ヴィレイサーは彼女を迎えに行った。そこで改めて気持ちを伝え、レーネもそれに応えたという訳だ。

それが数年前になる。

それから今まで、まったく問題が無かったと言えば嘘になる。何度も喧嘩したし、それでも別れずに2人は一緒にいた。

「これ……」

アルバムを見返していたレーネが、ふと声をあげる。そこには、喧嘩している自分とヴィレイサーの写真があった。互いに相手に怒鳴っているそれは、今にもその怒声が聞こえてきそうだ。

「付き合って間もない時だな」

レーネを後ろから抱き締め、ヴィレイサーは言った。

IF ENDING－01 SEQUEL 「君と、ずっと……」

レーネを迎えに行った後、ヴィレイサー達はそのまま自宅に向かった。

「あんた、どこに住んでんの？」

「ナカジマ家だよ。　スバルは知っているよな？」

「えぇ。　あの犬っ娘でしょ」

「犬っ娘って……」

レーネの言い草に、ヴィレイサーは苦笑いするしか出来なかった。

「まぁ、そのスバルの家族に厄介になってるよ。　俺も家族同然だからな」

「そう……」

だが、レーネの表情が翳った。それを見逃さず、ヴィレイサーは彼女に訊ねる。

「寂しいのか？」

「な、何で！？」

突然そんな事を言われ、レーネは驚く。

「レーネには、家族は……」

「だ、だからって別に、寂しくなんか無いわよ！
私は子供じゃないんだから！」

そう言ったレーネだったが、頬を膨らませてそっぽを向く姿はどこか愛らしい子供を彷彿とさせた。

「やせ我慢するなよ。
親からしたら、いつまで経っても子供だし」

「それでも私は、寂しくないってば！」

「どうしてそう言える？」

「へ……？」

何気なく聞いたヴィレイサーだったが、レーネは答え辛そうに俯いた。

「そ、それは……」

心なしか、レーネの耳が赤くなっている気がする。頬を紅潮させているのだろうか？

「あ、あんたが傍にいるから」

「何だって？」

レーネはゴニョゴニョと答えた為、彼女の解答は聞こえなかった。

「なんでもないわよ！」

唐突に顔を上げ、レーネはそれ以上何も言わなかった。歩き出した彼女の後を追いながら、ヴィレイサーは呟いた。

「けど……」

「何よ？」

「……けどお前が寂しかったら、俺がずっと、お前の傍にいるよ」

「ッ～～～！」

レーネは顔を真っ赤にし、ヴィレイサーに詰め寄る。

「よくもそんな事、平然と言えるわね！」

「まぁ、好きな相手だからな」

いつもと変わらぬヴィレイサーの態度に、レーネは、今後自分は何度頬を紅潮させればいいのだろうかと思った。だが、ふと気付く。逆に自分がそういった事を言えばどうなるのだろうか？

相手を虐めたくなる衝動に駆られ、レーネはヴィレイサーに人差し指を向ける。

「私は、あんたが寂しかろうがなんだろうが、ずっと傍にいるわ」

「ッ！？」

やはり恋愛事は皆無なのか、ヴィレイサーは顔を赤くする。

「あははは！　やっぱり真っ赤になった！」

「当たり前だ！」

「あんた、モテそうなのにねぇ」

「お前以外にいねぇよ」

「ふーん。　なら、私が離れたら即終わりね。
精々私に愛想尽かされないようにしなさいよね！」

黒髪のツインテールが、レーネに呼応するように元気良く揺れた。

「そういえば、レーネは1人暮らしするのか？」

「まぁ、そうなるわね」

顎に指をあてて、しばらく考えてから彼女は答えた。

「寂しいな、それは」

「だ、だから！　私は別に、寂しくなんか無いって言ってるでしょ！」

レーネの言葉が強がりだと思っているヴィレイサーは、彼女のそれに笑った。

「強がるなよ。　別に変な事じゃない。　寧ろ当たり前だ」

「む～……」

信じてくれないヴィレイサーに、レーネは頬を膨らませる。

「本当に寂しいのはアンタなんじゃないの！？」

レーネは腕を組み、ヴィレイサーに背を向ける。

「私と一緒にいられないから、寂しいんじゃないの？」

お返しとばかりに、レーネはそう言う。しかし、ヴィレイサーはすぐに何か言い返すでもなく、黙っていた。

（なんとか言いなさいよ……）

急に不安になり、レーネは彼の方を向けなかった。

（呆れてる？　それとも怒っているの？）

想い人を不快にさせていないか気になり、レーネは焦った。

「そうかもな……」

それだけ聞こえた。そう思った瞬間、レーネは抱き締められた。

「レーネの言う通り、俺が寂しいだけかもしれない」

ヴィレイサーはレーネを抱き締めたまま、耳元でそう囁く。

「俺は、君と一緒に居たい」

レーネを抱く腕に、力が籠る。

「レーネ、君の傍にいさせてくれないか？」

「…カ」

「え？」

「バカーーーーー！！！」

突如大きな声を上げて、レーネは自分を抱き締めているヴィレイサーの腕に、そっと自分の手を置いた。

「寂しいのなら、最初からそう言いなさいよ！」

「すまない。
けど、中々気付けなくてな……」

苦笑しているのだろう。長く離れていたとは言え、好きな人の表情は分かった。

「大体、私はアンタの傍を離れないわよ」

そう言ってから、レーネはハッとした。

「い、今のは別に、そういう意味で言ったんじゃないんだからね！？」

顔を真っ赤にし、レーネは言うが、ヴィレイサーは笑っていた。

「ハハハ」

「何笑ってんのよ！」

「悪い悪い。
けど、レーネにそう言ってもらえて嬉しいよ」

「だ、だから、そういう意味じゃなくて……」

「レーネ……俺は絶対、君を離さないよ」

「うぅ……」

益々顔を真っ赤にしたレーネの顔は、今や熟れた林檎のようだった。

「わ、私だって……」

しばらくして、レーネがゆっくりと口を開いた。

「……私だって、アンタを離してやんないんだからね」

「ありがとう」

ヴィレイサーは謝辞を述べ、そしてレーネの頬に軽くキスをした。

「行くか」

何事も無かったかのようにレーネを解放し、彼女の手を引いて歩きだした。

◆◇◆◇◆

「何でレーネまで付いて来るんだよ？」

古雑誌を縛りながらヴィレイサーは、自分の隣で段ボールにガムテープを貼っているレーネに聞く。

「なによ、付いて来ちゃ不都合な訳？」

「そうじゃない。　わざわざ俺の移動の手伝いなんかしなくてもいいだろ？
自宅でのんびりと待ってろよ」

「1人で何をして待っていろって言うのよ？」

積んだ段ボールの上に座り、レーネは暇潰しに足を伸ばしてヴィレイサーをつつく。

「昼寝とか？」

「興味無いわね」

ヴィレイサーの案を棄却し、ヴィレイサーが何も反応しないのがつまらなくなったのかつついていた足を引っ込めた。

「俺の荷解きとかもあるし、疲れるんじゃないか？」

「心配してくれてんの？」

心の奥底を見透かしたのか、レーネはニヤリと笑った。

「その通りだが……悪いか？」

だが、ヴィレイサーは慌てる事無く淡々と返した。レーネはそれをつまらなく思うが、それがヴィレイサーだと言う人間なのだと改めた。

「残念ながら私は、アンタが言うほど柔じゃないわ」

「柔じゃないと言うのなら、もう少し手伝って欲しいもんだ」

「レディーを気遣うのは当然でしょ？」

「俺はお前をレディーだと思った事は無いな」

その言葉に、レーネはむっとした。

「じゃあどう思っている訳？」

聞かれたヴィレイサーは動かしていた手を止めて、レーネに近寄る。

「な、何よ？」

ぶすっとした彼女の顔に、ヴィレイサーは苦笑した。かと思うと、レーネを抱き締めた。

「ふぇ！？」

「俺はずっと、レーネを好きな人として見ていた」

「わ、分かったから、早く離れなさいよ！　恥ずかしいでしょうが！」

「了解」

短く承諾の言葉を述べて、ヴィレイサーはレーネから離れた。

「ぁ……」

しかし、逆にあっさりと離れられた事で、レーネは肩を落とす。

「なんだ、不服か？」

「バ、バッカじゃないの！？　私がそんな事思う訳無いじゃない！」

「そうか？　まぁ、俺はどちらでも構わんが」

再び荷物整理に戻ったヴィレイサーを一睨みし、レーネは段ボールから下りた。そして、ヴィレイサーの傍まで近付き――――

「ヴィレイサーのバカ！」

――――彼の耳元で文句を叫んだ。

◆◇◆◇◆

「何で怒っているんだよ？」

前を歩くレーネに問うが、その答えは一向に聞く事が出来なかった。やがて彼女の自宅に着いたところで、レーネは振り返る。

「アンタが私を弄るなんて、３世紀早いわ！」

「弄るって……。
俺は別に、そういう意思は無いんだが……」

「うっさい！　少し頭を冷やして来なさい、バカ！」

バンと力強く扉を閉め、即座に鍵をかけられた。ヴィレイサーは溜息をつき、しばらく外をぶらつく事にする。

ヴィレイサーの足音が遠ざかった所で、レーネは扉に寄り掛かったまま小さく呟く。

「バカ」

彼女は口の端に、笑みを浮かべていた。

◆◇◆◇◆

適当な時間を見計らって、ヴィレイサーはインターフォンを押した。

［入って来ていいわよ］

レーネの声が、スピーカーから聞こえてきた。許可が下りた事に安堵し、そそくさと中に入る。先に届いていた段ボールを開き、中身を確認する。

「そういえば、俺の自室はあるのか？」

「不本意ながらね」

皮肉を言ってから、レーネは部屋へと案内した。

「ここよ」

そこは、白く真新しい壁に染められた部屋だった。

「普通で安心した？」

「あぁ。　一体どんな部屋に当てられるかと、ビクビクしていたよ」

「嘘つき」

部屋に荷物を置いているヴィレイサーに、レーネは笑いながら言った。

◆◇◆◇◆

「アンタ、料理上手なのね」

夕食に出された料理を口に運びながら、レーネは意外そうに言った。

「まぁ、やらなきゃ死ぬ……っていう感じだったからな」

「どういう状況よ、それ……」

「甘やかされていないって事さ……。
料理はいつも、自分でやらされたよ」

「何歳から？」

「6歳の時には、もう包丁を握っていたな」

「アンタの親、何をさせてるのよ……」

レーネは呆れるしか出来なかった。

「小さい頃からなんでもやらされたよ。
小学3年生になってからは、1人で住むように言われたし」

「見捨てられたの？」

「まさか。
単に「金持ちの子供だから」って、周囲に見られない為だよ」

「ア、　アンタって、金持ちの子供なの！？」

「あぁ。
とは言っても、その恩恵は受けて無いぞ」

「別に期待して無いわよ」

「お前ならそう言ってくれると思ったよ。
それ目当てで来られたら、堪ったもんじゃないからな」

肩を竦め、ヴィレイサーはお茶で喉を潤した。

「それにしてもアンタ、愛されてるのね」

「昔の話だ。　今はもう、勘当同然だからな」

「何で？」

「魔導師になるって言ったから。　向こうにも全然帰って無いし」

「両親が可哀想ね。
アンタが親孝行したい時には、逝っちゃっているかもよ？」

ポツリと言ったレーネの顔は、悲しげだった。

「いつか帰るつもりだよ」

「そうなの？」

「あぁ」

立ち上がり、食器を水に浸す。レーネのカップに紅茶を注ぎ、彼女の前に差し出す。

「何しに帰るの？」

「婚約者の紹介」

「ん！？」

平然と言ったヴィレイサーの言葉に驚き、レーネは危うく紅茶を溢しそうになる。

「だ、誰が婚約者よ！？」

「レーネ以外に誰がいるんだよ」

「気が早いわよ！」

「分かってるよ。　だから「いつか」だと言っただろ？」

紅茶を飲み干し、ヴィレイサーはカップを流しに置いた。

「ところでレーネ。　このＤＶＤって何だ？」

テーブルにポツンと置かれたそれを指すと、レーネはにんまりと笑った。

「リオスにプレゼントした奴よ。
1度見たら、見事に突っ返されたけどね」

「アイツが突っ返すって……。　内容は？」

「ホラーに決まってんでしょ？」

「あぁ、納得」

リオスはかなりの怖がりだ。それを面白がって、レーネはホラーのＤＶＤをプレゼントしたのだろう。

（プレゼントって言うか、嫌がらせだろ）

レーネらしい行動に、ヴィレイサーは苦笑した。

「気になるなら見てみる？」

「そうするか」

そう答えると、レーネはＤＶＤを受け取って、再生する。

「レーネは内容を知っているのか？」

「ううん。
ただ怖い映画で有名だったから、リオスの為に買ったのよ」

「為になってないがな」

「アイツの怖がりは、一生直らないでしょうね」

ＤＶＤが再生され、映画が始まる。出だしはさほど怖く無い為、レーネはぼんやり見ながら会話を続けた。

「まぁなのは曰く、『アイツの怖がりは可愛い』って事らしいけど。
あんなビクビクした様子のどこが可愛いんだか……」

「なのはにしか分からないだろうな、それは」

ヴィレイサーも映画を見ながら返す。その頃には既に、ホラーで定番のシーンに差し掛かっていた。ベッドの下から何かが出てきたり、或いは誰もいないのに声が聞こえてきたりなど、怖がりでなくとも、竦みそうなほどリアルだ。

残念ながら、電気が点けっぱなしの部屋では臨場感に欠けている

ので、ヴィレイサーは大して動じていないのか、欠伸を噛み殺していた。しかし、彼の手が突如握られる。

「ん？」

視線を巡らせると、自分の手はたおやかなレーネの手に握られていた。彼女の表情を見ると、冷や汗をかいて、しかも顔が引き攣っている。

「怖いのか？」

「バッ……ち、違うわよ！
これはその……そう！　アンタが怖がっていると思ったから……」

「そりゃどうも」

適当に謝辞を述べて、ヴィレイサーは画面に向き直る。

「ヒッ！」

その直後、レーネから短い悲鳴が上がった。

（まぁ、それなりには怖いな）

ヴィレイサーもそれには同意するが、電灯が点いている事もあって、レーネほど怖がってはいなかった。またも怖いシーンが続き、レーネの手に力が籠る。

（痛い……）

握られている方のヴィレイサーは、徐々に手を痛めていた。そして、ようやっと怖いシーンに終止符が打たれる。それに安堵し、レーネの力が弱まった。が、その瞬間、画面にゾンビが大量に出現する。

「キャアアアァァァァ！？」

「ッ！」

レーネはヴィレイサーに飛びつき、悲鳴をあげる。そんな彼女の大声に耳を痛め、ヴィレイサーは頭を押さえる。

「レ、レーネ？
怖いのなら途中で止めた方がいいんじゃないか？」

「こ、怖くなんて無いわよ～……」

そうは言っているが、レーネの瞳には涙が滲んでいた。

（充分怖がってたけどな……）

「そ、それに私は、アンタの悲鳴を掻き消す為に、先に悲鳴を上げているだけよ！」

無茶苦茶を言ってくるレーネに、ヴィレイサーは苦笑いするしか出来なかった。

「ありがとうな、レーネ」

少しでも彼女の気を和らげる為に、そっと抱き締める。

「俺はレーネにそこまで気を遣ってもらって嬉しいよ」

「べ、別に、そういうんじゃなくて……」

レーネは頬を僅かに赤くして俯く。

「もう遅いし、映画もここまでにするか？」

「で、でも、続きが気になって眠れないと思う……。だから……最後まで見るわ」

「律儀だなぁ」

レーネの髪を手で梳いて、映画を再生した。

◆◇◆◇◆

「いい！？　私は別に、怖くなんて無いんだからね！？」

「分かってるよ」

映画を観賞し終えた後、レーネは怖いのかヴィレイサーから離れようとしなかった。そして彼女は『一緒に寝てあげる』と言いだし、今は並んで各々の布団に入っていた。

「アンタが1人でいるのが怖そうだから、一緒に寝てあげるだけよ

とか言いつつ、レーネはヴィレイサーの背中に手を当てる。

「離したら……承知しないから」

「言っただろ。
絶対に君を離さないって」

「バカ……」

それっきり、会話は無かった。

◆◇◆◇◆

「俺は１０８部隊に行くけど、レーネはどうする？」

「んー、まぁ、暇だから私も行くわ」

「！」

「なら、なるべく早めに支度を済ませてくれ」

「分かったわ」

自室に消えたのを確認し、ヴィレイサーは昨日のＤＶＤを自分の部屋に隠す。

「見つかったら厄介だな」

昨日のレーネの怖がりようからして、近い日にコレは処分されるだろう。

（まぁ、レーネは見たくも無いだろうから、俺の方で処分しておかないとな）

妹達なら、楽しむだろう。特にウェンディ辺りははまりそうだ。

「ヴィレイサー？」

「あぁ、今行く」

扉越しにレーネの呼びかけが聞こえ、彼はすぐに答えた。

「行きましょう」

「あぁ」

◆◇◆◇◆

「ふーん、ここが」

１０８部隊の隊舎の入口で、レーネは周囲をキョロキョロする。

「行くぞ」

ヴィレイサーは先に歩きだし、レーネは彼の後に続いた。

「失礼します」

ドアを数回ノックし、中に入る。

「わざわざ来てもらってすまねぇな」

出迎えたのは、ゲンヤだった。

「ん、レーネも連れてきたのか」

「仕事の邪魔にはならないよ」

「でなきゃ、お前は連れてこないだろ」

2人を座らせてから、ゲンヤは仕事の概要を話した。

「頼めるか？」

「あぁ、引き受けるよ」

ゲンヤからの仕事を、二つ返事で引き受けた。

「せっかくだ。　ギンガにも会っていけ。
最近、まともに会ってねぇだろ？」

「時間、空いているの？」

「大丈夫なはずだ。
アイツもまだまだ子供だ。　甘えられる兄貴に会えなくて、不貞腐れてるぞ」

笑っているゲンヤに、ヴィレイサーは内心で同意した。

◆◇◆◇◆

「アンタ、随分と好かれてるのね」

「まぁ、母さんに拾われた兄妹って事もあるしな。
それに、俺が早期に地球に帰ったから、ギンガには甘えられる相手がいなくなったからな」

「なるほどね」

「セウリオンさん」

レーネが納得した時、向かい側の女性がヴィレイサーを呼んだ。

「セレナ」

「お久しぶりです」

「誰？」

「以前、俺が任務で助けた人だよ」

「あの時はありがとうございました」

頭を下げて、セレナは感謝の意を示す。

「無事でなによりだよ」

ヴィレイサーはセレナに向き直り、話を続けた。

「何よ……」

その光景に、レーネはむっとする。２人が楽しそうに話しているのを目の当たりにし、胸がざわついた。

（嫉妬してるのかな？）

レーネは初めての感情に戸惑いを覚える。

（さっさと話を切り上げなさいよ！）

ヴィレイサーを睨み、視線だけでその旨を伝えようとする。

「……じゃあ、俺はこれで」

その視線に気が付いたのか、ヴィレイサーはセレナに断って、歩きだした。

「レーネ？」

「何よ？」

前を歩く少女から返された声は、かなり刺々しかった。

「何でそんなに怒っているんだよ？」

「別に」

「『別に』って……明らかに怒っているだろ」

「怒って無いってば！」

振り返り、レーネは腰に手を当てる。

「なら、どうして不機嫌なんだ？」

「それは……」

真っ直ぐに見詰められ、レーネは口籠る。

「不機嫌にしたのなら謝る。
だから、せめて理由を教えてくれないか？」

「……から」

俯いていたレーネはボソボソと何か言った。

「レーネ？」

「ア、　アンタが、あの人と話している時、鼻の下を伸ばしていたからよ！」

「は？　俺はそんな事してないよ」

「どうだか」

ふんと鼻を鳴らして、レーネはそっぽを向いた。

「言っただろ、俺にはレーネしかいないって」

肩に手を置き、やんわりと言う。

「本当に？」

「あぁ、本当だ」

涙を滲ませた瞳が、ヴィレイサーを映す。それに力強く答え、レーネをそっと抱き締めた。

「ありがとう」

その後、ギンガとの再会を終えて、２人は隊舎を出た。

「レーネ。　まだ明るいし、少し街を散策しないか？」

「デートしたいなら『デートをしよう』って言いなさいよ。」

ツインテールを揺らし、レーネが振り返る。

「なんか言い辛くてな……」

「あれだけ愛を囁いておきながら、よく言うわね」

頬を掻くヴィレイサーに、レーネは大仰に溜息をついた。

「まぁ、今はそんな事どうでもいいわね」

ヴィレイサーの腕に抱きつき、満面の笑みを見せる。

「行くんなら早く行きましょう、ヴィレイサー」

数瞬俯き、だが顔を上げて、レーネは彼の頬にキスをした。

「レーネは、どこか行きたい所とかあるか？」

「そうねぇ……手近に、ゲーセンで勝負しましょう」

「ゲーセンかぁ」

「もしかして……行った事無いとか？」

「あぁ、無い」

「アンタらしいわねぇ……」

「そんな事に使える金なんて、まったく無かったからな」

「ふーん。　なんなら、私が徹底的に教え込んであげる」

「いや、別に必要無……」

「ほら、早く行くわよ！」

「お、おい、レーネ！」

ヴィレイサーの言葉に耳を貸さず、レーネは彼の腕を引いて走り出した。

◆◇◆◇◆

「ゲーセンって、もっと暗いイメージだと思っていたが」

足元を見ながら、ヴィレイサーはそんな事を言った。

「ここは清掃も行き届いているから、そんな心配いらないわよ。どれやってみる？」

「んー……まぁ、何にしても初挑戦だからな。別段どれでも構わない」

「なら、モグラ叩きでもやってみる？」

歩き出したレーネの後に続くと、そこにはお馴染のモグラ叩きなるものがあった。

「勝負よ」

専用のハンマーを抛りながら、レーネは不敵に言う。

「いいけど、あんまり期待すんなよ？」

「ま、考えとくわ。　じゃあ、やるわよ！」

レーネのその言葉を皮切りに、互いの台のモグラが動き出した。

◆◇◆◇◆

「普通よりは上ね」

自分の得点を、他の物と比べながらレーネは平然と言った。

「アンタは……って、フフッ」

「笑うな！」

ヴィレイサーの得点は、お世辞にも普通の域に達しているとは言えなかった。

「下手っぴね～」

「だから期待すんなって言っただろ……」

笑われたのが恥ずかしいのか、珍しくヴィレイサーの方がそっぽを向いた。普段とは明らかに形勢が逆転している。

「だからって、こんなに酷いなんて……クフフ」

「俺が出来るのは、家事だけだ」

「どこの主夫よ」

未だにレーネはケラケラと笑っていた。それを見て、だがヴィレイサーは怒れなかった。

（そんなに笑っている顔が可愛いと、怒るに怒れねぇだろうが……）

笑っているレーネの顔が可愛いからという、いかにも惚気ている理由だった。

「いつまでも笑ってんじゃねぇよ」

「そうは言われてもねぇ～」

楽しそうな笑みと、怪しく光る瞳が、ヴィレイサーを惹きつける。
しかしそれは、“いい意味では無い”。

「ヴィレイサーが下手だって事、後で皆に報告しておくわね」

「やっぱりか……」

そう。寧ろ“悪い意味”で、だ。

レーネは相手を弄る癖がある。その為のネタとして、今の事を使われるのだろうと思っていたのだが、どうやら見事に正解したみたいだ。

(嬉しくねぇけど)

「次も勝負するわよ」

そんなヴィレイサーの考えなど露知らず、レーネは彼を引っ張った。

◆◇◆◇◆

「クレーンゲームか……」

大分ゲームセンター内を回った事で、それなりに時間を潰せた2人は、締めとしてクレーンゲームの前に立っていた。

「レーネは得意なのか？」

「人並みにはね。
けど、こういうのは彼氏が名誉挽回の為にやる事が多いわ」

「俺に汚名返上しろって？」

「当然。
アンタ、結局他のゲームでも情けない結果だったじゃない」

「過度な期待はするなと言っただろうに……」

「そりゃあそうだけど……。
でも、少しは得意な物があってもいいんじゃないの？」

「ほっとけ。
これで愛想尽かされるなら、必死になるかもな」

「私がそんな事すると思う？」

「思わない。　だから言ったんだよ。
それで？　どれを取ってほしいんだ？」

「やってくれるの？」

「とりあえずは、な」

「ならあの猫のヌイグルミ、取ってみなさいよ」

「分かったよ」

レーネが指さした方には、猫っぽい顔をした可愛らしいヌイグルミがあった。

（アームに対して、あの位置だと取り辛いな……。
身体もさほど大きくないし）

一応、考えなしにやるほどバカではないと思う。周囲の物の位置を把握しながら、彼は硬貨を投入した。

「ここら辺かな？」

呟きながら、ヴィレイサーはアームをボタンで的確に操作した。

「あ」

レーネが、短い声を上げる。見事に、アームにヌイグルミが捕らえられていた。

「よし、入れ！」

レーネは興奮しているのか、目を輝かせていた。心なしかテンションも高い気がする。彼女ほどでは無いにしろ、ヴィレイサーも内心では気分が高まっていた。なにせ、お望みのヌイグルミがすぐそこまで来ているのだから。そして、ゆっくりとアームが開き、目的のヌイグルミを手に入れた。

「やればできるじゃない」

ヌイグルミをギューっと抱き締めながら、レーネは満面の笑みを浮かべる。

「何かご褒美をしてあげてもいいわよ？」

「いらん」

「そうなの？」

何も求めてこないヴィレイサーに、レーネは目を丸くした。

「ヴィレイサーにしては頑張ったんだから、別に何を言ってもいいのよ？」

「そうは言われてもなぁ……。
俺は、お前といられればそれだけで充分だからな」

「そう。　じゃあ、ご褒美は無しね。　後でくれって言ってもあげないわよ。
今のうちだけど、どうする？」

「じゃあ……レーネが欲しい」

「なぁ！？」

平然と言ってのけるヴィレイサーとは真逆に、レーネは瞬時に顔を赤くした。

「冗談に決まってんだろ」

レーネの頭を撫でて、ヴィレイサーは笑った。

「ヴィレイサーのバカーーーー！！」

レーネはヴィレイサーにそう叫び、ゲームセンターを先に出ていく。

「……本気にしちゃったじゃない……」

ポツリと呟いたその言葉と共に、彼女は口の端に僅かな笑みを浮かべた。

◆◇◆◇◆

「ヴィレイサーはどこか行きたい所無いの？」

ゲームセンターを出て、レーネはヴィレイサーに振り返る。

「まだ間に合うわよ？」

空は、まだ明るみを帯びていた。夕刻に差し掛かるまで、まだ猶予はありそうだった。

「俺は、どこかでのんびりと出来ればそれでいい」

彼女の隣に並びながら、ヴィレイサーは言った。

「なら、自然公園にでも行く？」

「そうだな」

どちらともなく、相手の手を取って歩きだす。

「ねぇ？」

「ん？」

「私と付き合って満足？」

「なんだよ、いきなり？」

レーネの突然の質問に、ヴィレイサーは首を傾げた。

「なんとなく気になっただけよ」

“なんとなく”と言った彼女だったが、その声色はどこか、真剣だった。ヴィレイサーの手を握る彼女の手も、先より硬くなっている。

「まぁ俺としては、まだ満足の域に達していないな」

「何で？」

レーネが問い返した時には、２人は既に自然公園へと着いていた。

「言ったらまた怒るだろ」

「『また』って……私がいつ怒ったって言うのよ？」

分かって言っているのだろう。レーネは不敵に笑う。

「言いなさいよ。
気になってしょうがないじゃない」

「分かったよ」

足を止めて、レーネの手を離す。ヴィレイサーの真剣な眼差しに、レーネは自然と彼に向き直る。

「俺は、レーネと結婚したい。
それが果たせた時、俺は満足すると思う」

ヴィレイサーの言葉を運び去るように、どこからともなく風が吹き荒ぶ。しかし、レーネはその言葉を一字一句聞いていた。

「アンタって、どうしてそんなに恥ずかしげ無く言えるのよ……」

最早慣れたのか、赤面する事すらなく呆れていた。

「そりゃあ、レーネの事が好きだからに決まってんだろ」

そう言って、ヴィレイサーは芝生に腰かける。彼に倣って、レーネは隣に座した。夕焼けの閃光を抜けて、生暖かい風が駆ける。その風に髪を委ね、なびかせる。それだけの事なのに、ヴィレイサー

はレーネのそれに見入った。その視線に気がつき、レーネはヴィレイサーの方を向く。

「何見惚れてんのよ。」

「好きな人に見惚れるならいいだろ？」

「アンタがいくら私に見惚れても、私がアンタに見惚れる事は無いわよ」

「別にいいさ。
そういう事を目的としている訳じゃないし、なにより俺は、レーネを見ていたいだけだからな」

「アンタって、本当にバカね」

「照れてる、照れてる」

レーネが頬を赤く染めたのを見て、ヴィレイサーは笑った。

「て、照れてなんかいないわよ！　バッカじゃないの！？」

「必死になって否定するレーネも可愛いぞ」

「ッ～～～！」

頬に手を当てられた上に、真っ直ぐに見詰められながら言われた事もあり、レーネは真っ赤になってしまう。

「バカ、バカ、バカーーーー！」

レーネは照れ隠しなのか、ポカポカと握り拳で軽く叩いてくる。その度に彼女のツインテールが揺れて、馨しいシャンプーの香りがふわりと漂う。やがてそれは、ピタリと止んだ。

「バカ」

そう呟いて、彼女はヴィレイサーの胸に顔を埋める。彼女をそっと抱き締めるように、ヴィレイサーは背中に手を回す。

「ヴィレイサー？」

「うん？」

「私の事、好き？」

「あぁ、大好きだよ」

「どれくらい？」

「世界中の誰よりも、君の事が好きだ」

「ホントに？」

「あぁ」

「ありがとう」

その言葉に満足したのか、レーネもヴィレイサーの背中に手を回した。

「レーネは俺の事、好きか？」

しばらくして、今度はヴィレイサーが同じ質問をしてきた。

「えぇ、大好き」

「どれくらい？」

「アンタが私を想う以上に、アンタの事、好き」

「本当か？」

「ホントよ。　証明してあげる」

「え？」

証明と言って、レーネはヴィレイサーの手から離れる。そして、街が一望できる高台に立って、大きく息を吸い込んだ。

「私はー、ヴィレイサーの事が誰よりも大好きー！」

かと思うと、彼女は突如としてそんな事を叫び出した。

「レ、レーネ!?」

周囲に人がいない為、奇異の目で見られずに済んだから良かったものの、ヴィレイサーは顔を真っ赤にして彼女に駆けより、その口を塞いだ。

「何よ、不服？」

「そうじゃない！　なんだってあんな事……」

「言ったでしょ、『証明してあげる』って」

「だからって……」

呆れて頭を押さえるヴィレイサーだったが、自分を押さえていた手が離れた隙に、レーネは再び叫んだ。

「ヴィレイサー、大好きー！」

「レーネ！」

「ふふん♪」

慌てるヴィレイサーの顔を見て、レーネは嬉しそうな笑みを浮かべる。その顔が愛らしかったから、ほんの数瞬、ヴィレイサーはそれに見惚れた。だが、ある事を閃いて彼はすぐに行動に移る。

「俺はー、レーネの事が誰よりも大好きだー！」

「なぁ！？」

いきなり叫ばれた事で、レーネが呆気にとられる。

「誰よりも、レーネを愛しているー！」

「それ以上続けると、私ももっと言うわよ？」

「それはさすがに止めてくれ……」

レーネが腰に手を当てて言い、ヴィレイサーはこれ以上レーネの

事を叫ぶのを止めた。しかしその刹那――――

「ヴィレイサー、好きよー！」

――――再びレーネが叫んだ。

「おい、俺はちゃんと止めただろうが！」

「あら、私はアンタが止めたら止めるなんて一言も言ってないわよ？」

ふふんと不敵に笑い、もう1度叫ぼうと、深く息を吸い込んだ。だが、彼女が叫ぶ事は叶わなかった。何故なら、ヴィレイサーが咄嗟にレーネと唇を重ねたからだ。

突然の事に驚き、レーネは目を見開いたまま微動だにしない。やがて唇が離され、レーネはゆっくりとヴィレイサーを見た。

「他に方法とか無かった訳？」

「すまん。　これが精一杯だった」

睨んでくるレーネに、ヴィレイサーは苦笑いするしかなかった。

「同じ手は通用しないわよ」

だが、レーネはそれに対して怒らず、当然のようにまた叫ぼうとする。

「悪いがそうはいかん」

すると、ヴィレイサーがレーネを抱き寄せた。ギューッと抱き締められ、レーネは身動きが取れなくなる。

「これならまともに叫べないだろ？」

「離しなさいよー！」

もがいてみるが、残念ながらレーネはヴィレイサーから脱せなかった。

「逆に、俺は好き勝手叫ばせてもらうぞ」

ニヤリと意地悪な笑みを浮かべ、ヴィレイサーは息を吸い込む。

「ダメー！」

恥ずかしいから嫌なのか、レーネはヴィレイサーに止めるように言うが、彼はそれを聞かなかった。そして、ヴィレイサーが言葉を紡ごうとした時も時――――

「ん……」

――――今度は、レーネから唇を重ねた。

「アンタ、まさかこれを狙ってたりした？」

「さすがにそれは無い」

唇が離れた所で、レーネの事も離した。

「どうだか。　アンタならやりかねないわよ」

「もし、レーネからのキスを望んでそうしたとしたら？」

「そうねぇ……」

ヴィレイサーからの問いかけに、レーネはしばし考え込む。やが

てその仕草を止めて、レーネはヴィレイサーに向き直った。

「もっとキスをしてあげてたかもね」

妖艶な笑みを見せて、レーネはヴィレイサーの頬に手を当てた。

「嘘吐け」

「そう思うのならそう思ってなさい」

夕日はいつの間にか地平線へと沈み、辺りは漆黒に塗りつぶされていく。それでも、レーネとヴィレイサーの心の中には光が差していた。

「……私は、“貴方”以上に“貴方”と一緒にいたい」

そう答え、レーネはヴィレイサーを欲するように彼の唇を奪った。

「お願い。　私と一緒にいて……私の好きな人（ヴィレイサー）……」

「もちろんだ、俺の愛する人（レーネ）」

そして、どちらともなく唇を重ねた。

「あれ以来、随分と丸くなった気がする」

「そんなに変わって無いわよ」

アルバムを閉じながら、レーネはヴィレイサーに答えた。長い事見続けていたのか、アルバムを閉じた頃にはすっかり夜が更けていた。

「そうか？　俺は以前より、かなり積極的になった気がするが？」

「どうかしらね？」

妖艶な笑みを見せて、レーネはヴィレイサーを押し倒す。

「私は……私なりの愛し方を見つけたからかもしれないわ」

「それがこの結果か」

「嫌なの？」

「まさか」

馬乗りになっているレーネから垂れるツインテールを、手でゆっくりと梳く。

「君が愛してくれている……それは、嬉しい事だよ」

「私の愛慾、全部受け止めなさいよね」

笑みを浮かべ、レーネはヴィレイサーと唇を重ねる。

「ん……はぁ……」

舌を絡め、何度も相手を求める。

「レーネ……」

「ん、何？」

「愛してるよ」

「私も、愛しているわ」

互いに愛を誓い、再三に渡ってキスをした。次第に熱くなっていく中で、レーネの着衣が乱れ、艶めかしい肌が服から覗く。

「変態」

「誘っているお前が悪い」

「ケダモノなアンタが悪い……んん！？」

まだ何かを言ってくるレーネを、唇を塞いで黙らせる。

「よく考えれば、別段どちらも悪くねぇだろ。

愛し合っているのなら普通だ」

唇を離し、白銀の糸が2人を結ぶ。

「アンタの愛慾も底なしね」

「褒め言葉として受け取っておく」

言いながら、レーネの服を脱がせ、彼女の肌を月明かりに晒す。

「あん……んん！」

彼女の胸に触れると、レーネは色っぽい声を上げる。

「ヴィレイサー……」

「ん？」

荒い息で、レーネはヴィレイサーの名を呼ぶ。

「ずっと……ずっとずっと、私を愛して」

「あぁ。　ずっとだ。　ずっとずっと、君を愛するよ」

2人は、幾度となく互いの愛を注いだ。その答が、自分達の未来を輝かしいものにしてくれると信じて――――。

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０１　ＳＥＱＵＥＬ「君と、ずっと……」（後書き）

鮮血
「長い。　そして甘い」

ヴィレイサー
「どっかで区切れよ……。」

鮮血
「また中途半端になりそうだったからね……。
それに、こういう話は1話で完結させた方がいいかなぁと、勝手ながら思っているからさ。」

ヴィレイサー
「しかし、レーネの奴……まさか叫ばれるとは……」

鮮血
「一番最初に君とＩＦをやった方だからね。　やっぱり思い入れが強いからさｗ」

ヴィレイサー
「って言うか、ネグリジェってもしかして……？」

鮮血
「御察しの通り、ノクターンで手に入れた奴だよ～。」

ヴィレイサー
「あぁ、そ……。」

鮮血

「次回は恐らく、クリスマスまで更新しなさそうですね。
小話をお楽しみに～。」

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０２　「伝えたくて……」（前書き）

鮮血
「さて、今回も前回と同様に、神崎先生とのコラボです！
そしてそのお相手は、皆様の想像通り、リースです！」

フェイト
「でも、リースって元はリオスだよね？
どうやってリースになるの？」

鮮血
「それは本編で。
さて、これの設定は以下の通りです。
とは言っても、前回のレーネ編と変わりありませんが。」

・ヴィレイサーにとって、リオスはかけがえのない戦友。

・時間軸は『氷翼の天使』のＪＳ事件終了後。

・ヴィレイサーの遺伝子の拒絶反応は起きていない。

鮮血
「と、なります。
では、ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ　ＣＨＡＰＴＥＲ－０２　「伝えたくて……」どうぞ。」

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０２　「伝えたくて……」

「それじゃあ、さっさとスカリエッティのラボの探索を済ませるぞ」

隣にいるリオスに告げ、ヴィレイサーが研究所内へと先行していく。彼に続いて、美麗なプラチナブランドの髪を揺らして、中性的な顔立ちの少年――――リオスが研究所に入っていった。

「それにしても、本当に色々あるね」

ラボの奥に進みながら、リオスは周囲をキョロキョロ見回す。

「アイツは、必要だと感じた物ならなんでも集めるような質らしいからな。
珍しいからって、無闇矢鱈に手を触れるなよ？」

「いくら僕でも、そんな事しないよ」

リオスは反論するが、とあるカプセルに目をやる。その中には、菱形の宝石のようなものがあった。

「これ、なんだろう？」

誰ともなく呟くリオスだったが、ヴィレイサーはそれを無視して先に歩いて行った。それに気付かず、リオスは宝石の入ったカプセルに触れる。

と、その瞬間――――

「な、何だ！？」

――――カプセルに収められた宝石が発光した。

リオスは突然の事に焦るが、どうすればいいかわからず、その場に立ち尽くしてしまう。

やがて発光が終わったかと思うと、今度は閃光が周囲に走った。咄嗟に目を庇う。

「うわぁぁぁぁぁぁ！？」

「リオス！？」

リオスの悲鳴を聞き、ヴィレイサーは急いで彼の元へと向かった。

「ミスをやらかすなんて……アイツにしては珍しい事だな」

ぼやきながらも、リオスの所に到着したヴィレイサーは、目を見張った。

「女？」

彼が呟いた通り、そこにはリオスでは無く、女性がいた。

「おい、しっかりしろ！」

「う……うぅ～ん？」

強く揺すると、彼女は呻き声を上げる。起き上がった女性には、何故かリオスの面影があった。

「ヴィレイサー？

ごめん。　なんかロストロギアが反応しちゃったみたい」

目の前の女性が、申し訳無さそうに謝る。

「あんた、何で俺の名を？」

「へ？　何でって、当たり前じゃないか。
僕らは仲間なんだから」

「「僕」だと？　お前、まさかリオスか？」

「「まさか」って……どこからどう見ても……」

言いながら、自分の身体を見るリオス。だが、そこで違和感に気付く。

「これ、胸……？」

いきなり立ち上がり、カプセルに映った自分の姿を見て、愕然とする。そこには、『可愛い』としか言えない、紛れもない女の子がいた。

「う、嘘……女の子になってる！？」

「さっきロストロギアが反応したとか言ったな。

それについて詳しく話を……」

だが、ヴィレイサーの声には耳を貸さず、リオスはパニックに陥ったままだった。

「僕が女の子になって、ヴィレイサーは今まで通りの目付きが悪い顔で……！？」

「人の話を聞け」

慌てふためくリオスの首筋に、冷たい刃をあてて落ち着かせた。

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０２　「伝えたくて……」

「つまり、カプセルに触れたらいきなり閃光が走り、気づいたら女になってた、と言う事か……。　お前、ふざけてるのか？」

「大真面目だよ！
以前にも変な塗り薬の所為で女体化した事があったじゃないか！」

「そういえばそんな話を聞いたなぁ……。　はやてからはビデオも見せてもらったっけ。
まぁ、これぱかりは持ち主に聞くしかないな」

「って事は、スカリエッティに聞くの？」

「そうなるな。
解ったらとっとと行ってこい」

「私1人で！？」

すっかり女の口調になっているリオスは、驚くしかなかった。

「ヴィレイサーが私から目を離すのがいけなかったと思うけど」

「自分で撒いた種だ。　己で処理しろ」

「私の事を傷物にしたって言いふらすよ」

「やったら殺すぞ、お前……」

「女性に手を上げるなんて、最低だね」

黒い笑みを浮かべるリオスに、ヴィレイサーは刃を向ける。

「今ここで死ぬか、自分で男に戻るか決めろ」

ドスの利いた声で言われ、リオスは降参の意を示すように、両手を上げた。

「まぁいい。　今回は俺も付き添う」

「ありがとう、ヴィレイサー」

笑顔を向けるが、ヴィレイサーはそれを鼻で笑った。

「早くも女が板に付いたな」

その言葉に、リオスはがっくりと肩を落とした。

「それは、嫌だよ……」

「つーか、呼び方は『リオス』のままでいいのか？」

「うーん……そう呼ばれた方がしっくりくるけど、それもなんだかなぁ……」

「じゃあ、変えるか？」

「『リース』なら、まだ反応できるかも」

◆◇◆◇◆

「とまぁ、そんな訳だ。
スカリエッティ、戻す方法を知らないか？」

「さてね……。
そもそもあのロストロギアは、研究途中だったから、私も詳しくは知らないんだよ」

「だとよ」

隣にいるリースの肩を軽く叩く。

「そ、そんなぁ……」

あまりの絶望に、若干涙目になる。

「しかし、変化した身体には興味があるな。
是非私に研究させてくれ」

「お断りです！」

リースは声を荒げ、先に外に出て行った。

「それにしても、本当にわからないのかよ？」

「まぁ、精密検査を受ける事を勧めるしかできないね」

スカリエッティは肩を竦め、それだけ言った。

◆◇◆◇◆

「やれやれ……おいリース、元に戻る方法を探すぞ」

外で待っていたリースに元気付けるように言うと、彼女は頭を振った。

「どうせ無理だよ……」

「お前、男に戻りたく無いのかよ？」

「戻りたいに決まってるだろ！」

カッとなり、リースはヴィレイサーにあたってしまった。

「だったら最後まで諦めんじゃねぇよ。
お前自身が諦めたら、それで終わりだろうが」

「ヴィレイサー……」

リースの肩を掴み、強く、ハッキリと言う。

「辛くなったら誰かを頼ればいいだろ。

もしも万が一、誰にも相談できなきゃ俺が支えてやるよ」

彼の心に響く訴えに、リースは涙を流して頷いた。

◆◇◆◇◆

「うーん……」

六課に到着した後、すぐにシャマルに要件を話した。そして今は、精密検査の結果を待っていた。

「どうだったんだ？」

「1箇所だけ、ロストロギアの反応があるの」

「まさか……リースの体内に、例のロストロギアが？」

「そうなるわね」

◆◇◆◇◆

「リース……」

自室に籠ったリースを心配し、ヴィレイサーは毎日彼女の部屋の前に来ては、話しかけるが、それはまったく効果が無かった。

それを何度も繰り返す内に、ヴィレイサーの心に変化が生じる。今までは『憐れみ』による心配だったが、最近は『好意』によるものだった。その気持ちの変化に戸惑いを覚え、ヴィレイサーはリースへの接触を止める。

（もしも俺が本当にリースの事を好きだとしたら、アイツは困るだろうに……。

なのに、何でこの気持ちを捨てきれないんだよ……）

疲れたのか、眠るように目を閉じる。

（こんな時に、リオスの事ばかり思い出すなんてな）

微笑を浮かべ、ベッドから体を起こす。

（俺の我儘で、リースの願いを潰す訳にもいかねぇよな）

急いでリースの部屋に向かった。

◆◇◆◇◆

「リース、入るぞ」

ヴィレイサーはそう言ったが、返事は無かった。無言のまま入り、暗闇で包まれた中を窺う。明かりを点けると、ベッドに横たわっているリースがいた。

「リース……」

声をかけると、彼女はのっそりと起き上がる。寝ていたのか、寝惚け眼をこする。

「ヴィレイサー？」

「どうだ？　少しは楽になったか？」

ヴィレイサーの問いかけに、リースは力無く頷く。彼女の傍らに座し、頭を撫でる。

沈黙だけが今の2人を支配していた。やがてヴィレイサーの手が止まった時、リースが口を開いた。

「ヴィレイサー、ありがとう……」

「なんだよ、いきなり？」

「だって、ずっと私の心配をしていてくれたから」

「『ずっと』って言うのは、語弊があるだろ」

「それでも、ありがとう……」

ハッキリとした声に、ヴィレイサーは安堵した。

「私、元に戻れないんだって愕然としてたんだけど、ヴィレイサーのお陰で、ちゃんと前を向けたよ」

「そうか……」

「だから気付けたのかもしれないね……本当の、気持ちに……」

「リース？」

彼女の言った事がわからず、ヴィレイサーは聞き返した。

「ヴィレイサー、私……あなたの事が好きだよ！」

「リース……」

「でも……でも私は、リオスに戻りたい……。ヴィレイサーの事が好きな私も、リオスに戻りたい私も、どっちも本当の私だよ」

訴えるリースの瞳に、ヴィレイサーは吸い寄せられそうだった。

「リース、俺はお前を戻すと約束した。だから……」

『忘れろ』と言いたかった。『自分への想いを、捨てろ』と言いたかった。

だが、リースの事が好きな自分が、それを許さなかった。それでも、リースは解ってくれた。小さく、されど明確に頷き、凛とした声で囁いた。

「さよなら……」

◆◇◆◇◆

眠りについたリースを起こさぬよう、グロリアスを拝借して部屋を出た。

「シャマル、例のロストロギアはリースの体内にいると言ったいたな。
詳細な位置はわかるか？」

「えぇ、なんとか……でも何で？」

「以前、なのはがリオスの意識の中に入った事があっただろ。
それを利用して、意識内にあるロストロギアを破壊する」

「けど、失敗したらヴィレイサーの意識が乗っ取られるわよ!?」

「ほうっておけば、それこそどうなるかはわからない。
ロストロギアが何も起こさない今が好機だ」

「ヴィレイサー……」

「それに……約束したからな。
元に戻す……と」

◆◇◆◇◆

《準備はよろしいですか？》

グロリアスからの確認に、ヴィレイサーは無言で頷いた。

「じゃあ、始めるわよ」

眠ったままのリースとのリンクを開始する為、シャマルが魔力を高める。

「リース……」

彼女の頬にそっと触れ、ヴィレイサーはほほ笑む。

「さよなら……」

そう言って彼は、リースの意識内に突入した。

◆◇◆◇◆

「ここが、精神世界か……」

周囲を見回すが、特に目ぼしいものは無かった。

（なのはの話では、リアルドって奴がいるらしい事と、
魔力が練れないという事は聞いていたが……）

試しにやってみるものの、確かに魔力は練れなかった。

《リーダー、目的地に向かいましょう》

「あぁ」

エターナルに促され、ヴィレイサーは走り出す。

「アレか……」

ほどなくして、ターゲットが見つかったリースから事前に聞いていたロストロギアの姿と酷似した物を見据える。

「モードの切り替えはできるようだな。　ならば！」

《Ｂｒｅａｋｅｒ　Ｍｏｄｅ.》

最も強度のある、巨大な大剣型に切り替えた。それを後ろ手に振りかぶり、菱形の宝石目掛けて思い切り叩き斬る。

だがそれは、障壁に阻まれ、中々破壊する事ができない。

「なるほど、硬いな。　だが……」

《Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．》

破壊力をあげるカートリッジを使い、もう１度ロストロギアに叩きつける。

「ＩＳ、レゾナンス！」

共鳴振動を与え、徐々にロストロギアに罅がまわる。その度に、ヴィレイサーの脳裏にリースの顔がちらつく。

「未だに、決心がついてないとでも言うのか、俺は……」

ギリと歯を噛む。

「押してくれたんだ、俺を……。　だからこそ！　破壊する！」

想いが通じたのか、ロストロギアは粉々に砕け散った。精神世界が一瞬歪んだ。恐らく、ロストロギアが破壊された事による影響だろう。

「戻るぞ、エターナル」

《Ｙｅｓ，Ｌｅａｄｅｒ．》

最早何にも目もくれず、ヴィレイサーは現実世界へと向かった。双眸から流れる一筋の涙に、彼は気が付かなかった。

「おい、リオス。
とっとと次の任務に行くぞ」

「ヴィレイサー、相変わらず戦うの好きだね……」

「仕事だと割り切ってるからいいだろうが」

現実世界へと戻った後、リースの変化もなりを潜め、本の数時間でリオスへと戻った。リオスは、ロストロギアの力で女体化した記憶を、全て失っており、それが幸いして、今でも自分とリオスはこうして変わらず接する事が出来ていた。

ヴィレイサーは、自分とリースの決心が間違いではないと信じている。

（ありがとうな、リース。　俺を押してくれて……）

今はもう消えてしまった彼女を、蒼天に描きながら、ヴィレイサーは飛翔した。

（さよなら、リース……だが、忘れはしないからな……）

ＩＦ　ＥＮＤＩＮＧ－０２　「伝えたくて……」（後書き）

フェイト
「え!?　２人って結ばれないの!?」

鮮血
「そうだよ。　何か問題でもある?」

フェイト
「だって、てっきり結ばれるのかと思ってたから……。」

鮮血
「うーん……。
当初はその予定だったんだけど、どうしても戻らせたかったんだよね。
だから、この形になったんだよ。」

ヴィレイサー
「俺は別に、後悔してないがな。」

鮮血
「せっかくリースが押してくれたんだもんね。
ここでそれに応えなきゃ、それこそヒドイもん。」

フェイト
「だけど……。」

鮮血
「もちろん結ばれても良かったかもしれないけど、

なんでもかんでもその結末にするのはどうかな？と思ったから。」

フェイト
「本分の『けいおん！』でやればいいじゃない！
あっちは短編集とかやってるのに……。」

鮮血
「まぁ、考えてみるよ。」

ヴィレイサー
「しかし、神崎先生もよくＯＫを出して下さったな。」

鮮血
「そうだね。
神崎先生、本当にありがとうございます！」

キャラクター設定

・名前：ヴィレイサー・セウリオン

・年齢：２０歳

・性別：男

・詳細

元々は地球の出身だったのだが、魔力反応を知った研究者が彼を捕らえ、
ミッドの研究施設で、肉体を改造する。

それは、人間兵器としての改造で、強者の遺伝子を組み込むというものだった。

その唯一の成功体として、施設で過ごしてきたが、
施設の制圧を行っていたクイントに保護され、彼女の下で家族として過ごす。

その中で、ヴィレイサー・セウリオンという名を冠してもらう。

ゼスト隊に入隊後は、メガーヌを姉として慕う。

しかし、戦闘機人事件の際、隊が壊滅した為、彼も地球に帰った。

地球に戻って以降も自主訓練を行い続け、その力は折り紙つき。

ゼスト隊での噂を聞きつけたデュアリスが、１８歳の彼を再びミッ

ドに呼んだ。

そこで、創世の書事件に関わる事となる。

エクシーガが首謀となった事件、『創世の書事件』の後は、レーベで復興作業に尽力した。

その後、家族であるナカジマ家に挨拶をして、そこで静かに暮らしていた。

だが、身体が鈍ってきたので、レーベに属する傭兵として活動開始した。

ちなみに、創世の書事件の最後では、遺伝子による拒絶反応が発症しだした。

吐血、四肢の麻痺などが、襲う事もしばしばある。

今現在は遺伝子の拒絶反応による吐血は、処方された薬で抑えている。

フェイトからは、エリオやキャロの事を聞いている。

・術式：近代ベルカ式

・髪の色：藍色で長髪

・瞳の色：紫

・魔力色：黒

・魔力ランク：Ｓ

・魔導師ランク：空戦、Ｓ

・希少能力

『マルチロックオン』

複数の敵、もしくは魔力弾を補足する能力。

『シャドー・ファントム』

自身の周囲にある影を使い、人と武装を模る。

制御はエターナルが取っている。

『重力付与』

自身の武器、もしくは周囲に重力を発生させる能力。

『ＳＥＥＤ』

戦闘中に危機に陥ったり、自身の感情が爆発する時のみ使用可能。

一時的に自身の戦闘能力を飛躍的に向上させる能力。

ただし、長時間使用すると精神汚染、もしくは精神崩壊が起きる。

『共鳴破壊（レゾナンスブレイカー）』

敵の武器、もしくは防具と同じ固定振動数を与え、破壊するＩＳ。

エターナルの強度にも影響する為、酷使するとエターナルが大破してしまう。

・デバイス

名称：エターナル・デイブレイク

・形態

モード１－ギア１：《ソードモード》

片刃の太刀の形態。

最も使用頻度が高く、使用できる技も多い。

モード１－ギア２：《アンビデクストラス・ハルバードモード》

太刀とその鞘を連結し、両刃の双頭刃型の形態。

刀身が鏡のようになっており、多数対１の時、刀身を見て戦場を把握できる。

モード２－ギア１：《ハルバードモード》

刃がかなり長い薙刀の形態。

使用できる技が少なく、ヴィレイサーの使用頻度も少ない。

だが、かなり長い為、中距離や遠距離戦の相手には重宝する。

モード２－ギア２：《ジャベリンモード》

尖端の鋭い投擲タイプの槍の形態。

この形態のデバイスを投げるか、付与された魔力を投擲するかの選択ができる。

モード３－ギア１：《シザーズモード》

右手に装備する鋏型の形態。

先端は大剣の形を模している。

ブレイカーモードよりも取り回しがし易いが、威力は落ちる。

ガジェットの場合は鋏で断ち切り、対人の場合は気絶させるために使う。

モード３－ギア２：《ブレイカーモード》

大剣型の武器。
全モードの中でも一番の強度と威力を誇る。
しかし、重量も一番重い為、素早い取り回しがし辛い。

モード３－ギア３：《アローモード》
弓型の形態。
魔力消費量が最も大きいため、乱用ができない。

・特殊機能
『カートリッジ・セレクト』
通常のカートリッジをロードする替わりに、
一部に特化したカートリッジをロードする事ができる技術。
例：「パワー型」、「ロングレンジ型」、「スピード型」ｅｔｃ

『エレメンタル・カートリッジ』
ヴィレイサーのＩＳだった属性付与の威力を格段に上げる為、
多々の属性を持つカートリッジを使う。
当初は、ヴィレイサーのＩＳと兼用する予定だったが、
遺伝子により衰弱した身体への負担を軽減する為、デバイスのみの
使用となった。

・名前：エクシーガ・スラスト

・性別：女

・詳細

2年前の創世の書事件の首謀者。
ヴィレイサーとの戦いに敗れ、彼の説得により心を改める。
ヴィレイサー同様に、プロジェクトCで遺伝子を弄られた。
しかし、失敗作としてのレッテルを貼られたお陰か、
ヴィレイサーとは違い、遺伝子の拒絶反応は起きていない。
レーベの復興に尽力した後、デュアリス、リュウビ、ヴァンガードの3人と共に、
身を潜めてひっそりと暮らしていた。
七星の事を秘密裏に調べており、公開意見陳述会の会場付近にもいた。
そして、エターナルからの救難信号を受け、ヴィレイサーを助け出す。
創世の書を失った後は、専用のデバイスを持つ。
ヴィレイサーと同様にヴィーナスシステムを有している。
ちなみに、デバイスの形態は長剣の一択のみ。
しかし、フラグメントとして使用可能で、魔力を付与する事により、
刃の大きさを自在に変更する事ができる。

・術式：近代ベルカ式

・髪の色：白銀で長髪

・瞳の色：黄色
・魔力色：翡翠色
・魔力ランク：S
・魔導師ランク：空戦、S

・デバイス
名称：アタラクシア
・形態
フォルム1：《セイバーフォルム》
長剣のフォルムで、遠隔操作武器、フラグメントの集合体でもある。

名前：デュアリス・F・セイバー
年齢：20歳
性別：男
詳細

創世の書事件の後、レーベの復興に尽力し、
以降はヴィレイサーを除いた４人で静かに暮らしていた。

しかし、調査していた麻薬畑をレーゲンの手で焦土と化され、
七星の動きを把握しようと、エクシーガに調査を依頼する。

彼は、セイバーの名を冠する騎士を、現代に甦らせるべく行われた、
プロジェクトＦによって生み出された。

しかし、戦闘スタイルなども似る事は無く破棄された。

それを、育ての親が拾ってくれ、今まで生きてきた。

術式：ミッド式

髪の色：金髪で短髪

瞳の色：薄い翠

魔力色：濃い紫

魔力ランク：Ｓ－

魔導師ランク：空戦ＡＡＡランク

希少能力
『ＳＥＥＤ－Ｍ』
ヴィレイサーがもつＳＥＥＤと同等の能力だが、それより発現時間が短い。
ＭはＭｏｍｅｎｔ（瞬間）の意。

デバイス

名称：トワイライト・クレスト

・形態

フォーム1：《ツインソードフォーム》

短剣と長剣の形態。

両剣とも反りが大きく、ブーメランとしても活用できる。

フォーム2：《バヨネットフォーム》

銃剣の形態で、刃は銃口の下に備えられている。

展開式の刃である為、戦闘状況によって変更できる。

名前：リュウビ・T・キリシマ

年齢：20歳

性別：女

・詳細

レーベの代表だった父の後は継がず、国は他者に任せた。

彼女もデュアリスと同様に、プロジェクトFで生み出された。
しかし、オリジナルの代わりとしてではなく、
1人の人間として育てられた為、性格は穏やか。

術式：ミッド式

髪の色：薄い紫で長髪

瞳の色：真紅

魔力色：赤

魔力ランク：S

魔導師ランク：空戦Sランク

希少能力：A・P・W
Avalanche Phantom Weaponの各頭文字からとったリュウビのスキル。
（雪崩並みの幻影の武器）という意味扱いの作者造語。
幻影技によって模れた武器を無数に創造し、
雪崩のように敵に向かって攻撃する能力。

・デバイス

名称：イーブン・クレイドル

・形態

フォーム1：《ブレードフォーム》
汎用性の高い両刃剣。
威力も取り回しも、通常の物よりも少し高めにある。

フォーム2：《ダブルセイバーフォーム》
ヴィレイサーのアンビデクスと似ているが、
それよりも巨大な刃を持つ形態。
取り回しが難しく、一撃必殺向きと言える。

名前：ヴァンガード・レイス

年齢：２０歳

性別：男

・詳細
創世の書事件で、エクシーガと共に戦った青年。

当初は、エクシーガに協力していたものの、彼女の行いを知ってからは、
ヴィレイサー達に与する。

ヴィレイサー達の方にシグナムがいる事を知り、彼女と腕試しをしたいと思っていた。

事件解決後は、出身地であるレーベに戻り、復興作業を行う。

仲間思いであり、それ以上に他者に強い思い入れをする。

敵であろうとも、自分が共感できる相手ならば刃を向けないという、甘さでありながらも、優しさを持つ。

術式：近代ベルカ式

髪の色：暗灰色で短髪

瞳の色：紺碧

魔力色：紺碧

魔力ランク：S

魔導師ランク：空戦S

魔力変換資質：氷

・デバイス

名称：アークティック

・形態

フォルム1：《ダブルクラッシュフォルム》

双剣の形態で、取り回しがしやすい。

しかし、威力はフォルム2よりも劣る。

フォルム2：《フリジッドフォルム》
フォルム1の双剣を結合させ、大剣型にした形態。
取り回しがし辛い半面、威力が大きく、
ヴァンガードの魔力変換資質も最大限に引き出せる。

・七星

七星とは、光闇の書に封印された、太古の戦士7人の部隊の事である。

七星の力の強さに目をつけた当時の権力者が、戦士達の衰えを危惧し、
光闇の書に閉じ込められるように、身体を改造した。

光闇の書から出るには、使用者が白紙のページに名前を記載する事。

しかし、使用者に必ずしも従うという訳ではない。

七星が持つ武装は全て、権力者や研究者が開発した物であり、デバイスでは無い。

なので、デバイス以上に繊細な調整が必要となる。
その反面、使用者に合わせた調整が行われている為、
デバイス以上に自分の手足として使う事が可能。

・七星の面々

・名前：ニクス
七星のリーダー的存在の男性。

武装
・攻防一対の盾。
盾の先端に２つ砲身がある。
その間には、魔力刃を発生させる部位がある。

・希少能力
『ニクス・アーセナル』
ニクスの主武装が仕舞われている空間を開くＩＳ。
自身の背後に開き、そこから円錐形やスクエア型の砲身が収められている。
それらは全てニクスにより制御されており、彼の戦術に素早く応

える。

・ミラージュ
古代の戦士で、家系は代々強い騎士を輩出している。
彼自身も騎士の1人。

武装
・中距離用のライフル。
・近接戦闘用の太刀。

・希少能力
『グラディエーターモード』
近接戦闘に特化したモード。
2対の太刀と、足先にはクローを付属する。

『ミラージュ・ヴァーチャル』
蜃気楼により、相手に自分の姿を錯覚させる。
ただし、天候による左右が激しい為、乱用はできない。

・ヘイル
幼い頃から残虐なふしがあった、砲撃を得意とする男。
戦いを楽しむ傾向が強いが、根は真面目。

・武装
肩にミサイルとバルカンの併用ポット。
背部に散弾銃と中距離用ライフル。

ライフルと散弾銃は連結可能。
それぞれの飛距離と威力を格段に上げる。

・希少能力
『ヘイル・シューティング』
ライフルと散弾銃と連結した時、その砲撃を分散させる。

『ヘイル・フルブラスト』
全ての火器を一斉に発射し、それを地上に降る雹のように戦場にランダムに降らせる。

・ヴァン
大人びた女性の騎士。
生まれてすぐに孤児院に捨てられた過去を持つ。
親よりも、今の仲間の方が大事。

・武装
中距離用のライフル。
魔力刃を発生させる柄を、２本腰に持っている。
背中には、収束砲を使う砲身が２対ある。
その砲身は、重量を減らすための措置が施されているが、
そちらを優先し過ぎたためか、連射がきかない。

・希少能力
『ヴァン・コントロール』
剣から発生させた風により、敵の動きをわずかにコントロールする。
風圧を上げて、敵を大きく吹きとばしたり、

逆に、自分から離れられないようにすることも可能。
しかし、剣にしか付与できない為、近接戦闘時にのみ真価を発揮する。

・レーゲン
騎士志望だった青年。
白兵戦に大変長けており、その実力はかなりのもの。

・武装
中距離用のライフル。
それに加え、実弾銃を持つ。
魔力刃を発生させる剣を2本、足に備えている。
背部に巨大なバズーカを持ち、それが戦局を一瞬にして覆した事すらある。
バズーカの弾速はかなり速く、威力もかなり高い。
連射はできない上、弾数もさほど多くは無い。
スカリエッティにより、新たにカートリッジシステムを追加されている。

・希少能力
『レーゲン・デリート』
魔力を分解する雨を降らせ、砲撃や実弾、武装、果ては敵の肉体すら破壊するＩＳ。

・名前：ゲイル
太古の騎士の中でも、近接戦闘ではトップクラスの強さを誇る。

常に仮面をしており、七星のメンバーも、彼の素顔を知らない。
その正体は、セイバーの称号を冠する騎士である。

・武装
中距離用のライフル。
折り畳み式のナイフを左右の脇に1つずつ備えており、投擲にも使う。
左右の腰に大剣を配しているが、空中で移動する際の邪魔にならない構造をしている。

・希少能力
無し。

・名前：ネブラ
まだ幼い少女。
子供の頃に親に裏切られたが、ニクスに助けられた。

・武装
ニクスよりも大きな攻防一対の盾。
その盾には、スモーク弾が3連装に並んでいる。
補充用の分が、左の腰にある。
左手には、鉤爪が付属されている籠手を捲いている。
七星の他のメンバーとは違い、特殊な武装（下記）をスカリエッティと共同で作った。

・マガノイクタチ
背中に背負った、巨大な武装。

それを展開し、敵に接触させる事で、魔力、もしくは電力を吸い取り、
マガノイクタチに貯蓄させる事が可能。
吸い取った魔力や電力を逆流させ、敵を攻撃する事もできるが、
どちらも、マガノイクタチが接触するほど近づかなければならない。

・マガノシラホコ
マガノイクタチに搭載された、ワイヤーの先に槍の鉾がついた武装。
敵をワイヤーで拘束したり、鉾で貫く。
味方のデバイスなどにも接触させる事により、
マガノイクタチに貯蓄させた魔力を供給できる。

・希少能力
『ネブラ・ステルス』
霧による不可視能力。
足音や声は出てしまうので、移動する際は飛行する事となる。
『マガノイクタチ』に不可視となる霧を貯蓄し、仲間に供給する事ができる。

『ネブラ・バルーン』
これは、空気中の水分を使い、霧を無理矢理発生させ、
その霧を媒介に、微量な魔力で霧を繋ぐ。

そうすると、ネブラと同じ姿をした霧の人形が完成する。

それを複数簡単に生成し、戦わせている間に、
自分は不可視能力、『ネブラ・ステルス』を使って、敵の指揮官や基地を制圧する。

最終的には、生成したバルーンを霧状に戻し、睡眠作用のあるガス

に変化させる。

ヴィレイサー　設定画（前書き）

今回のヴィレイサーの設定画は、マグネス先生を通じて、
先生のご友人に書いて頂きました。

マグネス先生、絵師様、本当にありがとうございました！

※絵師様より、絵師様の名前は記入しなくて良いとの事です。

※この絵の転載及び引用、模写は『禁止』です。

ヴィレイサー　設定画

ヴィレイサー・セウリオン（ロングコート無し&上半身）

＞i22316―2128＜

ヴィレイサー
「誰だ、これ？」

鮮血
「いや、君だから……。」

ヴィレイサー
「いや、俺はこんなかっこよくねぇから！」

鮮血
「それは真面目に僕も思った！
初見では、「このカッコイイ人、誰！？」って気持ちだったもん。
」

ヴィレイサー

「まぁ、書いてもらった事だし、丁重に受けさせて頂きます。」

鮮血
「次は全体像です。」

ヴィレイサー・セウリオン（ロングコート無し&全体像）

＞i223188―2128＜

鮮血
「見るからにツンデレだ……。」

ヴィレイサー
「誰がツンデレだ！」

鮮血
「これだと、マジでツンデレって言われてもおかしくないよ……。
しかも（あくまで僕としては）かっこいいし……。」

ヴィレイサー
「ツンデレじゃねぇから。」

鮮血
「これは……あれですね！
ツンデレ×クール＝ツーデレって奴です！」

ヴィレイサー
「まだ言ってんのかよ……。」

鮮血
「よし！
これから君はこのかっこいい容姿で、たくさんの女性を落とそう！
そして、ツンデレフラグ堕天使の称号を取るのだ！」

ヴィレイサー
「んな事出来るか！
ってか、俺はこの上から黒一色のロングコートを羽織っているんだけどな。」

鮮血
「ちゃんと明かしていなかったのですが、
実はヴィレイサーのロングコートはバリアジャケットでは無く、
オプションのようなものなんです。」

ヴィレイサー
「で、そのロングコートの内側には、色々と物が入っているんだ。」

鮮血
「主に、投擲タイプのスティレット（小刀）と、
あとはカートリッジの弾倉（マガジン）を入れてます。」

ヴィレイサー
「便利だろ？」

鮮血
「歩く武器庫みたいじゃん……。」

ヴィレイサー
「いいんだよ。
俺の好みなんだから。」

鮮血
「やれやれ……。
さて、マグネス先生、並びに絵師様。
今回は、本当にありがとうございました！」

ヴィレイサー
「この絵の転載及び引用、模写は『禁止』です。
ちゃんと守ってください。」

鮮血
「それでは～。」

ヴィレイサー　設定画（後書き）

※この絵の転載及び引用、模写は『禁止』です。

第1話　「機動六課へ」（前書き）

鮮血
「ってなわけで、新連載です！」

ヴィレイサー
「無茶苦茶だな・・・。
小説のタグとか、展開とか。」

鮮血
「ほっとけ・・・。
小説のタグにもある通り、更新はのんびりやっていきます。
たまに早く書けたら、その場合はすぐに。」

ヴィレイサー
「しかし、題名も大それてるよな。」

鮮血
「最初は、神話から引っ張る事は無かったんだけどね。
では、第1話をどうぞ。」

第1話　「機動六課へ」

「出張任務、ですか？」

オレンジ色の髪をツインテールにした少女、ティアナ・ランスターが、
上司である高町なのはに聞き返す。

「うん。
実は、この地点に微弱な魔力反応が7種類ほど確認されたの。」

なのはは、それを表すモニターを表示する。
そこには、魔力反応を赤で示した点が7つあった。

「それで、今回は2人にここを見に行ってきてほしいの。」

「わかりました。」

隣にいるティアナの相棒、スバル・ナカジマが返事をする。

「よろしくね。
でも、油断はしないようにね。
何かあったら、ちゃんと連絡する事。」

「了解です。」

「それじゃあ、行ってきます。」

◆◇◆◇◆

「なんだ？　この感じは……。」

一方、スバル達が向かっている箇所の近くで、１人の青年が蒼天を仰いだ。

「微弱ではあるが、向こうの方からか……。」

立ち上がり、感覚を研ぎ澄ませる。

そして、正確な位置を身体に刻ませる。

「次に行く目的地が決まった。
行くぞ。　エターナル・デイブレイク。」

［Ｙｅｓ，Ｌｅａｄｅｒ．］

愛機に呼び掛け、次の目的地へと飛翔する。

聖なる堕天使――――ヴィレイサー・セウリオンが。

第１話　「機動六課へ」

「ここね。」

「うん。
それじゃあ早速捜索を開始しようか。」

ティアナとスバルは目的地に到着し、早速任務を開始する。

◆◇◆◇◆

「あ、ティア、アレ！」

数十分後、スバルがティアナを傍に呼び、湖を指さす。

そこには、真っ白な本が湖上に浮いていた。

「何、アレ？」

「とりあえず、なのはさんに連絡しよう。」

2人が手早く上司に連絡を取ろうとした時、

彼女達の向かい側から1人の男性が現れた。

白衣を着ているという姿からして、恐らくは何かの研究者だろう。

彼は湖上に浮かぶ真っ白な本を見つけると、歓喜の声をあげた。

「やったぞ！

これで私は世界を手にする事が出来る！

アッハハハハハハ。」

それを耳にしたスバルは焦る。

「ティ、ティア……どうしよう……。」

「今はなのはさんに聞くのが先決でしょ？

私が連絡するから、スバルはあいつから目を離さないで。」

「う、うん……。」

だが、そこにもう1人の客人が大空に現れた。

「あ、あれは……ヴィレ兄？」

スバルの言う通り、それはヴィレイサー・セウリオンだった。

◆◇◆◇◆

「ここら辺のはずだが……。」

［リーダー、真下にいくつか反応があります。］

「何？」

愛機の言葉に、下を見ると、1冊の本が目に入った。

そして、それに近づく研究員の事も。

「あれは、いったい……。
ここで呆けていてもしょうがないな。」

即断し、一気に本の近くに舞い降りた。

「その本、お前はなんだか知っているのか？」

いきなりの質問に、研究員は驚くが、それには答えずに本へと歩みを進めた。

「答える気は無いか……。
ならば、実力行使といくか。」

空間からエターナルを出現させ、抜刀する。

だが、その時別の方向から予想外の声が聞こえた。

「ヴィレ兄！」

「ッ！？　ス、スバル？」

視線を向けた先には、バリアジャケットに身を包んだ妹の姿があった。

だが、その一瞬の隙に、研究員は本を手にしてしまった。

（っ！　しまった！）

急いで駆け寄ろうとするが、それは本から発せられた見えない障壁によって阻まれた。

「チッ！」

舌打ちし、ただ見ているしかできない自分を恨む。

「クックックッ……。
ようやく手に入れたぞ、光闇（こうあん）の書を！」

「光闇の書？」

［私も初耳なものですね。］

研究員は本を開き、パラパラとめくっていく。

だが、どのページにも、何も書かれてはいなかった。

（どういう事だ？
書物なのに何も書かれてはいないなんて……。）

やがて男の手が止まった。

「このページだな。」

ペンを取り出し、何かを書いていく。

そして、それが終わった後、蒼天にそれを掲げる。

「さぁ、書物の中でのみ生きる事を許された戦士達よ、今ここに甦れ！
我が名は、グリード・アバライス！」

そう言った瞬間、書物から眩い光があふれだした。

そして、それが収まった時には、グリードの周りに7人の男女がいた。

「目覚めたか、七星（しちせい）。」

グリードの最も近くにいた端正な顔立ちの少年が、
それに反応したかのように目を開く。

「ここは……。」

目を開いた少年は周囲を不思議そうに見回す。

「君達。」

徐々に目を開いていく男女に、グリードが声をかける。

「私が君達を目覚めさせたのだ。
これからは私の為に働けよ。」

それを聞いた彼らは、顔の端に笑みを浮かべた。

それを少し離れた所から見ていたヴィレイサーは、背筋が凍るような錯覚を覚えた。

（なんだ？
コイツらのこの隠しきれないほどのプレッシャーは……。）

それを感じ、更に距離を取る。

だが、それに1人の男が目を向けてきた。

しかし、興味が無いのか、すぐさま視線を戻した。

「さぁ、私の言う事を聞け、戦士達よ。」

「その前にやる事ができました。
ヘイル。」

とてもリーダー格とは思えない少年が、
隣にいた黒を基調とした服に陽気そうな男に言う。

「あいよ、ニクス。」

それに答えるかのように、ヘイルと呼ばれた男は腰に提げてある銃を手にし、
何を思ったのか、研究員に銃口を突き付けた。

「な、なにを!?」

「あなたに従う気はありません。
僕らの主は、他にいますからね。」

ヘイルの代わりに、最初に目を開いたニクスが淡々と言う。

「マズイ!」

ヴィレイサーはすぐさま移動し、スバル達の前に立ち、シールドを展開する。

「ヴィ、ヴィレ兄?」

「話は後だ、スバル。」

そう言った瞬間、スバル達の目の前で、巨大な閃光が迸り、轟音が

辺りに響いた。

「オイ、ヘイル。
　少しやり過ぎじゃないか？」

仮面で顔を隠している長身の男が、
グリードを撃ち殺してヘラヘラと笑っているヘイルに言う。

「ハァ？　どこがだよ、ゲイル。」

「別にあれが『普通』なんだからいいじゃない。」

そうやってヘイルに味方したのは、一番背の低い少女だった。

「それより、ここは別の場所に行きましょう。
　せっかく現世に出れたのですから。」

ニクスの言葉に、異論を唱える者はいなかった。

「ニクス、あの男達はどうするの？」

更に別の女が口を開き、ヴィレイサー達を見る。

「今の所は彼らに戦闘の意志はない。
　こちらも、無益な戦いは避けるべきだよ。」

それだけ言い、デバイスを一切使わずに空へと飛翔するニクス。

残りの６人もそれに倣い、どこかへと飛び去った。

◆◇◆◇◆

「行ったか。」

「ヴィレ兄！」

「おわっ！」

いきなりスバルが飛びついてきて、
ヴィレイサーは彼女を止められずそのまま一緒に倒れてしまった。

「久しぶり～。」

未だに離れないスバルの頭を撫で、ヴィレイサーはもう1人の少女に目がいった。

「ちょっと、スバル！　何やってんのよ!?」

「あ、ティア。」

オレンジ色の髪をツインで結んだ少女が駆け寄り、スバルを無理矢理離す。

「大丈夫ですか?」

「あぁ、すまない。　ありがとう。」

「機動六課の者です。　あなたは？」

「あぁ、俺は……。」

ティアナの問いかけに答えようとしたが、先にスバルが答えた。

「ヴィレイサー・セウリオン。
私のお兄ちゃんだよ、ティア。」

「兄妹……？」

「まぁ、ちょいと事情があってな。
ところで、さっき君は機動六課って口にしていたが……。」

「あ、はい。
私達の……。」

「私達の所属している部隊だよ。」

今度はティアナの説明を遮り、スバルが答える。

「そうか……。
良かったら、そこに俺を案内してもらえないか？
そこに知り合いが……高町なのはがいると思うんだが。」

◆◇◆◇◆

「ヴィレくん、久しぶり～。」

六課の隊舎に到着し、出迎えたなのはを掌底で突き飛ばす。

「にゃわ！？」

「一々来るな。　鬱陶しい。」

ヴィレイサーは嘆息し、ティアナとスバルに向き直る。

「ここまで連れてきてくれてありがとうな。」

「いえ。　それでは私達はこれで。」

「ヴィレ兄、また後でお話ししようね！」

「あぁ、約束だ。」

「待ってるからね～。」

礼儀正しく一礼したティアナに、スバルは追いつき、一緒にどこかへと向かった。

そして、なのはに向き直る。

「2年ぶりだね、ヴィレくん。」

「そうだな、なのは。」

なのはは笑みを浮かべ、ヴィレイサーは表情を変えずにそう言う。

共に歩む事を知りながら……。

第1話　「機動六課へ」　了

第1話　「機動六課へ」（後書き）

鮮血
「相変わらずよのぉ・・・。」

ヴィレイサー
「つーか俺、生きてたんだな。」

鮮血
「当たり前でしょ！？」

ヴィレイサー
「薬って言ったって、そんなに長生きになる訳じゃないだろ？」

鮮血
「そうだね。
せいぜい、2、3年伸びた程度かな。」

ヴィレイサー
「人生も疲れるなぁ・・・。」

鮮血
「何を年老いた事を・・・。」

ヴィレイサー
「寿命を考えると、もう歳だろ、俺。」

鮮血
「そう言われると、そうだね・・・。」

ヴィレイサー
「で、2話目はいつ更新するんだ？」

鮮血
「未定です・・・。
ごめんなさい！」

ヴィレイサー
「まぁ、次回もお楽しみにしてください。」

鮮血
「それでは～。」

第2話　「出会いと再会」（前書き）

鮮血
「なんと、早くも2話目を投稿です！」

ヴィレイサー
「何故だ？」

鮮血
「色々とほったらかして・・・。」

ヴィレイサー
「まさかとは思うが、課題も？」

鮮血
「・・・。」

ヴィレイサー
「オイ・・・（汗）」

鮮血
「それでは、第2話をどうぞ！」

ヴィレイサー
「面白くなるの、まだまだ先ですがね。」

第2話　「出会いと再会」

ヴィレイサーはなのはと再会し、部隊長の部屋へと通される。

「はやてちゃん、入るよ？」

「うん、ええよ。」

なのはの確認に、すぐにはやては答えた。

「ん？
もしかしてそっちは……ヴィレくん！？」

「久しいな、はやて。」

ヴィレイサーの姿を見て驚いたはやては、椅子から立ち上がり、駆け寄ってきた。

「いや～、2年ぶりやな。
今までどうしてたん？」

「それは、フェイトちゃんが来たら話そうよ。
バラバラだと、ヴィレくんも大変だろうし。」

「話すのも面倒だがな。」

「そういう事言わないの。」

第２話　「出会いと再会」

やがてフェイトも部隊長室に来たので、これまでの事を話す。

「以前の大戦の後、俺は１度家族の所に戻ったんだ。」

「家族って言うと……地球の方の？」

「いや、ミッドのだ。
なのは、お前の部隊に所属しているスバルは俺の妹にあたるんだ。
」

「妹さん！？」

「あぁ。
俺を助け出してくれた部隊に、スバルの母親がいて、
俺はその人の家族に加わったんだ。」

「へぇ～。」

「で、そこに挨拶をした後は、レーベの復興を手伝っていた。
それ以降は傭兵としてレーベから派遣されて、各地を転々としていたんだ。」

「それはまた、お疲れさんやな。」

「ねぇ、よかったら今からでも六課に入らない？」

「いきなり何言ってんだ？
前にも言った通り、俺に軍隊は合わない。」

「そんなぁ～。」

なのはは残念なのか、間延びした声を出す。

「そうだ。
じゃあ、ヴィレイサーを傭兵としてここで雇うのはどう？」

「なるほど。
それはええ考えやな。」

「まぁ、それなら俺にも異論は無い。」

静かにそう答え、はやてが出した契約書に記入していく。

「ところで、エクシーガ達は？」

フェイトの問いに、ペンを置いてから、ヴィレイサーは答える。

「エクシーガとヴァンガードはレーベの復興に尽力し、
リュウビとデュアリスはレーベの傾いた情勢を立て直していたよ。

時々連絡があるが、ここ最近は無いな。

どうやらレーベが落ち着いたから、４人でどこかに場所を移したんだろう。」

「そっかぁ。
４人にも久しぶりに会いたかったのになぁ。」

「で、俺はこれからどう過ごせばいいんだ？」

「えっと、とりあえずヴィレくんの部屋に案内するわ。
フェイトちゃん、エリオと同室で平気やろうか？」

「大丈夫だと思うよ。」

「ほんなら行こうか。」

◆◇◆◇◆

「ここが、ヴィレくんの部屋やよ。」

「随分と見事な所だな。」

そこへ、訓練を終えた新人の４人がやってきた。

「ヴィレ兄！」

「よう、スバル。　ティアナも。」

「お疲れ様です、ヴィレイサーさん。」

ティアナは礼儀正しく敬礼をする。

そんな彼女の後ろを歩いていた少年と少女が横から顔を出す。

「エリオ、キャロ、この人はヴィレイサーさん。
傭兵として、私達の部隊に入ってくれたから、挨拶してね。」

「「はい！」」

フェイトの優しい声に、２人は元気よく返す。

「エリオ・モンディアルです。
よろしくお願いします。」

赤い髪の少年――――エリオがしっかりとした声でヴィレイサーに挨拶をする。

「キャロ・ル・ルシエと言います。
こっちは、飛竜のフリードリヒです。」

「キュクー。」

桃色の髪をした少女と、懐いている飛竜――――キャロとフリードも元気よく挨拶する。

「ヴィレイサー・セウリオンだ。　よろしく。
さすがにフェイトが母親だけあって、しっかりとした子達だな。」

「元々だよ。」

「で、エリオ。
ヴィレくんの部屋、エリオと同室で大丈夫？」

「はい、もちろん構いません。」

「それじゃあ、私達は仕事があるから、案内をお願いね。」

「はい。」

フェイトとなのははエリオに任せ、仕事へと戻って行った。

「それじゃあ、ご案内します。」

「あぁ、頼む。」

エリオが先頭を歩いていき、ヴィレイサーはそれについていく。

「ここが、僕とヴィレイサーさんの部屋です。」

「ありがとう。」

「ヴィレ兄、後で私達の部屋にも来てね？」

「場所は？」

「あ、そっか。
じゃあ、私がヴィレ兄を案内するよ。」

「わかった。
じゃあ、荷物を置いたらすぐに行く。」

「は～い。」

嬉しいのか、スバルは笑みを浮かべてそれに答えた。

◆◇◆◇◆

「お久しぶりですね、ヴィレイサーさん。」

「そうだな、エリオ。」

ヴィレイサーは部屋に入り、エリオに言われる。

「フェイトからお前の事を紹介されて、色々と話したのが……。」

「2年前ですね。」

ヴィレイサーの代わりにエリオが答えた。

「そうだったな。
丁度、エクシーガとの戦いが終わって1ヵ月ほどだったな。」

「部屋の使い方は後ほど。
今は、スバルさんの所へどうぞ。」

「気遣いありがとうな。
すまない、恩に着る。」

荷物を邪魔にならない所に置き、出ていく。

「待たせたな。」

「大丈夫だよ。
じゃあ行こう?」

「あぁ。」

◆◇◆◇◆

「それにしても、お墓参りの時に会えなかったのは残念だったなぁ……。」

「すまないな。
どうしてもレーベの方を優先したかったんだ。」

「仲間思いなのもいいけど、家族の方も気遣ってよね。」

「あぁ……それはギンガに耳に胼胝ができるほど言われたよ。」

「ギン姉、心配性だからね。」

「それは家族皆そうだろ？
俺達は同じ遺伝子を持っている兄妹なんだからな。」

「そうだね。」

「で、お前の部屋は？
部屋に案内してくれるんだろ。」

「は～い。」

◆◇◆◇◆

1つの扉の前に到着し、ここが自分の部屋だと、スバルは言う。

「ティア～、ただいま～。」

「おかえり、スバル。」

「スバルさん、おかえりなさい。」

中に居るティアナとキャロがスバルを出迎え、ヴィレイサーを招く。

◆◇◆◇◆

しばし談笑してから、部屋を出て、適当に隊舎内をふらつく。

「ヴィレイサー。」

背後から声をかけられ、振り返ると、そこにはフェイトがいた。

「よう。　どうした?」

「別に用は無いんだけど、迷子にならないか気になったから。」

「なるかよ。

迷ったら窓から出て入り口に飛んで行けばいいし。」

「アハハ………。」

ヴィレイサーの提案に、フェイトは苦笑した。

「まぁいい。
お前、暇なら案内してくれないか？」

「うん、いいよ。
じゃあ行こうか。」

先に歩きだしたフェイトの後を、離れ過ぎない歩調でついていく。

「それにしても、ヴィレイサーは2年前と変わらないね。
髪が伸びたぐらいだし。」

「最終決戦でエクシーガにバッサリと切られて以降、ほっといたんだけど、
中々あの頃ほどの長さには戻らねぇな。
だが、お前は少し変わったな。」

「そ、そうかな？
あんまり変わってないと思うけど………。」

ヴィレイサーに言われ、フェイトは首を傾げる。

「自分じゃあ気付かないもんだ。
いい女になったと思うぜ、フェイト。」

「あ、ありがとう………／／／／／／／／／／」

「別に他意は無いからな。」

ヴィレイサーの言葉に、フェイトは高揚したが、次の言葉に、ションボリとした。

「そ、それじゃあ、次は訓練場に行こう。」

「そうだな。」

◆◇◆◇◆

「ここが訓練場だよ。」

「そうは言っても、何も無いな。」

「見てればわかりますよ。」

そう言ったのは、眼鏡をかけた、長い茶髪の女性だった。

「あ、ヴィレイサー、こちらロングアーチのシャーリー。
私の副官でもあるの。」

「初めまして。
お噂はなのはさん達から聞いてますよ。」

「どんな噂を流しているんだ、アイツらは……。」

「そんな困った事じゃありませんよ。
ただ戦闘は強い。　それだけですよ。」

「ならいいがな。」

「それじゃあ、訓練場を展開しますね。」

シャーリーは傍にあったパネルを操作する。

すると、ビルが立ち並んだ訓練場に早変わりした。

「これはまた、見事だな。」

ヴィレイサーは簡潔にそれだけ言う。

「ところで、これから何をするんだ?」

「実は、シグナム副隊長が模擬戦をしたいと、先程から……。」

シャーリーが一点を指しながら言う。

「模擬戦好きなのは2年経っても相変わらずか……。」

嘆息し、シグナムが待つ所まで歩いていく。

◆◇◆◇◆

「久しいな、シグナム。」
「そうだな、ヴィレイサー。」

◆◇◆◇◆

「ねぇ、スバル。
ヴィレイサーさんってどれくらい強いの？」
「さぁ？
私も詳しい事はよく知らないけど……。
以前所属していた部隊では、よく母さん達に厳しい訓練をさせられてたらしいよ。」
「ふーん。」

ヴィレイサーとシグナムが模擬戦を行うと聞き、スバル達も見物しに来た。

◆◇◆◇◆

「さぁ、お前の実力が変わってないか、私が見定めてやろう。」

レヴァンティンを抜き放ち、シグナムは言葉に楽しみを滲ませながら言った。

「低下していないかどうか心配だから助かるよ。
遠慮せずに全力で来いよ。」

「もちろんだ。」

ヴィレイサーもエターナルを抜き、構える。

互いの刃が光を反射させ、戦いがもう間もなく始まろうとしていた。

第2話　「出会いと再会」　了

第2話　「出会いと再会」（後書き）

鮮血
「フェイトにいい女って言っておきながら、他意は無い、ですか。」

ヴィレイサー
「なんだよ？」

鮮血
「いや、別に。
本当に意識して無いの？」

ヴィレイサー
「まぁ、な・・・。」

鮮血
（歯切れが悪い・・・。）

ヴィレイサー
「で、次回はシグナムとの模擬戦か。
勝てるかねぇ？」

鮮血
「新しいＩＳ、シャドーファントムを使うから、なんとかなる！
かもしれない・・・。」

ヴィレイサー
「無責任だな・・・。」

鮮血
「次回もお楽しみに～。」

第3話　「模擬戦　動き出す者」（前書き）

鮮血
「課題が落ち着いてきたので、なんとか書けました。」

ヴィレイサー
「未だに残ってはいるがな。」

鮮血
「大丈夫。
期限までにはきちんと終わらせるから。」

ヴィレイサー
「せめて期限の1週間前と言ってくれ・・・。」

鮮血
「今回はシグナムとの模擬戦です。
そして、影で動き出す人物とは？
それでは第3話をどうぞ。」

第3話　「模擬戦　動き出す者」

「デヤアアアアアア！！！！」

「ハアアアアアア！！！！」

ヴィレイサーとシグナムが雄叫びをあげて、刃をぶつけあう。

その度に火花が散る。

「レヴァンティン！」

［Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ．］

一旦距離を取り、薬莢が射出される。

「紫電……。」

レヴァンティンの刀身が炎に包まれ、シグナムがヴィレイサーに肉薄する。

「……一閃！」

「クッ！」

それを紙一重でかわし、シグナムの腹に蹴りをいれる。

「グッ！？

だが……！」

負けじとシグナムもレヴァンティンを横に振るう。

［Ｐｒｉｓｍ　Ｓｈｉｅｌｄ．］

だが、エターナルが発生させた見えない障壁により、それは阻まれた。

それを音だけで確認してから、ヴィレイサーは一気に距離を取った。

「はぁー、どっちも素早い戦闘ね。」

ティアナが感嘆の息をもらす。

エリオ達も、ヴィレイサーとシグナムの戦闘に、目を見張っていた。

しかし、途中から見ていたヴィータは大して動揺をしていなかった。

最早見慣れているようなものだ。

今更、ちょっとやそっとでは驚かなくなっていた。

◆◇◆◇◆

「エターナル、カートリッジセレクト！」

［Ｓｅｌｅｃｔ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

シグナムから距離を取ったヴィレイサーは、太刀を鞘に戻し、命ずる。

［Ｉｍｐａｃｔ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．］

「衝撃」の名を冠した薬莢が射出され、迫りくるシグナムに向けて、

鞘に戻したエターナルを一気に抜き放つ。

「風迅衝破(ふうじんしょうは)！」

「クッ！？」

風の衝撃波で、シグナムは吹き飛ばされた。

体勢を崩したのを逃さず、ヴィレイサーはすかさず肉薄した。

「ハアアアアア！！！」

振り上げた太刀から、再びカートリッジが射出された。

「チッ！」

鞘を空間から出し、それを受け止める。

「ハアァ！」

シグナムもすぐに反撃に転じたが、ヴィレイサーも同様に鞘で刃を止める。

そして、どちらともなく飛び退く。

しかし、飛び退いた瞬間に、レヴァンティンがシュランゲフォルムになった。

「行け！」

放たれた連結刃はヴィレイサーの足を捕まえた。

「しまっ……！」

シグナムはそのままヴィレイサーをビルに叩きつけようとする。

「うおっ！？」

ビルに叩きつけられる直前で、レヴァンティンはヴィレイサーの足を放した。

そして、ヴィレイサーはビルに突っ込まれた。

「この程度か、ヴィレイサー？」

土煙の中に、シグナムは問いかける。

「シグナムの奴、本気でやりやがって……。」

［それが彼女ですよ。］

「わかってはいるが、な！」

大きな音を立て、埋まった身体を瓦礫から脱する。

「モード３―ギア１！」

［Ｓｃｉｓｓｏｒ　Ｍｏｄｅ．］

右手に開いた状態の鋏状のを装備し、シグナムの所へ一直線に突っ

込んでいく。

「レヴァンティン！」

刃を煌かせ、シグナムも太刀打ちする。

ヴィレイサーはそれを魔法陣風のシールドで受け流す。

そして、右手の鋏をシグナムに突き立てる。

「閉じろ！」

「Ｃｌｏｓｅ．」

しかし、鋏が閉じるよりも一歩早く、シグナムは離脱する。

［Ｓｃｈｌａｇｅ　Ｆｏｒｍ．］

連結刃が閉じた鋏を縛るように捕らえる。

「それでは開けまい！」

「お前とてまともに戦えんだろうが。」

拮抗する2人のデバイスは、互いの主を勝たせる為に、次の手を模索する。

「本当にそう思うのなら、貴様の負けだぞ、ヴィレイサー。」

カートリッジを射出し、炎熱加速を行う。

「そのまま劫火にのまれろ！
緋炎焦火（ひえんしょうか）！」

連結刃を伝って、シグナムの炎がヴィレイサーに迫る。

「チィッ！
エレメンタル・カートリッジ、フリジッド！」

［Ｅｌｅｍｅｎｔａｌ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．
Ｖｅｒ：Ｆｒｉｇｉｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

『寒冷』の名を冠したカートリッジを使い、シグナムの炎と戦わせる。

「甘いな。
ヴァンガードほどの氷でなければ止められんぞ、ヴィレイサー！」

「わかってるさ。
少しぐらい止められればそれでいいんだよ。
ＩＳ、シャドーファントム！」

［Ｓｈａｄｏｗ　Ｐｈａｎｔｏｍ．］

ヴィレイサーの影が揺らぎ、もう1人のヴィレイサーを模った。

「何！？」

そのシャドーは、エターナルを弓型にしており、既に魔力を収束し終えていた。

「やれ、シャドー。」

「Ａｓｔｒａｌ　Ｒａｉｎ.」

エターナルが制御を取っているのか、言葉は片言だった。

「しまっ！」

それはシグナムに直撃した。

連結刃はそれによって解かれた。

ヴィレイサーの勝ちだ。

◆◇◆◇◆

「新たな技での勝利だな。
シャドーファントムの制御、どうだ？」

「８０％ですね。
ただ、反応速度がいまいちですね。」

「そうだな。」

「ヴィレ兄、勝ったね！」

「お疲れ様です、ヴィレイサーさん。」
「シグナム副隊長もお疲れ様です。」
「あぁ、ありがとう、エリオ。」
「ヴィレイサー、次は私とやろう、私と！」
模擬戦を終えた後、フェイトはヴィレイサーにそう言う。
「さすがに少しぐらい休ませてくれ。」
「でも、私はこの後仕事あるから今の内に……。」
「我儘言うな、フェイト。
それとも、俺が不十分なままで戦いたいのか？」
「ん、そう言われると……。」
「しかし、その方がお前はスリルが増すぞ。」
「そんなスリル味わいたくねぇよ。」
「あ、ヴィレイサーさん、ここ切ってますよ。」
ティアナに指摘され、ヴィレイサーは自分の腕を見る。
「大した傷じゃあ無い。」

「ダメです！」

ヴィレイサーの意見に、シャマルが断固反対する。

「ちゃんと治療しないと、黴菌が入って大変なんだから！」

「がなるなよ。
今から医務室に行くよ。」

「なら結構です。」

それを聞いたシャマルはすんなりと引き下がった。

「ヴィレイサー、私との模擬戦は？」

「また今度。
手の空いている時にやってやるよ。」

立ち上がり、医務室へと歩いていく。

「あの、ヴィレイサーさん、私が治療しますけど……。」

「いや。
これくらいなら別にいい。
その気持ちだけで充分だ。」

キャロの提案を断り、ティアナが付き添いとして一緒に医務室へと向かった。

「ティアナ、悪いけどヴィレイサーの治療をお願い。

これぐらいならあなたでもできるでしょ？」

「はい。」

「お前はどこに行くんだ、シャマル？」

「はやてちゃんの所。
今さっき呼ばれちゃってね。」

それだけ答えてから、シャマルはヴィレイサーをティアナに任せて出ていった。

「わざわざすまないな。」

「お気になさらずに。」

テキパキとヴィレイサーの怪我に合わせた対処をしていく。

「ヴィレイサーさんって、2年前は何をしていたんですか？」

「レーベ所属の扱いとして創世の書事件に関わっていたよ。」

「もしかして、最後の決戦を行ったのって……。」

「俺だ。」

「スゴイですね。
私は、凡人で……。」

「そんな事無いと思うがな。

ただの凡人を、なのはが拾うとは思えんがな。」

「そうですね。
私、以前自分の道に迷って、なのはさんに怒られちゃったんです。
でも、だからこそ今の自分を見つけられる事ができたんです。」

「そうなのか。
けどあいつの事だ。
どうせ不器用な事でしかお前を導けなかっただろ。」

「アハハ……。
確かにそういう感じでしたけど、別に良かったと思います。
その所為ですれ違いはありましたけど、より理解できたって言うか……。」

「まぁ、お前がそう言うのなら構わないがな。」

治療を終えたので、ヴィレイサーは立ち上がる。

「ありがとうな、ティアナ。」

「いえ。」

◆◇◆◇◆

その頃、木が生い茂った森林で、フードを被った2人の前に、ニク

スが現れた。

「騎士ゼスト……ですか？」

「そうだが、貴様は？」

「ニクスと言います。
少々お聞きしたい事がありまして。」

「断る、と言ったら？」

「スカリエッティに情報収集させます。」

「ドクターの事、知ってるの？」

ゼストの隣にいた、儚げな少女が問う。

「えぇ。
一応、仲間として行動しています。」

「いきなり現れた奴の事なんか、信用できるか！」

そう言ったのは、少女の肩にいた融合騎だ。

「もちろん信用する、しないはあなた方の自由ですから。
騎士ゼスト、ヴィレイサー・セウリオンについてお聞きしたいのです。」

「ヴィレイサー、だと？」

「彼の遺伝子情報、あなたは記憶してますか？」

ニクスは、冷徹な笑みを浮かべながら、ゼストに問いかけた。

第３話　「模擬戦　動き出す者」　了

第3話　「模擬戦　動き出す者」（後書き）

鮮血
「ニクスが動き出しました！」

ヴィレイサー
「何をたくらんでやがる？」

鮮血
「それは不明だよ。
僕にもわからないから。」

ヴィレイサー
「だろうな。」

鮮血
「次回は、ヴィヴィオが現れる話ですが、
そちらは一切書かずに、ヴィレイサーの任務の話を書きます。」

ヴィレイサー
「俺の任務？」

鮮血
「そう。
1話で登録しておいた魔力の反応があったんだよ。」

ヴィレイサー
「つまりは、ニクス達のグループ。」

鮮血
「うん。
次回も楽しみに～。」

第４話　「七星　風と雨」（前書き）

鮮血
「今回はいよいよ七星との対決です！」

ヴィレイサー
「風と雨？」

鮮血
「そう。
　その名を冠してる敵が相手だよ。」

ヴィレイサー
「けどお前、バリアジャケットとか武装とかの説明が下手だよな。」

鮮血
「バリアジャケットは無理かな。
　僕、洋服を表す言葉をあまり知らないし。」

ヴィレイサー
「まぁ、しょうがないか。」

鮮血
「えっと、もし可能ならばＶＳ　ＡＳＴＲＡＹの機体を見てもらえると、
　少しは戦闘が頭に入りやすいと思います。」

ヴィレイサー
「使えない屑作者ですみません。」

鮮血

「ごめんなさい！」

第４話　「七星　風と雨」

ヴィレイサーが機動六課に傭兵として雇われてから数日後。
フォワード陣のテスト結果が今朝発表された。

「全員合格だよ。」

「「早っ！？」」

なのはの即答に、スバルとティアナは驚く。

「ま、あんだけやったのにダメだったなんて許されねぇけどな。」

ヴィータにそう言われ、スバル達４人は苦笑いを浮かべるしかなかった。

「今回はそれの記念に、この後はお休みにします。」

「やったー！」

◆◇◆◇◆

「アイツらはうまくやってるみたいだな。」

ヴィレイサーは外で仲良く話しあっている4人を窓から見下ろしながら、はやてに言う。

「せやな。
ほんなら、今日の仕事の事なんやけど。」

「あぁ。」

「最近、この森林地帯で魔力反応があるんや。
しかも、以前話した例の7人の内の1人や。」

「なるほど。
それの調査という訳か。」

「うん。
頼むで、ヴィレくん。」

「あいよ。」

軽く返事をして部隊長室を出ていく。

◆◇◆◇◆

「あ、ヴィレ兄は今から仕事？」

「あぁ。」

「そっかぁ……。
せっかくお休みを貰ったから一緒に出掛けようと思ったのに。」

「ごめんな。
でも、今度必ず一緒に街に行こう。」

「本当？」

「あぁ、約束だ。」

「うん！」

スバルが笑顔になったのを確認してから、ヴィレイサーは目的地へと飛翔する。

「ポイント、頭に叩きこんであるよな、エターナル？」

［もちろんです。］

「そうか。
それじゃあ詳細な案内を頼む。」

［了解です。］

（例の７人の内の１人、か……。）

ヴィレイサーは移動しながら、前回湖畔であった事を思い出す。

ニクス、ヘイルは誰だか会話でわかったが、他はわかっていない。

（あのニクスと言ったあの少年、彼の力は底知れない感じだな。
それにあの感じは……。）

そこまで考えて、それを止めるように首を振る。

（そんなはずはない。
もしそうだとすれば、俺はいったい……。）

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第４話　「七星　風と雨」

所変わって、スカリエッティのラボ。

「ふむ。
逃げ出したアレの行方はまだ掴めないのか。」

「はい。
申し訳ありません、ドクター。」

「いずれその所在は掴めるだろう。」

「娘さん方はどうですか、ドクター？」

スカリエッティの背後から現れたのはニクスだった。

「やぁ君か。
何、問題無いさ。」

「そうですか。
ところで、ヴィレイサーの方がヴァンに近づいてきました。
少し遊ばせてやってもいいですか？」

「構わないよ。
あの作品は既に崩壊が始まっているからね。」

「そうですか。」

それを聞いたニクスはその場を後にした。

◆◇◆◇◆

［ヴァン、今いいかな？］

「ニクス？
何かしら？」

モニターに映し出されたニクスを見ていたのは、
白を基調としたバリアジャケットを着た、若い女性だった。

［今そっちにヴィレイサーが向かってるんだ。
恐らく君を探しているんだろうね。］

「ヴィレイサーが……。」

［殺さずに、だけど君も殺されないように頼むよ。］

「わかったわ。」

通信を終え、ヴァンは周囲を見回す。

「まだ来ないのかしら。」

ヴィレイサーに会えるのが楽しみなのか、ヴァンは笑っていた。

◆◇◆◇◆

「おや、例の探し物、見つかったようだね。」

［ルーテシアお嬢様が近くにいるみたいです。］

「ふむ、協力を頼んでみてくれ。」

［かしこまりました。］

「ニクス、俺も外に出てぇんだけど。」

「ダメだよ、ヘイル。
それに、君には別の仕事をしてもらわなきゃ。」

「あん？」

「ディエチさんのサポートだよ。」

「アイツはもうあれが精一杯だよ。
今の所は、だけどな。」

「そう。
ところでゲイルは？
今朝から見かけて無いんだけど。」

「あいつなら、ルーテシアん所にいるぜ。
なんか、ゼストと仲が良くなっちまったぜ？」

「まぁ、仲が良いのは構わないよ。」

「そうなのかねぇ。」

◆◇◆◇◆

［ルーテシアお嬢様、仕事をお願いしたいのですが。］

「うん、いいよ。」

ウーノからの指示に、ルーテシアは即座に答えた。

［ありがとうございます。］

通信が切れた後、ルーテシアの背後から仮面をつけた男――ゲイルが現れた。

「いいのか、ルーテシア。」

「うん。
それに、ガリューもいてくれるから。」

「そうか。
俺も行くべきか？」

「大丈夫。
それに、ゲイルはゼストが無理をしないように見ててほしいから。」

「わかった。
気をつけて行けよ？」

「ありがとう。」

◆◇◆◇◆

そして、ヴィレイサーの方にも動きがあった。

「……ッ！　この感じは……。」

前を見据えると、ヴァンがいた。

「ヴィレイサー・セウリオンね？」

「そうだが、お前は？」

「私の名前はヴァン。」

「ヴァン……。
お前を含めた7人は、俺と関係があるのか？」

「さすがに気付いたようね。
けど、私達の事は大して知らないんじゃない？」

「あぁ。
情報なんて一切無いからな。」

「なら教えてあげるわ。
私達7人は太古の戦士、『七星』（しちせい）よ。」

「『七星』……。」

「そう。
私達は別に造られた訳じゃないわ。
1人1人が大きな力を持っていた。
それを軍事に転用して、『七星』が結成されたの。

もちろん寿命もあるわ。
だけど、それを許さなかった当時の権力者達が、
永い刻を私達を生きながらえさせるために身体を弄った。」

「光闇の書に封じ込める為か。」

「その通り。
光闇の書を開いた者が、白紙のページに名前を書けば私達は外に出られるって訳。」

「研究員を殺したのは何故だ？」

「足手纏いにしかならなかったからよ。
それに、白紙のページに名前を書き込んでも、制御はできない。

できるのは私達を外の世界に出すだけ。
うるさく命令されるのは御免なのよ。」

「最後に聞きたい事がある。」

「何かしら。」

ヴィレイサーは己の感じていた事を確かめる為に、ヴァンに質問をする。

「お前の……。
……いや、“お前達の遺伝子は、俺に組み込まれている”のか？」

「……正解。」

そう言いながら笑ったヴァンは、銃の引き金を引く。

「チッ！
戦うしかないのか、俺達は！」

「フフッ。
わかり合えるとは思えないわ。
私達が今共に行動をしている相手を知ったらね。」

「スカリエッティか！？」

「お見事。」

ヴァンに太刀を振るうが、それは素早い彼女にあっさりとかわされた。

「クッ！」

反撃に備えてシールドを展開するが、そこからの攻撃は無かった。

「何？
　ッ！　真上か！」

直感し、すぐにその場を移動する。

先程までいた箇所には、２本の翡翠色の砲撃が走った。

その砲撃が来た方を見ると、太陽があった。

「目くらましか！？」

「遅い！」

目を眇めて視線を逸らした時、背後からヴァンの声が聞こえた。

風を切る音が響いたが、ヴィレイサーはそれを紙一重でかわす。

「よくよけられたわね。」

「強い……。」

以前の創世の書事件の時、多数対１でも生き残ってきたが、さすがは七星の１人。

ヴィレイサーも苦戦を強いられるのは当然ともいえる。

「蒼天悠牙斬！」

ヴィレイサーの攻撃を迎え撃つ為、ヴァンはもう1本剣を引き抜き、2刀流にする。

そして、両方の剣に風が纏わりつく。

「風牙天空閃（ふうがてんくうせん）！」

ヴァンの技はヴィレイサーの攻撃を受け止めながらも、風を纏った剣から発せられる鎌鼬により、相手を切り刻んでいく。

「クッ……ウゥ……。」

ヴァンの刃から発せられる鎌鼬に所々を切られて、ヴィレイサーは顔を歪める。

このまま鍔迫り合いを続ければ、明らかに自分が負けるのを確信したヴィレイサーは、
急いでそれを止めて退こうとしたが、それは叶わなかった。

「逃げようとしても無駄よ。
私の剣から出される風で、身動きできないようにしてあるから。」

（くっそ。
奴からの風圧で動けん……。
ここは、シャドーファントムを使うしかないか。）

ＩＳのシャドーファントムを使い、ヴァンの背後に影で模られた自

分を作る。

「Ａｓｔｒａｌ　Ｒａｉｎ.」

数多くの光の矢がヴァンの腕、足を貫いた。

「ガァッ！？
クゥ……。」

ヴァンが怯んだ隙にカートリッジを使い、ジャベリンにする。

「貫け！　光龍穿破（こうりゅうせんは）！」

ジャベリンで模った魔力を思い切り投げる。

完璧に捉えた。

そう思った瞬間、ヴァンの目の前の空間が歪み、１人の男が現れた。

男はすぐさま膝にある剣の柄を引き抜き、魔力刃を発生させる。

「レイニー・デリート（雨による消去）。」

ジャベリンに突如雨が降り、それからは煙が出てきた。

「酸性雨による技の破壊……！？
衝撃波だけ投擲して良かった。」

「危うく私まで消される所でしたね。」

「ヴィレイサー・セウリオンか。」

「レーゲン!?
どうしてここに?」

「お前が危ないからだ。
さて、悪いが退かせてもらうぞ?」

「あぁ、構わない。
俺もこれ以上は命の危険を感じるからな。」

「ありがたい。
お前とは、別の形であっていれば戦友となれたかもしれんな。」

「今からでも遅くないと思うぞ。」

「そんな考えを持っている限り、貴様は我らには勝てん。」

そう言って、背中に背負っているバズーカを地上に向ける。

「撃つのか?」

「麻薬の畑だけだ。」

「知っていたのか、ここの森林区画に麻薬の元となる畑がある事を。」

「我らが主、ニクスはなんでも知っている。」

「ちょっと、レーゲン。

それは言っていいの？」

「問題無かろう。
では、遠慮なく撃たせてもらうぞ。」

バズーカからカートリッジを射出する。

「消し飛べ。
ゲイボルグ！」

バズーカから撃ち出された弾の速さは、思いの外速かった。
それは着弾し、周囲を焦土と化した。
威力、弾速、どちらも申し分なかった。

「そうだ。
ヴィレイサーよ、貴様の仲間が今危うい状況にあるぞ。」

「なんだと！？」

「急いだ方がいいかもね。」

レーゲンとヴァンは笑みを浮かべ、空間を歪ませて消えた。

「チッ！
急ぐぞ、エターナル。」

［Ｙｅｓ，Ｌｅａｄｅｒ．］

第４話　「七星　風と雨」　了

第4話　「七星　風と雨」（後書き）

鮮血
「ヴィレイサー弱いねぇ・・・。」

ヴィレイサー
「ヴァンが強過ぎるんじゃないか！？」

鮮血
「そうかも・・・。」

ヴィレイサー
「オイオイ・・・。」

◆

鮮血
「レーゲンとヴァン、逃がしてよかったの？」

ヴィレイサー
「さすがに無理に引きとめても、俺がやられてただけだからな。」

鮮血
「ならいいんだけど。」

ヴィレイサー
「しかし、まさか七星の遺伝子が俺にも組み込まれているとはなぁ・・・。」

鮮血
「確かに。
これには僕も驚いたよ。」

ヴィレイサー
「オイ、作者・・・。」

鮮血
「冗談だよ。
とは言え、あながち冗談でも無いかも。」

ヴィレイサー
「どういう事だ?」

鮮血
「実は、ＳｔＳ編を考え始めた当初は七星なんて設定は無かったんだ。」

ヴィレイサー
「じゃあ、敵は誰だったんだ?」

鮮血
「君の中学生時代の知り合い。」

ヴィレイサー
「マジかよ・・・。」

鮮血
「劇場版名〇偵コナンの、コクーンマシーン。
あれを使って、なのはの世界に来たんだ。
で、それを君が殺していくっていう設定だった。」

ヴィレイサー
「こっちでは死なずに、ゲームオーバーっていう形になる訳か。」

鮮血
「そう言う事。
さて、今回はこれで終わりです。」

ヴィレイサー
「次回は？」

鮮血
「ヴィヴィオが目覚める時の話。
ちなみに、君が『パパ』と呼ばれるイベントは、無い！」

ヴィレイサー
「おっしゃ！」

鮮血
「やっぱり嬉しい？」

ヴィレイサー
「そりゃあそうさ。
２０歳で『父』なんて呼ばれるなんて御免だからな。」

なのは・フェイト
「19歳で『母』と呼ばれる私達は!?」

ヴィレイサー
「お前らはいいんだよ。
そういう感じの包容感があるんだから。」

鮮血
「適当だね・・・。」

ヴィレイサー
「次回、第5話　「七星　雹と蜃気楼」もお楽しみに。」

鮮血
「あ、ヴァンとレーゲンの設定も、キャラ設定に載せました。」

第5話　「七星　雹と蜃気楼」（前書き）

鮮血
「さて、なんとかレポートが昨日終わりましたので、
書きあげる事が出来ました！」

ヴィレイサー
「お疲れさん。」

鮮血
「今回は七星の誰とも戦いはしませんがね。」

ヴィレイサー
「それでは、第5話をどうぞ。」

第5話　「七星　雹と蜃気楼」

ヴィレイサーがなのは達と合流した時には、事件は収束していた。

レリックの回収を行っていたフォワード陣とギンガ側では、

エリオが負傷したぐらいで、他に大きな傷をつくった者はいなかった。

しかし、その事件で保護した少女が気がかりになった。

すぐに聖王教会の病院に預け、検査を行った。

結果がでるまでは時間がかかるとの事だった。

そして、ヴィレイサーもヴァンとレーゲンの事をはやて達隊長陣に報告する。

「それじゃあ、ヴィレくんの遺伝子の大元になった人達なの？」

「あぁ。
少なくとも例の7人はそうだろうな。
他にも何人かいるとスカリエッティから聞かされてはいるが、
それが明確に記されている書類の類は残っていないんだ。」

「そっか。」

「それで、あっちの子供の方はまだ目を覚まさないのか？」

「うん。
今はぐっすり眠ってる。」

「でも、本当にただの女の子としか思えないよ。
寝言でママって言ってたし。」

「一時の感情に流されるな。」

「そんな……。」

「ま、優しいのはお前達のいいところではあるがな。
それが甘さにならなければいいだけだ。」
報告を終えたと判断したヴィレイサーは部屋を出て行った。
自室に戻る途中で、スバルと出くわした。
「ヴィレ兄、少し話があるんだけど……。」
「あぁ、なんだ？」
人気の少ない所に到着してからスバルは口を開く。
「実は、こないだの事件で戦闘機人が出てきたの。」
「なに？」
ヴィレイサーは眉を顰めた。
（母さん達が破壊した施設で、ほぼ壊滅に追いやったと思っていたが……。
やはりまだ造っていやがったか……。）
「どうしよう……私と、ギン姉……。」
「どうもこうも、お前はお前だ。
それ以外の何者でもないだろ。」
「ヴィレ兄……。」

「今のお前には、必ず傍に仲間がいる。
それを忘れずに、そいつらと向き合うんだろ？」

「えへへ……。
やっぱりヴィレ兄はなんでもわかるんだね。」

「兄妹だからな、俺達は。」

「うん。
ありがとう、元気出たよ。」

「そうか。」

「じゃあね。」

「あぁ。」

走り去るスバルの後姿を見ながら、ヴィレイサーは溜息をついた。

「……まったく。
ちゃんと元気を取り戻してもいないのに、俺に気を遣うなよ、スバル……。
ここは、ティアナに頼むとするか。」

ヴィレイサーはパネルを操作して、ティアナに連絡した。

◆◇◆◇◆

「例の子供が目を覚ました？」

数日後、ヴィレイサーははやてからそんな話を聞かされた。

「うん。
ほんで、今シグナムとなのはちゃんがその様子を見に行って、帰ってきてる頃や。」

「それで、騎士カリムとお話しがあるから、なのはも一緒にと思って。」

パネルを操作してなのはに繋げると、突如女の子の泣いている声が聞こえた。

「ん？」

「なんだ？」

3人でモニターを見てみると、例の女の子がなのはにくっついて泣いていた。

「とりあえず、行ってみようか。」

「せやな。」

「やれやれ。」

◆◇◆◇◆

「お前ら、どうした？」

ヴィレイサーがはやてとフェイトより先行してフォワード陣に問いかける。

「それが……。」

「この後なのはさんが仕事だから、ヴィヴィオの相手を頼まれたんですけど……。」

「ヴィヴィオ当人がなのはさんにすっかり懐いちゃったみたいで……。」

「なにやってんだか……。
フェイト、お前がこれを処理しておけ。」

「え？　わ、私！？」

「子供の扱いには手慣れているはずだ。
違うか？」

「わ、わかった……。」

いまいち納得していないようだったが、フェイトはなのはとヴィヴ

ィオの所に行く。

「はやて、俺は先にカリムの所に行っている。
シャッハと模擬戦の約束もしてるからな。」

「うん。
せやけど、シャッハをこてんぱんにせんといてな？」

「できる訳ないだろ。」

苦笑いを浮かべて先に六課を出て行った。

「ちょっと、ヴィレくん！」

背後でなのはが呼んでいたが、ヴィレイサーは無視して行った。

◆◇◆◇◆

「それでは、なのはさん達を置いてきてしまったのですか？」

シャッハがヴィンデルシャフトを振るいながらヴィレイサーに問う。

「あぁ。
時間の無駄としか思えなかったからな。」

それをかわして懐に迫るが、それをもう一方のトンファーで受け止

められる。

「それはまた……。
何を言われるかわかりませんよ！」

ヴィレイサーを押し返し、宙返りで更に距離を取ったのを見て、カートリッジを使う。

「ッ！」

一瞬シャッハの姿を見失うが、すぐに着地地点だと判断し、太刀を鞘に戻す。

［Ｄｅｆｅｎｄｅｒ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．
Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

地面に足を着いた刹那、シャッハが目の前に現れた。

「烈風一陣！」

「遮破！」

シャッハの技を既の所で受け止めるが、押しが弱かった為に吹き飛ばされる。

「ウオッ！？」

樹に背中を撃ちつけるとも思ったが、体勢を立て直してそれを免れた。

「危ね……。」

［シャッハ、ヴィレイサー、はやて達が来たから戻ってきて。］

「わかりました、騎士カリム。」

「俺は傭兵なんだが……。
立ち会わなければならないのか？」

［お願いできないかしら？］

「わかったよ。」

嘆息して、シャッハと共に行く。

◆◇◆◇◆

「手酷くやられたね、ヴァン。」

「あれからうんと修行したんだから、今度は負けないわよ。」

ニクスに言い返すヴァンだったが、ゲイルがそれを否定する。

「奴は不殺だとは言え、戦場に次など無いのだぞ。」

「そうそう。」

「ゲイル、ネブラ、しょうがないでしょ。」

ゲイルの言葉に賛同したのは、小さい少女だった。

七星の中では最も幼い彼女も、かなりの実力者だ。

「喧嘩してもしょうがないだろ。」

修行を終えたレーゲンも奥から姿を現す。

「ねぇニクス。
ミラージュとヘイルは？」

「あの2人なら、地上本部が作っている砲台を壊しているよ。」

「えぇ～、あたしも行きたかった。」

「戦場は遊び場じゃない。」

ゲイルに注意され、ネブラは頬を膨らませる。

「わかってるもん！」

「そこで喧嘩しないの。」

「セイン。」

「なんか用？」

「つれないなぁ、レーゲンは。
ただのおしゃべりだよ。」

「ネブラの遊び相手を買って出てくれた事、感謝するぞ。」

「いやいや、そうじゃないから！」

「違うの？」

「イエ、ソウデス。」

「ありがとうね、セイン。」

「片言になってるけどね。」

「ニクス、ちょっといいかね？」

「あぁドクター。
何か？」

「ノーヴェとウェンディが近いうちに起動する。
２人の相手を誰かに頼めるかね？」

「そうですね……。
レーゲン、いいかい？」

「構わないぜ。」

「では彼が。」

「わかったよ。
ゲイル、ヴァン、トーレが模擬戦をしたいと言っていたよ。」

「またか、アイツは……。」

「ま、楽しいからいいけどね。」

◆◇◆◇◆

「アインヘリアル、補足。」

黒と紫を基調としたバリアジャケットを着たヘイルが、
はるか遠くから一点を見詰めて言った。

それを隣で聞いた男は笑った。

「いつも通り白兵戦は俺がやる。
お前はあの砲台を頼むぞ。」

「了解だ、ミラージュ。」

ミラージュは紫色を主とし、空いた部分に白を加えたバリアジャケットを翻し、
砲台をヘイルに任せて先行する。

「よし。　砲身準備。」

背中に背負っている2種類の砲身を脇の下から通して前面に展開する。

片方は散弾砲、もう片方は収束砲のようだ。

その2つを連結し、長距離用の収束砲にする。

「ターゲットに動きなし。
連射準備。」

的確に自分のする事を口にしていく。

「3発連射準備完了。
角度問題無し。ＩＳ、ヘイル・シューティング（雹の銃撃）。」

カートリッジを1発だけ使い、魔力チャージを即座に終わらせる。

「ファーストシューティング、発射。」

引き金を躊躇無く引く。

砲身から発射された黒く巨大な収束砲が砲台を完璧に捉え、爆散する。

「セカンド・シューティング。」

大きな爆発音をあげている箇所から少し砲身をずらし、次の地点を撃ち抜く。

その箇所では、何事かと慌てふためいていた魔導師達がいたが、ヘイルの砲撃により、跡形もなく消え去った。

「サード・シューティング。」

最後には空中から現れた魔導師を撃ち抜く。

彼らは悲鳴をあげる事すら叶わずに消された。

「アハハハハハ！！！」

狂喜に包まれ、ヘイルは笑っていた。

◆◇◆◇◆

一方、白兵戦をしかけたミラージュは退屈そうに欠伸をしていた。

「んだよ、もう終わりかよ……。」

彼の周囲には惨殺された者の姿があった。

全員鋭い剣で斬られたのだと一目でわかった。

「『グラディエーター』になるまでもねぇとはな。」

『グラディエーター』とは、白兵戦を有利に進める為の変身能力といった所だ。

「少しは楽しませてもらえると思ったのによぉ。」
愚痴るミラージュの所へ、ヘイルが舞い降りてきた。
「帰るぜ、ミラージュ。」
「つまんねぇなぁ……。」
「ニクスに相談でもしてみたらどうだ？」
「許可してくれるかねぇ？
折角だからヴィレイサーの相手をしたいぜ。」
「じゃあニクスが魔力感知してくれるのを祈ろうや。」
「そうだな。」
死体には一切目もくれず、２人は転移魔法でその場を去った。

第５話　「七星　雹と蜃気楼」　了

第5話　「七星　雹と蜃気楼」（後書き）

鮮血
「ヴィレイサー、スバルの事ちゃんと見てるね。」

ヴィレイサー
「さすがに、今の状態だと俺よりティアナの方が
アイツを慰めやすいのは明確だからな。
長く離れていたし・・・。」

鮮血
「まったく・・・。
妹には優しいのに、何でなのは達を置いて行くのさ?」

ヴィレイサー
「面倒だったから。」

鮮血
「君らしいね・・・。」

ヴィレイサー
「それより、ヘイルとミラージュは何故アインヘリアルを?」

鮮血
「これは、僕の勝手な設定なんだけど、
既に数個のアインヘリアルが完成状態にあったから、
それを先に潰しておくためにって事で。」

ヴィレイサー

「なるほど。
ゆりかご浮上時に使ったアインヘリアルは、
既に今、完成しつつある状態にあったのか。」

鮮血
「そう。
だけど、それを先に完成させる訳にもいかないから、
あの2人に破壊してもらったんだ。」

ヴィレイサー
「そういう事か。
で、次回は？」

鮮血
「次回はいよいよ、七星との戦闘だよ！
しかも、ヴィレイサーＶＳミラージュ。」

ヴィレイサー
「奴か・・・。
以前のヴァン戦の事を考えると、勝利するのは難しいな。」

鮮血
「まぁ、結果は次回わかるわけだけど・・・。」

ヴィレイサー
「歯切れが悪いな？」

鮮血
「気にしないで。
それではこれで。

感想、是非お願いします！」

第6話　「七星とのぶつかり合い、再び」（前書き）

鮮血
「さて、本日も更新です！」

ティアナ
「ストックが無くなったけどね。」

鮮血
「言わないで・・・。
と言うか、何で君が？」

ティアナ
「あんたが呼んだんでしょうが！」

鮮血
「そうでした。
今回はヴィレイサーは呼ばないです。」

ティアナ
「何でよ？」

鮮血
「読めばわかります。」

ティアナ
「ふーん？」

鮮血

「今回は、七星との戦闘です。
そして、この小説のタグにもある、『主人公、ボロボロ』もあります。」

ティアナ
「ちょっ！？
それって・・・。」

鮮血
「それでは第６話、どうぞ。」

第6話　「七星とのぶつかり合い、再び」

「なのは、ヴィヴィオの様子はどうだ？」

早朝訓練を終えたフォワード陣に目を向けたまま、ヴィレイサーはなのはに訊ねる。

「とってもいい子にしてるよ。」

なのはは即座に笑顔でそう答える。

「ならいい。」

それを聞いたヴィレイサーは、眉一つ動かさずに短く答えた。

「まだ懸念してるの？」

「すまないな。
だが、好感は持てるようだな。
エリオからよくヴィヴィオの話を聞かされる。」

「そっか。
あの2人、兄妹みたいだしね。」

普段から仲が良く、2人は傍から見ても兄妹にしか見えなかった。

「そうだな。
さて、俺は任務があるからこれで。」

「ふぇ？
誰も連れてかないの？」

「ザフィーラと俺だけでいいだろ。」

「でも、フェイトちゃんもついていくみたいだよ？」

「聞いて無いんだが……。
第一、これから行くのは、報告した七星の任務だ。
さすがに彼女を連れて行くのは危険だろ。」

「そうだけど、ヴィレくんなら平気でしょ？」

「過信する訳にはいかない。」

「だけど、フェイトちゃんならではの事にも気付くかもしれないよ？
彼女の洞察力を褒めたのは、ヴィレくんだよ。」

「わかったよ。
必ず守ってみせる。」

「うん、気を付けてね。」

「もちろんだ。」

◆◇◆◇◆

「ミラージュ、次の仕事だよ。」

スカリエッティのラボ内で、ニクスに言われて彼の方を振り返る。

「またかよ……。」

「違法施設の破壊だけど、今回は恐らくヴィレイサーが来るよ。
楽しんでおいで。」

冷徹な笑みを浮かべるニクスと同様に、ミラージュも狂喜の笑みを浮かべる。

「了解だ。」

従う以外に自分に道は無いので、さっさと出撃する。

ヴィレイサーと戦うという楽しみに、ミラージュは心躍っていた。

「それじゃあフェイト、準備をして来い。」

「うん。」

フェイトは急いで準備をする為に、自室に戻っていった。

「ヴィレイサー、本当に彼女を連れていくのか？」

そこへザフィーラが狼形態のまま、ヴィレイサーの背中に問いかける。

「致し方なかろう。
彼女のたっての願いだ。

それに、洞察力が極めて高いのは確かだからな。」

「ならばいいのだが……。」

未だに不安を拭いきれてないのか、ザフィーラは歯切れが悪かった。

「もちろん、俺も不安だ。
だからこそ、アイツを死に物狂いで守ってみせるさ。」

「お待たせ。」

準備を終えたフェイトが2人に駆け寄る。

「よし。
気を引き締めて行くぞ。」

「うん！」

「うむ。」

◆◇◆◇◆

「来たか。」

ミラージュは荒野地帯で違法施設を潰した所だったのか、
右手にある太刀には血痕が付着していた。

「七星の……。」

「ヴィレイサー・セウリオン。
俺とサシで戦え。」

太刀をヴィレイサー1人に向け、戦いを申し込む。

「ザフィーラはフェイトと一緒に後方にいろ。
決して前に出るなよ？」

「わかった。」

「気を付けてね。」

そう言って、人間形態のザフィーラとフェイトは離れる。

「ふん、意外と聞きわけがいいな。
我が名はミラージュ！　蜃気楼の名を冠する！」

「ヴィレイサー・セウリオン！
聖なる堕天使、本気で行くぞ！」

互いに走り出し、刃をぶつけ合う。

「エターナル！」

［Ｅｌｅｍｅｎｔａｌ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ　Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．］

「ほう。」

ミラージュはニヤリと笑い、鍔迫り合いの状態から後ろへ飛び退く。

「逃がさん！」

［Ｖｅｒ‥Ｗａｒｒｅｒ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

『水』のカートリッジを使って、太刀を振りかぶる。

「水龍崩瀑破（すいりゅうほうばくは）！」

龍のような水が、ミラージュに迫る。

「甘いな。」

笑みを浮かべたまま、ミラージュはその場からまったく動こうとはしなかった。

攻撃が当たる瞬間、少しだけミラージュの姿が揺れた。

そして、水の龍はミラージュを突き破った。

「何？
まさか！？」

ヴィレイサーが背後を振り返った時、ミラージュが太刀を振り下ろしていた。

「グアアァァァ！？」

振り下ろされた太刀により、左肩を深く切り裂かれた。

「まだまだ！」

痛みに顔を歪めて怯んでるヴィレイサーに、ミラージュは更に剣を

振るう。
体勢を低くして、そのまま太刀を抜刀するように真一文字に一閃する。
「ガハッ！」
腹部を切り裂かれたヴィレイサーはたたらを踏むが、
ミラージュに蹴られて仰向けに倒れる。
「クゥ……。」
息が荒く、意識も朦朧としているようだった。
（マズイ……。）
エターナルもそれをすぐに察知し、オートメディスン（自動治癒）を行う。
応急処置程度なら、デバイスに機能を組み込む事で、それを可能にする。
「我が蜃気楼で作られた姿を見抜けんとはな。
その程度か、ヴィレイサー。
我らが七星の遺伝子を受け継ぐくせに。」
失望の眼差しを、鮮血に染まったヴィレイサーに向ける。
太刀をヴィレイサーの喉元に当てる。
それが今にも喉を貫こうとした時、金の閃光がミラージュの目の前

を走った。

「あん？」

「ウオオオアアアア！！！」

更に、ザフィーラがミラージュを遠ざける為に拳を突き出す。

「チッ！」

それをかわすが、ザフィーラはすぐさま回し蹴りを入れる。

「グオッ！？」

太刀で防いだものの、弾き飛ばされる。

「ヴィレイサーを連れて撤退するぞ！」

「そうは行かんな。」

ミラージュは跳躍し、フェイトの背後に回り込んだ。

その場から逃げだそうとしたフェイトだったが、腕を掴まれ、それは叶わなかった。

「動くな。
この娘の命が惜しく無ければ別だがな。」

「フェイト！」

ザフィーラが叫ぶが、状況は一切変わらない。

「うっく……。」

エターナルのオートメディスンで、かろうじてヴィレイサーは意識を取り戻す。

「フェイト……。」

自分の所為だと、自責の念に押し潰されそうになったが、今は彼女を助け出すことだけに専念する。

「今の貴様では此奴を助け出せるとは思えんが……。七星の遺伝子を受け継いでいるのなら来い、堕天使！」

「遺伝子が無くとも助け出してみせる！」

「ヴィレイサー、無茶は危険だよ！」

フェイトは叫ぶが、ヴィレイサーは首を振る。

「それでも、約束したからな。」

ザフィーラの支えから離れ、太刀を構える。

「フン、面白い。」

フェイトを左肩に背負い、ミラージュは不敵に笑う。

「やってみせろ！」

フェイトを背負ったまま、ヴィレイサーに斬りかかる。
真正面から振り下ろされた太刀を受け止める。
しかし、先程の切り傷により弾き返すまでには至らなかった。
「ハァ……ハァ……。」
ヴィレイサーはすぐに息があがった。
「何故ニクスは貴様を脅威とみなすか、皆目見当もつかん。」
「ニクスが……？」
「まぁ、貴様を殺せばどうでもいいか。
一気に沈めてくれる！　ＩＳ、グラディエーター・モード！」
フェイトを背後に放り投げ、言い放つ。
ミラージュは太刀をしまい、刃の長い両刃剣を両手に持ち、
足先には巨大なクローが装備された。
それが終わるや否や、ヴィレイサーに肉薄する。
驚愕していたヴィレイサーは反応が遅れてしまった。
「喰らえ。
デス・クラッシュ！」

それでもギリギリの所で身体を動かしたヴィレイサーは、なんとか身体の一部を斬り落とされる事は無かった。

「貴様はもう助からん。
あの小娘も殺してやろう。」

放ったフェイトを見据え、グラディエーター・モードのまま駆け出す。

「させん！」

シールドを展開し、ザフィーラが行く手を阻む。

ミラージュはそのまま1度激突したがシールドは壊れなかった。

「こざかしい！」

振り上げた右手の剣でいとも容易く壊す。

ザフィーラも怯まず、剣を両方とも掴む。
両刃の為、血が流れ出るが気にしない。

「その心意気や面白い。
だが、グラディエーターは剣を止めても無駄だ！」

クローの着いた足で蹴りを腹に突き刺す。

「ガアァ！？」

突き刺した足を抜き、倒れ込んだザフィーラの頭を踏み台にして、

フェイトの所へと跳躍する。

「終わりだ……。」

「ッ！」

フェイトは恐怖から目を閉じる。

「させるか！」

最後の力を振り絞り、ヴィレイサーはＳＥＥＤを発現させる。

エターナルで何も無い空間を斬る。

すると、そこには切れ目が入り、ぽっかりと丸い穴が開いたように口を開いた。

その空間は真っ白で、他には何も無かった。

「次元斬！」

その空間に飛び込み、空間の中から再びエターナルを振るう。

「何！？」

いきなりヴィレイサーが目の前に現れ、ミラージュは驚く。

「ハアアアアアアアアア！！！！」

エターナルで、ミラージュの左肩を貫く。

「グオア！？
こ、この……。」

ミラージュはエターナルを引き抜き、一旦距離を取る。

「無事か、フェイト？」

「う、うん……。」

息を整えながら聞くと、フェイトは戸惑いながらも明瞭な声でそう答えた。

「ならいい……。
ザフィーラを頼む。」

「でも、ヴィレイサーは……。」

「今はアイツの方が重症だ。
急げ……。」

自分がここにいても足手纏いだと直感したフェイトは、急いでザフィーラの傍へと駆け寄る。

傷の具合を確認し、シャマルに緊急連絡をする。

「まさかあそこから来るとはな……。
だが、いつまでも通用せんぞ！」

ミラージュから再び仕掛け、ヴィレイサーはそれを一心に見据える。

刃が振り下ろされる瞬間、ヴィレイサーは身体を少し捻り、紙一重でそれをかわす。

次の攻撃が来る前に、ミラージュのガラ空きとなった腹に、思い切り蹴りを叩きこむ。

「グハッ！」

息がつまり、次の一手に踏み出す前にヴィレイサーがエターナルで片方の刃をはじく。

剣がはじかれたミラージュは急いで離れようとするが、その前にわき腹を斬られた。

「グオォ！？
チィッ！」

痛みに顔を歪ませながらも、懸命にヴィレイサーから距離を取った。

「逃がすか！
空間翔転移！」

エターナルを目の前に構え、空間技でミラージュの背後へと回り込む。

「馬鹿な！？
速い！？」

自身の反応速度を上まわられ、慌てているミラージュに、ヴィレイ

サーは右肩を貫く。

「ガアァ！？
　このぉ……。」

ミラージュは両方の肩を貫かれ、腕が上がり辛い状態に追い込まれた。

「醜態を晒したままでは死ぬに死にきれん！
　ここで貴様らを葬る！」

意地でもヴィレイサーを殺そうとするミラージュだったが、突如目の前に白い閃光が走った。

「そこまでだよ、ミラージュ。」

閃光が放たれた方角を見ると、そこにはニクスがいた。

背後にある太陽からの光により、彼は神々しいという言葉が似合うほどだった。

「ニクス……。」

ヴィレイサーも彼の名を呟く。

「これ以上はやり過ぎだ。
　君を失う訳にもいかないし、退くよ。」

「だが、ここでヴィレイサーを殺さなければ……。」

反論するミラージュに、ニクスは冷たい視線を向ける。

「ッ……。」

恐怖からか、ミラージュはそれ以上何も言わなかった。

「ヴィレイサー、僕らの元へ来ないかい？」

右手を差し出され、ヴィレイサーは一瞬戸惑う。

「何故俺を誘う？
ミラージュによれば、俺は脅威なんだろ？」

「管理局の違法施設の破壊に、思ったより手間取ってしまってね。
君の協力があれば、もっと早く終わると思うんだ。」

「お前達と手を組むのはお断りだ。
だが、施設の破壊だけなら引き受けてもいい。」

「そうか。
けど、君がそんな事をできるとは思えないね。

君は人を殺せるかい？」

「無理だな。」

「そうだろうね。
僕らはずっと戦争の中を生きてきた。
人を殺す事に今更抵抗は覚えないけど……。
時々君が羨ましいよ。　殺す事に抵抗を覚える君が、ね。」

微笑み、ミラージュを含めて転移魔法を起動させる。

「ヴィレイサー、今回はミラージュの回収が目的だから見逃すけど、次は無いと思っておいた方がいいよ。

気付いてるだろう。　僕らには勝てない事を。」

姿が消え去った後、そんな言葉だけが残った。

「わかってるさ。」

苦々しくそれだけ言い、その場に座り込む。

「ヴィレイサー！」

どこからかフェイトの声が聞こえた気がしたが、
それと同時に、ヴィレイサーは激しく咳き込んだ。

「ゴホッ、ゴホッ……。
ウグ……ガッハッ！」

口元を手で覆ったが、それでは足りないほどの血液が吐き出された。

「時間も……無い…のか……。」

意識が朦朧とし、倒れてしまった。

薄れゆく意識の中、左手を支えにしようとしたが、力がまったく入らなかった。

それは、左手の遺伝子が機能せず、腕が麻痺しやすくなってきているという事だった。

第６話　「七星とのぶつかり合い、再び」　了

第6話　「七星とのぶつかり合い、再び」（後書き）

ティアナ
「・・・。」

鮮血
「アハハ・・・。」

ティアナ
「ヴィレイサーさん、やられ過ぎじゃない！？」

鮮血
「だから言ったじゃん。
『主人公、ボロボロ』だって。」

ティアナ
「だからってあんたねぇ・・・。」

鮮血
「いいじゃん別に。
この程度の傷ぐらいなら、大体の小説にはある事だし。」

ティアナ
「そうかもしれないけど・・・。」

鮮血
「まぁ、ヴィレイサーがボロボロになるのはこれが最後じゃないけど。」

ティアナ
「あと何回あるのよ！？」

鮮血
「秘密です。」

ティアナ
「にしても、フェイトさんが何もしないなんて扱い酷くない？」

鮮血
「いや、この話のフェイトの部分は、
最初は全部君だったんだよ？」

ティアナ
「私！？」

鮮血
「君にフラグを立てる為の布石でもあったんだよ。」

ティアナ
「ヒロインがフェイトさんになったから、全部変更したのね。」

鮮血
「そうだね。」

ティアナ
「で、次回は？」

鮮血
「ヴィレイサーの療養と、七星について。」

ティアナ
「次回もお楽しみに。」

第7話　「蠢く霞　兄妹」（前書き）

鮮血
「今回は、七星が1人、ミラージュに敗れたヴィレイサーの話から入ります。」

エリオ
「今日は僕が担当ですか。」

鮮血
「そうです。
まぁ、気楽にどうぞ。」

エリオ
「はぁ・・・。
で、ヴィレイサーさんは大丈夫なんですか？」

鮮血
「出血多量だけど、エターナルが自動応急処置を行ったから、命には別状ないよ。」

エリオ
「なら、いいんですけど。」

鮮血
「フェイトとのやりとりもやるよ～。」

エリオ
「元々は、そこの箇所はティアさんでしたよね。」

鮮血
「うん。
フェイトがヒロインに昇格したから、全部書き直した。
だけど、もしかしたらティアナの時の残滓があるかも。」

エリオ
「しっかりしてくださいよ・・・。」

鮮血
「で、今回は更に、七星のネブラとゲイルが出てきます。
お楽しみに。」

エリオ
「それでは第7話をどうぞ。」

第7話　「蠢く霞　兄妹」

「シャマル、ヴィレイサーは！？」

「落ち着いて、フェイトちゃん。
大丈夫よ。　命に別条は無いわ。」

手術室から出てきたシャマルに、開口一番フェイトが駆け寄る。
それを落ち着かせ、彼のバイタルをはやてに渡す。

「ふむ。
今はバイタルが安定してるみたいやな。」

「えぇ。
ただ……。」

そこまで言って、シャマルは言い淀む。

「例の遺伝子破壊の進行が確認されました。
彼の話だと、左足と左腕らしいんですけど……。」

「速い進行やな。」

「でも、それも本当にごく稀にらしいんです。
だからまだ問題は無いって、ヴィレイサーが……。」

「う～ん……。
まぁ、今は本人の言う事を信じるしか無いなぁ。」

「エターナルの方もメンテナンスでは問題無いですね。」

「それで、今回の相手だった七星の方の事はどうや？」

「ザフィーラから聞いた話を報告書に纏めてお渡しします。」

「うん、頼むな。」

◆◇◆◇◆

「クッソオオオーーーーー！！！」

スカリエッティのラボの一角では、ミラージュが荒れていた。

「荒れてるね、ミラージュの奴。」

それをモニター越しで見ていたネブラは鬱陶しそうに言った。

「致し方あるまい。
何せ勝てると思っていた相手に一気に形勢を逆転されたんだ。
怒りにとらわれもするだろう。」

ネブラにそう言ったのはゲイルだった。

「ゲイル。

そっちはゼストと上手くやってる？」

「まぁな。
彼はすばらしい騎士だ。」

「知ってるわよ。
けど、ヴィレイサーの事と出会ったらどうなるのかな？」

「今はどうでもいいだろ。」

「そうよ。」

ヘイルとヴァンが現れ、ミラージュが映るモニターを見る。

「アイツ、本気で身体を改造する気か？」

「らしいよ。」

ネブラは興味が無いのか、素っ気なく返す。

「馬鹿な奴だ。」

ゲイルもそれ以上はなんとも思わず、部屋を出て行く。

そこで入ってきたレーゲンとすれ違う。

「よう。
ミラージュの奴の改造計画書を持ってきたぜ。」

それをニクスに渡して、ヴァン達と同様にモニターを覗く。

「反応速度を上げる為の肉体改造、か……。」

「しかも獣型の使い魔をつけるんだと。」

「まさか、ケルベロス？」

ケルベロスとは、ミラージュの家系で長年従えてきた使い魔だ。

ミラージュは、ケルベロスと仮契約をしているのだ。

「本気みたいだね。」

ニクスは書類を手元に置き、ミラージュに聞く。

「ミラージュ、改造の件だけど、許可するよ。」

「本当か！？」

「君の本気さがわかったからね。」

ケルベロスは、ミラージュでさえ手懐けるのが大変だった。

その為、仮契約という形から発展できずにいたのだ。

しかし、ミラージュが肉体改造を行えば、その問題も解決できる。

「ニクス、本当にいいのか？」

「そうよ。」

レーゲンとヴァンがニクスに聞くが、彼は気にしなかった。

「もちろん。
だから許可したんだよ。」

「まぁ、ニクスの決定には何も言えないわね。」

ヴァンは髪を梳いて出て行った。

「そうだな。
じゃあ、俺も次の任務に行ってくる。」

「気を付けてね～、レーゲン。」

ネブラの言葉に、片手を振ってから任務に向かった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第７話　「蠢く霞　兄妹」

「……。」

ヴィレイサーは目を覚まし、真っ暗な病室で窓から差し込む月明かりに照らされていた。

――――僕らの元へ来ないかい？

ニクスからの誘いを断ったにも関わらず、未だにその言葉が頭から離れなかった。

違法施設の破壊を引き受けるとは言ったが、さすがに今は敵対関係にあるのだ。

いくらなんでも向こうから誘いに来るとも思えない。

「しばらくは静かにできるのかもな。」

呟き、身体を休める事に専念する。
今の自分には、それ以外何1つできないから。

◆◇◆◇◆

翌日。

フェイトは早朝訓練を終えた後、
シャワールームよりも先にヴィレイサーの病室に向かった。

「ヴィレイサー、私だけど……。」

「あぁ、いいぞ。」

そう返され、病室に足を踏み入れる。

「早朝訓練お疲れ様、フェイト。」

「うん。」

「何か用か？」

「あ、その……。」

「うん？」

フェイトは中々用件を言わなかったが、ヴィレイサーは別に急かさなかった。

「こないだの任務の件で、謝りたくて。」

「謝る？
それはまた何故だ？」

フェイトの言わんとする事がわからず、ヴィレイサーは聞き返す。

「どうしてって……。
私の我儘の所為で、ヴィレイサーがそこまで傷ついたんだよ！」

座っていた椅子から立ち上がり、声を荒げる。

フェイトが勢いよく立ちあがったので、椅子は倒れてしまった。

「それに、私は何もできなかった。
ただヴィレイサーを傷つけてしまっただけなんだよ……。」

「落ち着け、フェイト。」

身体を休めていたベッドから降りて、椅子を元に位置に戻す。

ベッドに再び戻る時にフェイトの肩を軽く叩いて椅子に座らせる。

「ごめん、取り乱しちゃって……。」

「いいさ。

だが、自分を責め続けるのだけは止めろ。」

「でも……。」

反論しようとしたフェイトの瞳には、涙が滲んでいた。

「でも、私……。」

「お前を連れて行くと判断したのは俺だ。
それに、俺はお前を守れなかった。
だからむしろ、俺が謝りたいぐらいだよ。」

優しく言いながら、ヴィレイサーはフェイトの頬に触れる。

そして、今にも零れ落ちそうな涙を指で拭ってやる。

「怖い想いをさせてすまなかった、フェイト。」

「ヴィレイサー……。」

堪えきれず、フェイトは泣きだした。

ヴィレイサーは彼女を抱き寄せて、泣き止むまでずっとそうしていた。

かつて、彼女が辛かった自分にしてくれたのと同じように。

◆◇◆◇◆

それから数週間後。

ギンガが機動六課へとやってきた。

「ギンガとスバルの模擬戦はギンガの勝利か。」

「だね。
それじゃあ、今度は5人対隊長陣4人で模擬戦をやるよ。」

「「「「「はい！」」」」」

「今回の勝利チームはその後俺と戦ってもらうからな。」

「ヴィレ兄と!?」

「そうだ。
戦いたくないからと言って手を抜くなよ?」

「あたしらが見抜けない訳ねぇからな。」

ヴィータがスバルにアイゼンを向ける。

「そんな事しませんよ!」

「全力で叩き潰してやれよ。」

それだけ言って、ヴィレイサーは攻撃が来ないであろう位置に移動

して行った。

「久々にヴィレ兄と組み手したい！」

「小さい頃やってたものね。」

「そうなんですか。
じゃあ、勝ちに行くわよ！」

ティアナの掛け声に、皆も倣う。

◆◇◆◇◆

「この程度のセキュリティーって……。
あたしらの事なめてるのかしら。」

ネブラは公開意見陳述会の会場に単独で簡単に侵入した。

「これじゃあ潰しがいが無いよぅ。」

容姿が子供の彼女は、普段はその見た目通りに幼かった。

しかし、だからと言って任務に真面目である事に間違いは無かった。

彼女はニクスに命を救われたからだ。

◆◇◆◇◆

七星がまだ結成される前の事だった。

ネブラは幼い頃から、周りの同い年の少年少女とは明らかに違っていた。

大人でも使う事が出来ないとされていた、
不可視になる魔法を簡単に使いこなせたからだ。

しかし、それを遊びに活用する事は無かった。

自分は皆と変わらない事を証明するかのように。

彼女の考えを知った周囲の友達は、友達の関係を止める事は無かった。

しかし、親は違った。

ネブラの異端の不可視能力を使って、ネブラに犯罪をさせていった。

親の言う事を聞くしかなかったネブラは、間違いだと気付きながらも、
親に対して反抗する事ができなかった。

やがて、犯罪が露呈した時、親はネブラが独断でやったと言い張り、

彼女を売るような形で警察に引き渡したのだった。
死刑に処されると思い、ネブラは脱走した。
友達に迷惑をかける訳にも行かず、あてはどこにも無かったのに。
不可視能力を使って逃げ続けていたが、その力を使うには条件があったため、
すぐさま見つかってしまった。
連れ戻されずに、逃げ出した場所で死亡したように見せかける為、
ネブラを見つけ出した職員はその場で殺そうとしたが、そこへニクスが現れた。
ニクスは職員を諭そうとしたが、それは叶わなかった。
あまりの正論ぶりに、職員が逆上したのだ。
向かってくる職員に、ニクスは溜息を1つついただけだった。
勝負は一瞬だった。
本当に、瞬きをしている間に職員は殺されていた。
ニクスはネブラに手を差し伸べ、こう言った。
――――僕らの居場所を、一緒に探そう

彼も能力の高さから、親に捨てられたのだと言う。

ネブラは頷き、彼の手を取った。

自分の居場所を、仲間の居場所だけでも見つけ出す為に。

◆◇◆◇◆

（ここがシステム管理室。）

隣にいた職員を共に中に入り、ネブラは周囲を見回す。

だが、誰も彼女の姿は目に入っていなかった。

それもそのはずで、今彼女は見えない状態にあった。

ＩＳ、ネブラ・ステルス（霧による不可視）を使ったからだ。

だが、不可視と言っても声や足音は出てしまう。

その問題も特に大したものでは無かった。

彼女は音もなくふわりと浮きあがる。

そしてそのまま飛行して、システム管理室よりも奥にある、バッテリー室へと向かった。

あっという間に到着し、ネブラは落ち着いたので大きく息を吐く。

「疲れた。
けど、あともう一仕事だよね。
マガノイクタチ！」

ネブラの背にある大きな翼のようなものが展開した。

それをバッテリーの適当な箇所に噛ませる。

「エネルギー、もらっていくね♪」

バッテリーのエネルギーを吸い取り、自分のマガノイクタチの『餌』にする。

マガノイクタチは、魔力ではなく電力で動くのだ。

「これぐらいでいいかな。
これ以上盗ったら、さすがに変化を隠しきれないか。」

ネブラは呟き、地面の飛び降りる。

彼女の周囲に発生している霧は、周囲のメーターを狂わせる能力も持っており、
それを自由に弄る事も出来る。

「さてと、後は外からの進入口を作って、仕事は終わりだね。」

そして、暗闇の中へと消えて行った。

◆◇◆◇◆

「それじゃあ、スバルとギンガ、ヴィレイサーも借りるわね。」

「はい。」

スバル達3人は、身体検査の為に1度病院へと向かった。

「まったく……。
俺はほぼ毎日六課で検査だってのに……。
こっちでもしなきゃなんねぇとはな。」

「けど、兄さんは本当に身体を大事にしないと。」

「そうだよ、ヴィレ兄。」

「あぁ、熟知してるよ。」

妹2人からの注意に、ヴィレイサーは笑って返す。

◆◇◆◇◆

「うん、３人とも問題無し。
もう上がっていいよ。」

マリエル技官にそう言われ、ヴィレイサーは起き上がる。

上着を着て、外に出た後ギンガ達を待つ。

検査内容が違うので、２人とは別室なのだ。

「問題無し、か。」

左足に力を入れて、片足だけで立ってみる。

『今回は』バランスを崩す事無く、まっすぐに立てた。

「やはり既にダメになっている部分は無いのか。」

とりあえずまだ生きながらえる事はできそうだった。

それに安堵した所で、ギンガ達が仲良く出てきた。

「ヴィレ兄、一緒に六課に戻ろう。」

「あぁ、もちろん。」

「その前に、チョコポットを買ってっていい？

皆へのお土産に。」

「持ち合わせは大丈夫なのか？」

「うん。」

「それじゃあ行くか。」

「「はーい。」」

◆◇◆◇◆

「お待たせ～。」

「少し持つぞ。」

「ありがとう、ヴィレ兄。」

「ねぇスバル、兄さん。」

「なぁに？」

「この先、間違いなく戦闘機人戦があると思う。」

「そうだな。

そして、七星も……。」

「頑張って行こうね。」

「大丈夫だよ。
私達には、母さんが残してくれたリボルバー・ナックルがあるし。
それに、キャリバーズもいるしね。」

そう言って、スバルはマッハキャリバーを取り出した。

ギンガも微笑み、ブリッツキャリバーを取り出す。

「そうだな。
それに、皆もいるしな。」

ヴィレイサーもそれに同意する。

◆◇◆◇◆

「あれが、ヴィレイサー・セウリオンか……。」

それを屋上で見ていたのはゲイルだった。

今はゼストと行動を共にはしていない。

違法施設破壊の帰りにヴィレイサーを見かけた為、それを見ていただけだ。

「フッ。
こんな所で気にしていても何の意味もなさぬな。
帰るとするか。」

水色の上着を翻し、帰宅を急いだ。

◆◇◆◇◆

「さて、もうすぐ祭りの開始だ。」

スカリエッティはナンバーズを前に、上機嫌だった。

「君達の仕事は、『聖王の器』の確保、地上本部の制圧、
タイプゼロ2機、Fの遺産の回収。
特にゼロ・ファーストの方は余力があれば願いたいね。

今回は七星の彼らも出る。
ちゃんと協力し合ってくれたまえ。」

白衣を翻し、スカリエッティは高々に宣言する。

「さぁ、祭りの始まりでもうすぐだ！」

第7話　「蠢く霞　兄妹」　了

第7話　「蠢く霞　兄妹」（後書き）

鮮血
「ふいー、ようやくここまで来た。」

エリオ
「まだ折り返し地点でも無いくせに、何を言っているんですか。」

鮮血
「ごめん。
今回は視点を変え過ぎたなぁ・・・。
しかも、展開が一々早過ぎるし・・・。」

エリオ
「もっと細かい所まで書きましょうよ。」

鮮血
「これで精一杯なんだよ！」

エリオ
「いばらないでくださいよ・・・。
それにしても、ミラージュとネブラの動きが気になりますね。」

鮮血
「ミラージュは肉体改造。
ネブラは電力装置への影響。
どちらも公開意見陳述会で必要になる事なんだよ。」

エリオ

「そうなんですか。」

鮮血
「ネブラは、アレに影響を与える事で、
公開意見陳述会の当日の任務に、動きやすくする為だね。」

エリオ
「なるほど。
じゃあ、ミラージュは？」

鮮血
「アレは・・・。
まぁ、うん。」

エリオ
「なんですか！？
すごく気になりますよ！」

鮮血
「いや～、コレはさすがに言えない・・・。」

エリオ
「えぇー・・・。」

鮮血
「まさかヴィレイサーが・・・。
おっと。」

エリオ
「ちょっと！？

全然隠しきれてないですよ！？
ヴィレイサーさんがどうするんですか！？」

鮮血
「今はそんな事より、次回の方が重要なのだよ！」

エリオ
「なんですか、突然？」

鮮血
「次回はいよいよ、フェイトとヴィレイサーが・・・。」

エリオ
「え！？」

鮮血
「次回もお楽しみに～。」

エリオ
「ちょ、ちょっと！
あ、感想、誤字脱字、お願いします。」

第8話　「生と死　2つの狭間での愛」（前書き）

ヴィレイサー
「何だ、この題名は！」

鮮血
「怒らないの。」

ヴィレイサー
「スゲェ、嫌な予感がするんだが・・・。」

鮮血
「さぁ、知らない。」

ヴィレイサー
「テメェ、よくも抜け抜けとそんな事が言えるな・・・。」

鮮血
「さて、今回はヴィレイサーとフェイトとのやり取りです。
そして、タイトルからもお分かり頂ける通り・・・。
クププ・・・。」

ヴィレイサー
「雷煌霆破！」

鮮血
「おっと！
悪いが君に殺される筋合いは無いね。」

ヴィレイサー
「こんちくしょう・・・。」

鮮血
「と言う訳で、第8話、どうぞ。」

第8話　「生と死　2つの狭間での愛」

「あ、おはよう、ヴィレイサー。」

「おぉ、フェイト。
おはよう。」

フェイトの明るく明瞭な声の挨拶に、ヴィレイサーは短く返す。

それでもフェイトは笑顔だった。

訓練場に一緒に向かう途中、ヴィレイサーはその理由を聞いてみる。

「フェイト、何かいい事でもあったのか?」

「どうして?」

「いや。
いつもより笑顔な気がしただけだ。」

「そうかな?」

「俺の気の所為かもしれん。
気にするな。」

訓練場に到着したので、それ以上の会話は無かった。

第８話　「生と死　２つの狭間での愛」

「お前らお疲れ様。」

訓練が終わり、クールダウンしているフォワード陣に、ヴィレイサーは告げる。

「ヴィレ兄も終わったの？」

「あぁ。」

シグナムとの模擬戦だったのだが、なんとか勝てた。

「お疲れ様です。」
「お前らもな。」

◆◇◆◇◆

「ヴィレイサー、隣、いい？」
トレイを持ったフェイトが訊ねる。
「許可は別にいらないだろ。
お前の好きにしろ。」
「じゃ、失礼します。」

◆◇◆◇◆

「ねぇヴィレイサー、ここの部分なんだけど……。」
「そこはちゃんと纏めておけよ。」

「うん。」

◆◇◆◇◆

「私、高町なのはは思うのです！
最近、私の友人フェイトちゃんが、
ヴィレイサー・セウリオンと話す機会が増大している気がします！」

部隊長室で、はやてを前に、なのはそれを高らかに宣言する。

「それはきっと、フェイトちゃんがヴィレくんの事が好きやからや！」

「うん！」

はやての確信じみた言葉に、なのはも頷く。

「なんで僕らまで……。」

スバルの隣にいるエリオは不思議でしょうがなかった。

「あたしもその意見には同感だな。」

ヴィータまでもがエリオに同意する。

「ええやん。
人員は多い方がおもろいやろ？」

「ですが、その分バレるリスクも大きいですよ。」

「キャロ、そのスリルも楽しいんやで！
それに……2人の動向も皆で楽しみたいやん。」

意地の悪い笑みを浮かべて、はやてがスバルを見る。

「フェイトさんがお義姉さんになるんだ～。」

「スバル、戻ってきなさい……。」

「もうすっかり結婚しとるみたいやな。」

「脳内だけだけどね……。」

スバルの様子に、全員苦笑いした。

「さて、そこでフェイトちゃんに尋問をしようと思う！
ってな訳で、なのはちゃん、よろしくや。」

「私だけ！？」

「ええか、なのはちゃん。
これは、なのはちゃんにしかできへんねん。
しっかりと頼むで。」

まっすぐに見られ、視線を逸らせなかったなのはは、頷くしかなか

った。

とりあえず空き部屋にフェイトを呼び、聞く事にした。

そして、はやてとシャーリーを始めとするロングアーチスタッフが、別室から監視モニターを通じて、それを見る。

ちなみに、フォワード陣は訓練の為、見られない。

◆◇◆◇◆

「それで、フェイトちゃんはヴィレくんの事をどんな風に思ってるの？」

「そ、それは……／／／／／／／／／／／／／／／」

フェイトは顔を赤くしているだけで、答えなかったが、決心がついたのか、口を開く。

「わ、私は……私はヴィレイサーの事が好き！」

フェイトがそう宣言した時、ヴィレイサーが入ってきた。

「なんだと？」

「「え？」」

「ヴィ、ヴィレイサー！？」

「今なんつった？」

「え、えぇっと、その……。」

フェイトは顔を赤くしてパニックに陥っていた。

◆◇◆◇◆

「アカン！

まさかここで、ヴィレくんが入ってくるとは！」

はやても慌てており、なのはに指示をとばせずにいた。

◆◇◆◇◆

「まさかとは思うが……。

俺に好意を持っているとか言うんじゃないだろうな？」

「え？」

「お前、俺の身体の事をわかって言っているのか？」

「ぁ……。」

ヴィレイサーの遺伝子崩壊の事を、フェイト達は知っている。

「そんな想い、捨てちまえ。」

冷酷に言い、書類を置いて部屋を出ていった。

「待ってよ、ヴィレイサー！」

フェイトはすぐさま彼を追いかけていった。

◆◇◆◇◆

「見つけたよ、ヴィレイサー。」

走ってきたと思っていたが、どうやら途中で息を整えたらしい。

フェイトは屋上で1人佇んでいるヴィレイサーを呼んだ。

「すまないな、フェイト。

俺はお前に応えられない。」

「ヴィレイサー……。
それでも……それでも私は好きだよ、ヴィレイサーの事。」

「応えられないのに、何故お前はそれを言う？」

「伝えたいだけだよ。
それだけじゃあダメ、かな？」

上目遣いに聞いてくるが、ヴィレイサーは何も言わなかった。

「俺はいつ死ぬかわからない。
だが、お前の気持ちに応えれば俺が死んだ時、悲しい想いをするだけだ。

死して尚、誰かを悲しませるだけなら、俺は誰もいらない。」

「ヴィレイサー……。」

「すまない。」

それだけ言って、フェイトの脇を通り抜けようとしたが、それは許されなかった。

「フェイト？」

「ヤダよ、ヴィレイサー……。
そんな悲しい事言わないでよ……。」

フェイトが泣きながらヴィレイサーに抱きついていたのだ。

「どうやら俺は、生きていても誰かを悲しませてしまうみたいだな。」

自嘲気味に言い、フェイトを離す。

「答えを出すのに時間をくれないか？
必ず、答えを出す。」

フェイトの涙を指で拭い、優しく彼女に言い聞かせる。

「うん。」

◆◇◆◇◆

一先ずフェイトを落ち着かせ、一緒に階段を下りていると、途中でなのはと出くわした。

「ヴィレくん、フェイトちゃんから告白は受けた？」

「それがどうかしたのか？」

「答えは？」

「まだ出てねぇよ。」

それを聞いたなのはは、嘆息した。

「もう……。
ちゃんと答えなきゃダメだよ。」
「お前にとやかく言われる筋合いは無い。」
「フェイトちゃんは頑張ったんだよ？
それなのに……。」
「いいの、なのは。
待ってるからね、ヴィレイサー。」
そう言って、フェイトはヴィレイサーの腕に抱きついてきた。
「はやて、そこからカメラで撮影するな！」
「なんや、バレとったか。
それにしても、たったこれだけでモテモテになったなぁ。」
「テメェか、焚きつけたのは！」
「フェイトちゃんが頑張っただけやで。」
「そうだよ、ヴィレくん。」
「うん。」
「まったく……。
いつまでもこうして引っ付くな。
いい加減鬱陶しくなるし、歩き辛いし。」

「はぁ～い♪」

すんなりとフェイトは離れた。

「フェイト。
以前約束した模擬戦、今からやるぞ。」

「いいの？」

「だから提案しているんだろうが。」

「そうだね。
ありがとう。」

外に出ながら、ヴィレイサーは思った。

（この身が朽ち果てる前に、必ず……。）

しかし彼の想いとは裏腹に、遺伝子崩壊は徐々に進行していた。

既に、左足は自由が利き辛くなる回数が増えてきていた。

それでも彼は生き抜く事を決意する。

大切な人の為に……。

第8話　「生と死　2つの狭間での愛」　了

第8話　「生と死　2つの狭間での愛」（後書き）

フェイト
「えへへ／／／／／／／／／／／／／／／」

鮮血
「祝、フェイト告白～。」

フェイト
「う、うん／／／／／／／／／／／／／／／」

鮮血
「とは言え、まだ保留なんだけどね。」

フェイト
「うぅ・・・。
そこが心配なんだよね・・・。」

鮮血
「告白しただけでも前進でしょ。
それに、Ｗａｒｓ時だったらどうなっていたか・・・。」

フェイト
「そう言われると・・・。」

鮮血
「まぁ、保留からどんな結果が出るかは僕も知らないけど。」

フェイト

「私が振られちゃったりしたら、天照大神先生とかが黙ってないと思うよ？」

鮮血
「う・・・。」

フェイト
「それに、この保留って形にも不満があるよ。」

鮮血
「それにはちゃんとした理由があるんだって。」

フェイト
「そうなの！？」

鮮血
「意外そうな言い方だね・・・。
これ以上は言わないよ。」

フェイト
「そ、そんな事無いよ。
だから教えて。」

鮮血
「もちろん、ちゃんとお話ししますよ。
まず第1に、ヴィレイサーが簡単にここで答えるキャラじゃないって事。
いくら相手を傷つけたくないからって、早急に答えを出して、
それが自分の納得のいかないものだったら、それこそ相手を傷つけるからね。

それが出来ないキャラなんだよ。」

フェイト
「ふむふむ。」

鮮血
「で、もう1つは・・・。」

フェイト
「何で押し黙っちゃうの？」

鮮血
「いや、これからの展開的に保留の方がいいってだけ。」

フェイト
「私とヴィレイサーに何があるの！？」

鮮血
「君は大した事無いけど、主にヴィレイサーが大変な事になる。
そりゃあもう、ボロボロに・・・。」

フェイト
「前回もしたよね！？」

鮮血
「たった1回で済む戦場がどこにある！」

フェイト
「名言みたく言わなくていいよ！」

鮮血
「さて、ヴィレイサーの身に何が起きるかは置いといて。
次回は公開意見陳述会です。」

フェイト
「ヴィレイサーの相手は誰になるの？」

鮮血
「秘密に決まってるでしょうが。
けど、あるキャラが敵対心むき出しになってたでしょ？」

フェイト
「って事は・・・。」

鮮血
（その所為でヴィレイサーはボロボロ・・・。
いや、それ以上の怪我を負うんだけどね。）

フェイト
「何か言った？」

鮮血
「いーえ、何も。
それでは～。」

フェイト
「逃げた！？
感想、誤字脱字、お願いします。
待ってよー。」

第9話　「止まらぬ破壊の闇」（前書き）

鮮血
「今回は公開意見陳述会です。」

ヴィレイサー
「あぁ。
で、俺の切り札の1つについても、少しだけ触れます。」

鮮血
「まぁ、詳細はまだ秘密ですが。」

ヴィレイサー
「それではどうぞ。」

第9話　「止まらぬ破壊の闇」

公開意見陳述会前日。

はやては、これから夜通し警備を行うメンバー達に確認を兼ねた説明を行っていた。

ヴィレイサーもそれは例外では無かったのだが、彼は七星の動きが気になっており、
あまりはやての言葉を聞いてはいなかった。

（間違いなく戦闘機人戦はある。
だが、そこに七星が加わった場合はマズイな。
ただでさえ戦闘機人だけでも大変だと言うのに、
七星まで介入してくるとなると、最後のリミッターを外す以外に勝ち目は無いな。）

だが、そう簡単に最後のリミッターを外せる訳も無かった。

このリミッターを外す為には、少なくとも彼女の存在が必要となる。

エクシーガ・スラスト。

彼女も自分と同様のリミッターがある。

だがしかし、それを外すには互いが近くにおり、それを承認しなければならないのだった。

◆◇◆◇◆

移動手段となるヘリに乗り込んでいると、外にヴィヴィオの姿が見えた。

「なのは、お前に用件があるんじゃないのか？」

「うん。
ヴァイスくん、ちょっと待っててね。」

「ウッス、なのはさん。」

ヘリから降りてヴィヴィオに駆け寄る。

「どうしたの？
ここは危ないよ。」

その質問にはヴィヴィオではなく、アイナが答えた。

「ごめんなさい。
どうしてもママを見送りたいって。」

「ダメだよ、ヴィヴィオ。
アイナさんに我儘言っちゃあ……。」

「ごめんなさい……。」

「なのは、夜勤は初めてだから、きっと不安なんだよ。」

暗くなるヴィヴィオを庇うようにフェイトが言う。

「そっか。
なのはママ、今夜は外でお泊りだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから。」

「絶対？」

「うん、絶対の絶対。
いい子で待ってたら、ヴィヴィオが好きなキャラメルミルク作ってあげるよ。」

ヴィヴィオの不安がこれ以上増さないように、薬指を彼女の顔の近くに出す。

「うん。」

◆◇◆◇◆

「ああいうのを見てると、昔を思い出すね、ヴィレ兄。」

「そうだな。
俺が地球に帰るって言った時、スバルは泣き喚いてそれを阻止しようとしてたな。」

「あんたらしいわねぇ。」

「子供だったんだもん。」

「俺からすればお前はまだ子供だよ。」

「ヴィレ兄が保護者意識をしてるからだよぅ。」

「でも、確かにヴィレイサーさんって、
なんだかお兄さんでもあり、お父さんでもある気がします。」

キャロにそう言われ、ヴィレイサーは戸惑う。

「まだそんな歳じゃねぇよ。」

「もう２０歳ですよね？
いい加減好きな人ぐらいできてもいいんじゃないですか？」

「まだ２０歳だ。
大体そんな事言ったら、ティアナとスバルはどうなんだ？」

「まだ１６歳ですから。」

「１５歳だもん。」

「どういう逃げ方だよ……。」

やがてなのはがヘリに戻ってきたので、出発する。

「ヴィヴィオ、すっかりなのはさんに懐いてますね。」

「そうだね。
結構厳しく接してるつもりなんだけど……。」

「きっとわかるんですよ。
なのはさんが優しいって事が。」

「にゃはは。
ありがとう、キャロ。」

「もういっそ、なのはさんの子供にしてはどうですか？」

「受け入れてくれる家庭探しはまだ続けるよ。
いい家庭先を見つけて、ヴィヴィオがそれに納得してくれれば……。」

しかし、それをエリオが否定した。

「納得しない気が……。」

「同感だな。」

ヴィレイサーも彼の意見に同調する。

「そりゃあ、ずっと一緒にいられたら嬉しいけど……。
本当にいい受け入れ先が見つかったら、ちゃんと説得するよ。
いい子だもん。　幸せになって欲しいから。」

しかし、ヴィータとヴィレイサーに視線を向けられ、慌てる。

「まぁその……。
それまでは私が責任持って守ってくよ。
それは、絶対に絶対。」

「でも、そうするとお父さんも欲しいって言うかもしれませんね。」

キャロはヴィレイサーに視線を向けながら言う。

「何故俺を見ながら言う？」

「ヴィレイサーさんが適任者なんですよ。」

ティアナがそう言うが、ヴィレイサーは難しい顔をしていた。

「無理だろうな、俺では。
父親らしい事なんて何1つしてやれない気がする。」

「でもヴィヴィオが言ってたよ。
ヴィレイサーさんは優しい人だって。」

「今まで大して接して無いんだ。
そんな少ない情報での判断は危険だぞ。
大体、親役はお前達だけで充分だろうが。」

「もう。
ヴィレくんなら大丈夫なんだから、自信を持ってよ。」

「気が変わったら考えてやるよ。」

これ以上は御免だと言うように、適当な事を答えた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第９話　「止まらぬ破壊の闇」

「公開意見陳述会、始まりましたね。」

キャロがモニターを見ながら、緊張の入り混じった声で言う。

「しっかり警備しとけよ。」

ヴィータは見回りを開始する為に、エリオとキャロにその場を任せる。

◆◇◆◇◆

一方、ヴィレイサーはギンガと共に見回りを行っていた。

「どう来ると思う？」

「わからないな。
七星なら一気に制圧できるんだろうが……。
間違いなく戦闘機人が主流になってくるだろうな。」

「どうして？」

「七星がここを襲撃する理由が思い付かないからだよ。」

「でも、それはスカリエッティ達にも同じ事が言えると思うけど……。」

「アイツらは力の誇示がしたいのかもしれない。
あの男は、自分の作品を見せびらかすのが好きそうだからな。」

ヴィレイサーは、遺伝子操作を受けた時、スカリエッティと面識ができた。

その為、彼の性格を少しだけ知っていた。

「つまり、その力を誇示して兵器として買わせるって事？」

「恐らくはな。
力を欲しがる奴はいくらでもいるだろうから。」

「でも、威力証明なら他の所でも……。
それに、七星が加わる理由もわからないわ。」

「七星は完璧に加わって無い。
恐らく、自分達が動きやすいから同行しているんだろう。」

夕刻に染まりつつある空を見上げ、ヴィレイサーは言った。

「兄さん、無理しないでね。」

何か思いつめているのを察したギンガは、優しく静かに言った。

「あぁ。
ありがとう、ギンガ。」

◆◇◆◇◆

Ｓｉｄｅ：ゲイル

もうすぐで公開意見陳述会も終わりを迎えようとしていた頃。
ゼストは敵に捕捉されない位置から地上本部と、
その内部で演説しているレジアス中将をモニタリングしていた。
「連中の尻馬に乗るのは、どうも気が進まねぇけど……。」
そう呟いたのは、ゼストの脇で浮遊していた融合騎のアギトだった。
「それでも、貴重な機会であろう。」
アギトに言ったのはゲイルだった。
「ゲイルの言う通りだ。
今日ここで、全てに決着が着くのならそれにこした事は無い。」
「まぁね。
つーか、あたしはルールーの方も心配だ。
いくらネブラが着いてるとは言え、大丈夫かな、あの子？」
「心配ならばルーテシアに着いてやればいい。」
「今回の事に関しちゃあ、旦那の事の方が心配なんだよ。」
「ゼスト。
お前の目的はレジアスだろ？　アギトが最後まで援護するさ。」
「そうさ。
旦那の事、護ってあげるよ。」

「そうだな。
ではゲイル、お前はルーテシアの方を頼むぞ。」

「あぁ。」

ゲイルはそんな返事をした後、再び地上本部に目を向けた。

（ニクスの指令とは言え、堕天使をミラージュに任せるとは……。
本当に殺す気だろうな。）

仮面の奥底にある瞳が、鈍い色をたたえていた。

Ｓｉｄｅ：ゲイル　了

◆◇◆◇◆

「ナンバーズ、Ｎｏ３～Ｎｏ１２まで準備完了。」

ウーノがスカリエッティを振り返り、そう告げる。

「お嬢とゼスト殿、それに七星の方々もそれぞれの位置につかれた。」

トーレから伝達が入り、クアットロも攻撃の準備が万全な事を告げる。

「ククククク……。
フフフ……アハハハハハ。」

「楽しそうですね、ドクター。」

「あぁ、楽しいさ。
この手で歴史を変える瞬間。
研究者として、技術者として心が躍るじゃないか。」

椅子から立ち上がり、高らかに宣言する。

「我々のスポンサー氏にとくと見せてやろう。
私達の研究と開発の成果をね。

さぁ、始めよう！」

「はい。」

◆◇◆◇◆

任務が開始され、ネブラはマガノイクタチからマガシラノホコを射出し、
ルーテシアのデバイス、アスクレピオスに接続する。

「マガシラノホコより、魔力供給開始。」

ネブラが言うと、マガシラノホコがルーテシアの魔力色に染まり、
魔力供給を開始する。

「アスクレピオス、限定解除。」

マガノイクタチに蓄えられた電力を魔力に変換し、
それをマガシラノホコを通じて、味方に供給する事ができるのだ。

◆◇◆◇◆

クアットロのＩＳにより慌てふためく管理室に、
セインが催眠ガス入りの爆薬を放る。

それにより、管理室は簡単に陥落した。

◆◇◆◇◆

「ここか。」

そして、その奥の電力室では、
ネブラが作っておいた箇所からチンクが侵入を終えていた。

スティンガーを取り出し、的確な箇所へと放って突き刺す。

「ＩＳ、ランブルデトネーター。」

轟音と共に爆発が巻き起こり、その一帯を火の海へと変えた。

その影響で防壁の出力が落ちたのを確認してから、

ルーテシアが遠隔召喚でガジェットを召喚する。

◆◇◆◇◆

［よぉし、ディエチ、やるぜ。］

「うん、ヘイル。」

そして、地上本部から距離を取っていたディエチに、ヘイルから通信が入る。

ヘイルはネブラのマガシラノホコからの魔力供給で、

彼女の不可視能力をその身にまといながら静かに接近していた。

［俺も所定の位置に着いた。
やれ。］

「ＩＳ、ヘヴィバレル。
バレットイメージ、エアロズル・シェル、発射。」

引き金を引き、巨大な収束砲を放つ。
それは見事に地上本部を捉え、一部を破壊した。
それを見たヘイルは笑っていた。
「壊れていくぜ。
脆い、脆すぎるぜぇ！」
ネブラの不可視能力を解除し、全砲門を開く。
拡散砲と収束砲、肩部にミサイルとバルカンを併用するポッドがある。
「ＩＳ、ヘイル・フルブラスト。」
一遍に砲火を放つ。
それは、ＩＳによって不規則な箇所に降り注いだ。
まるで火薬の雹のように。
その砲火に怯んでいる間に、ガジェットが特攻を開始していた。
◆◇◆◇◆

そして、別空域ではトーレとセッテ、加えてヴァンがいた。

「セッテ、お前は初戦闘だが。」

「心配ご無用。
伊達に遅く生まれていません。」

セッテはブーメランを構え、戦闘態勢に入る。

トーレもライドインパルスを発生させ、迎撃に出た魔導師を叩き潰していく。

「元気ねぇ……。」

それを遠目に見ていたヴァンだったが、背部の収束砲を前面に突き出す。

「アムフォルスタ。」

翡翠色の砲撃を、2人が取り漏らした魔導師に容易く当てていた。

「堕天使……。
今日のミラージュの相手はきついわよ。」

◆◇◆◇◆

ゼストはスピードを活かし、地上本部に接近していた。
すると、どこからか警告が聞こえてきた
「こちら管理局。
あなたの飛行許可と、識別コードが確認できません。
ただちに停止して下さい。
それ以上近づけば、迎撃にでます。」
それでも突き進むと、目の前からいきなり魔力弾が飛んできた。
「ニャロォ！」
追尾弾だとすぐに判断したアギトがそれを破壊するが、
完璧には破壊できず、実弾が2人に迫ってきた。
それを既の所でゼストがシールドを展開して防ぐ。
だが、その好機を逃さず、ヴィータが背後からアイゼンを振りかぶる。
「ギガントハンマー！」
それはゼストを捉えたかに見えた。
だがそれは外れ、相殺と防御で防がれた。
「それでもダメージは通した。
続けてぶっ潰す！」

そう宣言したヴィータの眼前には、
いつの間にかアギトとユニゾンをしていたゼストがいた。

「すまんな、アギト。」

［なんのこれしき。
旦那の為ならいいって事よ。］

「管理局機動六課、スターズ分隊副隊長、ヴィータだ！」

「ゼスト。」

名乗ってから彼は機動六課と聞いて、彼を思い出す。
かつて自分の部下をしていた少年。
今はしっかりとした一人前の男。

（ヴィレイサー……。
お前との約束だけが、心残りではあるな。）

口の端に笑みを浮かべ、ゼストはヴィータと対峙した。

第９話　「止まらぬ破壊の闇」　了

第9話　「止まらぬ破壊の闇」（後書き）

鮮血
「さて、今回はヴィレイサーが出ているので、シャマルにお願いします。」

シャマル
「はーい。」

鮮血
「とは言っても、敵が動き出したぐらいしか進展は無いんだけどね。」

シャマル
「充分じゃないかしら？
けど、エクシーガの名前が出てきたわね？
彼女も同系統の切り札があるのね。」

鮮血
「そうだね。
堕天使のヴィレイサーと、それの対になる感じで。」

シャマル
「ヒロインに昇格したフェイトちゃんじゃないのね。」

鮮血
「まぁ、それはスルーして。」

シャマル

「そんな・・・。」

鮮血
「あ、七星の各キャラ設定も追加しました。
ネブラの特殊装備については、そちらを参照してくださるとありがたいです。」

シャマル
「それで、次回は？」

鮮血
「次回はいよいよ、ミラージュとの再戦です！
そこでなんと、ヴィレイサーが！？」

シャマル
「ど、どうなるの！？」

鮮血
「・・・。」

シャマル
「ちょっと！？」

鮮血
「まぁ、うん・・・。」

シャマル
「何！？
何が起こるの！？」

鮮血
「簡単に言うと・・・。
って、ネタバレになるんだから言える訳ないだろ！」

シャマル
「ケチ！」

鮮血
「次回も是非ご覧ください。」

シャマル
「感想、誤字脱字、お願いします。」

第１０話　「墜ちる者達」（前書き）

鮮血
「皆様、明けましておめでとうございます。
今年もよろしくお願い致します。」

フェイト
「あれ？
今日のまえがきは私なの？」

鮮血
「本編の内容の為・・・。」

フェイト
「ヴィレイサー、本当にどうなるの！？」

鮮血
「さぁ？」

フェイト
「さぁ？って・・・。」

鮮血
「ともかく、今回の話は「ヴィレイサーがあああぁぁぁぁ！！！」な話です。」

フェイト
「全然分からないよ！？」

鮮血
「皆さんに驚愕して頂けたらな、と思います。」

フェイト
「新年早々何をする気なの・・・。」

鮮血
「皆さんも、どうぞ、「ヴィレイサーが！？」と驚愕してください。」

フェイト
「えー・・・。」

鮮血
「それでは、第１０話、「墜ちる者達」どうぞ。」

フェイト
「感想、お願いします。」

第１０話　「墜ちる者達」

地下をスバルが先行して進んでいる時、何かが迫ってきた。
スバルは急いで立ち止り、マッハキャリバーが防御を展開する。
だが、スバルに躍りかかった相手を見て、彼女は驚いた。
（あの子、まさか……。）
その為、鋭い蹴りが考え事をしていたスバルを捉えた。
「ウワァッ！」
壁に背中から叩きつけられ、息が詰まる。
「スバル！」
相方であるティアナが急いで傍に駆け寄ろうとするが、
周囲に桃色の魔力弾が出現し、囲まれた。
「クッ！」
動きを制限され、苦い思いをする。
そんなティアナの悔しさを知ってか、知らずか、
奥からもう１人、軽妙な声で話しかけてきた少女がいた。
「ノーヴェ、目的、忘れてねぇっすか？」

ノーヴェと呼ばれた、スバルを蹴った少女は癇に障ったのか、鋭い声で返す。

「うっせぇよ。
旧式とは言え、タイプゼロがこんな程度で沈むかよ。」

「それもそうっすね。」

ノーヴェに話しかけた少女は、何かボードを持って現れた。

（どう脱出するか……。）

チラリとスバルの方を窺うと、気絶しているようにまったく動かなかった。

否、そう見えるだけだろう。

ティアナにはハッキリとわかる。

スバルは今、自分の指示を待っているのだと。

長い付き合いなのだ。

互いに互いの事がわからないほど、自分達の信頼は甘くない。

相手に感づかれないように、ティアナは勝機を見出しに入った。

一方、ヴィレイサーはギンガと共に電力室に向かっていた。

あそこに敵が来るのは予測していた為、まだそう遠くには向かっていないだろう。

だが、ヴィレイサーは急に立ち止まる。

「どうしたの、兄さん？」

ギンガは周囲を窺うが、特に何も無かった。

「ッ！
伏せろ！」

ギンガを自分の所へ引き寄せ、叫ぶ。

その瞬間、２人がさっきまでいた場所の側面の壁が破壊された。

「ギンガ、お前は先行しろ！
コイツは俺がやる！」

「気を付けてね、兄さん。」

「あぁ！」

そう返したのはいいが、彼には勝機があるかわからなかった。

（なんだ、この感じは？
以前のミラージュよりも強い。）

土煙が晴れるのを待っていると、獣の唸り声が聞こえてきた。

「この青銅のような響きを出すのは……。」

「ケルベロスだ。」

ヴィレイサーの言葉を勝手に続けたのは、ケルベロスに騎乗していたミラージュだった。

「やはりお前か……。」

「クックックッ……。
ヴィレイサー、貴様を倒すために肉体をも改造してしまってな。
お陰で強い力を手に入れたが、いつお前を八つ裂きにできるか、
楽しみで仕方が無かったぞ。
さぁ、今日こそ死にさらせえええぇぇぇぇ！！！！」

ケルベロスの雄叫びと重なったかと思うと、ミラージュが騎乗したまま突っ込んできた。

「以前よりも速い！？」

太刀を引き抜かず、跳躍してやり過ごそうとしたが、
ケルベロスの尾がそれを許さなかった。

足を掴まれ、地面に叩きつけられる。

だが、それよりも速くシールドを展開し、それを防ぐ。

それに安堵する暇もなく、
ケルベロスからミラージュがヴィレイサー目掛けて飛び降りてきた。

「死ねえええぇぇぇぇぇ！！！」

鈍い光を放ちながら刃が振り下ろされる。

「くそっ！」

刃の尖端を太刀で止める。

しかし、押し返せずに徐々に死の刃が喉元に迫っていた。

「負けるかあああぁぁぁ！！」

風属性のエレメンタル・カートリッジを使い、風圧で押し返す。

そしてすぐにケルベロスの尾を斬り、その場を離れる。

「逃がさん！」

ミラージュもケルベロスの背に乗り、彼を追った。

◆◇◆◇◆

「アアアアアアアアアア！！！」

「ラアアアアアアアアア！！！」

上空では、ゼストとヴィータが互いの武器と持てる力をぶつけあっていた。

「ゼストっつったな。
目的はあんだ！？　正当なものなら話を聞くぞ！」

「若いな……。」

それだけ言うと、彼の周囲に魔力弾が出現する。
それに呼応するかのように、ヴィータの周りにも同じ数現れる。
その2種の魔力弾が同時に敵に迫る。
爆発が起こるが、2人は既にその場を離れており、巻き込まれる事は無かった。
「だが、いい騎士だ。」
ゼストは顔の端に笑みを浮かべていた。
（ヴィレイサーとも戦えば、このように楽しめたのかもしれんな。だが、それを叶えるには身体が持たないだろう。）
唯一の心残りであり、会いたい部下。
それでも今は、彼を置いて前へと進まなければならなかった。
己が目的を果たすために。

◆◇◆◇◆

ヴィレイサーはケルベロスから距離を取っていたが、思いの外速く、すぐに追いつかれてしまった。

（接近戦に持ち込まれなければ、勝機はある。）

やがて、広い一角に出たので、天井ギリギリの所まで高度をあげる。

「エターナル！」

［Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ，Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

入り口から顔を出したその刹那、すぐさま砲撃を放つ。

「レイディアント・ランチャー！」

「なに！？」

見事に着弾し、轟音が起きる。

仕留めたと思えたが、その安堵は隙に早変わりした。

いつの間にか背後に迫っていた事に、ヴィレイサーは気付く事ができなかった。

ケルベロスの牙が、ヴィレイサーの腹部を捉えた。

「ガハッ！」

鮮血が飛び散り、ヴィレイサーは意識が急激に遠のいた。

出血量からして、急いで止血しなければ、間違いなく死ぬだろう。

「俺の反応速度を甘く見た貴様の負けだ。
安心して死んでゆけ、ヴィレイサー・セウリオン。」

殺すという目的はまだ完遂していないが、もう死を目前にしているのだ。

放っておいても死ぬ事は火を見るより明らかだった。

だが、それでもかろうじて意識を取り戻したヴィレイサーは、太刀をケルベロスの目に突き刺した。

雄叫びにも似た悲鳴をあげ、ケルベロスが暴れる。

その隙になんとか脱し、逃げ出そうとしたが、それは叶わなかった。

ミラージュが立ちはだかったのだ。

「死に損ないが……。」

肉体改造を施しているミラージュは自信がある為、ケルベロスを下がらせる。

「地獄に堕ちろ！」

太刀ではなく鉤爪を使い、肉薄する。

意識が戻ったとはいえ、不利な状況に変わりは無かった。

迫りくる爪を、エターナルからの指示でなんとかかわす。

「ウグッ……。」

「遅いな。
喰らっていいぞ、ケルベロス。」

ミラージュからの攻撃をかわし、再び逃げようとしたが、ケルベロスが牙を剥いた。

「しまっ……。」

噛みつかれ、壁に激突したが、
その壁を粉砕するほど、ケルベロスの勢いは強く、奥のフロアへと突っ込んだ。

そこには、血だらけになったギンガの姿があった。

「ゼロファーストか。
セカンドの方はどうする？」

「今はファーストの方だけで構わんだろう。」

ミラージュの問いかけに答えたのはチンクだった。

その時、咥えていたヴィレイサーを放り、ケルベロスが一点を睨む。

「新たな敵か。
俺は目的を果たした。」

最早微動だにしないヴィレイサーを見下し、

ミラージュは移動魔法を使ってその場を離脱した。
その直後に現れたのは、スバルだった。
「ギン姉？
ヴィレ兄？」
目の前にいる2人の醜態を目の当たりにし、スバルは感情の制御ができなくなった。
「ウ、ウウウ……。
ウウウウアアアアアアアァァァァ！！！！」
感情を爆発させ、本当の自分を――戦闘機人の姿を晒す。
「返せ……。」
低い声でそう言いながら、カートリッジが幾つも射出される。
「ギン姉を……ヴィレ兄を……。
かあああせえええええええ！！！！」
敵を薙ぎ払い、兄と姉を助けるべく駆け出す。
「くっそっ！」
ノーヴェの繰り出す弾丸にも怯まず、突っ込む。
そして、ノーヴェの張ったシールドをいとも容易く打ち砕いた。

ノーヴェを排除すべく、蹴りを繰り出し、ノーヴェもスピードを付けて蹴る。

しかし、スバルの蹴りには敵わず、ノーヴェは吹き飛ばされる。

「ノーヴェ、ウェンディ、2人はここからゼロファーストを連れて脱しろ。」

チンクがスティンガーを投げ、爆発させてスバルの動きを止める。

「堕天使はどうする?」

「そこの窓から外にでも放れ。」

「あいよ。」

ノーヴェは思い切りヴィレイサーを外へと投げた。

「ヴィレ兄!」

スバルは叫ぶが、それに応える事は無かった。

虚空へとその身を抛られた彼は、何をする訳でも無く、落下し、そして窓からは見えなくなった。

そして、それに驚いている間にギンガを連れ去られてしまった。

「ギン姉!」

駆け出したが、再びスティンガーが迫る。

最早ボロボロになっているマッハキャリバーが、主を守るべくシールドを張る。

だが、スティンガーの数が多過ぎた為、全てを防ぎきる事が出来ず、スバルの身体の、戦闘機人である部分が露わになった。

チンクは救出に来たセインにより、なんとかその場を離脱した。

残されたスバルの慟哭だけが、ただ響いていた。

◆◇◆◇◆

一方、機動六課へと向かっていたエリオ達の眼には、燃え盛る炎だけが映っていた。

それを茫然と見つめていると、１つの影が見えた。

「ヴィヴィオが……！」

キャロが驚く中、エリオは自分の出自の事を思い出し、すぐに愛機に呼び掛ける。

「エリオくん！？」

「キャロ、サポートをお願い。」

それだけ言って、エリオは空中へと身を躍らせる。
そしてブーストを使い、ヴィヴィオを連れ去るルーテシアに肉薄する。

「その子を……ヴィヴィオを返せ！」

その叫び声に気付いたルーテシアは、ガリューを差し向ける。
蹴られ、体勢を崩したものの、すぐさま向き直る。
そして、2度目のガリューとのぶつかり合いで、互いに負傷する。
しかし、そこで怯んだのがまずかった。

「少しはやるようだな、小僧。」

そう言ってエリオの背後に現れたのはゲイルだった。
振り向き、気付いた時には、
ゲイルの2対のウィングソーという大剣が振り下ろされていた。

「エリオくん！」

遠くでキャロの声が響いたが、それはすぐに聞こえなくなった。
オットーが彼女に気付かれない内にバインドをかけたのだ。
成す術無く、キャロは海中に落ちていった。

「Fの遺産を回収する事は無理だったか。」

ウィングソーを腰に戻しながら、傍に来たディード達に詫びる。

「気にせずとも、その内向こうから再び来るでしょう。」

「ここはガジェット達に任せ、我々は撤退しましょう。」

「そうだな。
ルーテシアもそれでいいか？」

「うん……。」

六課を燃やし尽くす地獄の業火のような炎だけが、音をあげていた。

第１０話　「墜ちる者達」　了

第１０話　「墜ちる者達」（後書き）

鮮血
「はい、と言う訳で……「ブラックエンドギャラクシー！！！！」
……ギャアアァァァ！？」

なのは
「な、何事！？」

優星
「貴様！
よくも・・・。
よくもヴィレ兄を！」

なのは
「ちょ、ちょっと！
抑えて、優君！」

鮮血
「グフゥ・・・。」

優星
「離せー！！！」

◆

鮮血
「えぇ、今回はゲストとして天照大神先生の作品、
『魔法少女リリカルなのは～転生せし物語～』の主人公、津川優星くんに来て頂きました。」

優星
「どうも。
では、もう1度・・・。」

鮮血
「止めてくれ！」

なのは
「優君が怒るのも無理は無いよ！
だって、ヴィレくんが・・・。」

優星
「そうだ！
よくもヴィレ兄を！」

鮮血
「だってぇ、書きたかったんだもん。
こういう風にボロボロになったりする主人公を。」

なのは
「何もここまでしなくても・・・。」

鮮血
「精神的にボロボロになる主人公はたくさんいるけど、

こうやって肉体的にボロボロになる主人公はそうはいないじゃん。
だから、こうしたかったんだよ！」

なのは
「そんな理由って・・・。」

優星
「率直に聞くけど、ヴィレ兄は生きてるのか？」

鮮血
「さぁ？」

優星
「真面目に答えてよ！？」

鮮血
「答えたらつまんないじゃん。
けど、よく考えてよ・・・。
ヴィレイサーが投げ出された時の出血量とか、窓の高さとか。」

なのは
「と言うか、アニメだとあそこは地下なんじゃ？」

鮮血
「はい。
なので仕様を変えました。
あそこは地下では無く、どこかの階層です。
何階かは明確に決めていませんが。」

優星

「やっぱり、ヴィレ兄は・・・。」

鮮血
「そう。
死んだんだよ。」

なのは
「そうなの！？」

鮮血
「さぁ？
まぁ、常識的に考えたら無理だろうね。」

なのは
「そんな・・・。」

優星
「やっぱり貴様は許せない！
他の方々の怒りも含めて喰らえ！」

鮮血
「ヴィレイサーってそこまで人気有るの？」

なのは
「わ、分かんない・・・。」

鮮血
「優星くん以外に怒る人、いるかな？」

なのは

「いると思うよ。」

鮮血
「ヴィレイサーが死んだかどうかは分からないってのに・・・。
何で怒られなきゃならないんだ・・・。」

なのは
「それより優君、宣伝。」

優星
「そうだった。
僕が出ている作品、『魔法少女リリカルなのは～転生せし物語～』は、
突如神様から別世界を救ってほしいと言われた、僕、津上優星が、
リリカルなのはの世界へ転生し、介入していくお話です。」

鮮血
「優星くんのフラグ構築力は凄まじいです！」

なのは
「にゃはは・・・。」

優星
「で、ＳｔＳ－Ｊの次回は！？」

鮮血
「次回は六課の修復と、戦闘機人についての解説をします。
そして、七星がスカリエッティと与している理由もちょこっとだけ。」

なのは
「珍しいね。
作者が戦闘機人の説明を入れるなんて。」

鮮血
「実は、その戦闘機人についての説明が、後に重要な意味を持つんだよ。」

優星
「で、ヴィレ兄は!?
帰ってくるの!?」

鮮血
「いい加減、諦めたら?」

優星
「その言い方だと、ヴィレ兄が死んだみたいじゃないか!」

鮮血
「まぁ、どうなるかはお楽しみって事で。
僕も分からないし。」

なのは
「それはどうなんだろう・・・。」

鮮血
「感想、お願いします。
それと、天照大神先生、優星くんのあとがき参加、
ありがとうございました!」

第１１話　「羽ばたく時」（前書き）

鮮血
「レポートが本格的にヤバイ・・・。」

キャロ
「それなら休載した方が・・・。」

鮮血
「もう間に合わないからいいよ。」

キャロ
「身勝手ですね・・・。
そして、ヴィレイサーさんに関しても・・・。」

鮮血
「その事を掘り返さないでよ・・・。」

キャロ
「それで、今回のお話は？」

鮮血
「前回も言ったように、戦闘機人についての説明をします。
そして、とある人が登場しますよ～。」

キャロ
「それって、もしかして・・・。」

鮮血

「では、どうぞ。」

第１１話　「羽ばたく時」

幾つもの報道ヘリが空を駆け、地上本部の凄惨さを伝えていた。
それをチラリと地上から見ていた女性は、すぐに現場に視線を戻す。
銀の髪を揺らし、彼女は周囲を見回し、事件に繋がる何かを必死に探す。

「ほとんど無い……か……。」

呟いた時、別の捜査員の足音が複数聞こえてきた。
急いで場所を移動し、見つからないようにする。

（管理局の服を着ているから、無理に隠れなくてもいいんだけどね。）

それでも、できるだけ相手に顔を見られたくは無い彼女は、走り、姿を隠す。

そして、ある１箇所で足を止めた。
公開意見陳述会が行われていた会場を設けていたビルだ。

（『ヴィレイサー』は、あの階層から落とされたのよね。）

頭を振り、事件の方に集中する。

だがそんな彼女に、戻るようにとの指令が下された。

「了解。」

指令に返事をし、空間から長剣を出現させる。

「帰るわよ。
アタラクシア。」

［Ｙｅｓ，ｓｉｒ．］

自身のデバイスに告げ、デバイスの方もそれに応える。

［Ｈｏｍｉｎｇ　Ｄａｓｈ．］

移動魔法を使った瞬間、その女性は神隠しにでもあったかのように消えていた。

同時刻。

現場をシグナムに替わってもらったティアナは、スバル達がいる病室に到着した。

ノックをして中に入ると、エリオとキャロがほぼ同時に彼女の方を向いた。

それに遅れて、スバルもティアナを見た。

「ティア……。」

相方のあまりの暗さに、息をつき、ビニール袋を見せる。

「差し入れ、持ってきたわよ。」

3人の近くに歩き、机に袋を置いて中から適当な物を渡していく。

「どうせ3人とも、ろくな物食べて無いんでしょ？」

「ありがとうございます。」

キャロはそれを受け取り、顔をほころばせる。

「ん。」

椅子を引き寄せて座り、ティアナはスバルに缶ジュースを渡す。

「ありがとう……。」

受け取ったそれを飲もうと、プルタブを開ける時動かした左手から、わずかに機械音が聞こえてきた。

「腕、もう動かせるんだ。」

「神経ケーブルがいっちゃってたから、まだうまくは動かせないんだけど……。
何日かで元通りだって。」

そう言ってから、スバルは一口飲み物を口に運ぶ。

「そう……。
チビッコ達には、どこまで？」

「あたしとギン姉の生まれとか……。
ヴィレ兄の生まれの事も。」

「悪かったわね。
私が止めてたの。
スバルの体の事、しばらく秘密にしておきなさいって。」

ティアナの謝罪に、キャロとエリオは首を振る。
だが、2人は顔を見合わせ、暖かいスープなどを貰ってくると言って、病室を出ていった。
気まずい空気が、しばらくスバルとティアナの間に流れるが、スバルが先に口を開く。
「ティア、ごめんね……。」
「何に対しての「ごめん」よ、それは？
私やなのはさんの命令を無視して、先走った事？
それとも、大怪我して皆に迷惑かけた事？」
「いろいろ……。」
「後でマッハキャリバーにも謝っておきなさいよ？
ヒドイ破損状況だったんだから……。」
「うん……。」
力無く頷くが、ティアナはそれを聞いて、一番聞きたい事に移る。
「ねぇ、ギンガさんは亡くなってないのよね？」
「あれくらいの負傷なら、蘇生できると思う……。
「タイプゼロを回収」とか言ってたし、殺したりはしないと思う。
」

「なら、助けに行けるチャンスがあるって事でしょ？」

それを聞き、スバルはハッとした。

「なのはさんが言ってた。

「私達はこれから、レリック事件からスカリエッティの追跡に切り替わる」って。

ギンガさんの事は、私だって悔しい……。

でも、六課で動くんだったらチームで助けに行ける。

エリオやキャロだって、隊長達やロングアーチの皆だって、きっと悔しいわ。

大事な物を奪われて、守れなかった事……。」

ティアナは椅子から立ち上がり、スバルの顔を覗き込みながら言う。

「だから、今度は失敗しない。

必ず守るし、奪われた物は奪い返す、助け出す。　全部よ。」

「うん！」

ティアナの励ましに、スバルは力強く答えた。

◆◇◆◇◆

「ねぇ、ニクス？」

ネブラがずっと考えていた事を打ち明けるように口を開く。

「なんだい？」

「ヴィレイサーって、本当に死んだの？」

ピクリと眉を動かし、今度はニクスが不思議そうに聞く。

「どうしてそう思うんだい？」

「この目で見ないと信じられないの、私は。」

橙色の両目をニクスに近づける。

「そうは言われても、ミラージュの戦闘データは見たんだろ？だったら、それを信じてもらうしか他に無いよ。」

「そうなんだけど……。」

ネブラにしては珍しく、歯切れの悪い言い方をする。

「何か気になる事でもあるのかい？」

「実は、見慣れない奴が一瞬だけ見えた気がするの。」

「「気がする」っていうのは？」

「本当に一瞬だけだったから、わからなくて……。」

それを聞き、ニクスは考え込んだ。

「それは、どんな感じだったか覚えているかい？」

「えっと、紅い何かが走った気がする。」

「紅い、何か……。」

だが、彼の記憶にはそれに該当する人物が思い当らなかった。

「気にする事無いよ、ネブラ。
それより君は、魔力をできるだけたくさん集めてきてくれ。」

「あぁ……。
聖王の器が手に入ったからね。
でも本当に、ゆりかごよりも下層にあるの、アレ？」

「もちろん。
僕らの主は、あそこにいるよ。」

ニクスの確信じみた答えに、ネブラは納得するしか他に無かった。

「もうすぐですよ、我らが主……ゼウス様……。」

椅子の背もたれに寄りかかり、ニクスはそう呟いた。

◆◇◆◇◆

夕焼けに染まる中、なのは達はゲンヤの元を訪れていた。

「さて、どっから話したもんかな……。」

その質問には、モニターに映ったクロノが答えた。

［三佐が追っていらした、戦闘機人事件からでしょうか。］

「できれば、スバルやギンガの事、そして、ヴィレイサーと奥様の事も。」

そして、それに加えるように、フェイトが身を乗り出しながら言う。

「あぁ……。
戦闘機人の大元は、人型の戦闘機械。
こりゃあ、随分と前からある研究でな。
古くは、旧暦の時代からだ……。
人間を模した機械兵器。
幾つもの世界で、色々な形式が開発されたが、物になった例はあまり多くねぇ。」

そこまで語り、1度手を握り直す。

「それが……ある時期、劇的な進化を遂げた。
２５年ばかり前の事だな。」

それを引き継いだのはクロノだった。

［機械と生体技術の融合自体は、特別な技術じゃない。

人造骨格や、人造臓器は古くから使われている。
ただ……。」

言い淀んだクロノに次いで、カリムが語りだす。

「足りない機能を補うのが目的ですから、強化とは程遠く、
拒絶反応や、長期使用におけるメンテナンスの問題も有ります。」

「だが戦闘機人は、“素体となる人間の方を弄る事”で、それを解決しやがった。」

ゲンヤの口から出た真実に、皆、驚くしかなかった。

「誕生の段階で、戦闘機人のベースとなるよう……。
機械の体を受け入れられるよう、調整されて生まれてくる子供達。
それを生み出す技術を、あの男は作り出した……。」

「それが、ジェイル・スカリエッティ……。」

カリムの言葉と同時に、モニターにスカリエッティの情報が映し出される。

「11年前、まだスカリエッティなんて野郎が関わってるなんて知らなかったが、
ウチの女房は、陸戦魔導師として、捜査官として戦闘機人事件を追っていた。
違法研究施設の制圧、暴走する試作機の捕獲……。
スバルとギンガは、事件の追跡中に女房が助けた、戦闘機人の実験体なんだ。
ウチは、子供ができなくてな……。

2人とも、髪の色や顔立ちが自分とそっくりだからってよ。」

そこで一息つき、その時の事を思い出すようにしばし目を閉じた。

「そして、娘として……。
人間として育てるって言いだした。
技術局のメンテだのなんだのはあったが、2人とも実に普通に育ったよ。
ヴィレイサーを見つけたのは、それから数年後だ。」

パネルを操作し、あどけない顔立ちをした少年と、2人の少女が遊んでる写真を出す。

ヴィレイサーと、スバル、ギンガだ。

「ヴィレイサーも、違法施設の制圧時に助けたんだ。
最初は俺達に少し警戒気味だったんだけどな。
女房の人柄のお陰か、アイツは俺達に心を開いてくれた。
だが、アイツの体に組み込まれた遺伝子情報は、制圧時に一緒に吹き飛んだみたいでな。」

苦笑いし、別の物をモニターに出す。

「だが、スカリエッティの話だと、同じ遺伝子情報を持つ者同士は、互いに相手を感知できるらしいんだ。
で、今わかってるのは、これだけだ。」

「七星の全員……。」

「それと、奥様の遺伝子。」

「後は、暴走の抑制遺伝子として、エクシーガのか……。」

「そうだ。
で、アイツの話じゃあ、抑制遺伝子があまり効果を発揮していないらしい。」

「数多くの遺伝子がある為、抑制しきれていない……。」

フェイトが沈痛な面持ちで言い、ゲンヤは頷いた。

「あぁ。
処方してくれた薬で、なんとか進行を遅らせてはいるみたいだが、それもいつまで持つか……。」

「でも、ヴィレイサーは……。」

「確かにアイツは今、行方不明だ。
だがな、俺はアイツが生きていると信じてる。」

[それはまた、何故ですか?]

クロノに問われ、そちらに向き直る。

「スバルから聞いた話じゃあ、かなりの出血量だったらしいが、それが会場の外では一切見当たらない。
しかも、デバイスがなんの反応もしない事を考えると、どこかでひっそりと傷を癒してるのかもしれねぇ。」

ゲンヤの言葉に、誰も、何も言えなかった。

そんな考えは最早、絶望的なのだから……。

◆◇◆◇◆

そして、スカリエッティのラボでは、チンクの容体をノーヴェ達が気にしていた。

「チンク姉の様子は、どう？」

セインはノーヴェ達に駆け寄りながら聞く。

「基礎フレームの破損が、かなりな。」

ノーヴェが暗い声で言う。

「ゼロセカンドのＩＳ、振動破砕って、
私達のフレームとかに、もの凄い威力が出るみたいね。」

クアットロが興味深そうにパネルを操作する。

「対人、対物に対してもかなりの威力か……。」

「まともに当たりゃあ、間違いなく一撃必殺か。」

セインの呟きに、ノーヴェは自分の右腕と、生体ポットに眠るチン

クを交互に見た。

「あたしらと生まれ方が違うけど、オリジナル……。」

セインとウェンディが、チンクと同様に眠っているギンガを見る。

「ドクターの技術が使われているのは確かだけど、誰が造ったのかは不明ね。」

「そんなん興味ねぇ！
あのハチマキ、今度会ったら必ずぶっ壊してやる！」

ノーヴェの怒りは尤もだったが、クアットロが回収しろと言ってきた。

「チンク姉の仇、必ず討つ！」

（威勢のいい事だ。）

それを傍から見ていたゲイルは笑った。

（それにしても……。
彼奴は本当に死んだのか？）

ゲイルもネブラ同様、ヴィレイサーの行方を気にしていた。

ヘイルに現場を見てきてもらったが、奴の痕跡は無かった。

しかしそれは、逆を言えば、死んでいた痕跡も無いという事だ。

（彼奴は本当に死んだのか、それとも、或いは……。）

◆◇◆◇◆

一方、はやてはある一隻の船を見ていた。

そんな彼女の後ろから、アコースが駆け寄る。

「はやてとクロノくんの頼みだから、なんとか許可は取れたよ。」

「これからの事考えると、本部は移動できた方がええからな。」

視線を船に戻し、優しく呟く。

「アースラ、お休み前に、もう少し手伝ってな。」

第１１話　「羽ばたく時」　了

第11話　「羽ばたく時」（後書き）

鮮血
「11話でした～。」

キャロ
「あの～・・・。」

鮮血
「何？」

キャロ
「ヴィレイサーさんは？」

鮮血
「え？」

キャロ
「だから、ヴィレイサーさんは？」

鮮血
「何で？」

キャロ
「何でって・・・。
だって、生きてるんじゃあ・・・。」

鮮血
「誰もそんな事言って無いよ。」

キャロ
「そ、そうですけど・・・。
じゃあ、最初に出てきたあの方は？」

鮮血
「さぁ？
誰でしょうね。」

キャロ
「不明な要素が増えただけですね・・・。
七星の目的は、主の復活という事らしいですけど・・・。」

鮮血
「文中にもある通り、七星の主はゆりかごよりも下層に封じられています。
ゆりかごがどかない限り、主を復活させる事は出来ないんだよ。」

キャロ
「だからスカリエッティと行動を共にしている訳ですね。」

鮮血
「そういう事。
あれほどの巨大な艦なんだから、アレが出た後の穴は利用できると思ったんだ。
だから、ニクス達の目的に利用しました。」

キャロ
「それで、次回は？」

鮮血
「次回はいよいよ・・・。」

キャロ
「ヴィレイサーさんが帰ってくるんですか!?」

鮮血
「まだ何も言って無いよ。」

キャロ
「むぅ・・・。」

鮮血
「次回は、アインヘリアルを防衛する部隊と、七星の対決です。
いよいよ、ニクスがその力を見せますよ~。」

キャロ
「それで、ヴィレイサーさんは?」

鮮血
「それでは次回、「欲望に染まった絶望　臥した希望」をお楽しみに~。」

キャロ
「ちょっと!?
か、感想、誤字脱字、お願いします。」

第１２話　「欲望に染まった絶望　臥した希望」（前書き）

鮮血
「すみません・・・。
レポートやら課題やらで、すっぽかしてしまいました・・・。」

スバル
「それに、擬人化小説の事もあったもんねぇ。」

鮮血
「まぁね。
さて、今回はアースラに乗り込んだ六課陣と、
七星によるアインヘリアルの破壊活動です。」

スバル
「七星は一体、どんな力を持っているんだろ？」

鮮血
「それはお楽しみ。
そして、最後には・・・。」

スバル
「な、何！？」

鮮血
「それでは、第１２話　「欲望に染まった絶望　臥した希望」、どうぞ。」

第１２話　「欲望に染まった絶望　臥した希望」

［ルキノ、コントロールは大丈夫？］

「はい、フェイトさん。」

モニターに映し出されたフェイトに、ルキノは答える。

「アースラの事は、隅から隅まで知ってますから。」

それを聞いたフェイトはホッとした。

「あの、フェイトさんはもう大丈夫なんですか？」

［私？］

「はい。
その……ヴィレイサーさんの事……。」

［まだ、本決まりじゃないよ。
それに私は、ナカジマ三佐の言葉を信じてるから。］

「そうですね。
どちらにせよ、なんの痕跡も見当たりませんでしたし……。」

［うん。
だから信じよう……？
ヴィレイサーが、戻ってくる事。］

「はい。」

◆◇◆◇◆

Ｓｉｄｅ：フェイト

ルキノとの通信を終え、私はフーッと息を吐く。

ヴィレイサーの話が出たので少し緊張したが、今はもう落ち着いている。

（なのはのお陰かな……。）

このアースラに移る前、自分はなのはに励まされた。

信じて待つ事が、今の私達にできる、最善の選択だと。

そう言われ、私はかつてヴィレイサーに言った事を思い出す。

エクシーガに敗れ、己の存在を探していた時だったか……。

互いの事を話し、だがヴィレイサーは、“信頼”をしていなかった。

裏切られた時、辛いのは誰だかを知っているから……。

デュアリス達からも距離を置き、常に１人の道を選び続けていた。

恐らくそれは、かつて所属していた部隊が壊滅した事によるものだろう。

だから彼は悲しい目をしながらも、1人を選んでいた。

そんな彼に私は、どこか同じような気がした。

自分にも、そんな風に悲しい目をしていた時期があったから。

それを断ち切りたくて……。

なのはが自分を救ってくれたように、私も彼を救いたくて……。

そんな気持ちで、私はヴィレイサーに言ったのだ。

――私はとことんヴィレイサーを『仲間』として信じ抜く。

――いつも、いつまでも。

――あなたは優しいから、必ずそれに答えてくれる。

（そうだった。
私は、ヴィレイサーを信じ抜くんだった……。
なのに、彼がいなくなったと勝手に決めつけて……。）

傍にある写真に視線を向ける。

そこには、笑顔の自分と、それに微笑するヴィレイサーが写っていた。

（お願い、ヴィレイサー……。
必ず帰ってきて……。）

手を結び、窓から見える蒼天に祈った。

Ｓｉｄｅ：フェイト　了

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第１２話　「欲望に染まった絶望　臥した希望」

本局の一部屋では、スバルとマリエル技官がいた。

［うん。
神経ケーブル系統は、完全回復してる。
全力で動かしても、痛みは無いはずよ。］

「はい。」

診察台から起き上がり、拳を握り、空を突く。

違和感無く打てた事に喜び、マリエル技官に感謝する。

その後すぐに、愛機――――マッハキャリバーの元へと向かった。

「ごめんね、マッハキャリバー。
私の事、怒ってるよね……。」

［『怒る』という感情は、恐らく私にはありません。
心配無用です。］

そう返されたものの、スバルの心配は罪悪感は消えなかった。

「マッハキャリバーはＡＩだけど、心があるって……。
一緒に走る相棒だって、言ったのに……。
私あの時、マッハキャリバーの事まったく考えてなかった。
自分勝手に……道具扱いして……こんなに、傷付けちゃった……。」

［Ｎｏｎ！］

スバルの涙ぐんだ声に、マッハキャリバーがピシャリと言う。

その声に、スバルは愛機の方を向く。

［問題があったのは私です。
あなたの全力に応えられなかった、私の力不足です。］

「マッハキャリバー……。」

そこへ、マリエル技官とシャーリーが入ってきた。

どうやら、今後のデバイス達の事についてやるらしい。

そこでスバルは、マッハキャリバーの想いを聞く。

［もう１度チャンスを下さい。
今度は必ず、あなたの全力を受け止めます。
あなたがどこまでも、走れるように……。］

その想いにスバルも応えるべく、涙を拭い、向き直る。

「うん……。

今度は一緒に走ろうね、マッハキャリバー……。」

◆◇◆◇◆

ズドォォォン！

ガキィン！

訓練シムに戦いの音が響き渡る。

「ウワアアアアァァァァ！？」

「ハアアアアァァァァ！！！」

弾き飛ばされたエリオに、レヴァンティンを上段に構えたシグナムが躍りかかる。

それに臆する事無く、エリオはストラーダを構え、迎え撃つ。

そして、２人がぶつかり合い、爆発が起こる。

近くにいたフリードが驚くが、２人は無事で、得物を相手に向けたままだった。

そこに、アラームが鳴る。

「今日の訓練はここまでだ。」

「はい。
ありがとうございました。」

息を切らせながらも、シグナムに礼を言う。

「相変わらず何かを教えられる訳ではないが、大丈夫か？」

「大丈夫です。
色々、盗ませてもらってますから。」

「生意気な。
フェイト隊長に心配かけてもいかん。
あんまり無茶するなよ。」

レヴァンティンを待機状態に戻し、シグナムはシムを出ていった。

「テスタロッサ。」

シムを出た所で、シグナムはフェイトと出くわす。

「ウチのエリオがお世話になってます。
シグナム師範代。」

微笑み、２人は別室へと歩き出した。

◆◇◆◇◆

一方、ニクス達七星と、戦闘機人達は、アインヘリアルの破壊活動を行っていた。

ヘイルの黒光りする砲身が火を吹き、迎撃に出た戦車を吹き飛ばす。

「弱いくせに戦ってんじゃねぇよ！」

ミサイルとバルカンを併用した肩部のポットを開き、戦場に火薬の雹を降らせる。

火薬の雹が着弾し、周囲は火の海に包まれた。

◆◇◆◇◆

「カートリッジ、ロード。」

背負ったバズーカを構えながら、カートリッジを消費する。

それを、自分に向かって攻撃してくる者達、否、アインヘリアルに向ける。

「貴様らが避ければアインヘリアルに当たるぞ。」

そう警告し、魔導師達がアインヘリアルの方を向く。

その瞬間、レーゲンは引き金を引いた。

「ゲイボルグ！」

射出された弾丸は速く、迎撃に出ていた魔導師達には止められなかった。

それは見事にアインヘリアルに当たり、爆散する。

「命を張って守れないか……。」

足に備えてある剣の柄を二刀に引き抜き、魔力刃を出現させる。

「死なないと過信しているのなら、戦場に出るな！」

肉薄してくる鬼神に、局員たちは成す術無く落ちていく。

◆◇◆◇◆

「なんとしてでもここは守り抜け！」

指揮官らしき男の声が響き、残りの隊員達はそれに答える。

「何故こうも簡単に……。」

苦々しく呟くが、近くで爆発が起こり、その炎に飲み込まれた。

「つまんないの。
ここまで弱いなんて……。」

空間が歪んだかと思うと、そこから姿を現したのは、
真紅のバリアジャケットに身を包んだネブラだった。

「幻覚に遊ばれるなんて、弱い……。」

背後を振りかえり、複数のネブラに苦戦している局員達に呟く。

彼女のＩＳの１つ、『ネブラ・バルーン』。

これは、空気中の水分を使い、霧を無理矢理発生させる。

その後、その霧を媒介に、微量な魔力で霧を繋ぐ。

そうすると、ネブラと同じ姿をした霧の人形が完成するのだ。

それを複数簡単に生成し、戦わせている間に、
自分は不可視能力、『ネブラ・ステルス』を使って、指揮官を制圧できるのだ。

「これがアインヘリアルねぇ……。」

自分よりも遥かに大きい兵器を見上げ、ポツリと呟く。

「これを逆に利用させてもらうわよ。」

ニィっと厭らしい笑みを浮かべ、上に飛び乗る。

「マガノイクタチ！」

ネブラの声に目覚めたかのように、マガノイクタチは展開され、まるで、アインヘリアルに噛みつくかのように接続される。

「アインヘリアルの電力を暴走させて……。」

今まで各所から貰ってきた電力をアインヘリアルに逆流させる。

その放電の様子に、他の局員達が気付き、すぐさまネブラに銃口を向ける。

「もう遅いよ……。」

ネブラの言った通り、アインヘリアルは暴走寸前だった。

だがその前にやる事がある。

「あなた達が壊してくれた、ネブラ・バルーン。
周囲にまだ浮遊してるよ。」

クスクスと無邪気に笑い、慌てている相手を見て、機嫌を良くする。

そして、右手を虚空へ挙げ、バルーンに命じる。

「モード、スリープ。」

霧になり、浮遊していたバルーン達は、催眠ガスに早変わりし、局員達を気絶させる。

「魔力を吸い出して。」

そして、霧に包まれたその空間にいる者達は、一斉に魔力を吸い出された。

「チェッ。
たったこれだけだなんて……。」

集まった魔力の総量をマガノイクタチに収め、残念そうに言う。

「これじゃあ、あたし達の『主』が復活するのはまだ難しいかな？」

転移しながら言ったその言葉を聞いていた者など、当然、いるはずもなかった。

◆◇◆◇◆

「フフン♪」

ウェンディが魔導師の頭を踏みつけ、機嫌良く笑う。

「いやぁ～、データ蓄積のお陰で、随分と楽に動けるようになったっすねぇ。
ねぇ？　オットー、ディード、そう思わねぇすか？」

気楽に言ったウェンディだったが、オットーとディードの2人は何も答えなかった。

「ウッ……。
あたし、この2人苦手っす……。」

そう呟いた時、トーレから通信が入る。

［ウェンディ、2号機の方は私とセッテ、ノーヴェで潰した。］

「こりゃあ、お疲れっす。」

［そっちも終わったか？］

トーレから代わって聞こえてきたノーヴェの声に、ウェンディは頷いてから返す。

「もちろん、完全制圧っす。
オットーとディードが、本体にザックリ、ダメージを。
で、1号機はクア姉とセイン姉と、ディエチ。
4号機はヘイル、5号機はレーゲン。
んで、後は6号機をネブラが。　後は7号機っすけど……。」

まだ終わって無い為、少し不安な声になる。

［やってるのはニクスだったな。

奴の戦い方は、我々もまだ1度も見ていないから、気にはなるが……。」

「まぁ、簡単に終わるっすよ。
なんてったって、七星のリーダーなんすから。」

◆◇◆◇◆

「後はこの7号機だけだと!?」

聞かされた報告に驚く指揮官に、更に状況説明が聞こえてきた。

「隊長、敵が来ました!」

「射程距離になったら撃て!」

「はい!」

慌ただしく動き出す局員を見下し、ニクスは嗤った。

「『人間』は愚かだね。
敵を見たら、すぐに武器を取り、攻撃する。
それが敵わないと知りながらも……。」

敵の射程距離に入らない位置で止まり、純白のバリアジャケットを展開する。

そして、初めて自分の武装を見せる。

「ＩＳ、ニクス・アーセナル。」

彼の背後の空間に、１本線が入り、その空間が開く。

そこからは、雪が風と共に吹きすさび、寒さを一気に増す。

そして、露わになったその武装は、円錐型と、スクエア型の砲身だった。

それらの砲身は、空間から少し顔をのぞかせただけで、待機している。

「行け、ドラグーン。」

そう言いながら、右手を敵に振り下ろす。

それが合図となり、ドラグーンと呼ばれた数多くの砲身が、一斉に迫る。

砲身は敵の攻撃を悉くかわし、逆に砲撃をあてる。

ニクスはそれをただ見下ろしているだけに見えたが、

数多くのドラグーンの制御は、彼にも大きな負担となっている。

「もうそろそろいいか。」

ポツリと呟き、円錐型のドラグーンを３つ。

スクエア型のドラグーン８つ残す。

そして、ニクスは右手に魔力刃を発生させる複合シールドを持ち、残った局員に肉薄する。

「な、なんだ、コイツは……。」

あまりの圧倒的な力の差に、目を見開いているしかなかった局員の叫びに、

ニクスは嗤って答えた。

「僕は……いや、僕らは、『神』だ。」

その言葉は、ドラグーンからの一斉砲撃によって爆散させられたアインヘリアルの轟音に紛れ、

誰にも届く事は無かった。

◆◇◆◇◆

［ドクター、アインヘリアル、全機破壊完了しました。］

ウーノからの通信に、スカリエッティは頷き返した。

［あなたの娘達も、本部に向かってます。］

ニクスからの通信を別モニターに映し、そこにナンバーズ達が見える。

「いよいよ復活の時だ……。」

両手を高々に挙げ、笑みを浮かべる。

「私のスポンサー諸氏。
そして、こんな世界を創り出した管理局の諸君。」

全周波数に無理矢理割り込み、スカリエッティは丁重に、
だがしかし、憎たらしい口調で告げていく

「偽善の平和を謳う聖王教会の諸君。」

彼のアジトの外では、ルーテシアが召喚した地雷王が地震を起こしていた。

そして、幾つかの岩肌が砕けるとともに、
スカリエッティが求めてきた『力』が姿を現す。

「見えているかい!?
これこそが！　君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力!!」

高らかに宣言した、その刹那。

大地を切り裂き、そして揺り動かして、『それ』は浮上した。

「旧暦の時代、一度は世界を席捲し、
そして世界を破壊した古代ベルカの悪魔の叡智。」

「『聖王の揺り籠』だ！」

◆◇◆◇◆

「アレが、『聖王の揺り籠』……。」

ゲイルはそれを一瞥したが、傍に来たヘイルからの指示に従う。

「下らねぇもんが、まだあったんだなぁ……。
けど、アレを浮かせてくれて感謝するぜ。
変人ドクターさんよぉ。」

これから自分達の、『真の目的』が始動できる事に、ヘイルは笑いを堪え切れなかった。

「ヒャハハ……。
アッハハハハハハハハハハ。」

◆◇◆◇◆

［待ち望んだ主を得て、古代の技術と叡智の結晶は今その力を発揮

する！」

通信から聞かされる演説と映像に、なのは達は瞠目した。

揺り籠の玉座のような所に座らされていたのは、ヴィヴィオだった。

ケーブルから伝わる電流に、弾かれたように目を覚ます。

彼女の悲痛な叫びだけが、なのは達の耳に、残った。

◆◇◆◇◆

そして、スカリエッティの演説を聞いていたとある４人の男女は、息をついた。

「最後の子、あの子だよね？」

１人の女性の質問に答えたのは、修理中のデバイスだった。

「間違いありませんね。」

「今の俺達にできるのは、アイツが目覚めるのを待つことだけだ。」

「そうね。」

彼らの視線の先には、様々な医療器具に繋がれた、1人の青年の姿があった。

第12話　「欲望に染まった絶望　臥した希望」　了

第12話　「欲望に染まった絶望　臥した希望」（後書き）

鮮血
「うわぁ・・・。
ネブラ達が見事にチートになっちゃったよ・・・。」

スバル
「ニクスも、不可思議な武装を使っていたね。」

鮮血
「ニクスについては、キャラ設定の方にも掲載します故、
そちらもご覧ください。」

スバル
「それにしても、七星の主って、いったい・・・？」

鮮血
「まぁ、それはまだ先の話だから。」

スバル
「それで、次回は？」

鮮血
「次回は、それぞれの出撃です。
六課、七星、スカリエッティ組。
そして・・・。」

スバル
「そして？」

鮮血
「それはお楽しみ♪」

スバル
「えぇ！？
教えてよ～。」

鮮血
「次回、第１３話　「それぞれの出撃　堕ちた者の飛翔」、お楽しみに。」

スバル
「ところで、最後に出てきたのって・・・。」

鮮血
「黙らっしゃい！」

スバル
「モガッ！？」

第１３話　「それぞれの出撃　堕ちた者の飛翔」（前書き）

鮮血
「今回のお話は、いつもより少し長いです。」

エクシーガ
「ｗｏｒｄで１９ページだったわね？」

鮮血
「自分でも、何故こんなに書けたんだ？　と思うよ。」

エクシーガ
「原作での会話を入れたからでしょ？
ノーヴェ達のやりとりとか・・・。」

鮮血
「まぁ、多分ね。
でも、こらからはオリジナル路線に入るから、
あんまり長くはならないだろうね。」

エクシーガ
「それで、今回の話は？」

鮮血
「ゆりかご戦への出撃と、その前の会話。
そして――――！」

エクシーガ
「そして？」

鮮血
「遂に君達とアイツが登場だよ！」

エクシーガ
「とまぁ、そんな第１３話。
「それぞれの出撃　堕ちた者の飛翔」、どうぞ。」

第１３話　「それぞれの出撃　堕ちた者の飛翔」

大きな地響きを上げ、天空へと飛翔するその巨大な船を、カリムは苦々しく見ているしかできなかった。

彼女の預言が、当たってしまったのだ。

“躍る死者達、死せる王の元、聖地より帰った船。”

“古代ベルカ、聖王時代の究極の質量兵器、天地を統べる聖者の船。”

その名は、“聖王のゆりかご”

◆◇◆◇◆

「一番なって欲しくない展開になってもうたな。」

アースラの艦長席に座したはやては、それだけ言うしかなかった。

彼女の目の前に映るモニターには、申し訳なさそうにしているカリムがいた。

［教会の……いえ、私の不手際だわ……。］

「カリム、未来なんてわからへんのが当たり前やん。
カリムや教会の皆さんの所為とちゃう。」

自分を責めるカリムに、はやてはハッキリと言った。

そして、中央の大きなモニターに映る、これもまた巨大な船を見る。

「さて、どないしよか……。」

今後の手順に悩んだはやてに、クロノから通信が入った。

［はやて。
本局はアレを、極めて危険度の高いロストロギアに認定した。
次元航行部隊の艦隊は、もう動き出している。
地上部隊も協力して、事態にあたるよ。
機動六課、動けるか？」

クロノの問いかけには、どこか確信めいた感じがあった。

動けるのだと、信じているのだ。

はやてもそれを感じ取り、そして応える。

「うん！」

一方、各地では戦闘機人達が高速で移動していた。

そんな彼女達に、ウーノから全体通信が入った。

「聖王のゆりかごが、安定領域に入ったわ。
クアットロとディエチは、私と交代。
トーレとセッテ、セインはラボでドクターの警護を。
ノーヴェは、ディードとウェンディ、１３番目と一緒に……。」

「もう向かってる。」

ノーヴェは走りながらそうぶっきらぼうに返す。

［ゆりかごが完全浮上して、主砲を打てる位置に……。］

［&ａｍｐ;、２つの月の魔力を受けられて、地上攻撃が出来る位置まで辿り着ければ……。
ゆりかごは、正に無敵。］

ウーノの言葉を途中で引き継いだクアットロが、楽しげに通信に加わった。

更にはそこに、トーレも加わる。

［ミッドの地上全てが人質だ。
その状態なら、本局の主力艦隊とも渡り合える。］

自信に満ちたトーレの声に、ウェンディが疑問を投げかけた。

［あのゆりかごの中にいる、聖王の器って言う女の子って……。
ぶっちゃけなんすか？］

その質問に答えたのは、楽しげに厭らしい笑みを浮かべているスカリエッティだった。

［今から、１０年ばかり前の事だったかねぇ。
聖王教会に、ある司祭がいてね。
彼は敬虔な教徒にして、高潔な人格者だった。
それ故に、聖遺物管理という重職についていたんだよ。］

［聖遺物？］

聞いた事が無い単語に、ウェンディは首を傾げた。

［聖王教会の信仰の対象、古代ベルカ時代の高貴な王様。
聖王陛下の持ち物だった物とか、遺骨とかの事よ。」］

わかりやすく、丁寧なクアットロに説明に、ウェンディは頷いた。

［だが、司祭と言えど、人の子だ。
彼は、ある女性への愛から、それに手をつけてしまったんだよ。」］

愚かな行為だとでも言うように、スカリエッティは嗤った。

［そして、聖骸布に僅かに付着していた血液から、遺伝子情報が取り出された。
古代ベルカを統べた偉大な王、聖王の遺伝子データがね。
そして、聖王の種は各地に点在する研究機関で極秘裏に複製され、再生を待った。」］

「あたし達の王様になる為に、だろ？」

ノーヴェの言葉に、スカリエッティは肩をすくめた。

［生きて動いてる聖王は、あのゆりかごの起動キーなんだよ。
王と言っても、ただの器さ。」］

彼の説明が終わった所で、セインが質問する。

［最高評議会だっけ？
ガジェットの生産とか、人造魔導師素体の支援をしてくれたのって、あっちでしょ？
ゼスト様とかルーお嬢様も、向こうの発注で復活させたんだよね？

評議会は評議会で、なんかプランとかあったんじゃ……。」

不安か、それとも迷いなのか、彼女の声にはいつもの覇気が感じられなかった。

だが、スカリエッティは諭すように語っていく。

「レジアスも最高評議会も、希望は一緒さ。

地上と次元世界の平和と安全……。

その為に、レジアスは計画が頓挫した戦闘機人にこだわり、

最高評議会は、レリックウェポンと人造魔導師計画にこだわった。

平和を守り、正義を貫く為なら罪もない人々に犠牲を出してもいいと……。

中々、傲慢な矛盾を抱えておいでなのさ。」

最後に、彼は全員に「遊んでおいで」と言い、通信を切った。

「あぁ～……。

相変わらずドクターの話はわかんないなぁ……。」

セインは、自分と同じような意見を出したウェンディに、念話で伝える。

彼女もそれに同意するしかなかった。

「そうっすね～。

まぁ、あたしら皆、夢や希望がある訳でも無し。

生みの親の言う通りに動くしか無いっすけどね。」

「それに従って無いのが、機動六課に3人はいるけどね。」

笑って返された言葉に、ウェンディも頷いた。

［フェイトお嬢様と、エリオ坊や。
それと、死んだ堕天使っすね。］

［けどあの堕天使って、本当に死んだのかな？
ゲイルが納得して無かったみたいだけど。］

［ミラージュの戦闘映像を見させてもらったすけど、
あの出血量じゃあ助からないっすよ。
あたしもこの目で見たっすから。
ノーヴェもちゃんと外にぶん投げたっすよ？］

［まぁ、崩れたビルの残骸の下敷きになったなら、
血液が微量も検出されないのは頷けるけどね。］

［掘り返したら、化けて出るかもしれないっすね。］

［んなまさか。］

以降、２人は通信を終えた。

◆◇◆◇◆

そして、七星の方も徐々に動き出していた。

「皆、これからは無闇に戦闘を起こさないように。
あの方が目覚めるのに、遊んでばかりいるのも悪いからね。」

ニクスは、目の前にいる6人の同志に告げる。

「僕はもう少しスカリエッティと情報をやり取りするよ。」

「その間、あたし達は？」

暇なのがつまらないのか、ネブラは不満げに言う。

「君達には、各地の戦局を逐一報告してもらう。
とは言え、あそこの調査も必要になるから、それぞれ単独で動いてもらうよ。」

「了解。」

「さて、君らの役割分担は、次の通りだ。
まず、ヘイルは例のゆりかごが浮上した箇所。
つまりは、ゆりかごが埋まっていた所の、更に奥の調査。」

「あそこに、主が隠されてる可能性があるからだな？」

「そう。
君は僕ら七星の中では、最も目がいいからね。
恐らくは、最深部にあるんだろうけど。」

「了解だ。
んじゃあ、先に行ってるぜ、お前ら。」

ヘイルは踵を返し、ゆりかごが浮上した後にポッカリと出来た穴に入っていく。

「次に、ネブラ、ミラージュ、ゲイル、ヴァン、レーゲンの5人は、スカリエッティ組と、機動六課組の動きを見ていてほしい。」

「介入は？」

期待を込めた瞳を向けるネブラに対し、ニクスは首を振っただけだった。

「けど、ネブラには隠密行動で、魔力を出来るだけ集めて欲しい。あの方の呪縛を解くには、それしかないからね。」

「了解。」

「なら、ゼストの動きは私が見ておくわ。彼の速さにも、着いて行けるしね。」

ヴァンはそれだけ言って、すぐさま飛翔した。

レーゲンは、ゆりかごの近くに向かい、ネブラは市街地へと。

ミラージュは、スカリエッティのラボの付近へ。

そして、ゲイルはノーヴェ達の所へと向かった。

「もう少しですよ、我が主。」

微笑し、仲間を見送ったニクスは、蒼天を見上げた。

◆◇◆◇◆

［第1グループの降下ポイントまで、後3分です。」

ルキノの声が、アースラ艦内に響き、これからの出撃の緊張感を高めた。

「今回の出動は、今までで一番ハードになると思う。」

なのはの真剣な声に、フォワード陣は無言で頷く。

「それに、あたしもなのはも、お前らがピンチでも助けに行けねぇ。」

ヴィータもそう付け加える。

「私が言うのもなんだけど、訓練、キツかったよね？」

今までの事を思い出し、4人は苦笑いするしかなった。

「それでも、ここまでよく着いてきた。」

ヴィータのいきなりの褒めに、彼女達は驚いた。

「４人とも、誰にも負けないくらい強くなった……っていうのはまだだけど。
だけど、どんな相手が来ても、どんな状況でも負けないように教えてきた。
守るべき者を守れる力。　救うべき者を救う力。
絶望的な状況にだって、立ち向かっていける力。
ここまで頑張ってきた皆は、それがしっかり身についてる。
夢見て、憧れて……必死に積み重ねてきた時間。
どんなに辛くても努力を重ねた時間は、絶対に自分を裏切らない。」

拳を握り、なのはは４人を励ます。

それに応えるように、スバル、ティアナ、エリオ、キャロ。

４人は力強く頷いた。

「じゃあ、機動六課フォワード隊、出動！」

「「「「はい！」」」」

各々、最後の準備を始めるべく移動したが、なのはとスバルは残った。

「スバル、ギンガとヴィレくんの事……。」

「あの、違うんです。
ギン姉は、大丈夫だと思います。
必ず私が取り戻してみせます。
それに、ヴィレ兄だって、絶対に生きて帰ってきます！」

スバルの強い口調と熱意に、なのはもそんな気がした。

「だけど、今はヴィヴィオの事と、なのはさんの事が心配で……。」

「ありがとう、スバル。
でも大丈夫だよ。」

翳った顔を見ないように彼女の頭を撫で、なのはは優しく言う。

「一番怖いのは、現場に行けない事だったんだけど、
八神部隊長が、そこをクリアーしてくれた。
現場に行って、全力全開でやっていいんだったら、不安なんて無いよ。
ヴィヴィオも大丈夫。　必ず私が助け出してみせるから。」

スバルの顔を両手で包み、真正面から言う。

その暖かい言葉と、確信に近い力強さに、スバルは涙を流しながらも頷いた。

◆◇◆◇◆

そして、出撃の刻（とき）が来た。

シグナムはリィンフォース?と共に、地上本部へと一足先に飛翔する。

それに合わせて、スバル達フォワード陣を乗せたヘリも、防衛ラインの降下ポイントまで飛行する。

それを見送ったはやては、残ったなのは、フェイト、ヴィータに告げる。

「ほんなら、隊長陣も出動や!」

「「「うん!」」」

[降下ハッチ、開きます。]

ルキノの声と同時にハッチが開き、そこから4つの光芒が舞い踊る。

[機動六課、隊長、副隊長一同……。
能力限定、完全解除。]

カリムが手をかざし、球体がそこに現れる。

[はやて、シグナム、ヴィータ、なのはさん、フェイトさん。
皆さん、どうか……。]

それに応えるように、はやて達は大きな声で返す。

「しっかりやるよ。」

「迅速に解決します。」

「お任せください。」

それにカリムも頷き返し、最後の一言を高らかに告げる。

［リミット、リリース！］

その瞬間、彼女達を巨大な魔力が駆け巡る。

なのははそれを感じ、自分の切り札の１つを使う。

「エクシードドライブ！」

［Ｉｇｎｉｔｉｏｎ．］

エクシード専用のバリアジャケットを展開し終え、なのは３人に並んだ。

「なのは。」

その時、横に並んだフェイトが声をかけてきた。

「なのはと、レイジングハートのリミットブレイク、ブラスターモード。

なのはは言っても聞かないだろうから、使っちゃダメとは言わないけど……。

お願いだから、無理だけはしないで。」

懇願する目のフェイトに、なのはは返す。

「私はフェイトちゃんの方が心配。
フェイトちゃんとバルディッシュのリミットブレイクだって、
スゴイ威力の分、負担も消費も酷いんだからね？」

「私は大丈夫。」

かたくなに返ってきた返事に、なのはは溜息をついた。

「フェイトちゃんは相変わらず頑固だなぁ……。」

それに頬を僅かに紅潮させ、フェイトも言い返す。

「な、なのはだって、いつも危ない事ばっかり……。」

「私は航空魔導師だよ。
それくらい当たり前だもん。」

「だからって、なのはは無茶が多過ぎるの！
それも、ヴィレイサーみたいに……。」

いきなり出てきた、行方不明の仲間の名に、なのはは一瞬顔を曇らせた。

だが、スバルが自分に言ってくれた言葉を信じ、すぐさま笑顔になる。

「大丈夫だよ、フェイトちゃん。
だって、皆がどれほど私の事を心配してるのかも知ってるもん。
ヴィレくんだって、今この瞬間、ここに向かってきてるかもしないよ。」

「なのは……。」

「私も、ちゃんとヴィヴィオを連れて帰ってくるよ。
一緒に元気に帰ってくるよ。」

「うん！」

安心したのか、フェイトは3人とは離れる。

単身、スカリエッティのラボに向かう為だ。

そして、なのはとはやて、そしてヴィータは前を見据える。

（ヴィヴィオ、必ず助けるからね。）

それぞれの決意を胸に秘め、3人はゆりかごへと向かった。

◆◇◆◇◆

そして、また別の所では、４人の男女がいた。

「どう、“エターナル”？」

「問題ありません。
すこぶる好調と言っても、過言ではありませんね。」

「そう、良かった。」

薄紫の長い髪を揺らし、リュウビ・T・キリシマは微笑んだ。

「リュウビ、全員分のデバイスの調整、終わったぞ。」

短い金髪を綺麗にまとめたデュアリス・F・セイバーが、彼女に告げる。

「エターナルも、大分回復したわ。」

「じゃあ、後は“ヴィレイサー”だけか。」

「リュウビ、デュアリス、アタラクシアとアークティックを受け取りに来たぞ。」

言いながら入ってきたのは、ヴァンガード・レイスだった。

「アタラクシアも？」

「あぁ。
エクシーガは今、ヴィレイサーをみてるから。
その代わりに。」

自分のデバイス、アークティックを先に受け取り、エクシーガのも

説明後に受け取る。

「目、覚めたか？」

「いや、まだだ。
けど、大分安定してきたから、そろそろだろうな。」

「急がないと、色々と間に合わなくなるな。」

デュアリスはモニターに映る巨大な船、聖王のゆりかごを見る。

「でも、焦って功を逃したら、それこそ大惨事だよ。
慎重に、だけど迅速に行こう。」

「そうだな。」

「あぁ。」

3人は静かにモニターを見ていた。

ヴィレイサーが目覚めるのを確信して……。

◆◇◆◇◆

ヴィレイサーに繋がれた医療機器の音だけが、静寂を破る部屋。

壁は綺麗な白に統一されていたが、逆に“患者”なのだと意識させる息苦しさがあった。

その部屋で、ヴィレイサーはただ眠っており、エクシーガはそれを静かに見下ろしていた。

そもそも何故ヴィレイサーがエクシーガ達と共にいるのか。

それは、公開意見陳述会にまで遡る。

ケルベロスに腹部を喰われ、出血多量で死にかけたのだが、エターナルがばれないように、応急処置を施していたのだ。

だが、再びケルベロスに喰われ、奥のフロアに突っ込んだ時、ヴィレイサーはあまりの衝撃に気を失ってしまった。

そしてノーヴェが窓から放り、落下して行く最中、エクシーガが彼を助けたのだ。

エクシーガは、七星の事を捜査するべく、単身で会場の近くにいたのだ。

そして事件が起きた時、エクシーガの専用デバイス、『アタラクシア・ラスター』に、
エターナルからの緊急救難信号が届いた。

急いで指定のポイントに到着した時、ヴィレイサーが窓から放り出され、
彼女の所へと落下してきたのだ。

『ヴィレイサー！？
こんなにも、傷だらけに……。
急いで治療をしないと。アタラクシア！』

［Ｈｏｍｉｎｇ　Ｄａｓｈ．］

そしてエクシーガは、すぐさまその場から消えた。
彼女が使った移動魔法は、指定したポイントの高速で移動するものだ。
移動している最中は、敵に見つからない細工をしている。
そうして彼女が着いたのは、港だった。
周囲に誰もいない事を確認し、１つの倉庫に入る。
そして、最深部に積まれた物の箱を飛び越え、隠されたパネルを操作する。

［ＰＡＳＳＷＯＲＤ．］

『Ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅっと。』

パスワードを打ち込み、扉は音も無く開いた。

そして、エクシーガはヴィレイサーを連れて入る。

エレベーターに乗り込み、そこから更に奥へと向かった。

ようやく辿り着いたそこには、既に連絡を受けていたヴァンガードが待機していた。

『ヴィレイサー……！』

『急いで医療班を。』

『あぁ……。』

そして、今に至る。

「っ……。」

その時、ヴィレイサーが小さなうめき声をあげた。

「ここは……。」

うっすらと目を開け、ヴィレイサーは辺りを見回した。

「エクシーガ？
俺は……。」

「五体満足で生きているわよ。
それに、治療もあなたが目覚めた事で、完璧に終えたわ。」

「生きてる、のか……。」

「今、皆を呼んでくるわ。」

病室を出、エクシーガは3人とエターナルを呼んだ。

そして、彼に聖王のゆりかごの事を話した。

治療を完璧に終えたヴィレイサーは、話の途中から立ち上がり、
身体が鈍ってないか、大きく運動する。

「今、なのは達が動き出しているわ。」

「俺達も動きたい。
七星を抑えられるのは、俺達だけだからな。」

「ヴィレイサー、行ける?」

「まだ休んでてもいいぜ。」

上から、エクシーガ、デュアリス、リュウビ、ヴァンガードが言うが、
彼らはヴィレイサーの答えを聞く必要は無かった。
どんな答えが返ってくるか、わかっているからだ。

「愚問だろ、お前ら。」

エターナルを受け取り、そう言う。

「先に出撃準備してるから、早く着替えなさいよ。」

エクシーガがそう言い、彼女を筆頭に病室を出て行く。

「わかってるよ。」

言いながら着替え、エターナルを手にする。

「戻るか。
仲間達の元へ。」

「えぇ。
この戦いを終わらせて、ですがね。」

エターナルの答えを聞き、エクシーガ達の元へと走り出す。

待っていた彼女達は、ヴィレイサーを見て、出撃の最終準備に入る。

「ヴィレイサー、自分自身のリミッターは全て外せる状態にあるからな。」

「あぁ。
“ヴィーナスシステム”だけは、まだ解除しないよ。
エクシーガも、それでいいな？」

「えぇ。」

ヴィレイサーのリミッターは、機動六課に傭兵として雇われたとは言え、
解除権はヴィレイサー自身にゆだねられている。
つまり彼は、自分の外したい時にリミッターを外せるのだ。
切り札である、“ヴィーナスシステム”は別としてだが。
このシステムは、エクシーガも同様に所持している為、
互いが解除を促さないと使用できない仕組みになっている。
だが、緊急時の手立てとして、５分間のみの使用が出来る。
やがて、５人が立った位置が徐々に浮上し、海面が割れる。
「行くぞ、皆。」
ヴィレイサーは、４人を順々に見回す。
「チーム、カタストロフィー、出撃だ。」
敵に破局――――ＣＡＴＡＳＴＲＯＰＨＥを与える部隊が、
地獄より戻りし堕天使を先頭に、大空へと舞った。

第１３話　「それぞれの出撃　堕ちた者の飛翔」　了

第１３話　「それぞれの出撃　堕ちた者の飛翔」（後書き）

鮮血
「と言う訳で、ヴィレイサー、復活！」

ヴィレイサー
「復活って言ったって、まだ戦場には戻って無いけどな。」

鮮血
「細かいねぇ・・・。」

ヴィレイサー
「お前の性格だろ・・・。」

エクシーガ
「ともあれ、無事に目覚めて何よりだわ。」

ヴィレイサー
「まぁ、お前が助けてくれなきゃ、死んでいたのは間違いないけど。」

エクシーガ
「そうね。」

鮮血
「まぁ、復活してもなのは達には教えないんだけどね。
既に戦闘が始まってるし。」

ヴィレイサー

「そこはまぁ、さすがにしょうがないか。」

鮮血
「それに、今後の展開を考えると黙っておいた方がいいんだよね。」

ヴィレイサー
「どういう意味だ？」

鮮血
「それはお楽しみって事で。」

エクシーガ
「それで、次回は？」

鮮血
「次回は、七星とぶつかります。
ヴィレイサー、エクシーガ、リュウビ、デュアリス、ヴァンガードの５人が、
それぞれの敵と戦います。」

エクシーガ
「かなり手強い相手だから、油断はできないわね。」

鮮血
「そうだね。
では次回第１４話、「正義への答え」、お楽しみに～。」

第１４話　「正義への答え」（前書き）

鮮血
「スランプです！」

ヴァンガード
「ダメじゃん・・・。」

鮮血
「すみません・・・。
中々書く気力が湧かなくて・・・。」

ヴァンガード
「言い訳すんなよ。」

鮮血
「言い訳じゃないやい！
真実だい！」

ヴァンガード
「情けない事には変わりねぇだろ。」

鮮血
「すみません・・・。」

ヴァンガード
「で、今回の話は？」

鮮血

「傭兵部隊、カタストロフィーの出撃です。
そして、七星とぶつかります！」

ヴァンガード
「ヴィレイサーの話じゃあ、かなりの兵だってな。
気を引き締めねぇとな・・・。」

鮮血
「それでは、第１４話、「正義への答え」どうぞ。」

第１４話　「正義への答え」

「チーム、カタストロフィー、出撃だ。」

ヴィレイサーの凛とした声に、デュアリス達は頷き返した。

そして、ヴィレイサーを筆頭に、彼ら彼女らは飛翔した。

「スカリエッティ達はどうだい？」

ニクスの問いに、偵察に出ていたネブラが通信して伝える。

［個々に撃破していってるよ。
でも、完璧には潰せて無いみたい。］

［中々決定打を撃ち込めずにいるようだな。］

別の場所で見ているゲイルも同意見のようだ。

「共倒れになれば、それが一番なんだけどね。」

［介入するのか？］

期待に胸を膨らませたミラージュが聞いてきたが、ニクスは首を横に振っただけだった。

［騎士ゼストが地上本部に到着したよ。］

ヴァンが見せた映像には、融合騎に後を任せているゼストの姿があった。

［どうする？　例のＮｏ，２、ドゥーエだっけ？　アレから魔力をもらっておく？］

ニクスは少し考えるが、やがてある事に気付く。

「その前に彼の相手を頼むよ」

［彼？］

［誰だよ？］

ミラージュ達の詮索に答えようとした時、ゲイルが割り込んだ。

［ニクス、奴らが来たぞ。］。

「やはり生きていたか……ヴィレイサー・セウリオン……。
ゲイル、ヴァン、ネブラ、ミラージュ、レーゲン。
君らは1対1で彼らと戦ってくれ。　間違っても“殺さないでよ？”」

［［［［［了解。］］］］］

5人と通信を終え、ヘイルに連絡を取る。

「そっちはどうだい、ヘイル？」

［順調だ。
最深部には早めに着きそうだぜ。］

「そうか。」

ヘイルの報告に、ニクスは笑った。

「僕も今からそこに向かうよ。
そろそろ動かないと、後々大変だからね。」

純白のバリアジャケットを展開し、彼はヘイルの元へと向かった。

◆◇◆◇◆

「もうすぐ戦闘空域だ。」

ヴィレイサーの言った通り、戦闘の光が視認できた。

「なんだ？
この感じは……。」

戦場に近付くにつれて、デュアリスは何かを感じていた。

しかもそれは、徐々に明確に感じ取る事ができた。

周囲を見回した時、空色の何かが急速に迫ってきた。

「思い出した！　この感じは……。
だとすれば、アイツも！」

編隊を崩し、デュアリスは左からくる何者かと対峙した。

「なるほど。
貴様が“セイバーの末裔”か。」

仮面で素顔を覆った男、ゲイルだった。

「そういうあんたからも、同じ感じがするけど？」

「ほう……。
気配の察し方は見事だな。
だが、それだけでは俺には勝てんぞ！」

素早く、２対の剣、ウィングソーを引き抜き、構える。

対するデュアリスは、右手に短剣を逆手持ちに、左手に長剣を順手で持った。

「俺と剣で戦うか、セイバーの末裔よ。」

相当の自信があるのか、ゲイルは不敵な笑みを浮かべた。

「行くぞ！」

そう告げたかと思うと、ゲイルは既にデュアリスの眼前にいた。

（速っ！？）

それを既の所で受け止め、デュアリスは舌打ちした。

◆◇◆◇◆

「ヴィレイサー、デュアリスが……。」

戦いに逸早く気付いたリュウビが声を上げるが、そこに敵の増援の砲撃が迫る。

「散開！」

即断即決し、指示を出すと、３人はそれに従った。

「デュアリス……。」

仲間の所へ駆け出すべく焦っていたリュウビは、側面からくる一閃に反応するのが遅れた。

「キャアッ！」

風圧も加えられた刃に吹き飛ばされ、リュウビはビルに体を強く打ち付けた。

だが幸いな事に、イーブンが緩衝材を働かせてくれた為、大事には至らなかった。

「無事のようね。」

空から聞こえた女性の声に、そちらを見やる。

そこには、微笑するヴァンがいた。

（他の皆は……。）

視線を僅かに逸らし、周囲を探る。

すると、１箇所だけ爆発が起こった地点があった。

（あそこは多分……エクシーガがいる。
だとすると、ヴィレイサーとヴァンガードはあそこら辺かな。）

先程の砲撃を散開して回避した位置。

そして、散開し終えた箇所から、攻撃を喰らった場合の地点をすぐさま割り出す。

（結構離されてる可能性が高いなぁ……。
合流するなら、やっぱり……。）

鋭い視線を向け、キッとヴァンを仰ぎ見る。

（彼女を突破するしか無い。）

決断し、刃が少し反ったサーベルを出現させる。

「行くわよ、イーブン。」

［Ｓｕｒｅ．］

愛機が応えた刹那、リュウビはヴァンに肉薄した。

◆◇◆◇◆

ガキィン！

ブォン！

刃がぶつかり合ったり、空を切る音が、２人だけの戦場に響く。

「中々やるなぁ、女。」

ライフルと実弾銃を交互にエクシーガに放ちながら、レーゲンは関心したように呟く。

エクシーガは、レーゲンが放つ弾丸を悉くかわし、
自分の間合いに捕捉した瞬間に翡翠色の長剣を振り下ろす。

だが、レーゲンは紙一重でそれを避け、バズーカを構える。

「ゲイボルグ！」

［Ｈｏｍｉｎｇ　Ｄａｓｈ．］

弾が当たると確信したが、エクシーガには着弾しなかった。

何故かエクシーガをすり抜けたのだ。

「残像だと！？」

レーゲンは驚いていたが、我に返り、抜刀して背後を向く。

「ハアアアアアアアア！！！」

目の前には既に、切っ先で貫こうとしていたエクシーガが迫っていた。

しかし、彼女の刃はレーゲンの剣に止められる。

「クッ……。」

「出来る！」

相手の力量を再び褒め、レーゲンはエクシーガを押し返す。

2人はしばし対峙し、そして、どちらとも無く肉薄し、刃をぶつけた。

◆◇◆◇◆

「よもや生きていようとはな、堕天使！」

ミラージュがケルベロスを差し向け、自身もヴィレイサーの死角か

ら奇襲をしかける。

その2つの攻撃を、高度を上げてかわしながらも、
ヴィレイサーは敵を双眸から離さない。

「堕天使だからな。
堕ちたらまた、舞い戻るさ。
地獄の底からでもな！」

冗談めいた口調で言い、今度は彼からしかける。

「ＩＳ、シャドー・ファントム！」

ヴィレイサー自身がミラージュに接近する間に、
ビルの影が人間と、アローモードを象る。

［Ｓｈａｄｏｗ　Ｅｄｇｅ．］。

矢の先端に影が集まり、ケルベロスに放たれる。

「フン！
影ごときにケルベロスを抑えられるものか！」

ミラージュの言葉に応えるように、ケルベロスは一吠えし、跳躍する。

シャドーが放った技をかわし、そのままシャドーに食らい付く。

だが、シャドーはそれを避けなかった。

「捕った……。」

ヴィレイサーはそれを待っていたのか、呟き、指を鳴らす。

すると、シャドーはケルベロスを呑み込むほど巨大になり、逆にケルベロスを喰らった。

「ケルベロス！？」

ミラージュがそれに気付いた時には、影の球体ができていた。

「悪いが、番犬には消えてもらう。」

言うが早いか、球体から影の針が生えた。

そしてそれが、一斉に中心に向かった。

内部にいるケルベロスを、無数の針で串刺しにしたのだ。

「貴様……。」

ケルベロスを失ったミラージュは、苦々しくヴィレイサーを睨む。

「覚悟っ！」

太刀を抜刀から一閃する動作まで行うが、その一閃は、ヴィレイサーを捉えられ無かった。

（クッ……彼奴はかなり厄介になったな……。

ニクスが“主”を早く目覚めさせなければ、俺は、負ける……。

）

ヴィレイサーの力強さを痛感し、焦りを覚える。

だが、そんなミラージュに、ニクスから念話が入る。

［ミラージュ、ヴィレイサーを例の地点まで誘導してきてくれ。
“主が目覚めるには、もう少し魔力がいるからね”］

［わかった。
だが、時間がかかる。　今の奴は、前回よりも厄介だからな。］

そこまで伝えた後、眼前にいる堕天使を見る。

「分が悪いな。
ここは退かせてもらおうか。」

一気に空へと舞い上がり、ニクスの元へと駆ける。

「逃がすか！」

ヴィレイサーは、仲間への危険を考慮し、ミラージュを追跡する。

（そうだ、それでいい。
貴様の最期の戦場に来い。）

◆◇◆◇◆

「ハアアアアアアアア！！！」

「デヤアアアアアア！！！」

ヴァンガードの大剣を、攻防一対の盾で防ぎ、左手にある鉤爪の籠手で反撃するネブラ。

先程からそれを繰り返しているばかりだった。

しかも、戦闘の最中にも関わらず、ネブラはある箇所のチラチラ見ていた。

「そんなに地上本部が気になるのか？」

ヴァンガードの核心をつく質問に、ネブラは「まぁね」とだけ答えた。

（一体、何があるっていうんだ？）

気になったヴァンガードは、ネブラを押し返した刹那、チラリと地上本部を見た。

すると、いくつか人影が見えた。

（まだ誰か残っているのか！？）

ネブラが人質として使うのかとも思えたが、

未だにその行動を取っていない所からすると、恐らくは違うだろう。

（なら、何が目的なんだ？）

再び肉薄してくるネブラを見据え、ヴァンガードは答えを探った。

◆◇◆◇◆

一方、ネブラが気にしていた地上本部の一角では、
オーリスがレジアスに説得を試みていた。

2人の傍らには、一般の女性局員が1人だけだった。

その時、彼らがいる部屋に、轟音と揺れが響いた。

「手荒い来訪ですまないな、レジアス。」

オーリスはレジアスを庇うように立ったが、それをレジアス自身が制する。

「構わんさ、ゼスト。」

「ゼスト…さん……？」

未だに煙っている箇所からゆっくりと姿を現したのは、
ゼスト・グランガイツその人だった。

彼はゆっくりと、だが、威圧感のある動きで、一歩一歩レジアスに近づく。

「オーリスは、お前の副官か？」

彼女の方をチラリと見やり、座したままのレジアスに問う。

「頭がきれる分、我儘だがな。
子供の頃から変わらん。」

一瞬だけ、過去に浸るレジアスの顔を見て、ゼストも本の僅かな笑みを浮かべた。

だが、それに気付く者はおらず、ゼスト自身もすぐに自分の目的に移る。

「聞きたい事は1つだけだ。」

そう言って、懐から2枚の写真を放る。

それはレジアスの前に運ばれる。

「8年前、俺と俺の部下を殺させたのは、お前の命令で間違いないか？」

放られた2枚の写真の内、1枚にはゼストの部隊の面々が。

「共に語り合った、俺とお前の正義は、今はどうなっている？」

そしてもう1枚には……。

若かりし頃の、ゼストとレジアスの姿があった。

第１４話　「正義への答え」　了

第１４話　「正義への答え」（後書き）

鮮血
「ゼスト隊長、登場！」

ヴァンガード
「って、こっちはネブラとの戦いで、そんな所まで見てねぇし！」

鮮血
「まぁまぁ。
君には、次話で活躍してもらう予定だから。」

ヴァンガード
「は？
何をやらせる気だよ・・・。」

鮮血
「さぁね？」

ヴァンガード
「けど、ネブラも気にしていたし・・・。
何がどうなるか・・・。」

鮮血
「次回で分かるよー。」

ヴァンガード
「それぱっかりだな・・・。」

鮮血
「そして、次回にはもう1つ重要な事が！」

ヴァンガード
「それだけ教えてくれよ！」

鮮血
「これが一番重要だからダメ。」

ヴァンガード
「チェー・・・。」

鮮血
「次回もお楽しみに。」

第１５話　「歪んだ正義　明かされた素顔」（前書き）

鮮血
「ものすごーーーーーーく時間がかかってしまって申し訳ありません・・・。」

デュアリス
「そう思うんだったら、次話も早く書けよ。」

鮮血
「いや、他にも書かなきゃならないのがあるし・・・。」

デュアリス
「まったく・・・。」

鮮血
「すみません・・・。
えっと、今回の話はレジアスとゼストの回想から始まります。
何故レジアスの正義はこうも歪んでしまったのかの解説と、
あの人の素顔を明かしたいと思います！」

デュアリス
「あの人って、誰だよ・・・？」

鮮血
「それは本編のお楽しみ。
それでは第１５話を、どうぞ。」

鮮血
「そういえば、なのはA's の最新ゲーム、
『ＴＨＥ　ＧＥＡＲＳ　ＯＦ　ＤＥＳＴＩＮＹ』に、ヴィヴィオ、アインハルト、
そしてトーマの３名が参戦するみたいですね。」

ヴァンガード
「お前からしたら、アインハルトとトーマの中の人が気になるだけだろ。」

鮮血
「買う金が無いかもしれないからねー。」

第１５話　「歪んだ正義　明かされた素顔」

事の発端は、数年前遡る。

「また守れなかったな……。
死者２５名、内、民間人１１名。」

事件で犠牲となった人数を上げ、ゼストは悲しげに言った。

「やはり、ミッド地上は事件が多過ぎる！
人員も戦力も、何もかもが足りん！
優秀な人材は皆、本局に持って行かれる……。」

レジアスは事件が流れているモニターを見て、苛立たしげに言う。

「向こうは、事件の規模が違うからな。」

「だから、小さな世界の事は無視してもいいと言うのか！？」

憤慨するレジアスだったが、ゼストの冷静な瞳に、落ち着きを取り戻す。

「すまん……。」

◆◇◆◇◆

2人は立ち上がり、通路に出てから話を再開する。

「俺はお前のように魔法を使えん。
人を育てる力も無い。
だが、せめて局の中で上り詰め、力を蓄えれば、或いは……。」

レジアスの熱意に、ゼストも頷く。

「やれるさ、お前なら。」

そして、レジアスは変わった。

それが自分の信ずる“正義”だと疑わずに……。

◆◇◆◇◆

「改革が必要です！
この街の平和、正義の為に！」

会議でレジアスは積極的に自分をアピールする。

「私にお任せください。
必ずや、今よりも効果的な治安を皆様に提供します！」

その熱意に心打たれる者もいれば、逆に鬱陶しく思う者もいただろ

う。

しかし、レジアスは徐々に勢力を拡大していった。

◆◇◆◇◆

「統制システムの機能向上、すばらしい成果です。」

「ですが、システムについて本局から意見が……。」

「干渉するなと伝えろ！
連中は地上の正義を理解しとらん！」

彼の正義に、周囲も次第に変わり始めていた。

しかし、それ故に悪魔がひっそりと近づくのだ。

◆◇◆◇◆

「レジアス、近頃良い噂を聞かんぞ。」

「俺は昔と何も変わっていない。

ミッドの地上部隊は、確かに力をつけている。」

そう言ったレジアスには、どこか悪魔が見え隠れしているようにゼストには見えた。

「ところで、お前の部隊。
戦闘機人事件を追っているそうだな？」

「あぁ。
ついでに、以前俺の部下が引き取った少年の事も調べている。
戦闘機人の違法施設を叩けば、アイツの事がもっとわかるかもしれんしな。」

「お前にはもっと重要な案件があるはずだ。
明日には指示するから、そっちに移れ。」

それだけ言い残し、レジアスは1人歩きだした。

彼の背を見送りながら、ゼストは柱の影にいた部下に念話する。

［ナカジマ、アルピーノ。
例の地点の捜査、予定を早めるぞ。］

命じられ、2人は立ち上がる。

「今夜発つ。
ただ、ヴィレイサーはこの任に加えるな。
アイツにはまだ早いからな。」

「了解。」

クイントが敬礼を交えて返す。
「準備を進めておけ。」
「「了解。」」

◆◇◆◇◆

「ゼスト隊長！
何故次の任務から俺を外すんですか！？」
母のクイントから聞かされたが、まだ納得できなかったヴィレイサーは、
渡されたナックルを持ったまま、ゼストに問う。
「危険だからだ。
お前のお守をしながら戦うのには無理がある。
だから、次の戦闘機人の基地を叩く任務には、お前を連れては行けない。」
「しかし！」
隊長であるゼストに、幼いヴィレイサーは反論する。
「いいか、ヴィレイサー。

俺達は、お前を失う訳にはいかないんだ。
地球でお前の帰りを待っている家族の為にも。
そして、俺達自身の為にもな。」

「そうかもしれませんが……。」

「強くなれ、ヴィレイサー。
その時には必ず、お前を連れて行こう。」

「……はい……。」

完璧に納得した訳では無かったが、これ以上の押し問答は、出撃の準備にまで影響する。

自分の所為で、任務が失敗に終わる事の方が、ヴィレイサーにとっては悲しかった。

「お気をつけて……。」

それしか言えない。

これから出撃する仲間、家族、上官に対し、何もできないお荷物の自分。

それが重圧となり、ヴィレイサーを潰そうとする。

何もできない自分が、歯痒かった。

情けなかった。

憎かった。

その時のヴィレイサーは、そんな気持ちでいっぱいだった。

◆◇◆◇◆

「やっぱり間違いない。
ここは、戦闘機人プラント……。」

敵を殲滅したクイントは、背中あわせにしているメガーヌに、ポツリと呟く。

その時、仲間から衝撃的な通信が入った。

［分隊長、ゼスト隊長が、俺達を庇って……！］

モニターに映されたゼストは、素人目にも、瀕死なのは明らかだった。

すぐに救助に……。

そう思った矢先、敵の増援が、２人を囲んだ。

それは、ガジェットの？型だった。

無数の尖端の鋭い四肢が、２人に迫った……。

◆◇◆◇◆

「こんな所まで入られたか。
この拠点も、離れなければならんな。」

倒した兵士を一瞥し、トーレは苦々しく言う。

「遺体を回収しよう。」

そう言ったのは、ゼストに右目を奪われたチンクだった。

「せめて、ドクターの研究に役立ててやらねば。」

◆◇◆◇◆

その日、レジアスにスカリエッティからの通信が入った。

「困るね、ゲイズ中将。
大事な実験施設が１つ壊されてしまったよ。」

「命令が追いつかなかったようだ……。」

［まぁ、さしたる被害も無かったがね。］

スカリエッティの声には、どこか愉しんだような色が窺えた。

［あなたの夢、戦闘機人は優秀な性能を発揮しているよ。
１対１で、Ｓランク騎士の撃破。　中々だろう？］

映し出された戦いの映像記録には、傷が見受けられる戦闘機人と、血塗れになり、ピクリとも動かない騎士――――旧友の姿があった。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第１５話　「歪んだ正義　明かされた素顔」

「お前に問いたかった……。」

ゼストは武器を構えずに、座したままのレジアスに淡々と告げていく。

「俺は良かった。
お前の正義の為なら、殉じる覚悟もあった。
だが、俺の部下達は何のために死んでいった!?
ナカジマとアルピーノには、子供もいたんだぞ!」

気の小さい者なら、それだけで死んでしまいそうな咆哮に、
レジアスは目を逸らすしかなかった。

「どうしてこんな事になってしまった……?
俺達が守りたかった世界は……俺達が欲しかった力は……。
俺とお前が夢見た正義は……。」

そこで言葉を区切り、レジアスを双眸に捉える。

「……いつの間に、こんな姿になってしまった……?」

レジアスが口を開きかけたその時……。

ガシャーン!

彼の背後にあった窓ガラスが粉々に砕け散った。

「イタタタ……。」

ガラスに勢いよく叩きつけられたのは、ネブラだった。

彼女がキッと仰ぎ見た蒼天には、二刀流に剣を構えているヴァンガードがいた。

「もう、最悪……。」

立ち上がり、唖然としているレジアス達を、否、1人の女性局員を見る。

その隙に、ヴァンガードが急速に接近する。

「覚悟！」

左右の剣を思い切り振り上げ、それを躊躇無くネブラに振り下ろす。

だが、それは叶わなかった。

「ウグッ！？」

ヴァンガードは何かに捕らえられていた。

「残念でした。

気付かれないようにバルーンを出してたんだよね。」

ネブラの言った通り、ヴァンガードを捕縛していたのは、彼女のＩＳで作られた人形が放った、マガノシラホコのワイヤーだった。

「さすがにこれ以上戦って魔力を消耗するのはマズイね……。」

ヴァンガードを無視して、ネブラはゼスト達４人を順々に見て行く。

ゼストは得物を構えるが、その行動にネブラは嗤った。

「その身体でやるの？
すぐに消えちゃうよ？」

限界が近い事を見透かされ、ゼストは逡巡する。

その刹那の迷いを見逃さず、もう1体のバルーンを生成する。

「しまった！？」

ゼストが気付いた時には、既に自分はヴァンガードと同じように捕らえられていた。

「あたしは別に、そこのおっさんと副官には興味無いから、危害を加えないでね。」

そう言って、ネブラは残った女性局員の正面に立つ。

「やっほー、ドゥーエ。」

「このタイミングで明かすのは、どうかと思いますよ？」

ネブラが話しかけた局員は、黒い笑みを浮かべ、本性を表す。

戦闘機人のＮｏ，２のドゥーエ。

彼女の任務は、隠密行動で潜入し、用済みとなった者の始末だった。

それを予め聞かされていたネブラは、すぐにドゥーエだと見抜いた。

「では、あの２人が動けない事ですし、始末しましょうか。」

固有武器を装着し、ドゥーエはレジアスに近づいて行く。

だが――――

「ウグァ！？」

――――彼を殺すには至らなかった。

それどころか、ドゥーエをマガノイクタチが捕らえていた。

「な、何を……？」

驚愕に見開かれた目を、真後ろでマガノイクタチを使うネブラに向けようとする。

「ごめんねぇ～。」

謝罪の言葉を口にするものの、そこにはまったく誠意が込められていなかった。

「どうしても、魔力を集めなきゃいけないから、あんたの貰うね？」

マガノイクタチが1度だけ発光し、ドゥーエから魔力を含めたエネルギーを吸い取る。

「な～んだ。
たったこれだけか。」

マガノイクタチからドゥーエを解放し、ネブラは残念そうに呟く。

「役立たずは、もう消えちゃっていいよ♪」

攻防一対の盾から、魔力刃を発生させ、ドゥーエに振り下ろす。

ガキィン！

だが、いつの間にかバルーンから脱したヴァンガードが、間一髪でそれを防ぐ。

「え？
なんで助けるの？」

ネブラは訳がわからなかった。

ドゥーエとヴァンガードの2人には、接点は無いのだ。
むしろ敵同士だ。
助けるのではなく、捕らえるのならまだわかるが……。
「助けるのに、訳なんているのかよ！」
ドゥーエを抱え、ヴァンガードはそう吠えた。
それを聞いたネブラは、クスクスと嗤いだした。
「クフフ……。
アハハハハハハ。」
よほどおかしかったのか、ネブラはお腹を押さえて笑っている。
「バッカじゃないの？
他人なんてどうでもいいって思うのが、あなた達人間でしょ？」
「確かにそういう奴もいる。
だけど俺は、救える命は救う！
だから、この人も救ってみせる！」
ヴァンガードの叫びに、ネブラの顔が歪んだ。
「嘘だ……。
そんな奴、いるはず無い！」

「え……。」

ヴァンガード以上に声を張り上げたネブラの目には、涙が浮かんでいた。

「だったら……だったらどうして“ヘラ”は……。」

「“ヘラ”？」

聞いた事のない名前に、ヴァンガードは聞き返したが、ネブラはそれに答えず、攻防一対の盾から、3連装のスモーク弾を放つ。

それは着弾と同時に、白い煙を周囲に撒き散らした。

「クッ！」

煙からいち早く脱したが、それが晴れた時には、ネブラの姿はどこにも無かった。

「騎士ゼスト、大丈夫ですか？」

最早ネブラを追い切れないと判断したヴァンガードは、ゼストに駆け寄る。

「何故俺の事を？」

バルーンで作られたネブラを蹴散らしたヴァンガードに、ゼストは聞く。

「仲間のヴィレイサーから聞いています。
映像でも、あなたの事が一瞬だけ流れてましたから。」

「そうか。」

消耗したのか、ゼストはその場に座り込んだ。

「旦那！」

その時、融合騎のアギトがシグナムと姿を現した。

「ヴァンガード！？
何故お前が？」

「俺だけじゃない。
エクシーガ、デュアリス、リュウビ、ヴィレイサーも一緒だ。」

「ヴィレイサーも……。」

「あぁ。
悪いけど俺は、まだ敵を追う必要があるからこれで。
この戦闘機人と、ゼストさんの事を頼む。」

シグナムが頷いたのを確認し、ヴァンガードは一足先に飛び出した。

「アギト、お前はシグナムと動け。」

「旦那、どうして！？」

「俺はもう、お前とユニゾンできるほどの体力が無い。

だが、敵は待ってはくれんからな。」

アギトはシグナムの方をチラリと見やる。

「わかった。
あたし、やるよ。」

「すまない。」

「旦那が気にする事無いさ！
シグナム、頼む。」

「あぁ、もちろんだ。」

アギトに手を差し出し、受け入れる準備をする。

「行くぞ、ユニゾン・イン！」

眩い光に、その場にいた全員が目を覆った。

それが治まった時、そこには、烈火の騎士と呼ぶにふさわしい姿のシグナムがいた。

彼女は何も言わず、無数のガジェットがいる戦場へと舞った。

◆◇◆◇◆

空を駆けるゲイルに、デュアリスは奇妙な感覚を持っていた。

（おかしい……。
奴は間違いなく“俺と同じ、プロジェクトFで生み出されたセイバーのコピー”。）

両剣を振るい、追い詰めようとするデュアリスだったが、
ゲイルの素早さ、技量、剣の使い方、そのどれもが、今の自分を上回っていた。

だがそれこそが、デュアリスの奇妙に思う気持ちを更に駆り立てた。
今まで、自分と同じように造り出されたセイバー達と模擬戦を繰り返してきた。

なのに、そのどのセイバーの戦い方とも、ゲイルの戦い方は合わなかった。

（確かに何人かのセイバーのコピーは、似ている部分があった。）

それもそのはずで、遺伝子の塩基配列パターンは同じ。

だが、全ての者が何もかも同じになる訳では無かった。

それが証拠に、全員、顔立ちや体つきは違ったのだ。

しかも、ある者は剣の戦い方に長け、またある者は戦術に長けていた。

（だと言うのに、奴はそのどれをも凌駕している……。
一体何故……？）

「ハアアアアアアアアアアア！！！！！」

不安を振りはらうように、デュアリスは、咆哮しながらゲイルに肉薄する。

だが、ゲイルはそれをあっさりとかわす。

「ゲイル、あんたは俺と同じじゃないのか！？」

「同じとは？」

「俺は、太古の騎士、“セイバー”の遺伝子情報からプロジェクトFで造られた。
あんたからも同じ感じがするんだよ！」

「確かに、遺伝子情報が近い者同士は、互いに感応するらしいな。
だが、その考えは残念だが見当違いだ。」

「なら、あんたは一体誰なんだ！」

デュアリスは左手に持った短剣を、ブーメランの要領で投げる。

ゲイルは迫る短剣を、ゲイルはウィングソーではじく。

しかし、巨大な剣で弾いたが故に、一瞬だけ自分の視界が一部遮られた。

その隙に、デュアリスは死角から仕掛ける。

「っ！」

目の前にいたと思っていたデュアリスがいない事に慌てたゲイルだったが、
視界の隅で、影が動いたのを見逃さなかった。

「上か！」

既にギリギリの所まで迫ってきていたデュアリスの刃を、既の所で気付き、
身を捻ってそれを避けようとする。

しかし、さすがに気付いたのが遅かった為、避けきれず、額に刃が走った。

デュアリスが振るったその刃は、額だけでなく、仮面をも切った。

虚空に舞い、地に落下していく仮面の下から晒されたその素顔に、
デュアリスは驚愕せざるを得なかった。

何故なら……。

「え……お、俺……？」

そう。

ゲイルの素顔は、デュアリスと瓜二つだったからだ。

「そうだ。
貴様は俺だ。」

「ま、まさか……。」

「そうだ。
“俺がセイバー”だ。
言うなれば、貴様らのオリジナルだ。」

第15話　「歪んだ正義　明かされた素顔」　了

第１５話　「歪んだ正義　明かされた素顔」（後書き）

鮮血
「ってなわけで、ゲイルの正体はデュアリスのオリジナルなのでした！」

デュアリス
「ゲイルが、俺の・・・。」

鮮血
「そうだね。」

デュアリス
「質問。
俺はプロジェクトFで生み出されたんだぞ？
なのに、何で皆顔が違うんだよ？
フェイトとアリシアみたいに、
聞き手とか細かい部分が違うのならまだしも、顔まで違うんだぞ？
おかしいじゃないか。」

鮮血
「それは、えっと・・・。」

デュアリス
「どうなんだよ？」

鮮血
「まぁ、そこまで深く考えて無かったから、
反論できるほどの理由じゃないけど・・・。

ゲイルの遺伝子が複数存在していたとしたら？」

デュアリス
「つまり、採取した遺伝子が数種類存在したって事か？」

鮮血
「うん。
確かに遺伝子の配列パターンは一緒だけど、
それぞれが身体のどこを司るかはバラバラな訳だから。」

デュアリス
「こじつけじゃねぇかよ、それ！」

鮮血
「ごめんなさい・・・ｏｒｚ」

デュアリス
「まったく・・・。
そういえば、ゼストさんは生存ルートなんだな。」

鮮血
「そうだね。
まぁ、今後の展開上、あの人の存在は必須だからね。」

デュアリス
「ゼストさんに何をさせる気だよ・・・。」

鮮血
「その内わかるよ。」

デュアリス
「ふーん・・・？
で、次回は？」

鮮血
「次回は、ヴィレイサーの方をお話します。
そこで、彼にある異変が・・・！」

デュアリス
「なんだと！？」

鮮血
「しょうがないじゃん。
ある事をしていないんだから。」

デュアリス
「そのある事って・・・？」

鮮血
「次回で分かるよ。
次回は、ヴィレイサーとミラージュ、ヘイル、ニクスとの話です。
ゆりかご浮上後にできた、巨大な穴。
そこで、遂に七星の主が！
更に、フェイトにも暗い影が迫ります！」

デュアリス
「お前に書けるのかよ・・・。」

鮮血
「まずはそこが問題だよね・・・。」

デュアリス
「やれやれ・・・。
次回もお楽しみに。」

第１６話　「神の目覚め　舞い降りる堕天使」（前書き）

鮮血
「スランプの状態でなんとか書き続けました！」

リュウビ
「その所為で駄文を究めたよね！」

鮮血
「うん・・・。」

リュウビ
「冗談だよ～。
で、今日の話はどんな感じなの？」

鮮血
「駄文・・・。」

リュウビ
「そういう事を聞いているんじゃなくて・・・。」

鮮血
「はい。
えっと、今日の話はミラージュを追跡したヴィレイサー側の話です。
ミラージュを追って辿り着いたのは、
ゆりかご浮上後にできた、例の巨大な穴。
その最深部で、ミラージュ、ヘイル、ニクスの３人と戦ってもらいます。」

リュウビ
「でも、ヴィレイサーには今、マズイ状態があるんだよね？」

鮮血
「それは文中とあとがきで。
そして、題名から分かる通り、遂にニクス達の主が・・・！
更にはヴィレイサーの最後のリミッターも。」

リュウビ
「って事は、いよいよ大詰めなのね？」

鮮血
「さぁ？」

リュウビ
「何それ・・・。
ともかく、大波乱の第１６話、どうぞ！」

鮮血
「大波乱じゃなくて、駄文の間違いです・・・。」

リュウビ
「そこまで卑屈にならなくても・・・。」

第１６話　「神の目覚め　舞い降りる堕天使」

「ここか……。」

ミラージュは飛行を止め、自身の下に広がる深い闇を見る。

そこには、巨大な穴がポッカリと開いていた。

スカリエッティが浮上させた、ゆりかごの穴だ。

近くには彼の研究所もある。

後続がまだ来ない為、なんとはなしに周囲に目を向ける。

すると、２つの巨大な影が見えた。

「ほう。
例の２匹の龍か……。」

ミラージュが呟いたとおりそれは、キャロが召喚した龍だった。

白い飛龍には、エリオが。

そして、その飛竜よりも遥かに大きな龍には、キャロがいた。

「あの２人がいると言う事は、ルーテシア嬢は敗れたか。」

だが、ミラージュはそれ以上の事に興味が無いのか、穴の奥深くに目を移した。

しばらくその場で静止していると、ようやく後続が追いついて来た。

「ハァ、ハァ……。
逃げるのは、もう、終わりか？」

先程まで刃を交えていたヴィレイサーだ。

「どうした？
心なしか、息があがっているぞ。」

「黙れ……。」

どうやらヴィレイサー自身も、それを理解しているようだった。

「まぁいい。　ここから更に奥だ。」

そう言って、ミラージュが先行する。

ヴィレイサーは、遠くに見える影を見る。

「エリオとキャロか……。」

「他にも、バルディッシュとヴィンデルシャフトの反応があります。」

「フェイトかシャッハに増援を願い出たいところだが……。
以前のミラージュ戦の事を鑑みると、それは避けた方がいいな。」

そして、ヴィレイサーもミラージュ同様に、穴の奥へと進む。

その最中、彼は左腕を思い切り掴んだ。

「グアァ……。」

肘から下を強く掴み、急激に起こった痛みに堪える。

（なんだ、この熱さは……？
まるで、腕が焼き千切られるような……。）

しばらくすると、その激痛は嘘のようにひいた。

だがその代わりなのか、今度は左足の膝から下が、同じように急激に痛みだした。

（クソォ……。
なんだってこんな時に……。）

しかし、ヴィレイサーには心当たりがあった。

（間違いなく遺伝子の破壊が進んでいる……。
ミラージュに追いついた時の息切れも、恐らくはそれの所為だろう……。）

本来は薬を摂取しなければならないのだが、公開意見陳述会でのミラージュ戦の最中、
それをどこかに消失してしまった。

どんどんと深淵に足を踏み込むミラージュの背を見ながら、
ヴィレイサーは内心舌打ちした。

（早めに決着を着けないと、明らかに俺が早くに死ぬ……。）

今この場でミラージュを倒すか迷うが、その考えは隣から現れたヘイルによって潰された。

「ミラージュ、何でアレ（ヴィレイサー）がいるんだよ？」

ヴィレイサーを無視し、ミラージュに近づきながら問う。

「ニクスからの命令だ。」

「ニクスからの？
なんならいいや。」

あっさりと納得し、ヘイルは一足先に更なる闇へと進んだ。

（チッ。　ニクスが奥にいるのかよ……。
アイツの力はまだ、未知数だってのに……。）

「そろそろ着くぞ。
貴様の、最期の戦場に。」

ミラージュの言う通り、すぐに地が見えてきた。

そこには、先に行ったヘイル、そしてもちろん、ニクスの姿があった。

ヴィレイサーは地に足を付き、周囲を見渡す。

外からの光がまったく差し込まないからなのか、数多くの照明が点在していた。

「ようこそ、ヴィレイサー。」

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第１６話　「神の目覚め　舞い降りる堕天使」

「ようこそ、ヴィレイサー。」

凛とした、よく通るその声に、ヴィレイサーはニクスの方を仰ぎ見

た。

ニクスは石の階段を上り、やがて立ち止まる。

「よもや、生きていようとはね。」

「しぶとくて悪かったな。」

表情を変えずにヴィレイサーは返すが、エターナルは無闇矢鱈に抜刀しない。

下手に刺激すれば、明らかにこちらが不利だからだ。

だが、いつでも逃げ出せる準備はしておく。

死ぬ訳には行かないから。

「確かに、以前までは君が生きているのが厄介だったよ。」

ニクスは微笑み、ヴィレイサーを見下す。

「けど今は、君にいてもらわなきゃ困るんだ。」

「どういう風の吹き回しだ、一体?」

「何、ただ僕らの主の復活に手を貸してほしいだけさ。」

ニッコリと笑い、背にある巨大な扉を叩く。

随分と古いものなのか、所々にヒビが見て取れる。

埃が堪った箇所も、チラホラと見受けられた。

「断る。」

右手を払うように振り、拒否の意思を示す。

「俺にはメリットが無いだろ。」

そう答えると、ニクスは嗤いだした。

「アハハハハハ。」

「何がおかしい？」

突如嗤いだしたニクスに、ヴィレイサーは眉を顰め、問う。

「いや、すまない。　やっぱり『人間』なんだと思っただけだよ。
どうも『人間』っていうのは、メリットやら見返りやらが無ければ働けないらしいね。」

ニクスは肩を竦め、ミラージュとヘイルも嘲笑した。

「メリットは無いよ。
だけど、人助けと思って、協力してくれないかい？」

同志に向けられたようなニクスの手をしかし、ヴィレイサーは断った。

「散々俺を殺そうとしといて、今更だろ。」

「そうか、残念だよ……。」

差し出した手を引っ込め、冷徹な顔つきになる。

「……本当に残念だ……。」

まるで下等生物を見る目付きに変わり、ニクスは手を上げる。

「ＩＳ、ニクス・アーセナル」

彼の背後の空間が割れ、そこからドラグーンが顔を覗かせる。

「悪いけど、無理にでも協力してもらうよ。」

言い終えるや否や、上げていた手をヴィレイサーに向けて下ろす。

その瞬間、いくつものドラグーンが迫ってきた。

「誰が！」

エターナルを薙刀に切り替え、一閃する。

その一閃に、３つのドラグーンが爆散する。

「ヘイル、ミラージュ。」

「おう。」

「了解。」

2人も動き出し、ヴィレイサーに幾つもの砲火を浴びせる。

「チッ……。」

それらを紙一重でかわし、或いはエターナルの刃で軌道を僅かに逸らす。

だが、敵の戦い方に、ヴィレイサーは疑問が生じた。

（コイツら、俺を殺そうとしない……。
何で……？）

ヴィレイサーの疑問通り、彼らは致命傷となりうる攻撃を仕掛けて来なかった。

だが、戦いが長引けば長引くほど、今のヴィレイサーには不利だった。

薬の持ち合わせが無い上、いつ左腕と左足が激痛に襲われるかわからないのだ。

やはり、早目に逃げるべきなのだが……。

「逃がすか！」

上空を窺ったり、飛行すれば、ヘイルの砲火に遮られた。

（個々に撃破していくしか無いか……。
だとすれば、一番厄介なニクスを最初に……。）

ニクスを紫の双眸に捉え、薙刀を構え直す。

（やはり僕から狙うか……。
“そうだ、それでいい”。）

うっすらと笑い、迫り来る堕天使を迎え撃つ。

攻防一対の盾から魔力刃を出し、ヴィレイサーの薙刀を先に思い切り弾く。

そのまま一気に肉薄しようとするが、薙刀を弾かれながらも、その勢いを利用した、柄の部分が迫っているのに気付き、跳躍して距離を取る。

その後、ヴィレイサーも跳躍したニクスを追うように、飛翔する。

ニクスはヴィレイサーに近付かれまいと、ドラグーンを数個差し向ける。

放たれる砲火を身を捻りかわし、或いは防御できるギリギリのシールドでそれを防ぐ。

それに焦りを感じたのか、ニクスの動きに隙が生まれた。

ヴィレイサーはそれを見逃さず、間髪入れずに砲撃を叩き込む。

「逃がすか！
レイディアント・ランチャー！」

漆黒の砲は、完璧にニクスを捕らえた。

だが、それが“誤り”だった。

「スペキュラム！」

ニクスはヴィレイサーの放った砲撃に対し、
それと同等、もしくはそれ以上の大きな鏡を展開する。

その鏡に受け止められた砲撃は、反射され、
ニクスがいた扉に飾られた球体に吸い込まれた。

「なっ！？」

「魔力の寄付、ありがとう、ヴィレイサー。」

そして扉に刻まれた線に、魔力が走り、発光しだした。

「ついに目覚める……。」

「我等が主、“ゼウス”が。」

ヴィレイサーの背後で見守っていたヘイルとミラージュは、
主の復活を今か今かと待っていた。

そして、扉は開かれた。

白い煙の中に、人影が見えた。

「今なら、まだ！」

捕らえられると信じ、ヴィレイサーは人影に突っ込む。

「ハアアアアアァァァァァ！！！！」

だがヴィレイサーの刃は通る事無く、見えない壁に阻まれる。

「クッ………。」

集められた魔力が、周囲を無理矢理に威圧する。

その魔力による威圧たるや、凄まじく、力無き者は否応なしに跪かせるほどだった。

そして、ようやくその力が収束した時、扉から1人の男性が現れた。

気高く、美しい漆黒の長い髪をなびかせ、ゆっくりと閉じていた目を開く。

開かれたその瞳は、何者をも魅了するように青く、その双眸は、ヴィレイサーを、そしてニクス達を捉えた。

「懐かしいな、ニクス、ヘイル、ミラージュ。」

「はい。
我らが主、ゼウス………。」

「フン。　主…か………。
俺はお前達を見殺しにしたというのに、まだ主と敬うか。」

「アレは“ヘラ”が死んだのだから、致し方ありません。」

ヘイルにそう言われるが、ゼウスは残念そうに肩を落とした。

「そうだったな……。
“ヘラ”は、……。」

「ゼウス。
一先ず“この世界を消滅させましょう”。
僕らの願いを叶えるために。」

ニクスは冷徹な笑みを浮かべ、空を仰ぎ見る。

「どんな世界かは知らんが、そうさせてもらうか。」

ゼウスの答えに、ヴィレイサーはそれを止めようと試みて動こうとするが……。

「まずはお前から死ぬか、人間？」

こちらに目を向けずに、されど背筋が凍る程の恐ろしい声に、ヴィレイサーは動けなかった。

「っ……。」

立ち止ったヴィレイサーを見て、ゼウスは笑う。

「人間にしては、賢明な判断ができるようだな。」

「参りましょう。」

ニクスが先行し、その後をゼウスが。
そして、ゼウスを守るように、ミラージュとヘイルが彼の両脇を固める。

「クッ……。
このまま黙って、見過ごすわけにはいかないってのに！」

怖気づいた自分に怒り、すぐさま4人を追おうとする。

「ですが、どうやって渡り合うと言うのです？
特に、ゼウスと呼ばれた彼には、太刀打ちできるかすら怪しい。」

エターナルの言う事は尤もだ。

「確かにお前の言う通りだ。
だが、見過ごしていい事でも無いだろ。
それに、外には……。」

そこで言葉を切り、天を仰ぎ見る。

「……外には、俺の答えを、待ってくれているアイツがいる……。」

金の髪を揺らし、こちらに笑顔を向ける彼女。
それを脳裏に思い起こす。

「エクシーガに通信を……。」

リミッターを完全解除する為、エクシーガに連絡を取ろうとするが……。

［ダメです、リーダー。
通信が繋がりません。］

「チッ……。
こんなにも深い所にいるからか……。
仕方が無い。５分の間にけりをつけるぞ。」

急いでゼウス達を追う為、飛翔した。

◆◇◆◇◆

［ネブラ、ゲイル、レーゲン、ヴァン。
ゼウスが目覚めた。
眼前の敵から離脱して、例のゆりかごがあった箇所に集合してくれ。］

ニクスが、巨大な穴の出口付近で、七星の残りの４人に全体通信をする。

それを各人承諾し、すぐさま戦線を離脱した。

「これが、この世界の風景か……。」

穴から出、周囲を見回す。
だが、ある人影を見て瞠目する。
「あれは……。
ヘラ……なのか……？」
ゼウスの視線の先には、エリオとキャロを笑顔で抱きしめているフェイトがいた。
「そっくりだな……。」
ヘイルも同意見なのか、ミラージュ同様に首を縦に振った。
「ですが、所詮は別人ですよ、ゼウス。」
「ニクス、ヘラの遺伝子情報は残っていたな？」
「えぇ。
なるほど、そういう事ですか。」
これからゼウスが言わんとしている事を察し、ニクスはＩＳを使ってドラグーンを展開する。
「ゼウス、あの女を器にするのか？」
「そうだ。
遺伝子情報さえあれば、早くて１０日ぐらいで成功か失敗かわかるだろう。

失敗したのなら、捨てればいい。　人間など、死んだところでなんら問題無い。」

「そうだな。」

3人の会話を背後に聞き、ニクスは幸せそうにしているフェイト達に肉薄した。

「え、何!?」

いきなりドラグーンに周囲を囲まれ、フェイトは驚愕した。

「フェイトさん……！」

エリオが指さす所には、ニクスが氷のように冷たい笑みを浮かべている。

「あなたには、僕らについてきて頂きたい。」

「それは出来ない……。
私は、ヴィレイサーを待っているから……。」

「そうか。
じゃあ、実力行使といこうか。」

そう言うや否や、ニクスが放ったドラグーンが、一斉に火を吹く。

それを、エリオとキャロを抱えて、真ソニックフォームでの速さで全てかわす。

「ほう、速いね。」

空に逃げたフェイトを見上げ、ニクスは楽しそうに言う。

「エリオ、キャロ。
２人は離れてて。」

「でも、フェイトさん……。」

「今はもう、魔力が底を尽きてるんじゃあ……。」

２人の心配は尤もだったが、それでもフェイトは戦う事を選んだ。

「大丈夫だよ。
ちゃんと戻るから。」

地に降り立ち、２人を１度抱き締めながらそう言う。

そして、バルディッシュを、ライオットザンバー・スティンガーにして、構える。

「行くよ、バルディッシュ。」

［Ｙｅｓ，Ｓｉｒ．］

主の戦いに応えるべく、愛機は最後の力を振り絞る。

「２刀流か……。
どれほどのもか、見せてもらうよ。」

迫る金色の閃光に、恐れをなす事無く白銀の雪が迎え撃つ。

◆◇◆◇◆

「なんとか追いついたか……。」

3人でその場に浮遊しているゼウス達を見つけ、ヴィレイサーは駆け寄る。

「む？
なんだ、逃げていれば助かったものを……。」

ヴィレイサーの瞳にたぎる、戦う意志に、ゼウスは嗤う。

「確かに力の差は歴然かもしれない……。
だが、だから敗北が決定している訳じゃない！」

「そうかもな。
その意志、いつまでも残している訳にもいかんな。
今ここでその灯火、消し去ってくれる！」

ゼウスはバリアジャケットを持ってはいない為、眠っていた時の服装と武器で戦う。

「ヴィーナスシステム、起動！」

［Ｖｅｎｕｓ　Ｓｙｓｔｅｍ，Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．］

切り札を開放し、強大な魔力がヴィレイサーを包む。

［Ｐｌｅａｓｅ　Ｔｅａｃｈ　ａ　Ｃｏｄｅ　Ｎａｍｅ．］

「コードネーム……。
ドーン・ルチフェル！」

［ＤＡＷＮ・ＬＵＣＩＦＥＲ．］

コードネームを叫んだ瞬間、ヴィレイサーの背に、左右６枚、総計１２枚の羽が生える。

その１２枚の羽は、堕天使のごとく黒く、しかし半透明で美しかった。

そしてその羽からは、ヴィレイサーの魔力が、微粒子となって出続けていた。

それを１度、思い切り羽ばたかせる。

すると、羽ばたかせたと同時に、微粒子の魔力が煌きながら舞い散る。

「タイムリミットは５分……。
行くぞ、エターナル！」

［Ｙｅｓ，Ｌｅａｄｅｒ．］

ヴィレイサーは、太刀を抜刀し、翼を煌かせた。

第１６話　「神の目覚め　舞い降りる堕天使」　了

第１６話　「神の目覚め　舞い降りる堕天使」（後書き）

鮮血
「ってなわけで、主、ゼウスが復活！
そして、ヴィレイサーが真なる堕天使に昇華しました！」

リュウビ
「ようやくゼウスが登場って感じね。」

鮮血
「そうだね。
オリュンポス１２神を題材に使っているだけあって、
その主神、更には初めて１２神の１人を出せたんだからね。」

リュウビ
「でも、今のヴィレイサーじゃあ不利よ・・・。
本文の頭にもあったように、彼は薬を摂取していないよ？」

鮮血
「それは、今後の展開上必要だったからね。」

リュウビ
「あの薬は、医学の知識があるシャマルだからこそ作れたけど・・・。
その知識が皆無の私たちじゃあ、どうじようも・・・。」

鮮血
「それに加えて、ヴィーナスシステムは本調子じゃないからね。
それだけのハンデに、相手はゼウス。

どうやってその手に勝利を収めるのか・・・。」

リュウビ
「考えてあるの？」

鮮血
「さぁ？」

リュウビ
「もう・・・。
それにしても、ヴィレイサーもなんだかんだ言ってフェイトを好いているんだね。」

鮮血
「ねー。
まったく、あのツンデレ野郎め・・・。
もっと早くにそれに気づいていれば、フェイトとイチャイチャできただろうに・・・。」

リュウビ
「そうなの？」

鮮血
「やっぱり無理だと思う・・・。
互いにそんな性格じゃないし。」

リュウビ
「そうね。
それにしても、フェイトの方にはニクスが迫ったわね。」

鮮血
「ヘラの材料としてね。
さて、次回はニクスＶＳフェイト、そしてゼウスＶＳヴィレイサーをお送りします！」

リュウビ
「作者にしては珍しく、今後が気になる熱い展開だね。」

鮮血
「自分でもそう思う・・・。
さて、次回ですが・・・。
ヴィレイサーには再びボロボロになってもらいます！」

リュウビ
「えぇ！？
それって、辛勝って事！？」

鮮血
「今までの中で、最も酷いボロボロです！
更には、フェイトさんにも・・・。」

リュウビ
「天照大神先生と優星くんが黙って無いよ？」

鮮血
「覚悟はしてます・・・。
次回では、ヴィレイサーの精神と身体、両方ともズタボロにします。」

リュウビ

「神崎先生の所のリオスくんみたく、代償として精神を・・・？」

鮮血

「それは、次回で。
次回には驚いてもらえると光栄です。」

リュウビ

「それでは、次回第１７話、「絶望の神前」もお楽しみに！
感想、誤字脱字もお願いしまーす。」

第17話　「絶望の神前」（前書き）

鮮血
「なんとか書けた・・・。」

エクシーガ
「本当にこの1週間は頑張ったわね。」

鮮血
「ずっと書きたかった事が詰まっているこの話の為に、
削れる時間は削りに削ったからね！」

エクシーガ
「ゲームもそっちのけだったわね。
だからと言って、ここで遅らせていい訳ではないわよ？
次の話をまだ書けて無いんだから。」

鮮血
「ストックが無いからね・・・。
さすがにちょっと疲れた・・・。」

エクシーガ
「ダメに決まっているでしょ。」

鮮血
「だってー・・・。」

エクシーガ
「口答えしない！」

鮮血
「はい・・・。
さて、今回の話は以前にもお話しました通り、
ニクスＶＳフェイト、ゼウスＶＳヴィレイサーです。
それ以外にもカタストロフィーの方もちょこっと。」

エクシーガ
「基本的には、ゼウスＶＳヴィレイサーを軸に進めます。」

鮮血
「さて、今回は最も酷い事になります。
ヴィレイサーの身体然り、精神然り、そして・・・。」

エクシーガ
「それでは第１７話、「絶望の神前」をどうぞ。」

第17話　「絶望の神前」

「ヴィーナスシステム、起動！」

［Ｖｅｎｕｓ　Ｓｙｓｔｅｍ，Ｇｅｔ　Ｓｅｔ．］

ヴィレイサーの周囲を、魔力色である黒い粒子が包み込む。

［Ｐｌｅａｓｅ　Ｔｅａｃｈ　ａ　Ｃｏｄｅ　Ｎａｍｅ．］

「コードネーム……。
ドーン・ルチフェル！」

［ＤＡＷＮ・ＬＵＣＩＦＥＲ．］

夜明けの堕天使――――

その名に違わぬような、黒く、されど透明感のある翼が、ヴィレイサーの背に生える。

総数１２枚のその羽からは、ヴィレイサーの魔力が微粒子となって出ている。

その美しくも、重みのある翼を羽ばたかせる。

その度に、翼から舞う微粒子が、更に煌きながら舞う。

「タイムリミットは５分……。
一気に行くぞ！」

ヴィレイサーは太刀を引き抜き、ゼウスに肉薄した。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第１７話　「絶望の神前」

一方、ニクスから主の復活を知った４人は、目の前の敵と未だに交戦していた。

「ゲイル！
いや…セイバー！」

短剣を捨て、長剣を両手持ちに切り替えたデュアリスが、ゲイルに迫る。

「フン。」

それを一瞥し、ウィングソーで簡単にいなし、もう片方でデュアリスの脇腹を狙う。

「クッ……。」

既の所でそれに気付き、体を躱す。

「お前達の主は、一体何者なんだ!?」

「貴様らが知る必要は無い。
それに……。」

剣をかわされ、ゲイルも距離を取る。

「……それに、騎士が主について容易に口を割ると思うか?」

「思えないな……。」

自嘲めいた表情を浮かべ、デュアリスは長剣を構え直す。

「だけど……。」

真剣味を帯びたその声に、ゲイルもウィングソーを握り直す。

「だけど、俺達は必ず捕らえる！」

虚空を一振りさせ、迫りくるデュアリスに、ゲイルは嘲笑する。

「ハアアアアアアアアアア！！！」

上段から思い切り振り下ろされたデュアリスの剣を、
ゲイルはウィングソー1本だけで受け止める。

「っ！」

一瞬瞠目し、しかし力を緩めない。

「残念だが、今の貴様では捕らえられんぞ。
誰も、な！」

押し返し、デュアリスの体勢を崩し、がら空きになった胴を一閃する。

「グアァ！？」

「浅かったか……。
だが、動きが悪い貴様には、それで充分！」

そこで動きを止める事は無く、ゲイルの蹴りがデュアリスを捕らえた。

その蹴りに吹き飛ばされ、ビルに突っ込んだ。

「この……。」

諦めず、急いでゲイルを追おうとしたデュアリスの肩に、黒光りするナイフが刺さった。

「ガアァ！？」

ゲイルが牽制用に、先読みして投げてきたのだ。

「セイバーの末裔よ。
貴様の本気を見れぬ事が残念だ。」

身を翻し、ゲイルはゼウスの元へと向かった。

◆◇◆◇◆

「ハアアアアアアアアア！！！」

振り下ろされた剣を、ヴァンは顔色１つ変えずに、易々と受け止める。

「クッ……。」

それを見たリュウビは、難色を示すしかなかった。

しばしの鍔迫り合いの後、ヴァンは自身の剣に、風を纏わせる。

「っ！」

「吹き飛べ！」

押し返された事と、風圧により、リュウビは普通よりも大きく吹きとばされた。

ビルに突っ込む。

そう思った矢先、空中で体勢を立て直し、制動をかける。

だが、そこで安心した為、迫る砲撃に、彼女は気付けなかった。

「しまった！？」

ヴァンが放ったその砲撃は、リュウビを沈黙させるには充分だった。

「少しは楽しめたけど、この程度じゃあねぇ。」

聊かがっかりだったのか、ヴァンは肩を落とした。

そして、彼女もゼウスの元へと飛翔した。

◆◇◆◇◆

「この感じは……。」

エクシーガは、突如感じた魔力に、驚きを隠せなかった。

（ヴィレイサー……。
あなたまさか、ヴィーナスシステムを!?）

「眼前の敵から目を逸らすとは……余裕だな、女!」

レーゲンの注意に我に返り、迫る光刃を受け止める。

「ウグゥ……。」

勢いも加わったレーゲンの刃は重く、エクシーガは簡単に折れた。

「ウアァ!」

下方へ吹き飛び、それでも双眸はレーゲンから離さない。

そのお陰で、レーゲンが放ったバズーカの弾丸をかわす。

だが、弾丸をかわした為、更にレーゲンとの距離が離れてしまった。

「しまった……。」

急いでそれを追うべきだったのだが、
彼女の近くを、ゲイルとヴァンが通った事で、思い止まる。

「デュアリス、リュウビ!」

先程まで自分と同じように戦っていた2人が来なかったので、

負傷したと判断し、急いで2人の所へと向かった。

（ヴィーナスシステムは、もっと近くにいないと互いに完全解除が出来ない……。
お願い、ヴィレイサー……もう少しだけ耐えてて。）

リュウビに駆け寄りながら、今最も危険な立場にある仲間を想う。

◆◇◆◇◆

「クソッ！」

一方、ヴァンガードはネブラを見失ってしまった。

「ヴァンガード！」

そんな彼の前に、アギトとユニゾンしたままのシグナムが来た。

「シグナム！
そっちはどうだ？」

「問題ない。
グランガイツ殿も、六課で療養する事になった。」

「そうか。
ネブラを見失っちまった……。」

周囲を探りながら、苦々しげにぼやく。

「なら、テスタロッサの元へ急ごう。
あそこに、七星の面々が集まっているそうだ。」

「わかった、行こう！」

ヴァンガードとシグナムは、フェイト達の所へ向かった。

◆◇◆◇◆

そして、フェイトはニクスと交戦中だった。

二刀流のライオットを振るうも、それは悉くかわされ、
代わりにニクスが放ったドラグーンが、フェイトを取り囲む。

「遅い！」

しかし、それらから放たれる砲火をフェイトはいとも容易くかわした。

その時、いきなり膨れ上がった膨大な魔力の気配に、そちらを見やる。

そんな彼女の瞳に映ったのは、堕天使のような姿をしたヴィレイサ

ーだった。

「ヴィレイサー？」

生きていた。

自分の大切な想い人が――――

答えを待ち焦がれている自分の相手が――――

その感慨深い気持ちが、彼女の心を暖かくした。

だが、その繋がりが彼女の敗因となる。

「ここまでだね。」

「っ！？」

気付いた時には、既に周囲をドラグーンで囲まれていた。

ニクスは笑みを浮かべて、フェイトを見下ろしていた。

（まだ負けじゃない。
必ず、抜け道はある。）

視線を巡らせ、僅かな隙間も見落とさないようにする。

（あそこからなら、脱する事が出来る。）

自身を囲むドラグーンの配置で、抜けだす事が出来る箇所を見つけ、

身構える。

その瞬間、ドラグーンが一斉に火を噴いた。

しかし、それらを全てかわしきったフェイトは、安堵の息をもらした。

だからこそ、彼女は気付かなかった。

ニクスが、自分の背後に既に回り込んでいる事に。

背後に戦慄を覚え、フェイトはそちらを振りかえった。

体が振り返り切るその直前、ニクスの正拳が彼女の腹に叩き込まれた。

「カハッ……。」

フェイトは成す術無く、ニクスに倒れ込んだ。

「任務完了。」

ニクスの冷徹な声だけが、風に運ばれた。

◆◇◆◇◆

一方、ヴィレイサーは引き抜いた太刀を一閃し、翼をはためかせてゼウスに迫っていた。

「速いっ！？」

一瞬、ヴィレイサーを視界から見失い、ゼウスは驚愕する。

だが、さすがはニクス達を統べる者だけあって、冷静に対処する。

「そこか！」

ヴィレイサーが太刀を振り下ろした刹那、ゼウスもそれを受け止める。

「っ！？」

「フン。
風を切る音でわかるものだぞ。」

押し返し、肉薄してくるゼウスに、ヴィレイサーは翼をはためかせ、距離を取る。

「早くも逃げの一手か、人間！」

「なにを……。」

太刀を鞘にしまい、別の武器を取り出す。

「Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ．」

「バスターライフル、ギア1。」

バスターライフルと呼ばれ、片手に出現した黒光りするそれは、ヴィレイサー自身の身長に匹敵するほどの長さで、通常の銃よりも大きな口径だった。

恐らく、1射で収束砲に匹敵するほどの威力が出せるのだろう。

「ほう。
少しは楽しめそうだな。」

ニヤリと笑い、狙いを定められぬように、デタラメに動く。

「チッ……。」

素早いその動きに舌打ちするも、ヴィレイサー自身も翼を煌かせ、高速で動く。

ゼウスに軽々と追いつき、狙いを定める。

だが、高速で動いている中、いきなり重い銃身を動かしたため、簡単には狙いが定められず、ゼウスを取り逃がす。

「戦い方がなっていないな、人間。」

「うるせぇ!
バスターライフル、ギア2!」

［Ｔｗｉｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ.］

バスターライフルを2対にし、速度を落とし、翼を思い切り羽ばたかせ、
ゼウスよりも高い位置に、素早く移動する。

「IS、マルチロックオン。」

ゼウスからの攻撃はこないが、彼をしっかりと双眸に捉え、動きを読む。

「ダブル・インパクト！」

時間差で砲撃し、1射がゼウスを捕らえた。

「グオォ……。」

シールドを展開するも、あまりの砲撃の重圧に、膝をつきそうになる。

やがて砲撃が止み、彼の周囲は大きく陥没しているも、
ゼウスを跪かせるまでには至らなかった。

「強い……。」

「少しはやるようだな、人間。
だが、残念だが俺を倒すにはまだまだのようだな。」

（確かに……。
今の俺は、遺伝子破壊の進行により、万全じゃない。
しかも、ヴィーナスシステムを完全に開放しきれていない事による疲れもある。）

ゼウスを睨み、自身の勝因を導き出せない体を憎む。

（だが、ここで諦める訳にはいかない！）

再び2対のバスターライフルを構え、肉薄するゼウスに、引き金を引く。

だが、時間差のそれも大きく飛翔された事によりかわされた。

「畜生……。」

上空から迫る相手に、重い銃身をすぐさまあげるのは難しいと判断し、

その場から真下に急降下し、地面スレスレを飛ぶ。

「ふん。」

それを鼻で笑い、ゼウスは手に魔力を収束させる。

「ゴッド・ブレス！」

開いた手から放たれた巨大な収束砲に、ヴィレイサーは瞠目した。

自分と奴とでは、未だにここまでの戦力差があるのだと。

「クッ……。」

迫る砲撃を、急旋回してかわし、すぐさま引き金を引く。

だがその時には既に、ゼウスの姿は無く、
ヴィレイサーが放った砲撃は、虚空を薙ぎ払っただけだった。

「何！？」

自分がゼウスに背を向けながら、迫りくる収束砲から逃げている間に、
ゼウスも移動していたのだ。

それを認識したのは、彼が後ろから刃を煌かせて迫っている時だった。

背後からの殺気に戦慄を覚え、そちらの方を振り返る。

だが、時既に遅く、ヴィレイサーに、太陽光に照らされながらも、
鈍い光を湛えている刃が真一文字に肉薄していた。

なんとかかわそうと、その場から高い位置に飛翔した時だった。

「グアァ！」

“左足に、刃が喰らいついた。”

かなりの勢いが加えられたその刃に、
ヴィレイサーの左足は紙切れのように容易く膝から下が斬られた。

一瞬、傷口が焼ける程熱くなるも、すぐさま絶望に染まったように
冷たくなる。

「グアアアアァァァァァ！！！！！」

あまりの激痛に、気を失うかとも思えるほどだった。
それを耐え凌ぐように、声を限りに激痛の酷さを物語る叫びが響いた。

「ククク。
やはり大した事が無いな、人間。」

「グアァ……。」

［Ｆｉｒｓｔ　Ａｉｄ．］

エターナルが施した応急処置により、なんとか止血だけ行われた。
だが、そうしている間にもゼウスが再び接近してきていた。

「この……。」

怒りを露わにし、冷静さを欠いたヴィレイサーは、
その状態のまま右手のバスターライフルを敵に向ける。

「甘いな。」

ゼウスはそれを嘲笑し、すぐさま銃口に定められぬように、ヴィレイサーの真下を駆ける。

「チッ……。」

舌打ちし、自分の下を駆けて背後に回ってくると予測をたて、背後

を見やる。

しかし、ゼウスの姿はどこにも無かった。

（どこだ！？）

その逡巡を見逃さず、ヴィレイサーの背後から死をもたらす刃が迫ってきていた。

［リーダー、後ろです！］

切羽詰まったエターナルの警告に、驚愕する間もなく、そこから離れようとする。

だがしかし、それは間に合わず、背中に死の光芒が一閃される。

「ガアァ！？」

鮮血が飛び散り、虚空から地に落ちるまでに、紅い花を開く。

意識が飛びそうになる激痛に耐え、ヴィレイサーはゼウスから距離を取る。

「ハァ……ハァ……。」

呼吸も荒くなり、今にも墜ちそうだった。

だが、今ここで自分が挫ければ、それこそ全てが終わる。

それだけは許せない。

「アイツが答えを待ってくれているんだ。
絶対にここで負ける訳にはいかない……。」

フェイトを思い出し、冷静さを取り戻す。

遠退きそうになる意識を確実に繋ぎ止め、エターナルに告げる。

「ギア３！」

［Ｕｎｉｓｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ．］

２対のバスターライフルを左右で合わせ、合体させる。

威力が格段に上がるが、もちろんその分魔力消費も大きい。

更には、２対の時よりも取り回しが聞き辛い為、当てるのはかなり難しくなる。

それでもヴィレイサーはこの形態にした。

「行くぞ。」

［Ｙｅｓ，Ｌｅａｄｅｒ．］

翼を大きく羽撃かせた。

ゼウスがそう思った時、ヴィレイサーの姿が数多く現れた。

その現れたヴィレイサーは、現れた順に消えて行く。

残像を出しながら、高速で移動しているのだ。

「先程よりも、速い……。」

その変化ぶりに舌打ちし、残像を残しながら移動するヴィレイサーを探る。

（翼から出る魔力の微粒子で作られた俺の残像は、本の数秒しか持たない。

だが、素早く移動すれば、その残像に相手は惑う。

その隙に、必ず、撃つ！）

ゼウスを魔力の微粒子で作られたヴィレイサーの残像で囲み、自分自身は、彼の斜め上の位置に陣取り、バスターライフルを構える。

（これで決める！）

カートリッジを3発射出し、引き金を引こうとする。

だが、それは叶わなかった。

（な、なんだ……？

左指だけ動かない？）

左手の感覚が急激に遠ざかり、引き金が引けなかった。

（まさか！？

遺伝子の拒絶反応による麻痺！？）

その一瞬が、彼から勝機を奪った。

「フン。
そんな所でのんびりとしていていいのか？」

ゼウスが射撃体勢に入ったヴィレイサーを見つけ、肉薄してきた。

ゼウスにとっては正に神がもたらした好機。

だが、ヴィレイサーにとっては絶望となった。

迫りくる死の刃に、ヴィレイサーは必死に引き金を引こうとする。

「人間、死ねえぇ！」

「誰がああああぁぁぁぁぁ！」

ゼウスがすぐ目の前にまで迫った時、ようやっと引き金が引けた。

そこから繰り出された黒い砲撃に、ゼウスの体が飲み込まれた。

「グ……。
グオオオオオォォォォォォ！？」

「ハァ……ハァ……。」

ようやくヴィレイサーの砲撃が止んだ。

息も切れ切れに、煙っているそこを見る。

「やった、のか……？」

確認するまで気は抜けない。

だが、さすがに膨大な魔力を放出した所為で、憔悴しきっている。

一瞬、疲れた事から、煙っている所から目を離した。

その刹那……。

「ウオオオオオォォォォォォ！！！！」

「なに！？」

ゼウスの刃が、ヴィレイサーの“左腕を斬り落とした。”

「ウワアアアァァァァァ！！！！」

襲いくる激痛に耐えたヴィレイサーだったが、ヴィーナスシステムが限界時間に到達した。

翼が消え、地に落下する。

しかし、エターナルが緩衝材を発生してくれた事で、なんとか命拾いした。

「中々の攻撃だったぞ、人間。」

そう言ったゼウスも、疲れているのか、息が上がっていた。

「さすがにこれではこの世界を潰すには至らないか。」

退いてくれる。

その考えに安堵したのも束の間、
ゼウスの傍に来たニクスに抱えられた人物を見て、瞠目する。

「フェイト……？」

ニクスに抱えられたフェイトは、気絶しているのか、まったく微動だにしなかった。

「この女を利用させてもらおう。
だが、デバイスは邪魔だな。」

ゼウスが、ウェイトフォームのバルディッシュに手を掲げる。

すると、バルディッシュは抵抗する事無く、外され、待機状態になる。

フェイトもバリアジャケット姿から、六課の服装に戻る。

「これは将来の手向けとして受け取っておけ。」

バルディッシュは放られ、ヴィレイサーの目の前に無力を現すかのように落下する。

「３０日だ。
その日数が経過した時、俺が閉じ込められていた場所に来い。
そうすれば、再び相見えるだろう。」

「フェイト！
おい、フェイ……グァ！」

ゼウスの言葉に耳を貸さず、ヴィレイサーはただフェイトの名を叫ぶ。

例え痛みが声を、息を詰まらそうとも。

『目覚めてくれ』　ただそれだけを込めて。

「フェイト！」

だが、ヴィレイサーの言葉は虚しく響くだけだった。

「では、な。
人間、３０日後を楽しみにしているぞ。」

七星の全員がゼウスを取り巻き、共に転移魔法を使って消えてゆく。

「待ってくれ……。
フェイト……フェイト！」

残った右手を、力の限りフェイトに向けて伸ばす。

それで何かが変わる訳でもない。

それはわかっている。

だがそれでも、やらずにはいられなかった。

目の前で、答えを待っている人が――――愛する人が消えてゆく。

「フェイトォォォォォォォォォォォォ！！！」

ヴィレイサーの慟哭だけが、戦場に響いた。

第17話　「絶望の神前」　了

第17話　「絶望の神前」（後書き）

鮮血
「えっと・・・。」

エクシーガ
「・・・。」

鮮血
「ア、アハハ・・・。」

エクシーガ
「エクスキャリバー！」

鮮血
「ギャアアアアアアアアアアアアアアアア！！！」

【しばらくお待ちください】

鮮血
「ひ、酷い・・・。」

エクシーガ
「酷いのは貴方でしょ？
ヴィレイサー、左腕と左足を失ったのよ！？」

鮮血
「だから言ったじゃん。
　ボロボロにするって・・・。」

エクシーガ
「しかもフェイトは連れ去られちゃうし・・・。」

鮮血
「まぁ、これはヴィレイサーのボロボロよりも後に思い付いたんだけどね。
　って言うか、前の話でヴィレイサーの左腕と左足、
激痛を起こしていたんだから、ある意味切ってもらって良かったのかもよ?」

エクシーガ
「それはどうなのかしら・・・。
　それより、どうするのよ、これから?」

鮮血
「どうするか・・・。」

エクシーガ
「考えて無いの?」

鮮血
「一応、考えてはあるけど・・・。
　しかしこれ、やり過ぎかな?」

エクシーガ

「どう考えてもそうでしょ。」

鮮血
「だって、精神を完全に失うとかよりはましじゃない？」

エクシーガ
「目の前で好いている人が攫われたのだから、
自我を失ってもおかしくないわよ。」

鮮血
「それもそうか。」

エクシーガ
「それで、今後のヴィレイサーの方針は？
まさかここで、戦線を離脱する訳無いわよね？」

鮮血
「それは、今後の展開次第だね。
彼がどうするかは、誰にもわからないよ。」

エクシーガ
「けど、左側の手足を失うなんて・・・。
例え義肢をつけたとしても、生半可な物じゃあ、
彼の戦闘について行けないわ。
どう考えても、無理よ。」

鮮血
「大丈夫。
ちゃーんとそれについては考えてあるから。
ある話が、今後の事について有益になるんだよ。」

エクシーガ
「まさか・・・。」

鮮血
「勘が鋭いようで。
さて、手足を失い、更にはフェイトを奪われたヴィレイサー。
その圧倒的な力の前に、彼は跪くしかない。
次回は、自我を壊してしまったヴィレイサーの嘆きをお送りします。」

エクシーガ
「次回、第１８話、「無力の慟哭」。」

鮮血
「お楽しみに。」

第１８話　「無力の慟哭」（前書き）

鮮血
「番外編での明るい空気など皆無の１８話です。」

エクシーガ
「今回は、ヴィレイサーの慟哭にスポットを。」

鮮血
「それでは、どうぞ。」

第１８話　「無力の慟哭」

ピ、ピと機械的の音だけが静寂を破る病室。

その部屋は清潔な白で統一されており、一見安堵をもたらすように思えたが、

しばらくすればそれは、息苦しさに変わる。

与えられたこの閉塞感にしかし、患者である青年はなんとも思わなかった。

と言うよりも、何かを思う。

そんな感情が抜け落ちたようだった。

その瞳は焦点が定まっておらず、虚ろだけしかなかった。

見ているのか見ていないのか、

それすら分からないその瞳は、病室の窓から広がる蒼天に向けられていた。

時折動く口から聞こえるのは、誰かの名前だった。

彼は広がる蒼天に手を伸ばそうと、左肩を動かす。

だがその腕は――――――肘から先が無かった。

「ヴィレくんの様子はどうや？」

はやての問いに、なのはは首を横に振っただけだった。

「さよか……。」

Ｊ・Ｓ事件は解決した。

だが、七星により目覚めたゼウスを筆頭とする部隊については、未だに何も進展を見せてはいなかった。

「この事件は、下手したら六課だけで解決せんとアカン事になる。
今、レジアス中将が奔走しとるみたいやけど、協力者は集まりそうも無いんや。」

「逆にその方が好都合かもしれないわ。」

はやての沈痛した面持ちとは反対に、エクシーガは安堵したように息をつく。

「犠牲者を最小限に出来るからね。」

「同感だな。」

エクシーガに同意したヴァンガードも頷く。

「それに、私達で解決しておかないと、後で六課への風当たりが強くなるよ。」

リュウビの言った事に、はやては「せやな」と同意の意を示す。

「問題は、どうやって敵を討つかね。
エターナルの話では、３０日ほどの猶予は貰えたみたいだけど。」

空間に出現したモニターを操作し、ゼウスの話した内容を再生する。

「期日まであと２７日……。」

「例のゆりかごが浮上してできた穴には、相変わらず結界が張られたままだ。」

ヴァンガードはお手上げとでも言うように、肩を竦めた。

「恐らく、期日には結界は消失するわ。
でなきゃ、私達を招くなんて事はしないでしょうし。」

「そうだね。」

◆◇◆◇◆

一方、結界が張られた穴の深淵にある扉。

そこに入り、一番奥の部屋。

そこでは、ゼウスがポッドに眠るフェイトを見上げていた。

「やはりこの女はヘラの代わりにすらならんか。」

わかっていた結果とは言え、自身が愛した女性を蘇生出来ず、ゼウスは落胆した。

「では殺しますか。」

平然とした口調で淡々と述べたニクスにしかし、ゼウスは首を振った。

「いや、傀儡としてこの女も戦わせよう。
あの時対峙したあの男にとって、大切な者のようだしな。」

「わかりました。」

ニクスはゼウスの判断に従い、彼をメディカルルームへと通す。

「ゼウス。
今は治療に専念してくださいよ。」

「そうだな。
本調子で無ければ、奴に負けるだろうしな。」

ヴィレイサーの力量を理解したゼウスの体には、
彼から受けたであろう傷が見受けられた。

「光闇の書は？」

「ネブラが。
彼女は不可視能力を使えますからね。」

「期日までには見つけだせ。
アレが無ければ、女を傀儡には出来ないからな。」

◆◇◆◇◆

所変わって機動六課。

「スバル、ヴィレイサーさんの様子はどう？」

ティアナの問いに、スバルは目を伏せた。

「そう……。」

「目の前でフェイト隊長を攫われただもん。
やっぱり、辛いよね……。」

「チビッコ達もね。
そんな所、微塵も見せずに保護した女の子、ルーテシアだっけ？
彼女を心配してるけど。」

「少しは頼ってくれてもいいのに……。」

歯痒い気持ちだけが、２人の胸の内で膨らんだ。

◆◇◆◇◆

「デュアリス、ちょっといい？」

部屋の外から聞こえてきたリュウビの声に、デュアリスは顔を上げた。

「あぁ……。」

気力の無い声で、果たして聞こえたかどうかわからなかった。

「入るね？」

そう言ってリュウビが扉を開けたのを見ると、どうやら聞こえたようだ。

「どうしたの？」

入ってきたリュウビにいきなり聞かれ、デュアリスは戸惑った。

「ゲイルだっけ。
あの人と戦って、何かあったの？」

「いや、そういう訳じゃあ無いんだ……。」

俯いたまま答えたデュアリスを、リュウビは優しく抱き寄せた。

「大丈夫だよ、デュアリス。
私達は無理に聞く気は無いから。
だけど、心配している事を忘れないで……。」

「リュウビ……。」

彼女の温もりに触れ、デュアリスの心に安らぎが灯る。

「何があっても、私達はあなたの元を離れないから。」

「ありがとう、リュウビ。
だけど、もう少しだけ時間をくれないか？
必ず……必ず話すから。」

「もちろん。」

デュアリスの決意を秘めた瞳を見て、リュウビは笑って答えた。

◆◇◆◇◆

「ヴィレくん、食事を持ってきたよ。」

なのはの呼び掛けに、ヴィレイサーは一瞬だけピクリと反応を示した。

「ここに置いておくね。」

ヴィレイサーの前にトレイを置く。

確かに食事は取るのだが、それは必要最低限のみ口にしただけで、毎度毎度、完食されてはいなかった。

「それとこれ……。」

なのはが躊躇いがちに取り出したソレを目にしたヴィレイサーは瞠目した。

「バルディッシュ、直ったから置いておくね。」

金色に染まったフェイトの愛機。

それによって思い出されるフェイト自身と、彼女に言われた言葉。

それがまざまざと頭で反芻される。

それに気付かず、なのははそれを置いて出て行った。

「あ……。

あぁ……。」

ヴィレイサーは瞠目したまま、肩を震わせる。

今は鮮やかに彩られた彼女の愛機。

その色が、存在が――――

否応なしにヴィレイサーに思い出させる。

それでも、それでも私は好きだよ、ヴィレイサーの事――――

ヤダよ、ヴィレイサー――――

そんな悲しい事言わないでよ――

ヴィレイサー――

「ウワアアアアアアアアァァァァァァァァ！！！！」

錯乱状態に陥り、トレイを右手で弾き飛ばす。

「アアアアアアァァァァァァ！！！！」

守れなかった――

「俺は………。」

止められなかった――

「俺は……。」

助けられなかった――――

「俺はあああぁぁぁぁ！！！！」

答えを出せなかった――――

自責の念が、ヴィレイサーを襲った。

「俺は……。」

疲れたのか、ようやくそれが収束した時には、トレイがぶちまけられ、病室が荒れていた。

「俺はぁ……。」

泣き崩れ、ベッドから落ちる。

それと同時に、傍にあったバルディッシュも共に落下する。

「クッ……。」

それをキッと睨み、鷲掴みにする。

壁に放り投げ、叩きつけてでも壊そうと思った。

だが、鷲掴みにしただけで、ヴィレイサーは以降の動作を止める。

バルディッシュは何も言わず、ただ黙していた。

「何を……。」

双眸から流れる涙が、バルディッシュを濡らす。

「何をやっているんだ、俺は……。」

彼の嘆きの慟哭が、病室を悲しみに染めた。

ふと、鏡に映された自分の姿に目をやる。

そこには、左腕が肘から切断され、
さらには左足を失っている、無力の象徴が映しだされていた。

「なんだよ、この体……。」

ポツリと呟き、再び虚無感に包まれる。

「もう、戦えねぇよ……。」

乾きつつある頬に、また涙が流れた。

第１８話　「無力の慟哭」　了

第１８話　「無力の慟哭」（後書き）

鮮血
「うん、見事に荒れているね……。」

エクシーガ
「そりゃあ、力の差は歴然な上に、
ようやく答えを見つけた相手が、眼前で攫われたんだもの。」

鮮血
「狂いたくもなる……か。
まぁ、そんなヴィレイサーも次回では……ね。」

エクシーガ
「彼が激励してくれると言う訳ね。」

鮮血
「次回は、ちょっと早い気もしますが、
ヴィレイサーに復活して頂きます。
そして、彼の新しい力も。」

エクシーガ
「こじつけではありますが、見て頂けるとこれ幸いです。」

鮮血
「次回もお楽しみに。」

第１９話　「光への激励　新たなる力」（前書き）

鮮血
「久しぶりの本編です。」

ヴィレイサー
「まったくだな……。」

鮮血
「いやー、復活があっさり過ぎるので、
それをなんとかしようと、書いては消してを繰り返したのですが
……。」

ヴィレイサー
「「ですが」、なんだよ？」

鮮血
「無理でした！ｏｒｚ」

ヴィレイサー
「アホだろ、お前……。」

鮮血
「すみません……。
それでは第１９話をどうぞ。」

第１９話　「光への激励　新たなる力」

ヴィレイサーが己の無力に、自身を喪失していた頃。

「お久しぶりです、ナカジマ三佐。」

「えぇ、ゼスト隊長。」

陸士１０８部隊の隊舎では、ゲンヤとゼストが話し合っていた。

「娘さんの容態はどうですか？」

「ギンガはメンテナンスが滞りなく進んでいます。
スバルは、兄を心配している毎日でしょうね。」

「そうですか……。」

息をつき、話を切り替える。

「それで戦闘機人事件の方ですが、レジアスの許可も取っていますので。」

そう言って渡された事件の資料に、ゲンヤは素早く目を通していく。

「しかし、今これを明るみに出せば、レジアス中将は……。」

「構いません。
事件解決は早期に行われるべきだと、レジアスも言っておりましたから。」

「わかりました。」

それを承諾したゲンヤに頭を下げ、ゼストは立ち上がる。

「俺は、最後にやらなければならない事があるので、これで。」

踵を返したゼストを見送り、ゲンヤはパネルを操作した。

「マリエル技官に繋いでくれ。」

［少々お待ちください。］

マリエル技官に繋がる間、ゲンヤは椅子に背を預ける。

（上手くいくかはわからんが、やってみる価値はある。）

［ナカジマ三佐、マリエルです。］

「いきなり呼び出してすまねぇな。
急ぎ、確認してほしい事があるんだ。」

［何でしょうか？］

「実はな……。」

◆◇◆◇◆

「ヴィレくん、大丈夫かな？」

一方、なのはは病室の扉の前にいた。

先程、ヴィレイサーの慟哭が聞こえてからは、怖くて部屋に入る事が出来ずにいた。

「失礼。」

「ゼストさん！？」

「ヴィレイサーは？」

「中にいますけど、機嫌はあまり……。」

その先を聞かぬまま、ゼストは扉を開け、中に入る。

「ヴィレイサー。」

「ゼスト隊長……。」

茫然自失としていたヴィレイサーだが、ゼストに声をかけられ、そちらを仰ぎ見る。

「ヴィレイサー、お前は何をしている？」

「え？」

質問の意図が読めず、ヴィレイサーは首を傾げる。

「何故お前は、茫然自失としている？」

「俺はもう、無力ですから……。」

「だから戦えないと？」

「はい……。」

抑揚のない返事をした瞬間、ヴィレイサーの顔を、ゼストの拳が捉えた。

鈍い殴打の音に、外にいたなのは達は何事かと病室に入ってきた。

「ヴィレイサー。
お前は今、どうしている？
生きているだろ！」

ゼストの一喝に、ヴィレイサーはハッとした。

「まだ戦えるだろ！」

「はい……。」

「なら、戦って取り戻せ！」

「はい……。」

「生きている限り、戦え！」

「はい！」

ゼストの激励に、ヴィレイサーの全身が奮い立つ。

「必ず、勝利します。
そして、フェイトを取り戻します。」

決意を秘めた声に応えるように、瞳にはその決意の色が見てとれた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第１９話　「光への激励　新たなる力」

「そうか。
じゃあ、フェイトは……。」

「恐らく無事なはずや。」

車椅子に乗り、会議に現れたヴィレイサーを、はやては笑顔で迎えてくれた。

「七星については、デバイスに残された映像を頼りにするしか無いな。」

「その前に、皆に話しておきたい事があるんだ。」

デュアリスの発言に、全員が彼の方を見る。

「七星の中に、ゲイルという男がいる。
アイツは俺のオリジナルだ。」

「って事は、まさか……。」

「あぁ……。
奴はセイバーの称号を持つ、太古の騎士だ。」

「だとすると、七星のメンバー全員はセイバーが生きていた時代の者……。」

「そうなるわね。」

「そんなに前の時代の人が……。」

「世界を滅ぼす為に活動しているのか。」

沈痛な面持ちを見せるはやて達だったが、なのはふと、ある事が気になった。

「そういえば、ヴィレくんはこれから、どうやって戦うの？」

「せやな……。
そのままっちゅう訳にもいかんし……。」

左腕と左足を失った体。

利き腕では無いにしろ、この状態で戦うのには無理があった。

「ちゃんと考えてあるさ。」

はやて達に言い、ヴィレイサーは笑みを見せる。

◆◇◆◇◆

六課の隊舎を出、ヴィレイサーは陸士１０８部隊へと向かった。

「よう、来たか。
ヴィレイサー。」

「父さん。」

「ゼスト隊長に一喝されたみたいだな。」

「うん。
ところで父さん、マリエル技官は？」

「彼女には今、ある仕事を頼んでる。」

「そっか。」

日を改めて来ようと、踵を返したヴィレイサーだったが、ゲンヤに呼び止められる。

「その仕事、お前の協力が必須だ。」

「俺の協力？」

「あぁ。
どうせお前も、アレに目を付けたんだろ？」

笑みを見せる父に、ヴィレイサーは驚いた。

「まさか……。」

「お前の義手と義足。　それを作って貰っている。」

「けど、この方法はある意味犯罪だ。」

「“義手と義足を作り、それを患者に嵌める。”
それのどこが犯罪なんだ？」

「父さん……。」

◆◇◆◇◆

［ヴィレイサー、“新しい腕と足の調子はどう？”］

ガラスの向こうにいるマリエル技官からの問いに、
ヴィレイサーは手術台から下りながら答える。

「バッチリです。
ここまで違和感が無いとは驚きですよ。」

［ヴィレ兄、本当に良かったの？］

スバルの不安の入り交じった声に、そちらを見やる。

彼女の隣には、ギンガの姿もあった。

「これから先、四肢が動かなくなる事が多くなる。
それに、ただの義肢じゃあ、戦っていけないからな。」

そう言って、ヴィレイサーは新たな左腕で虚空を突き、左足で蹴りを繰り出す。

「文句無しですよ。
この……“戦闘機人の手足”は。」

「まさか上手くいくとは思わなかったがな。」

ゲンヤは未だに驚きの声をもらす。

「クイント、それにスバルとギンガのデータを残しておいた甲斐がありましたね。」

「でもまさか、義肢をベースとした戦闘機人の四肢を作るとは思いませんでしたよ。」

「ヴィレイサーみたいに、力仕事が多い人にはただの義肢だと満足しないだろうからね。
義肢をベースにしている訳で、強度と性能は戦闘機人のものにしてあるわ。」

「これからは“半戦闘機人”って事か。」

「じゃあ、術後経過も見るから、その日程も渡すわね。」

「そっちに取りに行きます。」

リハビリがてら、マリエル技官達のいる所まで歩く事にした。

◆◇◆◇◆

「結構時間かかったな。」

「ごめんなさい……。」

息が上がった状態で平謝りに謝るヴィレイサーに、ギンガは笑う。

「義肢を付けた人は皆、最初はそんな感じよ。」

「そうそう。
これ、日程表だから。」

「ありがとうございます。」

「……ねぇ、兄さん。」

「なんだ?」

日程表を受け取ると、ギンガが話しかけてきた。

「今回、兄さんは左足と左腕を義肢にして、半戦闘機人になった訳だけど、
私やスバルみたいに戦闘機人になったら、遺伝子崩壊も止められたりしないの?」

「残念だが、それは無理だろうな。
お前達2人は、元々戦闘機人の状態で生まれた。
だが俺は、人間兵器としてだ。

コンセプトが違うから、難しいだろうな。」

「でも、人間ベースの戦闘機人もいるよ？」

望みを失いたくないスバルの瞳には、うっすらと涙が滲んでいた。

「確かにそうだが……。
それは被験者をベースにしている。
つまり、寿命も被験者によって左右されるって事だ。
それに、その場合は戦闘機人になる為に育てられなきゃならない。
今からじゃあ、俺の体を戦闘機人タイプにするのは無理だよ。」

「じゃ、じゃあ、じゃあ……。」

他の方法を探ろうと、必死になるスバル。

既にわかっている事とは言え、やはり兄妹。

大好きな兄を失うのは嫌なのだ。

「ヒック……グスッ……。」

止め処もなく流れる涙と嗚咽。

「ありがとう、スバル……。」

慰める方法を見出だせず、ヴィレイサーはただ静かに彼女を抱き締める。

「ヴィレ兄……。」

「助かる方法はまだ見つからないが、それでも俺は、生きていくよ。」

「うん……うん！」

兄を揺らがす事が無いよう、スバルは笑顔を見せた。

◆◇◆◇◆

「義肢の調子はどう？」

「結構いいぜ。」

ヴィレイサーが半戦闘機人となってから1週間。

術後の経過も問題なく、順調に日々を過ごせていた。

「あとは、ヴィーナスシステムを完全解除して、それについて行けるかの確認だな。」

左手を開いたり閉じたりして確認する。

「なら、模擬戦がいいわね。」

「その役目、俺が引き受けよう。」

そう言ったのは、ヴィレイサーの上司、ゼストだった。

「ゼスト隊長……しかし……。」

そんな事をすれば、間違いなく彼の体は耐えられず、消えてしまうだろう。

ヴィレイサーにとって、それは耐え難いものだった。

「お前の言う事もわかる。
だが、遅かれ早かれ果てる身だ。
ならば、お前と交わした約束を果たす方が、俺にとっては喜ばしい事だ。」

「わかりました。」

ヴィレイサーも決意し、ゼストの申し入れを承諾する。

上司と部下として、1人の人間として、戦いたい――――

その想いが、ヴィレイサーの中で大きくなった。

第19話　「光への激励　新たなる力」　了

第１９話　「光への激励　新たなる力」（後書き）

鮮血
「ヴィレイサー復活！＆半戦闘機人化！」

ヴィレイサー
「やけにあっさりだな……。」

鮮血
「本っ当にごめんなさい！ｏｒｚ」

ヴィレイサー
「で、俺は義肢装備か……。」

鮮血
「ベースはあくまで戦闘機人の物だから、
普通のよりは勝手がいいはずだよ。」

ヴィレイサー
「骨格とか強度、後は反応速度とかだな。」

鮮血
「そうだね。
スバルやギンガのように、クイントの遺伝子を受け継ぐヴィレイサーなら、
今回のように戦闘機人タイプの義肢でも問題無いとは思いますが……。」

ヴィレイサー

「どう考えてもこじつけだろ、それ……。
母さんの遺伝子が無かったら、義肢も合わなかったかもな。」

鮮血
「いや、クイントさんの遺伝子がまだ保管されているのは確かだよ。
ノーヴェは純粋培養での生まれだからね。」

ヴィレイサー
「なるほどな。」

鮮血
「しかし、こじつけた所為で叩かれないか不安だ……。」

ヴィレイサー
「そう思うんだったら、俺の手足を奪うなよ……。」

鮮血
「すまん……。
さて、次回はゼスト隊長との一騎打ちです！
この為に彼を生存させたと言っても過言では無いですｗｗｗ」

ヴィレイサー
「まぁ、本編が更新されるか、
はたまた番外編かは分からないけどな。」

鮮血
「次回もお楽しみに。」

第２０話　「堕天使と騎士　最後の想い」（前書き）

鮮血
「ヤバい……。」

ヴィレイサー
「何が？」

鮮血
「課題やってない……。
しかも別の課題がどっさり……。」

ヴィレイサー
「自業自得だ。」

鮮血
「幸い、ストックはありますが、更新がどうなるか……。」

ヴィレイサー
「終わりが見えている物を優先的に書いているしな。」

鮮血
「です。
なので、次回は１週間後とかになるかもです。」

ヴィレイサー
「で、今回は？」

鮮血

「出だしは、七星の方を。
“光闇の書”の詳細もお話しします
そしてその後は、君とゼストの戦闘だよ。
上司と部下、１人の男と１人の騎士として……戦ってもらいます。」

ヴィレイサー
「それでは、２０話をどうぞ。」

第２０話　「堕天使と騎士　最後の想い」

「ゼウス、光闇の書を持ってきたよ～。」

結界を抜け、ゼウスが捕らわれていた扉の中。

そこから、一番奥にある部屋に到着し、ネブラはゼウスにそれを渡した。

「ようやく主の元へと戻ってきたか。」

それを受け取り、パラパラと捲っていく。

「フン。

俺が眠っている間に、何度か開かれたみたいだな。」

最後の方にある白紙のページに書かれている名前を見て、ゼウスは笑った。

「けど、全員殺したよ。」

「だろうと思ったぞ。」

ネブラの陽気な返答に、ゼウスは本を閉じて返す。

「コレは元々、俺がお前達との関係を繋ぎ止める為に作ったものだ。」

光闇の書――――

それは、七星が当時の王に仕えていた時の事。

権力者達は、彼らの力を信頼し、周囲の国を次々に制圧して行った。

しかし、人間は必ず衰えをみせる。

それを恐れた当時の権力者達が、七星の体を弄り、光闇の書に“収納”できるようにした。

そして、その光闇の書を扱う為の人物として白羽の矢が立ったのが、ゼウスだった。

当時、ゼウスは王の側近だった。

騎士としても優秀。

しかも七星の全員と交流があった為、彼らからの信頼も厚かった。

その為、“最初の使用者”として、ゼウスが光闇の書、七星と契約をした。

しかし、それは表向きの話。

本当は、“永遠の使用者”として契約したのだった。

光闇の書と七星、これらすべてに共通するコアを自分にも移植したのだ。

これにより、光闇の書と七星はゼウスを主と認め、他の者に強制的に従う事は無い。

そして、ゼウスは光闇の書の使用できる能力を書き変えた。

「あの女を傀儡にする前に、数人ほど新たな者を加えておくか。」

フェイトが眠るポッドに近付き、光闇の書を掲げる。

すると、光闇の書と同様に、フェイトも光り輝いていく。

「この女の戦闘データを、新たな奴のベースにするの？」

「そう言う事だ。」

やがてそれが終わり、発光も治まる。

そして、今度は光闇の書を床に抛る。

「いでよ、ヴォルケ、ステラ、フドゥル。」

それに応えるように、光闇の書からは3人の人影が出てきた。

「これで、あの女も含めたら12人か。」

ネブラはポッドに眠るフェイトを見やりながら言う。

「さしずめ、１２神と言ったところか。」

ゼウスは笑い、ヴィレイサー達との再戦を心待ちにしていた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第２０話　「堕天使と騎士　最後の想い」

［それじゃあ、２人とも、準備はいい？］

モニターに映されたなのはの質問に、ヴィレイサーとゼストは無言で頷く。

「ゼスト隊長……。」

「なんだ？」

対峙しているゼストに、ヴィレイサーは“あるナックル”を嵌めながら言う。

「いくら俺が半戦闘機人になったばかりとは言え、手加減はしないでください。」

それを聞いたゼストは笑った。

「フッ、もちろんだ。
お前こそ、俺に遠慮するなよ？
でないと、すぐに終わるぞ。」

「大丈夫です。
ゼスト隊長が応えてくれますから。」

「そうか。」

そこで会話は終わり、再び沈黙がおりる。

ゼストは得物を構え、ヴィレイサーをキッと見据える。

「さぁ、お前の力を……全力を引き出せ！」

「はい！」

声高らかに答え、エターナルに告げる。

「ヴィーナスシステム！」

［Ｖｅｎｕｓ　Ｓｙｓｔｅｍ，Ｇｅｔ　ｓｅｔ．］

「ドーン・ルチフェル！」

［ＤＡＷＮ・ＬＵＣＩＦＥＲ．］

コードネームを告げた瞬間、あの１２枚の翼が生える。

「行くぞ、ヴィレイサー！」

「はい！　ゼスト隊長！」

ゼストの確認に、ヴィレイサーが答えた刹那……。

「ウオオオオォォォォォォォォ！！！！！」

「ダアアアアアアアアアア！！！！！」

２人はぶつかり合った。

太刀と槍の刃先がぶつかり合い、火花を散らす。

「チッ。」

舌打ちし、ヴィレイサーはゼストから一気に距離を取る。

（さすがに押しあいじゃあ勝てる訳ないか。）

「勝てなければすぐに引くか。」

逃がさない気のゼストも、素早くヴィレイサーを追ってくる。

「勝てない戦法にいつまでも拘る気はありませんからね。」

翼をはためかせ、速度を上げる。

（追いつけそうもないな……。
ならば……。）

速度を上げ続けるヴィレイサーに追いつけないと判断したゼストは、軌跡を変え、ビルの影に身を潜める。

（身を隠したか……。）

ゼストがついてこない事を知り、ビルが立ち並ぶ空間を振り返る。

（無闇矢鱈に近付けば、不意打ちを喰らって一撃で落とされるな。
そうすると……。）

［Ａｒｒｏｗ　Ｍｏｄｅ．］

（魔力消費は大きいが、バスターライフルほどじゃない。）

魔力を一点に集中させ、どこを狙うか考える。

その隙を狙い、ゼストが背後から躍り出た。

「ハアアァァァ！！」

「クッ……。」

［Ｐｒｉｓｍ　Ｓｈｉｅｌｄ．］

盾を発生させ、振り下ろされた槍をいなし、即座にエターナルを鋏型に変える。

「アアァッ！」

ゼストはいなされながらも、体を捻り、再び斬りかかる。

「こなくそ！」

それを鋏で受け止め、鍔迫り合いとなる。

（隊長の胴はがら空き。）

蹴りを叩きこもうと、体勢を変えた瞬間、ヴィレイサーの腹に衝撃が走った。

「ガハッ！」

視線を腹に向けると、ゼストの拳が入っていた。

「ダァ！」

叩きこまれた拳に吹き飛ばされ、ヴィレイサーはビルに突っ込む。

しかし、ゼストは表情1つ変える事無く、土煙に身を投じる。
この程度で沈む相手では無い事を理解しているのだ。

「ウオアァァァ！！」

案の定、土煙に足を踏み入れ、ビルのフロアに足を着いたその時、
ヴィレイサーが身を躍らせた。

「雷煌滅閃斬！」

雷を纏った剣が、ゼストを捉える。

しかし、それよりも先に、ゼストの槍が足元に突きたてられ、床に
罅が入る。

音を立てて崩れる床と一緒に、ゼストの姿も飲み込まれる。

「なっ！？」

ゼストの姿を見失った為、ヴィレイサーの剣は虚空を薙いだ。

力強く振り下ろした為、ターゲットを見失った彼は体勢を崩した。

それを待っていたと言わんばかりに、ゼストが穴から槍を一閃させ
ながら迫る。

「クッ！」

一閃されたその槍を、翼をはためかせて上昇し、紙一重でかわす。

［Ｊａｖｅｌｉｎ　Ｍｏｄｅ．］

そして、天井にぶつかる寸前で転身させ、ジャベリンで天井を砕く。

「ムオッ！？」

追撃に迫ろうとしていたゼストに、瓦礫が迫る。

しかし、自分が入ってきた箇所から外に脱し、ヴィレイサーの潜む階層を見る。

（姿を隠したままか……。
まだ外に出ていないのならば……。）

再びビルに入り、ある一点を目指す。

◆◇◆◇◆

「フゥ……。」

［リーダー、逃げの一手では勝てませんよ？］

「悪い……。
まさか、まだこれ以上の差があるとは思ってなかったからな……

…。」

まさかゼストにここまで対等に戦う力が残されているとは思わなかった。

「ですが、ゼウスを少しは圧倒したバスターライフル。あれを使えば勝てるのでは？」

「魔力消費が大きいアレは無闇矢鱈に使える訳でもないし、狙いを定めても、フルドライブでかわされて、逆に落とされるだろうな。」

嘆息し、これからの一手を考えたその時――――

ズドォォォン！

「なんだ！？」

地響きにも似た音に続き、ビル全体が揺れ出した。

「まさか……！」

◆◇◆◇◆

「どうだ、ヴィレイサー？
これならば、外に出るしかあるまい。」

ゼストはそう言って、崩れつつあるビルから外に脱する。

背後には、粉々に砕かれたビルの支柱があった。

◆◇◆◇◆

「ビルの支柱を粉砕したな……。」

［どうするんです？］

「どうするもこうするも、今は脱するしかないだろ。」

立ち上がり、外をこっそり窺う。

（外に出た瞬間、フルドライブで叩き落とされるかもなぁ……。）

ゼストの考えを見透かし、ヴィレイサーは翼から微粒子の魔力を放出する。

（残像を作りながら行くしかないか。）

意を決し、外に出る。

しかし、何故かゼストは仕掛けてこなかった。

（どういう事だ？）

訳がわからず、ヴィレイサーは周囲を見回す。

あるのは未だに崩れているビルと、それによってあがる土煙。

そして、健在しているビルの数々。

しかし、その中にゼストの姿を捉える事は出来なかった。

だからこそ、ゼストがどこから迫っているのかがわかった。

（死角に決まってんだろ！）

背後を振り返らず、宙返りし、肉薄していたゼストの槍をかわす。

「ムッ！」

「そらぁ！」

そこで動きを止めず、ゼストの体躯を蹴る。

「グオッ！」

［Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ．］

そこですぐさまバスターライフルを構え、引き金を引く。

「フルドライブ！」

「なっ！？」

しかし、黒い光芒にゼストの体が飲み込まれると思った瞬間、彼の体が僅かに光り輝いた。

そして、迫る光芒をかわし、ヴィレイサーに槍を突き刺そうと、肉薄する。

「ＳＥＥＤ！　ギア２！」

［Ｔｗｉｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ．］

ＩＳのＳＥＥＤを発現させ、僅かながらも余裕を持たせる。

そして、ゼストの槍を片方のライフルで槍を受け止め、もう片方で照準を定めて撃つ。

「甘い！」

だが、それに既の所で気付き、飛び退く。

［Ｕｎｉｓｏｎ　Ｂｕｓｔｅｒ　Ｒｉｆｌｅ．］

そのゼストを追撃するように、合体させたバスターライフルの引き金を引く。

しかし、それをもゼストは体を躱し、また死角からヴィレイサーに仕掛ける。

「ダアアアアァァァァ！！！」

「クッ……。」

間一髪、シールドを展開するも、それは紙切れのように簡単に破られた。

「まだぁ！」

刃がヴィレイサーの体を斬り裂こうとしていたが、
それをナックルを嵌めた左手で受け止める。

「ＩＳ、レゾナンス！」

ナックルからカートリッジが飛び出し、備え付けられたナックルスピナーが回転しだす。

今は亡き母、クイントが遺してくれた、ヴィレイサー専用のナックル。

その名は、『リボルバーハデス』。

ヴィレイサーのＩＳ、『レゾナンスブレイカー』の威力を高める為のナックルだ。

当初は、エターナルへの負荷が増大だった為、その代用として考えられていたのだが、

ヴィレイサーがシューティングアーツを、少しだけだが修得したので、
ナックルとしても申し分ない物に仕上げられた。
カートリッジとナックルスピナーにより、その破壊力は折り紙つきだった。
しかも、エターナル以上の強度を持つ為、乱用しても問題ない。
「ハアアアアアアアアア！！！」
槍の刃を鷲掴みにし、共鳴させる。
徐々に罅が回る得物に、ゼストは苦々しくそれを見る。
やがて槍が完璧に砕け散った時、ゼストの拳がヴィレイサーの顔面に迫った。
「ウオオオォォォォォ！！」
その咆哮に、ヴィレイサーは怖気づきそうになるが、最後の力を振り絞り、
太刀に戻したエターナルを――――振るった。
武器が壊れても、騎士として戦った隊長。
それに応えるべく、ヴィレイサーも刃を振るったのだ。

◆◇◆◇◆

地に下りた2人は、しばらく対峙していたが、ゼストが膝をついた。

「ハァ、ハァ……。」

息は荒く、素人目にもどんな処置をしても助からないとわかった。

「ゼスト隊長……。」

「強くなったな、ヴィレイサー……。」

告げられた言葉は暖かく、しかし、弱々しかった。

「お前なら、やれる……。
必ず救い出し、戻ってこい……。」

「はい……。」

ゼストの優しい言葉に、ヴィレイサーは涙を抑えきれなかった。

「涙を流すな……。」

「しかし！」

「俺は1度、死した身だ。
再び土に還るだけだ……。
あの時も、既に涙を流しただろ？」

「それでも、悲しい事に変わりはありません……。」

嗚咽混じりの言葉に、ゼストは笑った。

「アギトは、シグナムが引き受け……。
ルーテシアは、お前の所の少年と少女が見てくれるそうだな。
アルピーノは……メガーヌは、お前が見てやれ。」

「はい。」

「良き戦いだったぞ、ヴィレイサー……。」

それを最後に、ゼストは逝った――――

「ありがとうございました、ゼスト隊長……。」

そんなゼストを、ヴィレイサーは敬礼しながら看取った――――

空は、何にも侵食されぬ蒼天だった――――

第２０話　「堕天使と騎士　最後の想い」　了

第２０話　「堕天使と騎士　最後の想い」（後書き）

鮮血
「ゼスト隊長、かっこいいなぁ！」

ヴィレイサー
「まったくだ。」

鮮血
「最終的には、原作と同様に死亡してしまいましたが、
ヴィレイサーを立ち直らせる為に、ここまで存命させました。」

ヴィレイサー
「隊長には、いつまで経っても敵わない気がする。」

鮮血
「確かに君、押されていたもんね。」

ヴィレイサー
「力量とかだけじゃなく、人への接し方とか色々含めても、な。」

鮮血
「そして、“光闇の書”についてはあの通りです。
ゼウスは、他者に七星を従わせない為に、
ずっと、光闇の書の契約者になった訳です。」

ヴィレイサー
「そんな優しさがあるってのに、世界を滅ぼそうとするとはな。」

鮮血
「信じているのは七星とヘラだけだからね。」

ヴィレイサー
「で、次回は？」

鮮血
「次回は君と同様に、遺された人へ挨拶に行った後、遂に七星……改め、１２神との戦いに入ります。メンバーは、以下の通りです。」

ヴィレイサー
エクシーガ
デュアリス
リュウビ
ヴァンガード
なのは
はやて
シグナム
ヴィータ

ザフィーラ

スバル

ティアナ

エリオ

キャロ

鮮血

「……と、なっております。」

ヴィレイサー

「次回もお楽しみに。」

第２１話　「最後の戦いへ」（前書き）

鮮血
「長い間、本編をほったらかしにしてしまってすみませんでした……。」

ヴィレイサー
「まったく……。」

鮮血
「スランプなうえに、他に書きたい事が出来たり、リアルがレポート漬の毎日だったりで……。
まったく執筆に着手できませんでした。」

ヴィレイサー
「これからは最終戦なんだから、あんまり長い事空けるなよ？」

鮮血
「それが……まだまだレポートとかがあるんだよね……。
だから、週１、或いは２週間に１回のペースになりそうです。」

ヴィレイサー
「お前、いい加減にしろよ……。」

鮮血
「その代わり！
ＳＥＥＤのメンデル宙域戦を書きます！」

ヴィレイサー

「いや、ダメだろ！？」

第２１話　「最後の戦いへ」

七星が提示した期日。

「あの日から、もう３０日か……。」

鏡に映し出された自分の姿を見ながら、ヴィレイサーは大きく息をついた。

（あの時とは違う。
己の無力さに慟哭していたあの時とは……。）

ヴィレイサーがいた部屋は、あの病室だった。

左腕と左足を失い、さらには自分の答えを待っている人を連れ去られた。

否応なしに痛感させられた無力。

それによって、自分はただの抜け殻になっていた。

虚無しかない自分が今、こうして立っているのは、数十日前に逝った隊長のお陰だ。

新たな手足として、戦闘機人の義肢を受け取り、再び戦う事を決意した。

「本当に、ゼスト隊長には感謝してもしきれないな。」

呟き、その病室を出て、別の場所に向かう。

自分と同じように、“遺された者”がいる所へ――――

◆◇◆◇◆

「久しぶり、姉さん。」

「ヴィレイサー……？」

「うん……。」

ヴィレイサーが向かったのは、スカリエッティのラボで見つかった姉――――メガーヌが入院している施設だった。

「良かった。
あなたと会えて……。」

メガーヌは、目に涙を浮かべていた。

「今まで連絡できなくてごめん。」

「いいのよ。
こうして会えたんだから……。」

「姉さん……。」

ベッドに腰掛けるメガーヌに近付き、そっとその頬に触れる。

「本当に、姉さんなんだよね。」

「えぇ。
そうよ、ヴィレイサー。」

あの時――――

母が遺体となって帰ってきた時、自分は全てが潰えたと思っていた。

母も姉も、隊長も、隊員達も――――

皆が皆、自分から奪われたと、そう思っていた。
しかし、姉は今もこうして生きている。
それだけで、ヴィレイサーは嬉しかった。

「来たばかりだけど、ごめん……。
どうしても行かなきゃいけない所があるから……。
俺の事を待ってくれている奴もいるから。」

「そう……。」

残念そうな瞳をしたメガーヌだったが、顔をあげる。

「行く前に、ちょっとベッドに座って。」

「ん？　うん……。」

姉の突然の願いに、ヴィレイサーは頷き、彼女の近くに座す。
すると、ヴィレイサーの背を、温もりが包んだ。

「姉さん？」

「ごめんね、ヴィレイサー……。
けど、あなたが遠くに行ってしまいそうな気がして……。」

メガーヌの心配に、ヴィレイサーは「大丈夫」だと返せなかった。
これから行く所は、それほど危険な所なのだ。

しかしそれでも、姉に不安を植え付けたまま出撃するのはできなかった。

それが悩みの種になり、自分を苦しめると思ったからだ。

「大丈夫だよ、姉さん……。
俺は必ず帰ってくるから。」

「ヴィレイサー……。」

「だから待ってて。」

「えぇ、わかったわ。」

ヴィレイサーをそっと離し、メガーヌは彼の背を見る。

「それじゃあ……。」

立ち上がり、扉の前でメガーヌの方を振り返る。

「行ってきます、姉さん……。」

「行ってらっしゃい、ヴィレイサー……。」

それ以上の会話を断ち切るように、扉は閉じられた。

「ここか……。」

ヴァンガードの案内で、初めてゆりかごが浮上してできた穴を覗くデュアリス。

「結界は……。」

その隣で、リュウビが結界を見る。

その瞬間、透明なガラスのような結界は粉々に砕けた。

それと同時に、ゆっくりとニクスが穴から姿を現した。

「ニクス……。」

ヴィレイサーは苦々しげに彼の姿を睨む。

「来たか……。
それにしても、大勢だね。」

ニクスは全員を順々に見回していく。

「そんな事はどうでもいい。
決着はどうやって着けるんだ？」

「最深部にある、『インソムニア』という所で行うよ。
先行するから、どうぞ。」

そう言って、ニクスは先に最深部へと足を運ぶ。

「俺が先行する。
以前にもきた事があるからな。」

ヴィレイサーがニクスの後に続き、エクシーガ、ヴァンガード、デュアリスと、続々と続いて行く。

そして、ようやく辿り着いた場所には、あの時とは違う扉があった。

「ゼウスが閉じ込められていた扉とは違うな？」

ヴィレイサーの質問に、ニクスは嗤った。

「あんなもの、残しておく必要はないからね。」

スタスタと扉の前まで歩き、開門する。

しかし、それ以上は足を踏み込まず、ヴィレイサー達を見る。

「コレは、ゼウスが作った『インソムニア』だ。
中には無限の世界が広がっている。
わざわざ外で戦って、君らが他の事に気をとられる事も無い。」

「ありがたい事だな。
だが、そこから出られる保証はあるまい？」

ヴィレイサーは射抜くような視線を向けるが、ニクスはまったく気にしない。

「なら、外で全てを壊しながら戦おうか？」

そう返されては、従うしかない。

自分達の大事な仲間、フェイトを助けるためとはいえ、民間人がJS事件の終結に安堵しつつある中、再び絶望に突き落とす訳にもいかない。

「わかった。」

「それでは、どうぞ中へ。
先に言っておくけど、『インソムニア』から出るには、我々に勝利する以外に方法はない。
いいね？」

「あぁ。」

ハッキリと答え、ヴィレイサーは七星に立ち向かう仲間達を見る。

「少しでも不安のある奴は残れ。」

だが、誰もその事を告げない。

皆、自分と同じようにフェイトを救うべく立ち上がってくれた者たちだ。

今更引き返すなどと言う事は、誰もしない。

「それじゃあ、行くぞ。」

ヴィレイサーを筆頭に、彼らは『インソムニア』へと足を踏み入れた。

「っ……。」

足を踏み入れた瞬間、眩しい光が降り注いだ。

あまりの眩しさに、一瞬目を閉じる。

そして、光が止んだと思い、目を開けると――――

「ここは……？」

――――扉に入る前には見えなかった通路にいた。

どこかの王宮なのか、その造りは荘厳だった。

周囲を窺うヴィレイサーだったが、ある事に気がついた。

自分の後ろにいたはずの仲間が、誰一人として、彼の傍にはいなかった。

「皆！」

急いで入り口に戻ろうと走ろうとしたが、ニクスの声が響いた。

［ご安心を。　全員無事だよ。］

「何？」

声のした方を見やるが、ニクスの姿を確認する事は出来なかった。

恐らく、全体に響くような設定が、この『インソムニア』に施されているのだろう。

［今、君達はバラバラになっている。
唯一、４人組が１つだけあるけどね。］

４人組と聞いて、ヴィレイサーは心当たりがあった。

（スバル達か……。）

今回の任務はかなり危険を伴う為、できればフォワード陣達は連れて来たくなかった。

しかし、彼女達の決意は固く、そして真っ直ぐだった。

だからこそ、連れていく事を許可した。

死なない事を絶対の約束として――――

［それと僕らは今、最早七星じゃない。

全員で１２人だ。」

「１２人……。」

ヴィレイサーは内心で舌打ちした。

まさか戦闘情報を知らない敵が、増えていたとは……。

［さしずめ、１２神と言ったところさ。
さぁ、自分の戦うべき相手の所に急ぐといい。］

そこでニクスからの言葉は途絶えた。

「進むしかないな。」

独りごち、ヴィレイサーは奥へと歩き出した。

◆◇◆◇◆

Ｓｉｄｅ：ヴァンガード

「扉……。」

今、ヴァンガードの目の前には新たな扉があった。

ニクスからの通信が終わり、通路を適当に歩いた。

そうして辿り着いたのがここだった。

その扉の前に立つと、独りでに開いた。

中に入ると、そこは綺麗な庭園だった。

中央には噴水があり、水路が様々な所にのびていた。

その周囲には、緑豊かな草木が生い茂っていた。

そして、ようやく自分が相手をする者姿が見えた。

中央の噴水の奥に繋がる階段の最上段。

そこには、バリアジャケットとは別の、真紅のコートに身を包んだネブラがいた。

「君か、ネブラ……。」

「ヴァンガード……。」

ネブラはゆっくりと階段を下りてくる。

「君に……。
いや、君達に聞きたい事がある。」

ネブラから視線を逸らさず、彼女をキッと見据える。

「何かしら?」

「どうして君達は人間を……。
ひいては世界を壊そうとするんだ?」

「あなたにだけ教えるのもつまらないし、全体通信で答えてあげる。」

階段を全て下りきったネブラは、コートを翻し、庭園を回りながら答える。

「私達七星は元々、他の者よりもズバ抜けた能力を持った者達を集めた部隊だった。
けど、その絶対的な力に目を付けた当時の王が、軍人として私達を採用した。」

「そして、君達は王の命令で各所を制圧し、勢力を拡大していった。」

「そう。
だけど、私達にも当然寿命がある。
それを恐れた馬鹿な権力者達が、『光闇の書』を作り出し、私達の体を弄って、それにしまえるようにした。」

「戦士の長期保存として、だな？」

「正解。」

「けど、それだけの事で世界を滅ぼす気にはなれないな。
例え光闇の書に保存できる肉体にされたとは言え、寿命がある事に変わりは無い。」

「そうね。
けど、力がある者が生きていくには、どうしても避けては通れない道がある。
貴方達の部隊にも1人や2人はいるでしょ？
強過ぎる力を持つ者が……。」

笑みを浮かべ、ネブラはヴァンガードに向き直る。

「私達は疎まれ、奇異の目で、異端者として見られ続けた。
力がある事が、間違いだとでも言うようにね！
そんな私達を救ってくれたのが、今の主、ゼウスと、ヘラよ。」

「ゼウス……。
そして、ヘラ……。」

「そう。
ゼウスは軍事転用された私達を助けるべく、永遠の契約者になった。
彼もまた、若くして上り詰めた階級を持つが故に、影では疎まれていた。
だから私達に同じ色を見出してくれたのよ。」

「じゃあ、ヘラは？」

「ヘラは、私達みたいな異端者を救済すべく、人間との架け橋になると奔走した。
だけど……。」

そこで言葉を切り、肩を震わせる。

「だけどヘラは殺された！」

「っ！？」

ヴァンガードは息を呑んだ。

「徐々に認められていったヘラの考えを、人間は壊したのよ！
だから私達は、世界の全てを殺す！　そう決意したのよ！」

「そんな……。
けど、人の答えが全て同じになる事は無い。」
「なら、ヘラの考えは間違っているとでも言うの！？」
「それは……。」
返答できなかった。
ヴァンガード自身、ヘラの考えには同調していた。
彼女の思想、行動。
その全てが、尊敬できるものだったから。
「人間が自分で滅びの道を選んだだけよ。
ヘラを殺せば、私達が黙っていないことぐらい、わかりきっているでしょ！」
「ネブラ……。」
「ヘラを殺した世界を……人間を！　私達を拒み、喰い殺す全てを！
私達が、殺す！」
その宣言とともに、ネブラの足元に魔法陣が浮かび上がる。

それは、ミッド式でもベルカ式でも無く、１２神が持つ独特のものだった。

真紅に染められたそれは、彼女の憎しみをそのまま映し出しているとも言えた。

「ヴァンガード！
私はあなたを殺して、世界を殺す！」

「俺も、君の考えには同調できる……。
だけど！　解り合える事ができる人諸共殺すなんて……。
そんなのは間違っている！」

二刀流のアークティックを構え、ヴァンガードは吠える。

「いいわ……。
だったら、試してみましょうよ。
終焉を望む私達と、存続を選ぶ貴方達……。
どちらが最後まで信念を貫くのか！」

「あぁ！」

「字はネブラ。　真名はアルテミス！
本気で行くわよ……。」

「ヴァンガード・レイス……。

ネブラ……いや、アルテミス！
君を止めてみせる！」

その言葉が叫ばれ、２人は激突した。

Ｓｉｄｅ：ヴァンガード　了

第２１話　「最後の戦いへ」　了

第２１話　「最後の戦いへ」（後書き）

鮮血
「ってな訳で、いよいよ最終決戦です！」

ヴィレイサー
「ラストは個々人での戦闘か……。」

鮮血
「そうだね。
複数人でも良かったんじゃないかなぁって、今滅茶苦茶後悔してる……ｏｒｚ
その方が、１話があまりに短くなるなんて事も、多分ないだろうし。」

ヴィレイサー
「どうだかな。」

鮮血
「ちくせう……。
皆様の文章力が羨まし過ぎる……。」

ヴィレイサー
「最初はヴァンガードと、ネブラ……いや、アルテミスか。」

鮮血
「それでは、次回もお楽しみに～。」

第２２話　「破壊と終焉への階」（前書き）

鮮血
「久しぶりの更新となって大変申し訳ありません。
ここ最近、少し精神的に病んでいる状態でして……。」

ヴァンガード
「って、そんな状態で書いて平気なのか？」

鮮血
「まぁ、書かなきゃ書き方を忘れちゃうからね。
以前よりも稚拙になってしまっているとは思いますが、そこはすみません……。」

ヴァンガード
「一生懸命書いたんだろ？」

鮮血
「まぁ、ね……うん……。」

ヴァンガード
「なんか、マジでヤバいな……。」

第２２話　「破壊と終焉への階」

Ｓｉｄｅ：アルテミス

私が自分の力に目覚めたのは、一体いつからだっただろうか？

正確な年齢はわからなかったが、小さい頃だと言うのはわかる。

親に怒られるのが怖くて、見えなくなりますようにと、神頼みした時だった。

「アルテミス？」

母が私を見つけだし、私は目を閉じた。

しかし、母の口から出た言葉に、私は耳を疑った。

「“ここにもいない”。」

そう言い残し、母は部屋を出て行った。

不思議に思い、自室にある鏡を覗いてみた。

すると、鏡には自分の姿だけが映らなかった。

「神様が、叶えてくれた……。」

私はその時初めて、神に感謝したと思う。

けど、今は亡き祖父が言っていた事を思い出す。

「アルテミス、力を自慢してはいけないよ？」

「どうして？」

「力を自慢しては、周りから人が離れてしまうからさ。
だから、無闇に力を明かしてはダメだ。いいね？」

「うん。」

祖父が大好きだった私は、言う通りにした。

友達の前でもその力を使わず、対等でいる事を望んだ。
しかし、家族には話すべきだと思い、両親にその事を明かした。

「凄いわ、アルテミス。」

「お前は我が家の救世主だ。」

両親は、私の事を、力を褒めてくれた。
両親に褒められた事が少なかった私は、もっと褒めて欲しかった。
たがらこそ、両親が望んだ事を次々とこなしていった。
それが犯罪だとも知らずに――――――。

◆◇◆◇◆

ある時は姿を消して物を盗み、またある時は人を殺した。
幼かった私は、罪悪感なんてものを持たず、ただ褒められたい一心で、平気で犯罪を行なってきた。

しかし、必ず綻びは出るものだ。

当たり前の所からも。

そして、予想外の所からも――――――。

◆◇◆◇◆

「アルテミスはいますか？」

街の自警団がやってきた。

両親はすんなりと通し、私に会わせた。

「なんでしょうか？」

私は何が悪いのかわからず、自警団に聞き返す。

「アルテミス。
君を窃盗、及び殺人の容疑として逮捕する。」

「え……？」

いきなり腕を引っ張られ、私は有無を言わさず連れていかれた。

「お母さん、お父さん！」

私は必死で叫んだ。

しかし、助けを求める私の手を、2人はとってくれなかった。

「どうして……？」

絶望だけが、私について回った。

自警団の取り調べは、想像以上だった。

毎日行われる拷問。

飲み食いはほとんど許されず、寝る時間もまったくと言っていいほど無かった。

しかも、自分の罪を認めなければ、容赦無く鞭が叩かれた。

耐えられなかった私は、力を使って逃げ出した。

親から、自警団から、そして、その空間から――――――。

いつ誰が自分に牙を剥き、私を殺すかわからないのだから。

彷徨するのは、思った以上に辛かった。

街に戻れば、自分は捕まる。

姿を消して食べ物を盗んでも、すぐに私だとバレる。

ならば、他の街に行くしか道は残されてはいない。

しかし、他の街に行った事の無い私は、どうすればいいかわからなかった。

それでも、歩いて行くと決めたのだ。

今更変える事はできない。

「行こう……。」

だが、歩きだした私を待っていたのは、新たな地獄だった。

中々次の街に着かず、森林の中を彷徨っていた。

お腹が空けば、身近にあるキノコや雑草を食し、腹を壊す。

その苦痛と戦い、虫とも戦う。

雨が降れば、それで渇きを潤した。

それでも、次の街には到着しなかった。

やがて、心が疲れ果てた私は、その森林地帯に座り込んだ。

そんな憔悴しきり、姿を消す事を忘れた私は、更に追い討ちをかけるように、追っ手に見つかった。

しかし、その追っ手は殺された。

既の所で助けに入ったニクスによって。

「君も一緒に来るかい？」

差し出されたその手は、私の不安を拭い去るには充分だった。

ニクスに手を引かれ、辿り着いた場所は、王都ユナイティアだった。

そこで私は、ニクスに世話をされて育った。

力の制御も、限界も知り、使いこなした。

やがて、王様に謁見した私達は、七星という軍隊に所属した。

七星で出会った新たな仲間と共に、侵略を行い続けた。

幸せだった。

仲間がいて、誰かの力になれて――――――。

◆◇◆◇◆

しかしある時、手術が行われた。

それが終わった時、私達は光闇の書の使い手に従う、狗とされたのだ。

私はすぐさま権力者を殺そうと熱り立った。

しかし、それには及ばなかった。

ニクスが最も信頼をよせるゼウスが、永遠の契約者となったからだ。

他の七星の面々も、異論を唱える者はいなかった。

以降は、私達は権力者に従うふりをして、ゼウスの命令のみを聞いていた。

そして、戦い続ける私達の癒しは、ヘラとの会話だった。

ヘラは生まれつき体が弱く、中々外には出なかった。

だが私達が、というよりはゼウスが帰ってきた時は、必ず出迎えて

くれた。

ヘラは誰にでも優しく、正に女神とも言えた。

そして、優しいが故に、彼女は周りから避けられていたのかもしれない。

異端者の私達と関わる彼女やゼウスは、周囲から白い目で見られていた。

それでも2人は気にせず、私達と一緒にいてくれた。

◆◇◆◇◆

そんなある日、ヘラは外で演説を行なっていた。

異端者などいない。

我々は皆、同じ存在なのだと。

彼女のお陰で、理解してくれる人達は少しずつだが増えていった。

ようやく世界が微笑んでくれた。

そう信じた矢先、ヘラは帰らぬ人となった……。

ヘラは、反対派の人間達に殺されたのだ。

ゼウスが彼女を見つけた時、既に彼女は冷たくなっていた。

紅い雫だけが、彼女の腹から流れでていた。

「ヘラ、君を殺した世界を、人間を！
俺達が殺し尽くしてあげるよ……。」

笑っていた。

ゼウスは、涙を流しながら笑っていた。

しかし、それを実行に移す前に、ゼウスは反逆罪で“永遠の棺”に閉じ込められ、私達七星は光闇の書に封じられ、永い刻を眠り続けた。

だが、それでも世界への憎しみは薄れなかった。

むしろ増したと言っても過言では無い。

だから誓った。

ゼウスを再び目覚めさせ、全員でこの世界を殺すと――――――。

そして私達は、その刻を迎えようとしている。

目の前に立ちはだかる敵を排除すれば、もうすぐ――――。

Ｓｉｄｅ：アルテミス　了

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第２２話　「破壊と終焉への階」

互いに得物を構えたまま動かない。

いや、正確には“動けない”のかもしれない。

（アルテミス……。
さすがにそう簡単には隙を見せないか……。）

アルテミスから視線を外さず、ヴァンガードは緊張していた。

ゴクリと唾を飲む。

それと同時に、緊張の汗が頬を伝う。

それを拭おうと、片手を動かした刹那――――

「ハアアアァァァァ！！！」

――――今まで以上の咆哮を上げ、アルテミスが攻防一対の盾に仕込んだ魔力刃を発生させて迫る。

「クッ！」

迫り来る真紅のコートが、アルテミスの妖艶さを、毒々しさを――――

最早、全てを表していた。

咄嗟に剣を交差させ、振り下ろされた刃を受けきる。

しかし、それで攻撃を終わらせるはずも無く、アルテミスの蹴りが牙を剥く。

「クッ！」

迫る足蹴をかわせず、ヴァンガードは吹っ飛ばされる。

しかし、途中で体勢を立て直し、吹っ飛ばされていた間に射出されたスモーク弾を切り裂く。

煙が視界の全てを覆う前に、高度を上げ、アルテミスを捉える。

彼女も、その双眸にヴァンガードを見据える。

しかし、ヴァンガードのように空戦に持ち込む気は無いのか、彼女はその場から動こうとしない。

「マガノイクタチ。」

呟き、彼女の背部にあるマガノイクタチが前面に大きく歪曲した鉤爪を展開する。

そして、その中央には自分の攻防一対の盾を構える。
その途端、２つの鉤爪と、盾の尖端に魔力が集中しだした。

「マズイ……。」

その魔力の多さに、ヴァンガードは戦慄する。

「このまま放置する訳に行くか！」

双剣を一閃させ、数個の魔力弾を瞬時に生成する。

「アイスバレット！」

それらを、一斉にアルテミス目掛けて放つ。

しかし、バラバラの箇所に当てたのでは、収束している魔力の奔流に掻き消されるだけだ。

（だから、全ての弾丸を一点に……。）

精神を集中させ、僅かな逸れも許さない。

「いっけえぇ！」

ヴァンガードの咆哮と共に、魔力弾はアルテミスに着弾した。

「やったか？」

未だに煙る箇所を上空から見下ろすも、そう簡単には判断出来ない。

そして、ゆっくりと煙が晴れた。

「なっ！？」

しかし、そこにいたアルテミスは、全くと言って良いほど無傷のままだった。

「そんな……。」

しかも、アルテミス側の魔力収束は完成していた。

３点の尖端に、今すぐにでも溢れだしそうな魔力が、球状になっていた。

「あの程度で止められると思って？」

クスクスと子供染みた笑みを見せるアルテミス。

ヴァンガードに狙いを定め、盾から発生した紅い弓弦を引く。

「チッ。」

舌打ちし、回避行動に移ろうとしたヴァンガードだったが、それは叶わなかった。

「逃がさない。」

アルテミスがそう宣言した刹那、ヴァンガードは左右からワイヤーで捕縛された。

「なっ！？」

いつの間にやら、左右に霧と魔力で結合されたバルーンが配されていたのだ。

そこから射出されたワイヤーに両手両足を捕らえられ、身動きが取れない状態に陥った。

「消えて。
デッド・トライアングル！」

そして、死の三角形が放たれた――――――

その頃、ザフィーラは自分が相見える敵がいるであろう扉の前にい

た。

「ここか……。」

呟き、早目に決着を着ける事を決意する。

主であるはやてからの魔力供給により、今でこそ人型でいられるが、その負担は決して軽くは無い。

死ぬ気は到底無いが、主への負担を軽減すべく、ザフィーラは戦いを急いでいた。

拳を握るザフィーラを迎えるように、扉は独りでに開いた。

ゆっくりとそこへ足を踏み入れる。

眩い閃光が収まり、次第に目が慣れてきた。

「海の近くか……。」

ザフィーラの言う通り、彼は今、海岸沿いにいた。

辺りを見回すが、そこには人っ子1人いない。

生き物も一切見つける事が出来なかった。

あるのは、左手に広がる大海原と、足元に砂浜。
そして、右手側には草原だけだった。

「ほう。　俺の相手は貴様か。」

すると、上空から聞いた事のある声が聞こえてきた。
そちらに目をやると、紺碧のラフな服に身を包んだミラージュの姿があった。

「ミラージュ……。」

かつて自分は、グラディエーターモードの彼に敗れている。
勝算は低いかに見えた。
しかし、この段階で怖じ気づいては、その勝算は０に等しい。
例え絶望的でも、望みを自分で手放す訳にはいかない。

「ふん。
いくら貴様でも、さすがに同じ轍は踏むまい。」

地に降り立ち、ミラージュは笑う。

「ミラージュ、貴様も疎まれてきた身か？」

ザフィーラの問いにしかし、彼は首を振った。

「俺は疎まれたと言うより、蔑まれてきたな。」

両手をバッと広げ、自嘲するような笑みを見せる。

「俺が生まれた家は代々、騎士を輩出する家系だった。
だが俺は、輩出するに値する騎士にはなれなかった。」

草原に背を向け、大海原へと足を運ぶ。

「だから俺は、蔑まれ、罵られ……そして捨てられた。」

ザフィーラの方を向いた瞳は、憎しみに染まり、不気味さを増していた。

「そんな俺を拾ったのはゼウスだった。

奴は俺に才能を見出だしてくれた。」

「それが、グラディエーターモード……。」

「そうだ！
その才能を見つけ、開花させてくれたゼウスに、俺は全てを委ねた。」

狂喜に染まった笑みを浮かべ、ミラージュは高笑いする。

「そして俺は、俺を捨てた村を滅ぼした。」

「なんだと！？」

「ククク……。」

頭を手で抑え、笑みを零す。

「逃げる人間どもを、村に巣食う鳥獣どもを！　全てを屠ったぁ！
この快感が、俺の全てだぁ！」

「貴様……。
罪悪感も無いと言うのか！」

「何を当たり前の事を聞いている？
下らん……。」

ミラージュの愚問だと言う返答に、ザフィーラは戦慄する。

「俺を手放さなければ、誇れただろうに……。
グラディエーターの力を！
自ら捨てたのだ！　その報いを受けただけだ！」

「報い……。」

「そうだ！
そして、殲滅した俺に新たに芽生えた快感。
それがゼウスに従う最大の理由だ！
俺は殺す……全てを！
殺す事が、俺の最善の道だ！」

「させん……。
そんな事は、俺が決してさせん！」

「面白い……。」

ザフィーラの宣言を聞き、ミラージュは空間から群青色のトライデントを取り出す。

「ならばやってみせるがいい。」

頭上で回転させ、ブンと空を切って下段にトライデントを構え、ザフィーラに向ける。

「当然だ。」

ザフィーラは拳を構え、迎え撃つ。

「貴様を屠る前に、今1度名を聞いておこう。」

「盾の守護獣、ザフィーラ。」

「ザフィーラ、か……。
我は、字はミラージュ。
真名は、ポセイドン！」

トライデントを一閃し、高らかに宣言する。

「さぁ、俺に殺させろ……。
貴様を……世界を……。」

ミラージュ、否、ポセイドンはザフィーラに突っ込む。

「……そして……全てをおおおおぉぉぉぉぉぉ！！！！」

第２２話　「破壊と終焉への階」（後書き）

鮮血
「って、ヴァンガードが死にそうに!?
いつの間にこうなった!?」

ザフィーラ
「いや、貴公が書いていたのだろう?」

鮮血
「そんな気もするような、しないような……。」

ザフィーラ
「本格的にきつそうだな……。」

鮮血
「それでも、感想は欲しいかな。
気を遣ってもらうのはありがたいけど、それで書かれないとそれはそれで、気遣わせたって感じがして……。」

ザフィーラ
「どうしろと言うのだ……。」

鮮血
「もう、知らん……。」

ザフィーラ
「いや、解説を……。」

鮮血
「そうだった。　ここは、エクシリアのＰＶを見ながら書こう！」

◆スキル、【テイルズ好きー】が発動。

◆テンションがＰＶが終わるまで上がった

ザフィーラ
「それでいいのか……。」

鮮血
「いいんだよ。
さて、今回はアルテミスとポセイドンについての過去をちょろっと出しました。
まぁ、取ってつけたような設定なので、大して考えていませんが。」

ザフィーラ
「いや、アルテミスの方についてはちゃんと考えていたのだろう？」

鮮血
「まぁ、僕としては、ね。
他者から見たら、そこまで大したものじゃないし。」

ザフィーラ
（ＰＶを見ながらでも卑屈は直らんか……。）

鮮血
「ゼウスの手術と、ヘラが殺された事も明かしたね。
詰め込み過ぎた感が否めない……。」

ザフィーラ
「そして、ポセイドンも……。」

鮮血
「そうだね。
昔……と言うか、どんな時代も【力】を優先するのは当たり前だからね。
開花しない者は切り捨てられるのが当たり前だったりするよ。」

ザフィーラ
「しかし、強過ぎればキャロのようにもなる。」

鮮血
「そこがまた難しいんだよね……。」

ザフィーラ
「して、次回は？」

鮮血
「アルテミスとヴァンガードの戦闘に決着をつけたいと思います。
今の精神状態では、また1ヵ月近く空いてしまうかもしれませんが、どうか読んで頂けると嬉しいです。」

ザフィーラ
「次回もお楽しみに。」

―次回予告―

目の前で毒々しさを放つ、アルテミスの魔力の奔流――――デッド・トライアングル

放たれた砲火に、ヴァンガードは……。

「君達が世界を殺そうとする理由、それは納得する奴もいる。
だけど！　分かり合う人まで巻き込むなんてのは間違いだ！」

「所詮は、私達を分かるなんて事、無理なのよ……。」

ぶつかり合うは、ただ純粋な信念のみ……。

根底は違えど、揺るぎなき純粋さは同じ。

第２３話「信念」

ただ、君を理解したい……。

その難しさを知れ。

第２３話　「信念」（前書き）

鮮血
「なんとか更新できた……。」

ヴァンガード
「お疲れさん。
まぁ、そろそろサークルでの企画作品と旅行の準備とかしないといけないんだろ？」

鮮血
「そうなんだよね……。
可能だったら、今月末近くにまた更新出来たらいい方だと思う。」

ヴァンガード
「他にも連載作品、あるけどな。」

鮮血
「そうなんだよねぇ……。」

ヴァンガード
「ところで、ヴィレイサーはいつ頃出てくるんだ？
下手すると、アイツに惚れてる方々の怒りがヤバいんじゃないか？」

鮮血
「多分、後１０話ぐらい先まで出てこないと思う……。」

ヴァンガード

「おいおい……。」

鮮血
「大丈夫。
その間、アイツにはノクターンで頑張ってもらうから！」

ヴァンガード
「つーか、その所為でフェイトも影薄いよな……。」

鮮血
「誰かー！　ヴィレ×フェイのノクターンのネタを！」

ヴァンガード
「で、引き受けてるヴィレイサー×コラボのノクターンはあとどれくらいなんだ？」

鮮血
「……5つ？」

ヴァンガード
「……。」

鮮血
「……。」

ヴァンガード
「本編に行くか。」

鮮血
「そうだね。」

第２３話　「信念」

目の前で毒々しさを放つ魔力の奔流。

そして、その奔流の行き先にある３つの魔力球。

それを今にも解き放とうと、目一杯に弓弦を引くアルテミス。

「消えて。」

冷酷な声と瞳がヴァンガードを戦慄させる。

「デッド・トライアングル！」

そして、死を運ぶ三角形が放たれた――――――！

「させるかぁっ！」

［Ｌｏａｄ　Ｃａｒｔｒｉｄｇｅ．］

「氷花停流！」

強度のあるシールドを展開し、その表面に、更に氷花停流を加える。

アルテミスの放ったデッド・トライアングルは、ヴァンガードのシールドに大きな衝撃と共にぶつかる。

「ク、オオオォォォォォォォ！！！」

だが、それに負けぬよう気力を奮う。

氷花停流の効力が発揮され、徐々にデッド・トライアングルが凍っていく。

（行ける！）

そう確信したヴァンガードだったが、予想外の事が起きる。

（砲撃を凍らせる気ね……。

そうはさせない……。）

アルテミスだ。

彼女は再び弓弦を引く。

「“第2射”。」

「なっ！？」

こんなにも強大な砲撃を、すぐに2射目を撃つ。

アルテミスはそう言ったのだった。

「デッド・トライアングル……。」

そして、もう1射が放たれた。

「こなくそ！」

これ以上シールドが保てられるはずもなく、当然、ヴァンガードは危険に晒される。

「なら！　インソムニア・スノウ！」

［Ｉｎｓｏｍｎｉａ　Ｓｎｏｗ．］

アークティックが強く発光し、白い微粒子がヴァンガードを捕らえていたバルーンに付着する。

「凍れ！」

ヴァンガードの叫びに応じ、白い微粒子は一気にバルーンの全身を凍らせた。

ワイヤーも切断し、アルテミスの砲撃をかわす事に成功した。

第２３話　「信念」

「ハァ、ハァ……。」

なんとか砲撃をかわしたヴァンガードは、地上に降り立ち、肩で息をする。

（くそ……。
全ての12神を同時に相手にするにしても、個々に撃破するにしても、どっちにしろ、一筋縄で敵う相手じゃないな……。）

自分を見下しているアルテミスに視線を向け、ヴァンガードは内心、舌打ちする。

「まさか、バルーンから脱するとはね。
そういえば以前にも、そんな事があったわね。」

ドゥーエを助け出した時の事だと、ヴァンガードはすぐに理解した。

あの時も、今と同じように『インソムニア・スノウ』を使い、脱した。

これは、自分の魔力を雪のように舞わせ、相手に付着させた後、その身体を凍らせるというものだ。

それは、実体である人間だろうと、幻影で模られた物だろうと関係無い。

「アークティック、全開で行くぞ。」

［Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ．］

二刀流のアークティックを、フェイトのライオットザンバーと同様に重ね、巨大な大剣へと変貌させる。

「大剣の形で、私を捕らえられる？」

「俺の大剣は、他のよりも違う構造になっているから平気だ。」

ヴァンガードの大剣は、瞬時に重みを変更する事ができるのだ。

移動する時は軽く。

逆に攻撃する時は重くなる。

「そう……。」

ヴァンガードの答えに、アルテミスは面白がっている。

「なら、行くわよ！」

突撃してくるアルテミス。

彼女は魔力刃を出し、未だに膝をついているヴァンガードにそれを振り下ろす。

だが、それよりも早く、ヴァンガードは跳躍してそれをかわす。

アルテミスの背後に回り込み、すぐさま大剣で叩き斬ろうとする。

しかし、後ろに目があるみたいに、マガノイクタチが動き出し、ヴァンガードの大剣を受け止める。

「残念。」

「まだだ！」

彼女のマガノイクタチに掴まれた大剣を引き離そうとせず、ヴァン

ガードは魔力を大剣に注ぐ。

「このまま凍らせる！」

「チィッ！」

ヴァンガードの戦法に、アルテミスはさせまいと離れようとするが

――――

「逃がさない！」

――――それよりも早く、ヴァンガードの氷がマガノイクタチを凍らせた。

「このぉ！」

アルテミスはバルーンを生成し、それでヴァンガードを攻撃する。

それを見たヴァンガードは、さすがに無理だと判断し、その場を離れる。

しかし、アルテミスのマガノイクタチは封じた。

これで、アレに魔力を吸い取られる事も、先程の砲撃を撃つのも無

理だろう。

「よくも！」

バルーンと共に、ヴァンガードに迫るアルテミスだったが、突如として、その動きが止まる。

「なっ！？」

「インソムニア・スノウだよ。
気が付かなかったかい？」

彼女とバルーンは、ヴァンガードによって足を凍らされていた。

「悪いけど、これで終わりだ……。」

大剣の切っ先に魔力を集中させる。

「君達が世界を殺そうとする理由、それは納得する奴もいる。
だけど！　分かり合う人まで巻き込むなんてのは間違いだ！」

「所詮、私達を分かるなんて事、無理なのよ……。」

「どうしてそうやって、自分だけの中に閉じ籠る！？
その選択をし続ける限り、君は……君達は独りだ！　同調できるはずだ！　そうやって、殻に閉じこもらなきゃ！」

「分かったような口を聞くな！」

「あぁ、分からないさ……。
分からないから言ってんだよ！」

ヴァンガードは、そこで会話を止める。

「これで終わりだ……。　フリジッド・ブラスト！」

大剣から放たれた水色の砲が、アルテミスとバルーンを呑みこんだ。
中央にあった噴水は粉々に砕かれ、水飛沫があがる。
それが虹をかけるが、ヴァンガードにはそれが悲しくみえた。

「こんな事をしなくても、俺達は分かり合えたのに……。」

苦々しく呟き、アルテミスの姿を探す。

「アルテミス……。

少なくとも俺は、君達を理解したかった……。」

悲しく目を伏せたその時――――

ザシュ！

――――ヴァンガードの腹部が斬られ、血潮が飛んだ。

「ここね……。」

ティアナが呟いた前には、扉があった。

「行くわよ？」

後ろを振り返り、スバル、エリオ、キャロに確認する。

「うん！」

「「はい！」」

３人とも、決意を秘めた瞳でティアナを見詰め返し、頷く。

その決意を汲み取ったのか、扉が開いた。

中に入ると、そこは今までの荘厳な造りとは違い、純白の壁で覆われていた。

正方形のその部屋に、４人は周囲を警戒しながら入っていく。

「っ！」

逸早くティアナが敵を見つける。
彼女がクロスミラージュを構えた先には――――

「女の子……？」

――――エリオやキャロと、さほど変わらない歳の少女がいた。

「……。」

その少女は黙って座ったままだったが、やがて動き出す。
立ち上がり、４人をゆっくりと見回す。
その目が、エリオを見て止まる。
そう思った瞬間、彼女の姿が消えた。

「うわっ！？」

否、物凄い速さでエリオに突撃したのだ。
それを紙一重の所でかわし、ストラーダで彼女の背後から斬りかかる。

しかし、それを予め読んでいたかのように、彼女は天井に急上昇する。

「速い！？」

「あの速さ……。」

「フェイトさんと同じぐらいですよ！？」

スバルは少女の速さに驚き、エリオとキャロは、彼女の速さがフェイトのものだと理解する。

「とにかく、ここで翻弄されたら勝ち目は無いわ！
散開して隙を窺うわ！」

ティアナの指示に従い、４人はバラバラの位置に散らばる。

それでも、フルバックのキャロの近くには、スバルがいる陣形を取る。

さすがにエリオをキャロの傍においては、あのスピードに慣れた者がおらず、こちらが苦戦を強いられる。

バラバラになったティアナ達を見、少女は1度地に下りる。

そして、自身の身の丈以上もある長銃を構える。

「エリオ！」

「はい！」

それを撃たせまいと、ティアナは魔力弾を放ち、エリオはスピードを活かして、接近戦に持ち込もうとする。

しかし――――

「遅い……。」

――――少女はポツリと呟き、再び天井へと急上昇する。

目標を失ったティアナの弾丸は、壁にぶつかる。

しかし、なんとかエリオは彼女に喰らいつこうとする。

長銃を持ったままでは、エリオに追いつかれる。

誰もがそう思っていたが、少女のスピードはエリオのそれを遥かに上回った。

「そんな！？」

エリオが驚き、背後を取られる。

振り向いても間に合わない判断した彼は、急降下する。

しかし、そんなエリオの目の前に、少女が先回りした。

「っ！？」

「1人目……。」

長銃をエリオに向け、少女は引き金を引いた。

ドォォォォン！

爆発が起こり、周囲が煙で満たされる。

「エリ……モガッ！？」

エリオの救援に向かおうとしたスバルだったが、それをティアナが制する。

「静かに……。
大きな声を出したら、私達の居場所までバレる……。」

「で、でも、エリオは！？」

声をなるべく低くして会話するティアナ達は、エリオと少女が戦っていた箇所に目を向ける。

「多分、寸前でソニックムーブを使って回避したと思う。
一瞬だけだけど、エリオの魔力光が確認できた。」

「そっか……。」

安堵の息を漏らすスバルだったが、物音が聞こえ、そちらに目をやる。

「ッ！　ティア！」

スバルは小さな物音を聞き取り、いきなりティアナを突き飛ばす。
その直後、ティアナが先程までいた箇所に、魔力弾が走る。

「っ！　この煙っている状態で！？」

ティアナ達は、未だに少女を捉えきれていない。

だというのに、少女の方が早くに撃ってきた。

「スバル！
キャロの傍にいてあげて！」

「うん！」

ティアナの指示に従い、スバルはキャロの傍へと駆けだした。

「キャロ、大丈夫？」

スバルが彼女の所に辿り着くと、キャロは身を低くしていた。

「はい。」

声を潜め、敵に狙われないようにする。

やがて煙が晴れ、全員の位置が把握できた。

スバルとキャロの先には、ティアナ、敵の少女、エリオの順で、ほぼ1列に並んでいた。

エリオのバリアジャケットは、多少ボロボロの箇所が見受けられたものの、本人にはさしたる被害も無く、以降の戦闘も問題無いと言えた。

「あなた、七星のメンバーにはいなかったわね。」

ティアナはクロスミラージュを下ろしたまま、少女に訊ねる。

「無理矢理戦わされているの？」

スバルも、相手を刺激しないように優しさを含んだ声でたずねる。

「違う……。」

しかし、彼女はそれを否定した。

「私は、フェイトって人の戦闘データを基盤に造られたの。」

「フェイトさんの戦闘データ！？」

「そう……。
私の名前はステラ。　真名は、アテナ。」
「アテナ……。」
アテナの目の前にいたティアナが、彼女の名を反芻する。
「もう、会話は終わり……。」
呟き、アテナは跳躍する。
そして、長銃を直下に向ける。
「まさか……！？」
ティアナは、アテナの長銃に収束されていく魔力量から、どんな攻撃が来るかを瞬時に判断し、スバルの方へと走る。
「ビッグバン・カノン……。」
引き金が引かれた瞬間、鋭い光芒が直下へと駆ける。
それが着弾したと思った時、そこを起点に巨大な爆発が起こった。

「ウッ……。
アル……テミス……？」

そして、ヴァンガードの方では、アルテミスが彼の腹部を刺した所だった。

「残念でした。」

刃を引き抜き、ケラケラと笑うアルテミスに、ヴァンガードは急いで距離を取る。

「あの砲撃は確かに危なかったよ……。
だけど、今一歩、私を倒すには至らなかった。」

ヴァンガードを追わず、アルテミスはただ淡々と述べる。

「次こそ、貴方の最期よ。」

バッと右腕を上空へと掲げる。

「噴水からの水分、勿体無いからね。」

アルテミスはＩＳを使い、自身の分身となるバルーンを生成する。

「２５体が限界ね。」

そう言って、アルテミスはバルーンでヴァンガードの周囲を囲む。

「これで、終わらせるって事か……。」

囲まれたヴァンガードは、バルーン達を見据える。

「えぇ。
貴方の死で、ね……。」

「それはどうかな？」

「ふん……。
負け惜しみを。」

ヴァンガードの自信に満ちた瞳に、アルテミスは不審に思うが、手を振り下ろす。

「やれえええええええぇぇぇぇ！！！」

その言葉に従うように、バルーンが一斉にヴァンガードに迫った。

それを目にしたアルテミスは、確信した。

「勝った。」

しかし――――

「ニブルヘイム……。」

――――そんな言葉が聞こえてきた。

そう思った瞬間、ヴァンガードに迫っていたバルーンが、全て凍りついた。

「え……？」

アルテミスはその光景に、ただ茫然としていた。

そして、凍ったバルーンは一瞬にして砕け散った。

その氷から姿を現したのは、大剣を一閃させた状態のヴァンガードだった。

「ど、どういう事！？」

「どうもこうも、君のバルーンと同じ原理さ。」

大剣の切っ先をアルテミスに向け、ヴァンガードは不敵な笑みを浮かべる。

「俺は、一定の空間内にある空気中の水分を、全て凍らせる事が出来るんだよ。」

そう言ったヴァンガードの足元からは、霧が立ち込めていた。

ヴァンガードがゆっくりと一歩を踏み出すと、その箇所が一瞬にして凍りついた。

「魔力消費が多過ぎるから、濫用は無理だけど。」

「クッ！
怯むな、行け！」

負けじとバルーンを迫らせるアルテミスだったが、ヴァンガードは意に介さない。

「凍てつけ……。」

冷酷な声で呟いた瞬間、バルーンは一瞬で凍りついた。

そして、そのバルーンに手を掲げる。

ゆっくりと、手を閉じていく。

それと連動して、バルーンを凍らせた氷に亀裂が走る。

「砕け散れ！」

ヴァンガードが手を握りこぶしにした時、氷は粉々に砕け散った。

「そ、そんな……。」

空気中の水分、全てを凍らせる。

その力に、アルテミスは成す術が無かった。

それでも――――

「あああああああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

――――最後まで諦めずに、ヴァンガードに迫った。

「終わりだよ、アルテミス……。」

しかし、そんな彼女の奮闘も虚しく、アルテミスは一瞬で氷付けに

された。

「だけど、君を殺したりはしない。
生きて、人が変われる所を見ていてほしいから。」

凍ったアルテミスを見据え、双剣を構える。

「氷砕閃！」

剣を一閃し、氷だけを砕く。

「世界の全てが、同じになる事は決して無い。
だけど、必ず同調してくれる人はいるんだ。」

氷から落下してきたアルテミスを受け止めながら、ヴァンガードはそう言った。

そして、彼のいる世界が僅かの間歪む。

やがてそれが収まった時、彼の目の前には扉があった。

「勝利、したんだな……。」

ようやく安堵できたヴァンガードは、緊張がほぐれた所為なのか、その場に座り込んでしまった。

「少しぐらいこっちで休んでても、怒られないよな……。」

彼は誰に言う訳でも無く、呟いた。

第２３話　「信念」（後書き）

鮮血
「ヴァンガード、勝利！」

ヴァンガード
「いや、危うかったけどな……。
腹イテェ……。」

鮮血
「まぁ、実は君の怪我は酷い部類には入らないけどね。
一番怪我をするのは、ヴィ……ゲフンゲフン（汗）」

ヴァンガード
「それじゃあ、どっちだか分からないぞ……。」

鮮血
「いや、その方がいいでしょ。
今回、実は続編に予定している【リリカルラグナレク】の伏線があったりするんだよね。」

ヴァンガード
「そうなのか！？」

鮮血
「とは言え、誰かさんの魔法がそれにあたるだけだから、伏線と言っていいのかは微妙な所だけど。」

ヴァンガード

「で、次回は？」

鮮血

「次回はザフィーラとポセイドンの戦いです。
いつになるかは分かりませんが、お楽しみに～。」

―次回予告―

彼を染める上げるは、決して潤う事のない渇き――――。

その虚無を埋めるには、ただ刃を振るい、ただ殺すしかない。

それしか知らぬから……。

それしか選べぬから……。

故に、彼の者は殺す。

故に、対する彼は他の道を示す。

果てにあるは、変わらぬ道か、新たな道か……。

第２４話　「変わらぬ道　変わる道」

選ぶは、誰でも無い己。

第２４話　「変わらぬ道　変わる道」（前書き）

鮮血
「なんとか間に合った……。」

ザフィーラ
「慌てて書いた所為で、いつも以上に酷い事になっていないと良いが……。」

鮮血
「それは否めない……。
さて、今回はザフィーラ対ポセイドンのお話です。」

ザフィーラ
「うむ。」

鮮血
「わんちゃんは頑張りません。
頑張るのはザフィーラです！」

ザフィーラ
「それは皆分かっているのでは？」

鮮血
「まぁね。
では、どうぞ。」

第２４話　「変わらぬ道　変わる道」

「ウウオオオォォォォォ！！！」

「ハアアアアァァァァァ！！！」

互いの咆哮と共に、得物が火花散らし、ぶつかり合う。

そして、しばらく鍔迫り合いしたかと思うと、ほぼ同時に後ろに飛び退く。

ザフィーラとポセイドンは、先程からそれを繰り返し、互いに相手に決定打を与えられずにいた。

「さすがに硬いな、貴様の盾は。」

「光栄な事を言ってくれるな。」

ポセイドンの褒めに、ザフィーラは構えを直しながら答える。
チラリと、僅かな間にザフィーラは自分の嵌めている手甲を見る。
少しだけ傷が付いているが、今後の戦闘に支障を来す事はないだろう。

（しかし……。）

そこまで考えて、ザフィーラはポセイドンの手にあるトライデントに目を向ける。

（向こうはまったくと言っていいほど傷が無い……。
強度は彼奴の方が上と言う事か……。）

いつまでも先程と同じような鍔迫り合いをしていれば、確実にこちらが敗れる。

（ならば、彼奴に拳を叩きいれるしかあるまい……。）

「呆けている暇があるのかあああぁぁぁぁ！？」

攻めてこないザフィーラに痺れを切らし、ポセイドンが腰に携えた

両刃剣を引き抜いて突っ込んでくる。

左手に持ったそれを、思い切り振り下ろす。

それがザフィーラの身体を捕らえるよりも早く、彼は回避行動をとる為に空中に身を躍らせる。

「逃がすかぁ！」

空中にいるザフィーラを一瞥し、トライデントの尖端に魔力弾を3つ形成する。

「アクアフラム！」

トライデントを1度背後に振りかぶり、ザフィーラに向けて水球を放つ。

「くっ！」

それを避け、ザフィーラは接近戦に持ち込もうと、ポセイドンに迫る。

しかしそれは、避けたはずのアクアフラムの追尾によって妨げられる。

「やる！」

速度を上げ、ザフィーラはなんとかアクアフラムから距離を取る。

（このまま手を拱いていては、勝てるものも勝てん、か……。）

苦々しく内心で舌打ちし、ポセイドンが立っている箇所を見直す。

「何っ！？」

しかし、そこには既にポセイドンの姿は無かった。

「貰ったあああああああぁぁぁぁぁぁ！！！」

ザフィーラの頭上から、悪魔の咆哮が響いた。

「っ！」

ザフィーラが目をそちらに向けた時、ポセイドンの刃が彼の肉を捕

えた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第２４話　「変わらぬ道　変わる道」

「っ！」

一方、通路をリインとユニゾンした状態で急いでいたはやては、何かを感じてその場に立ち止まる。

［はやてちゃん、どうしたですか？］

「いや、なんでもあらへん。」

頭を振り、リインに何でもないと答える。

しかし、彼女の頭の中では嫌な予感が渦巻いていた。

（今の感じ……。

まさか、ザフィーラに何か……。）

払拭しきれない不安の闇に、はやては否応なしに明るさを失っていく。

（アカン……。

ここで私が弱気になってもうたら、皆に迷惑がかかる。）

前を見据え、再び通路を駆ける。

（信じないで、何が『家族』や……。）

［はやてちゃん、あそこに扉が……。］

「ようやっと見つけたで。」

リインの注意に、そちらを見やる。

「行くで、リイン！」

［はいです！］

眼前に迫る扉は、彼女達の決意を汲み取ったのか、ゆっくりと開いていく。

はやては、そこに迷いなく突入した。

「眩しい……。」

あまりの光の強さに、はやては目を庇う。

それが段々と収束していき、やがて視界を遮った腕を下ろす。

「ここは……。」

はやてがいたのは、周囲を岩肌剥き出しの山々が連なった荒野だった。

「あそこにいるのが、私達の相手ですね……。」

リインの言葉に、1つの山に目を向ける。

その山頂には、重装備をした男が立っていた。

目を閉じたままだが、その威圧感は凄まじいものだった。

「来たか……。」

ポツリと呟き、彼はゆっくりと目を開く。

「字はヴォルケ。
真名はヘファイストス。」

名乗ってきたヴォルケ――――ヘファイストスに、はやては驚く。

しかし、すぐに我に返りリインとのユニゾンを一旦解除する。

「私は八神はやて！」

「私は、リインフォース?です！」

「はやてとリインフォースか……。
忘れぬようにしよう。」

言いながら、ヘファイストスは腰に携えた片刃の双剣を引き抜く。

「リイン、気を抜いたらアカンよ?」

「もちろんです、はやてちゃん!」

互いに頷き返し、はやてとリインは声を合わせる。

「「ユニゾンイン!」」

白く眩い閃光が走り、それが収まったかと思うと、はやてはユニゾンの状態になった。

シュベルトクロイツを一閃させ、はやては夜天の書を開く。

「では……。」

双剣を上段と中段に構え、ヘファイストスも戦闘の姿勢を取る。

「参る！」

その言葉と同時に、ヘファイストスははやてに突撃した。

「チッ……。」

ポセイドンは左手にある剣に付着した血を、剣を一閃させる事で拭う。

ザフィーラを斬ったというのに、彼の顔は晴れる気配が無かった。
いや、むしろ苦虫を潰したような感じだ。
彼の目の前には、肩から少しだけ出血させているザフィーラが、未だに毅然とした態度でその場に直立していた。

「よくもまぁ、かわせたものだな……。」

ザフィーラの傷は浅く、ポセイドンの刃が僅かしか当たらなかった事を物語っていた。

「殺せなくて残念に思っているようだな。」

ポセイドンの心を乱そうとしているのか、ザフィーラは不敵な笑みを浮かべる。

「ククククク……。」

しかし、突如としてポセイドンは不気味な声を漏らし始めた。

「クク……。
アッハハハハハハ！」

身体を大きく仰け反らせて、ポセイドンは盛大に笑う。

「確かに……。
確かに貴様を今の一撃で仕留められなかった事は残念だ……。」

剣を鞘に戻し、トライデントを後ろ手に構える。

「だが、もっと俺を楽しませてくれるという点では……。」

そして――――

「感謝しているぞおおおおおおぉぉぉぉぉ！！！」

――――トライデントを回転させながら、ザフィーラに肉薄する。

ザフィーラの頭上まで来た所で、回転させていたトライデントを両手に持ち、頭から後ろに振りかぶり、思い切り振り下ろす。

「ラアアアアアアアアア！！！」

「テヤアアアアアアアアア！！！」

振り下ろされたそれを、ザフィーラは片腕の手甲で受け止め、残った拳をポセイドンの土手っ腹に叩きこむ。

「ゴハァッ！？」

「ハアアアアァァァァ！！！」

怯んだポセイドンに、ザフィーラは回し蹴りをお見舞いする。

そして、ポセイドンはそのまま大海原へと叩きつけられた。

ドパーン！

水飛沫が高く上がり、ポセイドンは海中に没した。

ザフィーラは、ポセイドンが没した所まで近づき、少し離れた場所で待機する。

無闇に水中に身を投じれば、どうなる事か分かったものではないからだ。

しかし、いつまで経ってもポセイドンが浮かんでくる気配は無かっ

た。

（どういう事だ……？）

周囲を見回すも、どこにもポセイドンの姿は無かった。

波の音だけしか聞こえない空間。

その波音が、不気味さを増しているように、ザフィーラには思えてならなかった。

「む……？」

その時、ザフィーラの視界が僅かに曇った。

それに気が付いた瞬間――――

「ッ！？　これは……！？」

――――彼は巨大な水球に閉じ込められてしまった。

息が苦しい……。

そう思っていた矢先、眼前の海面が割れる。

（なっ！？）

それは、海底に足をついていたポセイドンがやったのだ。

彼はゆっくりと飛翔し、ザフィーラの目の前にまで来て、静止する。

割れた海面は、大きなうねりと音をたてて、元の状態に戻っていく。

「貴様の拳と蹴り、中々のものだったぞ。」

蹴られた時に唇を切ったのか、そこから血が滲んでいる。

それを腕で粗く拭い、トライデントを突きつける。

「その水球からは出られまい。
空気中の水分と、魔力を結合させて作った特製だからな。」

水球の中にいるザフィーラは、不敵に笑うポセイドンを睨む事しか出来なかった。

「貴様も、今度こそ終わりだ。」

トライデントを後ろ手に下げ、空いた左手を水球に向ける。

ゴポゴポと、水球の中に別の小さな水球が数多く作りだされる。

（まさか……！？）

その水球は、先程ポセイドンが放ったアクアフラムに酷似していた。

「さらばだ……ザフィーラ！」

言い終えるや否や、ポセイドンは開いていた左手を閉じる。

「ビッグバン・バブル！」

その声が轟いた刹那、ザフィーラの周囲にあった水球が、次々と爆散していく。

巨大な水球の中では、ザフィーラがもがき苦しんでいた。

それを嘲笑い、“殺す”という目的を達成できそうな事に、ポセイドンは悦に浸る。

やがて、内部のアクアフラムが起こした爆散に被弾したザフィーラ

の血によって、巨大な水球は赤く濁っていく。

そしてその水球は、最後の爆発によって弾け飛んだ。

それと同時に、ザフィーラは虚空を舞い、落下していった。

「確実に、仕留めさせてもらうぞおおおおおぉぉぉぉぉぉ!!!」

剣を再び引き抜き、落下しているザフィーラに急接近する。

「死ぃぃぃぃぃねえええええぇぇぇぇぇ!!!」

狂気の笑みを浮かべ、ポセイドンが陽光に照らされて不気味さを増した剣を振りかぶる。

「…せ…か………。」

死の刃が、ザフィーラを捕らえようとした瞬間、彼は意識を取り戻した。

「……させるかあああああぁぁぁぁぁ!!!」

「何!?」

振り下ろされた刃を掴み取り、空いた方の手も敵の得物を掴む。
そのままグイッと自分の方に引き寄せ、ポセイドンの胴に膝蹴りをする。

「グオッ！？
こぉのぉ……！」

膝蹴りをすると同時に掴んだ得物を離し、ポセイドンは吹っ飛ばされる。

「牙獣走破！」

追撃を狙うザフィーラは、その場から踏み込んで蹴りの体勢で突っ込む。

「こぉぉぉぉのおおおおぉぉぉぉぉぉぉｘ！！！」

怒り狂ったポセイドンも、咆哮し、ザフィーラの蹴りと自身のトライデントをぶつける。

「俺は……。」

ぶつかり合う金属音が響き、すれ違った後にもう1度ザフィーラに肉薄する。

「俺にとってはもう！
人殺しの道しか無い！」

「愚かな……。」

人を屠る事に悦を見出したポセイドンに、ザフィーラは憐みを持つ。

「その道しか選べぬと、何故言い切れる！？」

突き立ててきたトライデントに、拳をぶつける。

火花が散り、戦いと言う愚かな行為を彩る。

「俺の心は、あの村と共に葬ったんだよおおおおおぉぉぉぉぉ！！！」

「貴様自らその他の道を閉ざしたと、何故気付かん！？」

一閃されたトライデントを受け止め、その尖端を力技でへし折る。

破片が舞い、ポセイドンは目を見開く。

「もしもそうだとしても、俺は決して選ばん！
この道が、俺を！　ゼウスを！　ヘラを！　仲間を救ううううぅぅ！！！」

ザフィーラを蹴り飛ばし、ポセイドンは己を救い、自分の存在を見出してくれた能力（ちから）を発動させる。

「グラディエータァァァァァ！！！」

腹の底から、全てを吐き出すかのように、戦慄を覚える雄叫びをあげる。

足の甲に鋭いクローが装着され、取り回しの簡単な長さの太刀が、両手に収まる。

「殺す……。
それこそが、今の俺の生き甲斐であり、俺という存在そのものに繋がる！」

「真に貴様の存在に繋がるは、仲間との日々のはずだ！」

「黙れえええええぇぇぇぇぇぇ！！！」

その場で仰け反り、大空を見ながら叫び散らす。
そんなポセイドンの周囲には、魔力弾が数多く生成されていく。

「俺は……俺は認めん！」

右手にある太刀で虚空を薙ぎ払い、もう一方の太刀の切っ先をザフィーラに向ける。

「俺にとって、殺戮は俺そのものだ！
他の愚行に現を抜かすなど……。」

荒い呼吸を徐々に安定させながら、魔力弾を生成する事を止めない。

「絶対に認めん！　絶対になぁ！」

「ならば俺は、認めさせよう……。
貴様の存在がそれだけではないという事を！」

「貴様に認めさせられるなど、そんな事があってたまるか！
俺を認めるは、ゼウス達だけでいい！」

「そうまでして、人を認めんか……。」

「当然だ！
彼奴等はヘラを殺したのだ！
それだけで、彼奴等を殺し尽くす理由になる！」

「ヘラがそれを、望んでいると！？
本当にそう思っているのか！？」

「死者に口は聞けん……。
だがしかし！　例え望んで無くとも、俺達が選んだ道だ！
誰にも変える事は出来ん！　決してなあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

「悲しいな……。」

「悲しい事など……。」

叫び散らすポセイドンに、ザフィーラは1度、目を伏せる。

両手にある太刀を後ろに回し、突撃する体勢をとる。

「あるものかあああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！」

最早何も通じないと、ポセイドンの叫びが訴えていた。

それを受け止め、ザフィーラも彼に突っ込む。

一閃される剣を受け、或いは捌く。

それがザフィーラの肉体を捉えきれない事に、ポセイドンは焦りを覚える。

「アアアアアアアアアァァァァァァァァ！！！」

デタラメに繰り出される剣と、足のクロー。

その１つでも肉体を貫けば、ザフィーラは敗北するだろう。

それでも冷静さは欠いていないからか、その攻撃はザフィーラに届かない。

そして、ポセイドンの攻撃が大ぶりになった、その隙を狙い、ザフィーラの拳が彼の顔を捉えた。

殴り飛ばされ、海中に今一度没するかと思ったが、ポセイドンはその場で急制動をかけて、踏みとどまる。

しかし、ポセイドンが反撃に出ようとするよりも早く、ザフィーラが動いた。

「縛れ！　鋼の軛！」

白銀のそれが、ポセイドンの太刀とクローをいとも容易く壊す。

「バ、バカな……。」

敗れる事など、思いもしなかったのだろう。

ポセイドンの瞳は、絶望の色を湛えていた。

「俺は……俺は敵を殲滅してこその俺だ！
負ける事など、許されん！」

軛の捕らえられながらも、ポセイドンは身体を動かそうとする。

残る武器は、短刀ぐらい。

ここで負けるぐらいなら、命を散らす。

その方がかなりマシに思えた。

だが、短刀にまで手が届かない。

ならば、舌を噛みちぎるぐらいしか、自分に残された道は無い。

そう思い、舌を噛み千切ろうとするが……。

「むっ！？」

ある感覚が、彼の頭をよぎった。

「アルテミス……。
負けたのか、お前も……。」

アルテミスの敗北だ。

１２神は今、光闇の書とゼウスによって、意識を共有する事が出来る。

しかし、常時その状態にあっては戦いに支障が出ると、ゼウスが敗北した時のみ、その事を全員に知らせるように変更したのだ。

「アルテミスが負けるとはな……。」

仲間が負けた事に、ポセイドンは悲しみを覚えた。

「ふん……。
俺達の中で一番幼いアイツを遺して逝ける薄情者など、居はしないな。」

自嘲し、自分も負けた事に身を委ねる。

「どれ……。
もう少し、生き延びてみるか……。」

そう言って、ポセイドンは意識を手放した。

気絶した彼の顔は、どこか自嘲めいていたが、笑顔に見えた。

「勝利したか。」

大きく息をつき、ザフィーラは砂浜で身を休める。

「残りの人型としての魔力は、主に……。」

呟き、彼は狼の状態になる。

それと同時に世界が一瞬だけ歪み、外へと続く扉が具現する。

「すまんが、少し休ませてもらおう……。」

外に出るよりも早く、ザフィーラも意識を失った。

第２４話　「変わらぬ道　変わる道」（後書き）

ザフィーラ
「俺も辛勝と言ったところか……。」

鮮血
「まぁ、簡単には勝てないだろうしね。」

ザフィーラ
「しかし、ポセイドンの内にある憎しみは相当だな……。」

鮮血
「そりゃあそうだよ。
そうじゃなきゃ、こうして戦わないで済んだかもしれないしね。」

ザフィーラ
「彼奴は、殺す以外の道を知らぬが故に、戦ったか……。」

鮮血
「道なんて様々なんだから、それ以外の道が見えないなんて事はないかもしれないけど、実際の所は見失う事は良くあると思うんだよね。」

ザフィーラ
「して、次回は？」

鮮血
「次回は、エリオ達フォワード陣対アテナです。
ビッグバン・カノンを放った後、どうなったかはそこで。」

ザフィーラ
「では、次回もよろしく頼む。」

鮮血
「お願いしまーす。」

―次回予告―

我が願うは、我を作りし者へ勝利を齎す事。
我が願うは、誰一人として欠けずの勝利。
我が願うは、彼の者を救う事。
我が願うは、彼の者の笑顔。
我が願うは、彼の者と仲間の願いを叶える事。
願いの結末は違えど、結果は同じ。
ただ、『勝利したい』……それだけ。

第２５話　「勝利への願い」

聞き届けられるのは、願いか……。

それとも、願いを叶えるまでの過程か……。

第２５話　「勝利への願い」（前書き）

鮮血
「祝！　エクシリア発売！」

ティアナ
「いきなりね……。」

スバル
「わぁ～、凄いね！」

ティアナ
「どこがよ……。」

スバル
「あ、そういえば作者さんに質問！」

鮮血
「ん、何？」

スバル
「前話のあとがきにあった、【我が願うは】云々の件って、誰がどれなの？」

鮮血
「上から順に……アテナ、ティアナ、エリオ、キャロ、スバル……の順番だよ。」

キャロ

「そうだったんですか。」

鮮血
「ふふふっ……誰も気付けまい！w」

ティアナ
「そりゃそうでしょ。
あんなアホらしいの、誰が分かるって言うのよ……。」

鮮血
「ですよねー……。」

エリオ
「今回は僕達とアテナの戦いですね。」

鮮血
「もちろん決着もつくよ。
けどねー……。」

エリオ
「どうしたんですか？」

鮮血
「イマイチ、キャロを動かし切れなかった！」

キャロ
「えぇっ！？」

鮮血
「キャロファンの皆さん、本当に申し訳ない……。」

スバル
「で、でもでも！　作者さんの中では、皆同じぐらい頑張ったんでしょ！？」

鮮血
「そりゃあもちろん。」

スバル
「じゃ、じゃあ、いいんじゃないかな？」

鮮血
「だといいけど……。」

ティアナ
「とりあず、第２５話　「勝利への願い」、どうぞ。」

第２５話　「勝利への願い」

「ビッグバン・カノン……。」

アテナが天上に背をつける程ギリギリの位置まで飛翔し、地上に銃口を向ける。

集束されていく魔力量は、なのはのスターライトブレイカーにはやや劣るものの、そう何度も目にする機会の無いそれは、ティアナ達を戦慄させるには充分だった。

地上を見ると、ティアナは急いでスバルにおぶさり、キャロはエリオに抱えられていた。

それを認めた瞬間、集束が完了した。

（これで終わる……？）

この一射で全てが決すると思っていたアテナだったが、その考えが徐々に変化してきた。

その逡巡が、彼女に引き金を引かせる時を僅かに遅らせた。

頭を振るそぶりを見せずに、頭を切り替える。

そして彼女は、全てが終わると信じて引き金を引いた。

魔法少女リリカルなのはＳｔｒｉｋｅｒＳ―ＪＩＨＡＤ

第２５話　「勝利への願い」

目を焼くのではないかと思われる程の閃光と、それに匹敵する轟音。

それらがやがて治まった時、ティアナ達は一斉に安堵の息を漏らした。

彼女達は、アテナが地上に強大な砲撃をすると瞬時に読み、急いで天井ギリギリの位置まで上がったのだ。

スバルはティアナをおぶってウィングロードで。

エリオは、キャロを抱き抱えてソニックムーブを使って。

フリードを連れてきているものの、召喚は間に合わなかった。

そして彼女達の視線の先には、こちらに視線を向けているアテナがいた。

アテナに表情の変化は見られず、ただ黙しているだけだった。

しかし、ティアナらに攻撃をしてきたりはしなかった。

互いにゆっくりと地上に下りて行く。

やがてそれが終わったかと思うと、互いに対峙したまま動かなかった。

「アテナって言ったわね。」

その沈黙を、ティアナが最初に破る。

「あなた、戦わされているの？」

「？」

突然言われた言葉に、アテナは首を傾げた。

何故向こうがそんな事を聞いてくるのか。

何故自分の事を気にしてくるのか。

その事が、アテナには分からなかった。

「もしもゼウスに戦いを強要されているのなら、私達があなたの力になるわ。」

極力戦いを避けたいティアナは、アテナが無理矢理戦わされているのだと思った。

そこで、彼女の説得を試みたのだが……。

「違う……。」

アテナははっきりとそれを否定した。

「私は、私の意思で戦う事にした……。」

「どうして？」

今度は、その理由をキャロが聞いてきた。

「ゼウスは私を造ってくれた……。
それだけ……。」

アテナは“それだけ”とは言ったものの、スバル達はそれを否定したりはしなかった。

理由など、様々なのだ。

それに、自分達が選んだ道も、その理由に近かったりする。

「なら、私達はあなたを止めるわ。」

ティアナは決意を改め、クロスミラージュを構える。

その行動に合わせるように、スバル、エリオ、キャロも同様に身構

える。

「そう……。」

アテナもポツリと呟き、長銃を構え直した。

ティアナは数個、魔力弾を生成し、アテナへと射出する。

「……。」

無言のまま、アテナはそれを跳躍してかわす。

それを予め読んでいたエリオとスバルが、彼女を両脇から挟み撃ちにする。

「リボルバー……。」

「紫電……。」

リボルバーナックルのスピナーが回転しだし、エリオの左腕に雷電が走る。

「……ナックル！」

「……一閃！」

打ちだされた魔力弾と、エリオの拳が迫る。

「シールド……。」

アテナはそれを、全体を覆う球体の盾で防ぐ。

「プリズム・ディフュージョン。」

シールドを壊そうと、魔力を更に注ぎ込んだ時、アテナはその目をかっと見開いた。

「えっ！？」

「これは……！？」

スバルとエリオの目の前では、魔力を注がれたシールドが脈打っている光景だった。

「2人とも、早く離れて！」

ティアナの指示に従う2人だったが、踵を返した瞬間、シールドに注がれた魔力が、デタラメに放出された。

「ケリュケイオン！」

キャロのグローブが強く発光し、ティアナの眼前に頑丈な盾を生成する。

「スピアー・バレル。」

ガションと、重い機械音がしたかと思うと、アテナの持つ長銃のリボルバーが回った。

それを、シールドが展開されているティアナのいる方に向ける。

構えて、それを撃つまでのモーションは、乱れなく素早い。

「させるかぁ！」

引き金が引かれ、それがティアナに着弾する前に、エリオが間に割って入る。

「スピーアアングリフ！」

ストラーダで弾丸を弾き、フォルムをデューゼンに切り替え、アテナに突撃する。

「クロスファイアシュート！」

それを援護するように、ティアナの弾丸がエリオの周囲を取り巻く。

アテナはそれを迎え撃たず、フェイトの戦闘データから引き継いだスピードを活かし、急いで距離を取る事にした。

エリオの直線的な追撃は難なくかわしたものの、ティアナの弾丸に追いかけられる。

複雑な軌道を描いて飛びまわるも、弾丸はそれをあっさりと真似して追ってくる。

そして――――

「ディバイン……。」

――――アテナの目の前には、攻撃の準備を完了させたスバルがいた。

「っ！
しまっ……。」

「……バスタァァァァァァ！！！」

蒼天の色を宿した砲撃が、アテナを易々と呑みこんだ。

その頃、ヴィータは眼前に居る相手を睨んでいた。

「テメェがあたしの相手みたいだな。」

グラーフアイゼンの突起を向ける。

「ククク……。
そのようだな……。」

その立派な風貌には似つかわしくないように、目をギョロリと動かす。

「ようやくだ……。
ようやく俺様にも殺し合いが出来る時が来た！」

両手を虚空へ広げ、嬉しさを表現する。

しかしその嬉しさは、歪んでいた。

「俺様と戦えるんだ……。
少しは光栄に思えよ、ガキ。」

「口の悪い奴が相手かよ……。」

「楽しませてくれよぉ？
俺は、殺したくて……。
殺したくて、殺したくて、殺したくて、殺したくて、殺したくて！
人を殺したくて堪んねぇんだからよぉ！」

2つの小刀を逆手に構え、狂気に浸る。

「俺様はフドゥル！
真名はアレスだ！」

「鉄槌の騎士ヴィータと、鉄の伯爵グラーフアイゼンだ！」

「俺様を楽しませてくれたら、覚えててやるよぉぉぉぉぉぉ！！
！」

身を低く屈め、瞬時にヴィータに突撃する。

狂気に彩られた、死を呼ぶ刃が迫った。

「ディバイン……バスタァァァァァァ！！！」

スバルの砲撃が、アテナを容易く呑みこんだ。

やがてそれが止んだ時、アテナは気絶したのか、床に落下していった。

助けようと、急いでスバルが彼女に向かう。

だが――――

「アラ・バレル。」

――――アテナがそう呟いた瞬間、彼女が持っていた長銃の砲身が分裂した。

「えっ……！？」

スバルは急制動をかけ、アテナから距離を取る為にその場から逃げる。

だが、分裂した砲身の1つが、彼女を背後からおいかけ、砲火を放つ。

「わわっ！？」

「スバル！　ッ！？」

急いで援護をしようと、クロスミラージュを構えたティアナだったが、それよりも早く、砲身が彼女に火線を浴びせる。

「ティアさん！」

傍にいたキャロが、彼女にシールドを展開する。

それに魔力は弾かれ、ティアナは傷を負わずに済んだ。

「キャロ、後ろ！」

「へ……？」

ティアナの叫びに、キャロは驚いて自身の背後を振り返る。

頭部に照準が定めている砲身が、今まさに火を噴く瞬間だった。

だが、死を与えるそれが当たる前に、エリオがキャロを助け出す。

「大丈夫？」

「うん、ありがとう。」

無事を確認し、2人を一瞥したティアナは、スバルを援護しようと魔力弾を生成する。

「クロスファイアシュート！」

今までの戦闘で消耗してしまった為、放たれた数はさほど多くは無かった。

アテナは、それを一瞥せずにただその場に立っている。

「ウノ、ドゥエ。」

そう呟いたかと思うと、砲身が2つ、ティアナの魔力弾を次々と落としていく。

「なっ！？」

「遠隔操作が可能なんて……。」

「トレ、クァトロー。」

そして、逃げるスバルの前に、更に砲身が2つ現れる。

「ヤバッ！」

［Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．］

スピードを落とし、シールドで砲火を防ぐ。

「チンクェ。」

それをアテナが見逃す訳もなく、スバルを追っていた砲身が砲火を浴びせる。

だが、間一髪でエリオがスバルを抱き抱えてその場を離脱する。

「トゥット。」

狙いを定められないように出鱈目に動くティアナ達に、アテナは5本、全ての砲身を迫らせる。

「スターゲイズ。」

ティアナ達4人は砲火から逃げるが、実際はアテナが砲撃で誘導していたのだ。

4人とも近くに固められ、気付いた時にはアテナの砲撃の準備が完了していた。

5本の砲身はそれぞれの位置に停滞し、魔力の糸で星を模る。

そして、アテナは手に残っているグリップを構える。

引き金と、僅かに残された銃口。

その銃口が、淡く輝きだす。

「まさか……！？」

「集束砲！？」

全員が気付いた時には、既に遅かった。

「今度こそ、さようなら……。」

引き金を引き、星型の集束砲が輝きを増して放たれた。

「やらせない！
キャロ、補助お願い！」

「はい！」

キャロが素早く、ティアナの身体能力を底上げする。

「ファントム……ブレイザァァァァ！！！」

［Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｂｒａｚｅｒ　Ｐｈａｌａｎｘ　Ｓｈｉｆｔ．］

ファントムブレイザーの強化版を放ち、僅かだがアテナの集束砲の着弾を遅らせる。

「今の内に！」

「はい！」

エリオはキャロを抱えて、そしてその2人が射線上から退避した後、ティアナはスバルを連れて逃げ出した。

壁にアテナのスターゲイズが着弾し、轟音を響かせる。

「ティア、大丈夫？」

「身体自体はね。
だけど、今ので魔力を使い過ぎたみたい……。」

「急いで決着をつけないと、私達が危ないね……。」

アテナの方を見ると、彼女の表情はまったく変化していなかった。

感情の起伏があまりにも乏しいのだ。

そんなアテナを見て、エリオとキャロは苦しそうだった。

共に笑えれば、どれほど楽しいのか……。

それが気がかりだった。

2人の横顔を目にし、ティアナは大きく息をついた。

「助けるわよ。」

「「え？」」

「笑わせてあげたいんでしょ、あの子を？」

「はい！」

「大丈夫。
私達４人なら、絶対に助けられるよ！」

「はい。」

ティアナの言葉にキャロが頷き、スバルの言葉にエリオが頷いた。

「いい？
次を撃たれたら、私達に勝機は無いわ。
だから……。」

そこまで言って、ティアナは３人を見回す。

「…だから、絶対に撃たせないで！」

「うん！」

「分かりました！」

「やります！」

全員が頷いた所で、ティアナ自身も頷き返した。

そして、スバルとエリオが先行して走り出す。

「アラ・バレル……。」

数で圧倒しようと、アテナは長銃の砲身を分離させた。

「シューティング・レイ！」

それらの銃口がスバル達前衛組を狙う前に、キャロが援護射撃で射線を封じる。

「クッ！」

接近されては面倒だと思い、アテナは銃身を回収する。

そしてすぐさま、スバルに長銃を向ける。

だが、それが撃たれる前にエリオが眼前に立ち塞がった。

「ッ！」

咄嗟にエリオが出現した事に、アテナは驚き、僅かに引き金を引く行動が遅れる。

その隙をついて、スバルがアテナの長銃を鷲掴みにする。

「ＩＳ、振動破砕！」

そして、リボルバーナックルのスピナーが回転しだした。

アテナの長銃が、ミシミシと音を立てていく。

「アラ・バレル！」

砲身を分離させるとともに、アテナも急いでその場から離脱する。

（残っているのは……ウノ、クァトロー、チンクェだけ……。）

残された砲身を確認し、先程と同じように自分の意思で操作する。

「させない！」

その銃口がアテナの周囲を駆けた瞬間、ティアナがクロスミラージュを構えた。

「ヴァルアブルバレット！」

ダァンと、3発の銃声が轟く。

オレンジの弾丸は、一直線にアテナの銃身を貫いた。

自身の近くで爆散した銃身の煙と炎に、アテナは目を閉じた。

「デヤアアアアアァァァ！」

「ッ！」

突撃してきているのか、エリオの声が徐々に大きくなってくる。

アテナは急いで残った銃身を構え、隠しナイフを瞬時に取り出し、銃剣に切り替える。

「サンダー……レイジ！」

突き立てられたナイフと、ストラーダがぶつかり合う。

ガキィンと金属音が鈍く響き、火花を散らす。

鍔迫り合いが続く中、ストラーダから雷撃が見舞われる。

「クッ……。」

その苦痛に顔を歪め、アテナは怯む。

「ウオオオオオォォォォォォォ！！！」

そして、スバルが全力で走ってくる。

ローラーは、分離したバレルに損傷を与えられていたのか、バチバチと音を立てて、今にも危うい状態だった。

それでも、スバルはアテナに向かって走り続けた。

仲間の為に――――

勝利の為に――――

そして、アテナを助ける為に――――

エリオがソニックムーブを使って、その場から離脱する。

アテナも、スバルが接近している事に気がつき、エリオが離れた時を見計らい、高速でスバルにナイフを突き立てて突撃した。

「マッハキャリバー！」

［Ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ．］

アテナがナイフを構えている位置“だけ”にシールドを何重にも展開する。

このまま互いに、速度を上げた状態で衝突しては、一点に集中しているアテナのナイフがシールドを貫通するからだ。

そして、その予測は見事に当たった。

アテナのナイフは、スバルのシールドの途中まで突き刺さった。

「ぁ……。」

彼女がその事に気が付いた時、スバルは既に集束砲の準備を終えていた。

「ディバイン……バスターーーーーー！！！」

空色の砲撃が、再びアテナを呑みこんだ。

「はぁ、はぁ……。」

全員、魔力が底を尽きかけている所為もあって、息も切れ切れだった。

しかし、そんな彼女達の近くには、“外へ出る為の扉”があった。

即ち、アテナに勝利したと言う事だ。

「やったね、皆。」

スバルの笑顔に、全員が笑った。

彼女達の傍らでは、アテナが静かに目を閉じていた。

第２５話　「勝利への願い」（後書き）

鮮血
「……と言う訳で、アテナ戦でした！」

スバル
「つ、疲れたぁ……。」

ティアナ
「私が一番魔力の消費量が多かったわね。」

鮮血
「そうだね。
やっぱり、援護となるとティアナの方が動かし易いからね。」

エリオ
「そう考えると、キャロが最も消費量が少ないんですか？」

鮮血
「んにゃ、どうだろう？
シールドを何度か張っているし、召喚はしていないけど、ティアナの補助で相当食ったと思うよ？」

キャロ
「と言う事は、皆さん同じぐらいなんですね。」

鮮血
「大体はね。
さて、今更ながら魔法の解説をば。」

ティアナ
「今までの敵にはやってなかったのに……。」

鮮血
「すみません……。」

◆ビッグバン・カノン
相手の直上、もしくは上空に移動して、そこから地上に向けて放つ着弾型の集束砲。
着弾後、半円型に攻撃を広げる事が出来る。

◇プリズム・ディフュージョン
アテナの防御兼攻撃魔法。
展開したシールドに当たり続ける攻撃を吸収し、その後、吸収した魔力を出鱈目に放出する。

◆スピアー・バレル
貫通力が非常に高い魔力弾。

◇アラ・バレル
長銃の銃身を分離させる。
分離した銃身は、アテナの意思によって自在に動かす事が出来る。

◆スターゲイズ
銃身から魔力で五芒星を模り、それを放つ集束砲。

鮮血
「こんな感じかな？」

ティアナ
「それで、次回は？」

鮮血
「次回ははやて＆リインフォース？対ヘファイストスです。」

スバル
「八神部隊長、大丈夫かなぁ……？」

エリオ
「接近戦には不向きですし……。」

鮮血
「まぁ、そこは僕が独自の魔法を加えたからｗ
ただ……。」

キャロ
「『ただ……』なんですか？」

鮮血
「うん、納得してもらえない展開だと思う……。」

スバル
「そ、それって……！」

鮮血
「ではまた、次回をお楽しみに～。」

―次回予告―

世界を壊させまいと戦う少女と、世界などどうでもよいと思う青年。
少女が望むは、世界の存続と、大切な仲間の勝利。
青年の根幹にあるは、彼を生みし者への感謝。
純粋に戦う2人の姿は、美しく、されど穢れていた。
戦う事しか知らぬが故にぶつかり合い、故に勝と敗しか生まれない。
和解など、誰が出来よう物か……。
第26話　「戦の篝火」
勝敗しか生まぬ戦いに、踊れ。

第２６話　「戦の篝火」（前書き）

鮮血
「祝！　ブラッディ・クロス、第６巻発売！」

はやて
「まったく関係ないやん……。」

鮮血
「まぁ、このテンションが無かったら、この話は投稿されなかったと思う。」

リインフォース？
「時期に投稿せざるを得ないと思いますけど……。」

はやて
「せやけど私、この戦い方に納得いかへんわ。」

リインフォース？
「リインもです！」

鮮血
「まぁ、致し方ないから。」

はやて
「むぅ……。」

リインフォース？
「やっぱり駄作者ですぅ！」

鮮血
「……今更じゃない？」

リインフォース？
「開き直りました！　最低ですよ！？」

第２６話　「戦の篝火」

「バルムンク！」

はやての咆哮に合わせるように、８つの魔力刃が中心から大きく開き、ヘファイストスに八方から収束するように迫る。

「不屈の鎧（ガーディアヌス）！」

しかし、迫りくるそれらをかわす気が無いのか、ヘファイストスは慌てる事無く鎧を発光させる。

鎧から発せられた光は、あっという間にヘファイストスを包みこみ、はやてが放ったバルムンクを全て防御する。

「クラウ・ソラス！」

ヘファイストスの防御を貫こうと、はやては収束砲を瞬時に放つ。

「神の神秘（ラジエル）！」

すると今度は、ヘファイストスは指に嵌められている指輪を輝かせる。

鎧から展開した障壁を削除し、前面に巨大な盾を具現させる。

「残念だが、そう簡単には貫かせんぞ。」

不敵な笑みを見せるヘファイストスに、はやての頬を冷や汗が伝った。

第２６話　「戦の篝火」

「ザフィーラ以上に硬い防御やな……。」

［はいです。］

ヘファイストスのその防御力に、はやてとリインフォース？は舌を巻いた。

しかし、だからと言って諦めている訳ではない。

「ヘファイストス！」

「何だ？」

武器を構え、しかし突撃してこないヘファイストスに、はやては声を限りに彼の名を叫ぶ。

「アンタはどうして、ゼウスに味方しているんや？
この世界を壊す事を……アンタも望んでるんか？」

「まさか。
ただ私は、私を生み出したゼウスに感謝を示しているだけだ。」

「生み出した？」

「そうだ。
貴公らの仲間であるあの女……フェイトと言ったか？
私は彼女の戦闘データを基盤に、光闇の書より生み出されたのだ。
」

「フェイトちゃんの……。」

「とは言え、他の奴等ほど色濃くは受け継いではいない。
それに、光闇の書から生み出された我らは、身体は魔力で出来ていると言って過言ではない。」

「ゼウスは、そんなにも魔力を持っているんか……。」

「ふふ、バケモノだと思えるだろう？
だがそれは間違いだ。　ただ魔力が強大なら、そこら辺にも転がっているだろうしな。」

ヘファイストスは得物である双剣を構えずに淡々と語り続ける。

それは、巨大な魔法を使う為の時間稼ぎとも思えたが、彼がそんな事をするとは、はやてには到底思えなかった。

「ただ……。」

「なんや？」

「この世界を滅ぼすのも、或いは一興かと思うぞ。」

微かな笑みを浮かべ、ヘファイストスは双剣を上段と下段に構える。

「悪いけど、その一興は私らが止めさせてもらうで。」

シュベルトクロイツで虚空を薙ぎ、はやては自身の周囲に魔力弾を数多く生成する。

「全力で来るがいい……八神はやて、そしてリインフォース？よ！」

「無論や！」

答え終わると同時に、はやてはリインを介して生成した魔力弾を全て放つ。

だが、ヘファイストスはそれらを全て身体を捻る事で紙一重で避け

て行く。

「させへん！」

接近戦に持ち込まれぬよう、はやてはその場から離れるべく飛び退く。

［フリジットダガー！］

「遅い！」

リインが生成した短剣が、ヘファイストスに急速に迫るが、それらは彼の双剣の元に斬り伏せられた。

「バルムンク！」

一列に並べた魔力弾を、息を吐かせぬ速さでヘファイストスに迫らせる。

「神の神秘（ラジエル）！」

それをよけようとせず、ヘファイストスは迫りくる数多のバルムン

クを真正面に捉える。

再び彼の指輪が発光し、それに合わせて、切っ先をバルムンクに向けた左側の双剣も輝きを増していく。

「硬化の剣（ハーデン）！」

肉薄してきたバルムンクは、全てその剣に触れただけで真っ二つに引き裂かれていく。

「さすがに硬いな……。」

「だからと言って、貴様が勝てない訳ではない。
どうやらそれは理解しているようだな。」

ヘファイストスの左手にある剣が、スゥっと光を失っていく。

「先の連なった魔力弾も、一点に集中させて貫通力を高めたつもりだろう。」

「ええ勘をしてるな。」

「褒めた所で戦況は変わらんぞ。」

「それでも……ええ騎士を見るんは、悪い気はせえへん。」

「言ってくれる。
私からすれば、貴公らの方がよっぽど良い騎士……いや、魔導師だ。」

「こんな戦場で出会わんかったら、素直に喜びたかったわ。」

「或いは、そうかもしれぬな。
だが、だからとてこの戦いの手を緩めるわけにもいかぬ。」

「もちろんや。
私も全力で行かせてもらうで！」

「捕らえよ、凍てつく足枷！　フリーレン・フェッセルン！」

リインがヘファイストスの周辺の水分を凍結させ、彼を氷の中に閉じ込める。

「まだ終わらせん！
アーテム・デス・アイセス！」

ヘファイストスを封じた僅かな瞬間をフルに活用し、はやては広域魔法を放った。

「クッ！　しまっ……。」

ヘファイストスがフリーレン・フェッセルンを壊した時には、アーテム・デス・アイセスが着弾する寸前だった。

「ここ…だよね。」

［Ｙｅｓ．］

眼前に聳え立つ純白の扉を見上げ、なのはは固唾を呑む。

不安なのか、レイジングハートを握る手に自然と力が籠る。

［Ｍａｓｔｅｒ．］

「大丈夫だよ、レイジングハート。
ちょっぴり不安だけど、それはいつもの事だし……。
それに……フェイトちゃんは、絶対にヴィレくんが助けてくれるよ。」

愛機を安堵させるように笑みを浮かべ、彼女は扉に向き直った。

「行こうか。」

［Ｙｅｓ，Ｍｙ　Ｍａｓｔｅｒ．］

なのはの確認に、レイジングハートはさも当然のように答えた。

その決意を汲み取ったのか、扉は独りでに開かれ、なのはは内から溢れだした閃光に目を閉じた。

「ッ……寒い……。」

あまりの寒さに、なのははゆっくりと目を開いた。

「ここ……。」

寒いのも当然で、今彼女がいるのは氷山の並ぶ空間だった。

「俺の相手は女かよ……。
チッ、つまんねぇなぁ。」

「貴方は……。」

なのはの目の前にいたのは、黒と紫に彩られた重装甲を纏ったヘイルだった。

今までよりも、相当な火力を積んでいるのだろう。

（あの重装甲の中身は、ミサイルってところかな。）

何も言わず、ただヘイルを睨むなのはに、ヘイルは嗤った。

「メンドくせぇが、一応礼儀って奴だ。
俺はヘイル。　真名はディオニュソスだ。
女ぁ、テメェの名は？」

「高町なのは。」

「呼びにきぃ名前だなぁ……。
まぁ、これから楽しい戦争（どんぱち）になるなら、文句はねぇな。」

「女性だと思って甘く見ると、痛い目を見るよ。」

「ソイツぁ、楽しみだ。
せいぜい痛い目を見させてくれや。」

ニィッと口元を歪めて笑い、以前のものよりも口径が広がったライフルとそれに合わせて改造された魔力圧縮銃を、右手と左手にそれぞれ構える。

「さぁ、戦争（パーティー）の始まりだぁ！」

ガコンと鈍い音を立てて、重装甲から数多のミサイルが放たれた。

［やった……ですかね？］

「どうやろうな……。」

リインフォース？からの質問に、はやては困ったような顔をした。

いかんせん、ヘファイストスを倒したと確信を持って言えない。

何故言えないのか？

その根拠もまた、彼女の口からは出てこなかった。

『なるほど。
これは中々に素晴らしいな。』

「ッ！　やっぱり、そう簡単には終わらんみたいやな、ヘファイストス！」

凍りついた一部の場所から、くぐもったヘファイストスの声が聞こえてきた。

それに一瞬だけ驚くが、予想はしていた事だ。

はやては大して取り乱す事無く、シュベルトクロイツを握り直す。

（せこいけど、今の内に！）

次の魔法を撃とうと、ヘファイストスが動けぬ事を利用してまた魔法の詠唱にかかった。

「悪いが、撃たせはせん！」

「なっ！？」

一瞬の内に、自身を凍てつかせていた氷を破り、ヘファイストスははやてに斬りかかった。

「クッ！」

既の所でシュベルトクロイツで刀身を受け止める。

「接近戦は不向きのようだな。」

「そうなんよ。
けど、対策を取ってへん訳や無いよ。」

頬を冷や汗が伝うが、はやては笑った

［この距離なら、外しません！］

「えぇい！」

「グオッ！？」

土手っ腹にはやての蹴りが入り、ヘファイストスは体勢を崩す。

「貰った！　クラウ・ソラス！」

弾速と威力に優れたクラウ・ソラスなら、確実にヘファイストスを捉える。

そう考え、はやてはシュベルトクロイツを、ヘファイストスに向かって思い切り振り下ろした。

「交差する鋼（クロス・シルト）！」

クラウ・ソラスが着弾するよりも早く、ヘファイストスは急激に腕を上げ、双剣を交差させる。

「ほんまに硬いなぁ、ヘファイストスは……。」

「言ったはずだ。　そう簡単には貫けさせぬと。
が、しかし……。」

交差させていた双剣を戻し、腕を軽く上げる。

「腕はかなり痺れた。
惜しい所まで行ったという事だろうな、貴公の力は。」

「惜しいっちゅう事は、もう一押しって事やな。」

「だが、これ以上は私とて簡単には喰らう気はないぞ。」

「少しだけ……と思ったけど、かなり無理せんと、ヘファイストスには勝てそうもないな。」

「光栄な事を言ってくれる。」

双剣を構え、不敵に笑うヘファイストスだったが、それは油断を含んではおらず、一筋縄ではいかない事を示していた。

「リイン……。」

［はい。］

「“突貫する”から、援護は任せるで。」

［もちろんです。］

リインフォース？の心強い返事に、はやては顔を綻ばせる。

「一気に行くで！」

バサッと自身の翼を羽ばたかせ、はやては1度、ヘファイストスから離れる。

「どう来るか……。」

その様子を見守り、ヘファイストスはふぅと深く息を吐いて、双剣を交差させる。

剣と剣が交差した場所には、徐々に魔力を込められていく。

［フリジットダガー！］

リインフォース？が、はやての周囲にダガーを展開した。

その瞬間、はやてはシュベルトクロイツを一閃させ、その尖端に魔力を集中させる。

「穿て！　ジュワユース！」

シュベルトクロイツの尖端に集中させた魔力をそのままに、彼女はその尖端をヘファイストスに向けて突撃する。

「風天の剣（ビューフォート）！」

それに対して、ヘファイストスは驚きに目を見開いた。

広域殲滅型だと思っていたはやての突撃が予想外だったのだ。

しかし、それに数瞬だけ時間を奪われながらも、交差させた双剣を交互に振るう。

すると、真っ白な刃が突撃をしかけるはやてに飛来した。

迫りくる風の刃を目にして、しかしはやてはスピードを緩めない。

「リイン！」

［はいです！］

はやてに応え、リインフォース?が予め展開しておいたフリジットダガーを、ヘファイストスが放った刃とぶつける。

刃とダガーが触れ合った瞬間、ダガーは粉々に砕け散った。

だが、事態はそれだけには収まらず、ダガーに触れた刃は、立ち所に凍りついた。

「何ッ！?」

またも予想していた範疇を超えた展開に、ヘファイストスは驚きを隠せなかった。

「もらったぁ！」

それに気を取られていたヘファイストスに、はやての持つシュベルトクロイツの尖端が到達した。

「甘い！」

だがそれは、ヘファイストスの身体には届かなかった。
既の所で、振るっていた双剣を自身の身体の前に構え、シュベルトクロイツの尖端を受け止めたのだ。

「はぁっ！」

「クッ！」

受け止めたはやてを押し返さず、後ろ側に添えた剣を、彼女に向かって振り下ろした。
押し返されなかった事で、離れる事が遅れたはやての肩から、鮮血が滲む。
痛みに顔を歪めるはやてだったが、ヘファイストスはその隙を見逃さず、息を吐く暇もなく彼女を追い詰めようとする。

「貫く閃光（ミカエル）！」

バッと双剣を虚空に放り、腰にある長いレイピアを引き抜いた。
ヒュンと風を切る音が耳を劈き、頬に出来た傷口から、真っ赤な血が伝った。

それでも、はやては勝機を見失ってはいなかった。

寧ろ“これは好機”だとさえ考えていた。

レイピアの弱点は、『1度引かなければ使えない』と言う点だった。

貫く事に関しては確かに秀でているが、斬る行為には向かないからだ。

「ジュワユース！」

再び、シュベルトクロイツの尖端に魔力を込めて突撃する。

（今更武器を引いても、遅い！）

レイピアを後ろに引こうとしたヘファイストスに迫り、はやては勝利を確信した。

だが、ヘファイストスにシュベルトクロイツが当たると思った刹那、背筋が冷たく感じ、ぞっとした。

「ッ！」

慌てて急制動をかけて、はやてはヘファイストスから離れようとし

た。

だが――――

「煌めく一閃（ガブリエル）！」

――――ヘファイストスが振るった一閃は、はやての腹部を切り裂いた。

「あぐっ……。」

苦痛に負けて、はやては傷口にそっと触れる。

［は、はやてちゃん！］

「大丈夫や、これくらい……。」

焦りの声を上げるリインフォース？に、はやては乱れた呼吸を整えながら笑みを浮かべる。

ヘファイストスの左手には、いつの間に抜刀したのか、はやての血が付着した長剣が握られていた。

「悪いが、次で止めだ！」

両手にある武器を虚空に投げ、彼は空いた右手を上に上げ、眼前まで素早く振り下ろした。

「絶望（パンドラ）！」

ヘファイストスのその声に応えるように、先に放られた双剣、そして、今しがた投げられたレイピアと長剣が動き出した。

それらは一挙に、はやてへと迫った。

それらを、痛みに耐えながらかわし、しかし時折四肢に刃が掠めた。

「リイン、最後の賭けや。
協力してな？」

［はい！］

リインフォース？に、最後の作を命じ、はやてはヘファイストスへと肉薄した。

だが、その行く手を阻むように、ヘファイストスの武器がはやての眼前に一列に並び、一直線に向かってくるはやてに、一斉に迫った。

「「ユニゾンアウト！」」

それがはやてに当たる――――そう思った時、彼女を目映い光が包んだ。

その光はすぐに収まり、ヘファイストスに状況を明かしてくれた。

はやてとリインフォース?はユニゾンを解除し、はやては一列に並んだ武器の下を、そしてリインフォース?ははやてとは逆に、武器の上を飛んだ。

攻撃を回避した2人を見て、ヘファイストスは真っ先にはやてを狙おうとした。

「フローズンセイバー・ラッシュ！」

動き出したヘファイストスよりも早く、リインフォース?が、フリジットダガーをより強化した魔法でヘファイストスを怯ませる。

リインフォース?の身体よりもずっと巨大で、はやての上半身程の大きさを持つ氷結の剣が、ヘファイストスを襲う。

普通なら、これほどの大きさの剣を複数作り出す事は難しい。

しかし、先に放ったアーテム・デス・アイセスの残された冷気が、それを可能にしたのだ。

なのはが使う、スターライト・ブレイカーと同様に、散布された魔力を再構成し、はやてとリインフォース?はそれに加えて、先に使った魔法の特性を再利用する事が出来るのだ。

「これで終いや、ヘファイストス!」

「まだぁっ!」

眼下から身を踊らせたはやてが、再びジュワユースを使ってヘファイストスに迫る。

しかし、ギリギリの所でそれはかわされた。

「これでえぇっ!」

手近に呼び戻した長剣を握り、ヘファイストスははやての頭に向かって一閃した。

だが――――

「何っ!?」

――――剣尖がはやての頭部を捉えた刹那、“はやては雪のように儚く散った”。

「それは、私がアーテム・デス・アイセスの冷気で作った偽者です！」

リインフォース？の説明に、彼女の方に身体を向けた。

「ッ！？」

そして、ヘファイストスは己が負ける事を確信した。

「今度こそ、正真正銘の終いやで……ヘファイストス！」

何故なら、眼前には不敵に笑うはやてがいたからだ。

「ラグナロク！」

ゼロ距離で放たれたはやての最大の魔法に、ヘファイストスと彼の叫びは、いとも容易く呑みこまれた。

「勝利……したみたいやな。」

気絶したヘファイストスと、自分の近くにある出口へと通ずる扉を見て、はやては緊張の糸が解れたようにその場に座り込む。

「皆、頑張りぃや……。」

各々の敵と戦闘している仲間に想いを馳せて、彼女はリインフォース？と笑った。

第２６話　「戦の篝火」（後書き）

鮮血
「うん、魔力再利用はやっぱり便利だｗ」

はやて
「だからって、冷気まで再利用っちゅうんは、どうかと思うんやけど……。」

リインフォース？
「無茶苦茶です！」

鮮血
「褒めるな。」

リインフォース？
「褒めてません！」

鮮血
「それは置いといて、簡単な解説。」

◆ヘファイストスの使用した魔法

・不屈の鎧（ガーディアヌス）
全体防御の魔法だが、強度をある一定の方向に集中させることも可能

・神の神秘（ラジエル）

盾を出現させる魔法。　砲撃タイプの攻撃には絶対的な防御力を見せるが、展開に少々時間がかかる。

・硬化の剣（ハーデン）
魔力による射撃系統の攻撃を、一閃の下に切り捨てる攻撃

・交差する鋼（クロス・シルト）
即行で発動できる防御魔法だが、防御性能はあまり高くない

・風天の剣（ビューフォート）
剣を素早く振って、真っ白な衝撃波を繰り出す。

・貫く閃光（ミカエル）
レイピアを出現させる

・煌めく一閃（ガブリエル）
長剣を出現させる

・絶望（パンドラ）
武器を一斉に操作する魔法

鮮血
「こんな感じかな。
『絶望（パンドラ）』は、ヘファイストスが『パンドラの箱』を作ったと言われている事から、名づけました。」

はやて
「それにしても、まさか私が突貫とは……。」

鮮血
「ジュワユースね。」

リインフォース？
「本当にもう、強化し過ぎじゃないでしょうか？」

鮮血
「寧ろいいよ。」

リインフォース？
「やっぱり勝手ですぅ！」

鮮血
「それと、いきなり書き方を変更してすみませんでした。
小話の方に関しては、『やっぱりああいう書き方がいいのかな』と思い、変更したんですが、この話に関しては、書き方を変える前から完成していたストックですので、変更せずにそのまま……。」

はやて
「まぁ、ええんと違うん？　今までの書き方でも。」

リインフォース？
「で、次回は誰ですか？」

鮮血
「次回はヴィータ対アレスだね。」

はやて
「アレスって言うと、確か好戦的な……。」

鮮血
「ヴィータがどうなるかは決まっているから、後はそこまで突っ走るしかないね。」

リインフォース？
「どうなるって……勝利するって言わないんですか！？」

鮮血
「どうなるかは分からないからねー。
次回は多分、また小話になると思いますが、お楽しみに～。」

―次回予告―

彼の瞳にあるのは、『破壊』『殺戮』『狂気』……。

そのどれもが、色濃く具現する。

世界を――――否、人を殺させろ。

そう叫ぶ彼の魂を、鉄槌の騎士砕かんとする。

第２７話　「正義の鉄槌」

その手が掴むのは、破壊か、守護か。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０８　「クリスマス（アリシア編）」（前書き）

クリスマスコラボ第１回目は、金色の戦姫先生の作品、『リリカルなのは　－Ｔｗｉｎ　ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ－』より、アリシア・インテグラさんとのコラボです。

ヴィレイサーとアリシアさんはまだ付き合ってはおらず、ヴィレイサーがクリスマスに食事に誘うお話となっております。

それでは、どうぞ。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０８　「クリスマス（アリシア編）」

「うひー……さみぃ」

身に凍みる寒さに、ヴァイスはぼやきながらもヘリの整備をする。

「寒い中お疲れさん」

「おぉ、ヴィレイサーさん。　どうもっす」

そこへ、ヴィレイサーが温かいお茶を持ってきてくれた。

「悪いな、持ってきたのが俺（男）で」

「いえいえ。　手ぶらじゃないだけマシですよ」

笑みを浮かべ、ヴァイスは空になった紙コップをヴィレイサーに渡した。

「戻らないんで？」

しかし、ヴィレイサーが未だにその場に留まっているのを見て、ヴァイスは首を傾げる。

「居心地があまりよろしくないからな。
クリスマスが近いって事で、色めき立っている奴が多いんだ」

「なるほど」

賑やかなのは苦手なのか、ヴィレイサーは和気藹々とクリスマス

の予定を決めている場所にはいられない様だ。

「ヴィレイサーさんは、どうなんです？」

「何が？」

しばらく、ヘリの調整の為に工具を弄っている音しかしていなかったが、ヴァイスが唐突に口を開いた。しかし、ヴィレイサーは上の空だったのか、質問の意図が読めずに首を傾げた。

「クリスマスの予定ですよ」

「あぁ」

ヴァイスに問われて、ようやっと理解したヴィレイサーは合点がいったと言いたげな声色で頷いた。

「別に何も。　予定は一切無いよ」

「それはまた、意外ですね」

「どこが？」

意外そうな顔をするヴァイスに、ヴィレイサーは不思議に思った。

別段、予定を入れる様な事はないからだ。

「俺はてっきり、“彼女”とどこかに行くと思っていたんで」

「馬鹿を言うな。　アリシアとはそんな仲じゃない」

「あれ？　俺は『アリシアと』なんて一言も言ってないっすよ？」

「チッ……」

鎌をかけられたヴィレイサーは、笑っているヴァイスに舌打ちした。

「早くしないと、他の不逞な野郎に持っていかれますよ」

「アリシアがソイツを選んだのならそれでいいんじゃねぇの？」

ヴァイスのからかいに、ヴィレイサーはまったく動じない。

「まぁ冗談はともかく……何でなんもしないんすか？」

「知らなかったのか？　俺は臆病者なんだぜ」

「そりゃ失敬」

互いに笑みを零し、ヴァイスはヴィレイサーに淹れてもらった新しいお茶を飲む。

「食事にでも誘ったらどうです？」

「えぇー……」

ヴァイスの提案に、ヴィレイサーは苦笑いするだけだった。恐らく、『俺の柄じゃない』とか言い出すのだろう。

「俺の柄じゃないし」

（やっぱり）

自分の予想が当たって少し喜ぶヴァイスだったが、容易く当たってしまったのがつまらなかった。

「つーか、料理で釣る様なもんだろ、それって？」

「いやいや、こういうのは気持ちっすよ」

訝しい視線を向けてくるヴィレイサーに、ヴァイスは否定する。

「彼女ならちゃんと、気持ちを汲んでくれると思いますよ。まぁ、高いお店は逆効果ですけど」

「ふーん……」

ヴァイスが丁寧に説明しているにも拘わらず、ヴィレイサーは興味がない様だった。

「淡白っすねぇ……」

「お前さ、俺がそういう店を知っていると思うか？」

「あぁー……」

ヴィレイサーに言われて、彼が真面目に取り組まない理由がすぐに分かった。ヴィレイサーは、そういう事に関して疎いのだ。

「じゃあ、俺が予約しておきます」

「いやいや！？　何をあっさりと手配してんだよ！？」

ヴァイスの手際の良さに、ヴィレイサーは慌てて阻止しようとするが、結局それは叶わず、イブに2人分の予約がとあるホテルのレストランに伝えられた。

「ヴァイスくん、ナイスやで」

そんなやり取りを、はやては聞き漏らさずに聞いていたのだった。

◆◇◆◇◆

「アリシアちゃんは、今月の２４日、何か予定とか入れてるん？」

「え？」

早々に部屋へと戻ったはやては、アリシアの予定を聞き出していた。

「２４日と２５日？　イブとクリスマスだよね？」

「せやよ」

「特に予定はないよ。　もしかして、何かあったの？」

「それはお楽しみや」

「え～？　教えてくれてもいいでしょ？」

「ダーメ」

「むぅ……」

予定がないと分かると、はやてはそれ以上何も言わなかった。ヴィレイサーとヴァイスが話していた事も、何も。

「アリシアちゃん、せっかくのチャンスなんやから、物にせなアカンよ」

「チャンスって？」

「独り言や。　ただ、１つだけ敢えて言わせてもらうと……」

「なぁに？」

「当日をお楽しみに……っちゅうことや」

ニヤリと、何かを企んでいる様なはやての笑みに、アリシアは小首を傾げるしかなかった。

◆◇◆◇◆

12月24日　クリスマス・イブ

「明日はクリスマスやし、今日は早めに切り上げとこうか」

はやてのその一言で、仕事は早々に終了する事となった。

「アリシアちゃーん」

そそくさとその場から逃げようとするアリシアに、はやての声が届いた。そのまま聞かなかった事にして逃げようと思ったが、周囲の人間もはやてが自分の名を呼んだ事に気付いているだろう。

ならば、この状況から自分を助け出してくれそうな人物に期待するしかない。

（ヴィレイサーは……）

視線を巡らせると、すぐにヴィレイサーが見つかった。しかし、なにやらヴァイスと話し込んでいる様だ。助けは、期待出来なかった。

「アリシアちゃん？　何をヴィレくんに熱～い視線を送っているん？」

「ち、違うよ！？」

いつの間に傍まで来ていたのか、はやてはニヤニヤしながらアリシアをからかう。変な言いがかりをされては堪らないと、アリシアはすぐさまそれを否定する。だが、ほんのりと頬が赤くなっている所を見ると、その反論が聞き届けられるか怪しかった。

「シャーリー！」

「はい」

はやてに呼ばれて、シャーリーはすぐにアリシアを別室へ連れ込んだ。

「な、何をするの？」

「おめかしですよ」

アリシアの問いに、シャーリーは淡々と答え、彼女に化粧をさせる。

「流石はアリシアさん。　とっても素敵ですよ」

「あ、ありがとう」

素敵だと言われて満更ではないのか、アリシアははにかむ。

「って、これから何をするか聞いてないんだけど？」

「それは、ここに行けば分かりますよ」

地図の一ヶ所を指差し、シャーリーは最後に一言――――

「せっかくのイブなんですから、ヴィレイサーさんと楽しんできてくださいね」

――――それだけ言って、さっさと部屋を出ていった。

「な、何でそこでヴィレイサーが出てくるの？」

アリシアの呟きは、誰にも聞かれなかった。

◆◇◆◇◆

一方、ヴィレイサーはと言うと……。

アリシアがはやてに呼び止められた時、彼もヴァイスに声をかけられていた。

「んじゃあ、少し身形を整えましょうか」

「なんだよ、いきなり」

有無を言わさず、ヴィレイサーはヴァイスに別室へと連れて行かれてしまう。

「この後に何をするか、忘れた訳じゃないっすよね？」
「……忘れていたら、どれだけ気楽だったか。
予約なんて入れられたら、忘れられる訳がないだろ」
「こっちとしては、忘れられたら困りますよ」

ヴァイスは溜息を吐いて、ヴィレイサーに正装させた。

「値段とか大丈夫なのかよ……」
「こないだ徴収した分しか取りませんよ」

金額は予め払ってある為、これ以上は取られないらしい。

「ほら、女性を待たせるもんじゃないっすよ」

ヴァイスに促され、ヴィレイサーはアリシアとの待ち合わせ場所に向かった。

アリシアはまだ来てはいない様で、ヴィレイサーはそれに安堵しながら、手近にある柱に背を預けた。

アリシアがこれから来ると思うと、胸が高鳴っていく。輝かしい

戦果と、見目麗しい姿。多くの魔導師の憧れである彼女が自分と食事に行ってくれる可能性は無いに等しいと思うが、期待してしまうのは、彼女を好いている者の性だろうか。

「はぁ」

期待と不安。それ以外にも様々な気持ちがない交ぜになった息を吐くと、すぐに白く染まり、天に昇った。

「ヴィレイサー」

「ん……よう」

「…うん」

声がかけられ、声の主がいる方を向くと、そこにはアリシアがいた。彼女の姿を認めて、しかしヴィレイサーはそれだけしか言えなかった。アリシアもアリシアで、小さく返事をするだけだった。

「私、何も聞いてないんだけど？」

だが、アリシアはすぐにいつもの調子に戻り、不満を体現する様に口を尖らせる。

「俺だって、無理矢理やらされただけだ」

肩を竦め、苦笑混じりに返すと、ヴィレイサーはアリシアの傍まで移動する。

「俺と一緒に、食事に付き合って欲しい」

「……それが貴方の意思だけなら、もっと嬉しかったのに」

「何か言ったか？」

「ううん、なんでもない」

ヴィレイサーの申し出に、アリシアは彼にも聞こえないほど小さな声で呟き、それを悟られない様にする。

「ヴィレイサーの奢り？」

「不本意ながら」

「それなら、行くよ」

ヴィレイサーの手を取り、アリシアは彼に笑いかけた。

「期待、してるからね？」

「俺にそれをするのは、甚だ見当違いだよ」

歩き出し、２人の姿は闇を彩るイルミネーションに消えた。

◆◇◆◇◆

「ここ、高そうだけど……」

「堅苦しくはならないと思うぜ。　衣服も、他の人と差違がないし」

クラナガン市街のホテル内にあるレストランに着いた２人は、自分達が場違いではないか不安になる。だが、周囲の人々もそこまで着飾った服装ではないので、それは杞憂だろう。

「ねぇ」

「ん？」

「今回の事はヴァイスが考えたらしいけど……正直なところ、ヴィレイサーはどうなの？」

「俺？」

対面する様に席に座し、窓から景色を臨んでいたヴィレイサーは、アリシアのその問いに戸惑う。ここで、自分がアリシアの事を好いていると言えれば、どれだけ良かったか――――臆病な自分を情けなく思いながら、ヴィレイサーはしばし口を閉ざしていた。

「俺は……」

そこまで言って、どうはぐらかすか悩んでいると――――

「失礼します」

――――ウェイターが温かな料理をテーブルに置いた。

「食べよっか」

「そうだな」

料理が食べたいのか、はたまたヴィレイサーに気を遣ったのか分からないが、彼女は料理を口に運んだ。

「「美味しい」」

2人の声が、重なった。

◆◇◆◇◆

窓の外で深深と雪が降る景色を、ヴィレイサーとアリシアは暖かなレストランで見ていた。外は既に真っ暗なはずなのだが、所々で玲玲と輝くイルミネーションの所為で外はまだまだ明るかった。

「この後、どうしようか？」

食事を終えて、たおやかな所作でナプキンを片すアリシアに、ヴィレイサーはすぐには答えなかった。『帰る』しか選択肢がないか

らだ。

「どうするって言われてもなぁ……」

チラリとアリシアの顔色を窺う様に視線を向けると、丁度、彼女もこちらを向いたところだった。視線が絡み、胸が高鳴った。

「あの、さ……こんなタイミングで言うのもアホらしいと思うんだけどさ」

「私……」

「……ん？」

「私、ヴィレイサーの事が……好き」

「……は？」

アリシアに想いを告げようとした時、彼女はヴィレイサーの言葉を遮ってまで、先に告白してきた。それにはヴィレイサーも驚くしかなく、間の抜けた声を出すのが精一杯だった。

「ヴィレイサーは私の事……好き？」

「分かってて、聞いてんじゃねぇの？」

「バレちゃった？」

チロッと可愛らしく舌を出すアリシアに、ヴィレイサーは深い溜息を吐いた。

「わざわざ俺が言うのを遮るか？」

「だって……先に言われたら、なんか負けた気がするんだもん」

「何だそりゃ」

アリシアに苦言しながらも、ヴィレイサーは頬を緩めた。

「アリシア。　もう1度、言ってくれないか？」

「ヤダ」

「何でだよ？」

「ヴィレイサーが言ってくれたら、考えてあげる」

可愛らしくウィンクして、アリシアは席を立った。ヴィレイサーもそれに倣い、共に外へと出ていく。

「ヴィレイサーは私の事、どれくらい好き？」

「……お前が、俺を好いている以上かな」

「む……私の方が好きだよ」

「いいや、俺の方が好きだ」

「私だよ！」

「俺だと言っているだろう！」

どちらが好きと言う感情が上回っているのか――――そんな、不確かな物を競い合うなんて、少し前までの２人には出来なかっただろう。

「じゃあ、ヴィレイサーの方が上って言うのなら、証明してよ」

「どうしろって言うんだよ……」

アリシアの言い出した事に、ヴィレイサーはどうしたものかと頭を抱えるが、すぐにある事を閃いた。

「アリシア」

「な……ん！？」

アリシアに自分の方を向かせ、ヴィレイサーは手早く彼女と唇を重ねた。彼女の円らな瞳が、驚きに大きく見開かれている。

「これで、いいか？」

「う、うん……」

顔を真っ赤にして、アリシアは頷いた。

◆◇◆◇◆

「……もうこんな時間か」

「そろそろ終電の時間？」

「あぁ」

街を散策して、時折人目を憚らずにキスをしたり……恋人同士になって、景色の見え方が変わった。そんな楽しい時間は、あっという間に過ぎ去ってしまい、そろそろ帰宅した方がいいだろう。

「ん、アリシア、どうした？」

と、何の前触れもなく、アリシアはヴィレイサーに身を寄せた。

「明日は、六課もクリスマス会とかするらしいよ」

「そういえば、そんな事言ってたな」

「だから……だからね」

「うん？」

「今日、帰りたくない」

「了解、お姫様」

ヴィレイサーの手を離さぬ様に握るアリシアの手は、とても温かかった。

◆◇◆◇◆

「だから、明日に帰るね」

《了解や》

ホテルのとある一室で、アリシアははやてに帰れない旨を伝える。ヴィレイサーとどのようになったのかは、伝えなくても分かるだろうから、何も言わなかった。

「雪、ずっと降ってるね」

窓から雪月夜を見ていたヴィレイサーの隣に並びながら、アリシアは楽しそうに呟く。

「交通機関の麻痺は避けられないだろうな」

彼女とは違い、ヴィレイサーは帰宅出来る時間が遅くなる事を危惧した。

「帰れなくても、2人きりになれるのならいいんじゃない？」

ヴィレイサーの腕に抱きつき、アリシアは笑顔を見せる。豊満な胸が当てられて、形を変えた。

「別に、六課でも甘えてくれていいんだけどな」

「てっきり、恥ずかしがると思った」

ヴィレイサーの言葉が意外なのか、アリシアは目を丸くする。

「そりゃあ、恥ずかしくはあるが……だが、お前に甘えてもらいたいから」

アリシアの方に向き直り、しばし視線を絡めて2人はキスをした。そっと、静かに唇を離し、アリシアはヴィレイサーの手を引いてベッドに倒れ込む。

「アリシア……いいのか？」

「よくなかったら……こんな事、しないよ」

アリシアの金色の髪が、ベッドに美麗な海を作る。

「ヴィレイサー」

「あぁ、アリシア」

2人は再び唇を重ね、そして舌を絡めた。

深閑とした街に、2人の心に、雪が降る。愛が、熱を帯びていった。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０８　「クリスマス（アリシア編）」（後書き）

鮮血
「恋するアリシアさん、お気に召して頂けたでしょうか？」

ヴィレイサー
「…ったく、何で俺が食事の場所とか決めなきゃいけないんだよ」

鮮血
「まぁ、君はこの手の事に疎いからねー」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０９　「クリスマス（レーネ編）」（前書き）

鮮血
「クリスマスコラボの２回目は、神崎はやて先生の作品から、レーネに出てもらいます」

ヴィレイサー
「なんか、レーネにだけは本当に尻に敷かれているよな……」

鮮血
「ツンデレな彼女を楽しんで頂ければ光栄です」

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０９　「クリスマス（レーネ編）」

「ふんふふ～ん♪」

鼻歌混じりに鍋をことこと煮込むレーネは、チラッと壁にかけられた時計を一瞥する。

「そろそろ帰ってくる頃ね」

もうすぐ恋人が帰宅してくると思うと、彼女はにこやかになった。

「ただいま」

だが、件の人物が帰宅した瞬間、先程まであったはずの笑みが消

え去り、そこには悪戯っ子の様な彼女がいた。

「遅いわよ！」

「数分の前後ぐらい、勘弁してくれ」

レーネの苦言に、ヴィレイサーは苦笑いした。いつもと変わらないやり取りをとても嬉しく感じて、ヴィレイサーは心の内で彼女に感謝した。

◆◇◆◇◆

「どう？」

「うん、大分上手になったよ」

「これもヴィレイサーが毒味を繰り返してくれたお陰ね」

「いや、普通にお前が頑張ったからだろう」

レーネは調理があまり……否、かなり苦手で、作ってはヴィレイサーを怯えさせていた。だが、今はヴィレイサーに教えてもらったお陰で味も申し分ないものとなるまでに成長した。

「ヴィレイサー」

「何だ？」

「あーん♪」

ふと、レーネに呼ばれて食事の手を止めると、彼女は満面の笑みで匙を向けている。

「い、いや……いいよ」

「なぁに？　私が食べさせたら不味くなるとでも言いたい訳？」

「そんな訳ない」

「じゃあ、ほら」

「あ、あぁー……」

レーネに負けて、ヴィレイサーは彼女が向けていた匙を口に含んだ。こうして食べさせられるのは、いつまで経っても慣れなかった。

自分が彼女にするのは別にそこまで気負う事はないのだが。

「ご馳走様でした」

「お粗末様」

レーネと共に食器を片付け、居間に入ると彼女を後ろから抱き締めた。

「な、何よ、いきなり？」

「いや。　単にレーネを抱き締めたかっただけ」

「変態」

「酷いなぁ」

レーネに変態と評されたが、それが彼女の本心ではない事をヴィレイサーは分かっていた。レーネもまた、抱き締められて嬉しいのかもしれない。でなければ、彼女の語調が楽しそうなはずがなかった。

「今年のクリスマスは、どこに行く？」

「んー……今年はのんびり過ごす方がいいかも」

ミッドチルダにクリスマスは存在しないのだが、ヴィレイサーが機動六課に所属していた頃にパーティーをしたのが大層気に入ったのか、毎年クリスマスを祝っていた。

「リオスにまたケーキを頼むか」

互いにお菓子を作るのは不得手な為、最も信頼のあるリオスにケーキを注文が当たり前になっていた。

「レーネは、プレゼントは何がいい？」

「そうねぇ……」

しばし天井を見上げ、物思いに耽る。そんな彼女の緑髪が、ヴィレイサーの前に垂れる。シャンプーの香しい薫りが、仄かに漂ってきた。艶かしい項の肌が視界に入り、ヴィレイサーはドキッとする。

「“また”コスプレしてもらおうかしら」

そんなヴィレイサーの事など露知らず、レーネはニヤリと笑った。可愛いと思う反面、肩を落とした。

「頼むから今度はまともなものにしてくれよ？」

「それは私の気分次第ね」

懇願するヴィレイサーをせせら笑い、レーネはご機嫌な態度を示すように鼻歌を歌う。それに反して、ヴィレイサーは気落ちしていった。

レーネが言った様に、ヴィレイサーがコスプレをさせられるのはこれが初めてではない。過去に何度もさせられては、レーネに写真に収められ、それをネタに苛めてくることだってある。まぁ、時にはレーネに逆にコスプレをせがみ、それを写真に収めて反撃して負かす事もあるが……。

とは言え、やはりコスプレを強要されるのは辛い。今までで最も最悪だったのは浴衣だ。どこからそんな物を引っ張り出してきたのかは知らないし、（知ったら怖いので）知りたくもない。

「って言うか、コスプレをするのならレーネの可愛い姿が見たいな」

「バーカ、それじゃあ私がつまらないじゃない」

試しにレーネにコスプレをしてもらう様に言うが、彼女はそれを一蹴する。ヴィレイサーは別段、彼女がコスプレをしなくてもいいのだが、自分がさせられるのはあまり好かなかった。

（まぁ、それはレーネも同じか）

コスプレが好きなら、撮影した写真を全て無断で消去するはずがない。

「可愛かったのになぁ……」

「何？　今は可愛くないとか言う訳？」

「いや、それはあり得ない。
レーネはいつも可愛いし」

「アンタはいつも普通よね」

「ほっとけ」

レーネを抱き締めたままヴィレイサーは苦笑いし、またコスプレをせがまれた場合、彼女を巻きこむ方法を考え出した。

◆◇◆◇◆

「うーん……」

明朝、レーネは朝食の支度をヴィレイサーに任せて、自分は布団に寝転がったまま1冊の本を凝視していた。

「やっぱり、難しそうね」

溜息と共に肩を落とし、本を閉じてレーネは朝食を食べに階下へと足を運んでいった。レーネが読んでいたのは、ケーキのレシピが掲載されていた物で、彼女はリオスに頼むのではなく自分で作ろうとしていた。

（やっぱり、リオスに頼むしかないかしら……？）

しかし、思いの外ケーキ作りは難しそうで、レーネは早くもリオスに頼むという選択肢を選びそうになっていた。

（でも……）

「…ん？　何だ？」

「なんでもない」

ヴィレイサーの顔をじっと見詰め、彼がその視線に気がついたので慌てて逸らす。

（でも、たまには作ってあげた方がいいかも……）

彼が喜ぶ顔を見てみたくて、レーネはリオスに全てを任せる事を棄却した。

◆◇◆◇◆

「そういう訳だから、私にケーキの作り方を教えなさい」

よく漫画などで見かける【ズビシッ】の様な効果音が入りそうなほどの勢いをつけながら、レーネは目の前に居るリオスに高らかに言う。

「えっと……」

一方リオスはと言うと、いきなり押しかけてきて果ては『ケーキの作り方を教えろ』と言ってきたレーネに苦笑いするだけだった。

「話が見えないんだけど？」

「いいから、ケーキを上手に作るコツを教えなさいよ」

あくまで理由を述べようとしないレーネだったが、リオスは既に彼女が必死になっている理由を見破っていた。

「ヴィレイサーに手作りしてあげたいんだ」

「ち、ちち違うわよ！　だ、誰があんな奴なんかの為に……」

リオスに容易く言い当てられ、レーネは少しだけ頬を朱に染めて否定する。その様はとても可愛らしく、リオスは思わず吹き出してしまう。

「わ、笑うなー！」

「ごめんごめん。　でも、ちゃんと教えてあげるから」

「ヴィレイサーに余計な事、言うんじゃないわよ？」

「言わなくても分かっちゃうと思うけど……。
ヴィレイサーは、本当にレーネの事が大好きなんだからさ」

「……い、言われなくても分かってるわよ」

レーネの頬は更に赤みを帯びていき、彼女もまた、ヴィレイサーを好いているのがよく分かった。

「まぁ、コツだけ教えても難しいし、実習もやってみようか」

「いいの？」

「幸い、材料は結構あるからね」

「それじゃあ、よろしく」

「うん」

エプロンを着たレーネに、リオスは丁寧にケーキの作り方を教えていった。

やはり始めの内は悪戦苦闘して分量を誤ってしまったり、クリームを混ぜ過ぎてしまったりなどなど、ミスはかなり目立ったが、それは初挑戦の彼女にとっては致し方ない事だろう。

「今日は仕込みもあるから、また明日でいいかな？」

「ＯＫよ」

店の都合もある為、レーネはリオスと改めて日取りを決めて別れた。

◆◇◆◇◆

「それで、何のコスプレをすればいいんだ？」

『コスプレはクリスマスのお楽しみ』と言われてから数週間が経過して、あっという間にクリスマスとなった。

「これよ」

レーネが洋服棚から引っ張り出したのは、黒い執事服だった。

「今日1日、私の執事になりなさい！」

「まともな服だったから嬉し涙が出そうですよ。　レーネお嬢様」

「あんまり調子に乗るとメイド服に変更するわよ」

「誠心誠意、お世話させて頂きます、お嬢様」

おちょくるのは不可能だった。

「ヴィレイサー、紅茶」

「畏まりました、お嬢様」

一礼して、ヴィレイサーは紅茶を注ぐ。ティーカップから湯気がのぼり、それが温かい事を象徴していた。

「どうぞ」

「ありがと」

レーネは猫舌なので、あまり熱すぎないように配慮された紅茶は

美味しかった。

「アンタ、本当に執事になっちゃえば？」

「お嬢様以外を『お嬢様』と呼べる気がしませんよ」

苦笑いして、ヴィレイサーは空になったティーカップを下げる。

「次はどうします？」

「肩揉んで」

「了解しました」

「変なことしたら殺すからね」

「心得てますよ」

レーネの忠告にヴィレイサーは文句を言わずに丁寧に肩を揉む。いつも彼がここまで自分に従順だといいのになどと考えながらも、彼に翻弄されてしまうのが目に見えているので溜息を吐いてしまった。

「お気に召しませんでしたか？」

「敬語、似合わないから外していいわよ」

「……そりゃどうも」

いつもの調子の彼が欲しくて、レーネは敬語を辞めさせる。

「ん、もういいわ」

「はいよ」

「……ちょっと、背中が寒いんだけど」

「え？　あぁ、じゃあロングコートを……」

「バカ！」

「イッテ！？」

背中が寒いと言うレーネに、ヴィレイサーはロングコートを羽織ろうとするが、彼女は彼の腕を掴んで抓る。

「そ、そんなのを私に羽織らせてどうしろって言うのよ？
もっと別のがあるじゃない」

「別の？」

「だ、だから、その……私のすぐ後ろにあるって言うか、居るって言うか……。
あー、もう！　何でこういう時だけ鈍いのよ！」

「悪い」

「ぁ……」

「抱き締めて欲しかったんだろ？」

「……気付いていたのなら、最初からそうしなさいよ。　バカ」

それっきり、２人の間に会話は無かった。深深と降る雪の音が聞こえてきそうなほど、静かだった。

◆◇◆◇◆

「レーネが作ったのか？」

「悪かったわね。　私が作ったのかどうかすら分からないほど綺麗に作って」

「そんな事言ってないだろ。　どうしても知りたかったんだよ。
リオスが作ったもの以上に美味しいと感じたかったからさ」

レーネはヴィレイサーに、自分が特訓して作ったクリスマスケーキを差しだす。綺麗にデコレーションされたケーキは、目映い白さを魅せていた。

「うん、美味しい。
ありがとうな、レーネ」

「べ、別に。　アンタの為に作ってあげた訳じゃないわよ」

褒められたのが嬉しかったのか、はたまた単に恥ずかしいのか、レーネはヴィレイサーの賛辞に顔を赤くしてそっぽを向いてしまう。

「俺の為じゃない、か。
それじゃあ……ほら、あーん」

「ふぇ？」

ヴィレイサーは、何故かケーキを一口分、フォークに乗せてレーネに向ける。

「な、何で私が食べさせられなきゃいけないのよ？」

「レーネが自分の為に作った……俺はそう解釈したからさ。更に俺は、今はレーネお嬢様の執事だからな」

「じ、自分で食べられるわよ！」

「往生際が悪いな。　ほら」

「ん！？」

捲し立てようとしたのがいけなかった――――そう気付いた時には、既に自分の口の中にケーキが呑みこまれていた。ヴィレイサーの手で食べさせられた事実が、レーネの頬を見る見るうちに紅潮させていく。

「ほら、もう一口。　あーん」

「あ、あーん」

今度は素直に食べてやる事にした。

「今度は素直だな」

「か、勘違いしないでよ！？　別に、アンタに食べさせられるのも悪くないなぁなんて、これっぽっちも思ってないんだからね！？」

「分かってるよ、お嬢様」

「絶対に分かってないでしょ！？
もう、こうなったら……アンタにも食べさせてあげる！」

「は！？　いや、流石にそれは御免って言うか……」

「何？　アンタは私の執事でしょ？　嫌だって言うの？」

「う……」

「ほら、あーん」

「あ、あー……」

「どう、美味しい？」

「かなり恥ずかしい……」

「はい、味を答えなかったからもう1回ね」

「何！？」

「ほら、あーんしなさい」

「わ、分かったよ！」

しばし、2人はケーキを相手に食べさせ合っていた。

Ｓｈｏｒｔ　Ｔａｌｅｓ－０９　「クリスマス（レーネ編）」（後書き）

鮮血
「最後でイチャつくな！」

ヴィレイサー
「イチャついて何が悪い！」

鮮血
「まぁ、書いてて楽しいからいいんだけどｗ」

ヴィレイサー
「いいのかよ」

鮮血
「でも、やっぱり難しいね、ツンデレを書くのって」

ヴィレイサー
「もうちょっとデレてくれてもいいだろうに……」

鮮血
「ツンばっかりじゃつまんない？」

ヴィレイサー
「いや、別に。　可愛いし」

鮮血
「あ、そ……」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8837o/

魔法少女リリカルなのはStrikerS-JIHAD

2011年12月24日09時47分発行